

秋田県文化財調査報告書 第180集

東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅲ

—— 上野台遺跡・寺沢遺跡・半仙遺跡 ——

1989・3

秋田県教育委員会

東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅲ

—— うえの だい 上野台遺跡・てらさわ 寺沢遺跡・はんせん 半仙遺跡 ——

1989・3

秋田県教育委員会

序

東北横断自動車道秋田線は、秋田県の高速度交通体系の根幹となるもので、すでに秋田市から横手市までの57.4kmについては、平成3年度の完成を目指して着々と工事が進められております。

秋田県教育委員会では、昭和60年度から遺跡の発掘調査を実施し、歴史的に貴重な資料を得て逐次その成果を公表してまいりました。

本報告書は、昭和61年度・昭和62年度に調査しました3遺跡(上野台、寺沢、半仙遺跡)の調査成果をまとめたものであります。

上野台遺跡においては県内で最初の縄文時代中期の掘立柱建物跡、寺沢遺跡ではこの地域にとって初めての平安時代の竪穴住居跡、そして半仙遺跡では縄文時代前期と中期の竪穴住居跡の検出があり、これらは地域の歴史研究に欠くことのできないものであります。

本書が学術上は無論のこと、埋蔵文化財に対する御理解と保護のために広く活用されることを期待します。

最後に本書を刊行するにあたり、御援助、御協力を賜りました日本道路公団仙台建設局、協和町・西仙北町教育委員会並びに関係各位に対し心からの感謝を申し上げます。

平成元年3月25日

秋田県教育委員会

教育長 齋藤 長

例 言

- 1 本報告書は、東北横断自動車道秋田線建設事業に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書の3冊目のものである。
- 2 本報告書には、上記事業に係わり昭和61・62年度に調査された12遺跡のうち、西仙北町所在の上野台遺跡・寺沢遺跡、協和町所在の半仙遺跡の調査結果を収めたものである。
- 3 各遺跡の内容については、すでにその一部が調査略報などによって公表されているが、本報告書の内容がそれらに優先する。
- 4 「遺跡の立地と環境」のうち、2 調査地域周辺の地形・地質は、専門指導員である白石建雄秋田大学教育学部助教授に執筆をお願いした。
- 5 上野台遺跡・半仙遺跡の鉍物分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に、上野台遺跡の花粉分析はパレオ・ラボ株式会社に委託したものである。
- 6 本報告書の執筆は下記の通りである。

はじめに・遺跡の立地と環境 1・3	高橋忠彦
遺跡の立地と環境 2	白石建雄
上野台遺跡	
第1章・第2章第1節・第4章第2節1(2)・第6章	高橋忠彦
第2章第2節	栄 一郎
第3章	利部 修
第4章第1節・第2節1(1)	武藤祐浩
寺沢遺跡	栗沢光男
半仙遺跡	利部 修
- 7 土層断面図中の土色については、農林省水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を使用した。
- 8 調査並びに本報告書の刊行にあたって、次の方々から指導、助言を賜った。
泉 拓良 尾形興典 駒形敏朗 斎藤 隆 佐々木洋治 手塚 均 長橋 至
中村良幸 本間 宏 武藤康弘(敬称略、五十音順)
- 9 各遺跡の出土遺物、実測図、写真などの資料は全て秋田県埋蔵文化財センターに保管している。

凡 例

- 1 本報告書に収録した遺構実測図は基本的には1/40、規模の小さな遺構に関しては1/20縮尺として統一し、それぞれにスケールを付している。
- 2 遺物実測図は、剥片石器・石製品・土製品は2/3、礫石器は1/2・1/3・1/4、完形土器は1/3・1/4、土器拓影図は1/2・1/3縮尺で掲載し、それぞれにスケールを付している。また表裏縄文土器の拓影図は断面の左に表面、右に裏面の拓影図を掲載している。
- 3 掲載遺物の番号は、土器(土製品を含む)、石器(石製品を含む)別に、各遺跡各区ごとに通し番号を付し写真図版中の番号もそれに対応する。
- 4 土層注記は、ローマ数字を基本層序に、算用数字を遺構内の堆積層序に使用して区別した。
- 5 遺構番号は種類を問わず検出順に通し番号を付したが、上野台遺跡はA・B・Cの3調査区に分かれたため、A区は01～100、B区は101～200、C区は201～300の番号を使用することにした。また確認時点において番号を付したものの、最終的に遺構と判断されなかったものについては欠番としている。
- 6 本報告書で使用される遺構の略記号は下記の通りである。
S I …… 竪穴住居跡 S B …… 掘立柱建物跡 S K …… 土 坑
S K T …… 陥し穴状遺構 S R …… 土器埋設遺構 S N …… 焼土遺構
S E …… 井 戸 跡 S W …… 炭焼成遺構
- 7 遺構・遺物の挿図中に使用したスクリーン・トーンは下記の通りである。



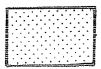
地 山



焼 土



炭化物



石器の磨面



石器付着のアスファルト

目 次

序

例 言	iii
凡 例	iv
目 次	v
挿図目次	viii
表 目 次	xi
図版目次	xi

はじめに

1 調査に至るまで	3
2 調査の組織と構成	4
3 調査の方法	5
4 調査の経過	6

遺跡の立地と環境

1 遺跡の立地	9
2 調査地域周辺の地形・地質	13
3 歴史的環境	21

上野台遺跡

第1章 発掘調査の概要	27
第1節 遺跡の概観	27
第2節 調査の方法	27
第3節 調査の経過	31

第2章 A区の調査の記録	33
第1節 A区の層序	33
第2節 検出遺構と遺物	34
1 縄文時代	34
2 弥生時代	103
3 古代および中世	103
第3章 B区の調査の記録	105
第1節 B区の層序	105
第2節 検出遺構と遺物	106
1 縄文時代	106
2 近世以降	119
第4章 C区の調査の記録	121
第1節 C区の層序	121
第2節 検出遺構と遺物	122
1 縄文時代	122
第5章 自然科学的分析	175
第1節 鉱物分析	175
第2節 ¹⁴ C年代測定	179
第3節 花粉分析	180
第6章 まとめ	187

寺 沢 遺 跡

第1章 発掘調査の概要	279
第1節 遺跡の概観	279
第2節 調査の方法	279
第3節 調査の経過	279

第2章 調査の記録	283
第1節 遺跡の層序	283
第2節 検出遺構と遺物	283
1 縄文時代	283
2 平安時代	305
第3章 まとめ	319

半仙遺跡

第1章 発掘調査の概要	351
第1節 遺跡の概観	351
第2節 調査の方法	351
第3節 調査の経過	352
第2章 調査の記録	355
第1節 遺跡の層序	355
第2節 検出遺構と遺物	356
1 縄文時代	356
2 弥生時代	426
第3章 自然科学的分析	430
第1節 鉍物分析	430
第4章 まとめ	433

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図 …………… 9	第5図 調査地域周辺の地質図 …………… 16
第2図 西仙北町・協和町内路線と遺跡 …………… 10	第6図 半仙・上野台・寺沢遺跡周辺の地質図 …… 17
第3図 遺跡関連位置図 …………… 11・12	第7図 周辺遺跡位置図 …………… 22
第4図 接峰面図および主水系図 …………… 14	

上 野 台 遺 跡

(A 区)

第1図 地形・グリッド配置図 …………… 29・30	第27図 遺構外出土遺物(6) …………… 79
第2図 A区基本土層模式図 …………… 33	第28図 遺構外出土遺物(7) …………… 80
第3図 A区遺構配置図 …………… 35・36	第29図 遺構外出土遺物(8) …………… 81
第4図 S I 13 竪穴住居跡 …………… 37・38	第30図 遺構外出土遺物(9) …………… 82
第5図 S I 37 竪穴住居跡 …………… 39・40	第31図 遺構外出土遺物(10) …………… 83
第6図 S I 34 竪穴住居跡 …………… 42	第32図 遺構外出土遺物(11) …………… 84
第7図 遺構内出土遺物(1) …………… 43	第33図 遺構外出土遺物(12) …………… 85
第8図 遺構内出土遺物(2) …………… 44	第34図 遺構外出土遺物(13) …………… 86
第9図 遺構内出土遺物(3) …………… 45	第35図 遺構外出土遺物(14) …………… 87
第10図 遺構内出土遺物(4) …………… 46	第36図 遺構外出土遺物(15) …………… 88
第11図 S K 16・49・25・42・46・19・21 土坑 …… 54	第37図 遺構外出土遺物(16) …………… 89
第12図 S K 26・32・35・36・43・45 土坑 …… 55	第38図 遺構外出土遺物(17) …………… 90
第13図 S K 50・54・23・03・17・18・20・22・24・27・28 土坑 …………… 56	第39図 遺構外出土遺物(18) …………… 91
第14図 S K 29・30・33・38・40・41・44・48・51 土坑 …… 57	第40図 遺構外出土遺物(19) …………… 92
第15図 遺構内出土遺物(5) …………… 58	第41図 遺構外出土遺物(20) …………… 93
第16図 遺構内出土遺物(6) …………… 59	第42図 遺構外出土遺物(21) …………… 94
第17図 遺構内出土遺物(7) …………… 60	第43図 遺構外出土遺物(22) …………… 95
第18図 遺構内出土遺物(8) …………… 61	第44図 遺構外出土遺物(23) …………… 96
第19図 S N 11 焼土遺構 …………… 63	第45図 遺構外出土遺物(24) …………… 97
第20図 遺構内出土遺物(9) …………… 63	第46図 遺構外出土遺物(25) …………… 98
第21図 S N 01・02・04・05・06・07・08・09・10・12・14・ 15・31 焼土遺構 …………… 65	第47図 遺構外出土遺物(26) …………… 99
第22図 遺構外出土遺物(1) …………… 74	第48図 遺構外出土遺物(27) …………… 100
第23図 遺構外出土遺物(2) …………… 75	第49図 遺構外出土遺物(28) …………… 101
第24図 遺構外出土遺物(3) …………… 76	第50図 遺構外出土遺物(29) …………… 102
第25図 遺構外出土遺物(4) …………… 77	第51図 S K 39 土坑 …………… 103
第26図 遺構外出土遺物(5) …………… 78	第52図 遺構内出土遺物(10) …………… 103
	第53図 遺構外出土遺物(30) …………… 103
	第54図 遺構外出土遺物(31) …………… 104

(B 区)

第55図	B区基本土層模式図	105	第61図	遺構外出土遺物(1)	114
第56図	B区遺構配置図	107・108	第62図	遺構外出土遺物(2)	115
第57図	S I 104竪穴住居跡	110	第63図	遺構外出土遺物(3)	116
第58図	S N102焼土遺構, S K101土坑	111	第64図	遺構外出土遺物(4)	117
第59図	遺構内出土遺物(1)	112	第65図	S W103炭焼成遺構	118
第60図	遺構内出土遺物(2)	113			

(C 区)

第66図	C区基本土層模式図	121	第85図	遺構外出土遺物(2)	155
第67図	C区遺構配置図	123	第86図	遺構外出土遺物(3)	156
第68図	S I 201竪穴住居跡	125	第87図	遺構外出土遺物(4)	157
第69図	S I 202A・B竪穴住居跡	126	第88図	遺構外出土遺物(5)	158
第70図	S I 206竪穴住居跡	127	第89図	遺構外出土遺物(6)	159
第71図	S I 216竪穴住居跡	128	第90図	遺構外出土遺物(7)	160
第72図	S I 225竪穴住居跡	130	第91図	遺構外出土遺物(8)	161
第73図	遺構内出土遺物(1)	131	第92図	遺構外出土遺物(9)	162
第74図	S B241掘立柱建物跡	133・134	第93図	遺構外出土遺物(10)	163
第75図	遺構内出土遺物(2)	135	第94図	遺構外出土遺物(11)	164
第76図	S B242掘立柱建物跡	136	第95図	遺構外出土遺物(12)	165
第77図	S K204・205・207・209・210・211土坑	139	第96図	遺構外出土遺物(13)	166
第78図	S K212・213・214・217・222・223土坑	141	第97図	遺構外出土遺物(14)	167
第79図	S K224・226・227・232・233・234土坑	143	第98図	遺構外出土遺物(15)	168
第80図	S K235・244土坑, S K T243陥し穴状遺構, S R203土器埋設遺構	145	第99図	遺構外出土遺物(16)	169
第81図	遺構内出土遺物(3)	146	第100図	遺構外出土遺物(17)	170
第82図	遺構内出土遺物(4)	147	第101図	遺構外出土遺物(18)	171
第83図	遺構内出土遺物(5)	148	第102図	遺構外出土遺物(19)	172
第84図	遺構外出土遺物(1)	154	第103図	遺構外出土遺物(20)	173
			第104図	遺構外出土遺物(21)	174

(科学分析)

第105図	試料採取地点の土層図	175	第110図	上野台遺跡C区S T221地点の主要 花粉分布図	183
第106図	上野台遺跡における重鉍物組成	176	第111図	花粉膜の区分と名称	184
第107図	上野台遺跡における軽鉍物組成	177	第112図	簡略化した樹木分布図と花粉層序 対比図	185
第108図	上野台遺跡周辺の地形分類図	180			
第109図	^{14}C 測定・花粉分析用試料の採取地点 (C区S T221)の土層断面図	181			

寺 沢 遺 跡

第1図 地形・グリッド配置図 …………… 281・282	第15図 遺構外出土遺物(9) …………… 300
第2図 遺構配置図 …………… 285・286	第16図 遺構外出土遺物(10) …………… 301
第3図 S K 01・04・05・06・07・08土坑 …………… 287	第17図 遺構外出土遺物(11) …………… 302
第4図 S K 10・11・13・14・15土坑 …………… 289	第18図 遺構外出土遺物(12) …………… 303
第5図 遺構内出土遺物(1) …………… 289	第19図 遺構外出土遺物(13) …………… 304
第6図 遺構内出土遺物(2) …………… 290	第20図 S I 02堅穴住居跡 …………… 306
第7図 遺構外出土遺物(1) …………… 290	第21図 S I 23堅穴住居跡・炭化材出土 状況図 …………… 309・310
第8図 遺構外出土遺物(2) …………… 293	第22図 S K 17・18・19・20・21土坑 …………… 312
第9図 遺構外出土遺物(3) …………… 294	第23図 遺構内出土遺物(3) …………… 313
第10図 遺構外出土遺物(4) …………… 295	第24図 遺構内出土遺物(4) …………… 314
第11図 遺構外出土遺物(5) …………… 296	第25図 遺構内出土遺物(5) …………… 315
第12図 遺構外出土遺物(6) …………… 297	第26図 遺構内出土遺物(6) …………… 316
第13図 遺構外出土遺物(7) …………… 298	第27図 遺構外出土遺物(14) …………… 318
第14図 遺構外出土遺物(8) …………… 299	

半 仙 遺 跡

第1図 地形・グリッド配置図 …………… 353・354	第22図 遺構外出土遺物(1) …………… 385
第2図 基本土層模式図 …………… 355	第23図 遺構外出土遺物(2) …………… 386
第3図 遺構配置図 …………… 357・358	第24図 遺構外出土遺物(3) …………… 387
第4図 S I 20堅穴住居跡 …………… 359	第25図 遺構外出土遺物(4) …………… 388
第5図 S I 15堅穴住居跡 …………… 360	第26図 遺構外出土遺物(5) …………… 389
第6図 S I 31堅穴住居跡, S N 26焼土遺構 … 361	第27図 遺構外出土遺物(6) …………… 390
第7図 S K T 34・35・36陥し穴状遺構 …………… 363	第28図 遺構外出土遺物(7) …………… 391
第8図 S K 28・45土坑 …………… 370	第29図 遺構外出土遺物(8) …………… 392
第9図 S K 07・23・27土坑 …………… 371	第30図 遺構外出土遺物(9) …………… 399
第10図 S K 03・08・11・14・17・25土坑 …………… 372	第31図 遺構外出土遺物(10) …………… 400
第11図 S K 09・10・16・18・32・37・42・43土坑 … 373	第32図 遺構外出土遺物(11) …………… 401
第12図 S K 02・05・06・22・40・41土坑 …………… 374	第33図 遺構外出土遺物(12) …………… 402
第13図 S K 01・12・21・30土坑 …………… 375	第34図 遺構外出土遺物(13) …………… 403
第14図 S K 04・19・33・38・39・44土坑 …………… 376	第35図 遺構外出土遺物(14) …………… 404
第15図 S K 13土坑, S R 24・29土器埋設遺構 … 377	第36図 遺構外出土遺物(15) …………… 406
第16図 遺構内出土遺物(1) …………… 378	第37図 遺構外出土遺物(16) …………… 407
第17図 遺構内出土遺物(2) …………… 379	第38図 遺構外出土遺物(17) …………… 408
第18図 遺構内出土遺物(3) …………… 380	第39図 遺構外出土遺物(18) …………… 409
第19図 遺構内出土遺物(4) …………… 381	第40図 遺構外出土遺物(19) …………… 410
第20図 遺構内出土遺物(5) …………… 382	第41図 遺構外出土遺物(20) …………… 411
第21図 遺構内出土遺物(6) …………… 383	第42図 遺構外出土遺物(21) …………… 412

第43図	遺構外出土遺物(22) ……………	413	第51図	遺構外出土遺物(30) ……………	423
第44図	遺構外出土遺物(23) ……………	414	第52図	遺構外出土遺物(31) ……………	424
第45図	遺構外出土遺物(24) ……………	415	第53図	遺構外出土遺物(32) ……………	425
第46図	遺構外出土遺物(25) ……………	416	第54図	半仙遺跡の土層断面図 ……………	430
第47図	遺構外出土遺物(26) ……………	419	第55図	半仙遺跡における重鉍物組成 ……………	432
第48図	遺構外出土遺物(27) ……………	420	第56図	半仙遺跡における軽鉍物組成 ……………	432
第49図	遺構外出土遺物(28) ……………	421	第57図	縄文時代早期・前期の繊維土器と★片 出土分布図 ……………	435
第50図	遺構外出土遺物(29) ……………	422			

表 目 次

第1表	層序表 ……………	18	第2表	周辺遺跡一覧表 ……………	23
-----	-----------	----	-----	---------------	----

上 野 台 遺 跡

第1表	上野台遺跡テフラ試料の重鉍物組成 ……………	176	第3表	上野台遺跡C区S T 221地点の花粉 化石の組成表 ……………	182
第2表	上野台遺跡テフラ試料の軽鉍物組成 ……………	177			

半 仙 遺 跡

第1表	縄文土器観察表(1) ……………	393	第7表	石器観察表(2) ……………	427
第2表	縄文土器観察表(2) ……………	394	第8表	石器観察表(3) ……………	428
第3表	縄文土器観察表(3) ……………	395	第9表	石器観察表(4) ……………	429
第4表	縄文土器観察表(4) ……………	396	第10表	半仙遺跡テフラ試料の重鉍物組成 ……………	431
第5表	縄文土器観察表(5) ……………	397	第11表	半仙遺跡テフラ試料の軽鉍物組成 ……………	431
第6表	石器観察表(1) ……………	426			

図 版 目 次

上 野 台 遺 跡

(A 区)

図版 1	1 調査区全景(北▷南) ……………	189	図版 4	1 S I 37竪穴住居跡(東▷西) ……………	192
	2 調査区全景(西▷東) ……………			2 S I 37竪穴住居跡(南▷北) ……………	
図版 2	1 S I 13竪穴住居跡確認状況 ……………	190		3 S I 34竪穴住居跡(南▷北) ……………	
	2 S I 13竪穴住居跡 ……………		図版 5	1 S K 16土坑土層断面 ……………	193
図版 3	1 S I 13竪穴住居跡土層断面 ……………	191		2 S K 49土坑確認状況 ……………	
	2 S I 13竪穴住居跡炉 ……………			3 S K 25土坑確認状況 ……………	
	3 S I 13竪穴住居跡炉土層断面 ……………				

図版 6	1	S K 26土坑土層断面	194	図版21	1	遺構外出土遺物(7)	209
	2	S K 26土坑			2	遺構外出土遺物(8)	
	3	S K 32土坑土層断面		図版22	1	遺構外出土遺物(9)	210
図版 7	1	S K 36土坑土層断面	195		2	遺構外出土遺物(10)	
	2	S K 50土坑土層断面		図版23	1	遺構外出土遺物(11)	211
	3	S K 50土坑			2	遺構外出土遺物(12)	
図版 8	1	S K 54土坑	196	図版24	1	遺構外出土遺物(13)	212
	2	S K 23土坑確認状況			2	遺構外出土遺物(14)	
	3	S K 03土坑土層断面		図版25	1	遺構外出土遺物(15)外面	213
図版 9	1	S N 11焼土遺構確認状況	197		2	同上内面	
	2	S N 11焼土遺構土層断面		図版26	1	遺構外出土遺物(16)	214
	3	S N 10焼土遺構土層断面			2	遺構外出土遺物(17)	
図版10	1	S K 39土坑土層断面	198	図版27	1	遺構外出土遺物(18)	215
	2	S K 39・45土坑			2	遺構外出土遺物(19)	
	3	K S 70グリッド遺物出土状況		図版28	1	遺構外出土遺物(20)	216
図版11	1	遺構内出土遺物(1)	199		2	遺構外出土遺物(21)	
	2	遺構内出土遺物(2)		図版29	1	遺構外出土遺物(22)	217
	3	遺構内出土遺物(3)			2	遺構外出土遺物(23)	
図版12	1	遺構内出土遺物(4)	200	図版30	1	遺構外出土遺物(24)	218
	2	遺構内出土遺物(5)			2	遺構外出土遺物(25)	
図版13	1	遺構内出土遺物(6)	201	図版31	1	遺構外出土遺物(26)	219
	2	遺構内出土遺物(7)			2	遺構外出土遺物(27)	
図版14	1	遺構内出土遺物(8)	202	図版32	1	遺構外出土遺物(28)	220
	2	遺構内出土遺物(9)			2	遺構外出土遺物(29)	
	3	遺構内出土遺物(10)		図版33	1	遺構外出土遺物(30)	221
	4	遺構内出土遺物(11)			2	遺構外出土遺物(31)	
図版15	1	遺構内出土遺物(12)	203	図版34		遺構外出土遺物(32)	222
	2	遺構内出土遺物(13)		図版35	1	遺構外出土遺物(33)	223
図版16	1	遺構内出土遺物(14)	204		2	遺構外出土遺物(34)	
	2	遺構内出土遺物(15)		図版36	1	遺構外出土遺物(35)	224
図版17	1	遺構内出土遺物(16)	205		2	遺構外出土遺物(36)	
	2	遺構内出土遺物(17)		図版37	1	遺構外出土遺物(37)	225
図版18	1	遺構内出土遺物(18)	206		2	遺構外出土遺物(38)	
	2	遺構内出土遺物(19)		図版38	1	遺構外出土遺物(39)	226
図版19	1	遺構外出土遺物(1)	207		2	遺構外出土遺物(40)	
	2	遺構外出土遺物(2)					
	3	遺構外出土遺物(3)					
	4	遺構外出土遺物(4)					
図版20	1	遺構外出土遺物(5)	208				
	2	遺構外出土遺物(6)					

(B 区)

図版39 1 調査区全景(北▷南) …… 227
2 S I 104竪穴住居跡(南東▷北西)
図版40 1 S K 101土坑(北東▷南西) …… 228
2 S N 102焼土遺構(東▷西)
図版41 1 S W 103炭焼成遺構(南▷北) …… 229
2 遺構内出土遺物(1)
図版42 1 遺構内出土遺物(2) …… 230
2 遺構内出土遺物(3)

図版43 1 遺構内出土遺物(4) …… 231
2 遺構外出土遺物(1)
図版44 1 遺構外出土遺物(2) …… 232
2 遺構外出土遺物(3)
図版45 1 遺構外出土遺物(4) …… 233
2 遺構外出土遺物(5)
図版46 1 遺構外出土遺物(6) …… 234
2 遺構外出土遺物(7)

(C 区)

図版47 1 調査前遠景(南東▷北西) …… 235
2 調査後遠景(北東▷南西)
図版48 1 調査区近景(南西▷北東) …… 236
2 S I 201竪穴住居跡
図版49 1 S I 202竪穴住居跡 …… 237
2 S I 202竪穴住居跡石囲炉
図版50 1 S I 206竪穴住居跡 …… 238
2 S I 216竪穴住居跡
図版51 1 S I 225竪穴住居跡 …… 239
2 S B 241掘立柱建物跡
図版52 1 S B 242掘立柱建物跡 …… 240
2 S B 242掘立柱建物跡柱穴土層断面
図版53 1 S K 205土坑 …… 241
2 S K 205土坑遺物出土状況
3 S K 207土坑土層断面
図版54 1 S K 209土坑土層断面 …… 242
2 S K 209土坑
3 S K 210・211土坑
図版55 1 S K 212・213土坑 …… 243
2 S K 214土坑確認状況
3 S K 214土坑
図版56 1 S K 223土坑 …… 244
2 S K 224・227土坑
3 S K 232土坑
図版57 1 S K 233土坑土層断面 …… 245
2 S K 233土坑
3 S K 235土坑

図版58 1 S K T 243陥し穴状遺構 …… 246
2 S R 203土器埋設遺構確認状況
3 S R 203土器埋設遺構
図版59 1 S T 221遺物出土状況 …… 247
2 S T 221遺物出土状況
図版60 1 S T 221遺物出土状況 …… 248
2 S T 221土層断面
図版61 1 遺構内出土遺物(1) …… 249
2 遺構内出土遺物(2)
図版62 1 遺構内出土遺物(3) …… 250
2 遺構内出土遺物(4)
図版63 1 遺構内出土遺物(5) …… 251
2 遺構内出土遺物(6)
図版64 1 遺構内出土遺物(7) …… 252
2 遺構内出土遺物(8)
図版65 1 遺構外出土遺物(1)外面 …… 253
2 同 上 内面
図版66 1 遺構外出土遺物(2)外面 …… 254
2 同 上 内面
図版67 1 遺構外出土遺物(3)外面 …… 255
2 同 上 内面
図版68 1 遺構外出土遺物(4)外面 …… 256
2 同 上 内面
図版69 1 遺構外出土遺物(5)外面 …… 257
2 同 上 内面
図版70 1 遺構外出土遺物(6) …… 258
2 遺構外出土遺物(7)
図版71 1 遺構外出土遺物(8)外面 …… 259
2 同 上 内面

図版72	1 遺構外出土遺物(9) …………… 260	図版78	1 遺構外出土遺物(21) …………… 266
	2 遺構外出土遺物(10)		2 遺構外出土遺物(22)
図版73	1 遺構外出土遺物(11) …………… 261	図版79	遺構外出土遺物(23) …………… 267
	2 遺構外出土遺物(12)	図版80	遺構外出土遺物(24) …………… 268
図版74	1 遺構外出土遺物(13) …………… 262	図版81	1 遺構外出土遺物(25) …………… 269
	2 遺構外出土遺物(14)		2 遺構外出土遺物(26)
図版75	1 遺構外出土遺物(15) …………… 263	図版82	1 遺構外出土遺物(27) …………… 270
	2 遺構外出土遺物(16)		2 遺構外出土遺物(28)
図版76	1 遺構外出土遺物(17) …………… 264	図版83	1 遺構外出土遺物(29)表面 …………… 271
	2 遺構外出土遺物(18)		2 同 上 裏面
図版77	1 遺構外出土遺物(19) …………… 265	図版84	1 遺構外出土遺物(30)表面 …………… 272
	2 遺構外出土遺物(20)		2 同 上 裏面

(科学分析)

図版85	1 No.2に含まれる火山ガラス …………… 273	図版87	花粉顕微鏡写真(2) …………… 275
	2 No.12に含まれる火山ガラス	図版88	花粉顕微鏡写真(3) …………… 276
図版86	花粉顕微鏡写真(1) …………… 274		

寺 沢 遺 跡

図版 1	1 遺跡遠景(北西▷南東) …………… 321	図版 9	1 S K 07土坑(北▷南) …………… 329
	2 遺跡遠景(北▷南)		2 S K 08土坑(北▷南)
図版 2	1 町道北側調査前(東▷西) …………… 322		3 S K 10土坑(南東▷北西)
	2 町道北側調査前(南▷北)	図版10	1 S K 11土坑(西▷東) …………… 330
図版 3	1 町道南側調査前(東▷西) …………… 323		2 S K 13土坑(南東▷北西)
	2 町道南側調査前(南▷北)		3 S K 14・15土坑(南東▷北西)
図版 4	1 町道北側調査後(北東▷南西) …… 324	図版11	1 S I 02竪穴住居跡(北▷南) …………… 331
	2 町道北側調査後(南東▷北西)		2 S I 02竪穴住居跡カマド(北▷南)
図版 5	1 町道南側調査後(北▷南) …………… 325	図版12	1 S I 23竪穴住居跡炭化材検出状況 (南▷北) …………… 332
	2 町道南側調査後(北東▷南西)		2 S I 23竪穴住居跡(南▷北)
図版 6	1 町道北側調査風景(西▷東) …………… 326	図版13	1 S K 17土坑(北西▷南東) …………… 333
	2 町道南側調査風景(北▷南)		2 S K 18土坑(西▷東)
図版 7	1 S K 01土坑(南東▷北西) …………… 327		3 S K 19土坑(西▷東)
	2 S K 04土坑(北東▷南西)	図版14	1 S K 20土坑(南西▷北東) …………… 334
	3 S K 05土坑土層断面(東▷西)		2 S K 21土坑(北西▷南東)
図版 8	1 S K 05土坑(北東▷南西) …………… 328		3 S E 28井戸状遺構を検出した 旧沢部分(南西▷北東)
	2 S K 05土坑遺物出土状況(北東▷南西)		
	3 S K 06土坑(南▷北)		

図版15	1	S E 28井戸状遺構(西▷東) ……	335	図版21	遺構外出土遺物(6) ……	341
	2	S E 28井戸状遺構(南▷北)		図版22	遺構外出土遺物(7) ……	342
	3	S E 28井戸状遺構(西▷東)		図版23	遺構外出土遺物(8) ……	343
図版16	1	遺構内出土遺物(1) ……	336	図版24	遺構外出土遺物(9) ……	344
	2	遺構外出土遺物(1)		図版25	遺構内出土遺物(2) ……	345
図版17		遺構外出土遺物(2) ……	337	図版26	遺構内出土遺物(3) ……	346
図版18		遺構外出土遺物(3) ……	338	図版27	遺構内出土遺物(4) ……	347
図版19		遺構外出土遺物(4) ……	339	図版28	遺構外出土遺物(10) ……	348
図版20		遺構外出土遺物(5) ……	340			

半 仙 遺 跡

図版1	1	遺跡全景(北西▷南東) ……	437	図版10	1	S K 37土坑(北▷南) ……	446
	2	S I 20竪穴住居跡(東▷西)			2	S K 43土坑確認状況(南▷北)	
図版2	1	S I 15竪穴住居跡(東▷西) ……	438		3	S K 10土坑(東▷西)	
	2	S I 15竪穴住居跡土器埋設炉(南▷北)		図版11	1	S K 09土坑(南▷北) ……	447
図版3	1	S I 31竪穴住居跡(西▷東) ……	439		2	S K 18土坑(南▷北)	
	2	S I 31竪穴住居跡, S N 26A・B焼土遺構(東▷西)			3	S K 42土坑(南▷北)	
図版4	1	遺跡近景(南▷北) ……	440		4	S K 16土坑確認状況(西▷東)	
	2	調査区全景(北西▷南東)		図版12	1	S K 05土坑(西▷東) ……	448
	3	作業風景(北西▷南東)			2	S K 41土坑(東▷西)	
図版5	1	S K T 34陥し穴状遺構(北西▷南東)	441		3	S K 40土坑(東▷西)	
	2	S K T 34陥し穴状遺構断面(北西▷南東)		図版13	1	S K 02土坑(西▷東) ……	449
	3	S K T 35陥し穴状遺構(南西▷北東)			2	S K 22土坑(西▷東)	
	4	S K T 36陥し穴状遺構(西▷東)			3	S K 06土坑土層断面(南東▷北西)	
図版6	1	S K 28土坑(東▷西) ……	442	図版14	1	S K 12土坑(西▷東) ……	450
	2	S K 28土坑土層断面(東▷西)			2	S K 30土坑土層断面(北▷南)	
	3	S K 45土坑(東▷西)			3	S K 21土坑(南▷北)	
図版7	1	S K 27土坑(東▷西) ……	443	図版15	1	S K 01土坑(北▷南) ……	451
	2	S K 07土坑(南▷北)			2	S K 44土坑(北西▷南東)	
	3	S K 23土坑(東▷西)			3	S K 04土坑(南▷北)	
図版8	1	S K 03土坑(西▷東) ……	444		4	S K 19土坑(南▷北)	
	2	S K 08土坑(北▷南)		図版16	1	S K 33土坑土層断面(北東▷南西)	452
	3	S K 11土坑(南▷北)			2	S K 39土坑土層断面(北東▷南西)	
図版9	1	S K 14・32土坑(東▷西) ……	445		3	S K 38土坑(南西▷北東)	
	2	S K 17土坑(南▷北)		図版17	1	S R 24土器埋設遺構(南西▷北東)	453
	3	S K 25土坑土層断面(南▷北)			2	S R 29土器埋設遺構(東▷西)	
					3	S K 13土坑土層断面(南西▷北東)	

図版18	1 遺構内出土遺物(1) …… 454	図版39	1 遺構外出土遺物(28) …… 475
	2 遺構内出土遺物(2)		2 遺構外出土遺物(29)
図版19	1 遺構内出土遺物(3) …… 455	図版40	1 遺構外出土遺物(30) …… 476
	2 遺構内出土遺物(4)		2 遺構外出土遺物(31)
図版20	1 遺構内出土遺物(5) …… 456	図版41	1 遺構外出土遺物(32) …… 477
	2 遺構内出土遺物(6)		2 遺構外出土遺物(33)
図版21	1 遺構内出土遺物(7) …… 457	図版42	1 遺構外出土遺物(34) …… 478
	2 遺構内出土遺物(8)		2 遺構外出土遺物(35)
図版22	1 遺構内出土遺物(9) …… 458	図版43	1 遺構外出土遺物(36) …… 479
	2 遺構内出土遺物(10)		2 遺構外出土遺物(37)
図版23	1 遺構内出土遺物(11) …… 459	図版44	1 遺構外出土遺物(38) …… 480
	2 遺構内出土遺物(12)		2 遺構外出土遺物(39)
図版24	1 遺構外出土遺物(1)外面 …… 460	図版45	1 遺構外出土遺物(40) …… 481
	2 同 上 内面		2 遺構外出土遺物(41)
図版25	1 遺構外出土遺物(2)外面 …… 461	図版46	1 遺構外出土遺物(42) …… 482
	2 同 上 内面		2 遺構外出土遺物(43)
図版26	1 遺構外出土遺物(3)外面 …… 462	図版47	1 遺構外出土遺物(44) …… 483
	2 同 上 内面		2 遺構外出土遺物(45)
図版27	1 遺構外出土遺物(4) …… 463	図版48	1 遺構外出土遺物(46) …… 484
	2 遺構外出土遺物(5)		2 遺構外出土遺物(47)
図版28	1 遺構外出土遺物(6) …… 464	図版49	1 遺構外出土遺物(48) …… 485
	2 遺構外出土遺物(7)		2 遺構外出土遺物(49)
図版29	1 遺構外出土遺物(8) …… 465	図版50	1 遺構外出土遺物(50) …… 486
	2 遺構外出土遺物(9)		2 遺構外出土遺物(51)
図版30	1 遺構外出土遺物(10) …… 466	図版51	1 遺構外出土遺物(52) …… 487
	2 遺構外出土遺物(11)		2 遺構外出土遺物(53)
図版31	1 遺構外出土遺物(12) …… 467	図版52	1 遺構外出土遺物(54) …… 488
	2 遺構外出土遺物(13)		2 遺構外出土遺物(55)
図版32	1 遺構外出土遺物(14) …… 468	図版53	遺構外出土遺物(56) …… 489
	2 遺構外出土遺物(15)		剥片接合資料A
図版33	1 遺構外出土遺物(16) …… 469	図版54	遺構外出土遺物(57) …… 490
	2 遺構外出土遺物(17)		剥片接合資料B
図版34	1 遺構外出土遺物(18) …… 470	図版55	遺構外出土遺物(58) …… 491
	2 遺構外出土遺物(19)		1 剥片接合資料C
図版35	1 遺構外出土遺物(20) …… 471		2 剥片接合資料D
	2 遺構外出土遺物(21)	図版56	遺構外出土遺物(59) …… 492
図版36	1 遺構外出土遺物(22) …… 472		1 剥片接合資料C
	2 遺構外出土遺物(23)		2 剥片接合資料D
図版37	1 遺構外出土遺物(24) …… 473		3 剥片接合資料E
	2 遺構外出土遺物(25)	図版57	遺構外出土遺物(60) …… 493
図版38	1 遺構外出土遺物(26) …… 474		1 剥片接合資料F
	2 遺構外出土遺物(27)		2 剥片接合資料G

はじめに

1 調査に至るまで

東北横断自動車道秋田線は、秋田市－横手市－岩手県北上市を結ぶ県期待の高速交通体系の基幹をなす道路であり、昭和53年11月には、秋田市－横手市間57.4kmについて第8次施行命令が下された。これに伴い昭和54年11月には、日本道路公団仙台建設局長から秋田県教育委員会教育長あてに、計画路線内に存在する埋蔵文化財包蔵地の分布調査の依頼があった。これにたいし秋田県教育委員会では、昭和55・56年の2ケ年にわたって遺跡の分布調査を行い計画路線内に44遺跡が存在することを報告した。^(註1・2)さらに昭和58年にはこれら遺跡の詳細分布調査を行い、最終的に路線内に37遺跡が存在することを報告している。^(註3・4)

その後、路線内におけるこれら37の遺跡の保存について、日本道路公団と秋田県教育委員会との間で協議されたが、路線変更の不可能なことから最終的には記録保存の措置をとることで合意し、昭和60年度から調査が開始されたのである。

調査は秋田市寄りの遺跡から順次着手され、昭和60年には河辺郡河辺町七曲地区の6遺跡、^(註5)翌61年には仙北郡協和町中淀川地区の上ノ山Ⅰ・上ノ山Ⅱ・館野遺跡の3遺跡、^(註6)それに同町峰吉川地区に所在する半仙遺跡の一部の調査が実施されている。さらに昭和62年には半仙遺跡の残りの部分と、西仙北サービスエリア予定地の上野台遺跡とその北側の寺沢遺跡、仙北郡南外村の大畑潜沢Ⅲ・小出Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡の一部、大曲市と大森町にかかる下田遺跡、横手市の手取清水遺跡の調査を行っている。

註1 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第79集
1981(昭和56年)

註2 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第93集
1982(昭和57年)

註3 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第116集
1984(昭和59年)

註4 その後の範囲確認調査などで遺跡の範囲が路線内に及んでいないことが判明したものがあり、37の遺跡のうち、実際に調査の対象となる遺跡は24遺跡である。

註5 秋田県教育委員会 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ』 秋田県文化財調査報告書
第150集 1986(昭和61年)

註6 秋田県教育委員会 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ』 秋田県文化財調査報告書
第166集 1988(昭和63年)

はじめに

2 調査の組織と構成

調査主体 秋田県教育委員会

遺跡名・所在地・調査面積・調査期間・調査担当者

番号	遺跡名	所在地	調査面積	調査期間	調査担当者
25	上野台	仙北郡西仙北町 強首字上野台23-1外	9,000㎡	昭和62年 5/11～8/27	栄 一 郎(学芸主事) 武 藤 祐 浩(") 利 部 修(") 高 橋 忠 彦(文化財主事) 栗 沢 光 男(") 鎌 田 茂(非常勤職員) 村 上 光 明(")
26	寺 沢	仙北郡西仙北町 九升田字寺沢1-11外	8,650㎡	昭和62年 4/22～6/23	武 藤 祐 浩(学芸主事) 栗 沢 光 男(文化財主事)
28	半 仙	仙北郡協和町 峰吉川字半仙48外	5,500㎡ (2,350㎡) (3,150㎡)	昭和61年 9/20～11/19 昭和62年 4/22～6/13	熊 谷 太 郎(学芸主事) 柴 田 陽一郎(文化財主事) 利 部 修(学芸主事) 横 山 伸 司(講師) 村 上 光 明(非常勤職員)

専門指導員 工 楽 善 通 奈良国立文化財研究所

埋蔵文化財センター集落遺跡研究室長

小 林 達 雄 国学院大学文学部教授

須 藤 隆 東北大学文学部助教授

白 石 建 雄 秋田大学教育学部助教授

桑 原 滋 郎 宮城県多賀城跡調査研究所長

総務担当 加 藤 進 (秋田県埋蔵文化財センター主査)

高 橋 忠太郎 (秋田県埋蔵文化財センター主事)

協力機関 協和町・協和町教育委員会

西仙北町・西仙北町教育委員会・西仙北町建設課

3 調査の方法

発掘調査は、グリッド法を採用した。東北横断自動車道秋田線路線内には、20 m 毎に中心杭が打設されており、遺跡内の中心杭を任意に選定し、これをグリッド起点MA50とした。さらにMA50から磁北に沿った南北基線と、これに直交する東西基線を設け、4 m × 4 m のグリッドを設定し、また数箇所レベル原点杭を打設している。なお上野台遺跡に関しては、A・B・C区とも同一基線からグリッドを設定している。各遺跡で起点とした中心杭は、下記の通りである。

中 心 杭

上野台遺跡 STA392+00

寺 沢遺跡 STA397+00

半 仙遺跡 STA419+40

グリッド杭には、東西方向にLA→LT、MA→MTとアルファベットの組み合わせを、南北方向には南から北に向かって昇順となる連続する2桁の数字を用い、この両者の組み合わせを記入し、グリッドの呼称には、その東南に当たる杭の記号(例 LA50)を用いている。

各遺跡とも、範囲確認調査の結果から、遺物包含層、遺構確認面までは浅いものと考え、全て人力による表土除去から開始している。出土遺物のうち、遺構外のは、出土グリッド・出土層位・出土年月日を記入したラベルとともに取り上げ、遺構内出土の遺物については、出土遺構名・出土層位・出土年月日を記入したラベルとともに取り上げている。また、これら両者の出土状況によっては、その都度、写真撮影や図面作成を行っている。遺構の確認は可能な限り、掘り込み面において確認するよう努めたが、各遺跡とも後世の攪乱が著しく、地山面で確認される遺構が多い。

遺構の調査については、主に四分法を用いている。住居跡などの、面積規模の大きな遺構は、そのプラン確認後、東西及び南北の二方向または長軸及び短軸の二方向に直交する覆土堆積状況観察用のベルトを残して調査を進めている。また、規模の小さな土坑などの遺構に関しては、長軸に沿ってベルトを残し二分割して調査している。調査の記録は、主に図面と写真によった。図面は、平面・土層断面図など基本的には1/20で作図することとしたが、配石、土器埋設遺構など、細部の表現が必要な遺構に関しては1/10縮尺で行っている。また遺構図面は、遺物出土状況・重複関係などから数次にわたる図面作成も行っており、この他平板測量による遺構配置図や地形図の作成も行った。

写真撮影については、基本的には35mmモノクロとリバーサルフィルムを使用した。この他、上野台遺跡と半仙遺跡では遺跡の古環境や年代把握のため、科学分析を行った。

はじめに

4 調査の経過

上野台・寺沢・半仙遺跡の調査経過は、下記の通りであるが、各遺跡の詳しい調査の経過は後述する遺跡毎の調査の経過を参照されたい。

昭和62年4月8日調査担当者は、本調査における諸準備のために調査地域の下見を行い、調査開始までのほぼ1ヶ月間、グリッド打設、進入路・駐車場等の造成の業者委託、発掘機材の整備など調査に向けての諸準備を行っている。

4月20日、発掘作業員募集のため、仙北郡協和町・西仙北町の両町民を対象に、西仙北町中央公民館にて作業員説明会を開くとともに、両町の教育委員会を始めとして関係機関に対する協力方もお願いしている。

4月22日、寺沢遺跡は武藤・栗沢、半仙遺跡は利部・横山・村上が担当し、調査を開始し、両遺跡とも梅雨に悩まされながらも6月23日をもって終了している。この間上野台遺跡については、その対象面積が70,000㎡と広大なため、遺構・遺物の集中する重要調査地区の把握のため、5月11日～6月20日の約1ヶ月間3,000㎡におよぶ実質の範囲確認調査を栄・高橋・鎌田が行っている。この調査の結果により、上野台遺跡は全面にわたって牧草地造成時に、遺物包含層・遺構の掘り込まれている地山面まで削平を受けており、実際に調査の必要な部分は台地北側の3つの舌状の張り出し部に限定され、それぞれA区3,800㎡、B区3,200㎡、C区2,000㎡の計9,000㎡であることを確認している。

6月24日、寺沢・半仙遺跡の終了をもって上野台遺跡の調査を開始し、各区の担当は、A区栄・鎌田、B区利部・村上、C区武藤・栗沢である。

7月6日～7月8日、武藤・高橋が、東北横断自動車道に係る南外村に所在する堤沢Ⅰ・Ⅱ遺跡の範囲確認調査を行っている。^(註1)

8月3日、比較的遺構・遺物の少なかったB区が終了している。

8月27日、A・C区の調査終了をもって、上野台遺跡の調査を終えている。またこの調査期間中に、7月下旬には、白石建雄専門指導員の来跡を仰ぎ、上野台遺跡周辺の地質や地形などについて協議がなされている。さらに8月25日にはC区において、花粉分析のためのサンプリングがパレオ・ラボ社によって行われている。

3遺跡の全調査期間を通じ、地元小学生や、郷土史家、地元文化財関係の人々の遺跡見学があり、各担当者はこの説明にも当たっている。

報告書作成及び遺物整理などは、昭和62・63年度の両年にわたって秋田県埋蔵文化財センターで行われている。

註1 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第174集

1988(昭和63年)

遺跡の立地と環境

1 遺跡の立地

上野台・寺沢遺跡のある西仙北町は秋田県の中央部に位置し、北流する雄物川を中心として東西25kmの細長い区域からなる。町の東部は雄物川の支流である土買川・今泉川に沿って開けた狭い耕地を中心とし、西部の強首・大沢郷地区は雄物川の形成した氾濫低湿地と出羽山地からなり、両遺跡は町中心部刈和野の西方約5kmの台地上に位置している。

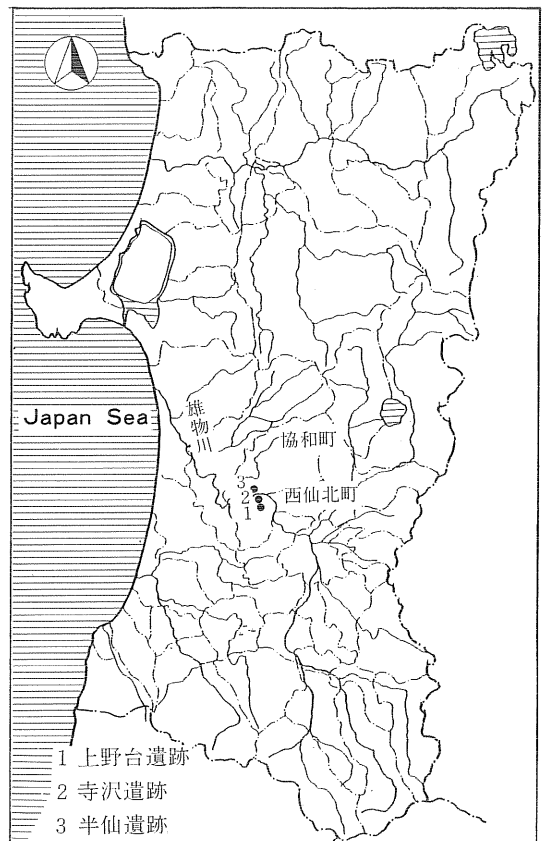
遺跡のある台地は、東の赤坂部落から西の杉山田部落に至る東西4km、南北1.5kmと广大で、北側を雄物川に、南側をその支流である大沢川によって侵食された独立丘を呈した台地である。

台地の高さは最頂部で80mほどで、西側に行くにつれてその高さを減じており、東側から高位Ⅱ段丘面、中位Ⅱ段丘面、中位Ⅲ段丘面、完新世段丘面の極めて平坦な四つの段丘面を見ることができる。特に高位Ⅱ段丘面の北側には開析谷の発達が著しく、大小の舌状部分が形成されている。

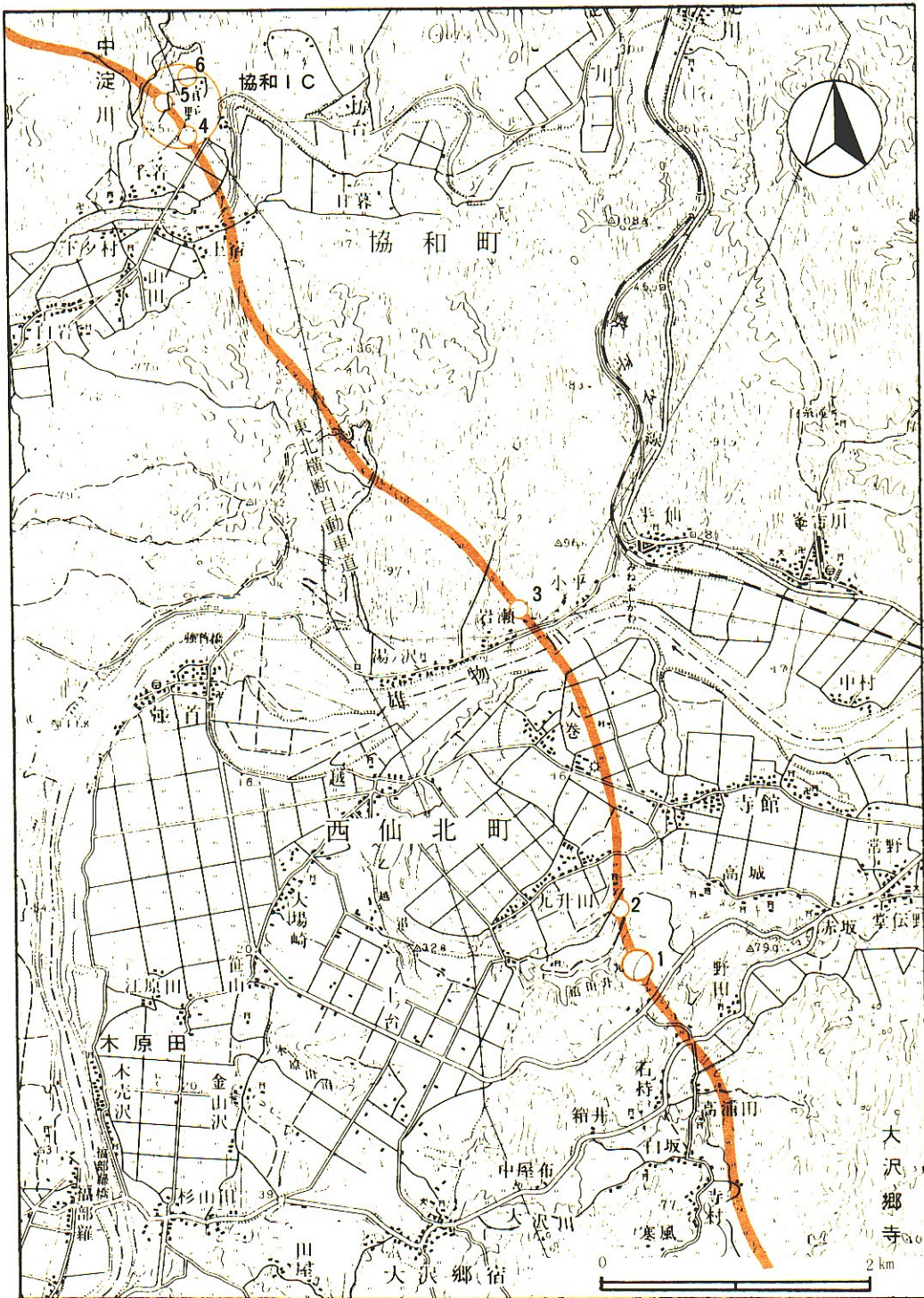
上野台・寺沢両遺跡はこのうち高位Ⅱ段丘面上にあり、上野台遺跡は台地中央部北側の大小3つの東西に並ぶ舌状部分(A・B・C区)からなる。

寺沢遺跡は上野台C区から、台地内最大の開析谷である九升田沼を挟んで北へ400mの北側先端部の緩斜面(標高47~56m)に立地している。遺跡の北側は急崖となって比高差40m前後の沖積地に続いており、沖積地には、いくつかの自然堤防が認められる。

半仙遺跡は寺沢遺跡の北方2.4kmの雄物川右岸、標高30m前後の東西に沢の入りむ南側に張り出す舌状部分に立地している。遺跡のある台地は中位Ⅱ段丘面であり、北の畑山丘陵地を経て4.5kmには、これも中位Ⅱ段丘面上ノ山Ⅱ遺跡をはじめとして上ノ山Ⅰ・館野遺跡などの集中する地域がある。

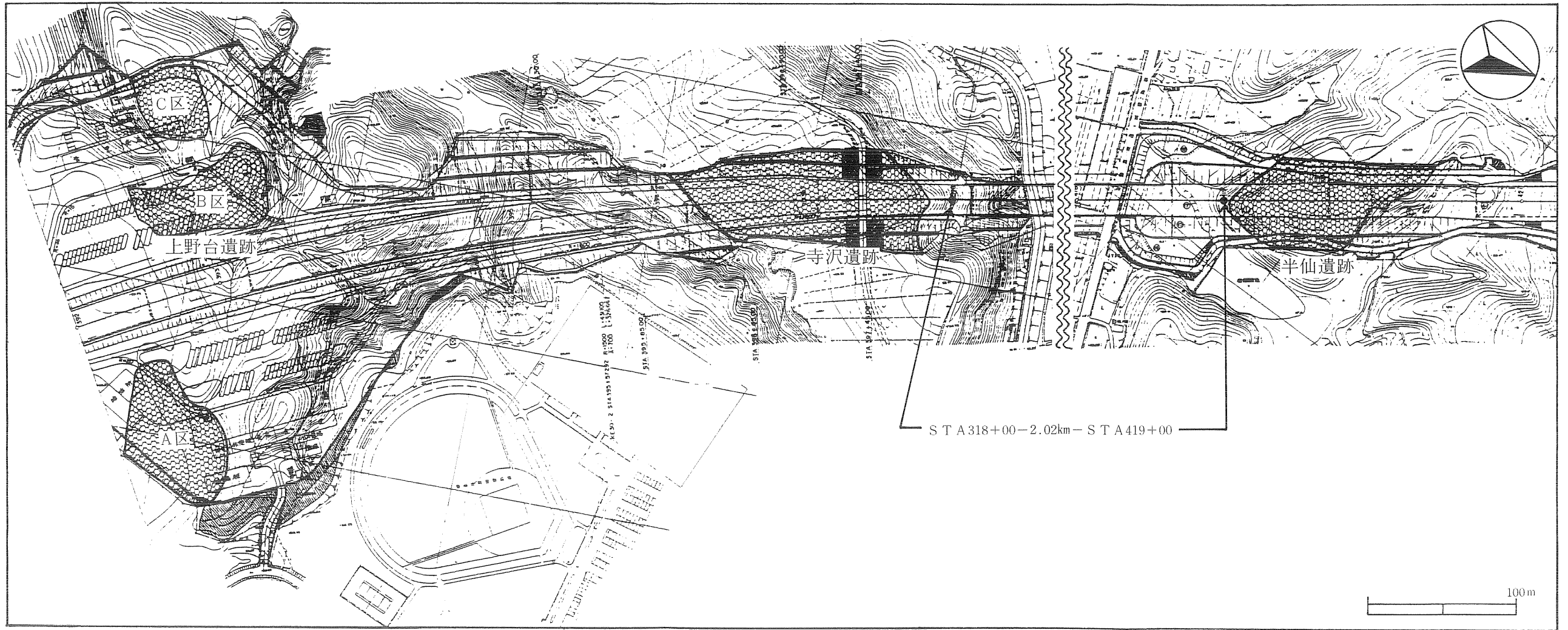


第1図 遺跡位置図



- 1 上野台遺跡 2 寺沢遺跡 3 半仙遺跡
4 上ノ山I遺跡 5 館野遺跡 6 上ノ山II遺跡

第2図 西仙北町・協和町内路線と遺跡



第3図 遺跡関連位置図

2 調査地域周辺の地形・地質

(1) 地形概観

半仙および上野台・寺沢遺跡は出羽丘陵(出羽山地ともいう)を横断して流れる雄物川の中央部からやや大曲寄りの地点にある。雄物川の流路沿いの沖積平野は幅約2 km前後で比較的広い。しかし沖積平野背後の地域は主として丘陵によって占められている。また、蛇行流路の外側、すなわち攻撃斜面側は切り立った断崖をなしている。このため雄物川の流路は峡谷状の地形を示している。

雄物川の流路がこのような地形を呈していることは、隆起する出羽丘陵を雄物川が掘り下げ続けてきたこと、すなわち、出羽丘陵に対する雄物川の先行性を意味する。このため出羽丘陵を横断するこの流路はしばしば「雄物川先行谷」とよばれる。出羽丘陵は新潟県を含む東北地方日本海沿岸地帯の帯状の山地であり、新第三紀後半から第四紀にかけて進行した出羽変動(藤岡、1986)が形成した褶曲山脈である。これが離水を開始した頃、雄物川は既にその上を流れていたのである。

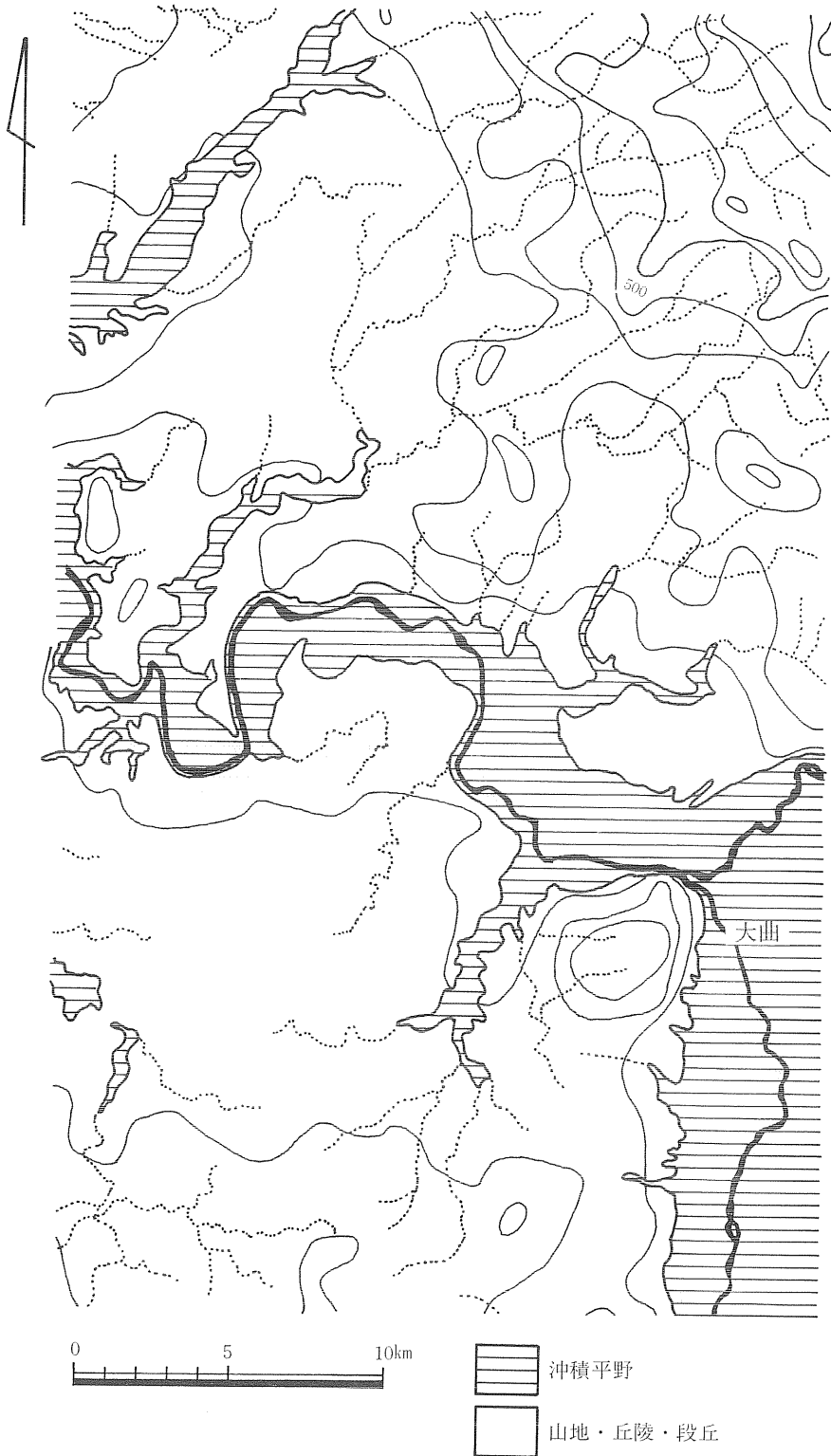
第4図は雄物川先行谷周辺の接峰面図である。図は国土地理院発行20万分の1地勢図を用い、埋谷法により幅2 km未満の谷を消去して作成した。等高線は100 m間隔である。また、山地および丘陵地を流れる水系は点線で示した。一般に現在の地形は隆起・沈降などの地殻運動と侵食による影響との代数和の産物である。接峰面図は侵食による影響を消去した図であり、基本的に地殻運動による地形を示している。

本地域の地形は山地、丘陵、段丘、沖積平野からなる。第4図に示されているように、本地域北方には標高200 m以上の所に急斜面があり、北西-南東方向に延びている。図北東端の高度は1,000 mあり、この斜面の比高は800 mに達する。この急斜面分布地が山地であり、太平山地の南端部にあたる。

丘陵は第4図の西部大半を占め、非常に広く分布している。標高200 m以下の地域であり、上記の山地との境界は地形断面に明瞭な傾斜遷緩点として現れる。河川によって密な開析を受けているものの、全域にわたって等高性があり、頂高はよく揃っていて、遠望するとほとんど平坦に見える。このような地形は「斉頂丘陵」とよばれ、日本の海岸地帯にはよくみられる。この背面の等高性については十分な解明が行なわれていないが、第四紀初頭における広範な基準面の支配下でできた侵食あるいは堆積面であると解釈されている(中川、1967)。

段丘は次に述べる沖積平野に面した丘陵末端部に分布する。本地域には最低位の完新世段丘を含めて8段存在する。いずれも雄物川とその支流の河成段丘である。これらについては後述する。

沖積平野は河川流域の低平地である。本地域では雄物川の流路に広く発達しているほか、岩



第4図 接峰面図および主水系図

見川および淀川流域に狭長に存在する。また、本地域東方の大曲およびその南方には横手盆地底を構成する広い沖積平野の一部が分布している。雄物川の河床高度は出羽丘陵入口の大曲付近で標高20 m、出口の四ツ小屋で5 mである。後述するように、この雄物川に沿う沖積平野面上には自然堤防などの微地形がよく発達している。

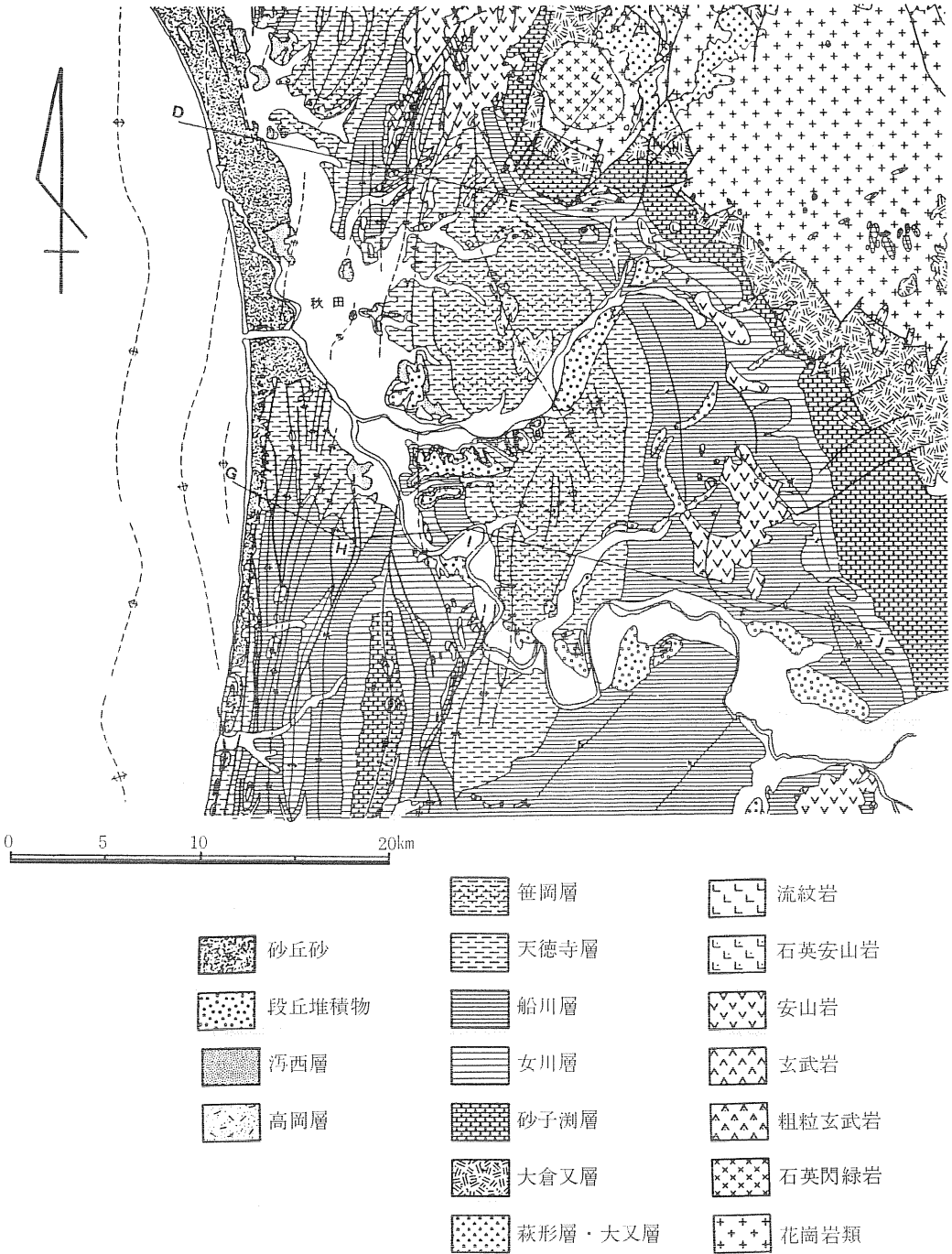
第4図に本地域の主要な水系を示した。水系の配置は雄物川を境として、北部と南部で非常に異なる。北部の水系は南西方向のものが卓越しており、等高線の配置に直交する必従河川である。一方、南部では東西方向のものと南北方向の水系が卓越している。南部における地質構造は南北方向である。それゆえ地質構造に支配された南北方向の隆起帯と低地帯の配置が上記のような水系の配置を導いたのであろうと考えられる。

(2) 地質の概要

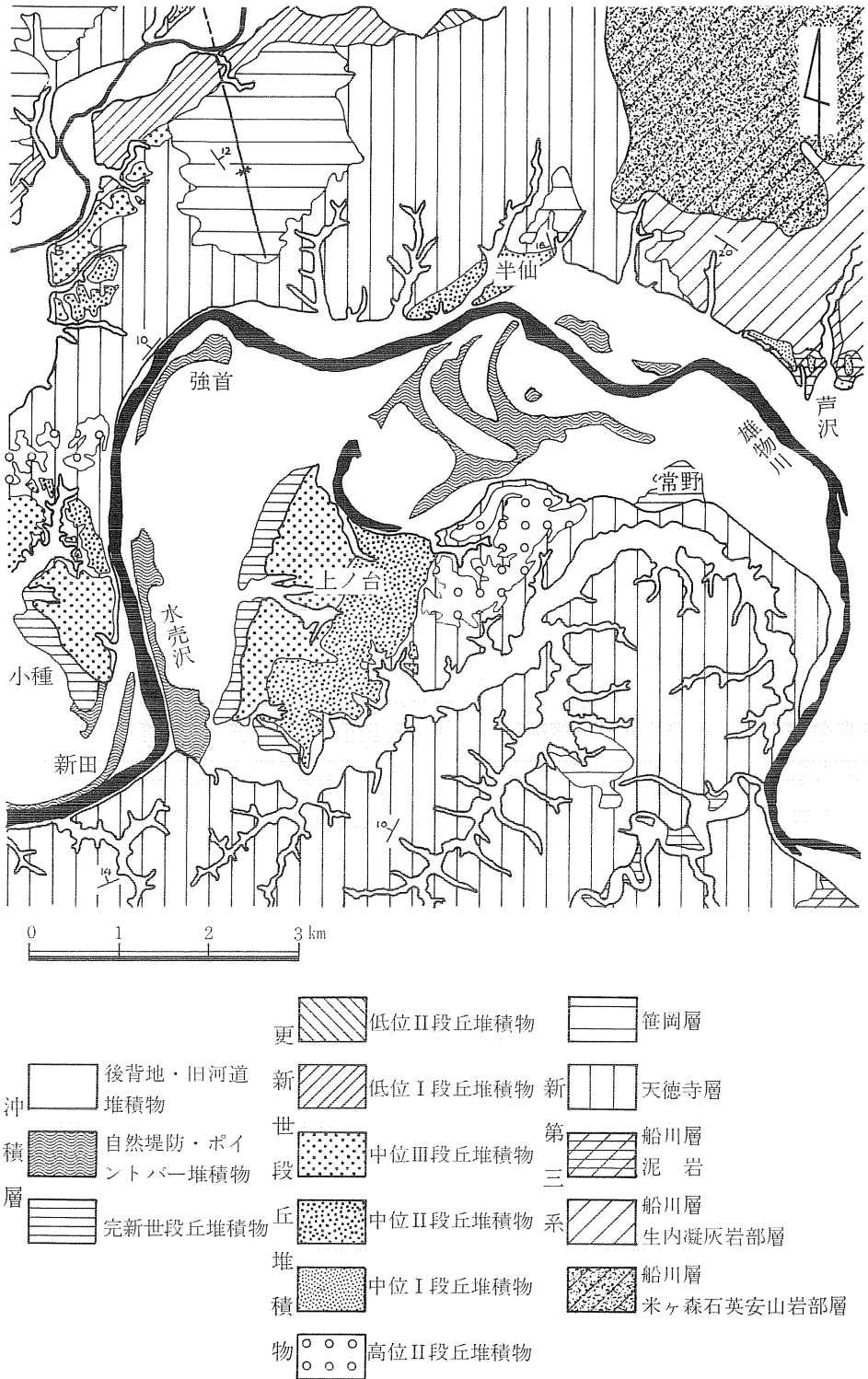
秋田県は東北地方グリーンタフ地帯の一角を占め、新第三紀以降の地層が先新第三系を不整合に覆って広く分布している。この新第三紀の地層(新第三系)は伝統的に上下に二分される。下部は「下部グリーンタフ」とよばれ、主として火山噴出物から構成されている。一方上部は「含油新第三系」とよばれ、泥岩・砂岩などの堆積岩からなる。

第5図は本地域の地質図である。本地域における最下位の地層は白亜紀の花崗岩類であり、本地域北方の太平山地に分布する。その周辺には、下部グリーンタフが白亜紀花崗岩類を不整合に覆って分布する。本地域における下部グリーンタフは下位より順に大又層、萩形層、大倉又層、砂子淵層に区分されている。以上の地層の分布は北西-南東方向で、前記した山地の斜面の方向と一致している。含油新第三系を構成する地層は下位から順に女川層、船川層、天徳寺層、笹岡層に区分されている。笹岡層の堆積年代は近年少なくともその主部は第四紀であるとする見解が多かったが、最近の研究(佐藤ほか、1988)では新第三紀鮮新世である。これら含油新第三系を構成する堆積物は上位のものほど粗粒になる傾向がある。すなわち最下位の女川層は層理が発達した硬質で均質な頁岩からなるが、天徳寺層のシルト岩を経て、最上位の笹岡層では主として砂岩から構成されている。このことは含油新第三系を堆積した海が時間とともに浅海化していったことの反映であると解釈されている。なお、石器の石材として多く用いられている頁岩は主として女川層由来のものである。

ところで、以上の諸地層は前記した地形と密接な関連をもって分布している。すなわち、山地には白亜紀の花崗岩と下部グリーンタフなど、下位の地層が分布し、丘陵地は上部の含油新第三系からなる。このことは山地が隆起量の大きい地域であることを物語っている。したがって本地域の地形は、地質構成と地殻運動の影響を大きく反映しており、地質支配を受けた地形であると見なすことができる。



第5図 調査地域周辺の地質図 大沢(1980)による。



第6図 半仙・上野台・寺沢遺跡周辺の地質図

(3) 半仙・上野台・寺沢遺跡周辺の地形と地質

第5図は半仙・上野台・寺沢周辺地域の地質図である。図は臼田ほか(1979)による地質図と段丘分布図を編集して作成した。また、第1表は層序表である。本地域の地質は下位から順に新第三系、更新世段丘堆積物、沖積層・完新世段丘堆積物からなる。

①新第三系

新第三系は丘陵地のほか段丘堆積物の基盤として分布する。下位から順に船川層、天徳寺層、笹岡層に区分されている。船川層は主として泥岩からなる地層であるが本地域に分布する同層上部には火山噴出物が卓越し、米ヶ森石英安山岩部層、生内凝灰岩部層に区分されている(臼田ほか、1979)。これらはそれぞれ本地域の北東、雄物川右岸の丘陵地に分布する。米ヶ森石英安山岩部層は輝石安山岩やハリ質安山岩の熔岩円頂丘および火砕岩からなり、侵食に対する抵抗性が大きいため、地形的には突出した孤立峰を形成する。生内凝灰岩部層は主として軽石凝灰岩からなり、米ヶ森石英安山岩部層を取り巻くように分布する。泥岩は

第1表 層序表

時 代		層 序			NAKATA (1976) の段丘区分
完新世	沖積層	沖積層	完新世段丘	完新世段丘	
更新世	後 期	更新世段丘堆積物	低位Ⅱ段丘	赤 平 面	
			低位Ⅰ段丘		
			中位Ⅲ段丘	相 川 野 面	
			中位Ⅱ段丘	上 の 台 面	
			中位Ⅰ段丘	椿 台 Ⅲ 面	
			高位Ⅱ段丘	椿 台 Ⅱ 面	
鮮新世	笹 岡 層				
	天 徳 寺 層				
中新世	船川層	米ヶ森石英安山岩部層	生内凝灰岩部層		
		泥 岩			

本地域南東端、および声沢付近に局所的に分布している。天徳寺層は本地域の丘陵地に最も広く分布している。細粒砂岩およびシルト岩からなり、下位の船川層に整合に重なる。笹岡層は本地域北東、強首北方の向斜軸の芯部にまとまって分布するほか、寺村南方に局所的に分布する。固結度の低い中粒砂岩を主体とし、細礫岩や亜炭を挟む。天徳寺層に整合に重なる。

②更新世段丘堆積物

更新世段丘は沖積平野に面する丘陵末端部に分布する。6段存在する。いずれも雄物川とその支流の河成段丘である。これらは高位のものより順に高位Ⅱ段丘、中位Ⅰ～Ⅲ段丘、低位Ⅰ・Ⅱ段丘とよばれている(臼田ほか、1979)。半仙遺跡および上野台・寺沢遺跡はそれぞれ雄物川の右岸と左岸の中位Ⅱ段丘面・高位Ⅱ段丘面上に位置している。雄物川本流に沿う段丘は蛇行流路を成長させる過程でできたことを示しており、いずれも蛇行流路の内側に分布している。

以上の段丘の分布には顕著な特徴が認められる。低位段丘の分布は支流の流域に限られ、雄物川本流域には存在しない。中位段丘は全流域に分布する。しかし中位Ⅰ・Ⅲ面および中位Ⅱ・

Ⅲ面は相伴って分布し、高位の段丘とは明瞭な比高をもってその低位側に分布するものの、3面が共存することはない。このことは中位Ⅰ段丘とⅡ段丘の形成時期に大きな隔たりがないことを示唆している。

高位Ⅱ段丘は上ノ台東方および強首南西の雄物川右岸に分布する。この段丘はNAKATA(1976)の樁台Ⅱ面に相当する。段丘面の高度は約60～70mである。開析が進んでいるものの、平坦面はよく保存されている。上ノ台におけるこの段丘はレンズ状の砂層を挟在する小～中礫層(層厚3m以上、下限不明)とその上位に重なる層厚2mの砂～礫質粘土層からなる堆積物を伴っている。

中位段丘は本地域に連続的に発達しており、高位の段丘群が断続的であることと比較すると非常に対照的である。中位Ⅰ段丘は雄物川右岸の芦崎付近に局所的に分布する。しかしこれはより上流側へと連続し、神宮寺付近では広大な段丘面となる。この段丘はNAKATA(1976)の樁台Ⅲ面に相当し、岩見川流域に分布する本段丘は最終間氷期に対比された(内藤、1965)。段丘面の高度は40～50mであり、高位の段丘とは明瞭な高度差がある。段丘堆積物は本地域では観察できないが、上流の神宮寺付近における本段丘の坑井資料によれば、層厚15mの小～中礫からなり、礫はクサリ礫化している。

中位Ⅱ段丘は雄物川の左右両岸に比較的広く分布する。NAKATA(1976)の上の台面に相当する段丘である。段丘面の高度は上ノ台で標高40mであり、上・下位の面との比高は軽微である。平坦面は、よく保存されているが、軽微な波状の起伏が認められる。上ノ台における本段丘堆積物は7～8mの層厚を有し、礫層とその上位に重なる砂層からなる。礫層は円磨された小～中礫を主とし、レンズ状の砂層を伴う。上位の砂層は3mの層厚を有し、細粒砂からなる。下部には斜交葉理が発達する。また半仙遺跡が位置する地点での本段丘堆積物は段丘面下8mまでは礫層とその上位に重なるシルト・砂互層、腐植土層からなる。層は層厚約5mで、シルト薄層を伴う。また、下部には斜交葉理がよく発達している。

中位Ⅲ段丘は中位Ⅱ段丘と密接な関連をもってその低位側に分布している。NAKATA(1976)の相川野面に相当する段丘である。段丘面の高度は本地域では35m前後である。平坦面はよく保存されている。小種北方における本段丘堆積物は、段丘面下4mまでは円磨された小～中礫からなる礫層と、その上位を覆う層厚0.5mの赤褐色砂層からなる。

低位Ⅰ・Ⅱ段丘は雄物川本流域には存在せず、支流域にのみ分布する。低位Ⅰ段丘は淀川流域に比較的広く分布するが、低位Ⅱ段丘の分布はごく断片的である。これら2面はNAKATA(1976)の赤平面に相当する。段丘面は新鮮で平坦面はよく保存されている。低位Ⅰ段丘面は流路に沿う縦断面勾配が大きく、下流域で沖積平野面と交差する。恐らく平野面下に埋没しているものと推定される。段丘堆積物は1～2mでごく薄く、小～中礫からなる。また、淀川上流の水沢

付近における本段丘堆積物中には泥炭層が存在する。この泥炭層は *Picea* を主とし、*Abies*、*Tsuga*、*Betula* を伴う亜寒帯針葉樹の花粉が圧倒的に優勢な花粉組成を示す(臼田ほか、1979)。これらのことにもとづいて低位段丘群は最終氷期に対比されている。

③沖積層および完新世段丘堆積物

完新世段丘は本地域最低位の段丘である。上ノ台における更新世段丘の西部および小種周辺に狭長ながら有意な分布を示すほか、常野付近にも分布する。堆積物は確認していない。

沖積層は平野地下の堆積物である。時代的には更新世末期から完新世にわたっており、一部は完新世段丘より古期の堆積物を含む。坑井資料によれば、雄物川の流路に沿う平野の沖積層基底深度は起伏に富み、これに支配されて層厚は5~20 mと変化する。堆積物は砂礫を主とし、シルト、粘土および泥炭を伴う。層相の側方変化が激しい。

平野面は数段に段化していることに加え、自然堤防・ポイントバー等の微高地と旧河道・後背湿地等の凹地・低平地が複雑に配置していて、軽微ながら起伏に富んでいる。とくに自然堤防の発達が顕著である。自然堤防は砂礫や粗粒シルトからなる高燥な微高地であり、洪水時にも冠水を免れるため、この上には多くの集落がある。新田、木売沢、強首などはそのような集落の例である。平野面下10 m以浅の沖積層最上部の層相はこの微地形とよく対応している。すなわち、微高地の表層部には砂礫や砂などの粗粒物質が卓越し、凹地・低平地ではシルト・粘土などの細粒物質が支配的である。

引用文献

- 藤岡一男(1968) 秋田油田における出羽変動. 石油技術協会誌, 33, 283-297.
- 内藤博夫(1965) 秋田県岩見川流域およびその周辺の段丘について. 第四紀研究, 4, 23-34.
- 中川久夫(1967) 丘陵地の成立に関する一考察. 佐々保雄教授還暦記念論文集, 371-378
- NAKATA, T. (1976) Quaternary Tectonic Movements in Central Tohoku. Sci. Rep. Tohoku Univ. (7th ser.), 26, 213-239.
- 大沢 穠(1980) 20万分の1地質図, 秋田および男鹿. 地質調査所.
- 佐藤時幸・高山俊昭・加藤道雄・工藤哲郎(1988) 日本海側に発達する最上部新生界の石灰質微化石層序, その3: 秋田地域および男鹿半島. 石油技術協会誌, 53, 199-212.
- 臼田雅郎・村山 進・白石建雄・高安泰助・乗富一雄(1976) 秋田県総合地質図幅「刈和野」. 秋田県, 77p.

3 歴史的環境

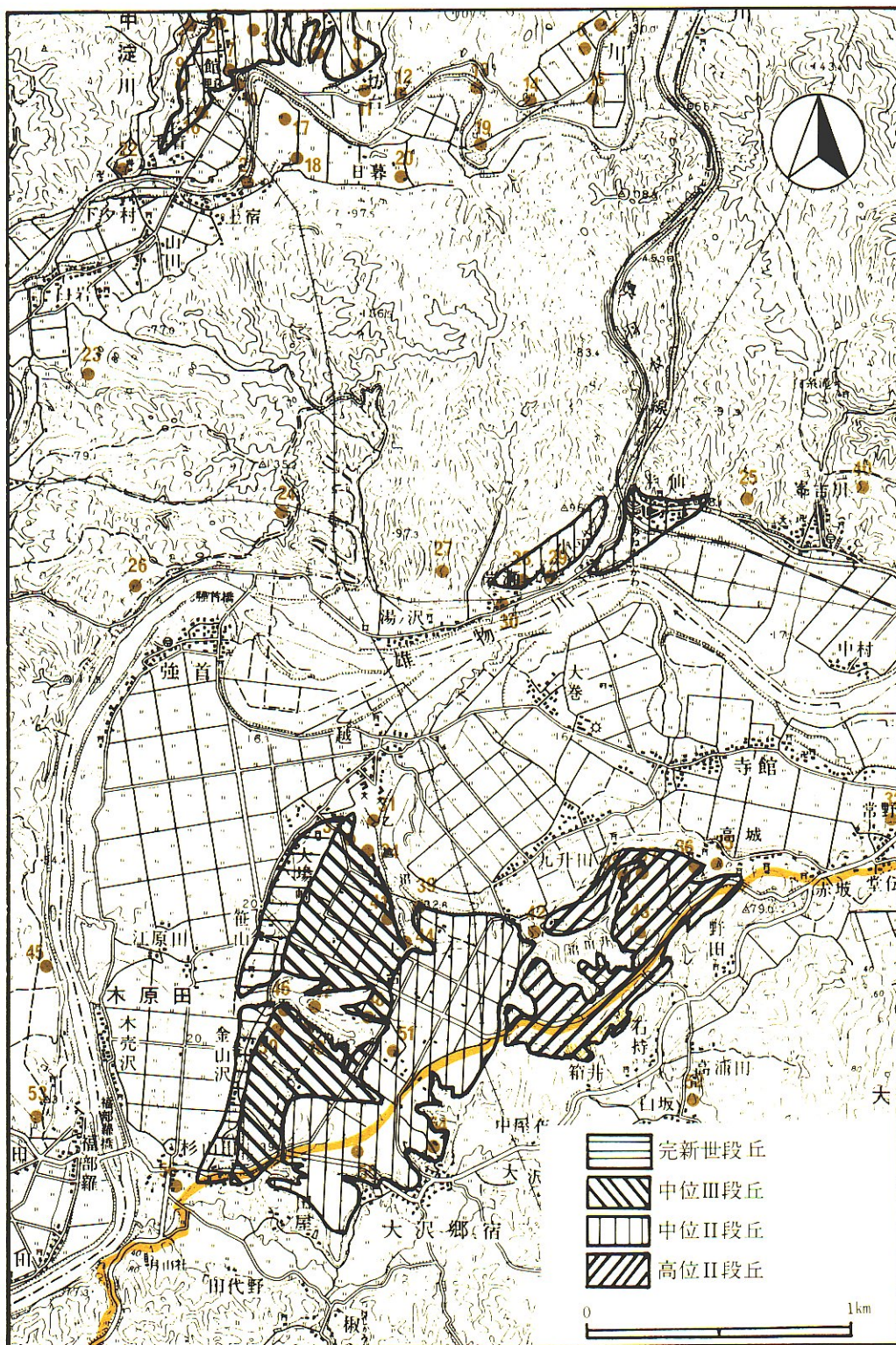
上野台遺跡・寺沢遺跡のある西仙北町と半仙遺跡の所在する協和町は、秋田県南部の北側に位置し、県内最大河川である雄物川がその町界をなしている。遺跡はこの雄物川とその支流沿いに広く分布しているが、昭和40年代まではその数や内容に不明な点が多かった。しかしながら、昭和53年・54年に行われた中世城館遺跡詳細分布調査^(註1)、昭和59年度から5ヶ年計画で行なわれている遺跡詳細分布調査^(註2)によって、この地域における遺跡数は倍増している。

西仙北町における遺跡の分布は雄物川を中心に、東西に2つの集中する地域がある。1つは、雄物川左岸の強首地区で、上野台遺跡や寺沢遺跡のある高位Ⅱ段丘面やその下の雄物川の残存湖である乙越沼や、木原田沼を含む中位Ⅱ段丘面縁辺部に多く分布している。上野台遺跡に隣接する遺跡では、東側に縄文時代晩期の高城遺跡^(註3)(36)があり、また現在の緑地公園運動場は、縄文時代前期～後期の堅穴住居跡が検出された柏台遺跡^(註4)(37)の跡地である。弥生時代から古代にかけては、弥生時代の遺跡として残存湖周辺に上ノ台Ⅹ(33)・上ノ台Ⅵ遺跡(48)の2遺跡が確認されているにすぎず、古代に至っては、上野台・寺沢遺跡以外に発見されていない。中世になると上野台遺跡の北東に高城(35)、寺沢遺跡の北西0.5kmには称宜館(42)や白坂館(52)があるがいずれも未調査であり詳述できない。

上野台の南側には、江戸時代に整備の行なわれた亀田街道が東西に走っている。現在町道赤坂・強首線とほぼ重なるが、高城地区には往時を偲ばせる旧道やまた街道筋には御番所跡なども残っており、当時の交通の要所であったことがわかる。

一方の雄物川右岸の遺跡集中地域は、雄物川の支流である土買川や心像川の段丘上に見られる。このうち心像川の下流右岸には縄文時代前期・中期の土器・石器が出土した刈布沢遺跡、平安時代(9世紀後半～10世紀前半)と考えられる上雨堤遺跡がある。特に上雨堤遺跡では掘立柱建物跡2棟、刀子を出土した土壌などが検出されており、この地域における平安時代の遺構の発見は当時としては初めてのものであった。その他、縄文時代中・後期の遺跡である笹原台遺跡^(註5)や中世の寄騎館跡などがある。

協和町における遺跡の分布もまた、雄物川とその支流沿いに集中している。支流である淀川下流の千着地区は、半仙遺跡より北へ1.6kmの中位Ⅱ段丘面に当たるところであるが、この地域には昭和61年度に調査が行なわれた上ノ山Ⅱ遺跡(9)がある。上ノ山Ⅱ遺跡では縄文時代前期の大型住居跡が27軒検出された極めて特異な遺跡であり、周辺の同期の遺跡の中心的な遺跡と考えられている。この上ノ山Ⅱ遺跡と同時に調査が行なわれた縄文時代中期を中心とする上ノ山Ⅰ遺跡(16)や縄文時代前期と中期の堅穴住居跡の検出された館野遺跡(7)もある。また、千着地区より淀川を1.3kmほどさかのぼると、旧石器時代と縄文時代晩期の複合遺跡である防台遺



第7図 周辺遺跡位置図

第2表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代(時期)	文献	番号	遺跡名	時代(時期)	文献
1	未命名の遺跡	縄文		29	小平	縄文	
2	未命名の遺跡	縄文		30	岩瀬	縄文(後～晩期)	
3	未命名の遺跡	縄文		31	弥助堰		
4	和田の台A	縄文(中期)	2	32	常野	縄文(晩期)	
5	未命名の遺跡	縄文		33	上ノ台X	弥生	
6	和田の台B	縄文・平安		34	上ノ台I		
⑦	館野	縄文	6・12	35	高城	中世	4・6
8	坊台	縄文(晩期)		36	高城	縄文(晩期)	
⑨	上ノ山II	縄文(前期)	12	37	柏台	縄文(後期)	
10	長者森館	中世	6	③⑧	寺沢	縄文(前期)	
11	未命名の遺跡	縄文		39	上ノ台XI	縄文(中期)	
12	五百刈田	縄文		40	中沢	弥生	
13	館の沢城	中世	6	41	上ノ台IX	縄文	
14	和田の台C	縄文(後期)		42	称宜館	中世	6
15	川又	縄文(前～後期)		④③	上野台	縄文(前期)～平安	
⑬	上ノ山I	縄文(前～後期)	12	44	上ノ台II	縄文(中～晩期)	
17	未命名の遺跡	縄文		45	太平山	縄文	
18	未命名の遺跡	縄文		46	上ノ台IV	弥生	
19	未命名の遺跡	縄文		47	上ノ台VII	縄文(中期)	
20	未命名の遺跡	縄文		48	上ノ台VI	弥生	
21	日暮	縄文(晩期)		49	上ノ台V	縄文	
22	上総館	中世	6	50	上ノ台III	縄文	
23	石神館	中世	6	51	上ノ台VIII	縄文	
24	白岩城	中世	6	52	白坂館	中世	
25	馬館	中世	6	53	鏡台		
26	小佛	縄文		54	角間沢	縄文(晩期)	
27	湯ノ沢城	中世		55	御番所跡		
⑳	半仙	縄文(前期)		56	杉山田	縄文(晩期)	

(○印の遺跡が横断道関係遺跡)

遺跡の立地と環境

跡(8)があり、その他旧石器時代の遺跡には、淀川と荒川の合流点にある岸館遺跡や荒川上流の米ヶ森遺跡などがある。また、縄文時代の遺跡では、多量の土器・石器とともに中期の石組遺構が1基検出された岸館遺跡や中期～後期の土器・石器とともに3基の石組遺構が検出された西町後遺跡などが挙げられる。

半仙遺跡のある雄物川右岸の峰吉川地区には、それほど遺跡のまとまりはみられないが、遺跡の南西水田面には縄文時代晩期の岩瀬遺跡(30)があり、東側には小平遺跡(29)がある程度である。また遺跡の東側1.0kmには天王山式併行の土器片やアメリカ式石鏃を出土した中沢遺跡(40)があり、中世城館には半仙遺跡の西側1.5kmに湯ノ沢城(27)・石神館(23)・白岩城(24)などがある。

註1 秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第86集 1981(昭和57年)

註2 秋田県教育委員会 『秋田県遺跡地図(県南版)』 1987(昭和62年)

註3 (註2)によれば晩期となっているが、昭和62年の表採資料には縄文時代中期の土器片も含まれている。

註4 柏台遺跡は、昭和57年の緑地運動場公園造成に伴い発掘調査が町教育委員会によって行われているが未報告である。

註5 参考文献6によれば同館跡から縄文時代後期の遺物も出土している。

参 考 文 献

- 1 長山満天星 「西町後石器時代遺物発掘報告」 『荒川村郷土史資料第四集』 1956(昭和31年)
- 2 協和町教育委員会 『協和村郷土誌』 1968(昭和43年)
- 3 協和町教育委員会 『米ヶ森遺跡発掘調査報告書』 1977(昭和52年)
- 4 菅江真澄 「月の出羽路」 『菅江真澄全集第七巻』 未来社 1978(昭和53年)
- 5 西仙北町教育委員会 『刈布沢遺跡発掘調査報告書』 1980(昭和55年)
- 6 秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第86集 1981(昭和57年)
- 7 西仙北町教育委員会 『西仙北町文化財分布図』 1983(昭和58年)
- 8 秋田県教育委員会 「笹原台遺跡」 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第140集 1986(昭和61年)
- 9 秋田県教育委員会 『上雨堤遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第149集 1986(昭和61年)
- 10 秋田県教育委員会 『秋田県遺跡地図(県南版)』 1987(昭和62年)
- 11 秋田県教育委員会 『歴史の道調査報告XVIII 亀田街道』 秋田県文化財調査報告書第161集 1987(昭和62年)
- 12 秋田県教育委員会 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第166集 1988(昭和63年)

上野台遺跡

第1章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

遺跡は、西仙北町の中心地刈和野から国道13号をわずかに北上し、雄物川右岸で主要地方道本荘・西仙北町・角館線に左折し西に2 kmほどの上野台地区に所在している。主要地方道本荘・西仙北町・角館線から赤坂部落で町道赤坂・強首線に右折すると、眼前に平坦で広大な牧草地を見ることができ、町道はこの牧草地を南北に分断するように東西に走っている。遺跡の東側には、先の町道から分岐して北上する町道九升田向四号線が寺沢遺跡方向に向かって伸びており、遺跡は上野台のほぼ中央で2本の町道によって、南側と東側が囲まれた地域にあたる。台地北側は北西側から大きな開折谷が入り込んでおり、それに伴う大小の沢によって画された小舌状部が発達している。A・B・Cの各区は、これら小舌状部に立地しており、東からA・B・C区の順に並んでいる。A区は西側と北側に沢が入り込み、南側は標高60 mほどでほぼ平坦であるが、調査区内中央部より北側では、緩い傾斜地である。

B区は、A区より西160 mほどの西側に突き出た舌状部分にあり、北側から東側にかけては九升田沼に流れ込んでいる沢が取り囲み、西側はC区とを画する小沢となっている。標高は南側で60 m、北側で53 mほどである。

C区は、B区の西隣にあり、周囲に沢が入り込む西南から北東に細長く伸びる馬背状の部分に立地している。遺跡は中央部で標高55 mほどで北側の九升田沼に向かって標高を減じている。A・B・C区とも戦後に造成された牧草地であり、一部斜面は灌木のある原野である。

第2節 調査の方法

遺跡のグリッド打設は、既存の工事用中心杭S T A 392+00を起点MA50とし、それから磁北に沿う南北基線とこれに直交する東西基線を求め、これらの延長線によってA・B・C区の調査範囲内に4 m×4 mのグリッドを打設している。各区には、その区ごとに任意のグリッド杭を原点とし、またそれぞれ2箇所レベル原点杭を設けている。各区の原点杭としたグリッド杭とレベル原点杭のレベル数値は下記の通りである。

	原点杭	レベル 原点杭の標高	
A区	L F 65	BMA - 1 = 60.449 m	BMA - 2 = 59.253 m
B区	N E 73	BMB - 1 = 57.592 m	BMB - 2 = 55.071 m
C区	O A 60	BMC - 1 = 54.886 m	BMC - 2 = 55.066 m

室内に於ける整理は、遺構については実測図より第2原図を作成し、これをトレースしている。また遺物については、洗浄・注記の後に実測、拓影、写真撮影を行っている。

縄文時代の土器については下記の通り深鉢形土器を基本として各区共通の分類に拠っているが、時期的にまとまった資料が乏しく相当大まかな分類となっている。

I 群土器：縄文時代早期末葉～前期の土器

- 1 類 縄文を地文として太い沈線を施す。
- 2 類 縄文のみ施される土器で、a. 表裏縄文 b. 外面のみ縄文施文の土器とに分かれる。
- 3 類 太い縄文原体を用いる。

II 群土器：縄文時代中期の土器

- 1 類 大木7b式土器
- 2 類 大木8a式土器
- 3 類 大木8b式土器
- 4 類 大木10式土器
- 5 類 円筒上層C式土器
- 6 類 粗製土器

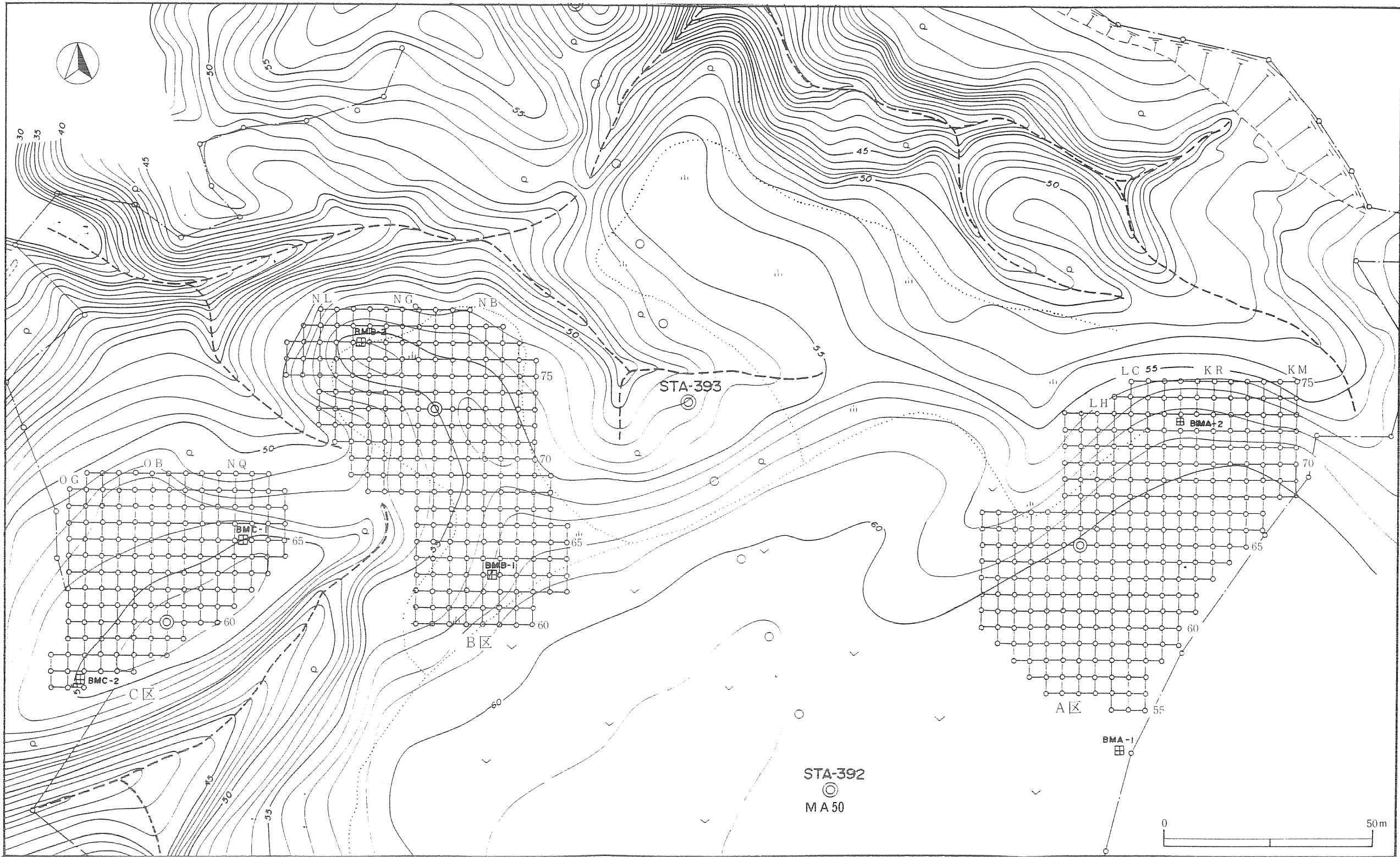
III 群土器：縄文時代後期の土器

- 1 類 後期初頭の土器であるが、施文様からして門前式・宮戸Ib式などと並行関係にあると考えられ、バリエーションがある。
- 2 類 後期前葉の十腰内I式の範疇に入るものである。
- 3 類 円形刺突の用いられる土器
- 4 類 粗製土器
- 5 類 深鉢形土器以外の器形を呈すると考えられるが、破片資料のため明確でない。

IV 群土器：縄文時代晩期の土器

- 1 類 大洞C₂式土器
- 2 類 大洞A式土器

V 群土器：底部資料を一括している。



第1図 地形・グリッド配置図

第3節 調査の経過

遺跡の調査は5月11日から開始され、6月20日までにトレンチ調査を行っている。トレンチ調査は、70,000㎡の西仙北サービスエリア予定地内全域を対象として行ったが、戦後の牧草地造成による攪乱が著しく結果的にはA・B・Cの3区に調査地域を限定している。各区とも6月24日より調査を開始したが、これ以前に機材・プレハブ等の搬入を終えており、またグリッド打設も6月22日より開始されている。以下各区ごとの調査の経過を述べる。

A区：6月下旬、調査区南部から表土剥ぎを開始する。また北西端部にトレンチを入れたが、若干の縄文土器片が出土しただけで遺構の確認はできなかった。

南部からの表土剥ぎでは、表土層下位から縄文土器・剥片が出土する。さらに6月27日にはKS62グリッドⅡ層上面で焼土遺構(SN01)が検出されたことからⅡ層上面での遺構確認に注意が払われた。またこの間には、弥生土器・須恵器なども出土している。

7月初旬、KT64・65グリッド周辺から縄文土器片がまとまって出土し始める。KR63・LB65グリッドを中心として焼土遺構が数基検出される(SN03～06)。またこの他にもSN07～11まで、焼土遺構の確認がされている。

7月中旬、7月15日には、KM68・69グリッドで住居跡を検出(SI13)、翌日には石囲炉を確認している。7月17日には土偶脚部の出土をみている。

7月下旬、LA・LB58グリッドにおけるSK17を始め多くの土坑の検出がなされる。この間に検出された遺構群の精査と写真撮影及び作図が行われる。Ⅰ層粗掘りもほぼ終了する。

8月初旬、Ⅱ層の掘り下げの開始とともに特に中央より北側で多くの土坑の検出がなされる。

8月中旬、8月17日SI37検出。遺物が伴う。

8月下旬、各遺構の作図と写真撮影が調査の中心となって進められる。8月25日深掘りなどを残し撤収作業に入る。

B区：6月下旬、調査範囲内の草刈り、灌木の伐採などと併行して、北側から表土剥ぎを開始する。この部分では表土10cmで地山に達するため、遺構が削平を受けているものと判断される。6月26日NF42グリッドで石棒検出、MT68グリッドでは土坑と思われる落ち込みを確認している。6月29日NC76グリッドから土器・石器が比較的まとまって出土する。

7月初旬、7月2日NC79・76グリッドで落ち込みを確認、MR66では土坑(SK101)を検出ししている。7月4日にはNF73グリッドでSW103、7月8日にはSW103に切られる竪穴住居跡(SI104)が確認される。

上野台遺跡

7月中旬、先のS I 104の炉が地床炉であることを確認する。またNC 61グリッドから遺物がまとまって出土する。ほぼ全域の粗掘りを終了する。遺構数が極めて少ない。

7月下旬、遺構図面の作成、基本土層図の作成などを中心とする。8月3日調査を終了する。

C区：6月下旬、調査区の雑草の刈払い、倒木の除去と併行して西側より表土除去。表土は10cmで地山に達している。西側より縄文土器・石器(搔器・石鏃)が出土している。

表土剥ぎが南側に移るにつれ遺物も出土する量が多くなる。北側OE 63グリッドでSR 203を検出している。

7月初旬、S I 201・202を確認し、遺構の精査と併行して北側から北東部の表土剥ぎを継続して行う。

中央部平坦部で、SK 204・205・209、S I 206等の検出が相次いでなされ、写真撮影や作図に主力を注ぐ。

7月中旬、東西に走る溝状の落ち込みについて、トレンチを設定したところ多量の土器片が出土し、一応捨場(ST 221)として調査を進めることとする。粗掘りは北東部のみに移る。

7月17日表土剥ぎが終了する。

7月下旬、SK 218・SK 219とした掘り込みが柱穴であることが判明し、これによりSB 241を検出している。

8月初旬、各遺構の精査を終了し、図面作成に主力が注がれる。

ST 221の精査によって3層からは縄文中期末葉から後期初頭の土器が、またその下の5層からは表裏縄文の土器が出土することを択える。

8月6日SK T 243が確認される。

8月20日専門指導員白石建雄氏が来跡する。ST 221は土層観察から自然の断層で生じた谷(断層谷)と考えられるとの意見がなされた。

8月24日パレオ・ラボ社による花粉分析用と、¹⁴C年代測定用試料の採取が行われている。

A・B・C各区の調査経過の概略は上記の通りである。この間各区を通して削平された遺構が多く、遺構の全容を把握するのに担当者は難渋した。また遺構精査時期の7月下旬から8月上旬には梅雨に悩まされ常に精査の繰り返しをする遺構もあった。さらに8月18日には、記録的な集中豪雨によって西仙北町内は冠水し、遺跡に近付けない日もあった。こうした経過を経て、8月27日に全ての調査を終了し撤収を行った。

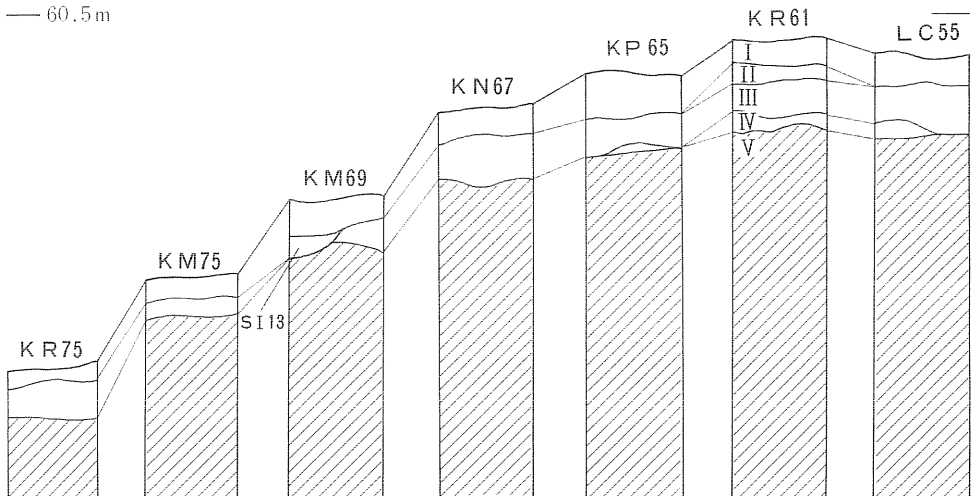
第2章 A区の調査の記録

第1節 A区の層序

調査区全面に、牧草地造成時の攪乱が及び層序は決して安定しているとは言えない。遺物包含層、遺構確認面も層としては把握できなかった。以下はA区の層序の概略である。

- I層 黒褐色土(7.5Y R3/2)。草根の入る比較的しまりのある土で調査区南側で20cm、北側では10cmほどの厚さがあり地山の粒子も含まれる。遺物は各時期のものが混在して出土しており、下位層と比べても出土量が多い。
- II層 暗褐色土(7.5Y R3/4)。遺跡全体には存在しておらず、KR61グリッドからKL70グリッドにかけて、厚さ10cm前後で存在している。草根も入り、地山粒子も混入する。I層よりもややしまりのある土で、遺物はI層よりも少ない。
- III層 暗褐色土(7.5Y R3/3)。II層とそれほど変わらないが、視覚的には黒く見える。II層よりもしまりがなく、地山もブロックとなって混入している。遺跡全面に存在しており、上面で焼土遺構の確認がなされている。
- IV層 地山漸移層で、地山もブロック状に混入している。
- V層 褐色土(7.5Y R4/6)。地山で、竪穴住居跡・土坑はこの上面で確認できる。
- VI層 にぶい黄褐色土(10Y R7/4)。V層と同じであるが下位ほどシルト質になる。
- VII層 礫層 径1～4cmの凝灰岩質の円礫からなる。

— 60.5m



第2図 A区基本土層模式図

第2節 検出遺構と遺物

1 縄文時代

(1) 検出遺構と出土遺物

① 竪穴住居跡

SI 13(第4・7・8図、図版2・3・11~13)

KL・KM68・69グリッドに位置する。Ⅲ層上面で炭化物の広がりを確認したが、明確な掘り込みはⅣ層上面で検出した。南東端部は調査区外のため、全体の4/5程度を調査したものである。現状では住居跡の北東側の壁は後世の削平によってほとんど消失しているが、長径5.0m前後、短径4.4m前後の楕円形プランをとるものと推定できる。長軸方向はほぼN-55°-Wである。本住居跡はⅤ層の地山土を掘り込んで床面としており、最も残りの良い南西側では、壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは約25cmを測る。

住居中央には60×50cm前後の楕円形に石を組み、その中に深鉢を据えた石皿土器埋設炉が存在する。また炉の東南側には地山のローム土を削り残した高さ8cm前後の高まりがあり、さらにその南東側に接して、径45cm、深さ75cmのピットが掘り込まれている。このピット内の覆土には炭・焼土の混入が著しい。このピットおよび地山の高まりは住居の長軸上に炉と一直線に並び、炉と地山の高まりとの間には良く焼けしまった焼土(17層)が堆積しており、これらのことからこのピットおよび地山の高まりは炉と密接に結び付いた機能を有するものと考えられる。

柱穴は4個で、径25~45cm、深さ25~45cmを測る。柱間距離は住居のプランに対応して、長軸方向が1.9~2.1m、短軸方向が1.4~1.5mとなっている。壁柱穴、壁溝等は存在しない。

本竪穴住居跡の覆土は全体に比較的大形の炭化物を含み、中央部の炉周辺では焼土の混入が著しい部分もある(14・16層)が、総体的に均質で基本層のⅢ層とは異なっている。これらのことから本竪穴住居跡は周辺からの自然流入土によって埋没したのではなく、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

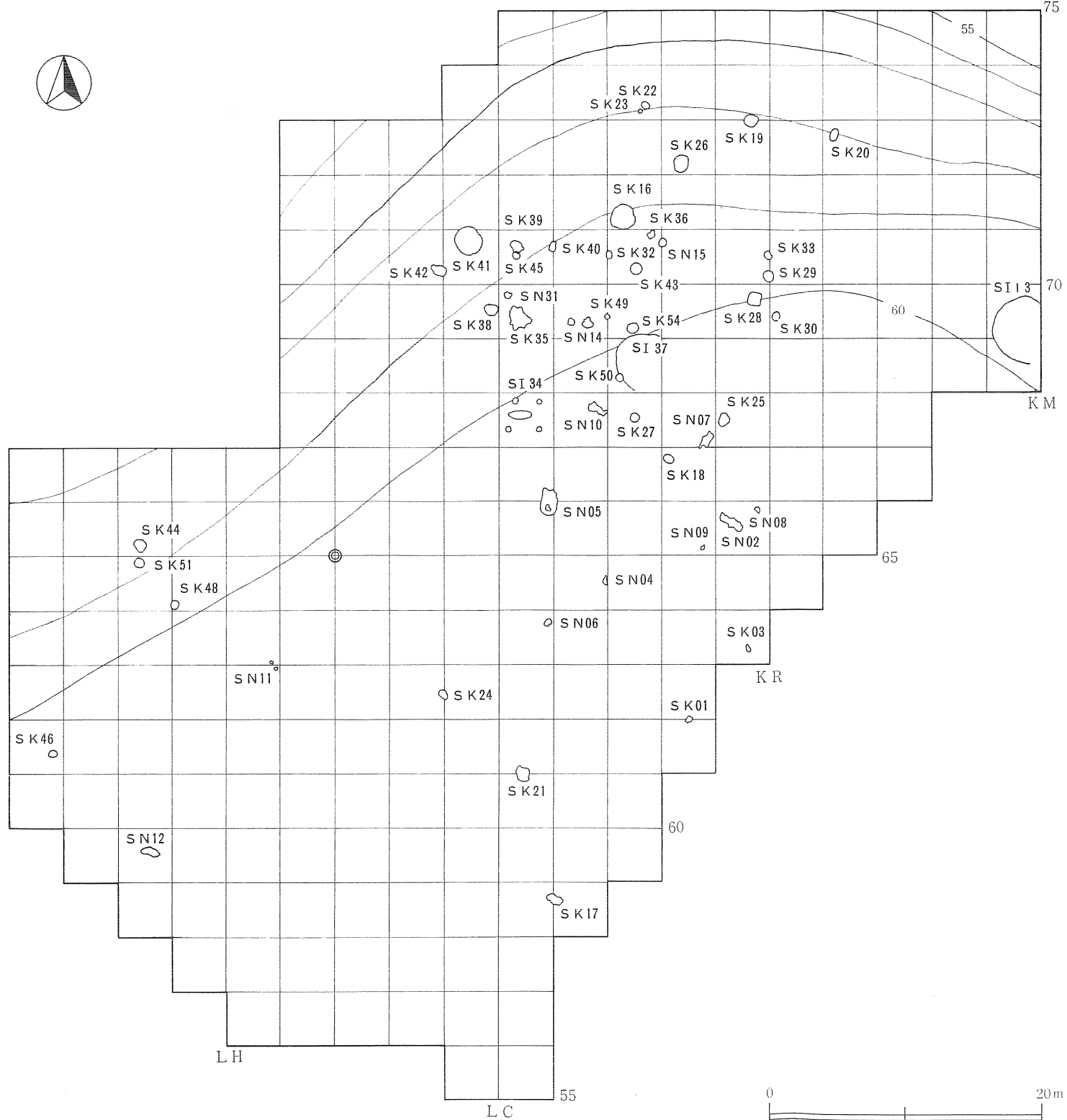
出土遺物には少量の土器および石器がある。炉の埋設土器は口縁部を欠くⅡ群3類の深鉢である(1)。RL縄文地に沈線による波状文と二本単位の直線文とを垂下している。覆土中からも同類の深鉢の破片が若干出土している(2~5)。出土石器には二次加工ある剥片(S1)、石核(S2)、礫器(S3)、砥石(S4)、石皿(S5)各1点、および剥片6点がある。このうち石皿は床面直上から出土し、他は覆土中からの出土である。S1・2は頁岩製である。

本竪穴住居跡は埋設土器から縄文時代中期中葉の太木8b式期に属する。

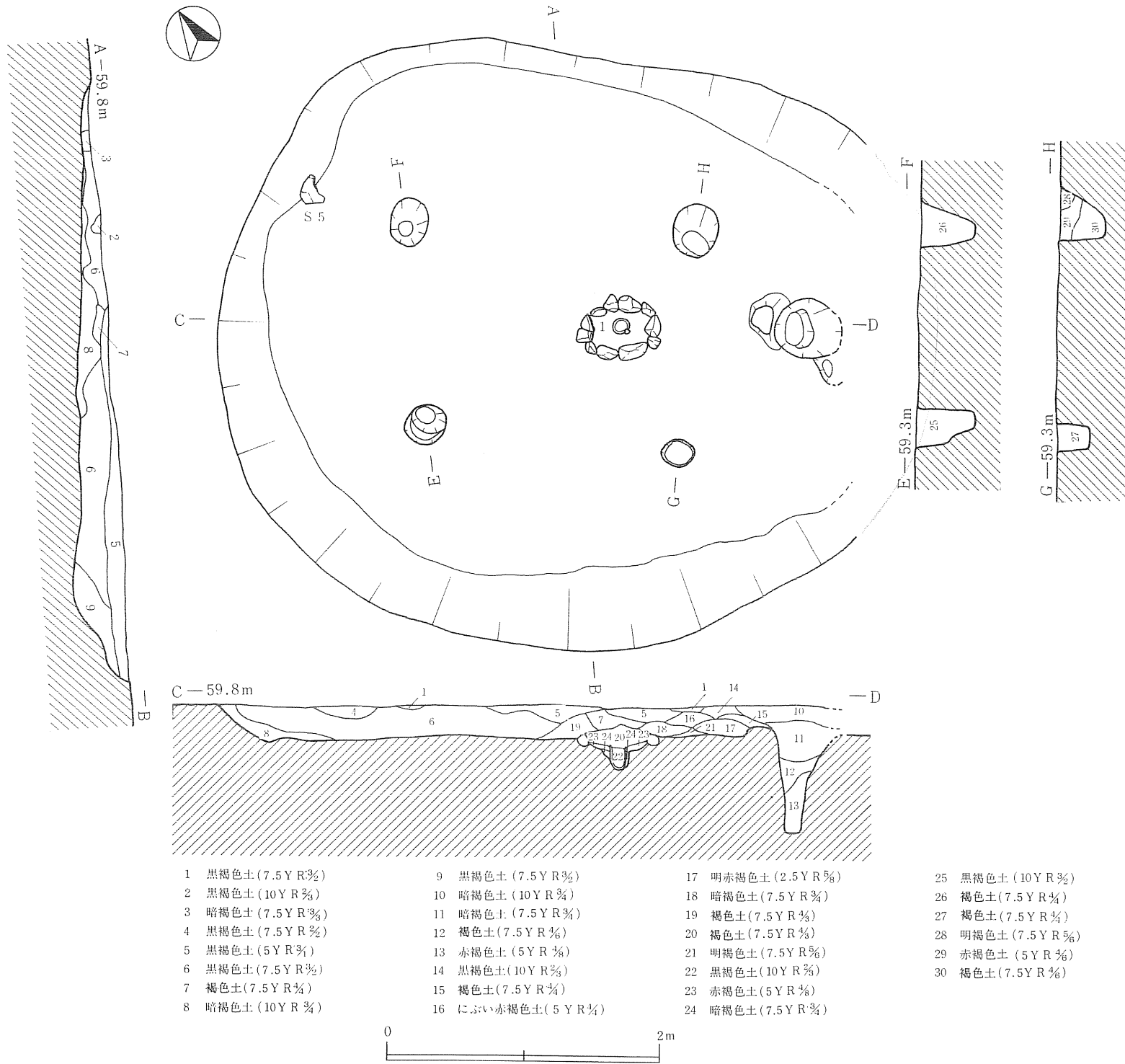
SI 37(第5・9・10図、図版4・11~13)

KT68グリッドを中心に一部KT69グリッドにかけてⅢ層中で確認した。西南端ではSK50

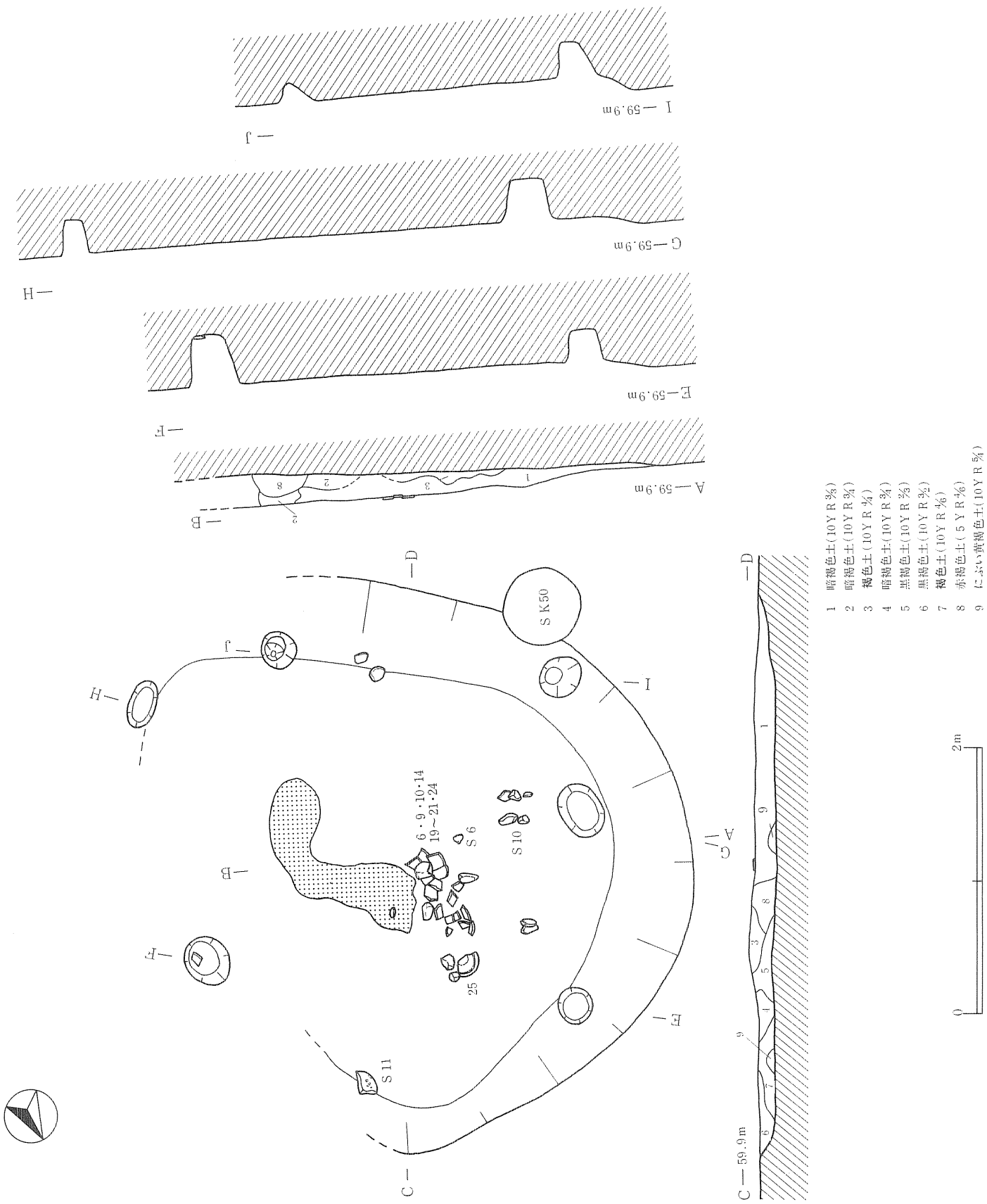
75



第3図 A区遺構配置図



第4図 SI 13 竪穴住居跡



第5図 SI 37竪穴住居跡

土坑によって切られている。V層への掘り込みは浅く、確認時には東端および南端は既にV層上面まで掘り下げていたため、この部分では壁の立ち上がりを検出できなかった。現状からは長径5.0m前後、短径4.0m前後の楕円形プランをなすものと推定でき、その長軸方向はおよそN-53°-Wである。検出面から床面までの深さは最大で約25cmを測り、壁は垂直ではなく、緩やかに立ち上がっている。壁溝は認められない。床面中央東寄りには厚さが16cmを越える大形の焼土塊(8層)が堆積しており、明瞭な焼土面は確認できなかったが、中央部に地床炉が存在したものと推定される。柱穴は壁際に計6個を検出した。径28~45cm、深さ15~40cmとその規模は一様ではない。住居内の覆土は全体に炭化物を少量含むが、Ⅲ層に類似しており、基本的に自然堆積土と考えられる。

遺物は主に覆土上位からまともに出てくるが、縄文時代中期中葉から後期前半のものが混在している。6~9はⅡ群3類の深鉢である。6は4単位の波状口縁をなし、隆線によって渦巻文を中心とした文様が描かれている。10はⅡ群4類の深鉢である。頸部が逆「く」の字形に内屈し、頸部の上部に沿って横位の連続刺突文が加えられ、胴部にはL縄文が横走する。11~16はⅢ群1類の有文深鉢である。11は口縁部が「く」の字形に外反し、頸部から胴部にかけて2条の沈線が施され、沈線間に刺突が加えられている。胴部の地文はRL縄文である。12・13は沈線による区画内に前者はRL縄文、後者はLR縄文が斜行している。14・15は同一個体である。口縁部には小さな山形突起が付き、突起下には沈線によるS字状文が施され、口縁上部には円形の刺突列がめぐっている。16は沈線による区画内に条線が縦走する。17はⅢ群3類の有文深鉢の胴部片で、全面に刺突文が施されている。18はⅢ群2類で、沈線による曲線的なモチーフ内にLR縄文が充填されている。19~23はⅢ群4類に属する縄文時代後期の粗製の深鉢である。24と25は縄文時代後期の深鉢の底部(V群)である。24は13と同一個体で、底面に網代痕を残す。6・9・10・14・19~21・24はまともに出てくるが、調査時には覆土内での出土層位差は確認できなかった。出土石器には石匙(S6)、二次加工ある剥片(S7)、微小剥離痕ある剥片(S8)、凹石(S9)、敲石(S10)、台石(S11)がある。これらの石器はいずれも覆土中からの出土である。S6~8は頁岩製である。

本竪穴住居跡は遺物の出土状況からは縄文時代中期中葉大木8b式期以前に廃絶され、以後周辺からの流入土によって自然に埋没する過程で、遺物が住居廃絶後の凹みに廃棄されたものと推定される。

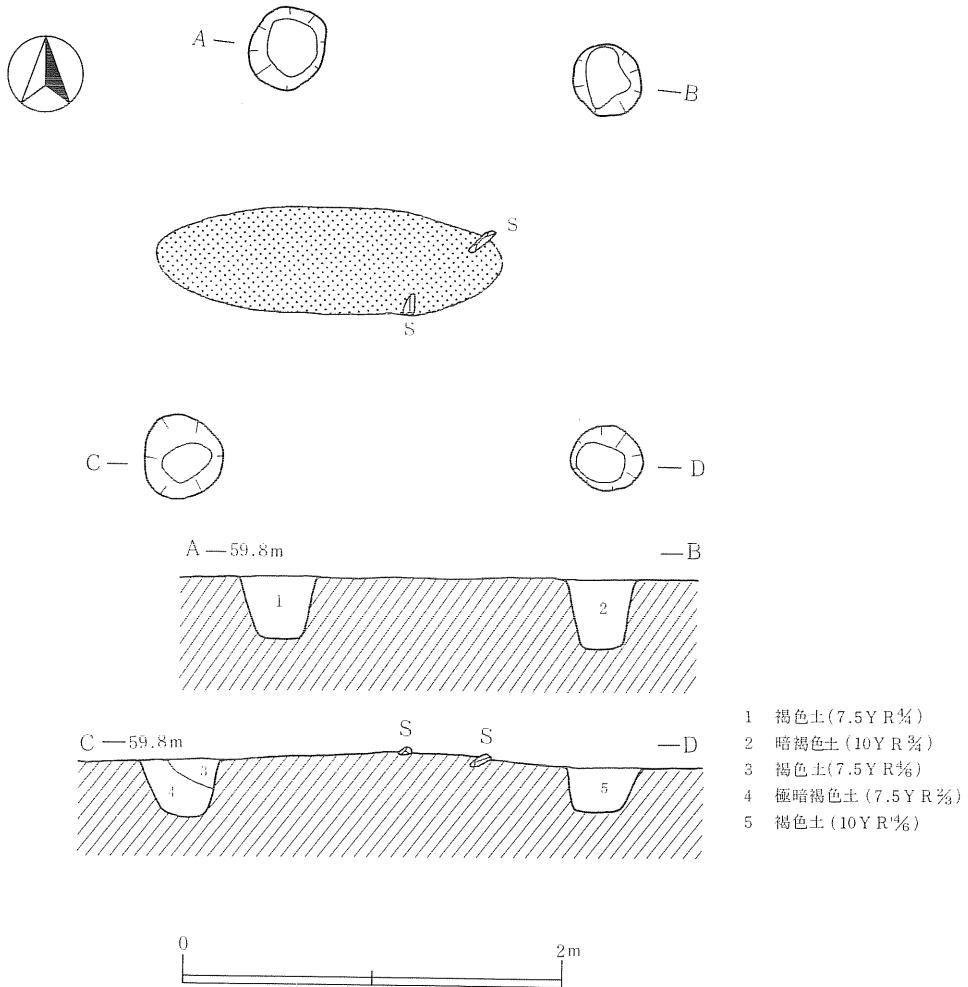
SI 34(第6図、図版4)

LB67グリッドに位置する。Ⅲ層上面で焼土の広がりの一部確認し、周辺の掘り込みの有無を検討したが、確認できなかった。そのため土層観察用のベルトを設定し、V層上面まで掘り下げを行った。V層上面およびベルトの土層の観察でも明瞭な掘り込みは確認できなかったが、

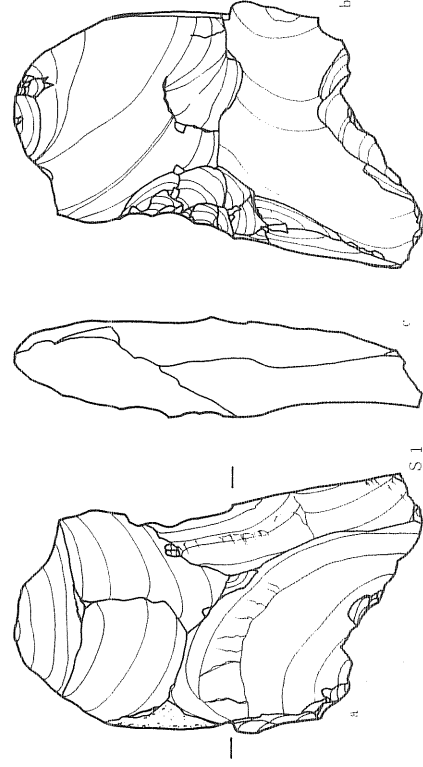
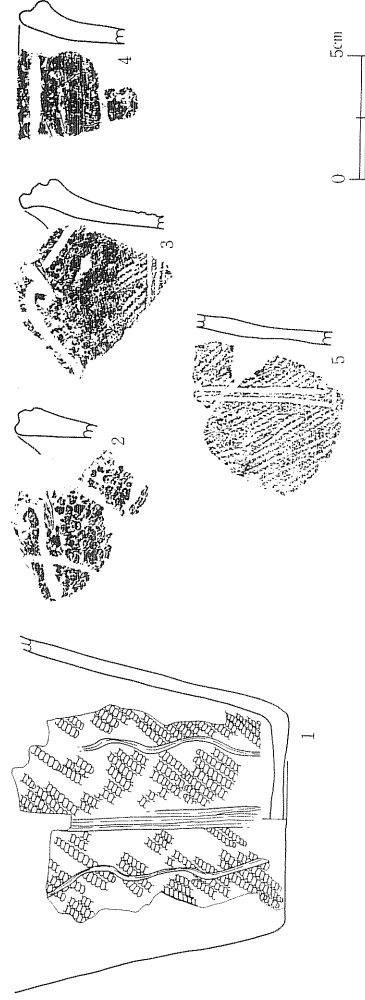
上野台遺跡

焼土を取り囲むように位置する4個の柱穴を検出したこと、焼土の分布がV層上面まで及んでいることから本来掘り込みを有する竪穴住居跡であったと判断した。焼土は床面と推定されるV層上面から最大10cmの厚さでおよそ180×60cmの範囲に広がっている。比較的しまりが弱く、二次的な移動を受けたものと考えられる。V層上面には明瞭な焼土面を確認できなかったが、焼土付近で2点の垂角礫を検出したことから、本来石囲炉が存在した可能性が推定される。柱穴は径40～45cm前後で、検出面からの深さは25～40cm前後を測る。柱穴間の距離は南北間が2.1～2.3m、東西間は北側1.7m、南側2.3mである。これらの柱穴配置から本竪穴住居跡は径5m前後の床面規模を有する可能性がある。

本竪穴住居跡周辺にはⅢ群2類の土器が散在している。しかし、住居跡に伴うものか明らかではなく、本住居の時期も不明である。



第6図 SI 34 竪穴住居跡

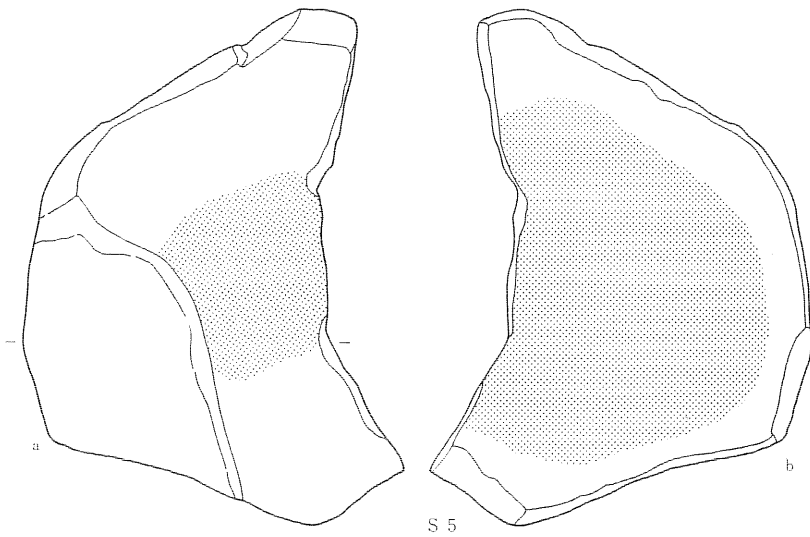
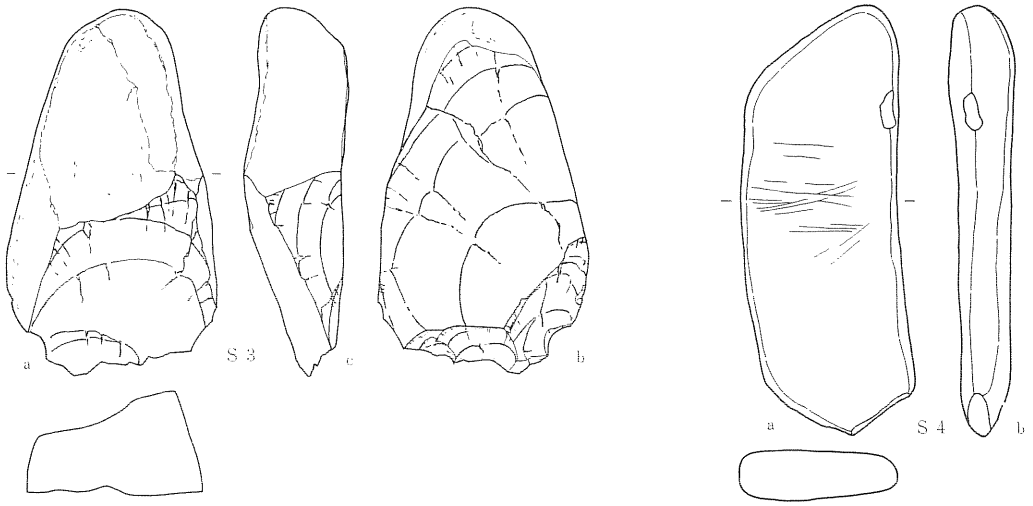


1~5・S1・2・S13

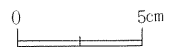
S2



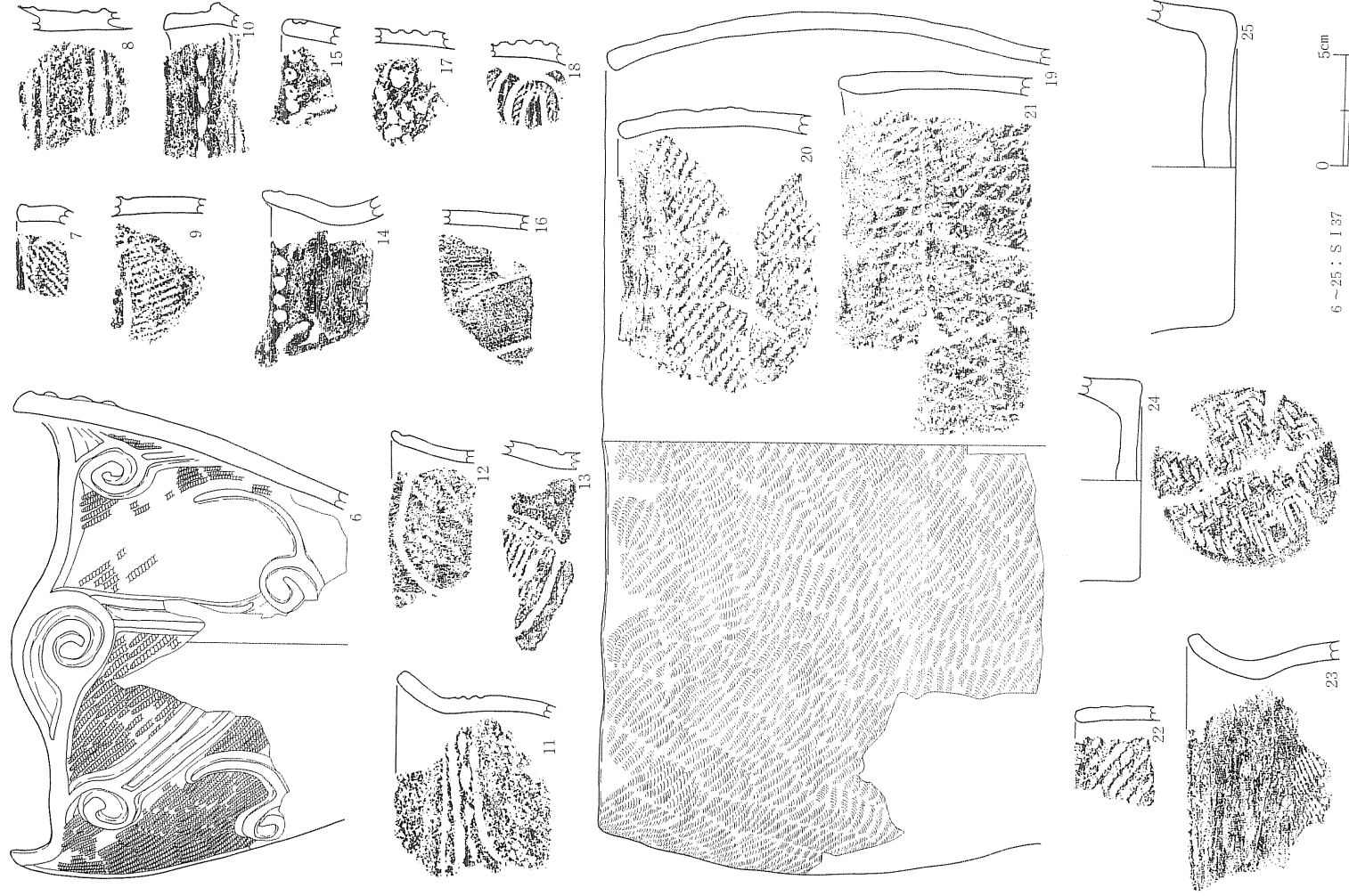
第7図 遺構内出土遺物(1)



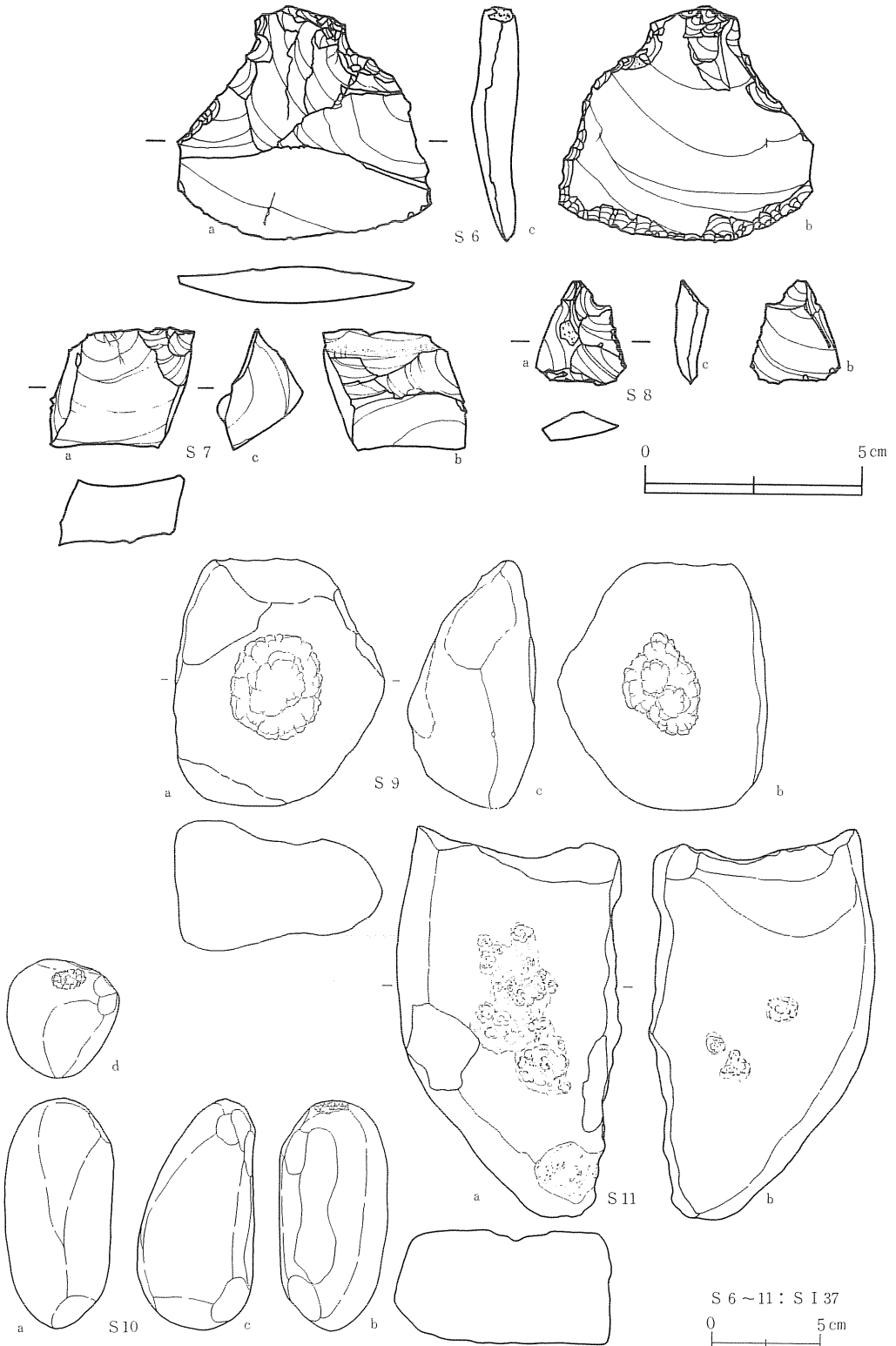
S 3 ~ 5 : S 113



第 8 図 遺構内出土遺物 (2)



第9図 遺構内出土遺物(3)



第10図 遺構内出土遺物(4)

②土 坑

SK16(第11・15図、図版5・15)

K T71グリッド西南部のV層上面で検出した。東西径180cm、南北径175cmのほぼ円形プランをなす。検出面から底面までの深さは最大で22cmを測り、壁は斜めに立ち上がっている。覆土は大きく上層(1層)と下層(2~4層)にまとめることができる。いずれも自然堆積と考えられ、後述するように上層と下層では出土遺物に時期差が認められる。

出土遺物はいずれも土器である。26・27はⅢ群4類に属するRL縄文施文の粗製深鉢である。28~36は胎土中に繊維を含むI群土器である。28~30はヘラ状工具による沈線文が施されている(1類)。28は口唇部内側に刺突が施されている。31~36は縄文施文のみの2類bである。このうち35には縄文施文後にヘラ状工具による浅い沈線様のナデの痕が1条認められ、本来1類に属する可能性がある。縄文原体の撚りは29~34がLR、35・36がRLである。遺物の出土層位をみると26・27・32が1層、29・31・36が4層からの出土であり、下層からⅢ群土器の出土はない。

以上の遺物の出土状況から、本土坑はI群土器の時期(縄文時代前期)に属し、縄文時代後期のⅢ群土器は土坑埋没過程で流入したものと考えられる。

SK49(第11・15図、図版5・14・15)

K T69グリッドからL A69グリッドにかけてのV層上面で検出した。掘り込みの平面形は東西径40cm、南北径35cmのほぼ円形をなし、検出面から底面までの深さは30cmを測る。壁は比較的急に立ち上がり、全体の形態は柱穴様を呈している。覆土は周辺から流入した堆積状況を明瞭に示さず、1層上面では土器が面的にまとまって出土していることから、人為的埋土であろう。出土遺物のうち37はⅡ群4類の深鉢である。4単位の小波状口縁をなし、頸部は逆「く」の字形に内屈する。波頂部の外面には弧状の短沈線が、内面には円形の刺突が施されている。頸部上部には横位の刺突列がめぐり、胴部はLR縄文が縦方向に回転施文されている。38・39は同一個体で、Ⅱ群6類の粗製の深鉢である。LR縄文が横走あるいは斜走する。

本土坑は出土土器から縄文時代中期末葉に属する。

SK25(第11・15図、図版5・15)

K R67グリッド西端のV層上面で確認した。現状で80×70cmのほぼ円形プランをなし、確認面から底面までの深さは8cm前後を測るにすぎない。しかしながら、掘り込みの確認面よりも10cm以上上位に本土坑に伴うとみられる土器が存在することから、本来の掘り込み面はより上位にあったものと推定できる。覆土は地山のロームブロックを混在し、覆土と地山土との境界は漸移的であり、自然流入土と考えられる。遺物はいずれも掘り込み確認面よりも上位でまとまって検出した。40~42は同一個体で、口唇部は丸く調整され、口縁下部に断面が丸みを帯びた隆

上野台遺跡

帯が1条めぐる。隆帯下にはL R縄文が縦方向に回転施文されている。胎土は本遺跡出土のⅡ群3類の一部のものと類似するが、その時期は不明である。43はⅢ群1類に属する。頸部に水平に連鎖状貼付文をめぐらし、さらに貼付文上には一對の円形刺突が施されている。貼付文の上位にはヘラ状工具による沈線文が描かれる。胴部にはL R縄文が縦位回転施文されている。44・45は40～42と同一個体とみられる。46・47はⅢ群4類に属し、46はL縄文の縦位回転施文、47は縦方向の条線が施されている。48はスタレ状圧痕を底面に残す。

本土坑は遺物の出土状況から縄文時代後期初頭に属すると考えられる。

S K 42(第11・16図、図版14)

L C 70グリッドからL D 70グリッドにかけてのV層上面で検出した。平面形は長軸110cm、短軸80cmの北西側に張り出しを有する円形を呈する。断面形は張り出し部側が中心に向かって斜めに落ち込み、反対の南東側の底面は平坦で、壁は若干底に向かって広がっている。覆土は大きくは1・2層、3層、4層の3群に分かれる。1層は炭化物を多量に含み、3層は下位に土器片を含み、いずれも褐色土が大量に混在する。4層は下底に小礫を含む。これらの層はいずれも人為的埋土の可能性が強い。遺物には3層からまとまって出土した土器がある(49)。底部を欠き、全周の1/3程度を検出したにとどまるが、4単位の橋状把手をもつものと推定される。把手の両側には連続して刺突が施され、中央には径1.3cm前後の穿孔がある。口縁部は逆「く」の字形に内屈し、把手の中間には上面に沈線をいれた「ノ」の字形の粘土紐が貼り付けられている。胴部にはL R縄文の縦位回転施文の地文に沈線によって横位および縦位に展開する曲線文様が描かれ、文様内が磨消されている。文様の構成は明確ではないが、把手の下方の磨消し部は底部付近まで垂下している。Ⅲ群1類に属する。

本土坑は出土土器から縄文時代後期初頭に属する。

S K 46(第11・16図、図版16)

L K 61グリッド東南部に位置する。Ⅲ層中で若干の土器片の集中を認めたため、ベルトを設定して掘り下げた結果、V層上面でわずかに掘り込みを検出した。ベルト設定面から底面までの深さは約20cmを測り、ベルトの土層断面からは壁は斜めに立ち上がり、ベルト設定面で径45～55cmの楕円形プランをなすものと推定できる。覆土はⅢ層に類似し、自然堆積土と考えられる。出土遺物には土器と頁岩製の剥片2点がある。50～54は同一個体で、口縁はかすかに内湾し、緩やかな波状をなす。口縁下には刻み目を施した隆帯を1条めぐらし、胴部には縦走るR燃糸文上に波頂部から沈線による紡錘文状のモチーフを描いている。Ⅲ群1類である。

本土坑は出土土器から縄文時代後期初頭に属する。

S K 19(第11・16図、図版16)

K R 72・73グリッドのV層上面で検出した。平面形は長径95cm、短径85cmの楕円形を呈する。

検出面から底面までの深さは約45cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土はいずれも地山土の混入が顕著であり、長期にわたる自然堆積土とは考えられず、人為的埋土と推定できる。遺物は乏しく、土器の小片がわずかに出土したのみである。55は縦方向に走る地文が認められるが、摩滅が著しく、原体は不明である。56はL縄文が施文されている。両者ともⅢ群4類に属するが、小片のため、これをもって本土坑の時期を決することは困難である。

S K 21 (第11・16図、図版16)

L B 60・61 グリッドに位置する。V層上面での検出である。南北長97cm、東西幅91cmの不整の方形プランをなす。検出面からの深さは25cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。覆土は3層に分かれる。1・2層はそれぞれⅠ・Ⅲ層に類似し、3層は壁の地山土の崩壊土とみられ、いずれも自然堆積土と考えられる。遺物は土器の小片が1点出土したのみである。57はR捺糸文地に沈線が施されている。Ⅲ群に属すると思われるが、小片のため明確ではない。

S K 26 (第12・16図、図版6・16)

K S 72 グリッド南側V層上面で検出した。長さ120cm、幅105cmの隅丸方形の平面形を呈する。長軸方位はN-8°-Wで、ほぼ北を向く。底面は比較的凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がっている。検出面から底面までの深さは約25cmである。覆土は2層に分かれる。1層は炭化物、地山土のブロックを含み、遺物は主に本層から出土する。2層も地山土のブロックを含み、両層とも人為的埋土と判断される。出土遺物には土器(58~64)の他に耳栓(65)がある。58~60はⅡ群3類に属するが、いずれも摩滅が著しい。61~63はⅢ群4類に属し、61・63はRL縄文、62はLR縄文が施文されている。64は底面に網代痕を有する。65は両面に密な刺突を施した耳栓である。Ⅲ群土器に伴うものと考えられる。

本土坑は隅丸方形の平面形をとること、覆土が人為的埋土と判断されること、出土遺物に耳栓を含むことから土墳墓の可能性が強いものと思われる。その時期は主体となる出土土器から縄文時代後期前半と考えられる。

S K 32 (第12・17図、図版6・17・18)

K T・L A 70 グリッドの中央のV層上面で検出した。50×40cmの楕円形プランを呈し、長軸方向はN-19°-Wである。検出面からその上位にかけては台石および3個の垂角礫が配されている。底面は若干の凹凸があり、検出面から底面最深部までの深さは約15cmを測る。礫の検出状況からは本土坑の本来の掘り込み面はより上位にあったものと思われる。覆土には地山土と炭化物が混在し、人為的埋土と判断できる。遺物には土器片と台石がある。66はⅢ群4類に属し、R捺糸文が縦走する。S12は土坑上位に配された台石で、片面に2個の凹みを有する。

本土坑は上位に配石をもつこと、覆土が人為的埋土と見られることから土墳墓の可能性が高い。Ⅲ群4類土器の出土は必ずしも時期決定の根拠とはならないが、土坑の形態からは出土土

器と近接した時期が想定できる。

SK35(第12・17図、図版17・18)

L B69グリッド中央西南寄りに位置する。V層上面で検出した。平面形は180×130cmの不整形をなし、掘り込みも不整で、一部で段をなしながら斜めに落ち込んでいる。検出面から底面までの深さは55cmを測る。覆土は7層に分かれる。1・2層は焼土層であり、2層が特に赤化が著しい。3層以下には焼土を含まないが、地山土のブロックを混入し、人為的埋土である可能性が高い。遺物は主に3層以下からの出土である。67～69はⅢ群4類の粗製土器である。67はわずかに内傾する無文の口縁部である。68はr撚糸文が横走する。69はR L R縄文が縦位回転施文されている。70は底面に網代痕を残す。S13は石鏃である。基部の片側を折損するが、基部にはほとんど二次加工が施されており、両面に素材の剝離面を残している。S14は二次加工ある剥片で素材の背面に二次加工が施されている。S15はa面左側縁に微小剝離痕を有する。これらの石器はいずれも頁岩製である。

本土坑は出土遺物から縄文時代後期前半に属する。

SK36(第12・18図、図版7・17)

K T70グリッド東北部に位置する。V層上面で確認した。平面形は55×45cmの不整の隅丸方形をなす。長軸方向はN-53°-Eである。壁は南西側では緩やかに立ち上がるが、北東側ではほぼ垂直に立ち上がっている。検出面から底面までの深さは13cmを測るが、底面南側には径24cm、底面からの深さ6cmの落ち込みが存在する。また土坑確認面の上位には土器片が比較的まとまって出土しており、本来の掘り込み面はより上位に存在するものと考えられる。覆土は2層に分かれる。2層は地山土を多量に含み、人為的な埋土とみられ、1層も炭化物、地山土を含み、人為的埋土の可能性が高い。出土土器はいずれもⅢ群4類に属する。71～73は同一個体である。口縁が若干内湾し、R L縄文が縦位回転施文されている。74は摩滅が著しいため不明確ではあるが、L R縄文が回転施文されているものとみられる。

本土坑は出土土器から縄文時代後期前半に属すると考えられる。

SK43(第12・18図、図版17)

K T70グリッド中央やや南寄りに位置する。V層上面での確認である。南北径75cm、東西径70cmのほぼ円形プランをなす。掘り込みは底に向かって若干広がり、検出面から底面までの深さは約25cmを測る。覆土は4層に分かれる。1層には炭化物の混入が顕著であり、焼土粒も若干含んでいる。2～4層にも炭化物が若干混在し、2・4層には地山土のブロックを含み、これらの覆土は人為的埋土である可能性が高い。出土遺物には土器の小片がある。75・76はともにⅢ群4類に属し、前者には網目状撚糸文が、後者にはR L縄文が施されている。

本土坑は出土土器から縄文時代後期前半に属する可能性があろう。

SK45(第12・18図、図版10・17)

LB70グリッド中央のV層上面で確認した。北端部を弥生時代の土坑SK39によって切られている。現状からは径約45cmの不整円形プランをなす。掘り込みはすり鉢状で、検出面から底面までの深さは18cmを測る。覆土は炭化物等は含まず、自然堆積と思われる。覆土中からは同一個体の土器片の出土をみた。77は口縁が内湾し、胴部が張る器形をとる深鉢である。RL縄文原体の縦方向回転施文を地文とし、口縁部に平行沈線によって一對の連弧状のモチーフが描かれている。この連弧状のモチーフは一對のみで口縁をめぐる。Ⅲ群4類である。

本土坑は出土土器から縄文時代後期前半に属する。

SK50(第13・18図、図版7・17)

KT68グリッドの西南側に位置する。Ⅳ層からV層上面にかけての検出である。竪穴住居跡SI37を切っている。直径約60cmの円形プランを呈し、壁は比較的急に立ち上がり、検出面から底面までの深さは15cm前後である。覆土は炭化物を若干含み、中位からは土器片が出土している。78～81は同一個体でLR縄文が施されている。Ⅲ群4類である。

本土坑は出土土器より縄文時代後期前半に属する。

SK54(第13・18図、図版8・14・18)

KT69グリッド南側に位置する。V層上面での確認である。直径およそ70cmのほぼ円形プランをなす。壁は緩やかに立ち上がり、底面径は40cm前後である。検出面から底面までの深さは約25cmを測る。覆土は2層に分かれる。1層は地山土を若干含み、2層中からは遺物が集中して出土する。82は口縁が内湾し、胴部が張る器形をとる深鉢である。口縁部から数本単位の沈線によって曲線的な文様が垂下されるが、規則性に欠ける。Ⅲ群4類である。S16は両面および側面に凹みをもつ凹石である。

本土坑は出土遺物から縄文時代後期前半に属する。

SK23(第13・18図、図版8・17)

KT73グリッド南側のV層上面で検出した。直径25cm、深さ15cmの柱穴状の掘り込みである。覆土はI層に類似し、上位からは台付き鉢の破片が出土している。83はⅡ群に属する小片で、混入と考えられる。84はⅣ群1類の台付き鉢である。鉢部にはLR縄文が施され、台部の下端には浅い凹線が1条めぐっている。

本土坑は出土遺物から縄文時代晩期後半に属する。

SK03(第13図、図版8)

KR63グリッドⅢ層上面で確認した。45×20cmのやや不整の楕円形プランをなす。掘り込みは浅く、楕形である。検出面から底面までの深さは最大で6cmを測る。覆土は2層に分かれる。1層は赤化の弱い焼土である。2層に焼土は認められないが、炭化物を混入する。両層とも人

上野台遺跡

為的な埋土であろう。出土遺物はない。

S K 17(第13図)

L A・L B 58 グリッド中央に位置し、V層上面で確認した。平面形は125×65cmの不整楕円形をなす。底面は平坦でなく、凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。検出面から底までの深さは最大で14cmを測る。覆土は2層に分かれるが、総体としてI層に類似し、自然堆積と思われる。遺物は出土していない。

S K 18(第13図)

K S 66 グリッド北西部に位置する。V層上面での検出である。長径が70cm、短径が60cmの楕円形プランをなし、掘り込みは楕形で、検出面から底までの深さは16cmを測る。覆土はI層に類似し、自然堆積土と推定される。遺物は出土しなかった。

S K 20(第13図)

K P 72 グリッド北西部のV層上面で確認した。平面形は長軸80cm、短軸55cmの楕円形をなす。長軸方向はN-21°-Eである。底面はほぼ水平で、確認面からの深さは12cm前後である。覆土には炭化物をわずかに含むが、遺物の出土はない。

S K 22(第13図)

K T 73 グリッド東南部のV層上面で検出した。長径60cm、短径40cmの楕円形プランを呈し、長軸方向はN-81°-Wである。検出面から底面までの深さは20cmを測り、壁はすり鉢状に立ち上がっている。覆土は地山土を若干混入し、底面には小円礫を数点含んでおり、人為的埋土の可能性はある。遺物は検出されなかった。

S K 24(第13図)

L C 62 グリッドからL D 62 グリッドにかけてV層上面で確認した。平面形は70×55cmの楕円形を呈し、底面はほぼ平坦で、確認面から底面までの深さは約15cmを測る。覆土は2層に分かれるが、I・III層と類似し、自然堆積の可能性が認められる。出土遺物はない。

S K 27(第13図)

K T 67 グリッド中央のV層上面で検出した。直径60cm前後の円形プランをなし、底面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。検出面から底面までの深さはおよそ15cmである。覆土は2層に分かれ、ともにIII層に類似し、自然堆積土と思われる。出土遺物はない。

S K 28(第13図)

K R 69 グリッド東北部のV層上面で確認した。平面形は一辺約85cmの正方形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、確認面から底面までの深さは15cmを測る。覆土は2層に分かれる。1層は焼土・炭化物を若干含み、2層はV層に類似する。両層ともしまりが弱く、人為的埋土とみられる。覆土中からは時期不明の土器小片が1点出土しているが、本来、本土坑に伴うものか

は不明である。

S K 29(第14図)

K Q・K R 70グリッド南端のV層上面で検出した。西半のみの検出であるが、現状から85×70cm程度の楕円形プランをなすものと推定できる。掘り込みはすり鉢状を呈し、底面中央部は若干凹んで、弱い段をなす。検出面から底面最下部までの深さは20cmである。覆土は2層に分かれる。両層とも焼土・炭化物を含み、人為的埋土と判断できる。覆土中からはⅢ群と推定される土器細片が出土しているが、これによって本土坑の時期を決定することは困難である。

S K 30(第14図)

K Q 69グリッド西側に位置する。V層上面での検出である。南半部のみの検出であるが、長径60cm、短径55cm程度の楕円形プランをなすものと推定される。長軸方向はN-1°-Wである。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。検出面から底面までの深さはおよそ17cmを測る。覆土は4層に分かれ、各層は炭化物あるいは焼土を含み、人為的埋土と考えられる。遺物の出土はない。

S K 33(第14図)

K Q 70グリッドからK R 70グリッドにかけてV層上面で確認した。およそ60×45cmの隅丸方形プランを呈する。掘り込みは椀形をなし、確認面から底面最下部までの深さは10cmを測る。覆土には少量の炭化物を含む。遺物は認められない。

S K 38(第14図)

L C 69グリッド東側に位置する。確認面はV層上面である。南側は攪乱されているが、およそ100×80cmの楕円形プランを呈する。壁は緩やかに立ち上がり、底面中央は一段深くなっている。確認面から底面最下部までの深さは25cmである。覆土は2層に分かれ、ともに地山土の混入が顕著であり、人為的埋土とみられる。覆土中から遺物の出土はなかった。

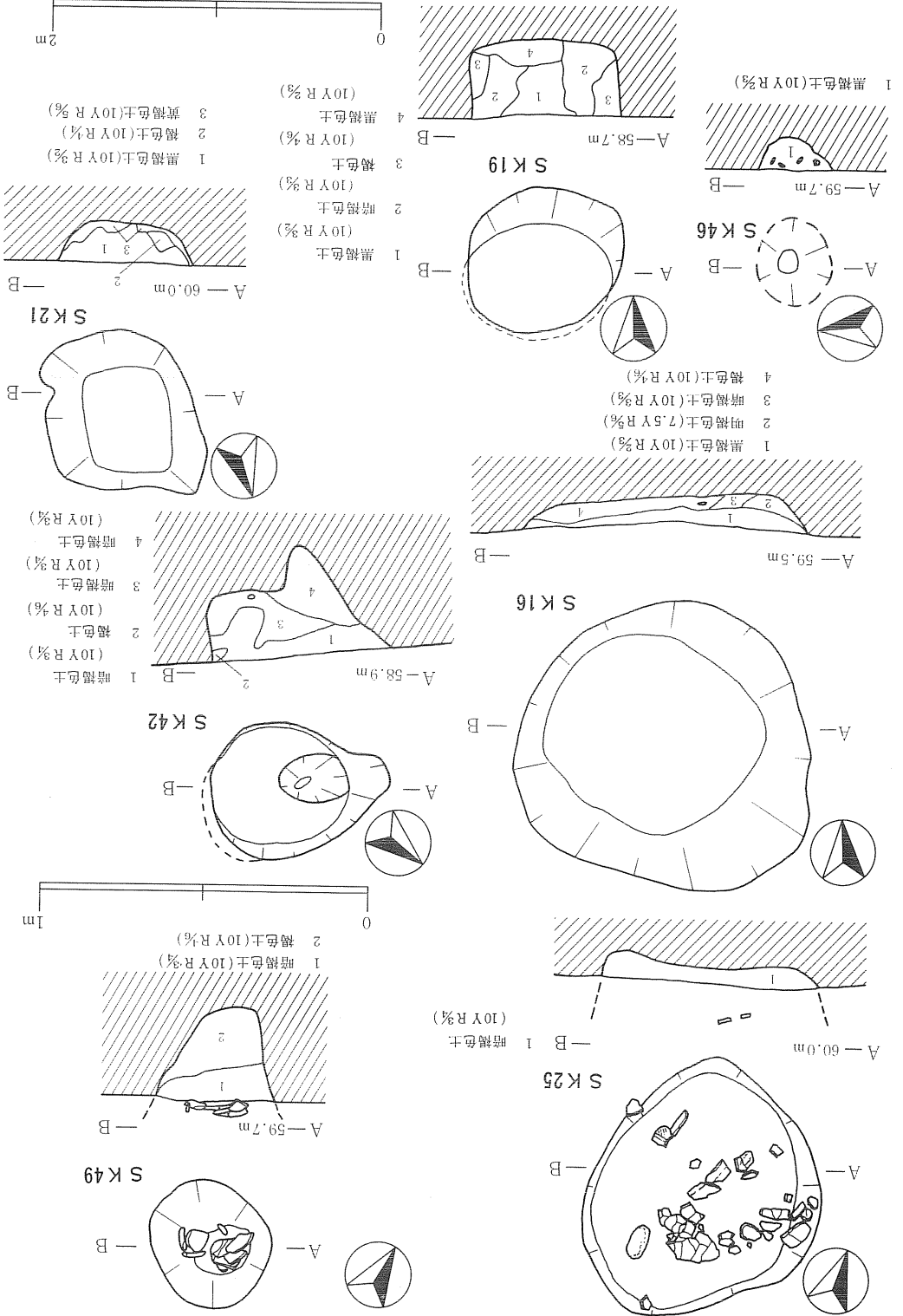
S K 40(第14図)

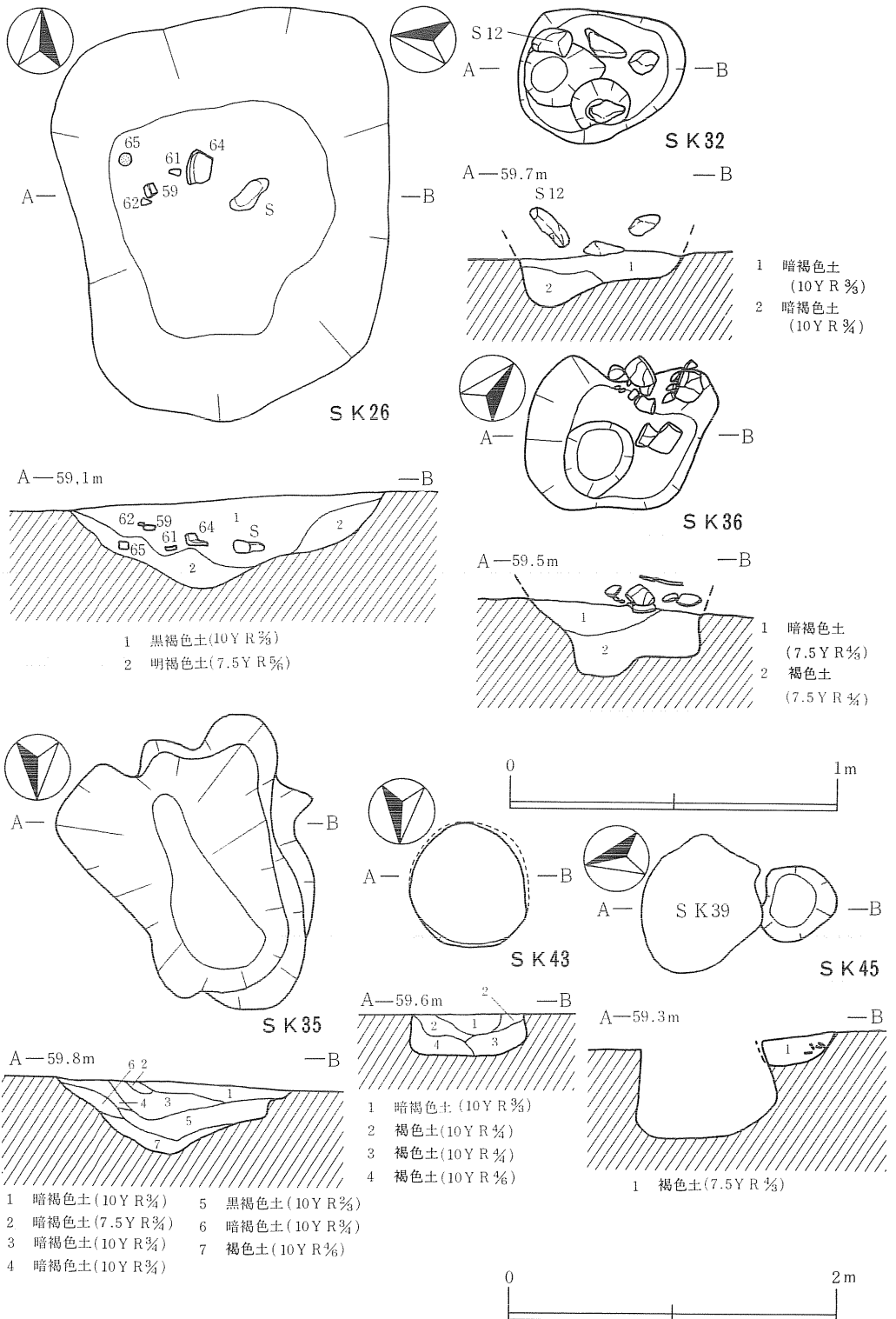
L A 70グリッドからL B 70グリッドにかけてのV層上面で検出した。平面形は60×40cm前後の不整の楕円形をなす。掘り込みは浅いが、底面中央が一段深くなっている。検出面から最下部までの深さは約9cmである。覆土は2層に分かれ、1層は炭化物粒の混入が著しい。本土坑からは縄文土器の細片が出土しているが、時期不明である。

S K 41(第14図)

L C 70グリッド北側から一部L C 71グリッドにかけて位置する。V層上面での確認である。205×190cmのほぼ円形プランをなす。底面は平坦で、壁の立ち上がりは比較的急である。確認面から底面までの深さはおよそ20cmである。覆土は2層に分かれ、ともに地山土の混入が顕著であり、人為的埋土の可能性が考えられる。本土坑からの出土遺物はない。

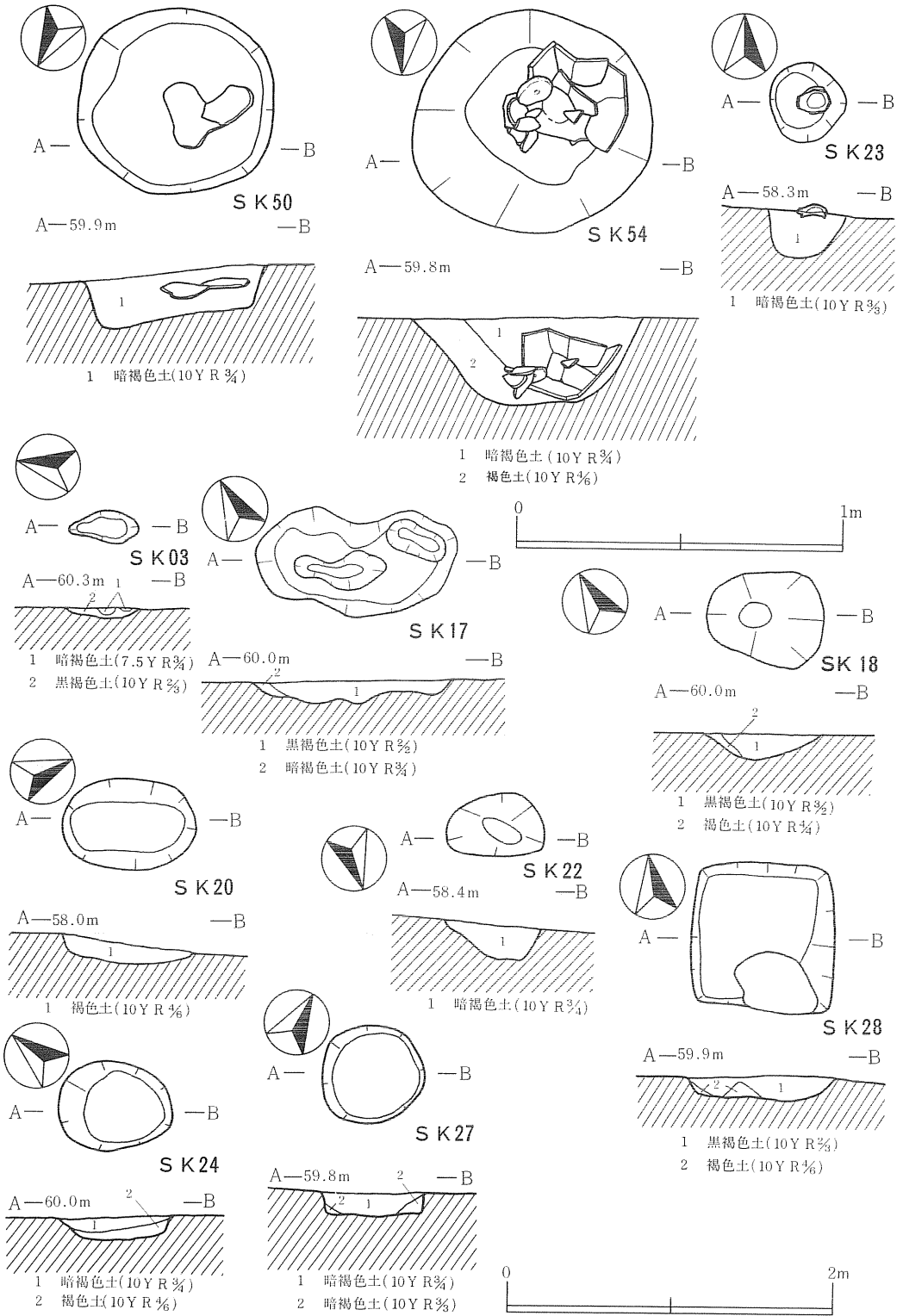
第11圖 SK16・49・25・42・46・19・21土坑



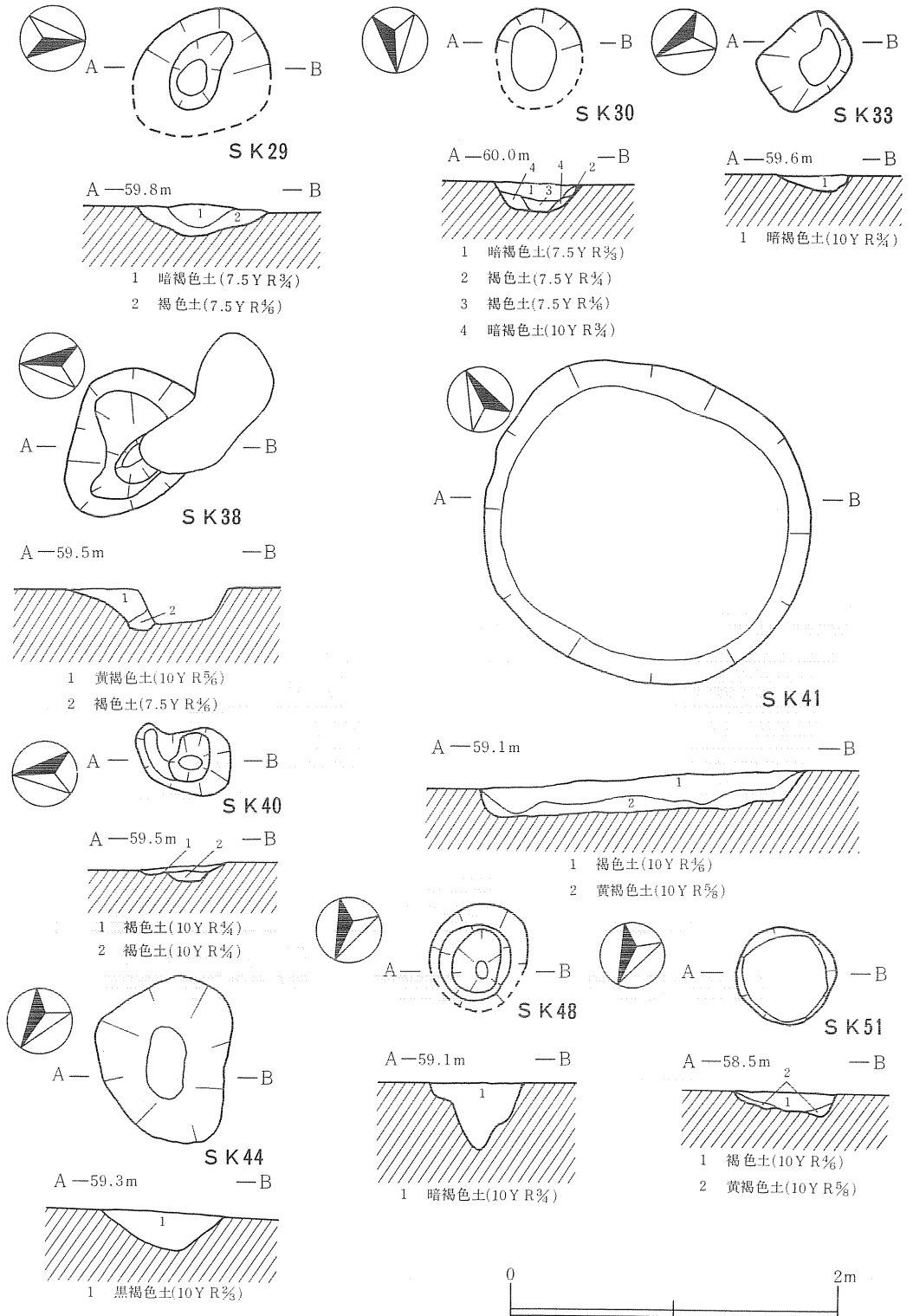


第12図 S K 26・32・35・36・43・45土坑

上野台遺跡

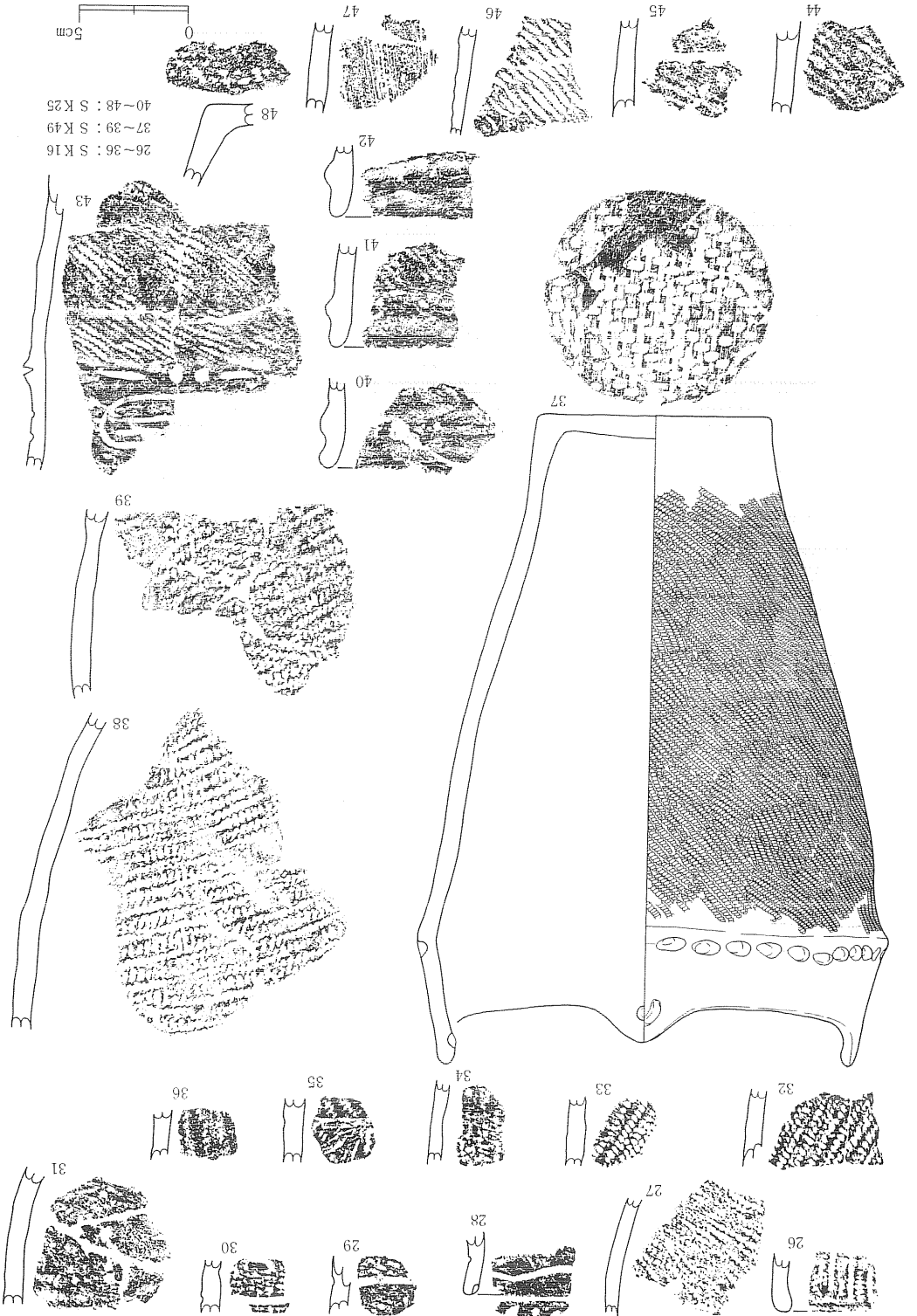


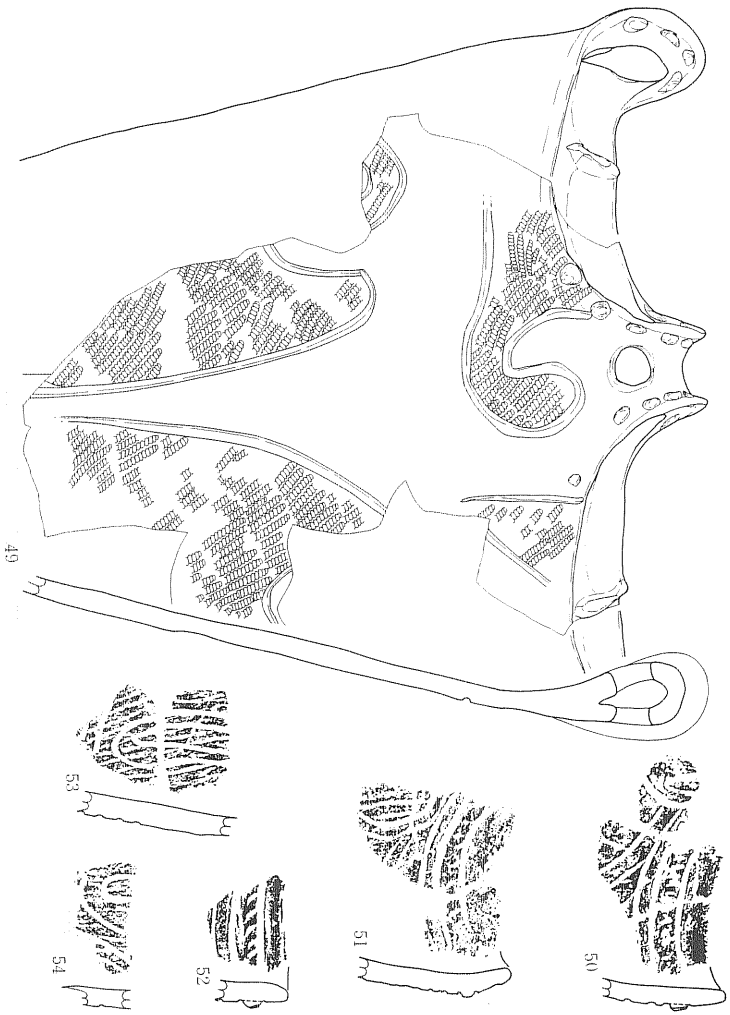
第13図 S K 50・54・23・03・17・18・20・22・24・27・28土坑



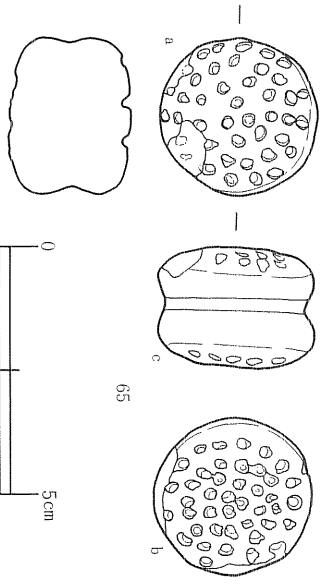
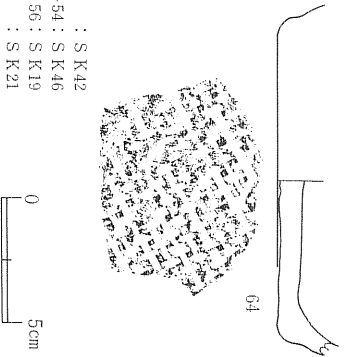
第14図 SK29・30・33・38・40・41・44・48・51土坑

第15図 遺構内出土遺物(5)





49 : S K 42
 50~54 : S K 46
 55・56 : S K 19
 57 : S K 21
 58~65 : S K 26

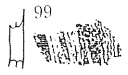
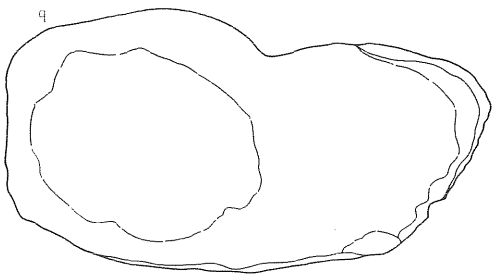
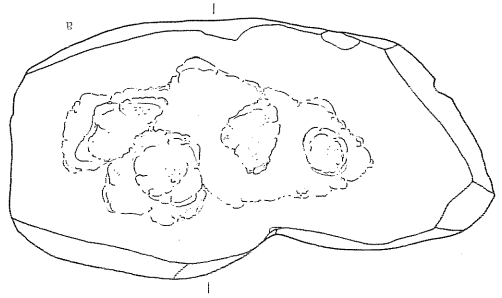
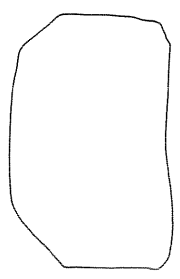
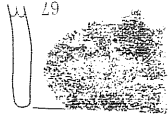
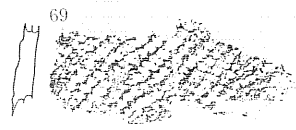
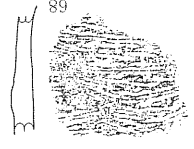
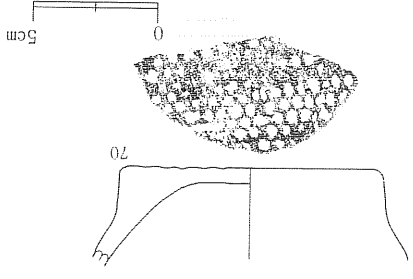
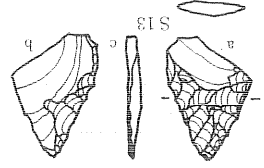
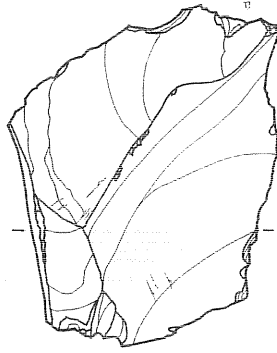
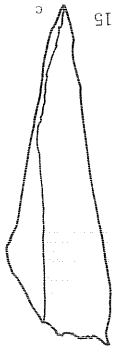
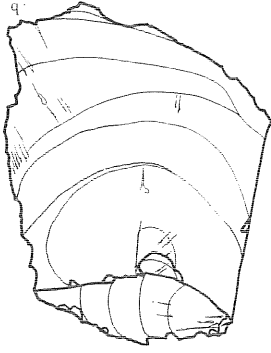


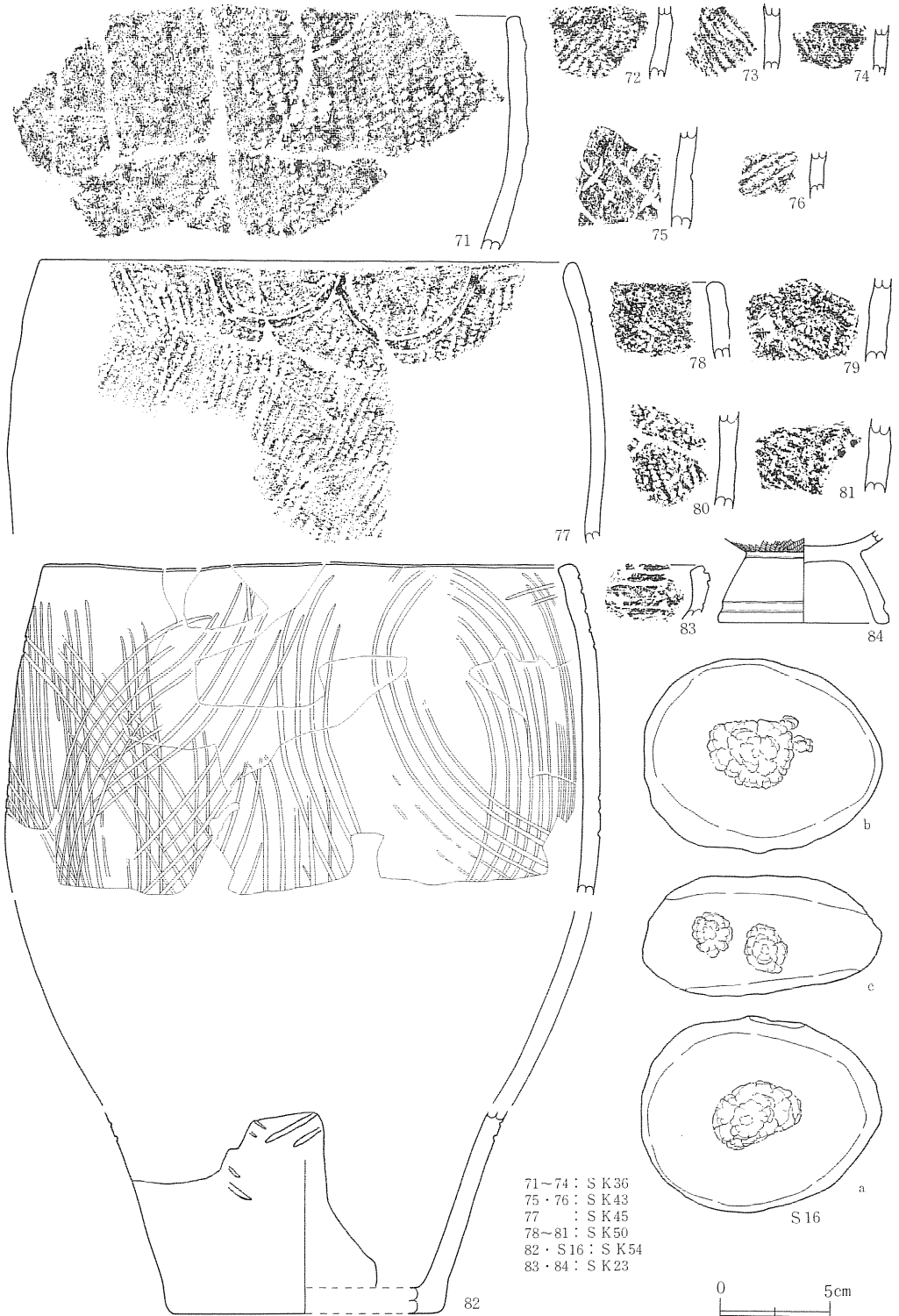
第16図 遺構内出土遺物(6)

第17図 遺構内出土遺物(7)



66・S12 : S K32
67~70・S13~15 : S K35





71-74 : S K 36
 75・76 : S K 43
 77 : S K 45
 78-81 : S K 50
 82・S 16 : S K 54
 83・84 : S K 23

第18図 遺構内出土遺物(8)

S K 44(第14図)

L I 65グリッド南側に位置する。確認面はV層上面である。平面形は100×85cm前後の不整楕円形をなす。掘り込みは腕形を呈し、確認面から底面までの深さは約23cmを測る。覆土はI層に類似し、自然堆積と考えられる。出土遺物はなかった。

S K 48(第14図)

L H・L I 64グリッドの南端に位置し、V層上面で検出した。南半のみの検出であるが、平面形は65×60cm前後の円形を呈するものと考えられる。掘り込みは中央部で段をなして落ち込み、検出面から最下部までの深さは約40cmである。覆土はⅢ層に近いが、その性格は不明瞭である。覆土中から縄文土器の細片が出土しているが、時期不明である。

S K 51(第14図)

L I 64グリッド北端のV層上面で検出した。ほぼ直径60cmの円形プランをなす。底面はやや不整であり、壁は斜めに立ち上がるが、一様ではない。覆土は2層に分かれ、ともに小礫を含んでいる。出土遺物はない。

③焼土遺構

S N 11(第19・20図、図版9・14)

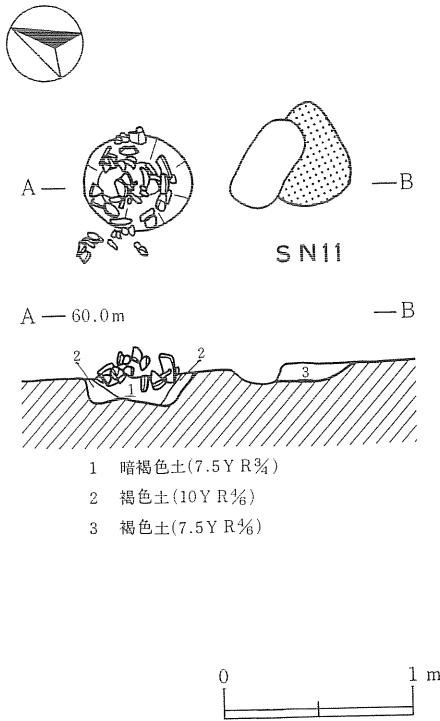
L G 62・63グリッドのⅢ層上面で検出した。現状では直径25cm前後の焼土とそこから北へ約25cm離れた土器埋設部からなる。前者の焼土層の厚さは約5cmを測り、よくしまっている。後者は直径30cmの円筒形の掘り込みに土器を正位に埋設したものである。1層は土器内の埋土であり、炭化物や焼土はほとんど認められない。2層は土器埋設時の裏込め土である。埋設土器85は後世の削平を大きく受けており、胴部下半のみが残存する。地文はR捺糸が斜走し、地文上にはヘラ状工具による沈線によって紡錘状のモチーフが描かれる。底面には網代痕が残る。本例はⅢ群1類に属する。

本遺構は土器埋設部の検出状況から後世の削平を大きく受けたものとみられる。本来の遺構構築面はより上位にあったと考えられ、堅穴住居跡の土器埋設炉であった可能性も想定できる。本遺構は埋設土器から縄文時代後期前半に属する。

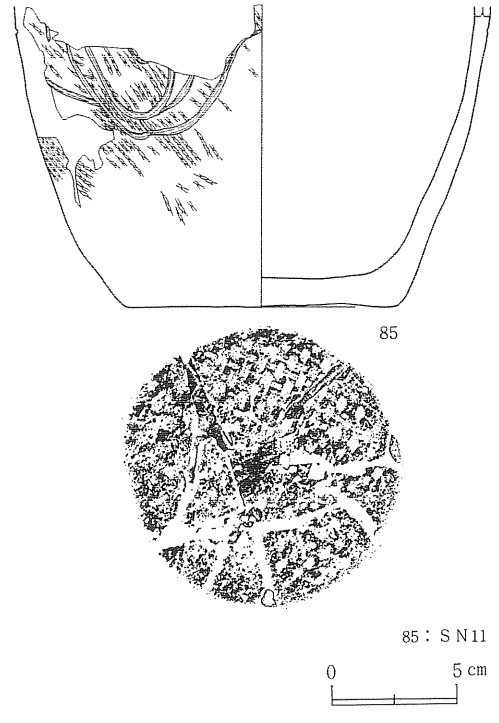
S N 01(第21図)

K S 61グリッド北側のⅢ層上面で焼土の広がりを確認した。確認面では焼土は29×22cmの範囲に不整円形に広がる。断面観察では、確認面から深さ8cm前後の浅いすり鉢状の掘り込みに焼土の堆積が認められる。覆土は3層に分かれ、1・2層が焼土層である。特に1層はよく焼けしまり、この位置で形成されたものと考えられる。掘り込み中からは遺物の出土はなかった。

S N 02(第21図)



第19図 SN11焼土遺構



第20図 遺構内出土遺物(9)

KR65グリッド西側に位置する。Ⅲ層上面で180×60cmの不整形形の焼土面の広がりを検出した。焼土は西側の一部(1層)に強く焼けた範囲があり、その部分では焼土は厚さ6cm前後に達するが、他の部分は厚さ2～3cm前後である。焼土下に掘り込みは認められない。

SN04(第21図)

LA64グリッド東側のⅢ層上面で検出した。南北長約55cm、東西幅約35cmの範囲に赤化の弱い焼土面が広がる。中央部は厚さ4cm前後までよく焼土化しているが、周辺の焼土化はほとんど検出面の表面にとどまっている。焼土下には深さ約10cmの掘り込みが存在する。掘り込み中の覆土は炭化物を含むが、焼土は認められない。掘り込みから遺物は出土しなかった。

SN05(第21図)

LB65・66グリッド東端から一部LA65・66グリッドにかけてⅢ層上面で確認した。およそ200×120cmの範囲に焼土面が不整形に広がっている。焼土の厚さは厚い部分で14cm前後、薄い部分で4cm前後を測る。焼土下には掘り込みは認められない。

SN06(第21図)

LB63グリッド東北部のⅢ層上面で焼土の広がりを検出した。焼土は掘り込みの覆土中に形成されている。掘り込みは底が尖る椀形をなし、平面形は60×50cmの不整形円形で、検出面から

上野台遺跡

の深さは35cmを測る。覆土は3層に分かれ、1層はよく赤化した焼土、2層は赤化の弱い焼土である。3層は焼土・炭化物等を含まない。掘り込み中からは遺物の出土はなかった。

S N07(第21図)

K S 67グリッド東南部から一部K S 66グリッドにかけて位置する。Ⅲ層上面で150×62cmの範囲に不整に広がる焼土面を確認した。焼土層の厚さは最大で8cmを測り、1層に比べ2層がより焼土化が著しい。焼土下には掘り込みは認められない。

S N08(第21図)

K R 65グリッド東北部のⅢ層上面で検出した。20×20cmの範囲に不整形に焼土面が広がる。焼土層の厚さは2cm前後で、焼土下には掘り込みは認められない。

S N09(第21図)

K S 65グリッド東南部に位置する。Ⅲ層上面で30×21cmの範囲に焼土面が広がる。焼土の厚さは6cm前後である。焼土下に掘り込みは認められない。

S N10(第21図)

L A 67グリッド東北部のⅢ層上面で検出した。140×70cmの範囲に不整形に焼土面が広がる。焼土の厚さは最大で6cm前後を測り、焼土下には掘り込みは存在しない。

S N12(第21図)

L I 59グリッド中央に位置する。後世の攪乱が著しいが、Ⅲ層上面で150×60cm前後の範囲に広がる焼土面を確認した。焼土の厚さは5cm前後である。焼土下には掘り込みは認められない。

S N14(第21図)

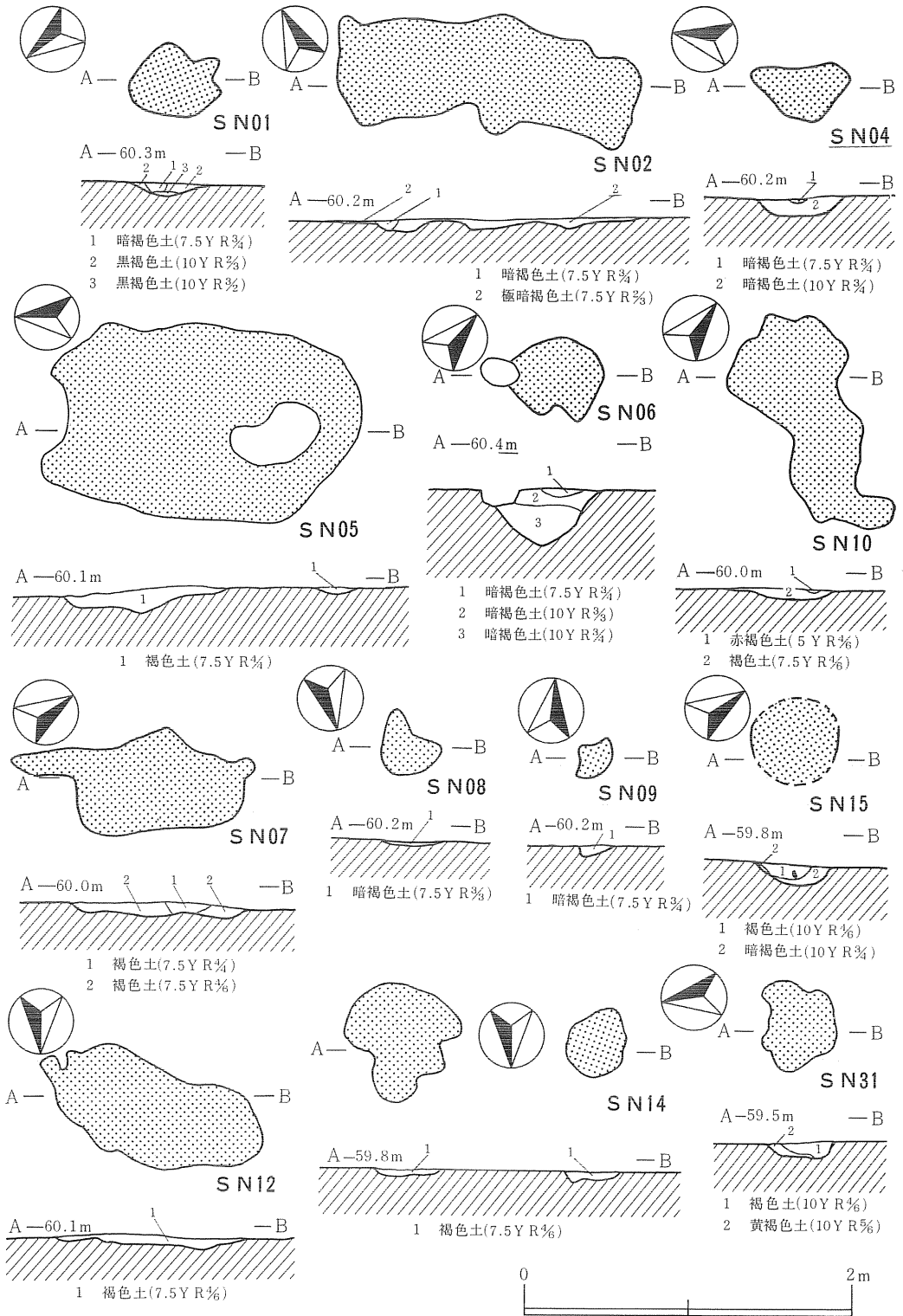
L A 69グリッドの南側に位置する。Ⅲ層上面での検出である。現状では大小2ヶ所の焼土面に分かれるが、両者は近接し、検出面も等しいことから一連の遺構と判断した。前者では73×72cmの範囲に焼土面が広がり、その厚さは3cm前後である。後者の広がりには42×36cmの範囲で、厚さ7cm前後である。焼土下にはともに掘り込みは存在しない。

S N15(第21図)

K S・K T 70グリッド北側のⅢ層上面で焼土面の広がりを確認した。本遺構は土層断面の観察から碗形の掘り込みをもつことが認められる。掘り込みは直径55cm前後の円形プランをなし、確認面からの深さは12cmである。覆土は2層に分かれる。1層は覆土が焼土化したものとみられ、2層は炭化物を混入する。掘り込みからの遺物の出土はなかった。

S N31(第21図)

L B 69グリッド北西側に位置する。Ⅲ層上面で56×46cm前後に広がる焼土面を検出した。焼土の厚さは約10cmである。焼土下には掘り込みは認められない。



第21図 SN01・02・04・05・06・07・08・09・10・12・14・15・31焼土遺構

(2) 遺構外出土遺物

① 土器(第22～27図、図版19～24)

本調査区では縄文土器はI層中から主として出土したが、I層は全体的に後世の攪乱が著しく、地点ごとの明瞭なまとまりは認めがたい。以下において縄文土器は冒頭の群別に従って記述する。

I 群土器(86～100)

いずれも胎土に繊維を含むが、色調、焼成等は一樣ではない。86は沈線で3条の波状文が描かれている。87もヘラ状工具によって、やや幅広の沈線が施されている。88・89は同一個体で、LR縄文地にヘラ状工具によって、やや幅広の沈線が施されている。以上の3点は1類である。90～95は外面に縄文をもつ2類bである。縄文原体はLRであるが、回転方向は一定しない。焼成は良好である。96～100は同一個体で、太いR縄文原体が回転施文されている可能性があるが、断定し難い。器壁の厚さは1cm前後で、他に比べ厚手である。3類である。

II 群土器(101～120)

101～103は1類の深鉢である。101・102にはL縄文原体の側面圧痕が施される。101は緩やかな波状口縁をなし、波頂部には渦巻状に圧痕が施され、拡張した口唇部にも圧痕が加えられている。103は口縁部が凸部と凹部とに区画され、凹部にLR縄文原体の圧痕が施されている。104～106は2類の深鉢である。104・105は口縁が内湾するキャリパー形の器形をとり、両側にL縄文原体の側面圧痕を沿わした粘土紐貼付文によって渦巻などのモチーフが描かれる。106は粘土紐貼付文のみでモチーフが描かれる。104・106の地文はLRである。107～113は沈線もしくは両側に沈線を沿わした隆線によって渦巻を中心としたモチーフが描かれる3類の深鉢である。107～110は波状口縁をなし、外傾し拡張した口縁上端に沈線で横位に展開する渦巻文が描かれる。111～113は両側に沈線を沿わした隆線によってモチーフが描かれる。114は頸部が大きく「く」の字形に屈曲する。波状口縁をなし、波頂部から胴部にかけて橋状把手がつくものと思われる。口縁上端には波状の隆線文が施されるが、両側に沈線は施されず、2類に属する可能性も考えられる。115～120は5類の深鉢である。115は口縁が外反し、頸部にL縄文原体の側面圧痕が2条施され、その下に「C」字形もしくは円形の連続刺突文によって文様が構成されるものである。120は粘土紐上に施文がなく、連続刺突は幅広の工具で鋭くなされている。

III 群土器(121～183)

121～147は1類である。器形・文様は多様であり、かなりの時期差、系統差があるものとみられる。121は連鎖状貼付文をもつ門前式の深鉢である。口縁は内屈し、二重口縁状を呈する。口縁には4単位の橋状把手がつき、把手の間には「ノ」の字形の隆帯が垂下し、円形刺突が加えられる小突起が存在する。把手の上部は側面観が三角形を呈し、円形刺突と沈線が施される。

胴部は連鎖状貼付文によって、横位および縦位に展開する「S」字を中心としたモチーフが描かれ、RL縄文が充填されている。底部は外側に張り出し、底面には木葉痕が残る。122・123、125～132は口縁部に隆帯をもつ。隆帯には上面に平行に連続刺突が施され、連鎖状をなすもの(122・123)と縦または斜めに刻みが施されるもの(126～131)がある。また平行沈線間に連続刺突が施される124や隆帯直下に平行に刺突が加えられる125も連鎖状貼付文と関連するものであろう。132は隆帯上に刻みはもたないが、波頂部の口唇部とその直下の隆帯上に円形刺突が施されている。133は口縁部に隆帯が1条めぐり、その下に沈線で幾何学的な文様が描かれる。134～142は沈線によってのみモチーフが描かれるものである。134はゆるやかな波状口縁をなし、波頂部の直下と口唇部に円形刺突が加えられ、さらに口唇部と口縁部には沈線文が施されている。135は筒状の突起をもつ深鉢である。突起からは沈線による「S」字連鎖文が垂下する。136・137は同一個体で、口縁部が肥厚し、頸部が「く」の字形に外反する器形をとる。波状口縁で、波頂部には沈線による対向する重弧状のモチーフが描かれ、それを起点に肥厚部の中央を浅い沈線がめぐる。138～142は沈線によって横位もしくは縦位に展開するモチーフが描かれる。143～147は胴部から底部の破片である。146は地文をもたないが、他は沈線文に縄文が充填される(143)か、もしくは縄文地に沈線で曲線的なモチーフが描かれ、磨消しが施されている。144・147はモチーフの下端が一部開放し、同一個体の可能性がある。

148～164は2類である。大半は深鉢であるが、一部壺も含まれる。148・149は隆帯に沿って沈線を施した隆沈文によって文様が描かれ、隆帯上には円形刺突が施される。150～153は細い平行沈線によって、「S」字状などのモチーフが描かれる。150・151のモチーフは縦位に展開し、152・153は横位に展開するものとみられる。150・152・153は押圧の浅いLR縄文を地文とする。154～157、159～162、164は沈線によって区画された縄文帯が横方向を基調に展開するとみられる。154～157は小片のため必ずしも明瞭ではないが、縄文施文後、縄文を磨消して無文部が作出されている。160～162、164は沈線による区画内に縄文が充填されるものである。162は平行沈線によって区画された胴部にクランク状の帯縄文が施される。158はLR縄文地に沈線で横位に連結される同心円状のモチーフが描かれる。胴部最大径が中央よりも下にある壺である。163は縄文をもたず、沈線ではさまれた部分が若干隆起する。

165～169は深鉢・壺以外の器形をとり、5類土器として一括した。165は台付き鉢かと思われるが、確実ではない。山形の波頂部をもち、口縁は直口で若干外側に開く。無文で、外面は縦方向、内面は横方向を基調とするミガキが認められる。166は波状口縁をなす小形の鉢である。表面にはLR縄文が不整に施文されている。167～169は小形の碗形もしくは壺形の器形をとるかと思われるが、明確ではない。いずれも円形の刺突と沈線によってモチーフが描かれる。169は小口径の口縁部をもつが、全体の器形は不明である。

170～183は粗製深鉢を一括した。4類である。170は波状口縁をなし、端部は肥厚する。表面にはR捺糸文が施文されている。171も口縁が肥厚し、頸部が「く」の字形に外反する。L縄文原体を肥厚部に横位回転施文し、同一原体の側面圧痕を肥厚部直下に加えている。172～175も口縁が外反する。173・174はそれぞれLRとL縄文原体の側面圧痕が口縁にめぐる。175は頸部下端にLR縄文原体の圧痕を施している。172・175はLR、174はLのそれぞれ縄文原体の回転施文を地文とする。176～183は口縁が内湾する器形をとる。179・181・182は口唇部が面取りされるが、他は丸く調整される。地文は176・177にはLR縄文、178にはL縄文、179～181にはRL縄文が施され、182にはR捺糸文、183は網目状捺糸文が施されている。

Ⅳ群土器(184～206)

184～191は1類で、いずれも鉢とみられる。184～186は同一個体で、口唇部に刻み、口縁に2条の平行沈線が施され、胴部にはLR縄文が縦位回転施文されている。187～190も同一個体で、口縁と肩部に突起がつき、口唇には刻みが施される。胴部にはRL縄文地に曲線的なモチーフが沈線で描かれる。頸部は「く」の字形に大きく屈曲し、台付き鉢である可能性も考えられる。191は口縁に4条の平行沈線が加えられるが、摩滅が著しく、詳細は不明である。

192～206は2類に属する。192～195は深鉢である。192は肩が張り、頸部がくびれる器形をなす。頸部には斜めに連結される2条の平行沈線がめぐる。胴部にはLR縄文が施文される。193～195は頸部に5条の平行沈線がめぐる。194・195は内面に1条の沈線が施されている。196～204は鉢とみられる。196・197は同一個体で、口縁が外反する。口唇部には斜めに刻みが加えられ、頸部下端には刺突文と3条の平行沈線文が施される。胴部にはLR縄文が施文される。198はより口縁が外反する小形の鉢形の器形をなす。口唇部には刻みがあり、頸部下端には3条の平行沈線がめぐる。199・200は同一個体で、口縁端部は肥厚し、外反する。頸部は直立し、上下両端に沈線がめぐる。胴部にはRL縄文地に直線的な沈線文が加えられる。201～203も同一個体で、頸部が内傾し、口縁部は外反する器形をとる。口唇部には山形の突起と刻みが施され、頸部には工字文が描かれる。以上の2個体は台付き鉢となる可能性がある。204は口縁が外反しながら内傾し、肩部で屈曲する鉢である。内外面ともよく研磨されている。205・206は同一個体の台付き浅鉢である。205は口縁部で小突起がつき、口縁外面には浮き彫り状に平行沈線が施され、内面には1条の沈線がめぐる。206は台部で、工字文が施される。

Ⅴ群土器(207～219)

底部を一括した。いずれも深鉢の底部であり、207・208は縄文時代中期、他は縄文時代後期のものと思われる。207はLR・RLを結束した縄文原体によって羽状縄文を施文する。208は底面が揚げ底になり、Ⅱ群3類の底部であろう。209・210は網代痕、211～213はスタレ状圧痕、214～217は木葉圧痕をそれぞれ底面に残す。218・219は底面に圧痕を残さない。

②土製品(第28図、図版25)

220は有溝土錘である。長さ約5cmの丸棒状をなし、長軸方向に溝が一周する。重量は15.1gである。221は耳栓である。両面とも中央が凹み、周縁部が高まる形態をなす。焼成は良好であるが、調整は全体に粗雑である。直径約3.0cm、周縁部の厚さ1.2cm、中央部の厚さ0.6cmを測る。222は土偶の脚部片である。足の部分はおよそ2.2cm四方を測る。胎土は細砂を多く含み、焼成は良好であるが、調整はナデのみで、無文である。223・224は同一個体の板状土偶である。片腕を欠くが、腕は左右に水平に伸びるものとみられ、胴部末端は隆起する。頭部は欠損するが、頭の付け根部分の中央には径4mmの穿孔が施されている。a面には浅いRL縄文が施され、中央に浅い沈線が垂下する。縄文時代中期中葉に属すると推定される。225は中央に穿孔をもつ円盤状の土製品である。約1/3の検出であるが、推定で直径8.5cm前後に達するものと思われる。中央の穿孔の直径は1.0cm前後とみられる。a面がb面より凸出し、b面には部分的に外周に浅い沈線が回る。外側には2箇所に刻みが残存する。

③石 器(第29～50図、図版27～38)

今回検出した石器の内訳は石鏃24(うち遺構外出土23)、尖頭状石器1(同1)、石槍10(同10)、石錐8(同8)、石匙16(同15)、石筥9(同9)、スクレイパー66(同66)、楔形石器21(同21)、二次加工ある剥片52(同50)、石核25(同24)、剥片約690、磨製石斧14(同14)、礫器1(同0)、敲石4(同3)、凹石22(同20)、磨石3(同3)、石皿5(同4)、台石2(同0)、砥石1(同0)、石錘3(同3)である。遺構外出土の石器は土器と同様大きく攪乱を受けており、地点的まとまりや共存土器等は不明である。以下では主要な石器について説明する。剥片石器の素材は特記しない限り頁岩である。

石鏃(S17～39) S17～23は凹基無茎鏃である。S22は最大幅が胴部中央にあって、基部が狭まる。基部から胴部中央にかけては矢柄装着時のアスファルトが付着している。S24・25は平基鏃である。S24は尖頭部の作出が不充分であり、未製品の可能性がある。S25は最大幅が胴部中央にある細身の石鏃である。S26は基部を折損するが、平基もしくは円基となるものとみられる。S27は両面に素材の第一次剥離面を残しており、素材剥片の末端側を尖頭部側にしている。S28・29は尖基鏃である。前者は両面に素材の剥離面を残し、後者はa面に素材の先行剥離面を残している。S30・31は尖基状を呈するが、ほとんど素材の形状を留めている。両者とも素材の主要剥離面を大きく残し、S30は素材の剥離面打面も残している。前者は素材の末端を石鏃の尖頭部側に、後者は側縁を尖頭部側にする。S32・33は凹基有茎鏃、S34・35は平基有茎鏃、S36～39は凸基有茎鏃である。いずれも両面に全面二次加工が施されている。素材はS19・38が瑪瑙、S21・24が黒曜石、S31がチャートで、他は頁岩である。

尖頭状石器(S40) S40は剥離面打面を有する剥片を素材とし、打面を除く周縁に二次加工を施し、やや湾曲する尖頭部と基部を作出したものである。本例は法量と尖頭部を作出する点

では石鏃に近似する。しかし、平面形は長軸に対し左右対称にならず、側面形も反りが著しく、石鏃とは形態が異なるため、ここでは尖頭部の作出を評価して尖頭状石器と分類した。

石槍(S41~50) S43は長さ5.0cmを測り、本調査区では小形である。二次加工は全面および、最大幅は基部寄りにある。S46は長さ7.8cmを測り、本調査区では中形の法量をもつ。全面に二次加工が施され、最大幅はほぼ胴部中央に位置する。S47・48は長さ11cm前後で、相対的に大形である。全面に二次加工が施されている。S50は尖頭部側を折損するが、全長15cm前後に達するものと推定される。一部は被熱によって剥落しているが、両面とも全面に二次加工が施され、特にa面左半は剥離痕が平行に並んでいる。基部は平坦で、横断面形は薄い凸レンズ状を呈する。その他の欠損例はS42が小形のものに、S41・44・45・49は中形のものに対応するものと思われる。S44・45は被熱によって欠損しているが、同一個体である。

石錐(S51~58) S51は剥片の末端側のみ両縁に二次加工を施して短い錐部を作出し、素材の打面側をつまみ部としたものである。S52はヒンジフラクチャーとなった剥片の末端側をつまみ部とし、打面側に長い錐部を作出する。S53・54は剥離面打面を有する剥片の末端側を錐部に加工し、打面側をつまみ部としている。S56は素材の剥離面をa面に残すが、S57・58は全面に二次加工が施され、素材の剥離面を残さない。

石匙(S59~73) S59はつまみに対し、刃部が直交する横型である。二次加工は背面の縁辺に集中する。つまみと刃部はそれぞれ素材の相対する側縁に作出されている。S60~63はつまみ軸に対し刃部が斜めになる。S60の刃部は素材背面への二次加工によって作出される。つまみは素材の末端側に位置している。S61・63は素材背面側に、S62は両面に二次加工を施して刃部が作出されている。いずれも打面側につまみ部を作り出し、S62・63はつまみ部上面に剥離面打面を残している。S64~69はつまみと刃部が平行する縦型の石匙である。S64は剥離面打面をもつ横長剥片の側縁末端側に小形のつまみが作り出されている。a面左側の素材の末端が未加工のまま刃部として利用され、微小剥離痕を顕著に残している。S65も剥片縁辺を未加工のまま刃部としたもので、剥離面打面を有する縦長剥片を素材とし、打面側につまみが作出される。素材末端はヒンジフラクチャーとなっており、鋭い縁辺をもつ両側縁に微小剥離痕を残している。S66は剥離面打面を有する縦長剥片を素材とする。素材の末端側につまみを作出し、両側縁には背面への二次加工によって刃部を作り出している。S67~69はいずれも素材の背面全面に二次加工が施されている。S67はa面左側縁に急角度の剥離によって抉りが入れている。主要剥離面にはつまみ部周辺以外に二次加工は施されない。S68は主要剥離面の右側縁から末端にかけて、S69は主要剥離面の左側縁にそれぞれ細かい二次加工が施されている。S70~73はつまみ部側を欠失するが、いずれも背面に全面二次加工が施され、主要剥離面の側縁に細かい二次加工を有する特徴から縦型石匙の刃部片と考えられる。

石筥(S74~82) S74は長さ約10cmを測り、最大幅は胴部下半にあり、刃部に向かって狭まっている。b面には素材の主要剥離面を大きく残し、刃部の加工はa面側のみである。S75は基部の破片であるが、S74と類似した法量を有するものと推定される。S76・77は長さ8cm前後を測り、共に撥形の器形をなす。a面には全面二次加工が施されるが、b面には素材の主要剥離面を大きく残している。刃部はいずれも主にa面側への加工によって作出される。S76は素材の側縁側が刃部に作出され、S77は打面側が刃部となっている。S78~80は長さ6cm前後のものである。S78・79は比較的幅広の形態をとる。前者の刃部はほぼ直刃で、後者は偏刃である。両例ともb面に主要剥離面を大きく残し、S79は素材の剥離面打面を残している。刃部は共に素材の末端側に作出している。S80は円刃をなし、b面は側縁の一部に二次加工が施されるのみで、素材の主要剥離面を大きく残す。刃部は素材の打面側に作出している。S81・82は長さ5cm以下で、本調査区では小形である。共に撥形を呈する。S82の刃部右側は欠損後、再加工が施されている。両者とも刃部は両面からの二次加工によって作出され、ほぼ直刃である。前者は素材の剥片の側縁を、後者は打面側をそれぞれ刃部にする。

スクレイパー(S83~119) ここでは剥片の縁辺に二次加工が施され、刃部が作出されたものを包括する。S83~91は二次加工によって素材の形状を大きく改変したものである。いずれも特徴的な形態をもち、中には新たに器種として分離できるものも存在すると思われる。S83は平面形が靴形を呈する。b面は素材の主要剥離面で、部分的に細かい二次加工が施されるのみである。刃部はa面側への急角度の剥離によって作出される。S84は先端が尖り、下端が扇形に広がる形態をとる。両面には素材の剥離面をわずかに残すのみである。下端の刃部は両面からの二次加工によって作出されている。S85は両面ともに全面二次加工が施され、長楕円形の整った形態を呈する。S86は下端を折損するが、現状で両側縁が平行する整った形態をなす。a面は全面に二次加工が施されるが、b面は縁辺部に二次加工がとどまり、素材の主要剥離面を大きく残している。S87も上半を折損するが、現状で両側縁が平行する定型的な形態をとる。素材の主要剥離面には二次加工は施されず、下端は素材のヒンジフラクチャーである。S88もS87と同様な形態をなすが、本例は主要剥離面の縁辺にも細かい二次加工が施されており、縦型の石匙の刃部片の可能性もある。瑪瑙製である。S89~91は尖頭状の刃部が作出される。S89は二次加工が両面とも全周におよぶが、S91は素材の背面側にのみ二次加工が施され、上面には素材の調整打面を残している。S90はa面に素材の自然面、b面に主要剥離面を残す。二次加工はb面の左縁を除き、残存する縁辺に両面から施されている。S92~97は素材剥片の一侧縁の背面側に二次加工を施し、刃部を作出するものである。S92・94・96は剥離面打面、S93は調整打面、S95・97は点状打面を残している。S98は素材が折断によって整形され、折断面と背面に二次加工が施され、刃部が作出されている。S99は素材の背面側に施された二次加工に

よって両側縁が刃部となっている。素材は剥離面打面を有する。S100は素材の一侧を折断し、素材背面の末端と折断面に二次加工を施して刃部を作り出すとともに、b面右側から末端に沿って彫刀面を作出したものである。素材の剥離面打面を残している。S101～103は素材の末端の背面側に二次加工が施され、刃部が作出されている。S103は刃部の二次加工が急角度の剥離である。S102は素材の点状打面を残している。S104～106は素材の両面から二次加工を施し、尖頭状の刃部が作出されている。S104は素材の自然面打面、S105は剥離面打面、S106は調整打面を残す。S107～110は剥片の両面に二次加工が施され、刃部が作出されている。S107～109は素材の点状打面を残す。S111～117は剥片の主要剥離面に二次加工が施され、刃部が作出されている。S111～115は素材の側縁が、S116・117は末端が刃部となっている。S113・114・117は素材の剥離面打面、S111・112・115は調整打面を残している。S118・119は素材を折断し、折断面から二次加工を施したものである。

楔形石器(S120～140) ここでは素材の縁辺に階段状剥離痕と縁辺のつぶれを有するものを包括する。S120～127は素材への剥離が上下二方向からによるものである。S128～132には上下方向からの剥離痕に加え、横方向の剥離痕も存在する。S133～137は素材への剥離痕の打面が点状とならず、平坦面をなすものである。S138～140は楔形石器の削片である。

二次加工ある剥片(S141～154) 本類は定型的な形態をとらない剥片石器を一括したため多様な形態のものが存在する。以下には特徴的なものを取りあげて説明を行う。

S141～144は剥片の縁辺に数箇所抉りが作出されたものである。抉りは片面からなされるもの(S141～143)と両面からなされるもの(S144)とがある。S141はa面左側に微小剥離痕が存在する。S143には素材の調整打面が残存する。S145は縦長剥片の両端を折断し、折断面に主要剥離面側から二次加工を施したものである。残存する素材の両側縁には微小剥離痕が認められる。S146も縦長剥片の両端を折断し、末端側の折断面に主要剥離面側から二次加工を施したものである。残存する素材のa面左側面には若干の二次加工痕と微小剥離痕が、右側縁には微小剥離痕が存在する。S147はほぼ全面に二次加工が施されるが、定型的な形態を示さない。縁辺の一部には細かい階段状剥離痕とつぶれが認められる。S148～150は小形の素材に部分的に二次加工が施されたもので、石鏃の未製品の可能性があるだろう。S151は有茎の石鏃の未製品である。厚さは約4mmを測る。茎の周囲は折断面であり、素材を折断して整形する工程の存在を示している。S152は黒曜石製で、a面は全面に、b面は縁辺の一部に二次加工が施されている。S151同様石鏃の未製品であろう。S153は両面に上方から縦長の二次加工が施されている。上端の縁辺のつぶれは顕著でないが、楔形石器の可能性のあるものである。S154は石槍の未製品もしくは石核とみられるもので、a面左上と左下に自然面を残している。交互剥離を基調とする大形の剥離痕が全面に残り、明確な主要剥離面は認められない。このため剥片では

なく、礫を素材とする可能性がある。

石核(S155~158) S155は剥片素材とみられる。c面を調整打面とし、a面から2枚の小形の剥片が剥離されている。S156は節理面のc面を打面とし、主にb面を作業面として若干の不整の剥片が剥離されている。S157はc面の自然面打面から2枚の剥片が生産されている。S158は黒曜石製で、打面と作業面とを交替しながら剥片が生産されている。

磨製石斧(S159~172) 本調査区出土の磨製石斧は完形品についてはS159が長さ19cmと大形であるが、それ以外は長さが8~12cm前後に収まり、規格性が強い。またS171・172の基部横断面形が円または楕円形を呈する以外は、いずれもその横断面形は長辺が凸出する隅丸方形をなし、定角式に属する。残存する刃部はいずれも円刃もしくは偏刃の両刃をなす。

敲石(S173~175) S173は扁平な楕円形礫の長軸両端に敲打痕が残るものである。S174はほぼ全面に敲打痕を残し、球状の特異な形態を呈する。敲打痕は使用痕ではなく、整形痕である可能性があり、敲石としての機能を果たしたかは不明である。S175は半欠するが、一端に敲打痕が残る。

凹石(S176~195) S176~179は棒状礫を素材とし、S180~195は円礫もしくは垂角礫を素材とし、大半は片面または両面に敲打による凹みを残すものである。S193~195には凹みと共に磨面も併存している。

磨石(S196~198) いずれも円礫を素材とし、両面に磨面が残る。側面には顕著な磨面は認められない。

石皿(S199~202) 石皿はいずれも破片である。S199はa・b両面とも使用されている。a面は浅く凹むが、b面はほぼ平坦である。S200は残存部分は両面ともやや凸面をなす。S201はa面のみ使用され、深く凹んでいる。S202は両面とも使用されているが、a面はほぼ平坦で、b面はやや凹んでいる。

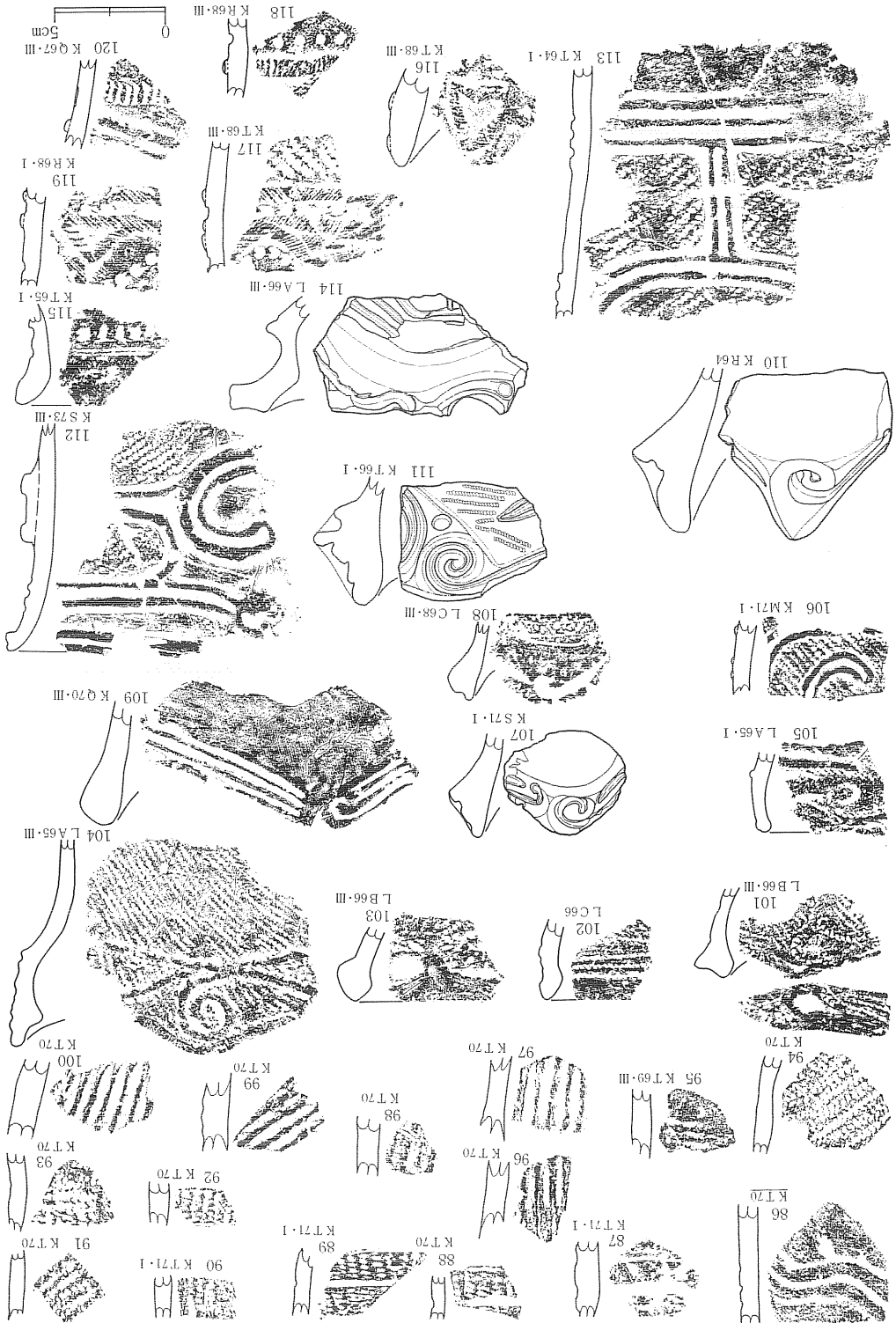
石錘(S203~205) S203・204は扁平な小楕円礫に十字に溝をめぐらした有溝石錘である。前者は重量13.7g、後者は半欠品であるが、10.9gを測る。S205は扁平の長楕円礫の長軸両端を打ち欠いた後、浅い切目を入れたものである。重量は25.6gである。

④石製品(第50図、図版38)

石棒(S206) S206は上端を欠失するが、ほぼ直線的に延び、丸棒状を呈する。横断面形はほとんど円に近いが、c面が若干面をなす。c面上端と下端に浅い沈線状の凹みがあるが、いずれも全面の研磨痕が連続的に残っており、打撃による整形時の剥離痕とみられる。

石刀(S207) S207は扁平で、わずかに内反りの形態をとる。c面は平坦な面をなし、a面左側縁が鈍い両刃状になっている。下端を欠失し、残存部も2箇所折れている。本例はI層中からの出土であることと折れ面の状況から、これらの欠損は後世の攪乱による可能性が強い。

第22図 遺構外出土遺物(1)





121 KS70-1



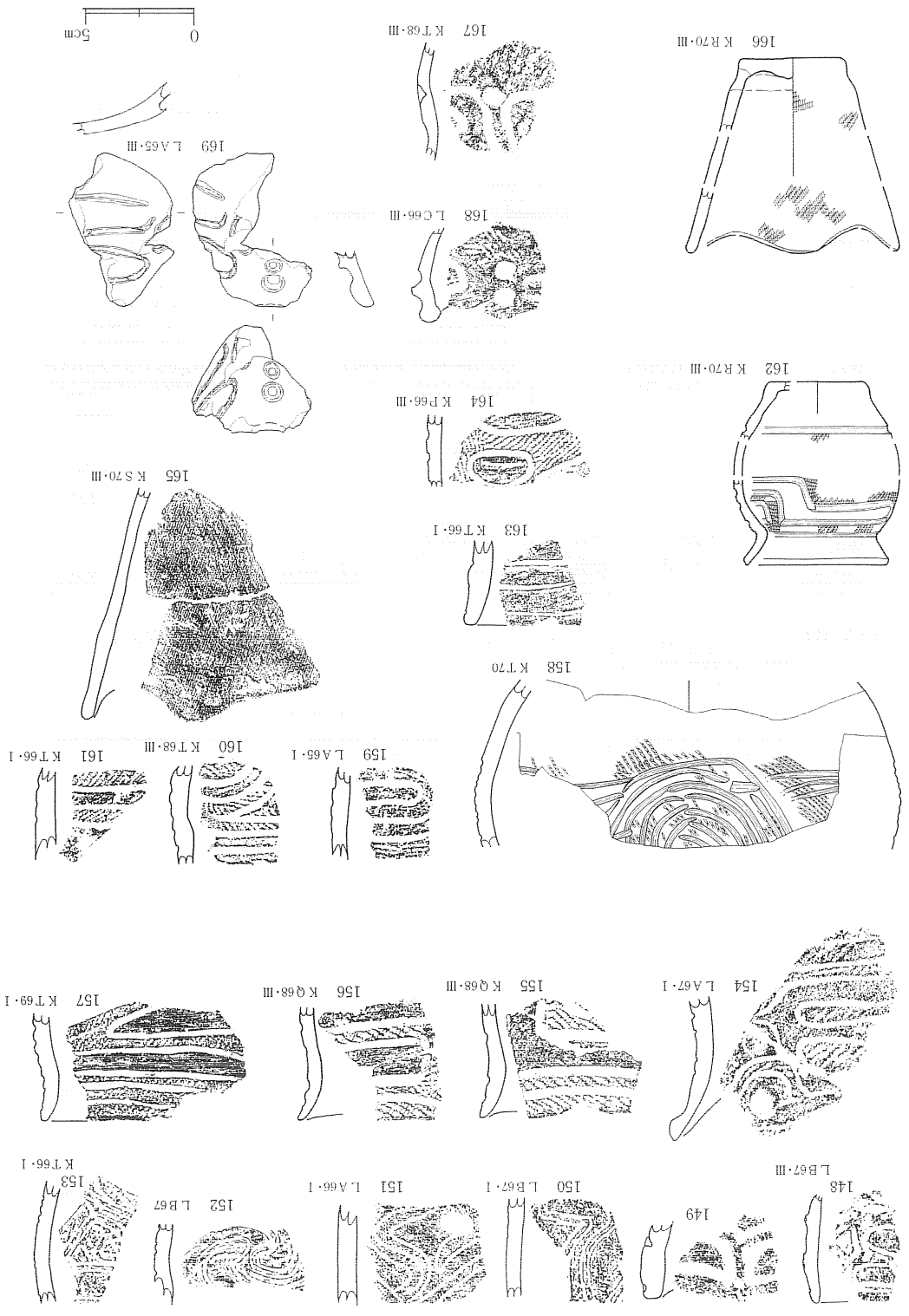
0 10cm

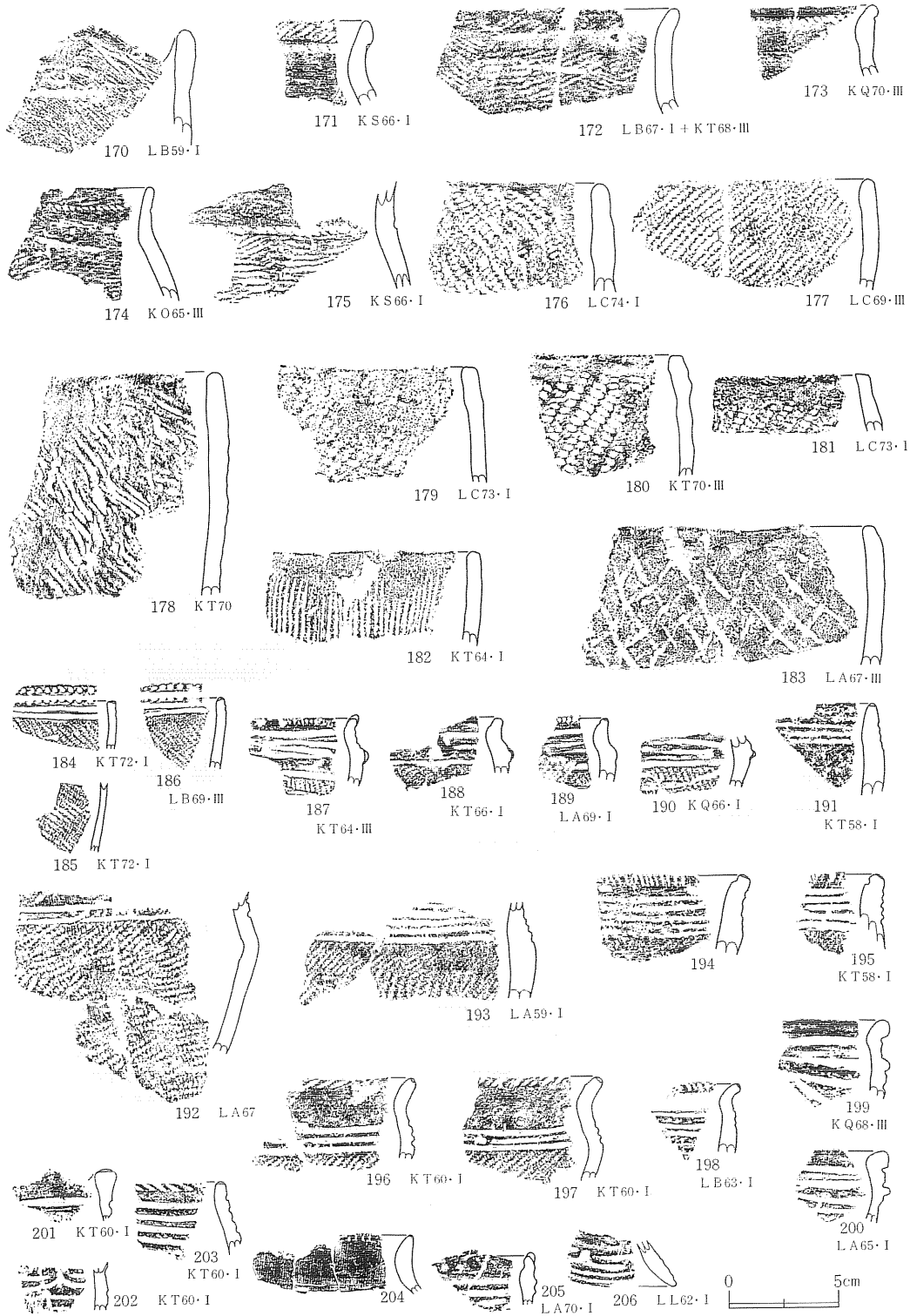
第23図 遺構外出土遺物(2)



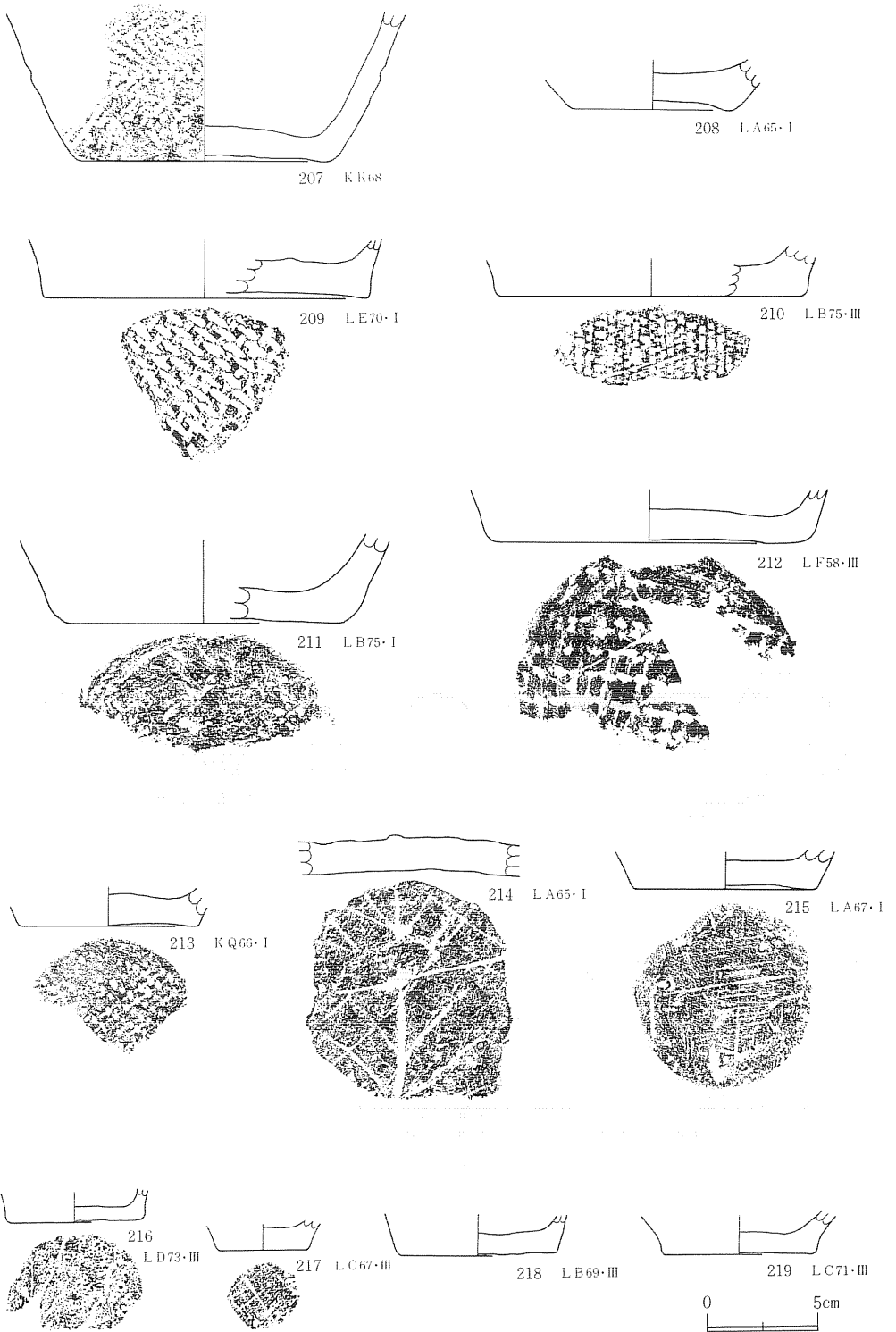
第24図 遺構外出土遺物(3)

第25図 遺構外出土遺物(4)

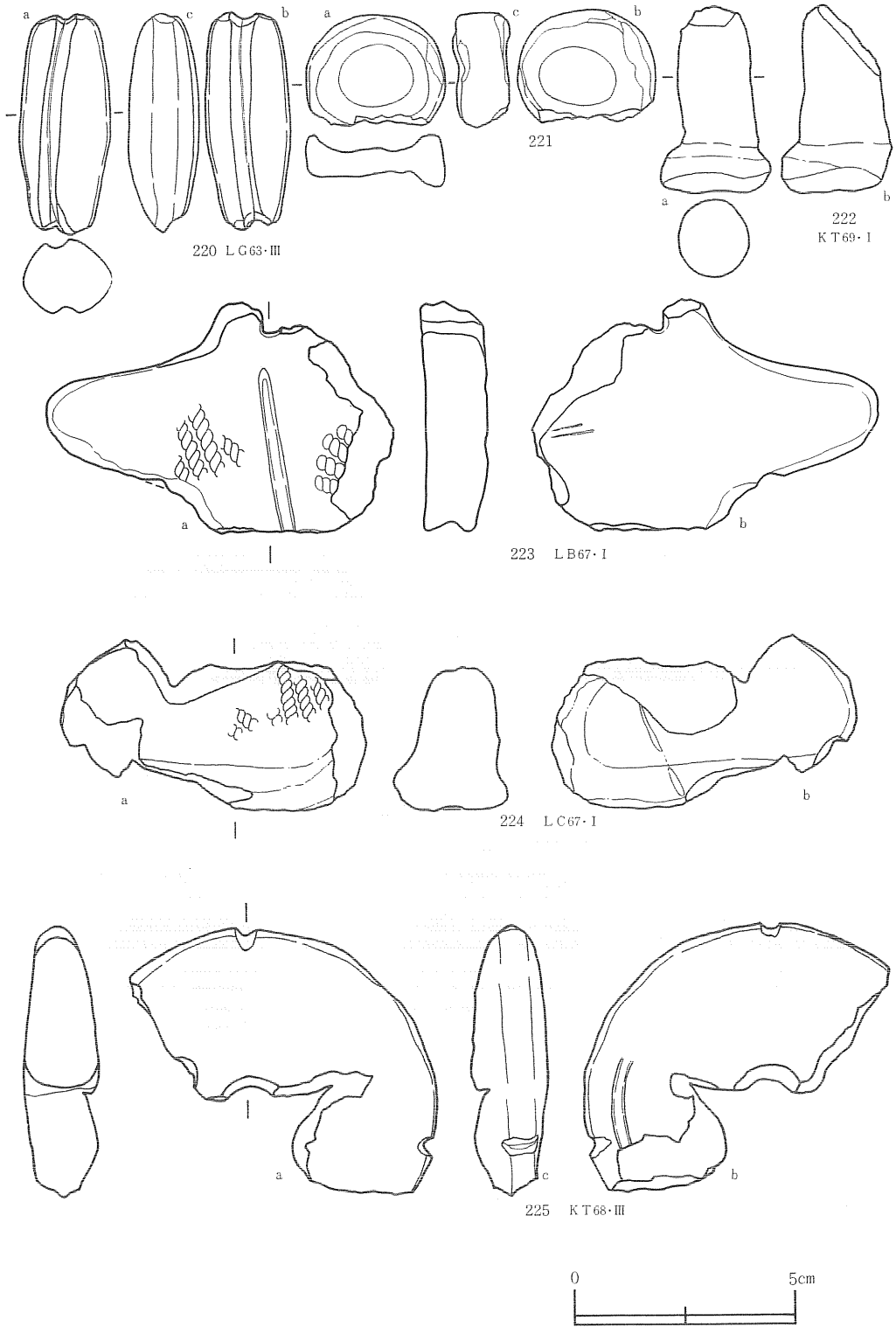




第26図 遺構外出土遺物(5)

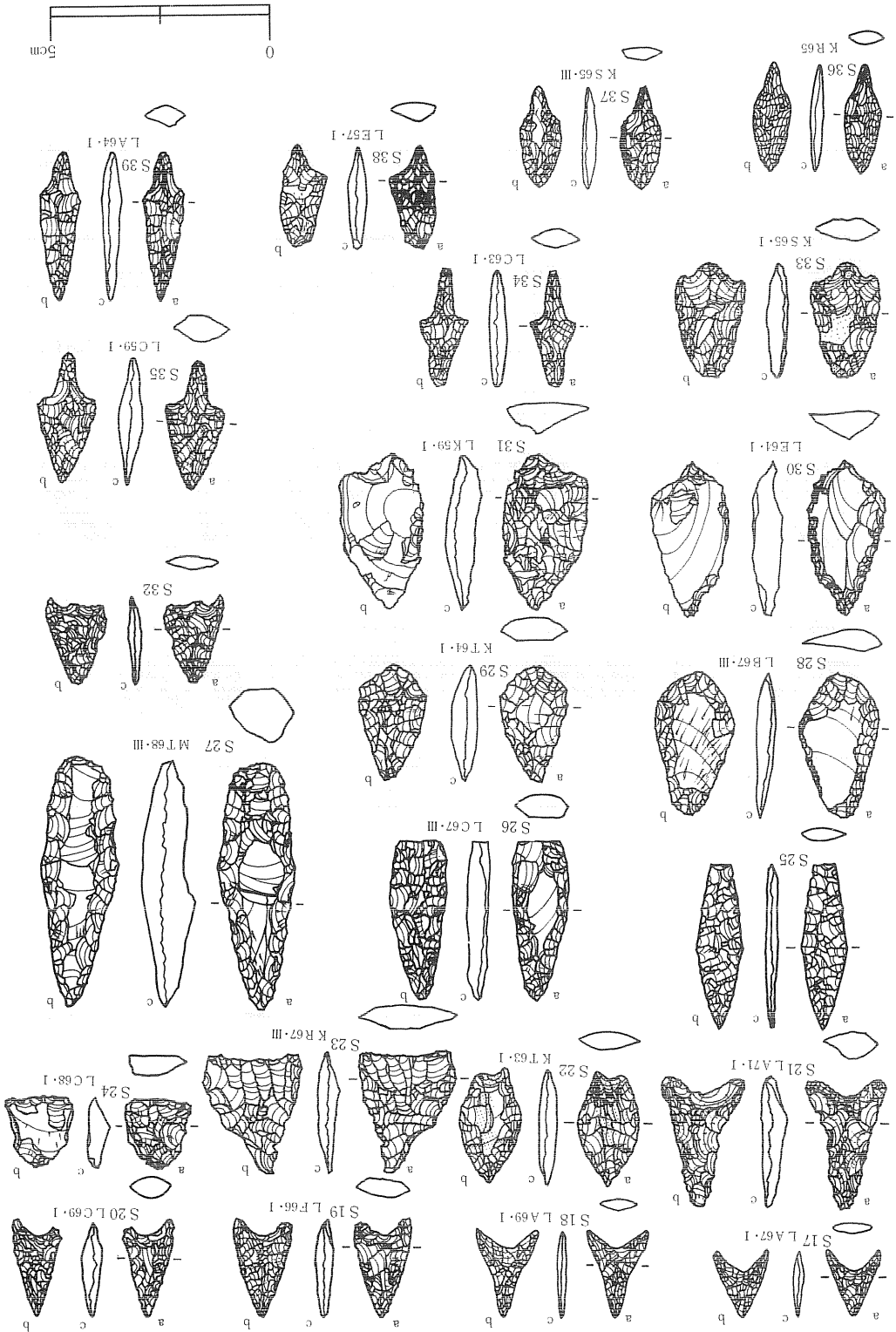


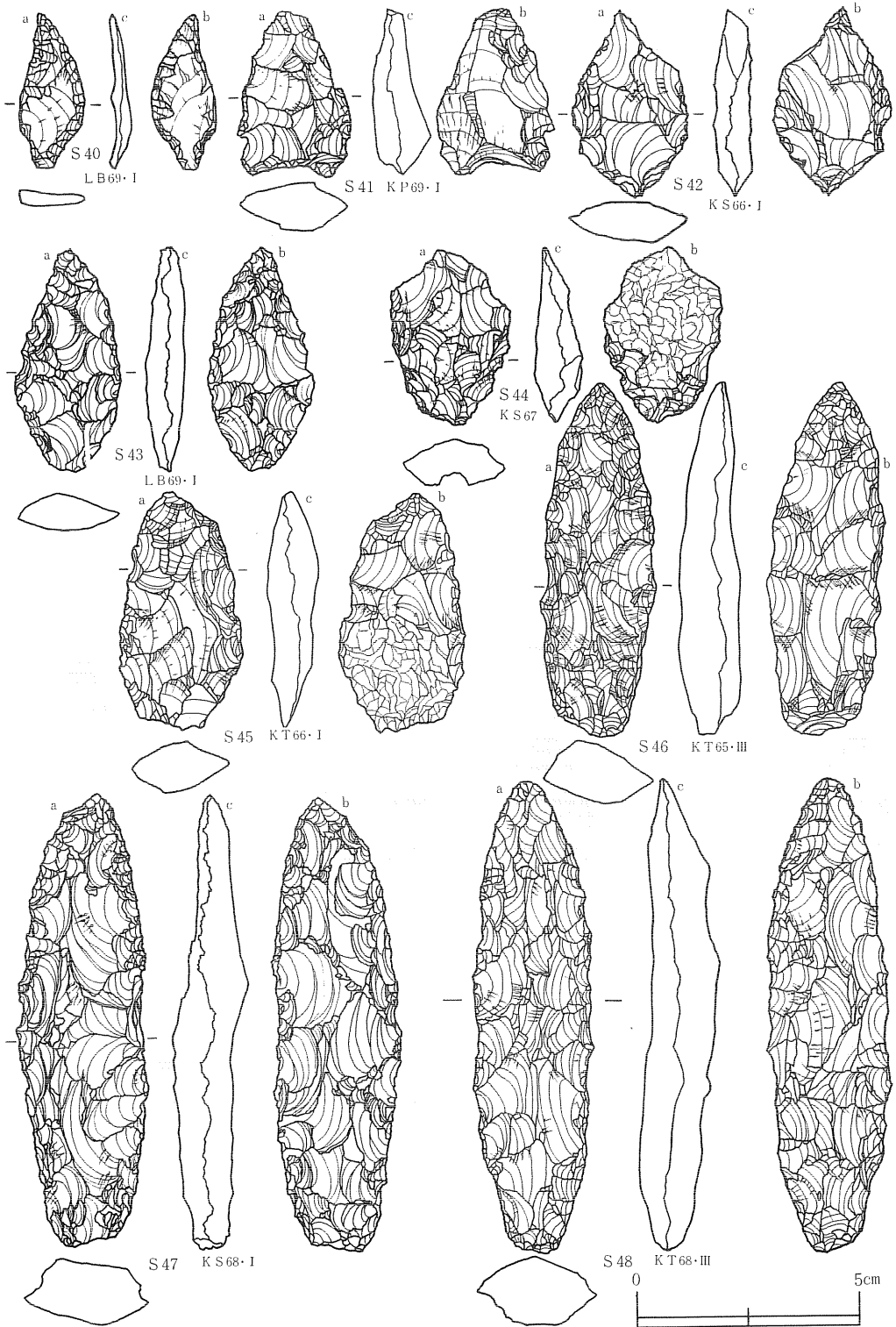
第27図 遺構外出土遺物(6)



第28図 遺構外出土遺物(7)

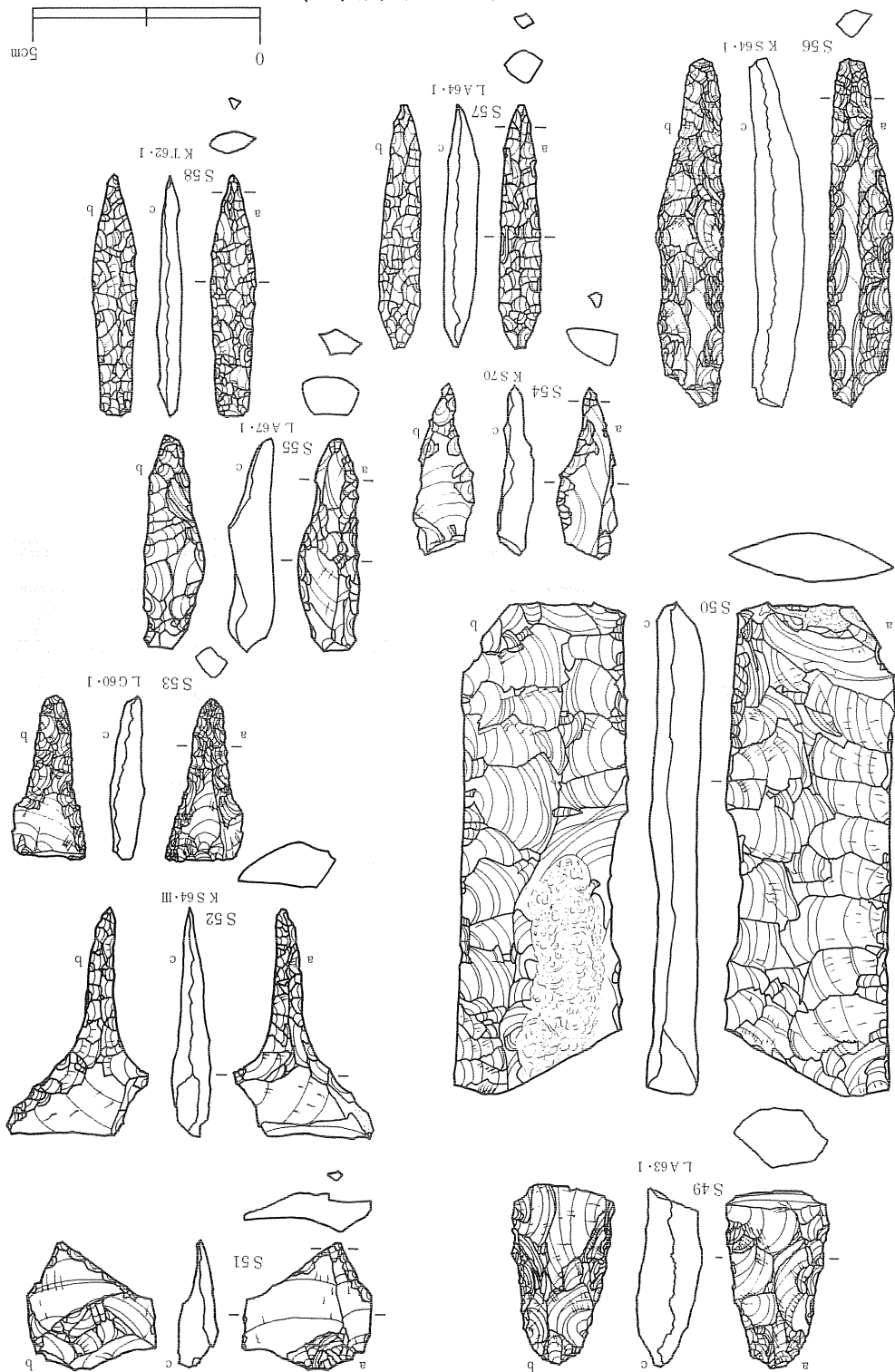
第29図 遺構外出土遺物(8)

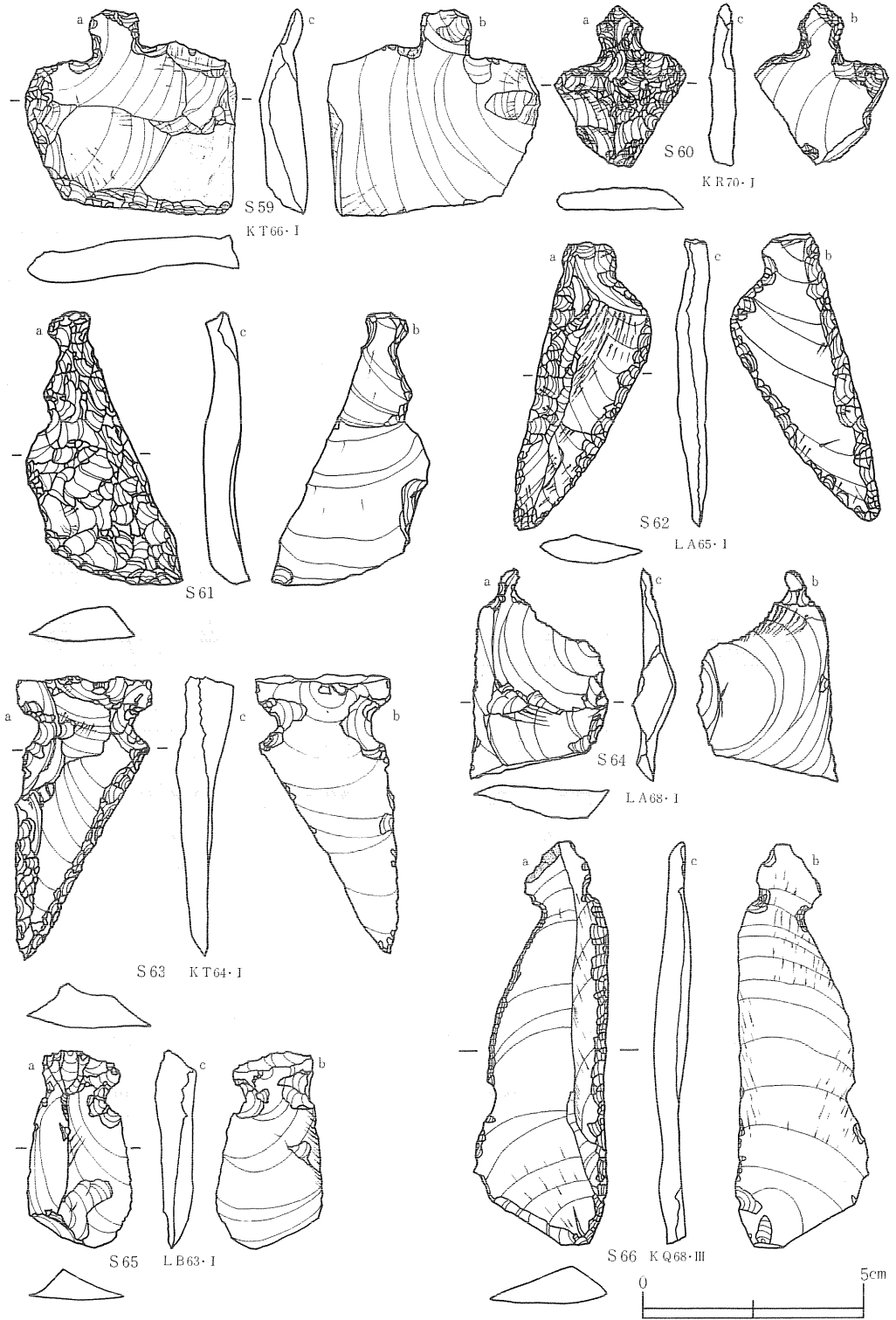




第30図 遺構外出土遺物(9)

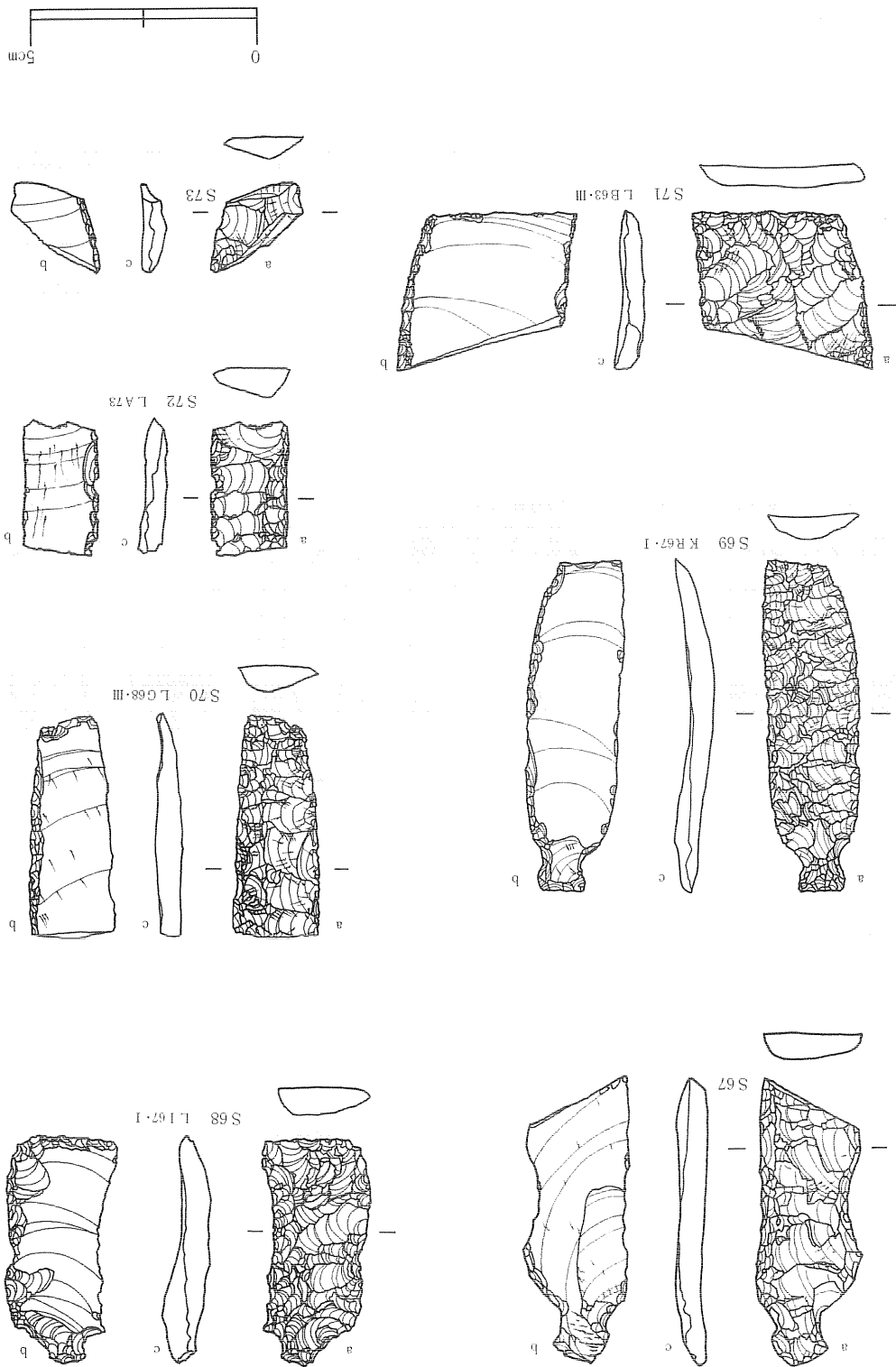
第31図 遺構外出土遺物(10)

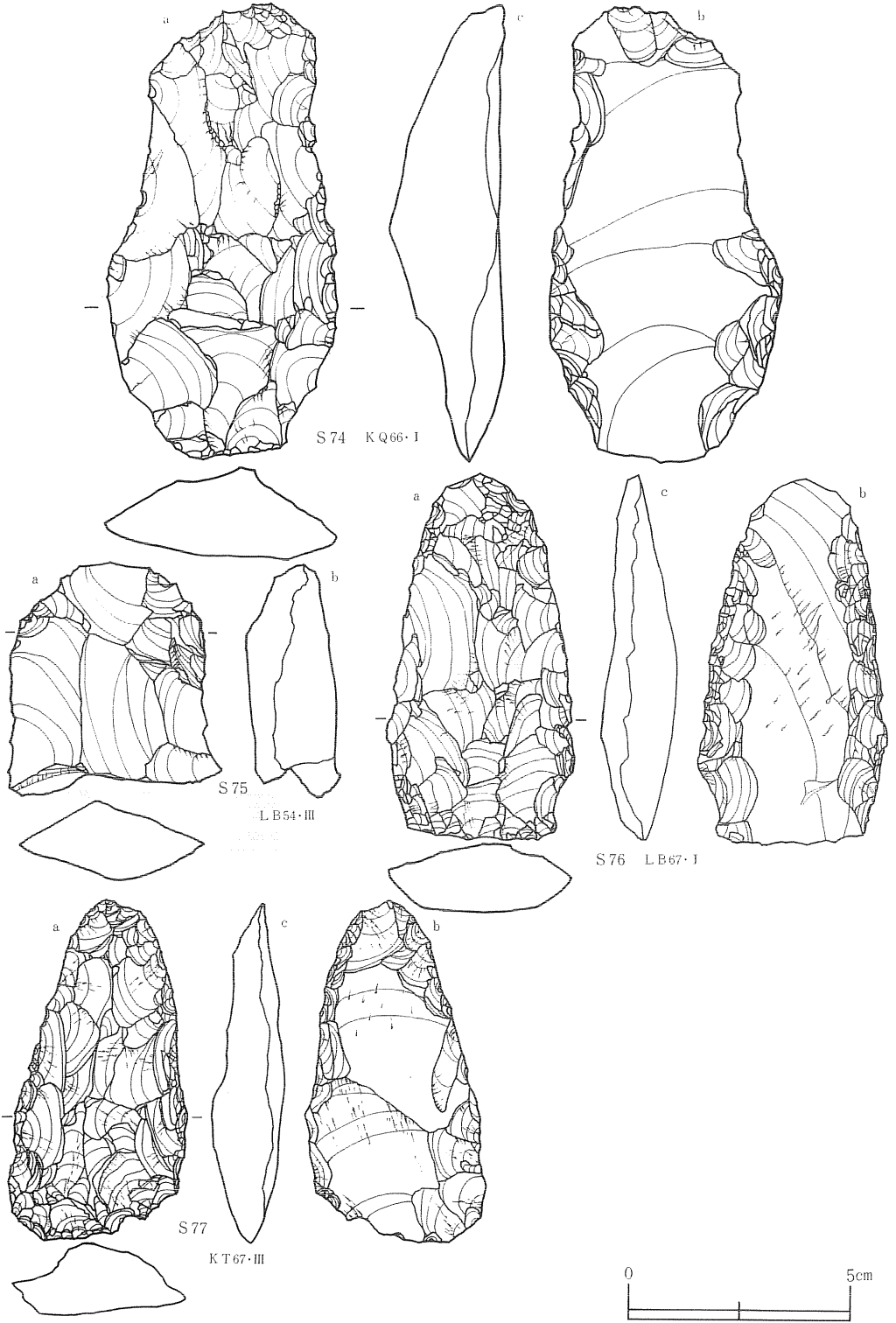




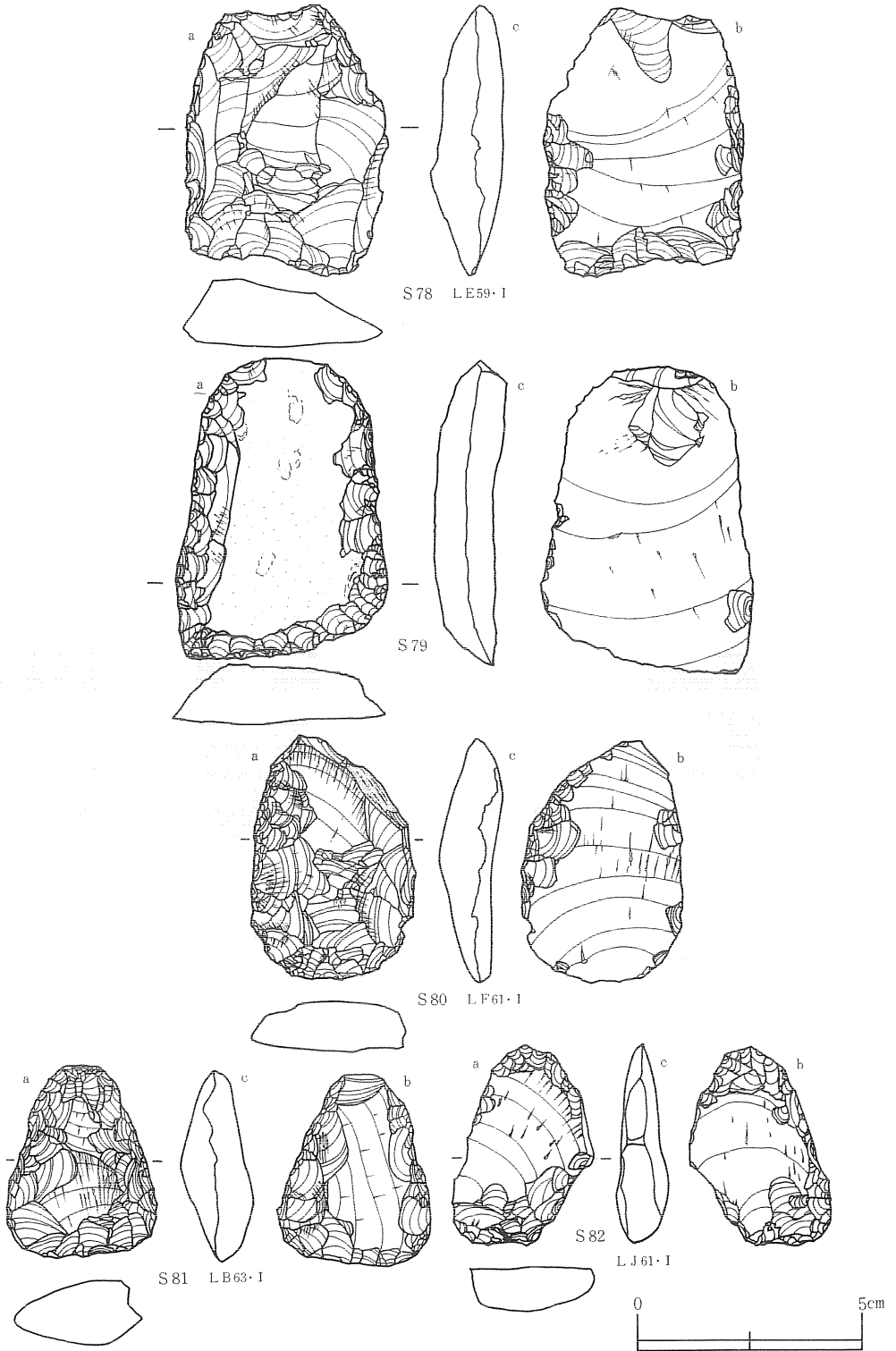
第32図 遺構外出土遺物(11)

第33図 遺構外出土遺物(12)

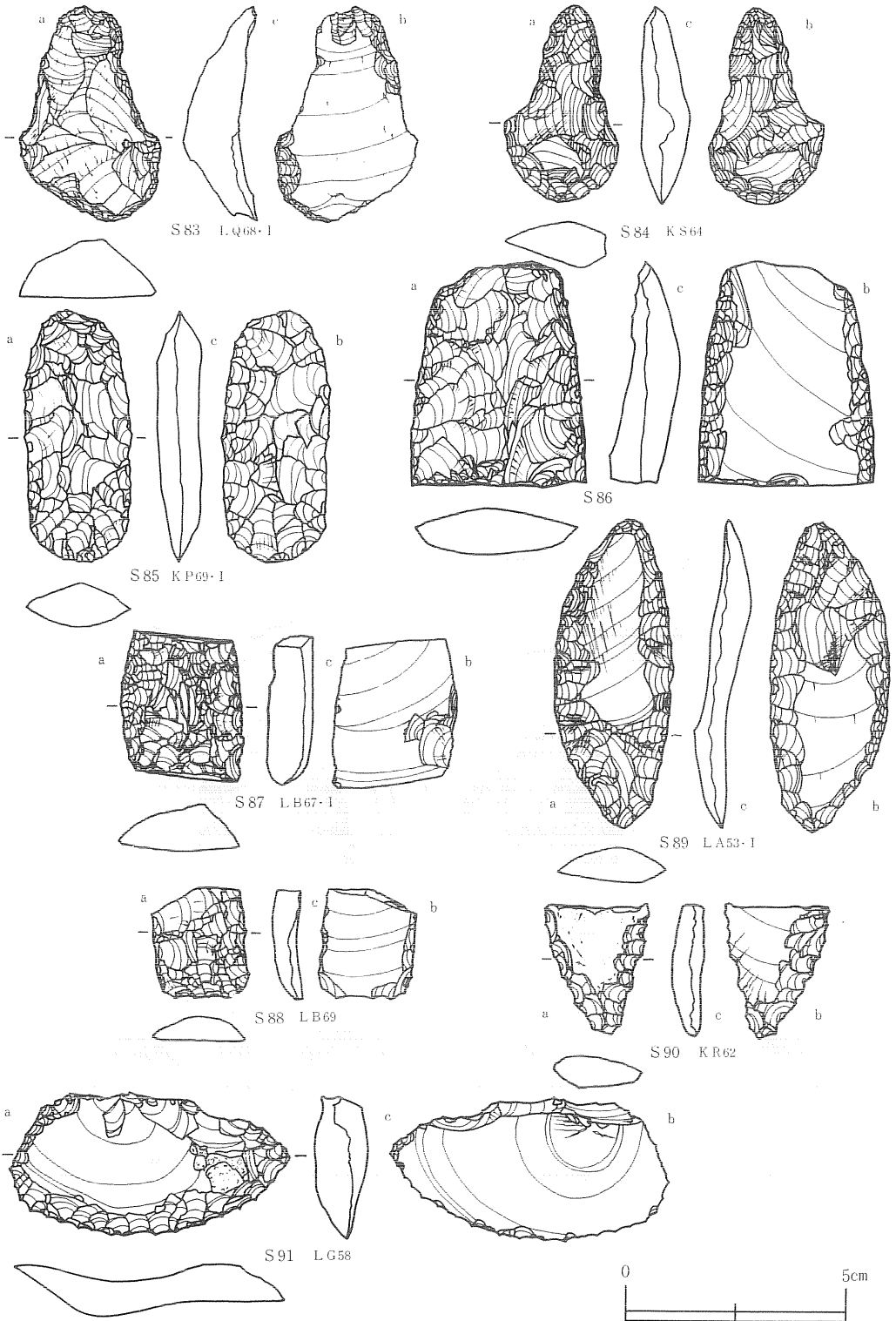




第34図 遺構外出土遺物(13)

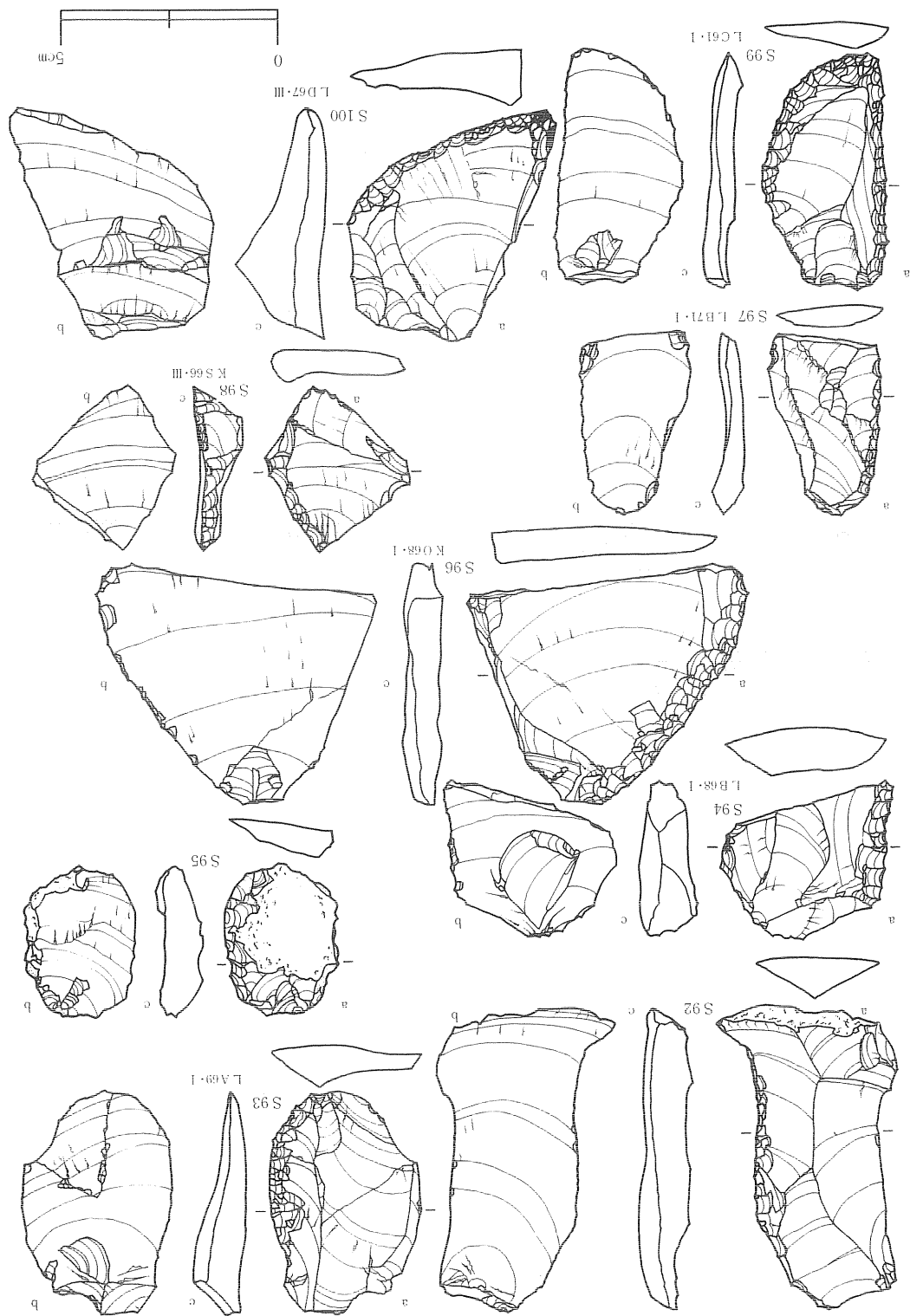


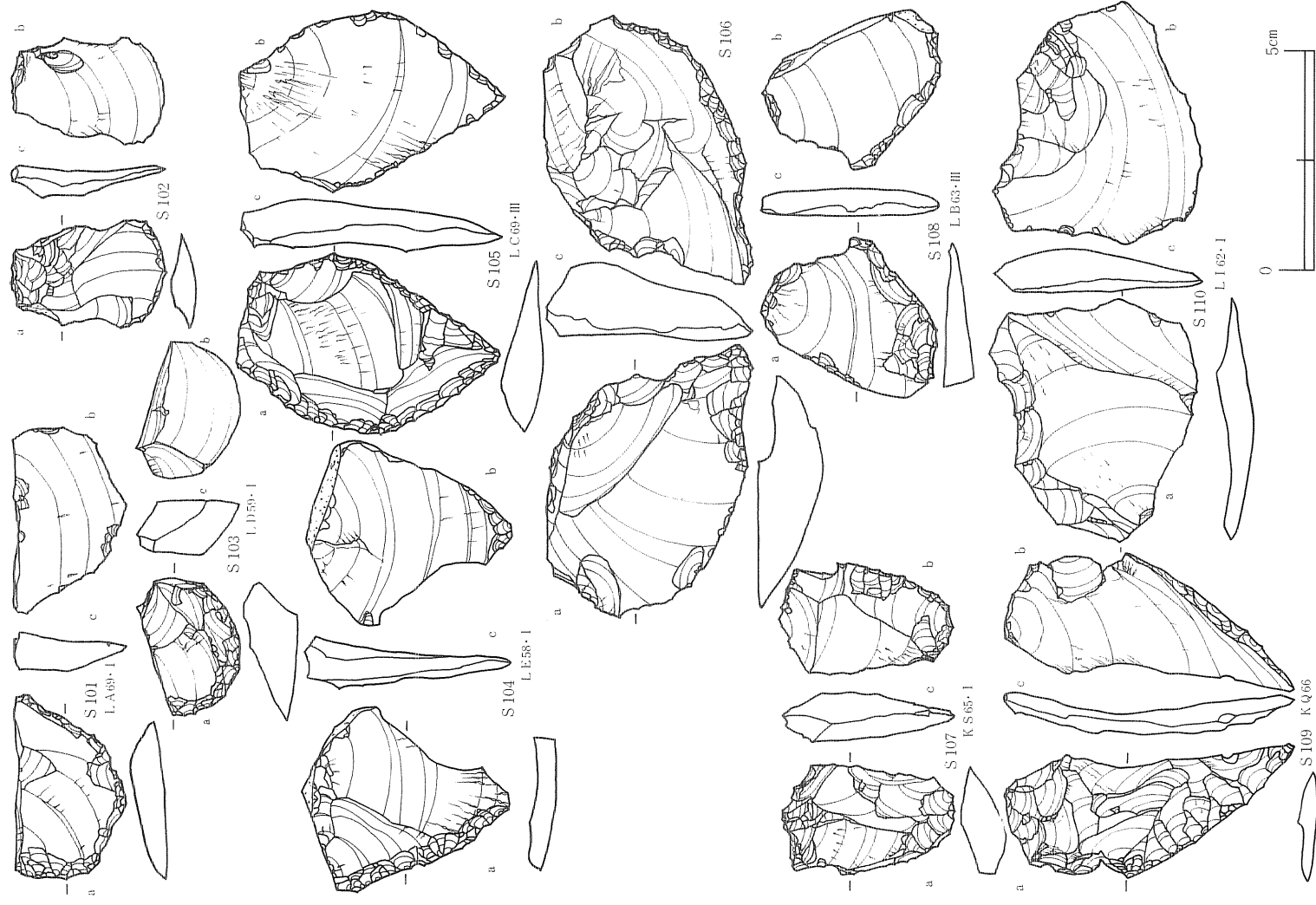
第35図 遺構外出土遺物(14)



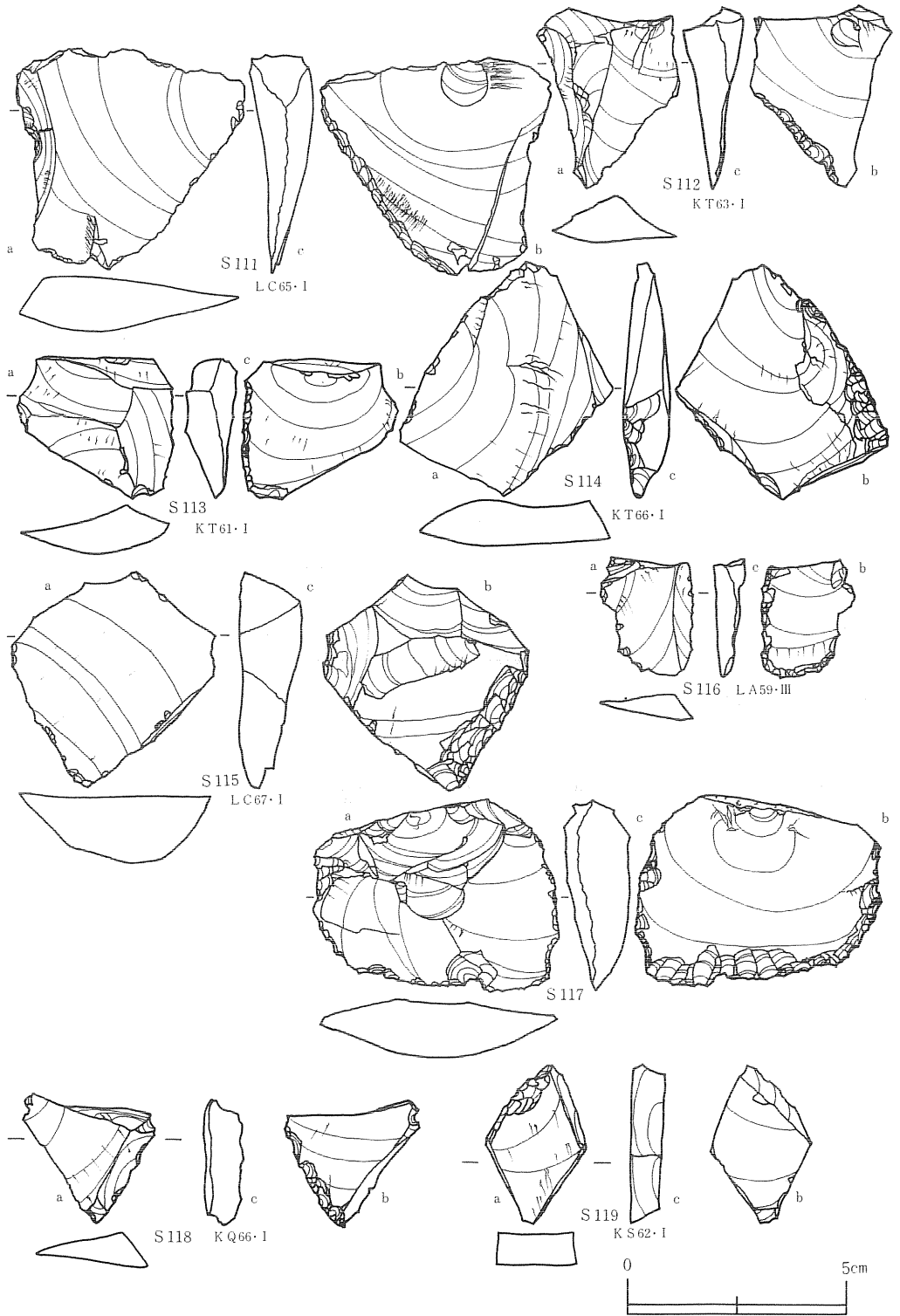
第36図 遺構外出土遺物(15)

第37図 遺構外出土遺物(16)



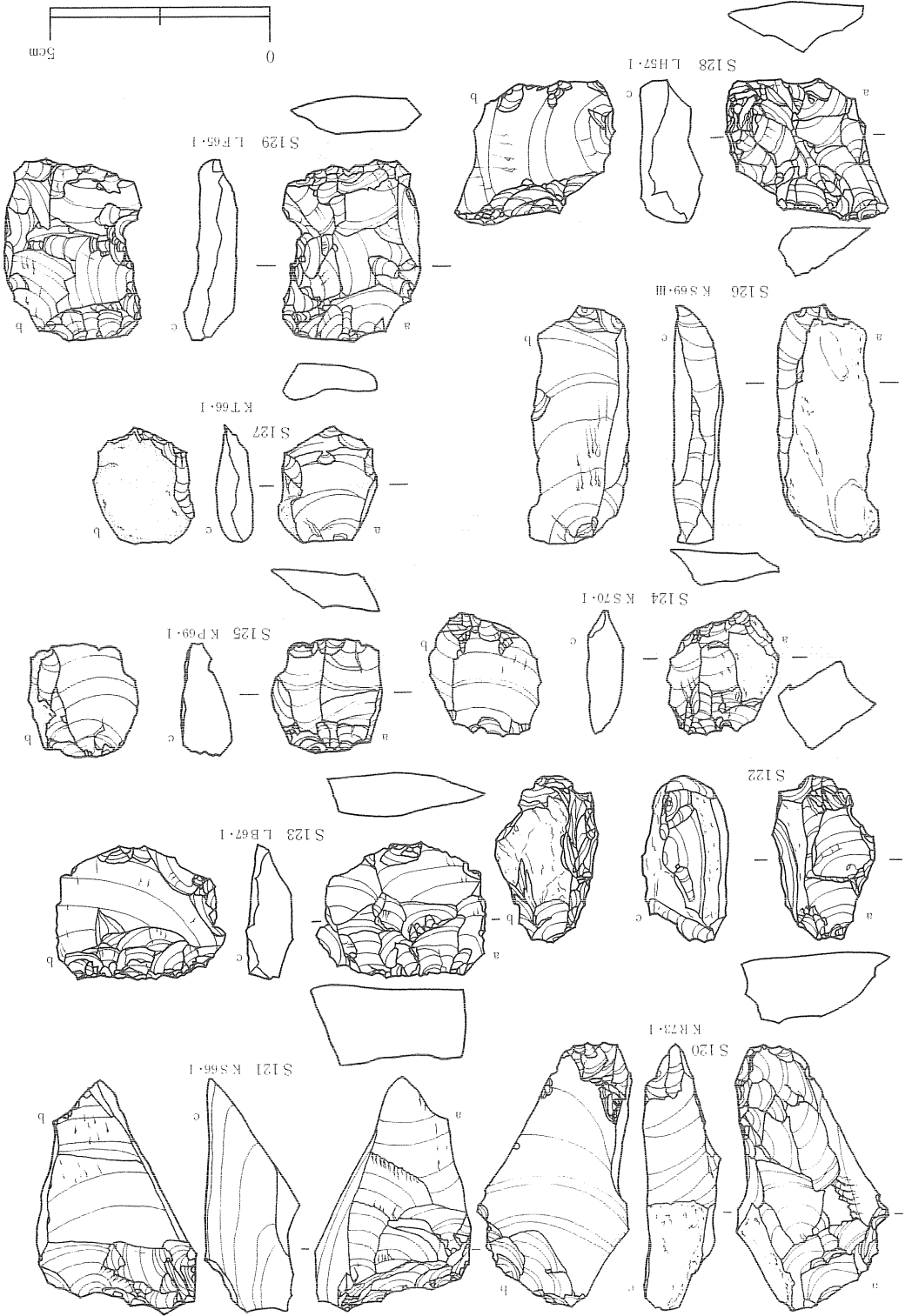


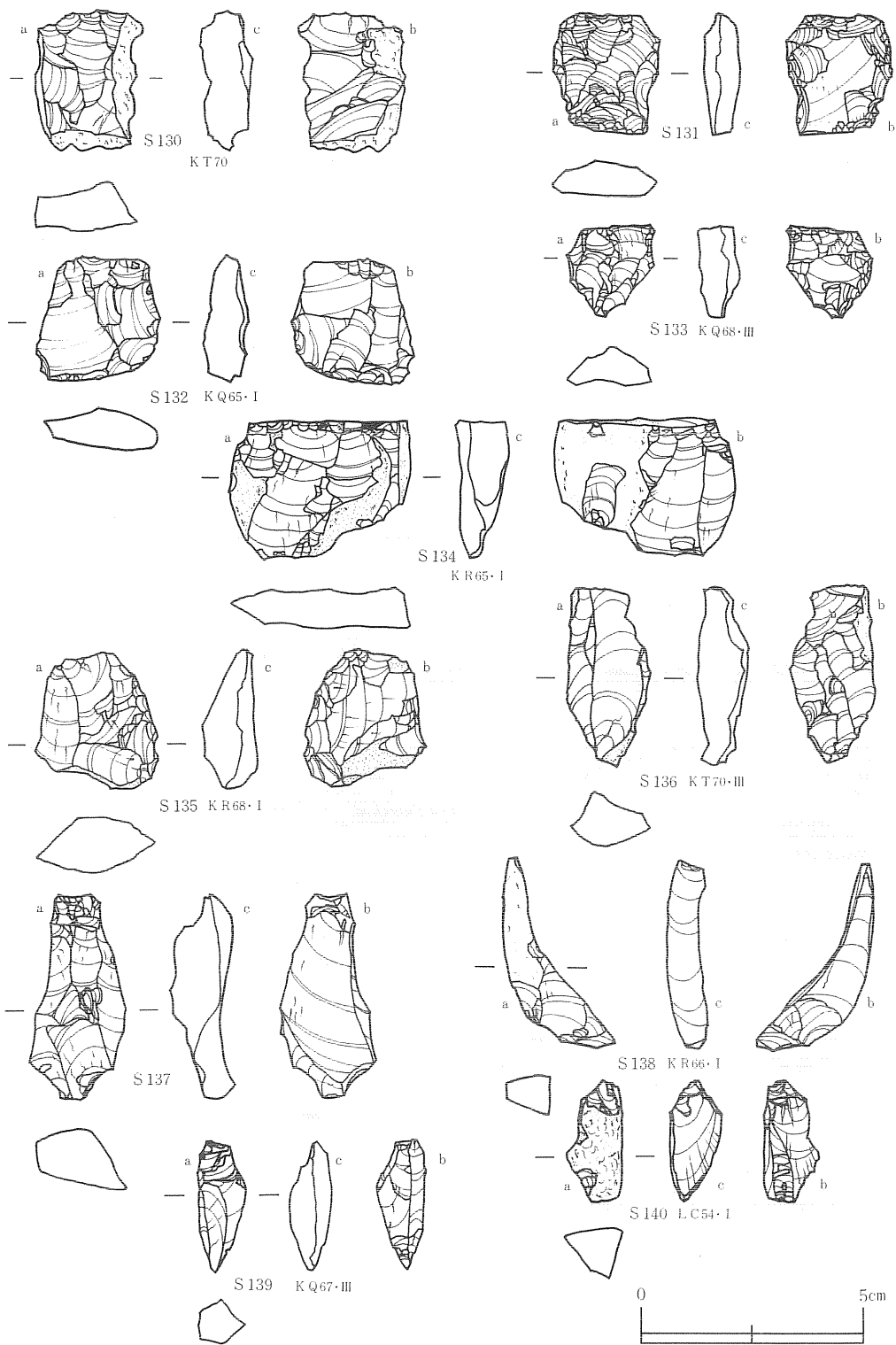
第38図 遺構外出土遺物(17)



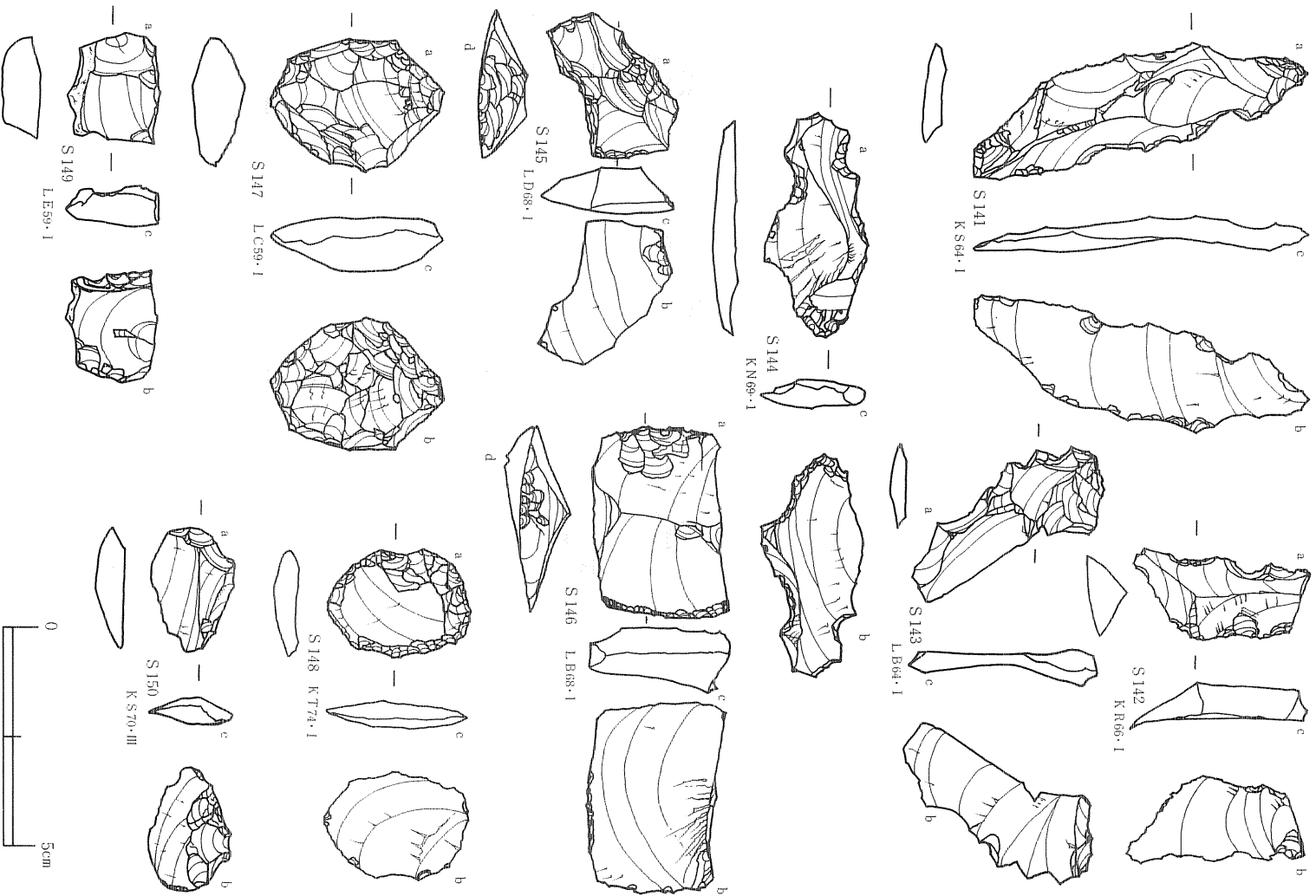
第39図 遺構外出土遺物(18)

第40図 遺構外出土遺物(19)

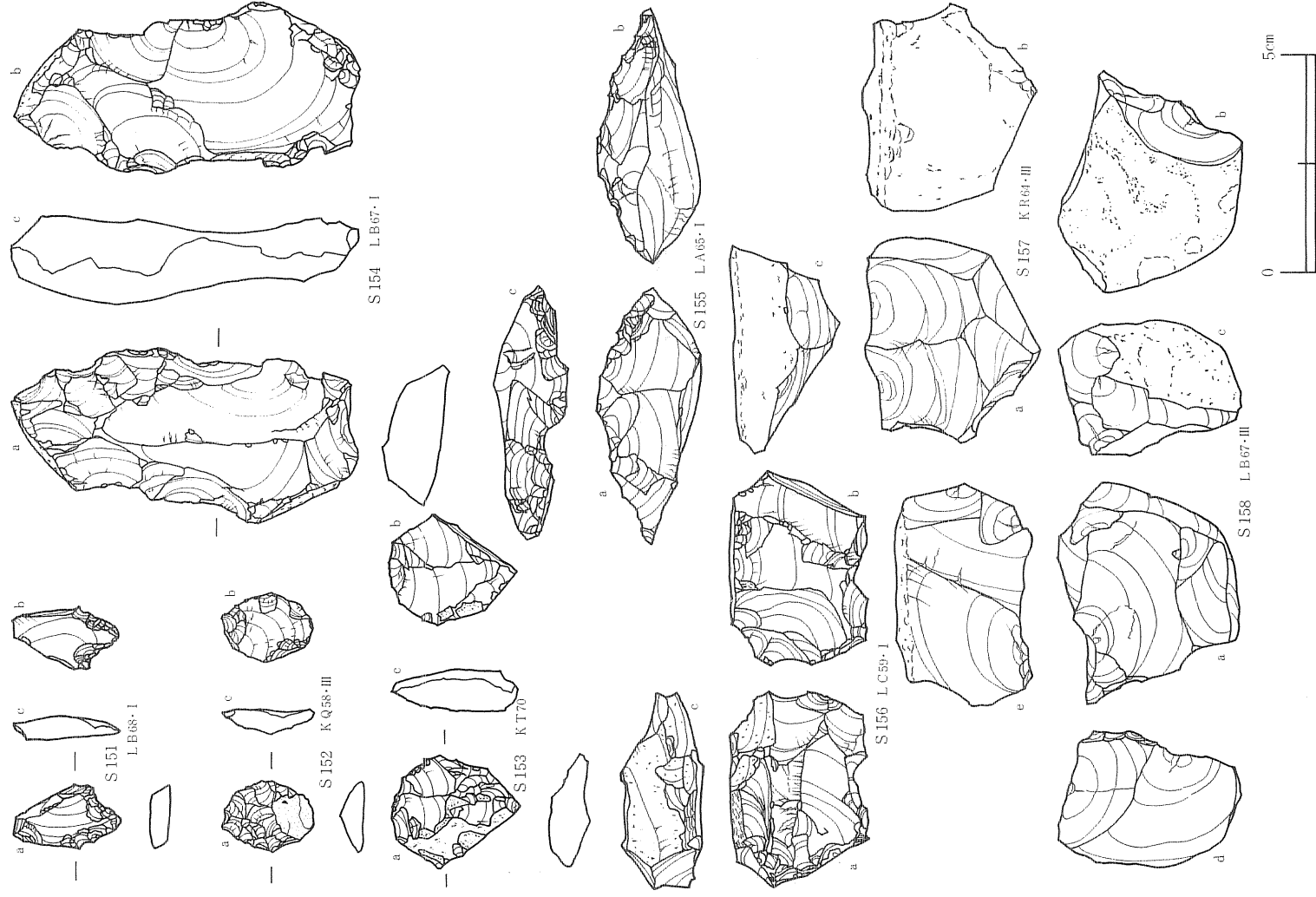




第41図 遺構外出土遺物(20)



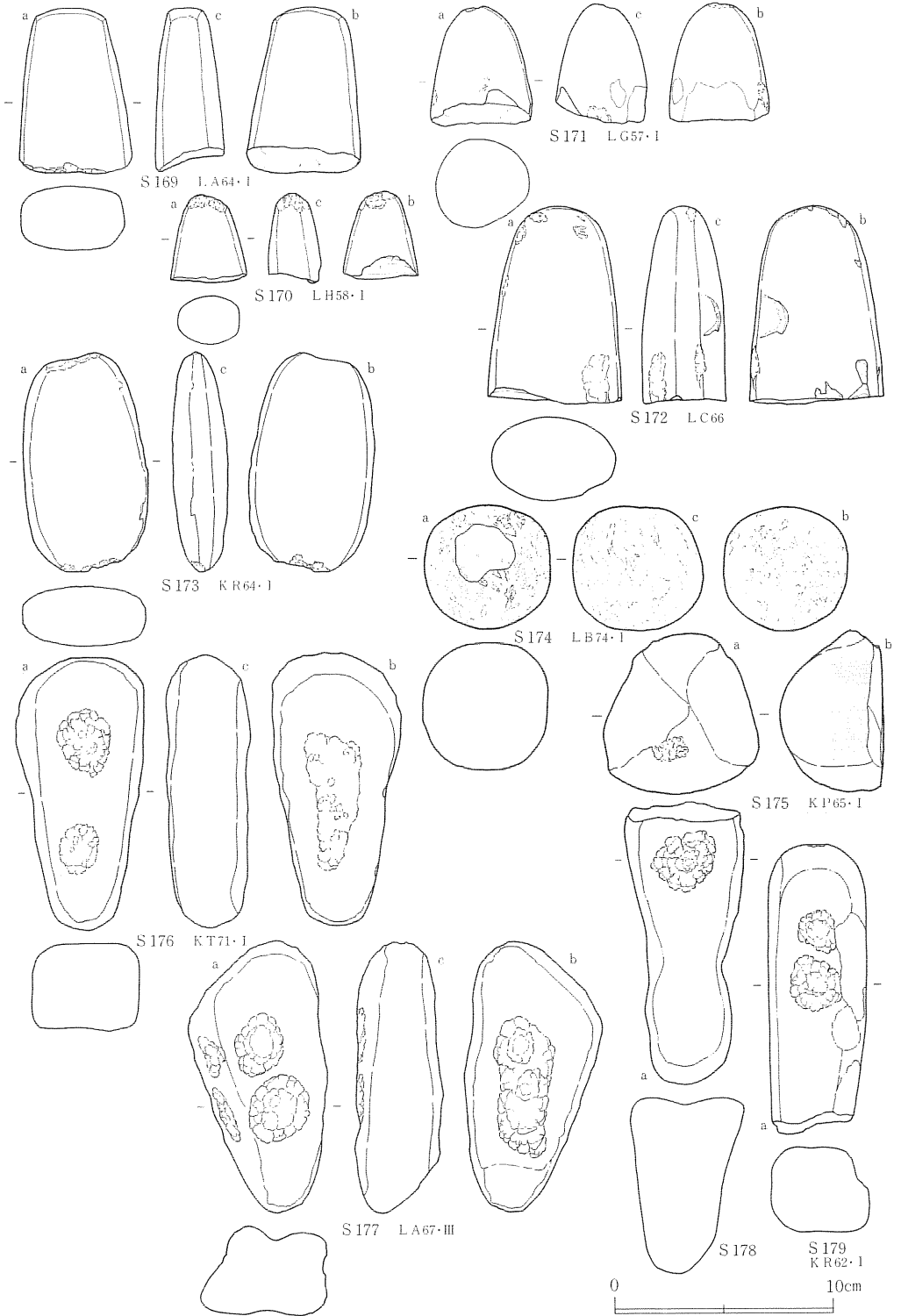
第42図 遺構外出土遺物(21)



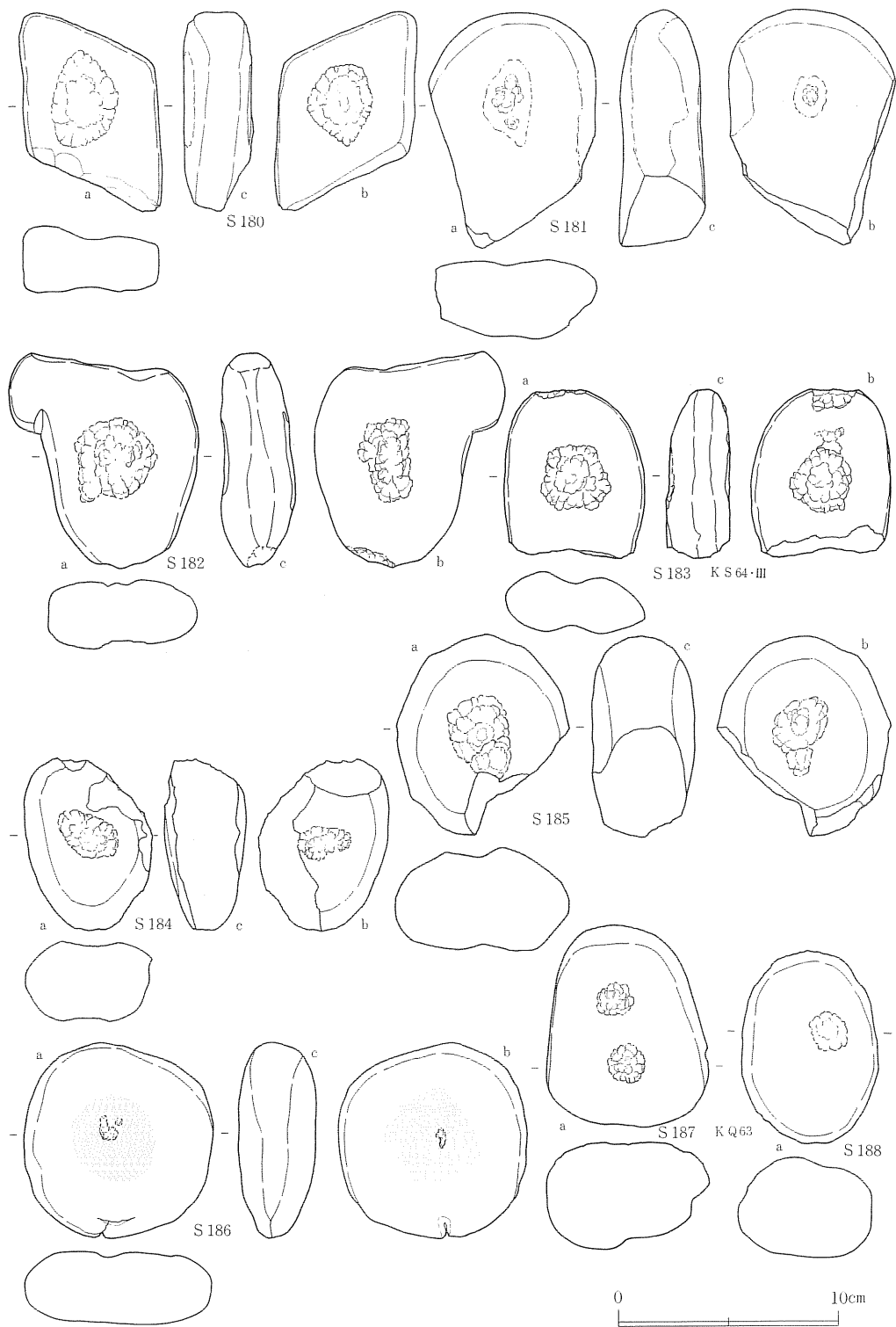
第43図 遺構外出土遺物(22)



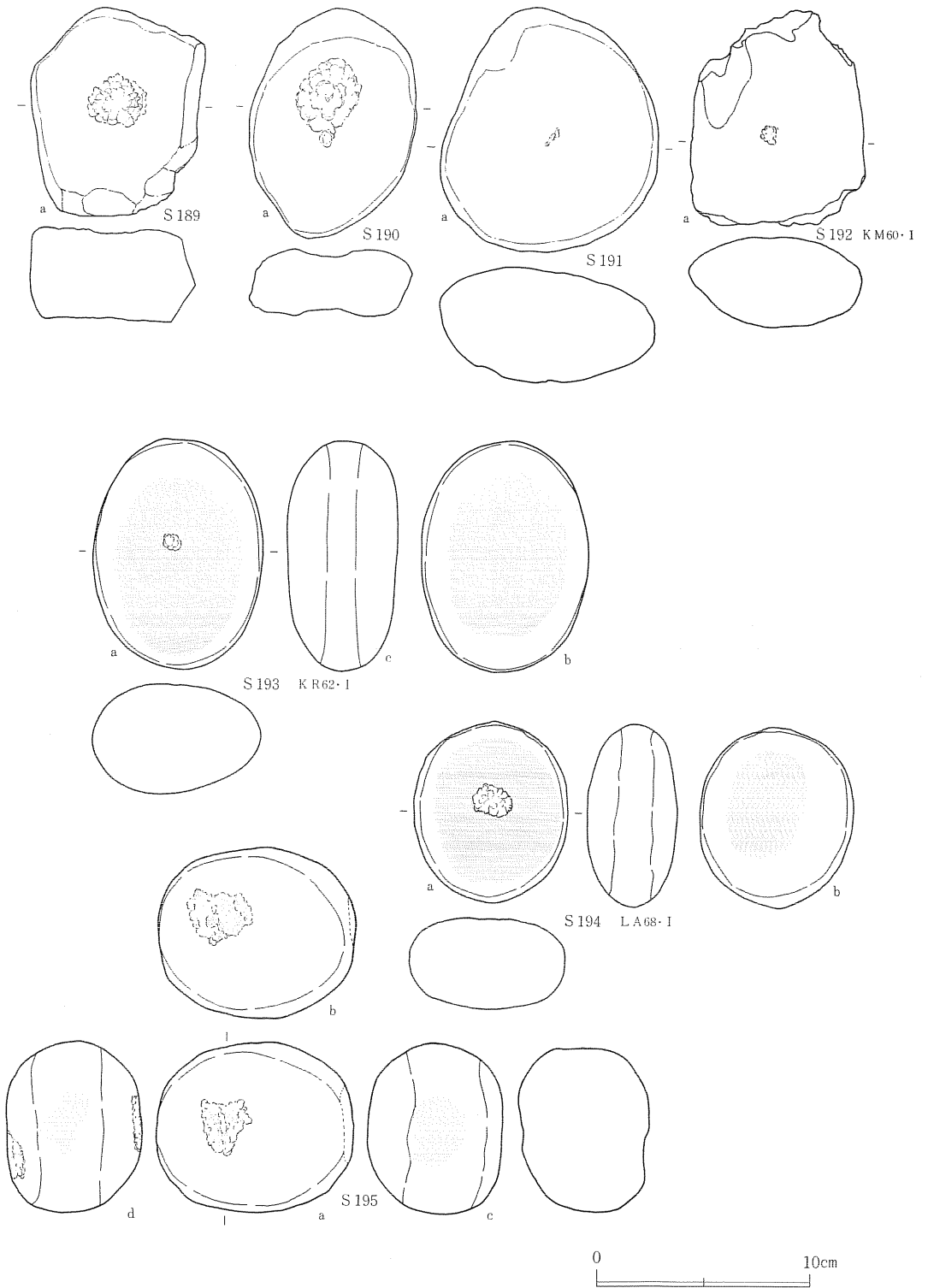
第44図 遺構外出土遺物(23)



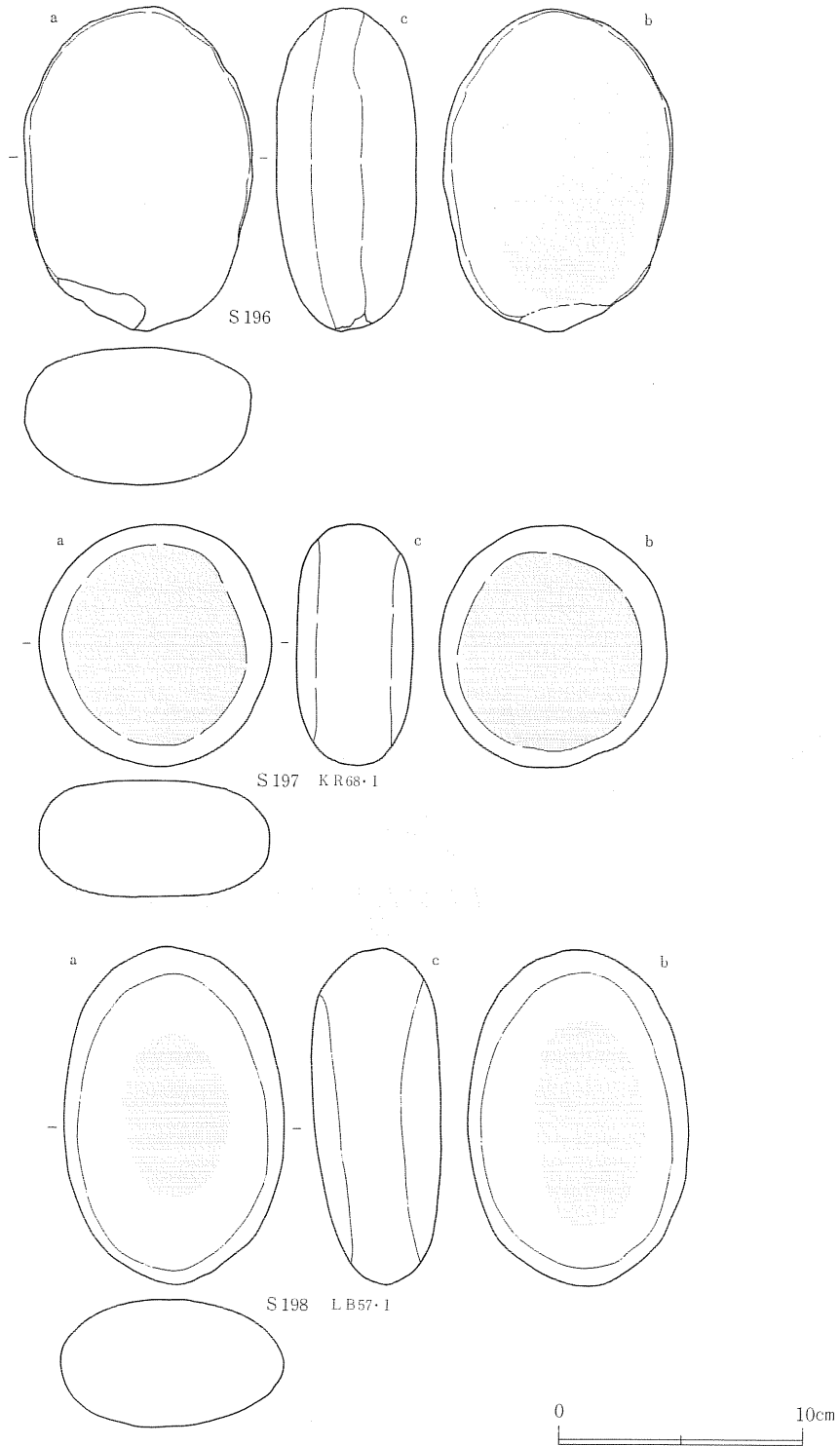
第45図 遺構外出土遺物(24)



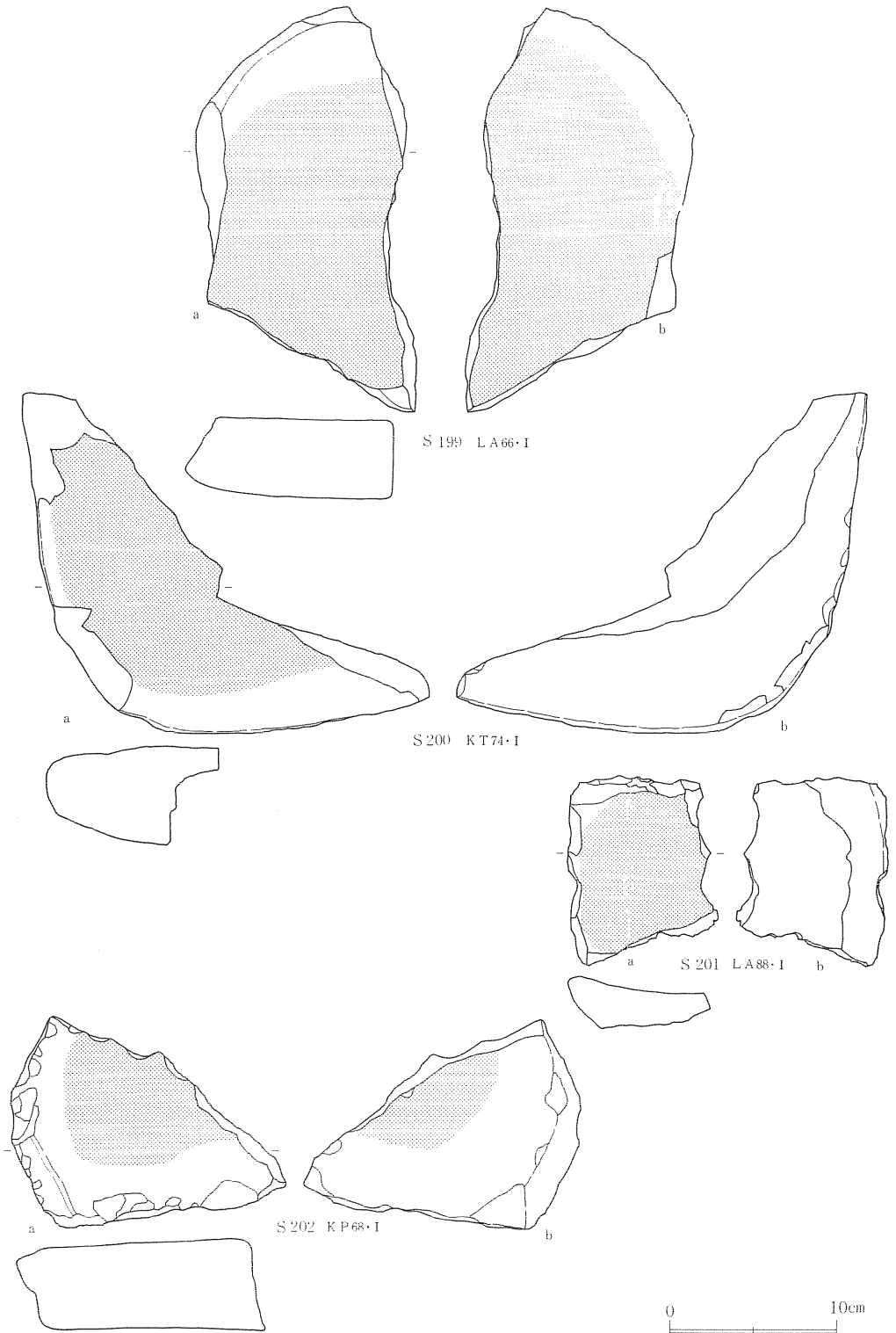
第46図 遺構外出土遺物(25)



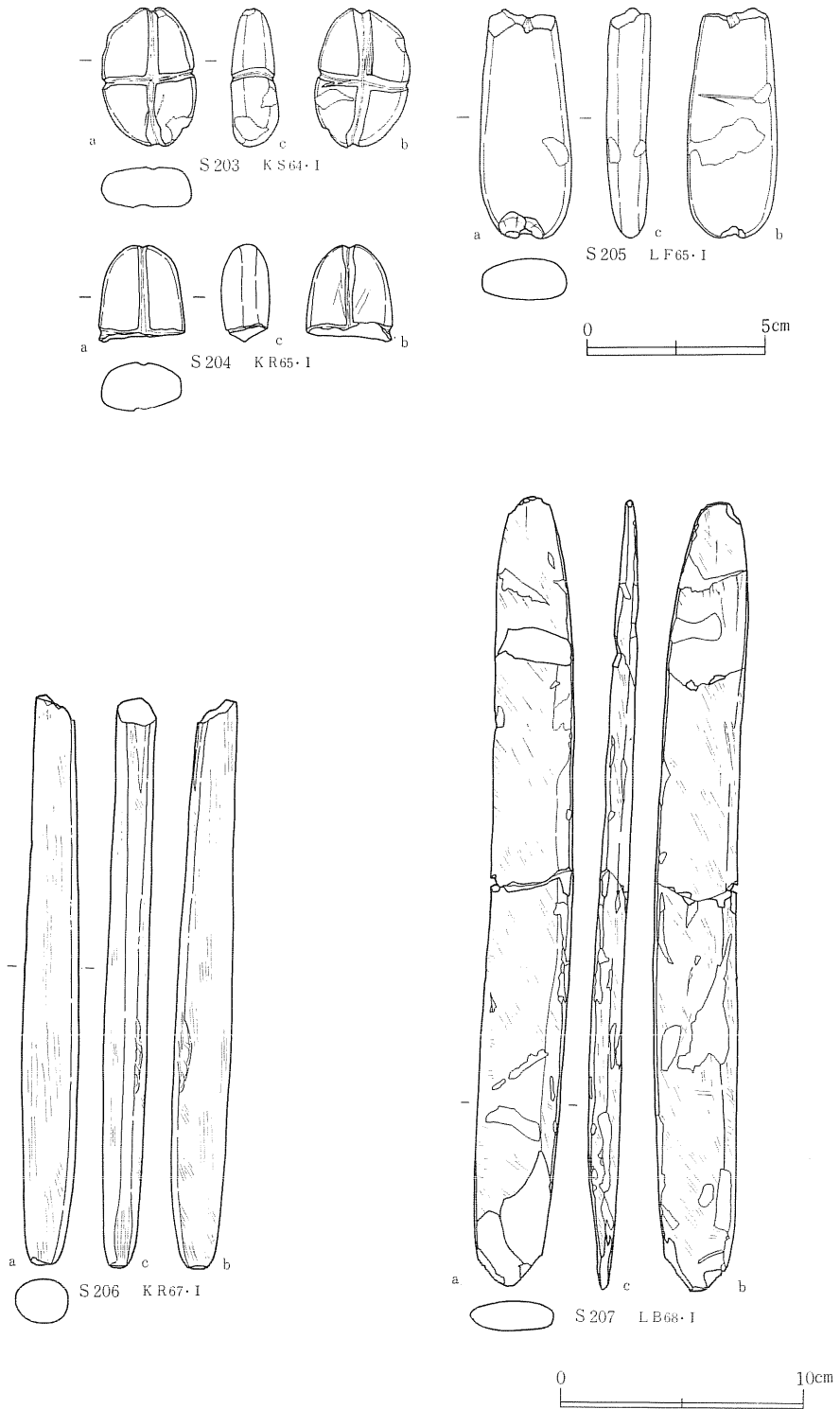
第47図 遺構外出土遺物(26)



第48図 遺構外出土遺物(27)



第49図 遺構外出土遺物(28)



第50図 遺構外出土遺物(29)

2 弥生時代

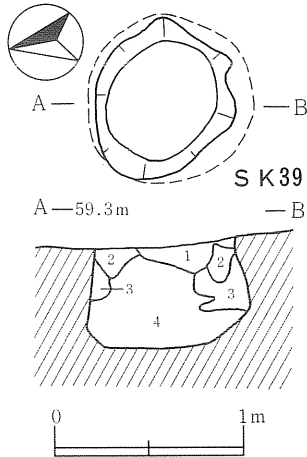
(1) 検出遺構と出土遺物

① 土坑

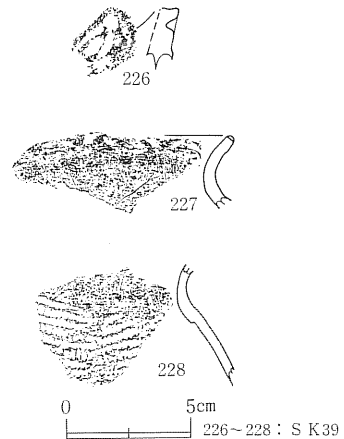
S K 39(第51・52図、図版10・17)

L B 70グリッド北西側に位置する。Ⅲ層上面での検出であり、縄文時代の土坑S K 45を切っている。平面形は82×74cmの不整円形をなし、壁は底に向かって広がっており、底面は平らである。底面径は約90cm、検出面から底面までの深さは55cm前後を測る。覆土は4層に分かれ、1・4層は炭化物を多量に含み、いずれも人為的埋土であろう。出土遺物には少量の土器片がある。227・228は同一個体で、頸部で強く屈曲し、口縁が外反する甕である。口唇部には「ハ」の字状の刻みが施され、胴部にはL R縄文が横走る。弥生時代中期の土器であろう。226は混入とみられるⅢ群1類の縄文土器深鉢の波頂部片である。

本土坑は出土遺物から弥生時代中期に属する。



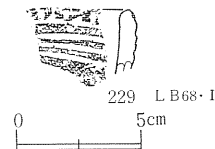
第51図 S K 39土坑



第52図 遺構内出土遺物(10)

(2) 遺構外出土遺物(第53図、図版23)

該期の確実な遺物は229の土器1点のみである。口縁部には4条の平行沈線がめぐり、口縁上端には上下から交互に刺突が施されている。弥生時代後期に属するとみられる。L B 68グリッドI層からの出土である。



第53図 遺構外出土遺物(30)

3 古代および中世

(1) 遺構外出土遺物(第54図、図版26)

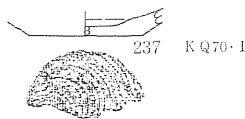
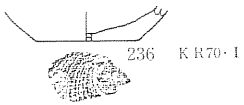
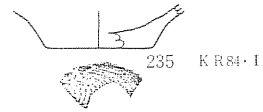
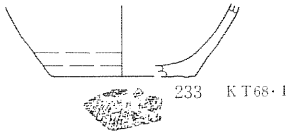
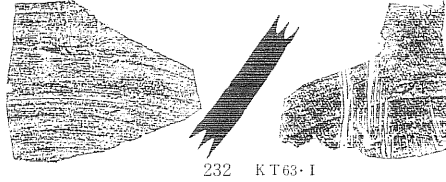
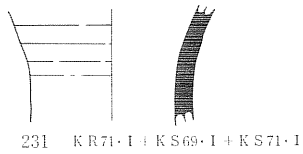
本調査区からは該期の遺構は確認できず、遺物も少量で摩滅が著しく、後世の攪乱を大きく

上野台遺跡

受けたものと考えられる。230は須恵器の甕、231は壺である。233～238は土師器坏である。232は珠洲系の片口のすり鉢である。



230 K S67・I+KT68・I+KT69・I+LA69+LB70・I+LB74・I+LC73・I



第54図 遺構外出土遺物(31)

第3章 B区の調査の記録

第1節 B区の層序(第55図)

B区では、斜面部を除く台地状を呈する部分は、ほとんどが重機による著しい削平を受けている。そのために、地表は攪乱された土や薄い表土によって地山面が直接被われている状況である。南斜面においても、地山より上層の自然堆積はなく、東西・北側の斜面から基本層序を選択せざるを得なかった。これらの中でも、北側・西側の斜面堆積層は薄く地山面まで40cm前後であり、南東緩斜面が最も有効であると判断された。よって、基本層序はMR 68グリッド東壁の安定した土層を図示してある。

I層 暗褐色土(10Y R3/3) 表土層。層厚20~25cm。

II層 黒褐色土(10Y R1.7/1) 粘性しまりとも普通である。層厚約10cm。

III層 暗褐色土(10Y R3/3) 粘性しまりとも普通である。約1mmの炭化物粒を微量に認める。層厚約10cm。

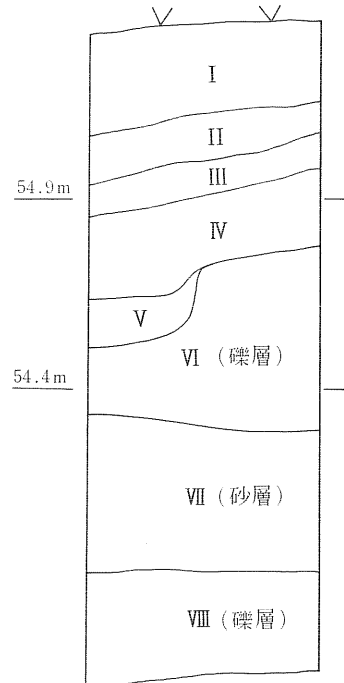
IV層 褐色土(10Y R4/4) 粘性しまりとも普通である。約1mmの炭化物粒を微量に認める。層厚約20cm。

V層 黄褐色土(10Y R5/6) 粘性しまりとも強である。層厚10~25cm。

VI層 黄褐色土(10Y R5/6) 礫層。1~5cmの礫を多量に含む。良くしまっている。層厚約40cm。

VII層 オリーブ黄色土(5Y 6/3) 砂層。1~5cmの礫を少量含む。良くしまっている。層厚約40cm。

VIII層 オリーブ黄色土(5Y 6/3) 礫層。1~5cmの礫が多量に含まれる。良くしまっている。礫は第VI層よりも密に含むが、5cm大のものは第VI層に多い。



第55図 B区基本土層模式図

第2節 検出遺構と遺物

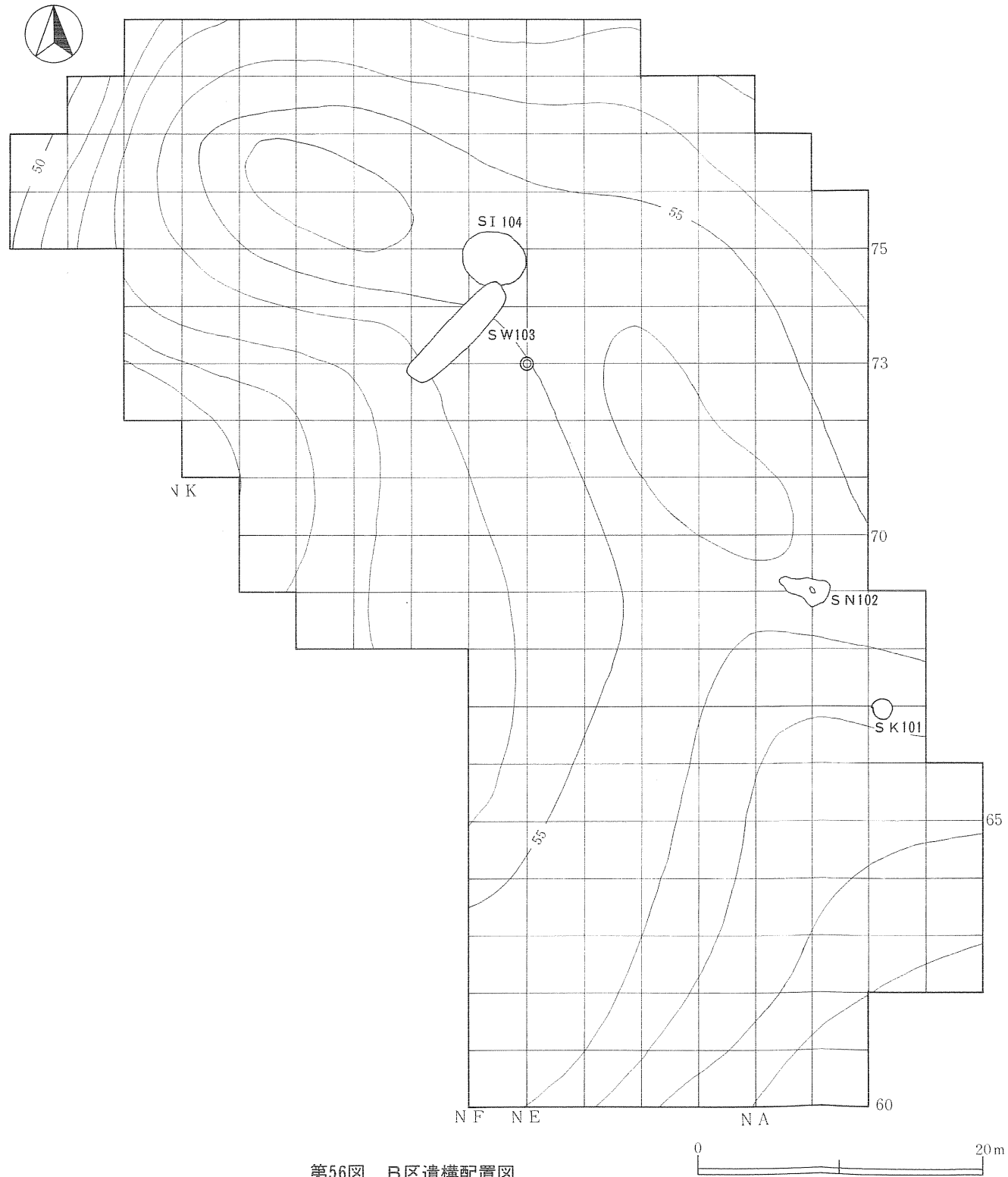
1 縄文時代

(1) 検出遺構と出土遺物

① 竪穴住居跡

SI 104(第57・59・60図、図版39・41～43)

調査区北側の尾根状地形にあり、ME74グリッドに位置している。竪穴住居跡は、重機による著しい削平を受け原形はとどめていない。また、南壁はSW103によって切られ、中央東側では長さ約2m、幅約1.2mの風倒木によって掘り起こされている。住居跡は、わずかに残された北壁やピット、炉の他、土器埋設などによって、おおよその状態を知ることができる。その規模は、径がほぼ5mと考えられ、覆土は約10cmである。残存する床は、わずかしがなく、その部分はあまり硬くない。柱穴はP₁～P₁₃まで検出され、その規模はP₁が径20～25cm・深さ約20cm、P₂が径約30cm・深さ約40cm、P₃が径約20cm・深さ5cm、P₄が径約20cm・深さ約10cm、P₅が径約25cm・深さ約10cm、P₆が径約20cm・深さ約20cm、P₇が径約20cm・深さ約10cm、P₈が径約25cm・深さ約15cm、P₉が径約20cm・深さ約5cm、P₁₀が径30～35cm・深さ10cm、P₁₁が径約30cm・深さ約20cm、P₁₂が径20～40cm・深さ25cm、P₁₃が50～55cm・深さ約40cmのピットで、平坦な底面から壁は直立ぎみに立ち上がる。中には焼土を含んでいる。竪穴住居跡中央には炉があり、その掘り方は長軸160cm×短軸50～70cmで、最も深い部分は15cmである。底部は中央で緩く窪み、南東側にかけては緩やか、北東・南西側ではやや勾配がつく。埋設土器は、長軸約60cm×短軸約40cm・深さ約25cmの掘り方中央に、正位の状態で設置してある。土器は口縁部と底部を欠いた深鉢形土器である。また、住居跡の推定北東壁から北東約2mの地点には、径約50cmの範囲で薄い焼土があり、当住居跡と関連していた可能性がある。出土遺物は、上述した埋設土器以外に覆土から数片の縄文土器が出土した。出土土器1～7は精製土器で、RL縄文、沈線、隆帯、無文帯、指頭圧痕文などで文様を構成している。これらは同一個体と考えられ、3のような突起を4箇所もつ深鉢形土器である。1～5は口縁部で、2・3は突起状の部分でその上面には、隆線による渦巻文が施されている。その直下には円錐状の刺突があり、さらに下には3のように隆線と沈線の組み合わせによる縦の渦巻状の文様を施してある。1には補修孔がある。7は縄文を施した後、指頭圧痕文は浅い撫でから連続し、撫でのはじまりから押さえの端までは約2cmである。胎土には、1～2mmの砂粒が顕著であり、焼成は良好。色調は1～4・6では、表面がにぶい褐色(7.5YR6/3)であるが、裏面は炭化したり煤状炭化物の付着するもの6もある。5・7は表裏面とも橙色(7.5YR7/6)を示す。8～22は、土器埋設遺構の粗製深鉢形土器である。表面にはLR縄文を施す、胎土は脆く焼成は表面が浅黄橙色(10YR8/3)、裏



第56図 B区遺構配置図

面も浅黄橙色(10Y R 8/4)となる。表面には、煤状炭化物がわずかに認められる。以上はⅢ群1類の土器である。

②焼土遺構

S N102(第58・60図、図版40・43)

調査区の中央やや南東の緩斜面、L T69グリッドを中心に位置している。北側壁が著しく削平された掘り込みの覆土に、20×20cmの範囲で焼土が検出された。焼土は掘り方中央にあり、床面から約5cm上で確認された。東側には壁を切って長軸40cm×短軸30cm・深さ10cmのピットがある。落ち込みの床面は北側で最も低く、南側では緩い傾斜を示している。壁は緩やかに立ち上がる。覆土中から縄文土器が3点23～25が出土している。23・24はR L縄文、25はL R縄文を施す。胎土は1～2mmの砂粒を少量含み、焼成はやや不良。色調は表面が浅黄色(10Y R 8/3)～灰黄褐色(10Y R 6/2)で、裏面は浅黄橙色(10Y R 8/4)を示す。

③土 坑

S K101(第58図、図版40)

調査区の南東側緩斜面、L R67・68グリッドに位置している。平面形は上面が長軸1.1m×短軸1mの不整形、底面が径70～80cmの略円形を呈する。深さは約1mである。底面はやや凸凹しており、壁は直立もしくはやや内傾して直線的に立ち上がる。その壁は上面より約20cm下で屈折し、外に摺鉢状に開く。遺物は出土していない。

(2)遺構外出土遺物

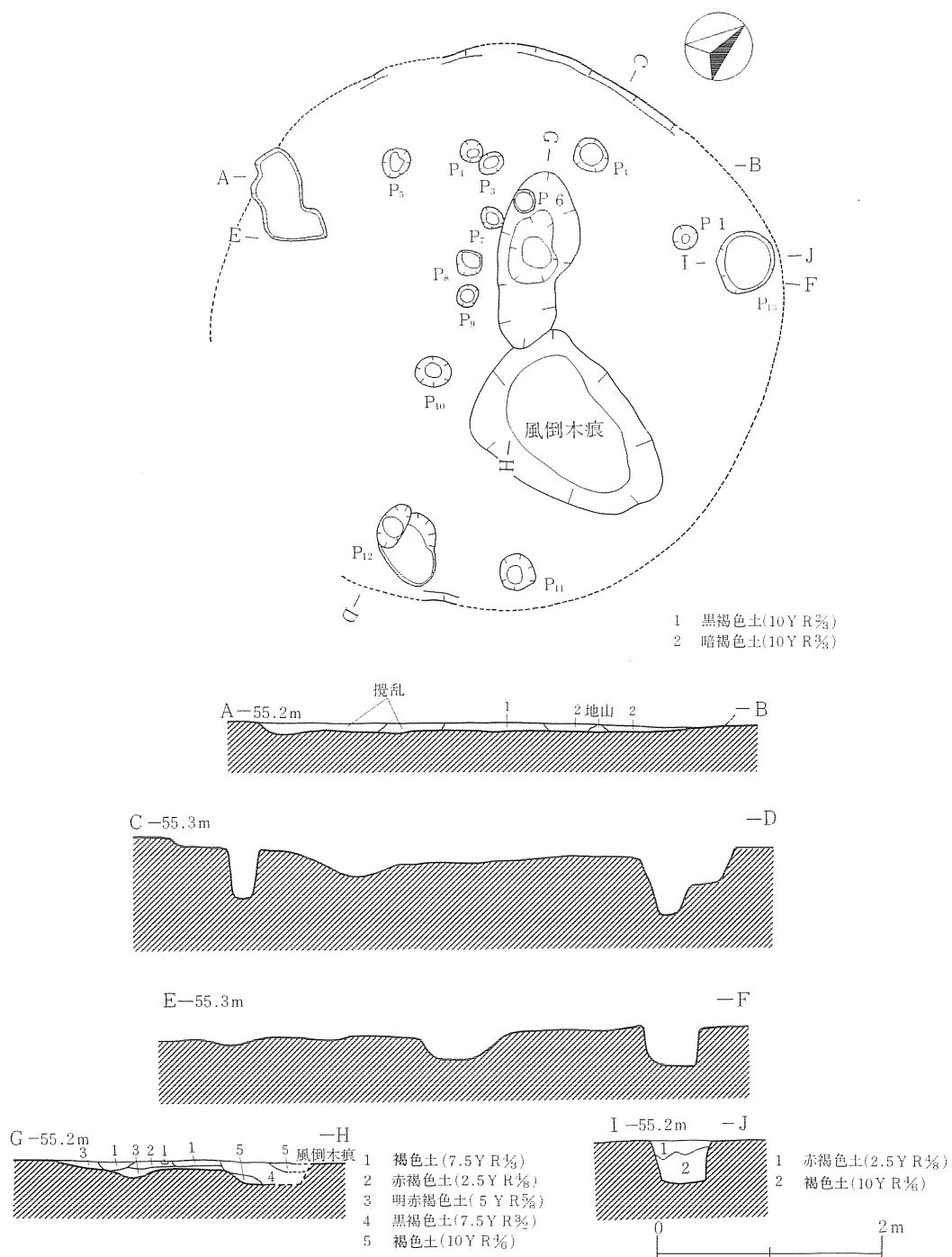
①土 器(第61・62図、図版43～45)

26は、R L縄文による横位の回転が認められる。胎土には径約1mmの砂粒を少量含む。焼成は不良。色調は表裏面ともに、にぶい褐色(7.5Y R 5/4)を示す。

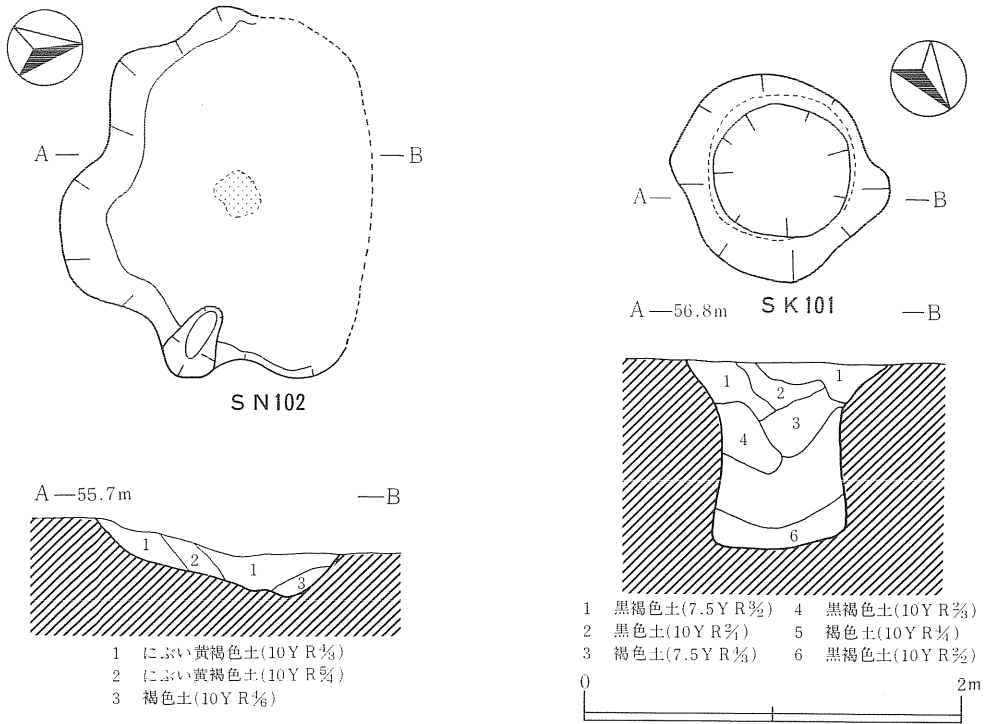
27～30はR L縄文、隆帯、刺突文、指頭圧痕などの文様で構成しており、S I 104堅穴住居跡のものに類似した精製深鉢形土器の破片である。27～29は口縁部で、28は突起頂部に隆帯による渦巻文を施し、直下に円錐状の刺突をもつ。27には指頭圧痕が施され、30には沈線による円形の文様がある。胎土は径約1mmの砂粒を少量含み、焼成はやや不良。色調は表裏面とも、にぶい褐色(7.5Y R 5/4)で、煤状炭化物を付着するもの(28・30)もある。

31～35はL R・R L縄文による地文と植物の茎を利用したと考えられる沈線、縄文を磨消したと考えられる無文帯で文様が構成されている。胎土は径約1mmの砂粒が顕著で、焼成は良好。色調は表面が浅黄橙色(10Y R 8/3)、裏面が灰白色(10Y R 7/1)を示す。

36～38は捺糸文を施す土器である。36は口縁で口唇部はやや丸みをもつ。胎土はすべて1～2mmの砂粒が顕著で、焼成は良好。色調は表面では、36が灰白色(10Y R 8/2)、37が灰黄褐色(10Y R 6/2)、38が浅黄橙色(10Y R 8/4)である。



第57図 SI 104竪穴住居跡



第58図 S N 102焼土遺構, S K 101土坑

39～42は、LR縄文の地文を施す粗製深鉢形土器である。39は口縁部で、先端は外反ぎみになる。胎土は1～2mmの砂粒を顕著に認める。焼成はやや不良。色調は、表裏面とも橙色(7.5Y R7/6)を示す。表面にはわずかに煤状炭化物が付着する。

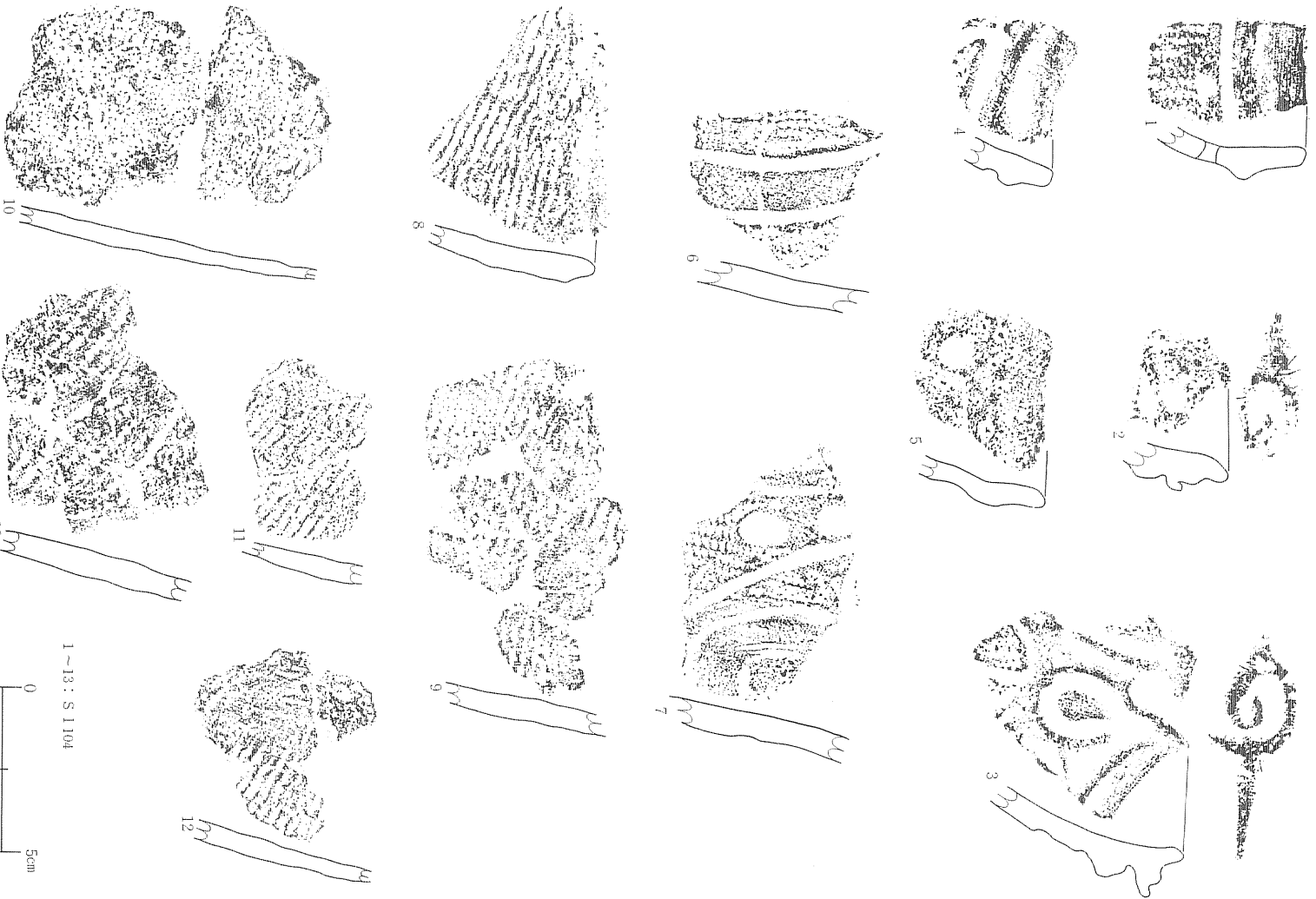
44～55は地文が縄文の破片である。46・52・53・55はLR縄文を施し、他はRL縄文を施す。胎土はいずれも1～2mmの砂粒を顕著に含む。色調は表裏面とも浅黄橙色(10Y R8/4)を示す。55の表面は煤状炭化物が付着している。

43・56～58は底部破片である。43・58は突出ぎみとなる。底面には網代痕を有するもの(43)、と木葉痕を有するもの(56～58)がある。胎土は1～2mmの粗い砂粒を顕著に含む、焼成はやや不良。色調は43が表裏面とも橙色(7.5Y R7/6)を示し、56～58は灰白色(10Y R8/2)を示す。

以上、文様構成から31～35は皿群1類の土器である。26を除く他の土器もほぼこの類に含まれるものと考えられる。

②石 器(第63・64図、図版46)

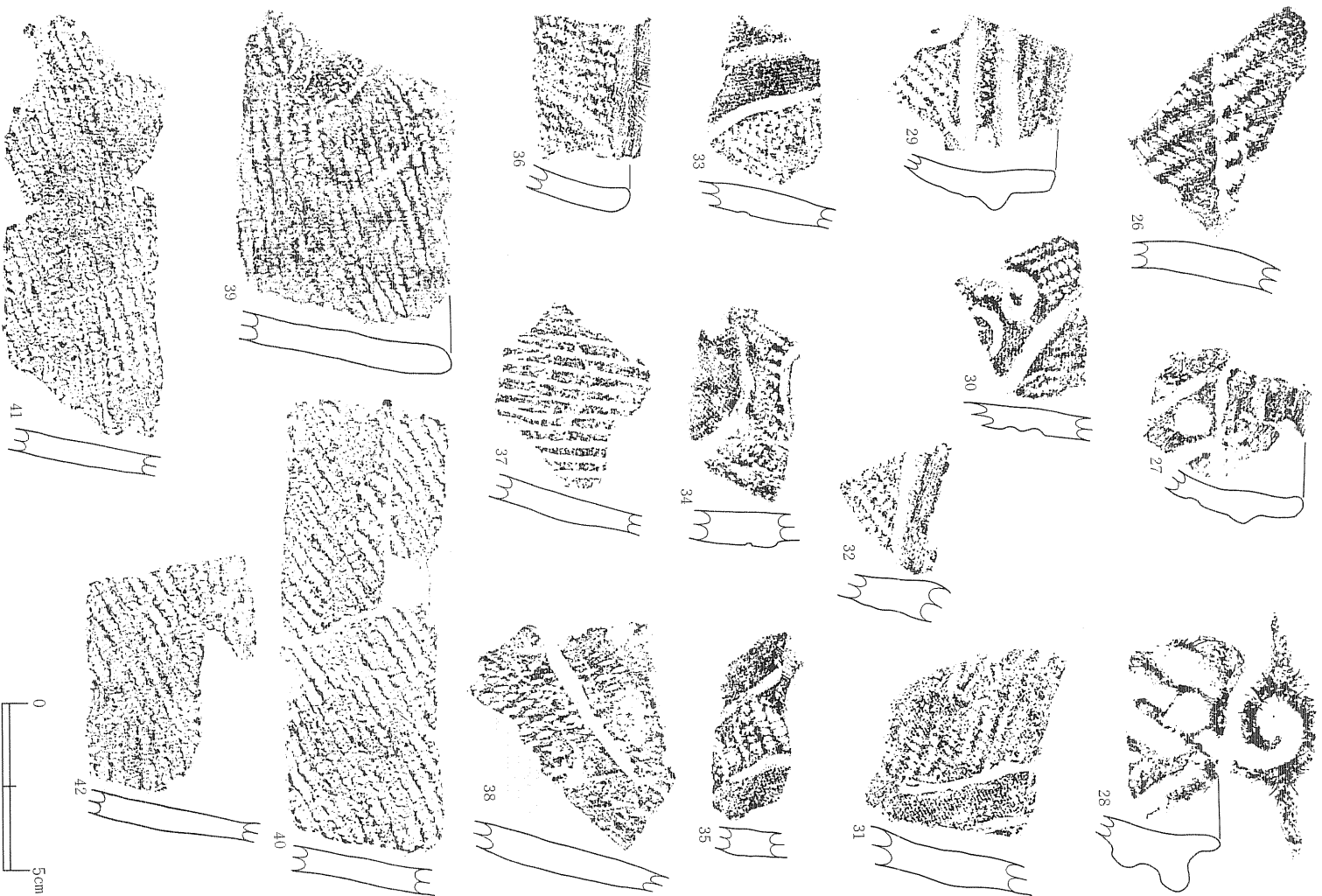
石 筥(S 1・2) S 1は長さ7.1cm・刃部幅2.4cm・厚さ1.2cmで、刃部には両面から丁寧な調整を施す。基部は尖らせてある。石質は頁岩。NE76グリッドから出土した。S 2は長さ10.7cm・刃部幅3.8cm・厚さ1.4cmで、撥形の形状を呈している。刃部には粗く大きな剝離を施す。



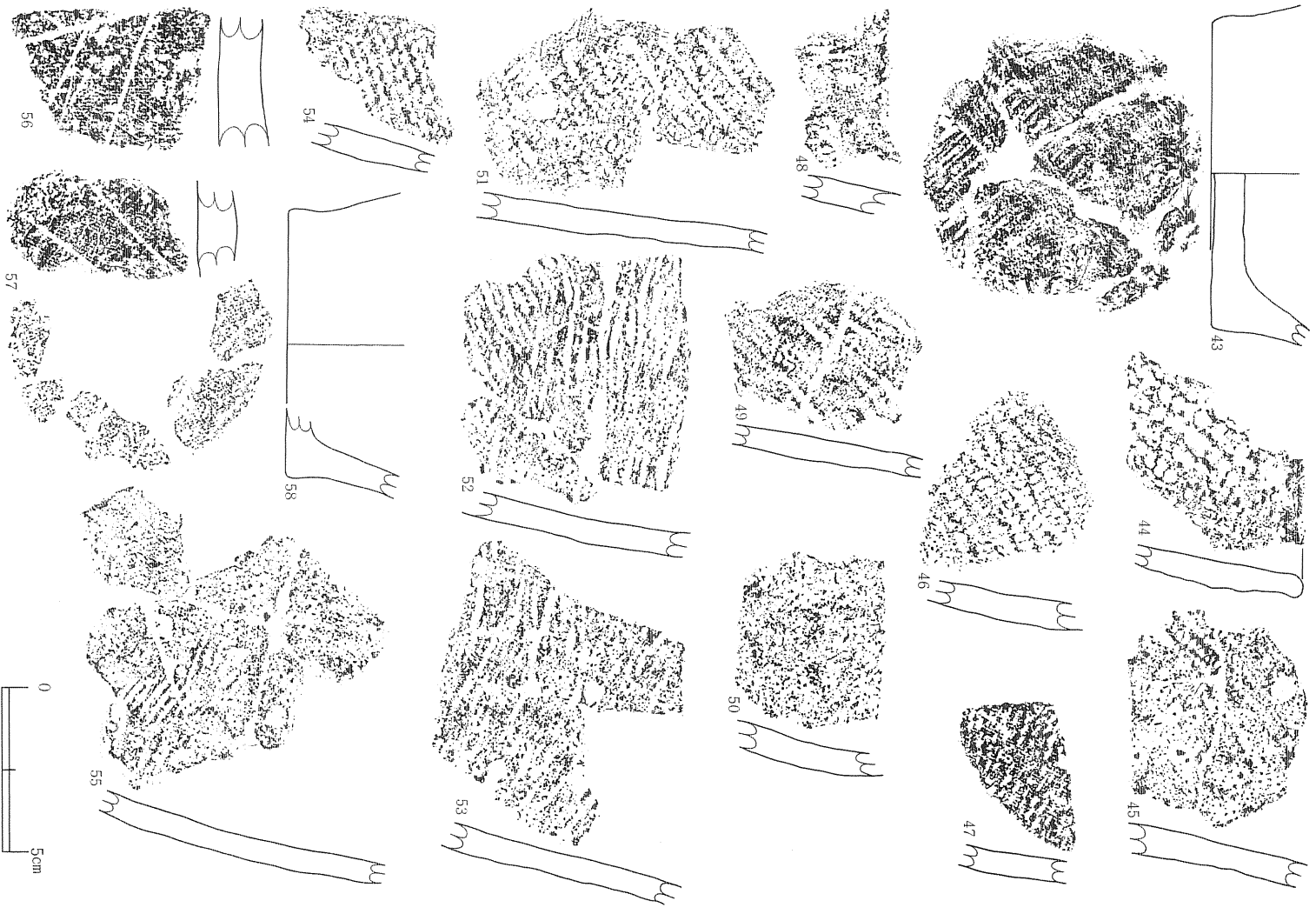
第59図 遺構内出土遺物(1)



第60図 遺構内出土遺物(2)

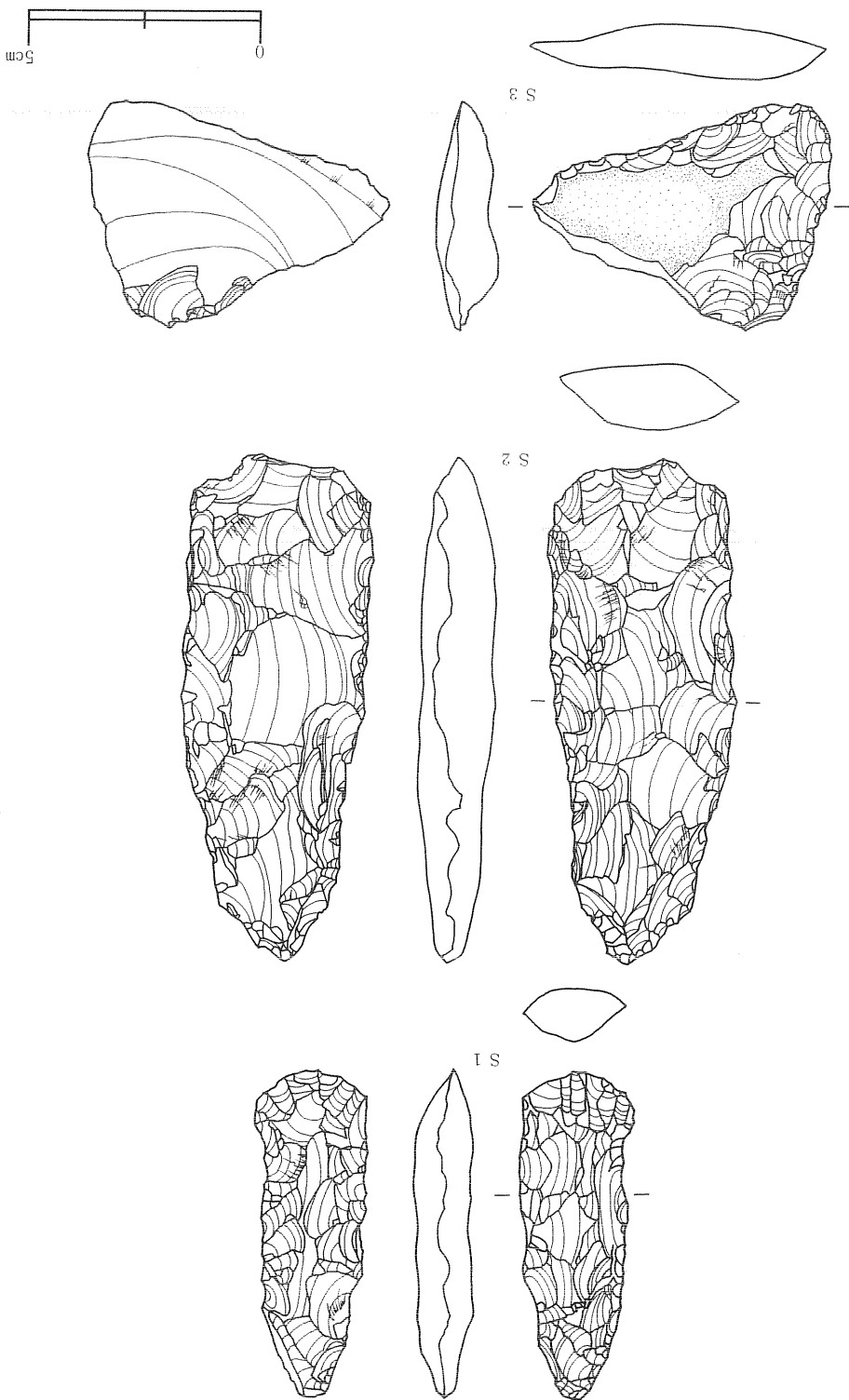


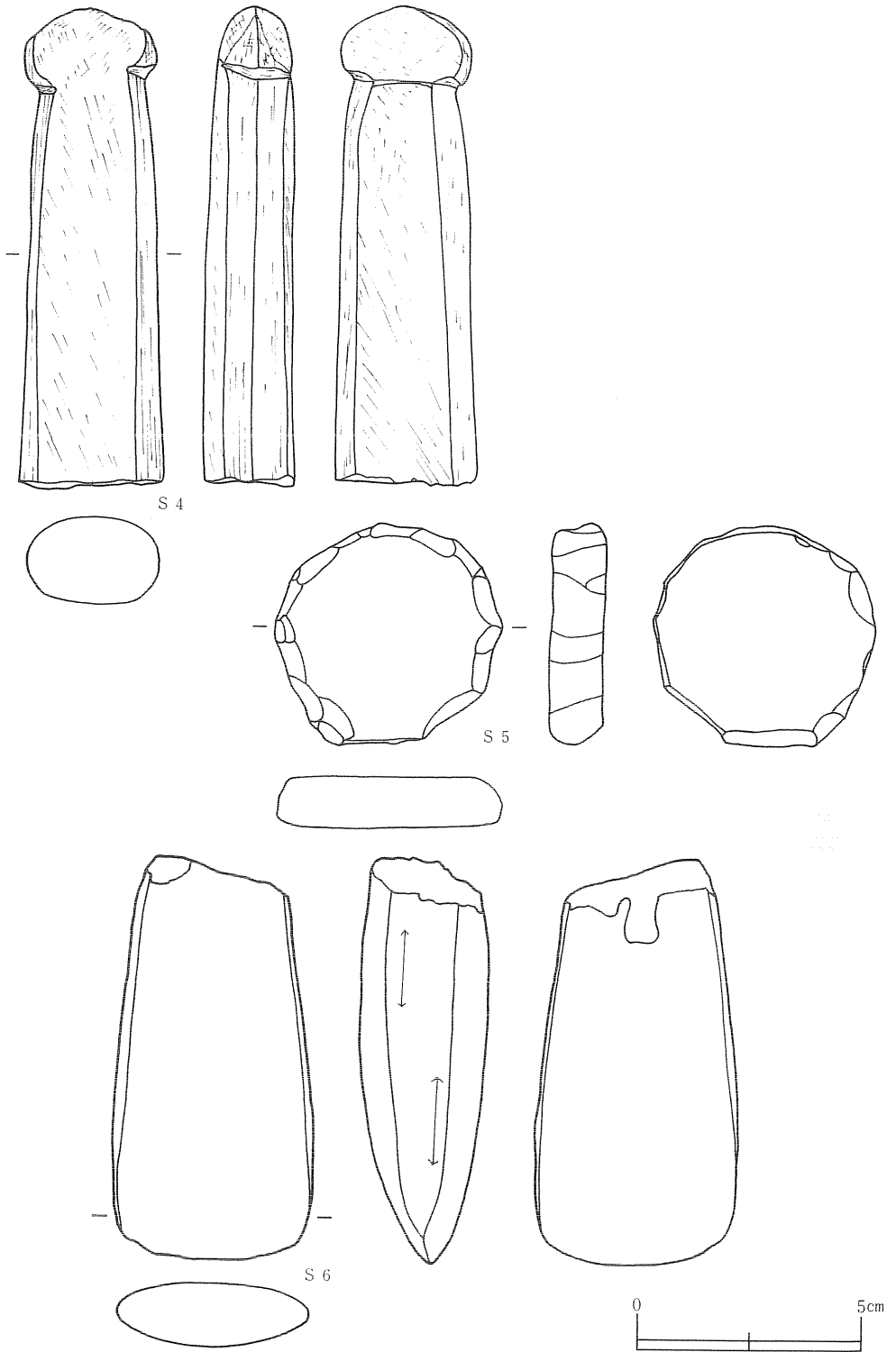
第61圖 遺構外出土遺物(1)



第62図 遺構外出土遺物(2)

第63図 遺構外出土遺物(3)





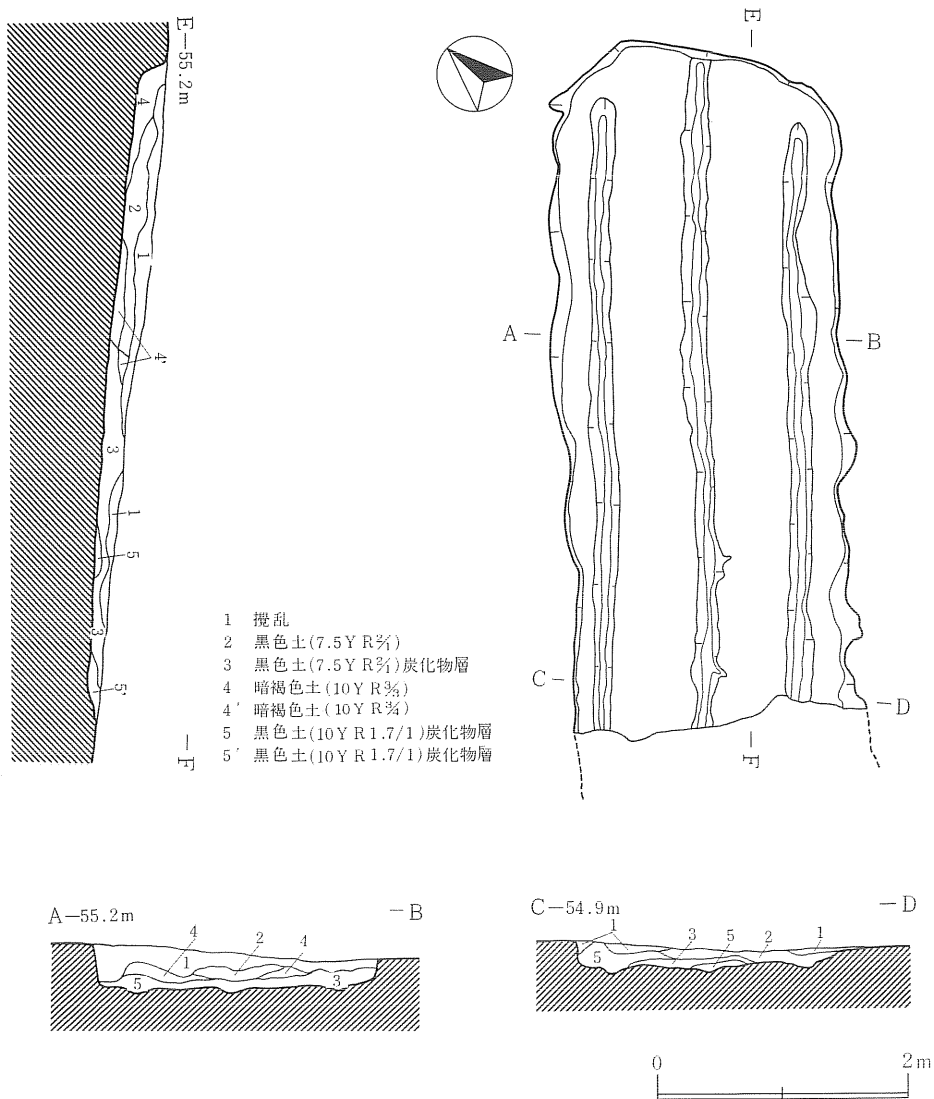
第64図 遺構外出土遺物(4)

上野台遺跡

基部は尖らせ丁寧な調整を施している。石質は頁岩。S I 104堅穴住居跡の攪乱から出土した。

スクレイパー(S 3) 長さ約4.5cm・刃部幅6.5cm・厚さ1.1cmで、刃部には比較的粗い調整を施す。石質は頁岩。NC75グリッドから出土した。

石棒(S 4) 現存長10.5cm・現存最大幅3.3cm・厚さ2cmである。両面は頭部付近まで連続した磨きを施し、その後、頭部に抉りを入れている。磨きは全面に及び、断面は楕円形を呈する。石質は凝灰岩。NF72グリッドから出土した。



円板状石製品(S5) 径約5cmの略円形を呈する。円板の周縁には粗い打撃が加えてあり、上下の円板面は丁寧に磨いている。石質は凝灰岩。ND69グリッドから出土した。

磨製石斧(S6) 現存長9.5cm・刃部最大幅4cm・厚さ2.7cmである。表裏両面および両側縁は丁寧に磨かれ、刃部は鋭い角度をつくる。石質は安山岩。表採資料。

2 近世以降

(1) 検出遺構

① 炭焼成遺構

SW103(第65図、図版41)

調査区の中央からやや北西にあり、平坦部から斜面にさしかかるNF73グリッドを中心に位置している。表土を除去した後、炭化物混じりの暗褐色土として確認した。遺構は緩やかな谷頭の部分に位置しており、その緩く窪みがちとなる地形を効果的に利用している。遺構は全面が重機により削平され、斜面下方の約半分は消失している。実測した壁の内側にも部分的に攪乱が及び、その結果、壁の輪郭はゆがんだ形状を呈している。覆土は斜面上方ほど厚い堆積状態を示し、深い部分では約25cm、下方の浅い部分では約5cmである。平面形は隅丸長方形を呈し、その規模は現存長が約5.5m、幅約2.2mである。長軸はN-50°-Wの方向を指し、床の傾斜角は5°である。削平された斜面下方の炭化物散乱状態から推測して、少なくとも全長8mはある大型の炭焼成遺構と確認できた。床や壁面は火熱を受けているものの、特に硬かったり赤化した様子は認められなかった。床面には幅10~25cmで断面が緩いU字形の溝が3条検出された。3条の溝のうち、中央の1つは奥壁に取り付いているが、両側の2条の溝は、奥壁から約20cm手前までで完了している。また、両側壁からの距離は10~20cmであり、中央の溝からは約40cmと等間隔を保っている。覆土は、3・5層において炭化物もしくは焼土を顕著に含む。3層では1cm前後の炭化物が充填し、5層では少なくなる。逆に、焼土は5層でブロックや粒子として含まれ、3層では粒子だけとなる。SN103は、その構築時に天井をもたない伏せ焼き技法を伴う炭焼成遺構であり、年代は不明である。ただし、調査時に約20年前は調査区一帯が松林となっていたということは分かっている。

ここでは、底面の溝について若干の考察を付け加えておきたい。本来、窯業遺構の中で床を掘り窪めている溝は、排水溝と考えるのが普通であるが、ここではその機能が当てはまるであろうかという疑問が生じた。通常、窯業遺構における排水溝は、湧水や地下水を排水したり、水分を遮断することを目的としている。しかし、本遺構では、湧水や地下水の流出はなく、もし、遺構に水が貯るとするならば、遺構それ自体が排水溝としての機能をもつと考えられる。本遺構はその操業技法の特色から、非操業時にはつねに風雨にさらされる状況下であり、天井を

もつ窯の操業の開始から廃窯まで恒常的に利用できるものとは、本質的な違いがある。また、これらの溝は、壁に沿うなどの工夫がなく、また排水溝とするのであれば、最も湿気を嫌う底面中央部にあえて設ける必要があるかなどの疑問が生じる。すなわち、細長いこの種の伏せ焼き技法をもつ炭焼成遺構には、あえて排水溝は必要としない、と考えるのである。よって、これらの溝には別な機能があると見るべきであり、5°の傾斜度も含めて、火力を高めるための^(註1)施設、通風溝と考えてみたいのである。

ここで他遺跡から検出されている、伏せ焼き技法をもつ大型の細長い炭焼成遺構について、その比較を行ってみる。県内における同じような炭焼成遺構は、雄和町滝ノ沢Ⅱ遺跡で5基、河辺町石坂台Ⅳ遺跡で3基、石坂台Ⅶ遺跡で2基が検出されている。^(註2) おおむね、これらの規模は全長8～10mで最大は10.3m、幅は1.5m前後で最大は1.85mである。全長は本遺跡において不明であるが、幅の規模より本遺跡の炭焼成遺構は、他の遺構に比べて格段に大きい。そして、他遺跡のものには溝は認められていないなどの点が指摘できる。これら規模の拡大化と溝の相関関係から、本遺構の溝は、規模の拡大化に伴う熱効率の悪さを補う目的として機能したと考えられる。従って、もしこれらの考えが正しいとすれば、奥壁に達しないで壁に沿ってある2条の溝は、極度な火力をあげないための意図的な構築であろう。さらに奥壁に取り付く中央の溝は、主要な通風溝と考えられるが、その取り付け部分で筒状の道具を用いて煙り出しの施設を形成していたと考えられる。よって、これら3条の溝は、遺構内の木炭を均一に蒸しあげるための機能を有していたと考えられるのである。

註1 通風溝の名称は、ここで初めて用いると思われるが、熱効率をあげるため風を送るのに役立つ溝、と定義しておきたい。

註2 秋田県教育委員会 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ』 秋田県文化財調査報告書 第150集 1986(昭和60年)

第4章 C区の調査の記録

第1節 C区の層序

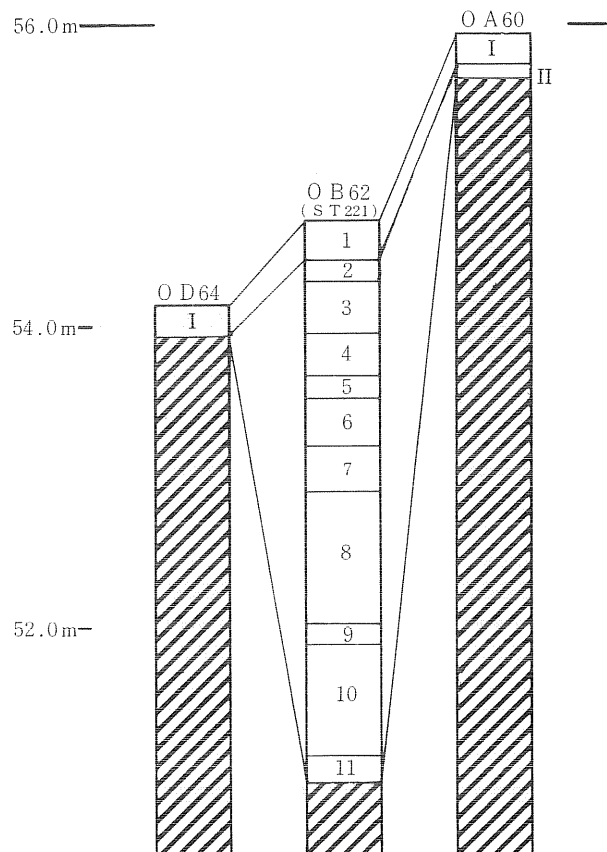
調査区は、標高56mを測る南東側平坦面と、一段低く標高53.5mを測る北西部及びその間の断層によって生じた小谷に分けて捉えられる。調査区の基本層序は以下のとおり(第66図)。

I層 黒褐色土(10YR2/3)層厚20~30cm、表土。II層 暗褐色土(10YR5/6)層厚5~10cm。
III層 黄褐色土(10YR5/6)地山。

調査ではI・II層から遺物が出土している。現状のII層は南東部平坦面上に部分的にしか堆積しないが、I層に比べややまとまった遺物が出土しており遺物包含層と捉えられる。また検出遺構は、地山を掘り込んで構築されており、III層上面が遺構確認面である。しかし、調査区の大部分は、戦後の開墾によって削平されており遺構・遺物の遺存状態は非常によくない。

北西部ではIII層中に多くの小円礫が含まれていたが、南東部ではあまり多くなく、これは標高差とも対応し、地形形成の違いを反映したものと考えられる。

現状、断層によって生じた小谷は埋まりきっていたが、その覆土は良好で、最も深いOB62グリッドでは深さ4mを測る。この覆土中には、間層を挟んで縄文時代II・III群土器と同I群土器の遺物包含層が存在する。これは時期と層位を対応させうる貴重な資料であり、この地点の



第66図 C区基本土層模式図

サンプリング試料を用いて¹⁴C年代測定と花粉分析を行っている(第5章)。断層によって生じた小谷(ST221)の覆土は、以下のとおりである(図版60)。

- | | |
|--|-------------------------|
| 1層 黒褐色土(10YR2/3) I層に対応。 | 6層 暗褐色～褐色土(10YR3/4～4/4) |
| 2層 黒褐色土(10YR2/3)少量の遺物含む。 | 遺物包含層(早期末葉～前期前葉)。 |
| 3層 黒褐色土(10YR2/2)。
炭化物・遺物が少量混入する。 | 7層 褐色土(10YR4/6)土器数点出土。 |
| 4層 暗褐色土(10YR3/3～3/4)。
5mm程度の炭化物が多く混入する。 | 8層 褐色土と暗褐色土の混土。土器出土。 |
| 遺物包含層(中期末葉～後期初頭)。 | 9層 明黄褐色土(10YR6/6)。 |
| 5層 褐色土(10YR4/4)。 | 10層 褐色土(10YR4/6)。 |
| | 11層 明黄褐色土(10YR6/6)。 |

第2節 検出遺構と遺物

1 縄文時代

調査区より検出した遺構は、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・陥し穴状遺構など計29遺構でいずれも縄文時代のものである。出土遺物がなく、時期を特定できないものも含まれるが、その大部分が中期末葉～後期前葉に構築されたものと考えられる。遺構は南東部平坦面上に集中するが、その分布を見ると竪穴住居跡は中央やや西よりに集中しており何期かの変遷が窺われ、遺構の重複に注目すれば竪穴住居跡の後に掘立柱建物跡が構築された時期があることが想定される。また、土坑の中には覆土の状態から土壌墓と判断されるものがあり、調査区の東端には陥し穴状遺構を設けるなど、この狭い台地が様々に活用されている。

出土遺物の総量はコンテナ20箱で土器・土製品・石器があり、すべて縄文時代のものである。土器には、I群に位置付けられるものとII・III群に位置付けられるものがあるが、本調査区では後者が多い。石器は、数は少ないながらも、石鏃・石匙・石錐・石筥・スクレイパー・磨製石斧・凹石・磨石があり、器種は豊富である。

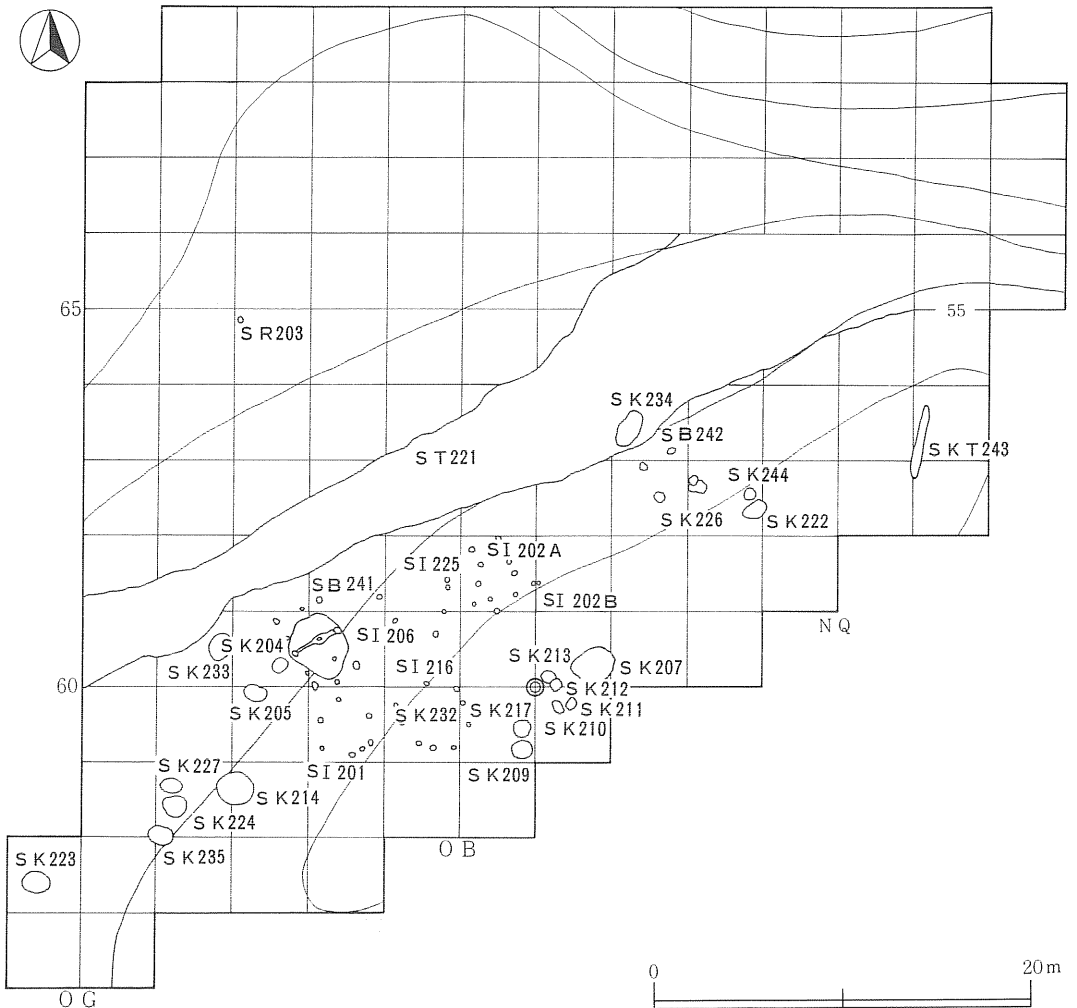
これらの遺構・遺物からは、当時の人々が早期末葉～前期前葉に初めてその活動の痕跡をとどめ、その後は中期末葉～後期前葉に再びこの台地を活用し、幾つかの段階にわたって多種類の遺構を残す様々な活動を繰り広げたことが考えられる。

なお、OF60グリッドからNS64グリッドにかけて断層によって生じた小谷が存在する。この部分の覆土4・6層は良好な遺物包含層であり、4層からはII・III群の土器が、6層からはI群の土器が出土した。この断層谷については、確認当初OB62グリッド付近に設定したトレンチ内に、二次加熱を受けて赤変した土器や炭化物が多く含まれる部分が認められ、その全体

を捨て場と判断しST221の遺構番号を付した。しかし調査の進行及び遺物整理作業を通して調査区南東部の平坦面からの流れ込みが多いことが判明したため、ここでは遺構としては取り扱っていない(図版59)。但し、その呼称については、便宜上ST221を使用する。

(1) 検出遺構と出土遺物

検出した遺構は、竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡2棟、土坑20基、陥し穴状遺構1基、土器埋設遺構1基の計29遺構である。遺構はOD64グリッドで検出されたSR203を除き、調査区南東部の平坦面上に集中する(第67図)。いずれも第Ⅲ層上面で確認されたが、遺構上部は削平されており、特にあまり地山を掘り込まずに床面を構築した竪穴住居では壁が検出されないなど、その遺存状態はよくない。これらの遺構は、遺構内より出土した遺物などから概ね中期末葉から後期前葉に位置付けられる。



第67図 C区遺構配置図

① 竪穴住居跡

調査区南東部中央西寄りに5軒集中して検出された。ほとんどが隣接し合っており、何期かの変遷があったと考えられるが、遺構の遺存状態が良くなく、また遺物も少ないため詳細は不明である。上部の削平により、S I 206を除いて壁は全く遺存しておらず、住居内に設けられた炉跡とピットによって住居跡であることを判断した。なお、ここで扱う遺構は径20cm前後のピットを柱穴とするもので、その柱穴の大きさから竪穴構造をとったものと考えられる。また、後述する掘立柱建物跡とは柱穴の規模の相違によって区別している。

遺構内より出土した土器は、磨滅した小破片のみであるが、住居跡の形態などを考慮すると、これらの住居跡は中期末葉に位置付けられる。

S I 201 (第68図、図版48)

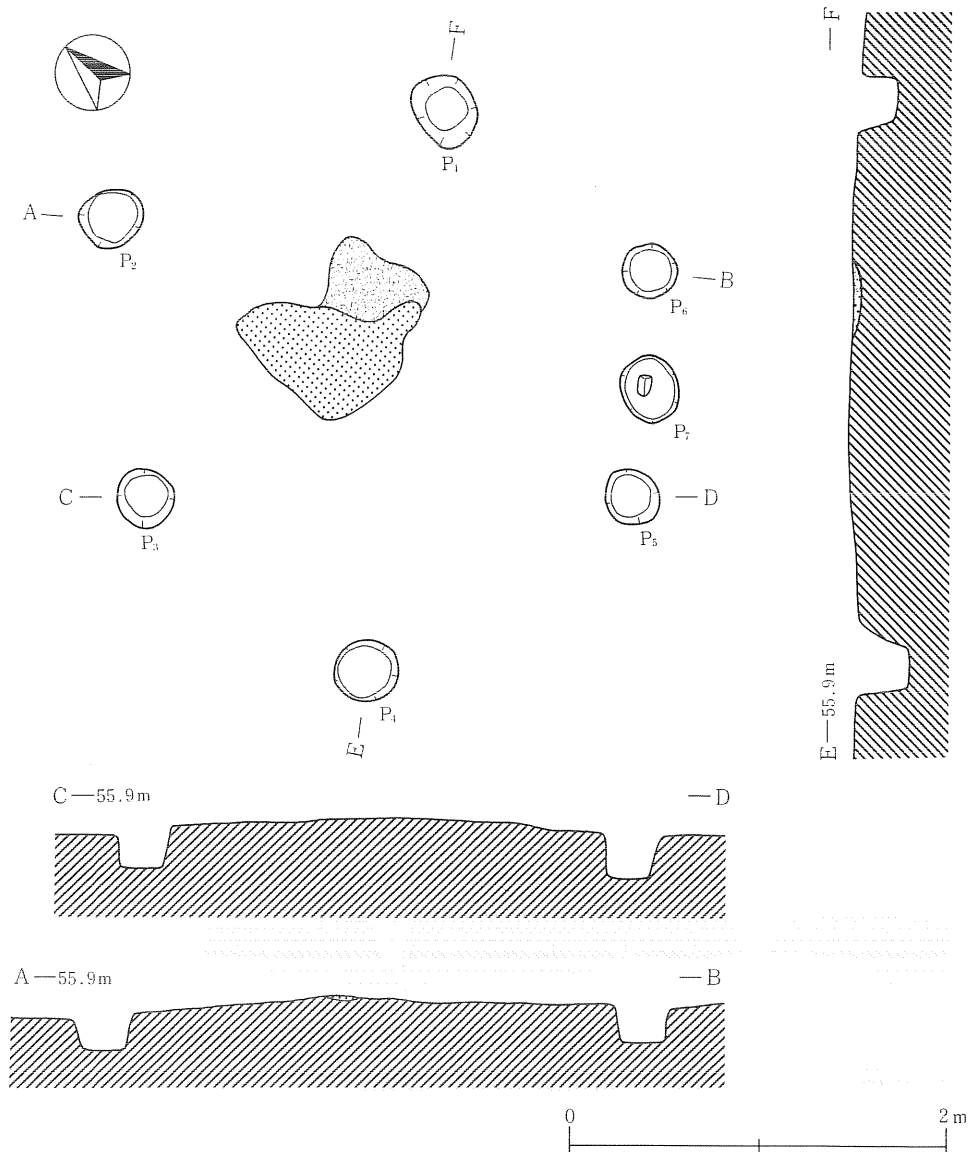
遺構集中部分中央西寄りのO C 59グリッドに位置し、東側がS I 216と隣接する。範囲確認のために設定したトレンチ内のⅢ層上面に焼土を検出していたため、この部分のⅢ層上面を丹念に精査した結果、焼土を囲んでピットが検出され、住居跡と判断した。

壁は遺存しないものの、床面の焼土が検出されていることから、床は削平を受けていない。炉は地床炉で、住居内のほぼ中央に設けられており、焼土が一辺70cmほどの略方形に広がっている。この焼土の東側には56×38cmの範囲に炭化材・炭化物の集中する部分が検出されたが、焼土部分と合わせて一つの炉を形成していたものと考えられる。ピットは7箇所(P₁～P₇)に検出された。平面形は径28～40cmのほぼ円形で、深さは20～28cmを測る。不正六角形に配置されている柱穴間の距離に着目すると、P₁～P₂間とP₄～P₅間がやや広がっている。この方向が、出入り口の方向ないしは住居の長軸を示唆するものと見られる。床はほぼ平坦であり、全体に固く踏みしめられていた。規模・形状については推定の域をでないが、径3.5m前後の円形を基調としたプランであったものであろう。柱穴に囲まれた部分の床面積は6.0㎡と狭い。床面及びピット内から遺物は出土しなかった。

S I 202 A・B (第69・73図、図版49・61)

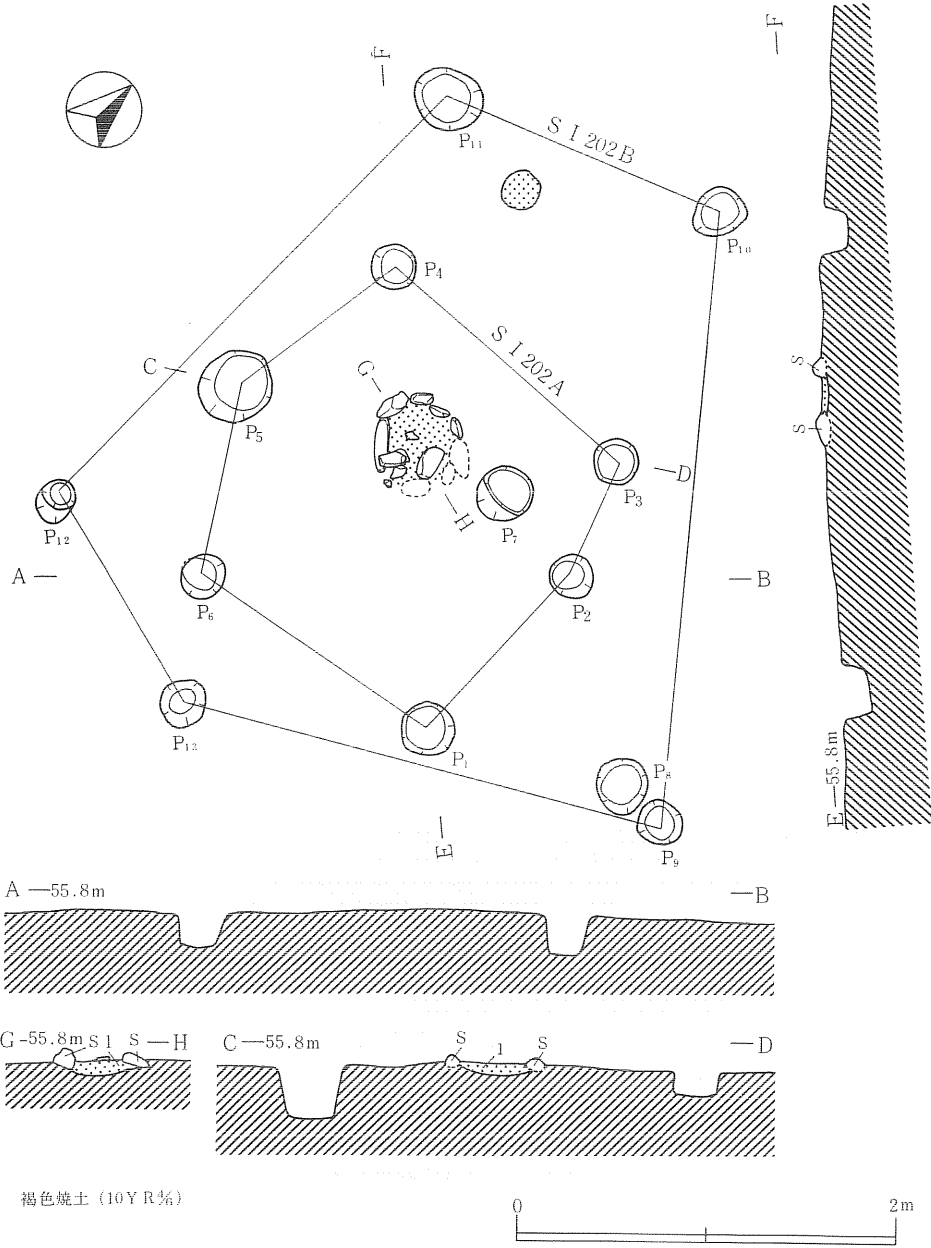
南東側平坦面からS T 221に向かって緩く傾斜し始める部分にあたるO A 61グリッドに位置する。西側がS I 225に隣接している。I層除去後Ⅲ層上面に石囲い炉を検出、住居跡となる可能性を考えてⅢ層上面を精査した結果ピットが検出されたため住居跡と判断した。柱穴の配置に着目すると、石囲炉を6個のピットで取り囲む住居跡Aと一回り大きい住居跡Bの2軒が重複している。石囲炉を伴うAの方が新しい。A・Bともに壁は遺存しない。

住居跡Aの炉は、全体としては径50cm前後の円形を呈する石囲炉であり、住居跡内のほぼ中央に設けられている。石はⅢ層を掘り込んで据えられており、炉の中央でも10cmほど掘り窪められている。遺存する石は10～30cmのやや扁平な礫10個である。この内、西側の5個の石は内



第68図 SI 201竪穴住居跡

側に面する部分が加熱によって赤変していた。また、南東側に重なるようにある石には、石囲い炉のプラン上に確認した3個の石の痕跡に対応するものが含まれるものと考えられる。なお、炉の半載時には南側の最も長い石に接して土器1が直立して出土した。この破片は二次加熱の痕跡もほとんど認められないことから、炉の付設時に埋められたものと見られる。ピットは6箇所(P₁～P₆)に検出された。いずれも平面形は略円形を呈するが、この中ではP₅が最も良好で径38cm、深さ27cmを測り、深さではP₂が21cmでこれに次いでいる。他のピットは径24～28cm、深さ13～17cmを測る。不正六角形を呈する柱穴の配置は、S I 201と同様の特徴を示



第69図 SI 202A・B 竪穴住居跡

し、P₁～P₆間とP₃～P₄間がやや広がっている。床面は、ほぼ平坦である。ピットの配置から径2.5～3.0mの円形を基調としたプランであったものと推定される。ピットに囲まれた部分の床面積は3.2㎡と非常に狭い。

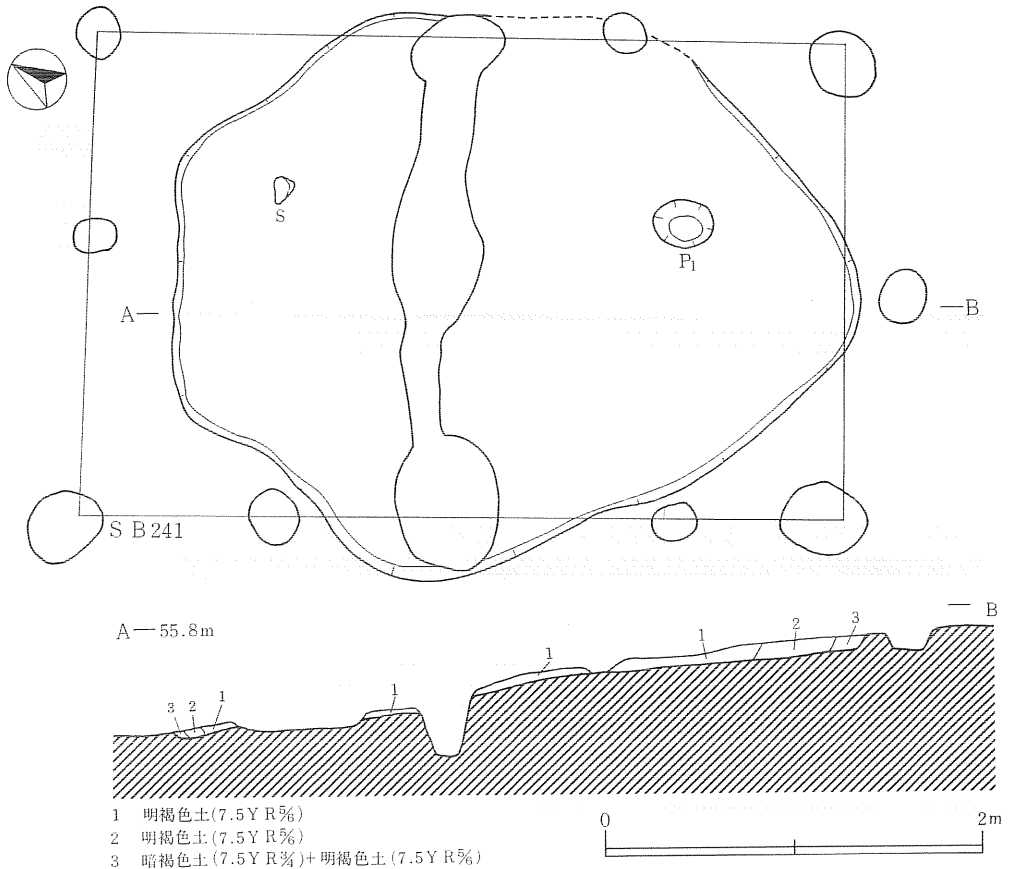
住居跡Bの炉は不明であるが、P₁₁の東側で径20cmに広がり、厚さ3cm程度の焼土を検出している。P₇～P₁₃がこれに伴うピットである。平面形は24～34cmのほぼ円形を呈するが、住

居跡Aのものに比べると一回り大きいものが多い。深さは、北西側のP₁₀・P₁₁が北側に傾斜する立地のために10cm・16cmとやや浅いものの、他は20～32cmを測る。床は北西側でやや傾斜し、全体的に柔らかい。ピットに囲まれる部分の面積は8.8㎡である。

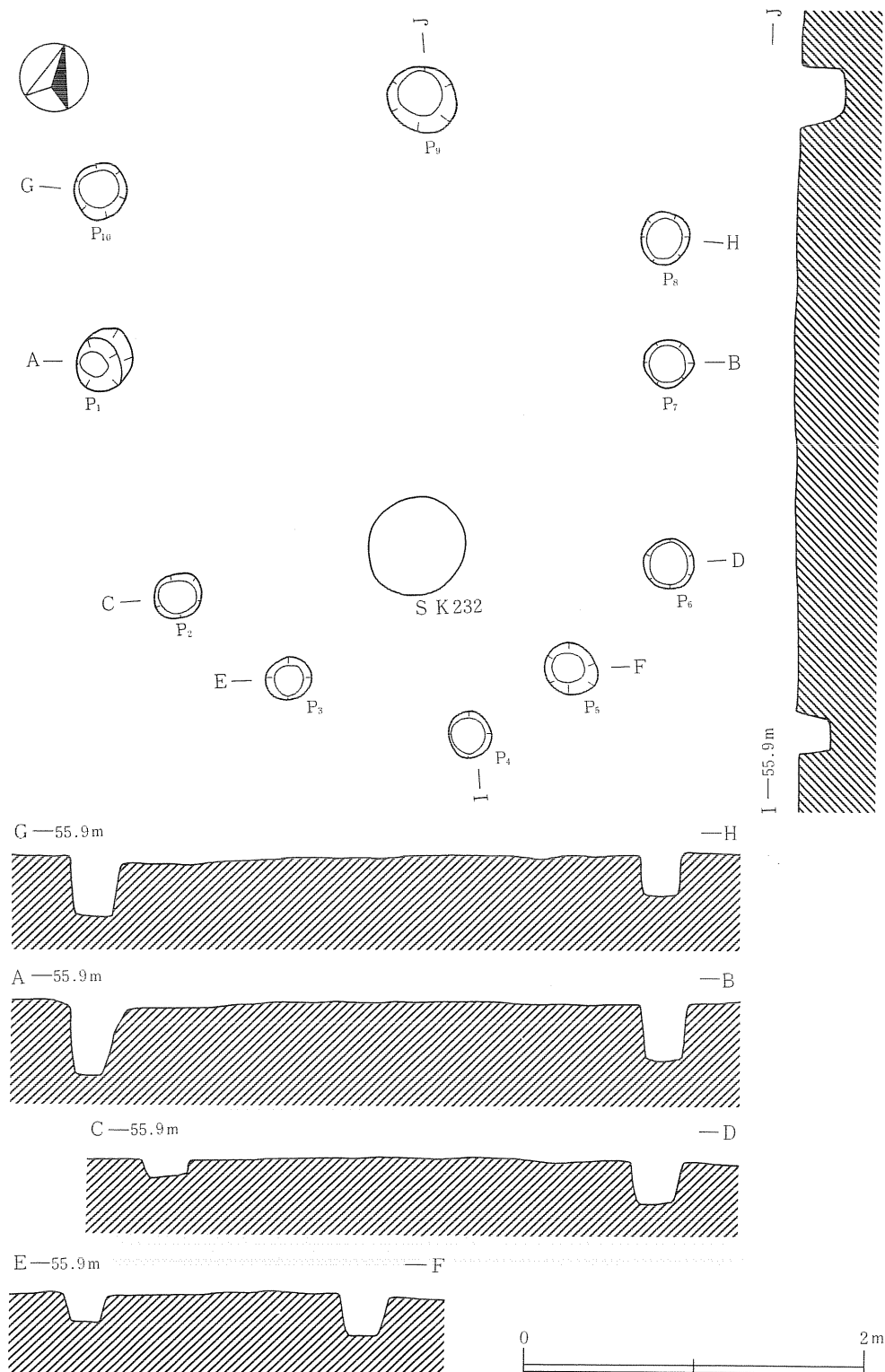
床面付近及び炉・ピット内から出土した遺物は土器片がごく少量で、粗製深鉢形土器の破片である。1は石囲い炉内より出土した口縁部破片で、土器成形後に生乾きの状態で縄文を施文しており、R L R縄文が明瞭である。平坦に整形された口唇部にも同一原体で縄文が施される。2・3は体部破片でR L縄文を施文している。2の原体はしっかりと燃られており、0段多条の可能性はある。3はP₅覆土中から出土した。いずれもⅡ群6類に相当する。

SI 206(第70・73図、図版50・61)

OC・OD60グリッドで検出されており、SB241と重複する。Ⅲ層上面の精査で、ぼんやりとした明褐色土の広がりとして遺構を確認した。この時点で明褐色土の広がりを切るSB241の柱間をつなぐ溝のプランが確認されていること、また覆土の土層観察から、本遺構はSB241よりも古いものである。



第70図 SI 206竪穴住居跡



第71図 SI 216豎穴住居跡

堅穴の平面形は、長径3.6m、短径3.0mの不正な楕円形を呈し、長軸方位N-32°-E、床面積は7.9㎡である。床は中央から北側で傾斜しており、全体的にしまりがなく柔らかい。床面の南寄りに検出されたP₁は径25cm、深さ20cmである。急傾斜で立ち上がる壁は、部分的に欠如するが、壁高5~10cmを測る。覆土は1~3層に分けられるが、このうち同一の色調を呈する1・2層は混入する炭化物の量で区別しており、炭化物は2層中により多く含まれている。

覆土中及び床面より少量の土器片・土製品が出土した。4は粗製深鉢形土器の体部破片でR L縄文が施される。二次加熱を受け内外面ともに赤変している。5は網代痕のある底部破片である。4・5ともⅡ群6類に相当する。6は上端と下辺部分を欠く三角形土製品である。中央付近を通る3本の沈線によって表面に三つの区画を作り出し、それぞれの区画の中央部と土製品全体の中央に刺突を施している。左右の刺突はやや上方から刺突されており、中央及びその下方の刺突は貫通している。

SI 216(第71・73図、図版50・61)

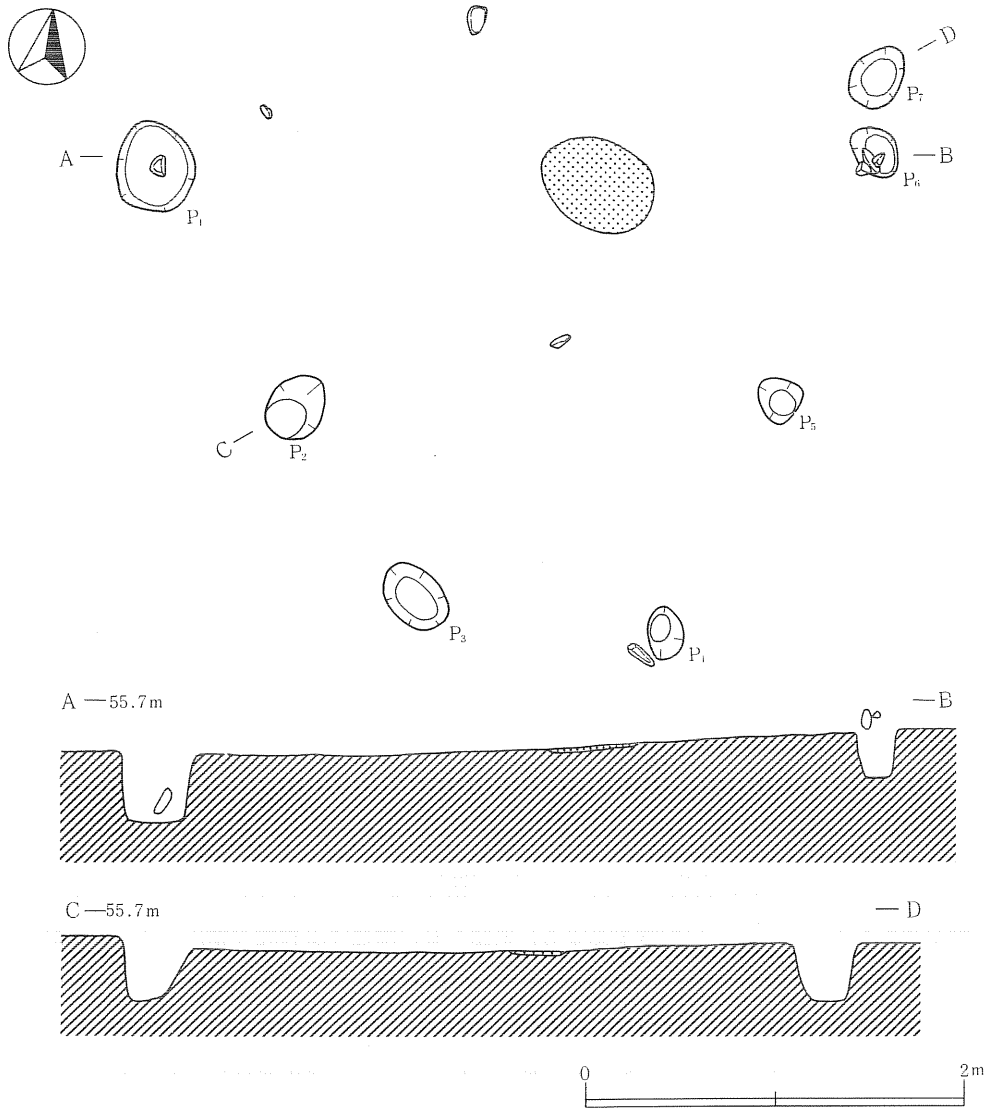
OB59グリッドで検出された。西側はS I 201と隣接する。Ⅲ層上面を精査して楕円形に配置されたピット群を確認して、住居跡と判断した。床面南寄りの部分にSK232と重複するが新旧関係は不明である。

床面までにおよんで削平されたものと考えられ壁・炉ともに検出されなかった。ピットは10個(P₁~P₁₀)検出され、P₂が深さ10cmでやや浅いものの、他は良好である。平面形は径26~40cmのほぼ円形で、深さはP₁が40cmと最も深く、P₇・P₉・P₁₀が30cm前後、P₅・P₆・P₈が25cm前後、P₃・P₄が20cm前後である。またその覆土は、いずれも同じでわずかに炭化物を含む暗褐色を呈する。ピットの配置を見ると、長径5m、短径4m程度の楕円形プランを呈したものと推定される。ピットに囲まれる部分の面積は9.7㎡で、調査区内に検出された住居跡の中では最も大きい。

遺構確認時点でⅢ層上面より数点の土器片が出土したが、粗製深鉢形土器の破片がほとんどである。7は深鉢形土器の体部破片であり、無文部はL燃糸文施文後に沈線によって区画され、削るようにして表出されている。またこの沈線には、無文部を横切るもう一本の沈線が弧を描いて連絡している。破片は二次加熱を受けて内外面ともに著しく赤変しており、胎土に多くの砂粒を含むため、非常に脆くなっている。

SI 225(第72・73図、図版51・61)

OB60・61グリッドにかけて検出された。東側がS I 202と隣接する。Ⅲ層上面精査中に焼土とピットを確認し、住居跡と判断した。壁は検出できなかったが、この部分のⅠ層除去作業時には、Ⅲ層上面より若干高い位置からややまとまった遺物が出土しており、わずかに覆土が遺存していた可能性がある。



第72図 SI 225 竪穴住居跡

炉は地床炉で、焼土が長径64cm、短径46cmの楕円形に広がる。ピットは7個(P₁～P₇)検出した。確認時の平面形は楕円形を呈するものが多いが、深さは23～36cmを測り良好である。P₁は最も良好なピットであるが、覆土中に石が1個含まれていた。ピットは北側では確認されなかったことから、ピットの配置は全体として北側に大きく開口した形になる。位置的に北側がST221に向かって緩く傾斜する部分にあたり、これに対応して床面も北側がわずかに傾斜している。炉を中心として径2m程度の範囲は幾分堅くしまっている。図中の石は床面上に検出したものである。ピットに囲まれる部分の床面積は7.9㎡である。

遺物は床面及びその上部から少量出土したが、そのほとんどが磨滅した土器の小破片である。



第73図 遺構内出土遺物(1)

8は粗製深鉢形土器の口縁部破片、9はL R縄文施文後に沈線を引き、磨消しによって無文部を表出している。10は著しく磨滅しているが隆線によって無文部と縄文部を区画している。地文はL R縄文である。11は半載竹管状工具で等間隔に下方から刺突している。全体の器形は不明だが破片上端の器厚を考えると口縁部に近い破片と見られる。12・13ともに縄文だけの破片である。12はL R縄文であるが、節が非常に細い。また縦方向の綾絡文が見られる。体部破片であるが器厚は薄く、小型の土器であったものであろう。13は0段多条L R縄文が施文される。14は網代痕のある底部破片である。それぞれの特徴から9・10はⅡ群4類、8・12～14はⅡ群6類、11はⅢ群3類に相当する。15は粗製深鉢形土器の体部破片を利用し、縁辺を打ち欠いて円形に整形した円盤状土製品である。表面にL R縄文が施文されている。

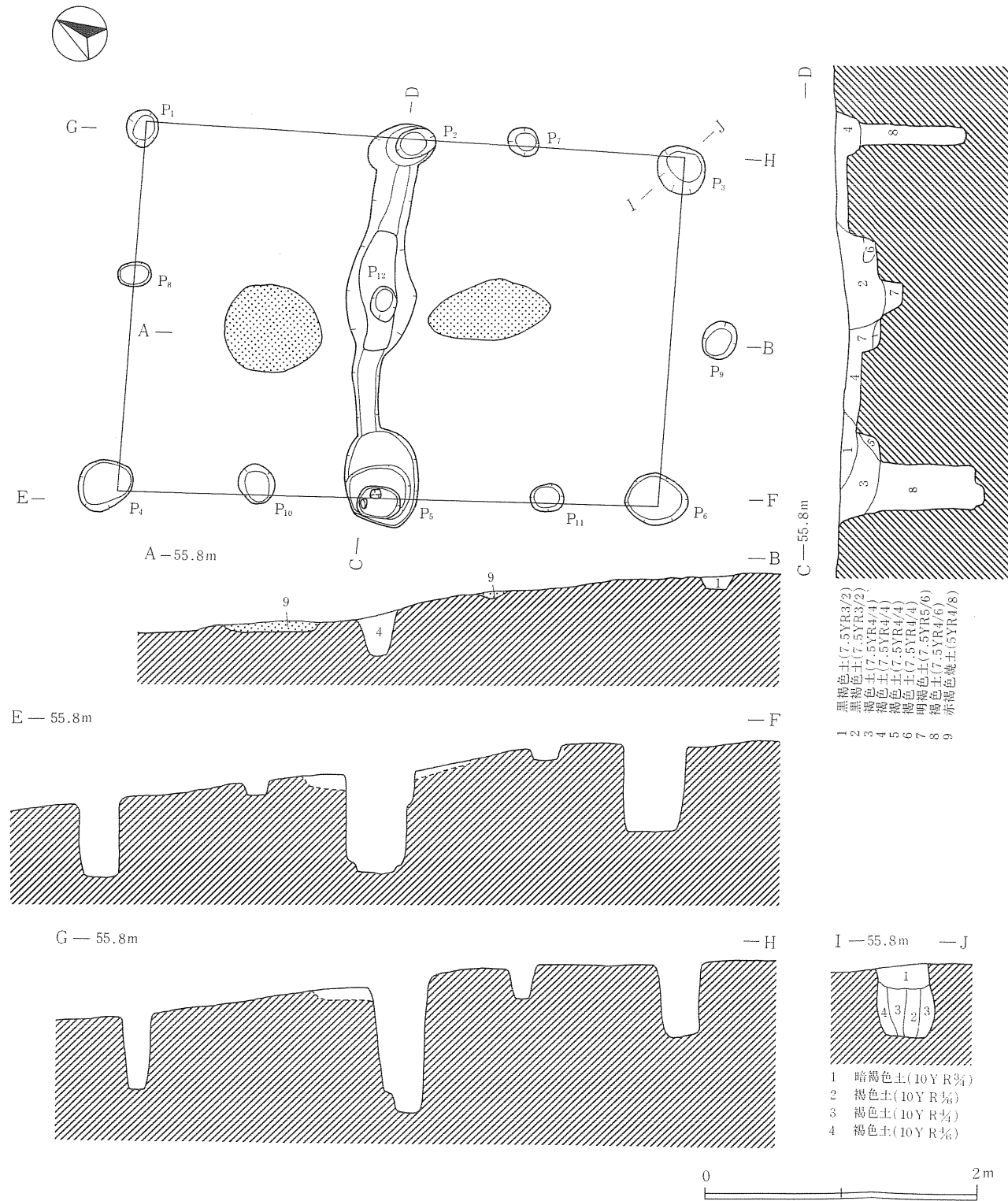
②掘立柱建物跡

調査区南東部の平坦面上、S T 221に面して2棟検出された。形態の上ではそれぞれ異なるものであるが、柱の規模や柱間の距離などに類似する点が認められることから、2棟とも同一時期のものと考えられる。柱穴内の出土遺物から後期前葉に位置付けられる。

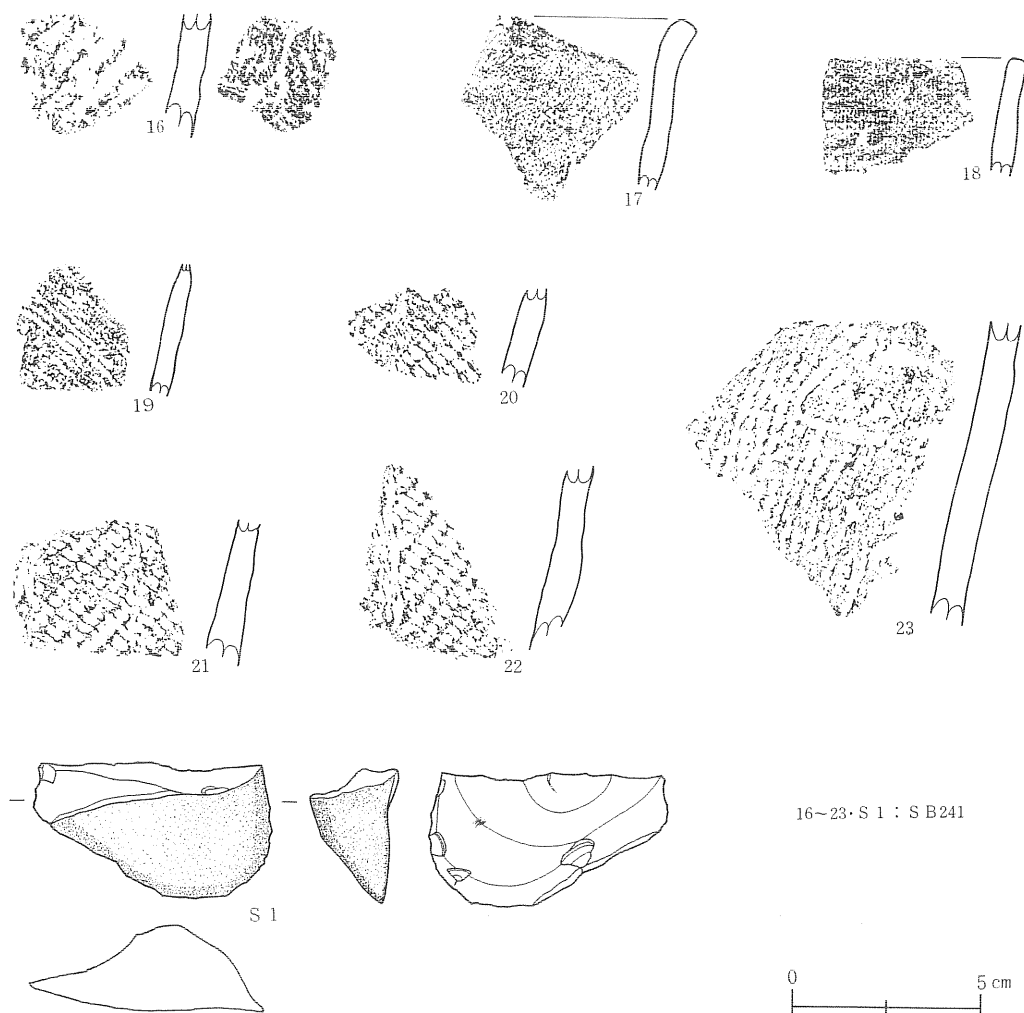
S B 241(第74・75図、図版51・62)

OC・OD60グリッドで検出された。S I 206と重複しており、本遺構が新しい。Ⅲ層上面の精査時に確認され、桁行2間、梁行1間で、桁行柱間距離2.0m、梁行柱間距離2.5mの長方形を呈する。長軸方位はN-32°-Wである。主柱穴はP₁～P₆で径28～40cm、深さ54～102cmを測り、土層断面の観察では径20cmほどの柱痕跡が認められた。またP₁～P₂間を除く各柱間に径20～32cm、深さ12～26cmのピットが伴っている。中央側柱は幅30cm、深さ50cmの溝で結ばれており、この中央にも径24cm、深さ14cmのピットが穿たれている。柱穴の覆土1・3層と溝の覆土4層中には炭化物が多く混入していた。Ⅲ層上面が床になっており、床面はほぼ平坦であるが北西側に向かって緩く傾斜しており、溝を越えた部分が10cm程低くなっている。炉は2箇所に認められ、溝を挟んで両側に付設されており、ともに地床炉である。南側の炉は焼土が長径92cm、短径44cmの楕円形に広がり、北側では径60cm程度のほぼ円形に広がっている。ともに厚さ8cmほどで、焼土は床面下まで認められるが、掘り込みを伴うものと捉えにくい。

遺物は柱穴及び溝の覆土中から少量出土した。16は胎土に幾分繊維を含み表面にはR L縄文を施文している。裏面は無文であるが繊維の痕跡が認められる。17・18はともに口縁部破片で無文である。17は緩い波状口縁を呈し、口縁上部がやや外反する。口唇は工具を用いて平坦に整形されており、両端がやや角張っている。胎土にやや多目に砂粒を含むが、焼成は良好で硬質な破片である。18は口縁部が平縁となるものでほぼ直立する。口唇は17同様平坦に調整されているが、その端部は17よりは幾分丸みを帯びている。19～22はいずれも粗製深鉢形土器の体部破片である。19はL R縄文を施しており器厚が薄い。上端の状態から口縁付近の破片と見ら



第74図 SB241掘立柱建物跡

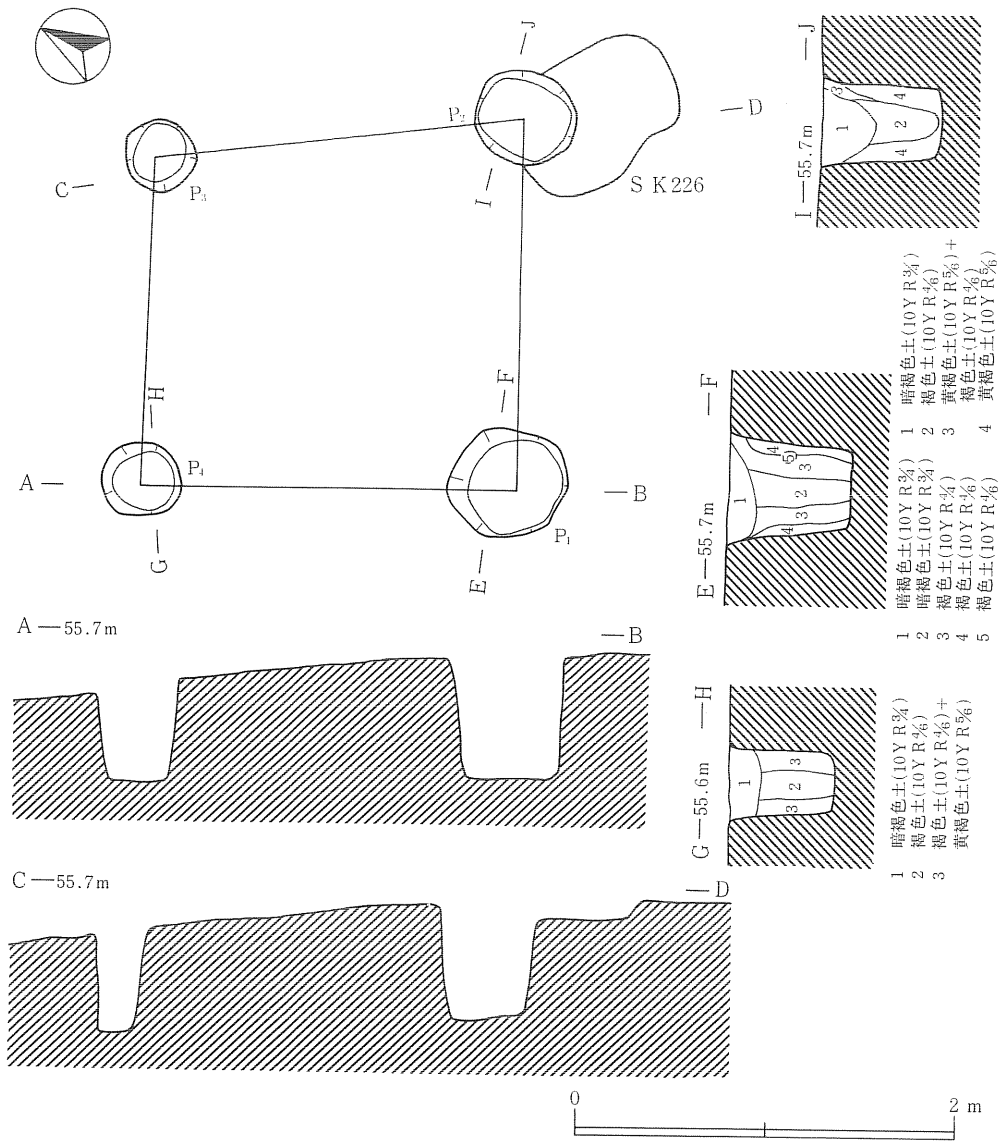


第75図 遺構内出土遺物(2)

れる。20～22はR L縄文を施文している。21・22は同一個体であり、開端部を束縛した原体を縦位に回転させている。このため原体の長さが明瞭に捉えられ、3 cm程である。23はR L R縄文が施される。胎土にはやや多くの砂粒を含むが焼成は良好である。また、SK214中から同一個体の破片が出土している。以上の土器片は、それぞれの特徴から16がI群2a類、17・18がⅢ群1類、19～23がⅡ群6類に相当する。S1はP₃の覆土中下部より出土した。礫皮を残す破砕礫であるがST221中より出土したS35と接合する。石質は黒色頁岩である。

S B242(第76図、図版52)

南東部平坦面上でも北東側のNS62グリッド、ST221に面する位置で検出された。1個の柱穴がSK226と切り合うが、柱穴はSK226の坑底面で明瞭に確認されたもので、本遺構が古い。また、柱穴の内、他の一個は最初土坑として確認していたものだが、土層断面には明瞭に



第76図 S B 242掘立柱建物跡

柱痕跡が確認されたことから、周辺のⅢ層上面を再精査して本遺構の柱配置を確認した。4本柱(1間×1間)で、柱間距離1.6~1.8mのはほぼ方形を呈する建物跡である。柱穴は径38~50cm、深さ52~64cmで、4個ともに径20cm前後の柱痕跡をとどめる。

以下に2棟検出されたこの遺構の特徴を整理してみる。主として6本の柱穴からなるS B 241の最大の特徴は、Ⅲ層上面に2箇所の焼土を伴うことであり、これによってⅢ層上面がこの建物の床であることがわかる。また、この床面には中央側柱を結ぶ溝があり、溝が建物内部の空間と炉を二分していることも注目される。これに対しS B 241とは違った形態のS B 242については4本の柱から構成される方形の建物であるということが特徴である。

縄文時代の建物跡については、関東の後期集落内のものについて逸早く検討が加えられているが、全国的には前期～晩期の各時期のものが知られており、検出例も徐々に増加してきている。近県の例をひけば、岩手県西田遺跡(中期中葉)、同県萩内遺跡(後期)、宮城県六反田遺跡(後期)があげられる。また近年秋田県内でも大湯環状列石周辺遺跡調査(後期)・秋田市地方遺跡(晩期)・大曲市太田遺跡(中期末葉)・増田町八木遺跡(後期)などで検出されている。

こうした検出例の中でもその機能については、遺跡全体の性格に対応させて、送葬儀礼に係わる祭祀施設あるいは住居などが考えられている。墓域として捉えられる大湯環状列石周辺遺跡・八木遺跡が前者であり、集落遺跡として捉えられる太田遺跡が後者である。

本遺跡の例ではS B241については床及び炉と考えられる焼土の存在から住居と把えることが可能であるが、S B242についてはその推定が困難である。2棟の機能・性格については今後の検討課題であるが、これらの遺構は、その機能・構造は別としても縄文時代の遺跡にあって多様な景観を作りだしていたものであろう。

③土 坑

調査区南東側の平坦面上に20基検出された。遺物を出土したものは10遺構であるが、いずれも中期末葉から後期前葉のものであり、遺物の出土しなかったものについても一応同時期に捉えておく。以下は遺構の検出順に記述する。

S K 204(第77図)

OD60グリッド中央やや南寄りに検出された。平面形は径70～80cmのほぼ円形を呈し、深さ18cmを測る。底面はほぼ平坦で、比較的堅くしっかりしている。壁は北側の一部が急傾斜に立ち上がるほかは全体に緩く立ち上がっている。覆土は1・2層ともにしまりがあり、また炭化物が多く含まれている。2層に含まれる炭化物は径がやや大きい。遺物は出土していない。

S K 205(第77・81図、図版53・62)

OD59グリッド北端で検出されたもので、長径1.2m、短径0.8mの楕円形を呈し、長軸方位N-70°-Wである。深さは12cmと浅い。底面は北西側に向かってわずかに傾斜し、壁は全体に緩く立ち上がっている。覆土は1・2層ともにしまりが良い。また1層中には径3mm程度の炭化物が混入する。2層は1層に比べやや明るい色調を呈する。遺構確認の際土坑中央に径15cm程度の石が検出されたが、この石は焼けており部分的に赤変していた。

遺物は1層中から出土したもので、粗製深鉢形土器の体部破片である。24・25ともにR L縄文が施されており、II群6類に相当する。

S K 207(第77・81図、図版53・62・63)

NT60グリッド南東寄りに検出された。長径2.2m、短径1.8mの楕円形を呈し、長軸方位N-52°-Eである。深さは1.0mを測る。底面はさらに15cm前後掘り下げられており、その平面形

上野台遺跡

が一辺1.0m前後の略方形を呈する。壁は緩やかに立ち上がるが、中半から開口部にかけてはほぼ垂直になる。覆土は8層に分けられるが、全体的にしまりが無い。2層中には炭化物が多く混入している。覆土上面に焼土が検出される点でSK214と共通する。

遺物は覆土上部から出土した。27・31・32・34・35は同一個体である。26～30は口縁部破片であるが、30は指でつまむように突起が付され、その部分がわずかに肥厚する。26～28・31～35は沈線区画と磨消縄文で文様を構成するもので、27・28・32は沈線の末端が巻いており、31・34・35は無文帯が斜め方向に伸びている。また、34ではその無文帯を切って沈線が連絡している。33はRL縄文上に沈線が引かれている。29は口縁に平行する沈線が巡る。36～39はいずれも粗製土器の体部破片である。26～29・31～35はⅢ群1類に、30・36～39はⅡ群6類に相当する。S2は側辺を刃部とするスクレイパーで、石質は頁岩である。

SK209(第77・82図、図版54・63)

OA59グリッド南東隅に検出された。平面形は径1.1mのほぼ円形を呈し、深さ65cmを測る。底面は西側に向かって傾斜している。壁は急傾斜で立ち上がっているが、東側は部分的に膨らみ、断面形が逆台形状を呈する。覆土は1・2層に炭化物を多く混入している。3層はしまりが弱く、混入物の少ない層である。

遺物は1層中から出土したが、その量は少ない。40～42はいずれも粗製深鉢形土器の体部破片であるが、40・41はLR縄文を、42はRL縄文を施文している。Ⅱ群6類に相当する。

SK210(第77・82図、図版54・63)

NT59グリッド中央北寄りに検出されたもので、東側にSK211が隣接する。長径0.8m、短径0.5mの楕円形を呈し、長軸方位N-34°-W、深さ36cmを測る。底面南半は凹凸があり、その部分が全体的にわずかに窪んでいる。壁は急傾斜で立ち上がっており、南側では中半から開口部にかけてやや外傾する。覆土は2層に分けられるが、2層は1層に比べてしまりが無い。

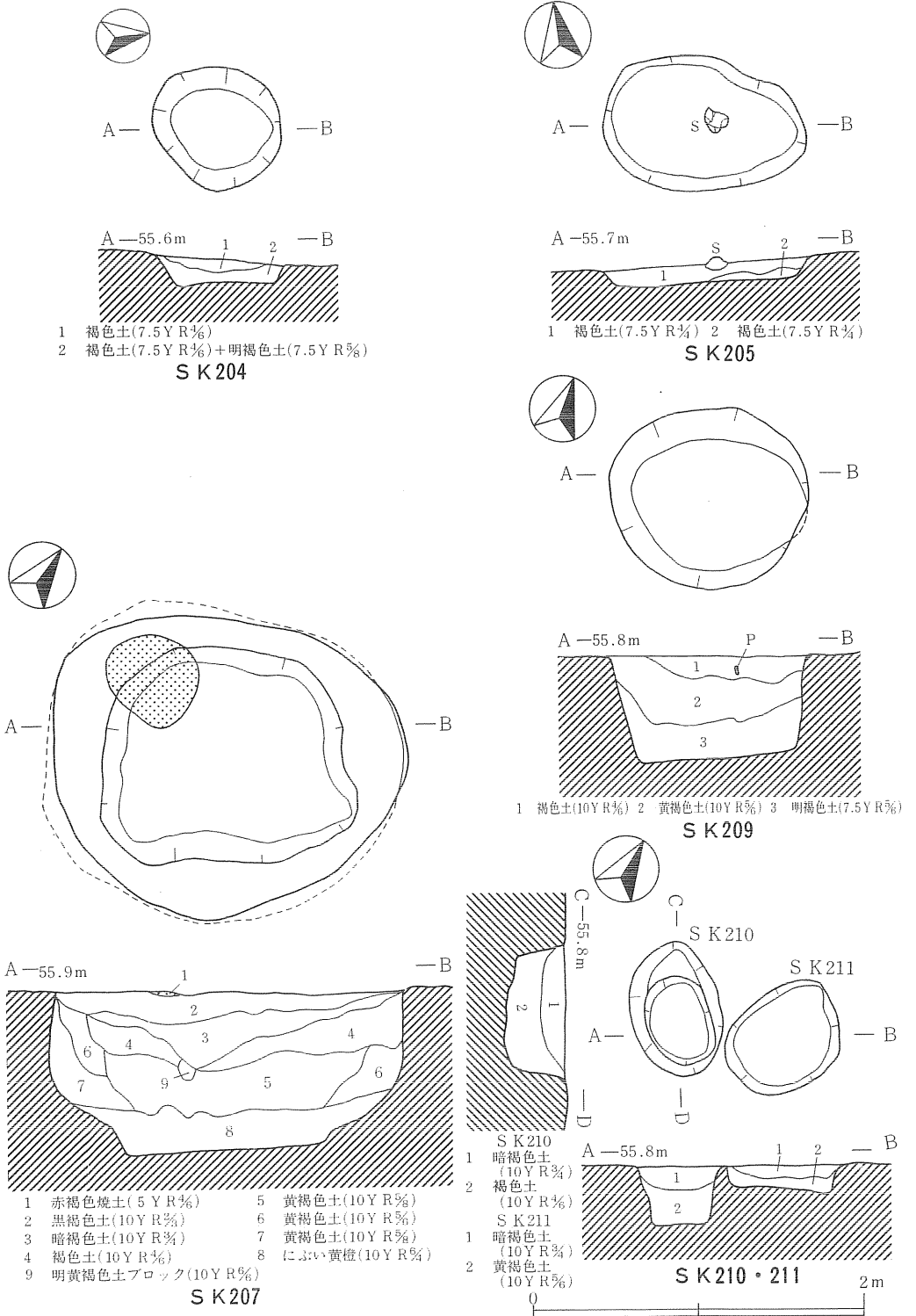
遺物は、1層中から3点出土した。3点とも粗製深鉢形土器の体部破片であり、RL縄文を施文している。45は二次加熱によってかなり脆くなっている。3点ともⅡ群6類に相当する。

SK211(第77図、図版54)

NT59グリッド中、SK210の東側に隣接して検出されている。長径0.7m、短径0.5mの楕円形を呈し、長軸方位はN-18°-Eである。平面形の上でSK210に類似するが、深さは12cmと浅い。底面はほぼ平坦であり、壁は垂直に立ち上がっている。覆土は1層が黄褐色土粒子を含む暗褐色土であり、2層はしまりが弱い。遺物は出土していない。

SK212(第78・82図、図版55・63)

NT59・60グリッドにかけて検出されている。北西側がわずかにSK213と切り合い、本土坑のほうが新しい。平面形はほぼ円形を呈し、径0.6mと小型であるが、深さは32cmを測り、掘



第77図 SK 204・205・207・209・210・211土坑

上野台遺跡

り方はしっかりしている。底面はほぼ平坦で、壁は急激に立ち上がっているが、中半から開口部にかけてわずかに外傾する。覆土は2層に分けられる。1層は炭化物を多量に混入しており、この中から炭化したクルミが出土している。2層中には1層の土が粒子状に混ざり込む。土坑中央の1・2層間に褐色土がブロック状に入っている。

遺物は1層中から少量出土している。46～50はいずれも深鉢形土器の体部破片である。46は斜位に展開する沈線が縄文部と無文部を区画している。地文はRL縄文である。SK207中より出土している27などと同一個体の可能性がある。47・48は縄文を、49・50は撚糸文を施文している。また48・49は赤変し脆くなっている。46はⅢ群1類、47～50はⅡ群6類に相当する。

SK213(第78・82図、図版55・63)

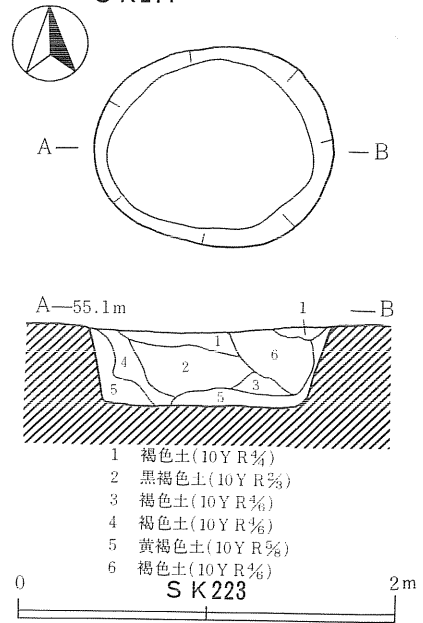
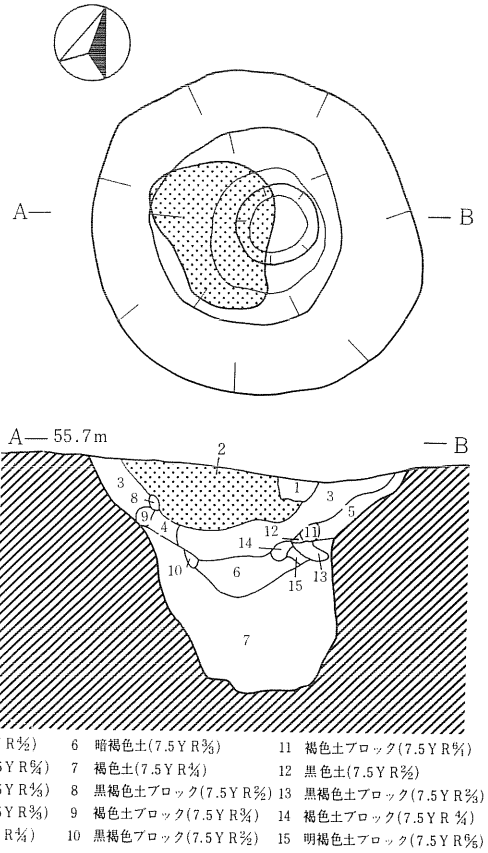
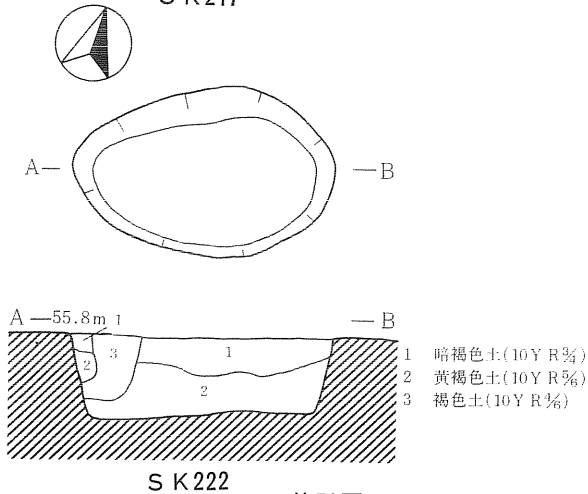
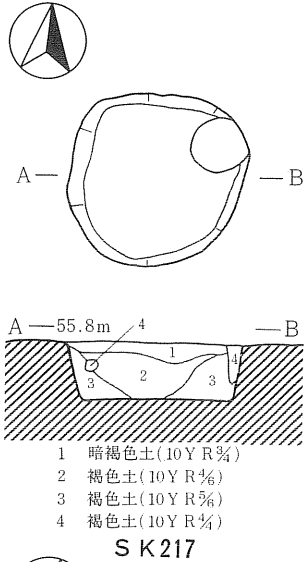
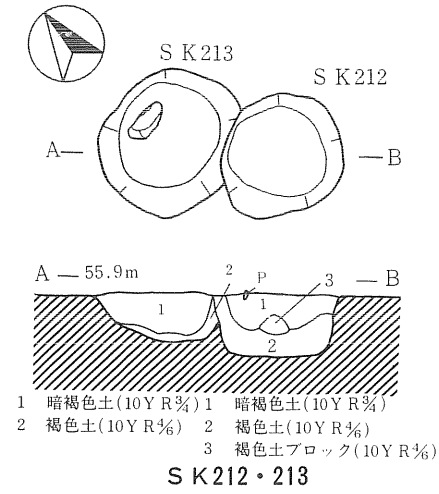
NT60グリッドに検出されたもので、SK212と切り合っているが本土坑の方が古い。径0.8mの円形を呈し、深さは26cmである。底面は中央が若干窪んでいる。南側で切り合う部分の壁は角度を持って立ち上がるが、北側の壁は緩やかである。覆土は2層に分けられ、1層中には炭化物と褐色土粒子を多く含む。またSK212と同様に、炭化したクルミが出土している。土坑内部の北側で検出した石は1層中に含まれたものであり、長さ20cm程度の細長い石の片側は加熱によって真っ赤になっていた。覆土に共通点のあるSK212とは同じ機能が想定される。

出土した遺物はS3の磨製石斧一点である。石質は花崗岩で、基部を欠損している。

SK214(第78・82・83図、図版55・64)

OE・OD58グリッドにかけて検出されている。平面形は上面で径1.9mのほぼ円形を呈し、底面径0.6mである。深さは1.3mを測る。底面はほぼ平坦であるがしまりが弱く、底面にはほぼ中央に径20cmで深さ10cmのピットが穿たれている。壁は二段になっていて、底面から中半までは急傾斜で立ち上がっており、その後は開口部に向けて緩やかに外傾して続いている。覆土は7層に分けられるが、2層は褐色を呈する焼土であり、遺構確認時点から明瞭に捉えられたものである。1・3～7層は全体にしまりが弱く、いずれも中には焼土粒子・炭化物を混入しているが、7層中には径5～10mmと大きめの炭化物が多量に含まれている。3～6層にかけては、黒色土・褐色土がブロック状に入っている。以上の覆土の状態は明らかに人為的に埋め戻したものであり、本土坑は土墳墓の可能性がある。

遺物は南東壁付近の3・6・7層中から出土した。他の遺構のものに比べて大きい破片が多い。いずれも粗製深鉢形土器の体部破片であり、51・52はRLR縄文が、53・55・56はLRL縄文が、54はRL縄文が施文される。51・52、55・56はそれぞれ同一個体であるが、前者はSB241の柱穴中から出土した23とも同一個体である。54を除き複節の原体を用いているが、55・56は条がややたく明瞭である。53は二次加熱を受けて、脆くなっている。54は下方が若干湾曲しており、底部に続く破片と見られる。いずれも、Ⅱ群6類に相当する。



第78図 S K 212・213・214・217・222・223土坑

SK217(第78・83図、図版64)

OA59グリッドの東端で、SK209の北側に検出された。径0.9mのほぼ円形を呈し、深さ30cmを測る。底面はほぼ平坦であり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は3層に分けられており、1層には少量の炭化物を含む。2・3層はともに褐色を呈するが3層の方がやや明るい色調を呈している。部分的に木の根による攪乱を受けている。

1層中より土器片1点が出土している。57は粗製深鉢形土器の体部破片である。撚りの固い原体を用いて、RL縄文を施している。

SK222(第78図)

NR62グリッド東端に位置し、わずかにNQ62グリッドにかかって検出されている。平面形は長径1.4m、短径0.9mの楕円形を呈する。深さは45cm前後を測る。底面はやや凹凸があり、全体が緩く北西に向けて傾斜している。壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土は2層に分けられるが、部分的に攪乱を受けている。また、1層に少量の炭化物を含む。遺物は出土していない。

SK223(第78図、図版56)

OG57グリッド中央やや西寄りに検出されている。平面形は長径1.3m、短径1.1mの楕円形を呈している。長軸方位N-82°-Wである。深さは45cmを測る。底面は平坦で壁は急傾斜に立ち上がっており、断面形が逆台形状になる。覆土は5層に分けられる。1層は地山に近い色調を呈しており、このため遺構確認段階では、この遺構のプランを明瞭には捉えられなかった。2層中には径5mmの炭化物を少量混入している。上面から根による攪乱を受けているが、全体的に比較的良くしまっている。遺物は出土していない。

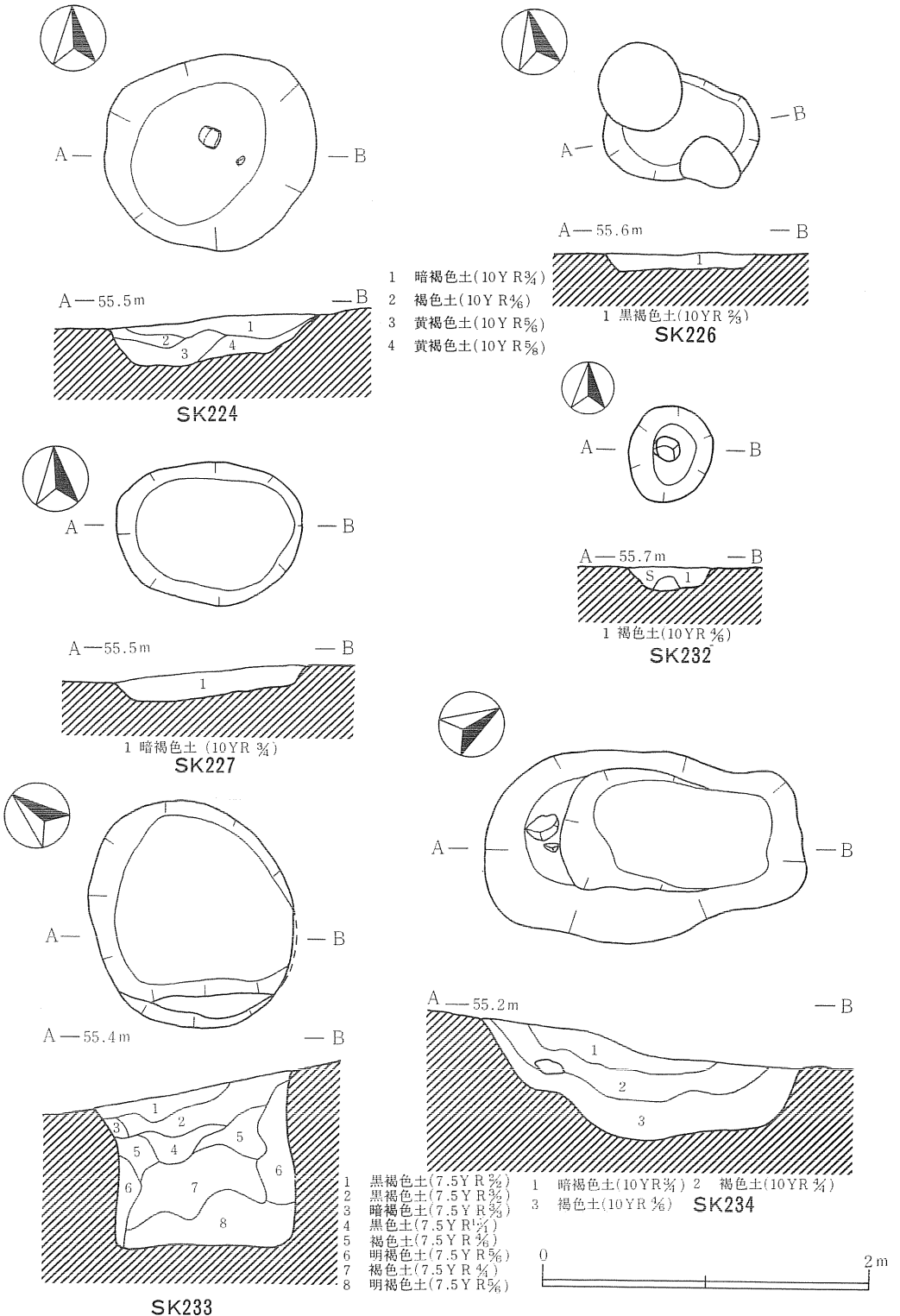
SK224(第79図、図版56)

OE58グリッド西寄りに検出されている。平面形は径1.3mのほぼ円形で、深さは26cmと浅い。底面はやや凹凸があり、全体が西側に向かってわずかに傾斜する。西壁は比較的角度を持って立ち上がるものの、東側では底面から開口部まで非常に緩い傾斜で続いている。覆土は4層に分けられており、1層中には炭化物がやや多く含まれている。1層上面および1層中に径5~10cmの石が2個含まれている。

1・2層中から少量の土器片が出土している。いずれもⅡ群6類に相当し、粗製深鉢形土器の体部破片であり、磨滅が著しい。

SK226(第79図)

NR62グリッド西端に検出された。SB242の柱穴と切り合っており、本遺構が新しい。また、南東側を木の根によって攪乱されている。平面形は長径0.9m、短径0.7mの楕円形を呈するもので、長軸方位N-64°-Eである。深さは12cm前後と浅い。底面はほぼ平坦であり、壁は緩く立ち上がっている。覆土は1層で、黒褐色を呈する。遺物は出土しなかった。



第79図 SK224・226・227・232・233・234土坑

S K 227(第79図、図版56)

OE58グリッド西端、SK224の北側に検出された。平面形は長径1.2m、短径0.8mを測り、長軸方位N-80°-Wである。深さは16cmを測る。底面は西側に向かって緩く傾斜している。壁は西側で緩く、東側では急傾斜に立ち上がっている。覆土は1層でしまりがあり、少量の炭化物を混入する。規模・形態・覆土の状態ともSK205に類似している。遺物は出土していない。

S K 232(第79図、図版56)

OB59グリッドに検出された。SI216中に位置するが新旧などは不明である。平面形は径0.6m前後の円形を呈し、深さ20cmと非常に小さい。底面はほぼ平坦で壁は緩く立ち上がっている。底面には径16cm程の石が置かれているが、上面が加熱によって赤変している。覆土は1層で褐色を呈し、石の置かれた部分にやや多く炭化物が混入する。遺物は出土していない。

S K 233(第79図、図版57)

OE60グリッド中央西寄り、ST221に傾斜し始める部分に検出された。長径1.5m、短径1.2mで長軸方位N-32°-Eである。深さは110cmを測る。底面は南側でわずかに段を持つものの、ほぼ平坦で非常に良好である。壁は垂直に立ち上がり、南西側では上部が若干オーバーハングしている。このため、断面形は袋状を呈している。覆土は8層に分けられている。1・2層はしまりが弱いのに対して、4～7層はしまりが良好で炭化物が含まれているが、7層に混入する炭化物は径5mm前後であり、やや多く含まれている。この7層については土のしまり具合と堆積の状態から人為的に埋められたものと考えられる。

覆土から少量の土器片が出土した。いずれも磨滅した小破片で、掲載していない。ほとんどがII群6類相当のものだが、水平に沈線を巡らし無文帯を表出する口縁部破片が1点含まれる。

S K 234(第79図)

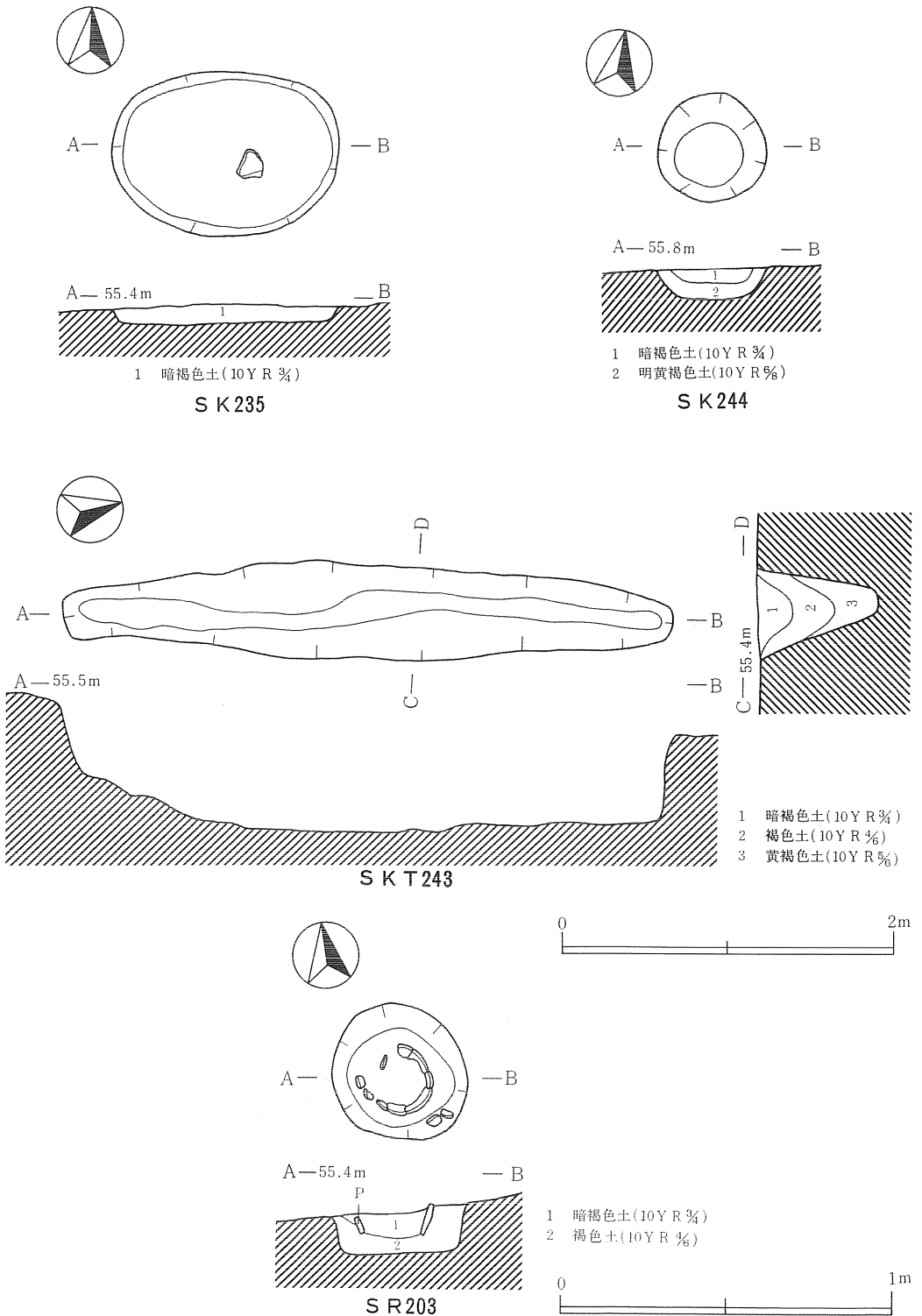
NS63グリッド西寄りに検出されており、ST221内の斜面に立地している。長径1.9m、短径1.1mの楕円形を呈し、長軸方位N-32°-Eである。深さは56cmを測る。底面は凹凸がある。北側の壁は急傾斜で立ち上がっているが、南側では緩く立ち上がり、途中わずかに段を成して開口部に続いている。覆土は3層に分けられ、2層中には径3mm程の炭化物が少量混入している。遺物は出土していない。

S K 235(第80図、図版57)

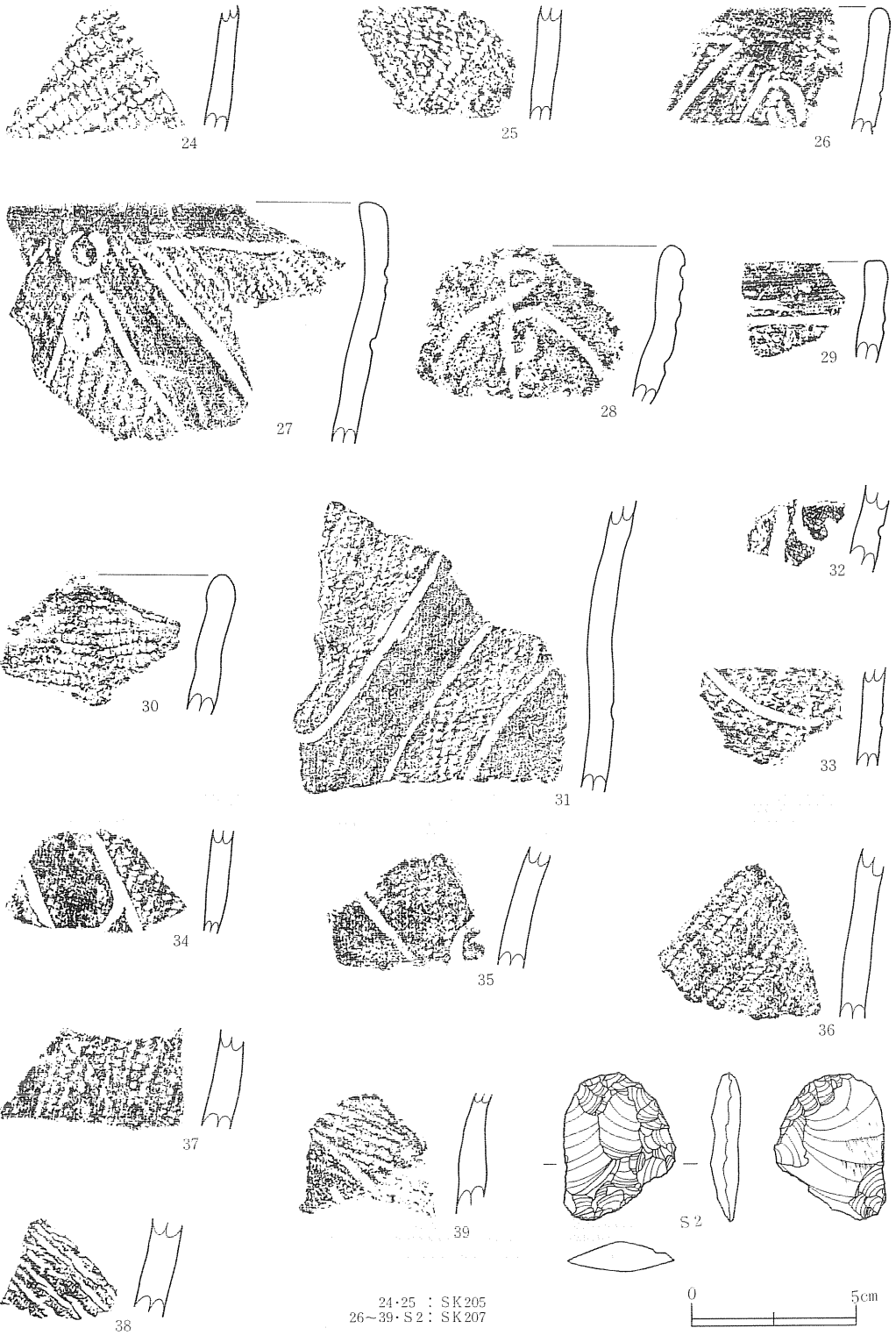
OF58グリッド杭を含む位置に検出された。平面形は長径1.4m、短径1.0mの楕円形を呈し、長軸方位はほぼ南北に直交する。深さは10cm前後と浅い。底面はほぼ平坦で、壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土上面中央に石が検出されており、覆土は1層である。

S K 244(第80図)

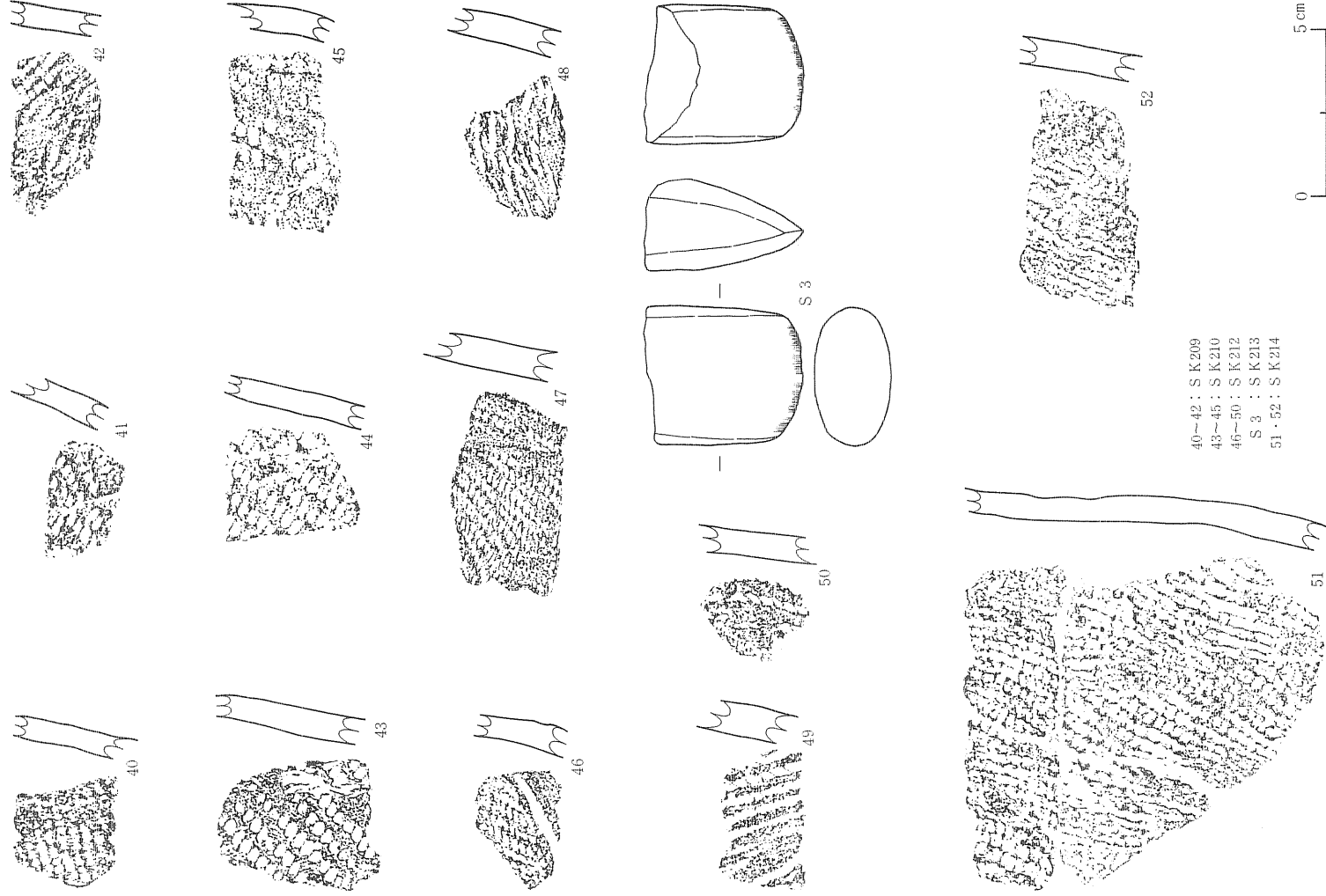
NR62グリッド東端に検出された。径0.6m、深さ20cmの小さなもので、覆土は2層である。



第80図 S K 235・244土坑, S K T 243陥L穴状遺構, S R 203土器埋設遺構



第81図 遺構内出土遺物(3)



40~42 : S K 209
 43~45 : S K 210
 46~50 : S K 212
 S 3 : S K 213
 51・52 : S K 214

第82図 遺構内出土遺物(4)



第83図 遺構内出土遺物(5)

④陥し穴状遺構

SK T243(第80図、図版58)

調査区南東部平坦面の東端にあたる、NP・NO62グリッドからNO63グリッドにかけて検出された。いわゆるTピットで、開口部では長軸3.7m、短軸0.6mを測る。長軸方位はN-8°-Eとほぼ南北方向をとり、等高線に対しては直交している。深さ54~72cmを測り、短軸方向の断面形はV字形を呈する。遺物は出土していない。

⑤土器埋設遺構

SR203(第80図、図版58)

OD64グリッド北西コーナーで検出されており、ST221より北側で検出された唯一の遺構である。上部の削平が著しく、土器も5~10cmほどしか残っていない。土器を埋設するための掘り込みは径40cmの円形で、深さは15cmである。覆土2層には地山に由来する小円礫が多く混入しており、また1層には焼土粒子、炭化物を混入している。

埋設されていた土器は細片となって磨滅が著しく復元することができなかった。LR縄文の施される粗製深鉢形土器で、II群6類に相当するものである。遺存した部分の内面には著しく炭化物が付着していた。

(2)遺構外出土遺物

遺構外の出土遺物は、調査区平坦面の包含層の薄いこともあって、比較的少ない。

この項で、取り扱う遺物、特に土器については、当初S T 221として調査された断層によって生じた小谷から出土したものが多。

(1)土器(第84~98図、図版65~80)

I 群土器

2類、主にS T 221内6層より出土しており、多量の繊維を混入していて軽い土器が多い。胎土は緻密で焼成も良好の土器が多い。

2類a.(63~78・81・83・84・87・92)

内外面に縄文の付される土器である。63~69は同一個体で、内外面ともLR縄文が付され、外面は横位回転によるもので、内面の縄文は部分的である。胎土は緻密で、焼成も良好である。色調は茶褐色を呈し、64・66・68・69の外面には煤状炭化物の付着が著しい。63から見るとやや外反ぎみの口縁部で口唇部は丸みを持つ。68もLR縄文が付され、色調が黄灰色を呈する。他は前者の土器と胎土・焼成とも変わらない。70~78も同一個体である。内外面とも0段多条のLR縄文が付され、斜位回転によるものである。胎土は緻密で砂っぽく、焼成も良好であるが、前者の土器よりはやや脆い。色調は黄褐色を呈している。81・84も同一個体で表裏ともLR縄文が付される。胎土には2・3mmの砂粒を含んでいるものの焼成は良好である。色調は黄橙色を呈している。83は胎土が極めて緻密でLR縄文の施される土器である。87もLR縄文が施されている。92はRL縄文の施される土器で81・84と胎土色調とも近似している。

2類b.(58~62・79・80・82・85・86・88~91・94~99)

外面にのみ縄文の付される土器である。58・59・62・86は同一個体で、胎土は極めて緻密で焼成も良好である。全体的に茶褐色を呈している。口唇部は平坦で内傾するが、口縁部はほぼ直立して体部に至るものである。61も胎土は緻密で焼成も良好である。やや丸みのある口唇部は内傾し、体部と同様の0段多条LR縄文による側面圧痕文が施されている。口縁部は外反し直線的に体部に至る。

60は胎土に3mmほどの砂粒を含むが、焼成は良好である。丸みのある口唇部、ほぼ直立する口縁部で0段多条のLR縄文が施される。内面には、太い繊維束の剥落した痕跡が見られる。79も胎土は緻密で焼成も良好である。外面にはLR縄文が施される。80・82は、粗い砂粒を含むが、焼成は良好である。82はRL縄文による羽状縄文を表出している。85・90・97・98はLR縄文、88・89・91・94・95は0段多条のLR縄文が施される。96は細かいLR縄文が施されている。99はL撚糸文を横位に施した後にRL縄文をこれに直交するように施文している。この種の施文法はこの一点だけである。

上野台遺跡

2類c.(93・100)

無文土器である。93は、胎土は緻密で焼成の良好な土器で黄橙色を呈しており、89と同一個体の可能性がある。厚さからして土器底部と考えられるが、平底なのか尖底になるかは判然としない。100は、胎土に5mm前後の砂粒を含んでおり、焼成も良好である。黄白色を呈しており、硬質の感じがあり他の土器とはやや趣きを異にしている。

II 群土器

4類(101～137、205～208)

a、口縁部内外面に隆帯の貼付される土器で、丸みを帯びる口唇部から外反する口縁部を有する土器101・115・116、平坦で外傾する口唇部から外反する口縁部を有する土器103・114・117がある。器形的には、体部から直線的に立ち上り、口縁部は外面では沈線を内面では隆帯をキッカケとして外反する。内面の隆帯は、外面の口縁部無文帯と体部の縄文帯を画している沈線とほぼ同位置に付され、隆帯は貼付後上下からのつまみ出しに似たナデによって、断面形がほぼカマボコ形になる。116のように隆帯が、波状口縁の頂部から走る隆帯と繋がるものもあり、115なども同様であろう。多くの砂粒を含む外面はザラザラした感じがあるが焼成は良好である。体部に施されるのはRL縄文が多い。

102・104～113・119・130・134では口縁外面にも隆帯がある。隆帯は左上から右下に向かって付され、106～109のように口縁部末端で平坦な口唇部に吸収されてしまう土器、この場合は隆帯を付した後に口縁を丁寧なナデによるものである。一方111・113のような隆帯が口唇部まで達して小さな突起状を呈する土器もある。また110は、幅の広い平坦面をもつ口唇部の波状の頂部に隆帯が残り波状をより鋭角的に見せている。118は波状というより花卉状の口縁で、その頂部から隆帯が走るが口唇部上には残らない。内面も花卉状の頂部より鱗状の隆帯が走る。

体部文様帯は、「J」字状文風の構成をとると考えられるが口縁部から走る隆帯は132・133では途中でその高まりを失ってしまう。また130・131・134では隆帯は、口縁部におずかに鱗状となって残っているにすぎない。119は、隆帯が大きく捻り出され孔のある橋状の突起となる。

120～134・205～207では文様は曲線的で、横に大きく展開される。136は、沈線区画された中に葉脈状の文様が付される。205は、外反する口縁部から一度すぼまって体部がゆるく膨らむ深鉢形土器で、口縁部は無文で体部とは沈線で画される。体部文様は横「S」字状となり縄文帯は幅広く、沈線にはやや乱れがある。

206も器形的には205と同様であるが体部文様は体部上半に限られるものでであろう。205で「S」字状に残された縄文帯は、「S」字の下端や上端で磨消しによる無文帯によって、円形や楕円形に画される。207は、205・206ほど体部と口縁部の境の屈曲は強くなく、外反する口縁からわずかに膨らむ体部にいたる土器で、最大径は口縁部にある。体部文様は横「S」字状の下端が、

沈線で画され縄文部は楕円形となって残る。

b、135・208は細い隆帯に沿って刺突の施される土器である。208は外反し、小突起をもつ口縁部から直線的に底部にいたる深鉢形土器である。207に似た横「S」字状の文様帯は、口縁部小突起を起点として垂下する隆帯で4単位に画される。隆帯に沿って刺突が施される。

6類(170~204・209~211)

縄文時代中期の粗製土器を一括しているが、ST221内では4類土器と同一レベルで出土しているものである。

外反する口縁部から直線的に体部に至る器形をとるもので170・171・172のように口縁部が無文の土器と、口縁端部から縄文が付される土器がある。体部にはRL・LR両方の縄文が使用されるが179・180・181・209のように縄の開端を束縛した2段の縄を縦位回転する土器や、196・197の複節のRLR縄文の使用される土器、また反撚のLL縄文の施される土器がある。210はR撚糸文が施文される。211は手捏土器で外面には粗いケズリの痕跡を残す。

Ⅲ群土器

1類(138~152)

撚糸文を地文として沈線によって文様が描かれる土器である。139~150は同一個体で、胎土は緻密で、焼成も良好であるが、二次的に火熱を受けている。平坦な口唇部、やや外反する口縁部からほぼ直線的に体部に至る土器である。L撚糸文を地文として沈線で区画し、磨消しを行った後に沈線屈曲部には円形の盲孔が付される。151は外反する口縁部から一度くびれて体部上半から丸みをもつ土器で、口縁部突起は6単位と思われる。体部文様はR撚糸文を地文として逆向きの「J」字状文風の文様が描かれる。磨消しは顕著ではない。

2類(153~161)

沈線文のみ施される土器である。153・154は、小型の壺形土器の破片と考えられるが、数条1組の沈線が施される土器である。胎土・焼成とも良好である。

155~159・161は同一個体で平坦な口唇部、外反する口縁をもつ土器である。胎土は砂粒を含み脆い。口縁部は無文で、体部とは太い沈線で画される。158・159を見る限り、口縁端部に貼付による小さな隆帯があり、これを起点に左右に太い沈線が描かれ、おそらく161のように体部もこの太い沈線によって区画され、その中に細い6・7条1組の沈線が曲線的に充填されるのであろう。160は、前者の土器より胎土・焼成とも良好で渦巻状に沈線が引かれる。

3類(162~169)

体部に刺突だけ施される土器である。162は、外反する無文の口縁部下端に円形の刺突が巡る。163は内湾する無文の口縁部と体部との屈曲部には、一条の幅広の沈線を引き、中に細い粘土紐を縦位に貼付して、一見窓状の区画に見える。体部には縄文が付される。164~169も同

一個体で、外反する無文の口縁部には、鱗状の隆帯が貼付される。これは4単位であろう。口縁部と体部の接点は逆「く」の字状になり、体部は直線的にすぼまっている。体部には、指頭おそらくは親指の腹を左に向けて抉り出すような刺突が施される。刺突例は2段1組で体部を巡る。刺突内に見える細長い縦位の線が、爪の跡であろう。

②土製品(第98図、図版80)

212は、環状の土製品である。全体的には滑車形を呈しており、両面には、中央の孔を中心として上下に「ノ」の字状の隆帯を貼付している。縁辺と隆帯に沿っては小円形刺突が並ぶ。胎土には、白色砂粒が多く含まれており、第Ⅱ群4類土器の胎土と同じで同時期と考えられる。

③石器(第99～104図、図版81～84)

石鏃(S4～6) S4・5は材質が頁岩で、S6はチャートである。S4は全面に細かな剥離を施しており、基部にはわずかながらアスファルトが付着している。S5は、両面に古い剥離面を残しており先端部には再生しようとした新しい剥離痕が認められる。S6も全面に細かな剥離を加えた平基式の石鏃である。

石匙(S7～9) いずれも縦型の石匙で頁岩を材質としており、S9は破損後に火熱を受けている。S7・8はつまみ部に打面を残しているが、S9には打面が残らない。いずれも主要剥離面右側縁には細かな剥離が施される。またS8の主要剥離面にはつまみ部を除く全面に光沢が観察できる。

石錐(S10) 頁岩を材質として、剥片素材の形状をそれほど変えることなく錐部にのみ細かな剥離を加えている。先端部は磨滅して丸みがある。

石槍(S11～13・15) S11・15は白濁のある黒曜石、S12・13は頁岩を材質としている。S11は先端部両面に1次剥離面を残しており、調整剥離も粗い。S12・13の主要剥離面の調整は全面に及んでおらず1次剥離面を大きく残している。S15は先端部に古い剥離面を残しており未完成品とも考えられる。

スクレイパー(S16・19) S16は、背面の下端と左側縁に二次調整を加え刃部を作出している。主要剥離面にはわずかに調整が加えられるのみである。S19は頁岩で大型の縦長剥片を素材として、打面を残しながら両側縁に二次調整を加えた石器である。主要剥離面には打瘤を剥取した以外何の調整も施されていない。背面下部に1次剥離面を残している。

石筥(S14・17・18) いずれも頁岩である。S17は両面調整で刃部は丸みを持ち細かな剥離が施される。18は半両面調整で、横長剥片を素材とし主要剥離面の両側縁に調整が加えられる。刃部は緩い曲線を描き、二次調整の剥離の稜線は磨滅している。刃部にアスファルトが付着している。

二次加工ある剥片(S20～22) いずれも頁岩でS20は両面調整され、背面下端には細かな剥

離も認められる。S21は背面右側縁上半に細かな剥離が認められる。S22は背面の上下両端にわずかに調整が加えられており、左端を錐部として使用した可能性もある。

磨製石斧(S23・24) 緑色凝灰岩を材質としたものである。S23の刃部は再生された痕跡を残しており、使用痕も顕著である。S24の頭部には敲打痕があり、また破損部にもわずかではあるが敲打の痕跡がある。

凹石(S25～32) 凝灰岩の材質で、楕円形の礫の両面あるいは片面に凹部がある。凹部は礫の長軸に沿って(実測図中では上から下へ)凹部が推移しているのが多い。またS25・26・29では凹部のある面が磨られているが、この磨面と凹部の形成の前後関係は判然としない。S31はおそらくは石皿を転用したものであろう。片面には加熱による黒斑(スクリーン・トーン部分)が認められるが、これは凹部の形成される前のものである。

磨石(S33) 安山岩の円礫の3面に磨面が残るものである。

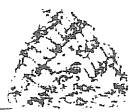
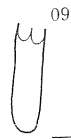
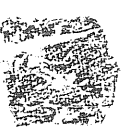
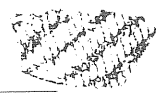
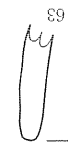
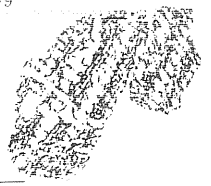
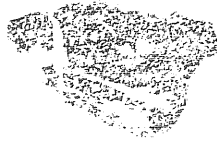
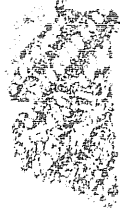
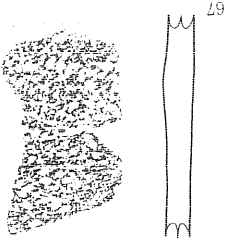
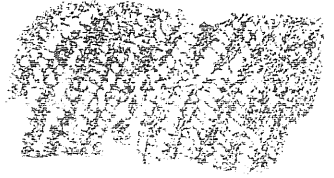
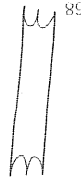
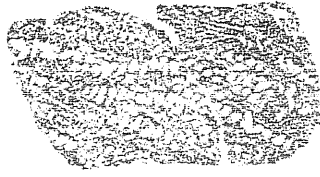
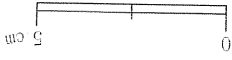
擦痕のある石器(S34) 板状節理のある凝灰岩の両面に擦痕の認められる石器であるが、両面の擦痕の状況が異なっている。実測図中の左側の面の擦痕は、幅4mmほどで断面も丸みを呈しており、細みのものを丸く磨く砥石として利用されたと考えられる。逆面の擦痕は極めて細く線状的で、先端部が鋭利なもので引っ掻いたような傷痕にも見える。

破砕礫(S35) 黒色の頁岩で、実測図中上からの加撃によって剥取された面がある。この剥取された剥片がS B241の柱穴P₅から出土した第75図S1である。

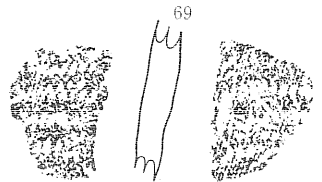
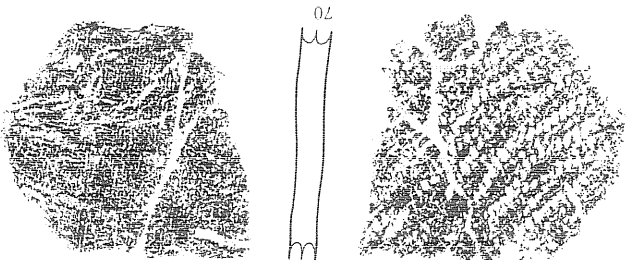
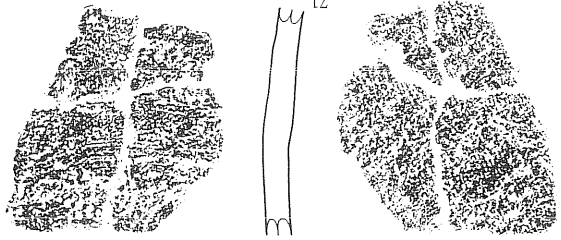
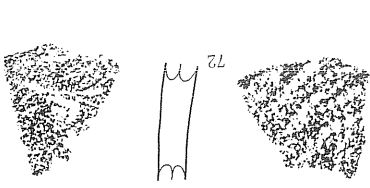
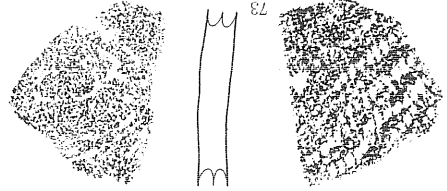
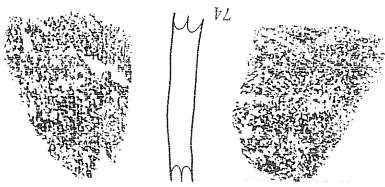
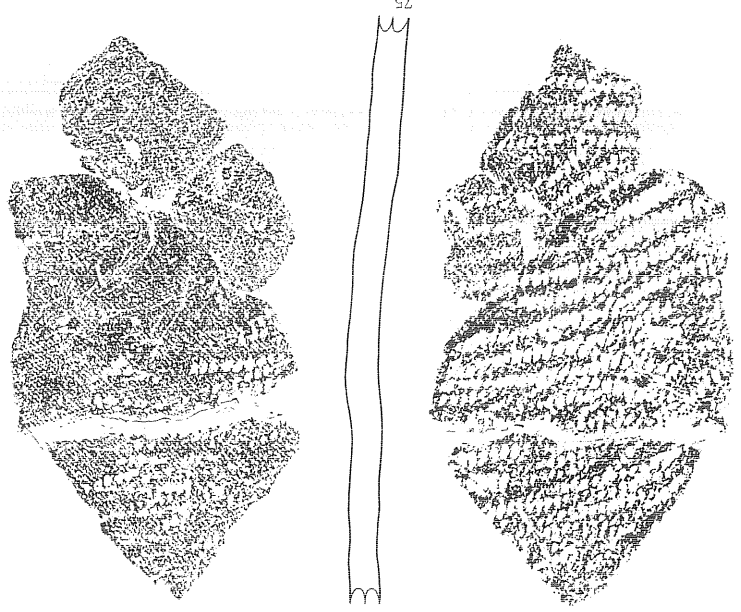
参 考 文 献

- 秋田県埋蔵文化財センター 『昭和63年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』 1989(平成元年)
- 秋田市教育委員会 「下堤E遺跡」「下堤F遺跡」『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』 1985(昭和60年)
- 秋田市教育委員会 「地方遺跡」『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』 1987(昭和62年)
- 岩手県教育委員会 『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅵ(西田遺跡)』 岩手県文化財調査報告書第51集 1980(昭和55年)
- 岩手県埋蔵文化財センター 『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書盛岡市稗内遺跡』 岩手県埋文センター文化財調査報告書第32集 1982(昭和57年)
- 鹿角市教育委員会 『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(4)』 鹿角市文化財調査資料33 1988(昭和63年)
- 宮本長二郎 「さまざまな家」『古代史復元2 縄文人の生活と文化』 講談社 1988(昭和63年)
- 仙台市教育委員会 『六反田遺跡Ⅲ』 仙台市文化財調査報告書第102集 1987(昭和62年)
- 坂上克弘・石井寛 「縄文時代後期の長方形柱穴列」『調査研究集録第1冊』 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団 1976(昭和51年)

第84図 遺構外出土遺物(1)

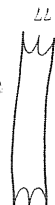
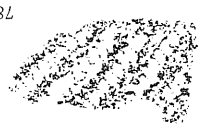
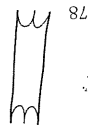
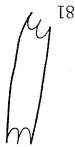
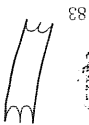
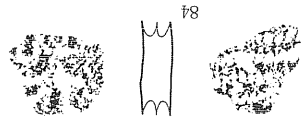
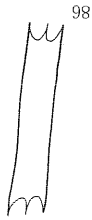
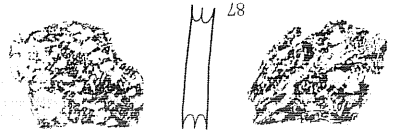
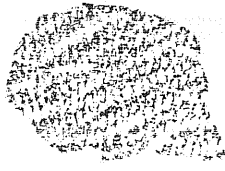
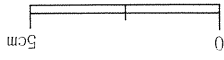


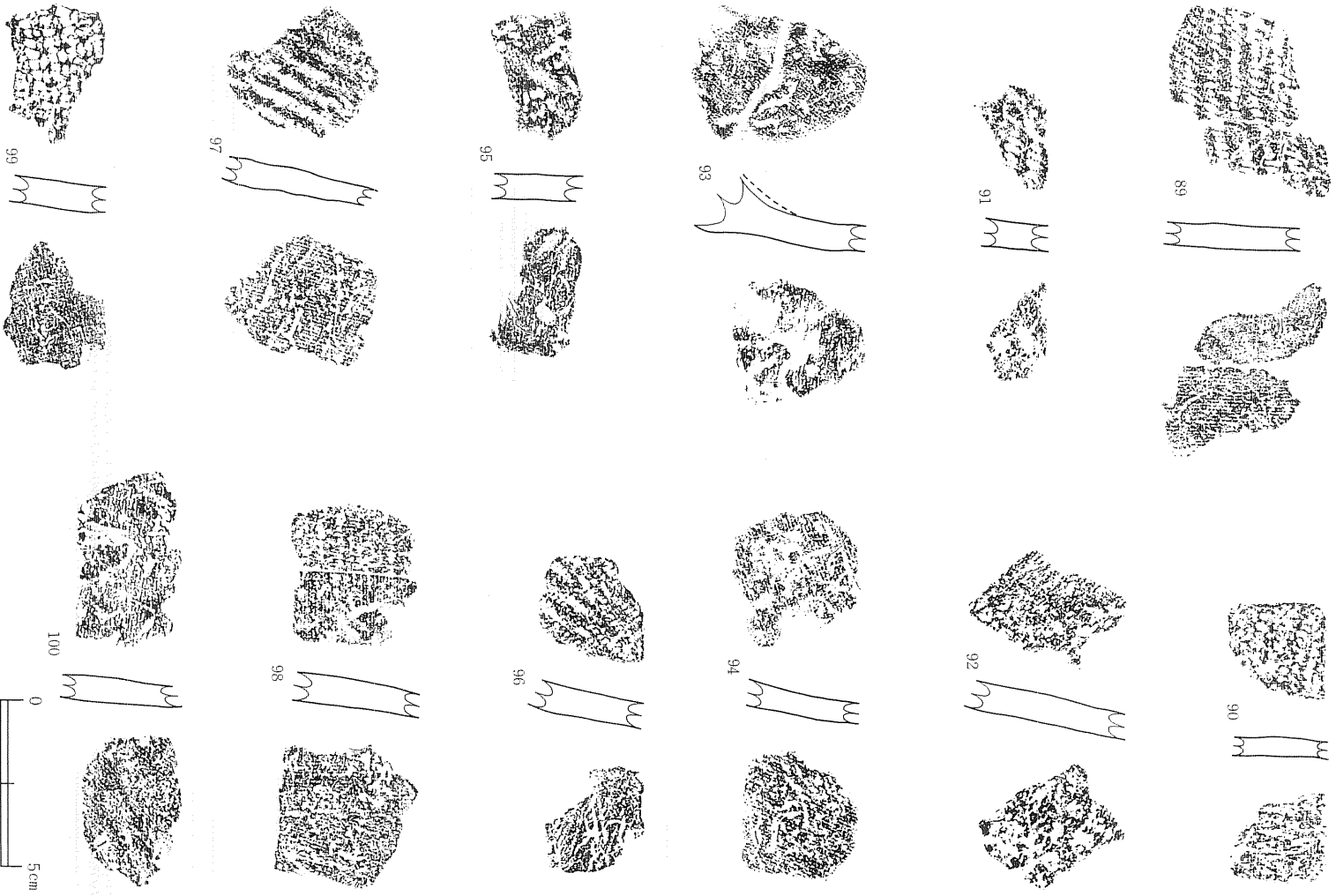
第85図 遺構外出土遺物(2)



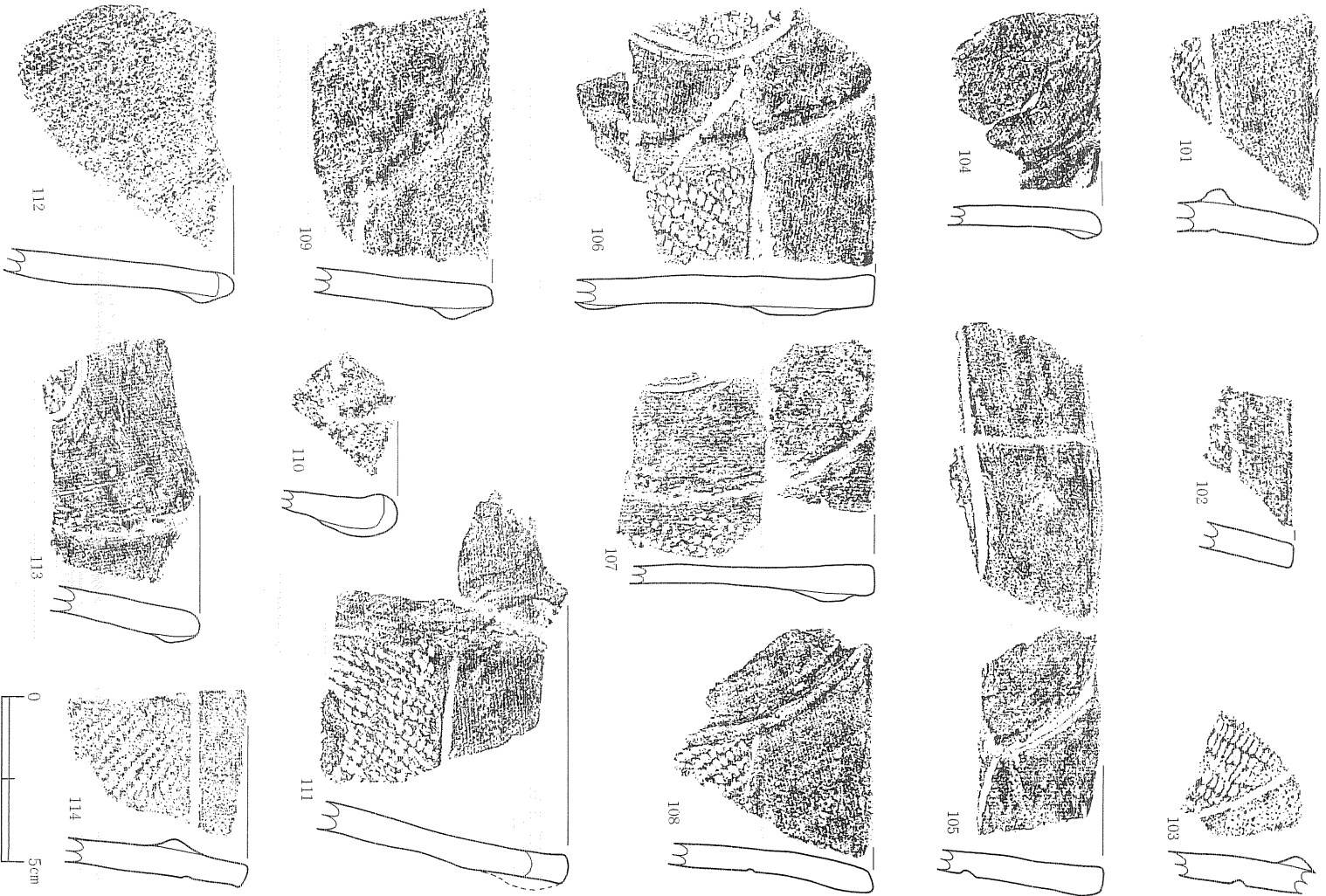
第4章 C区の調査の記録

第86图 遺構外出土遺物(3)

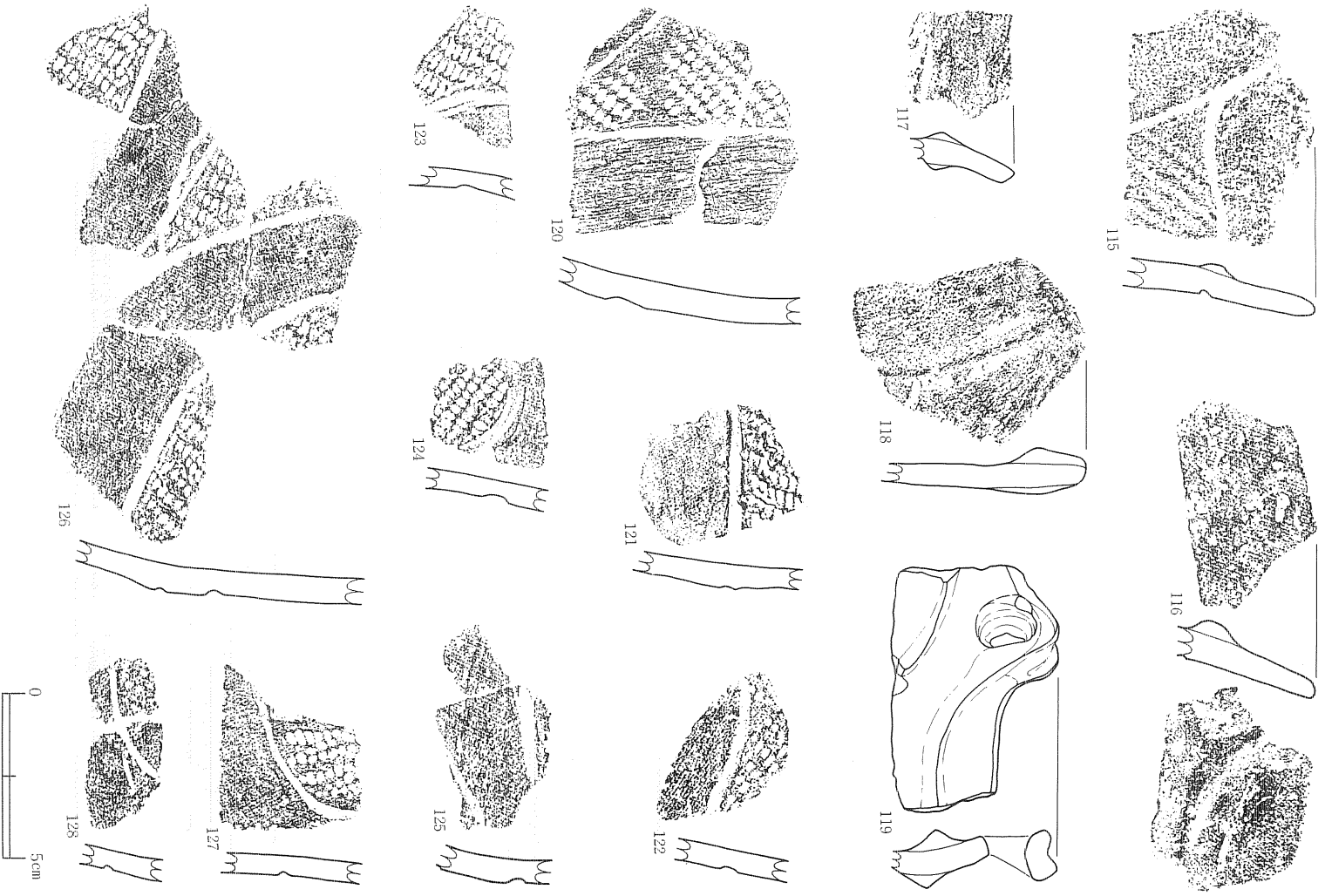




第87図 遺構外出土遺物(4)

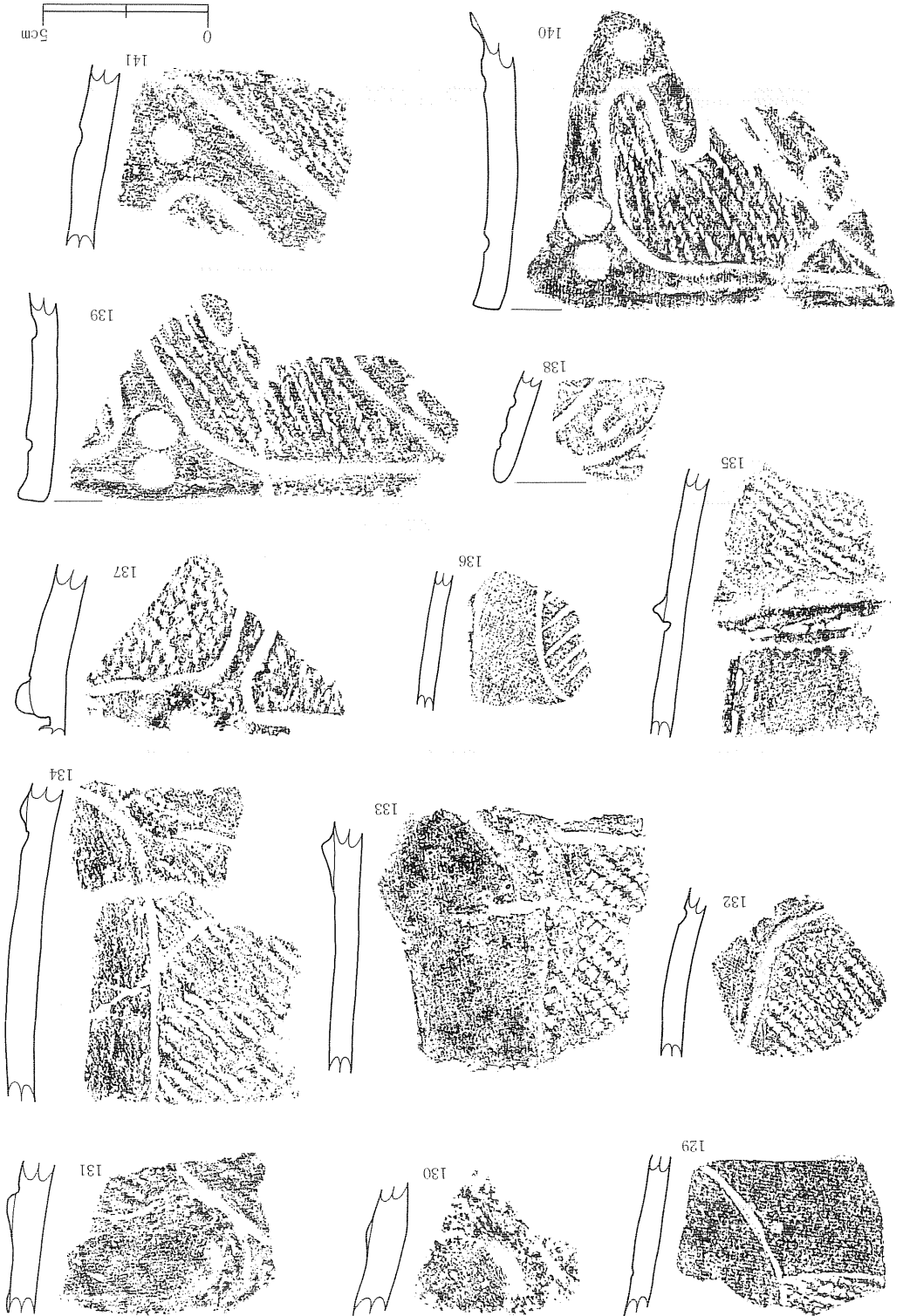


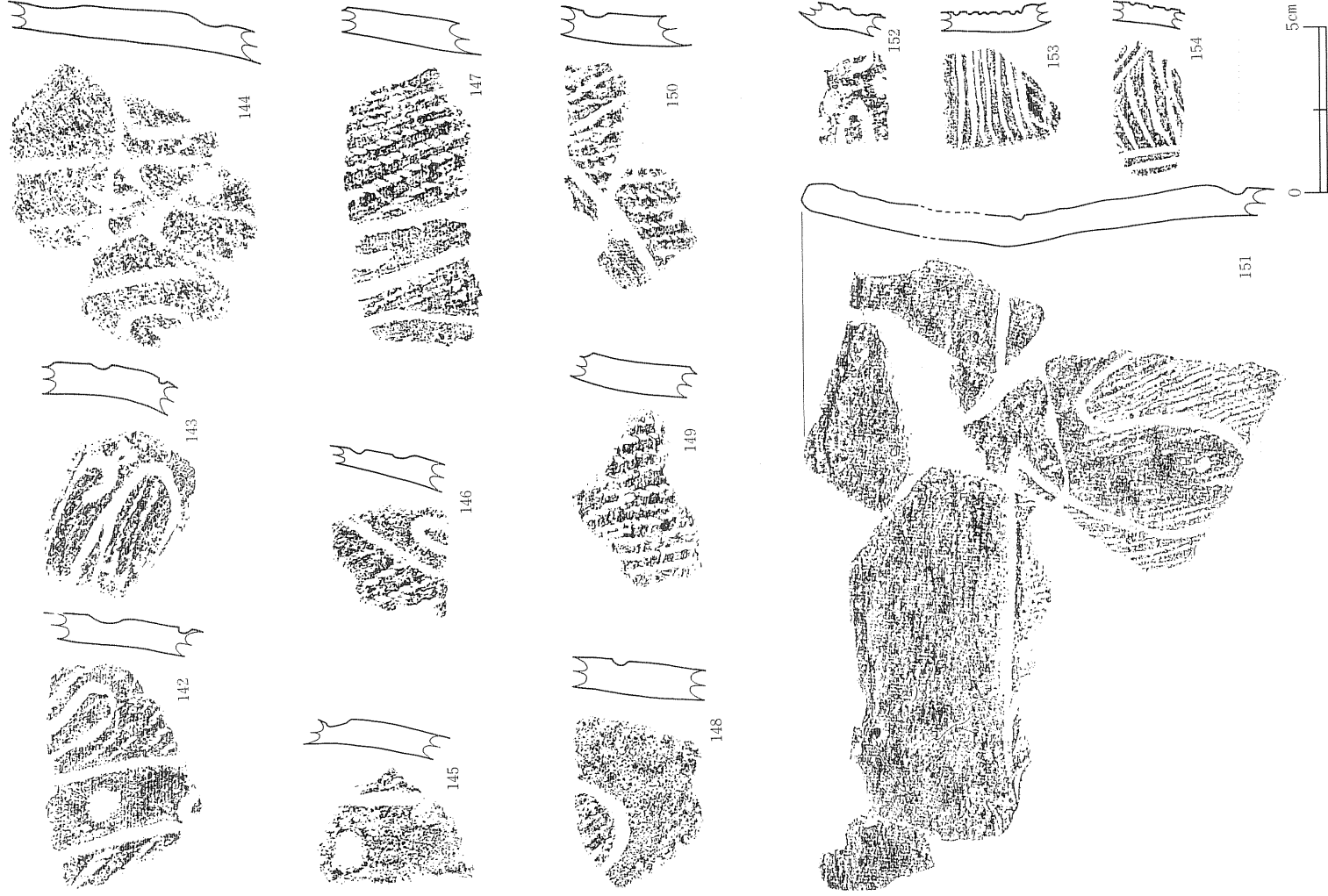
第88図 遺構外出土遺物(5)



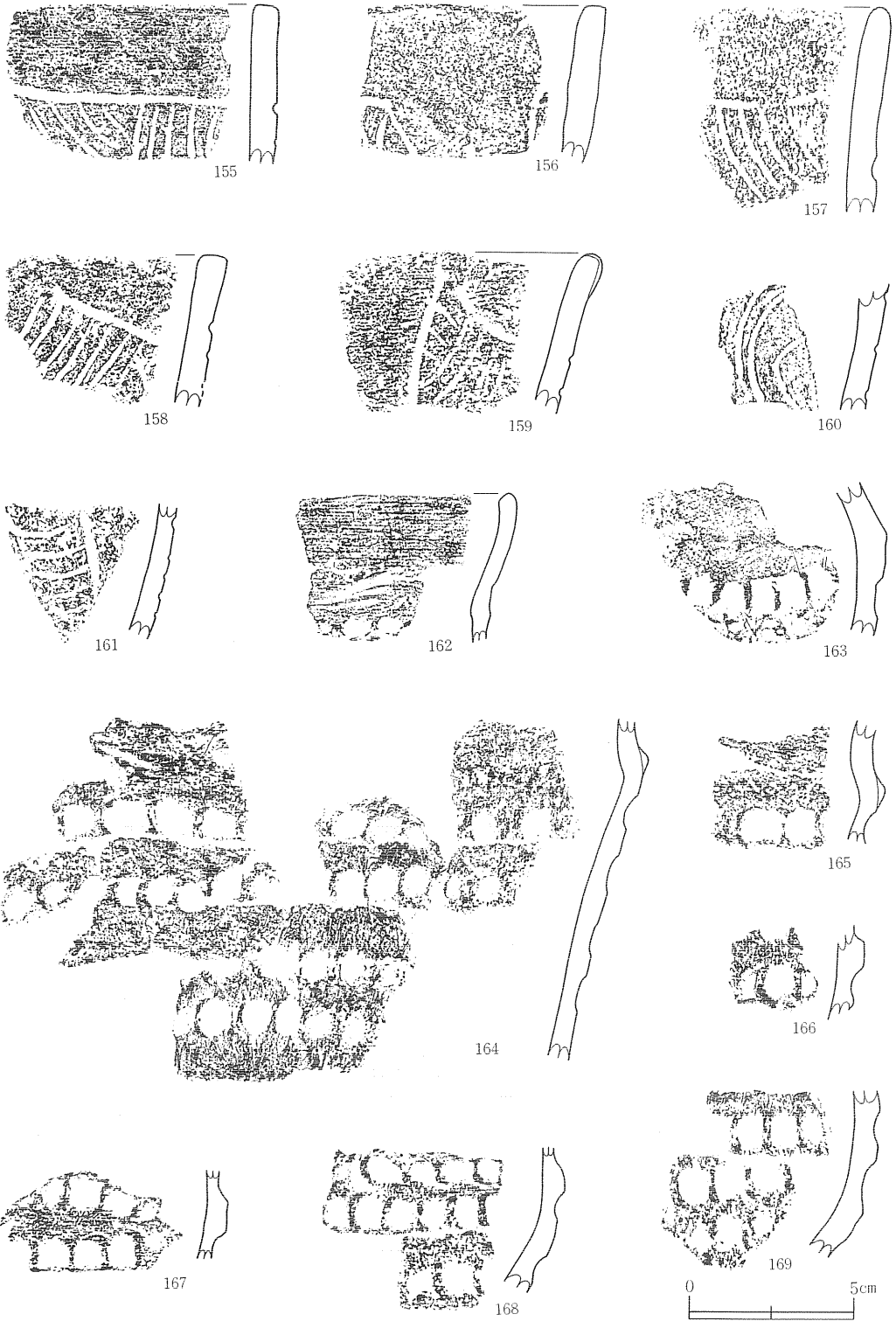
第89図 遺構外出土遺物(6)

第90図 遺構外出土遺物(7)

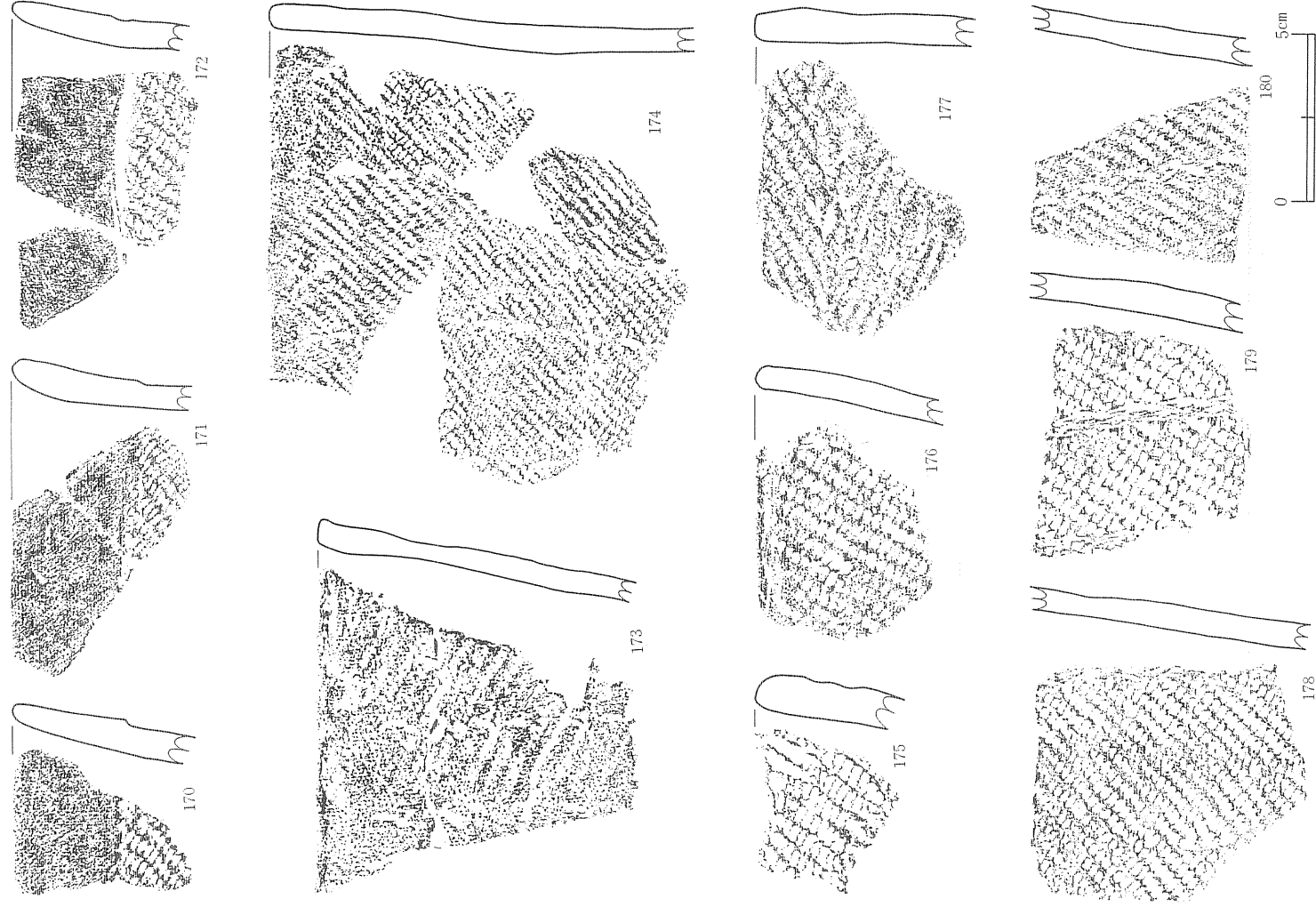




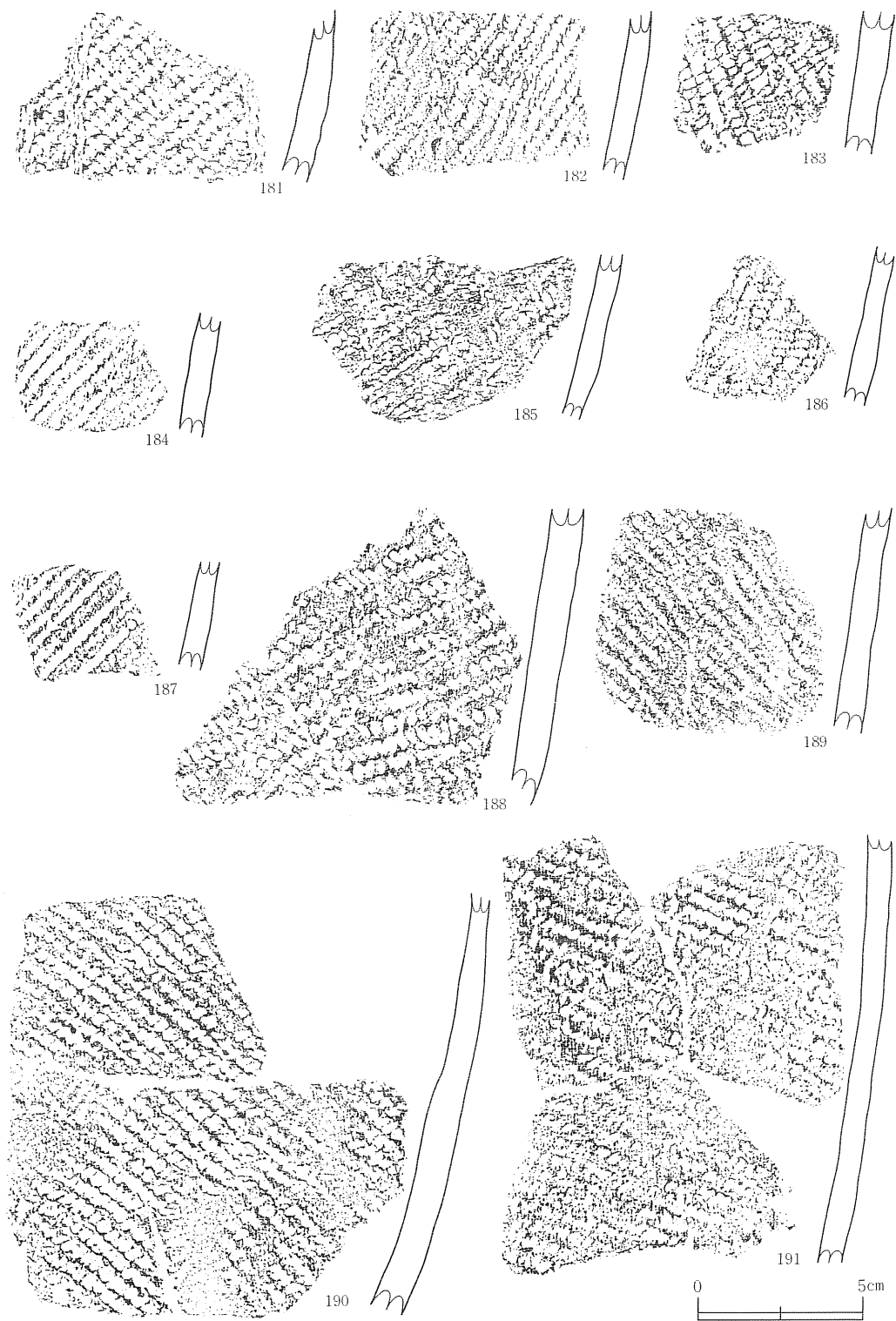
第91図 遺構外出土遺物(8)



第92図 遺構外出土遺物(9)

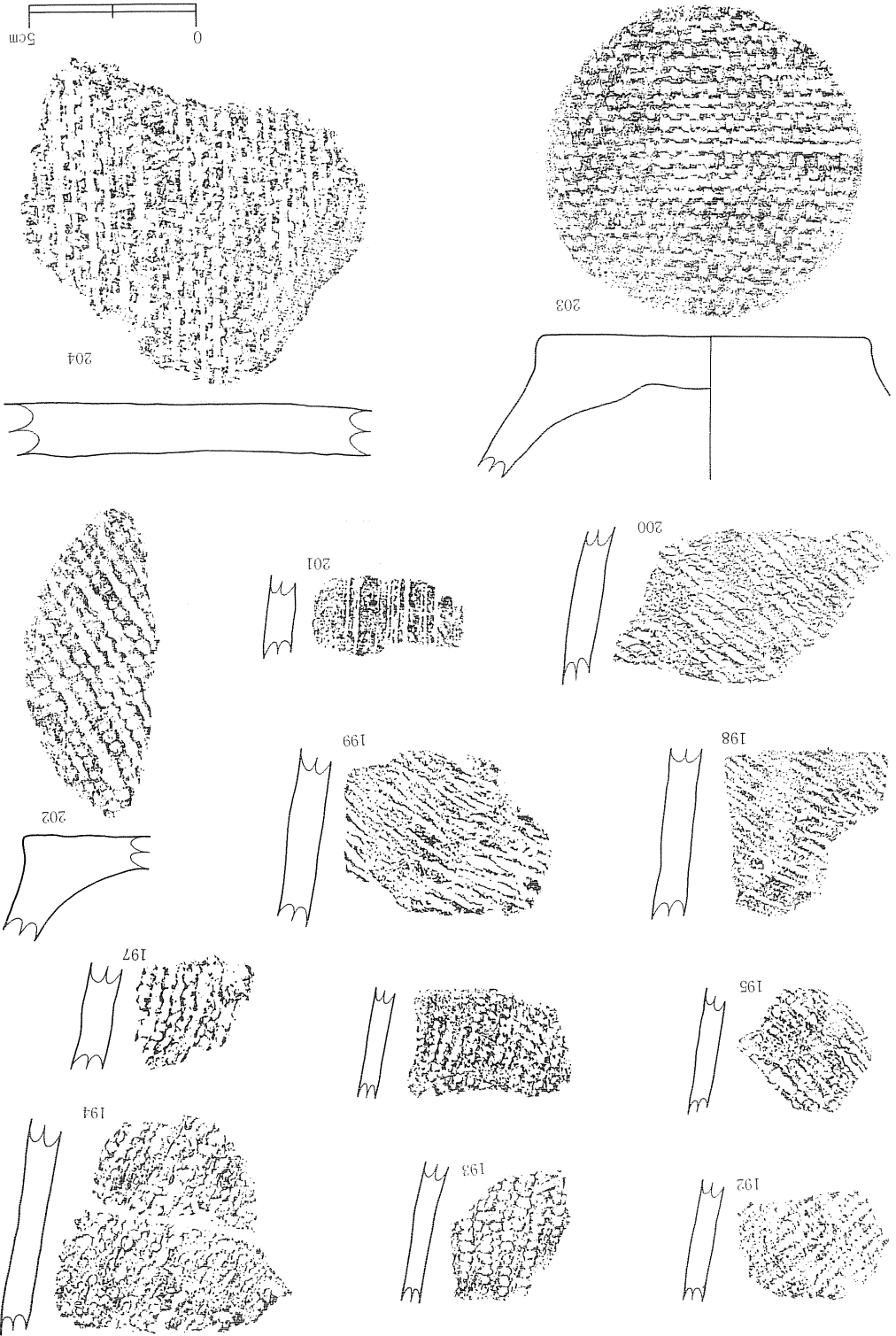


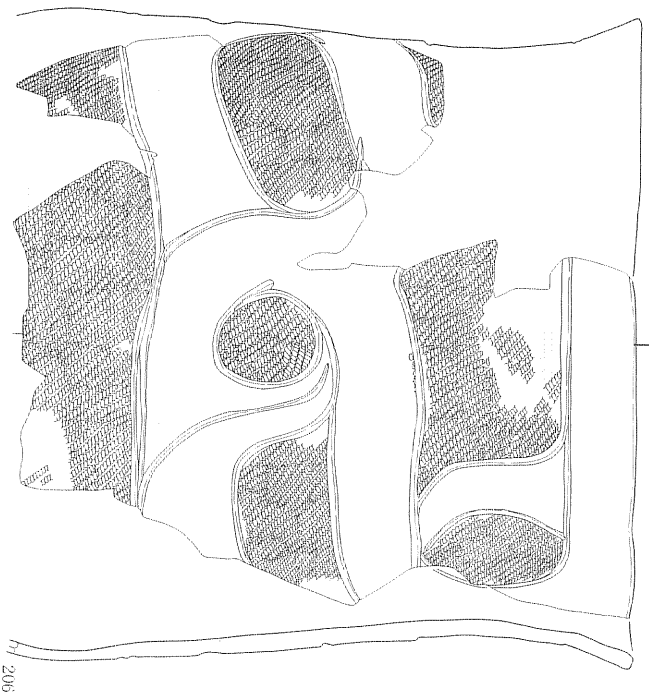
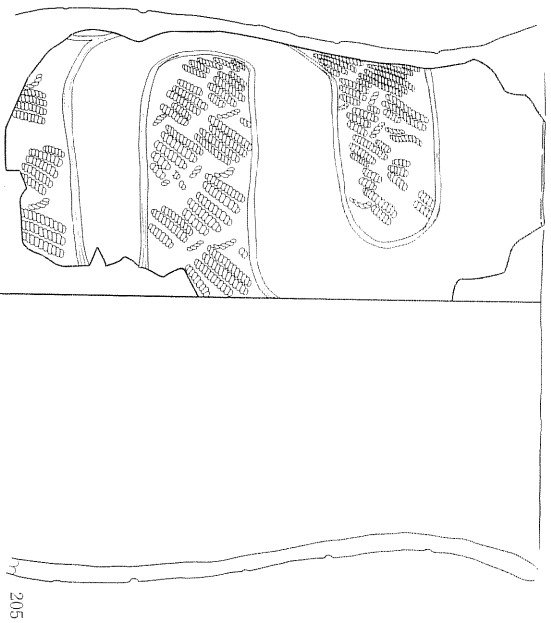
第98図 遺構外出土遺物(10)



第94図 遺構外出土遺物(11)

第95図 遺構外出土遺物 (12)

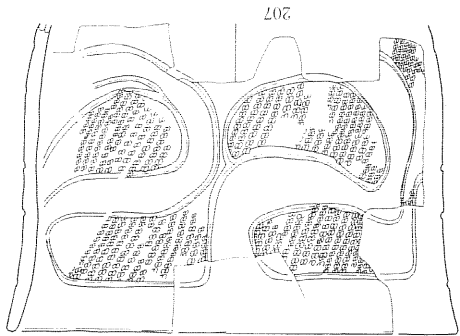
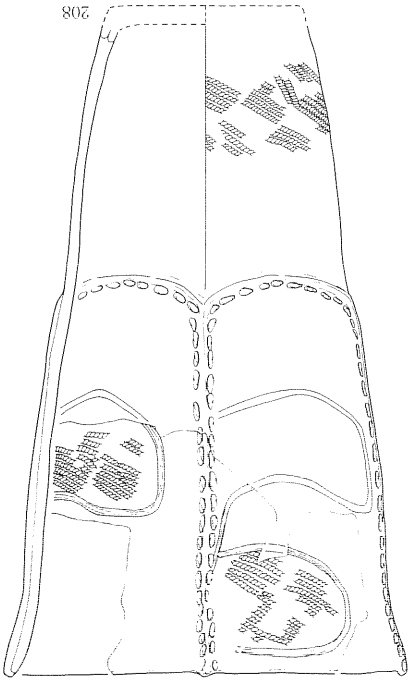
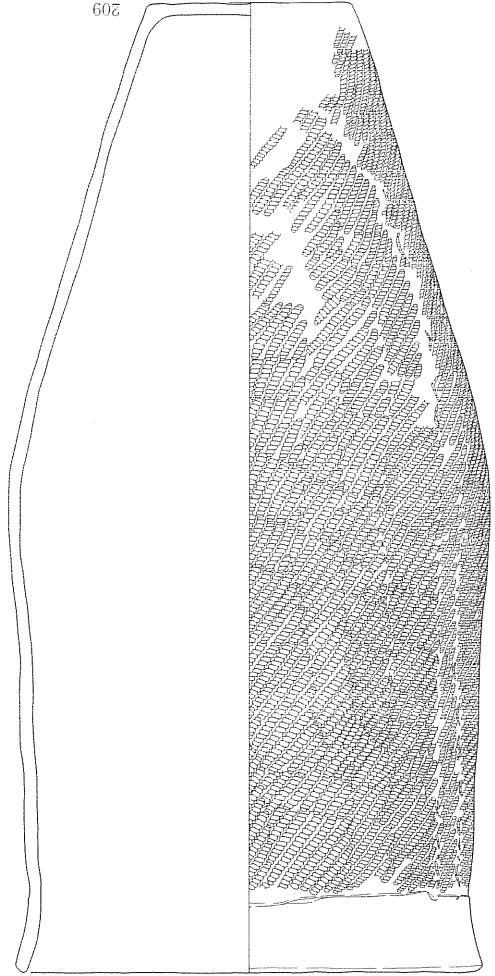
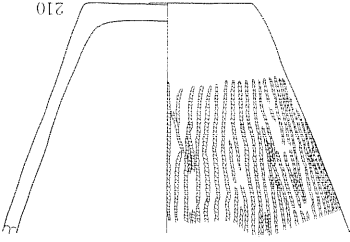


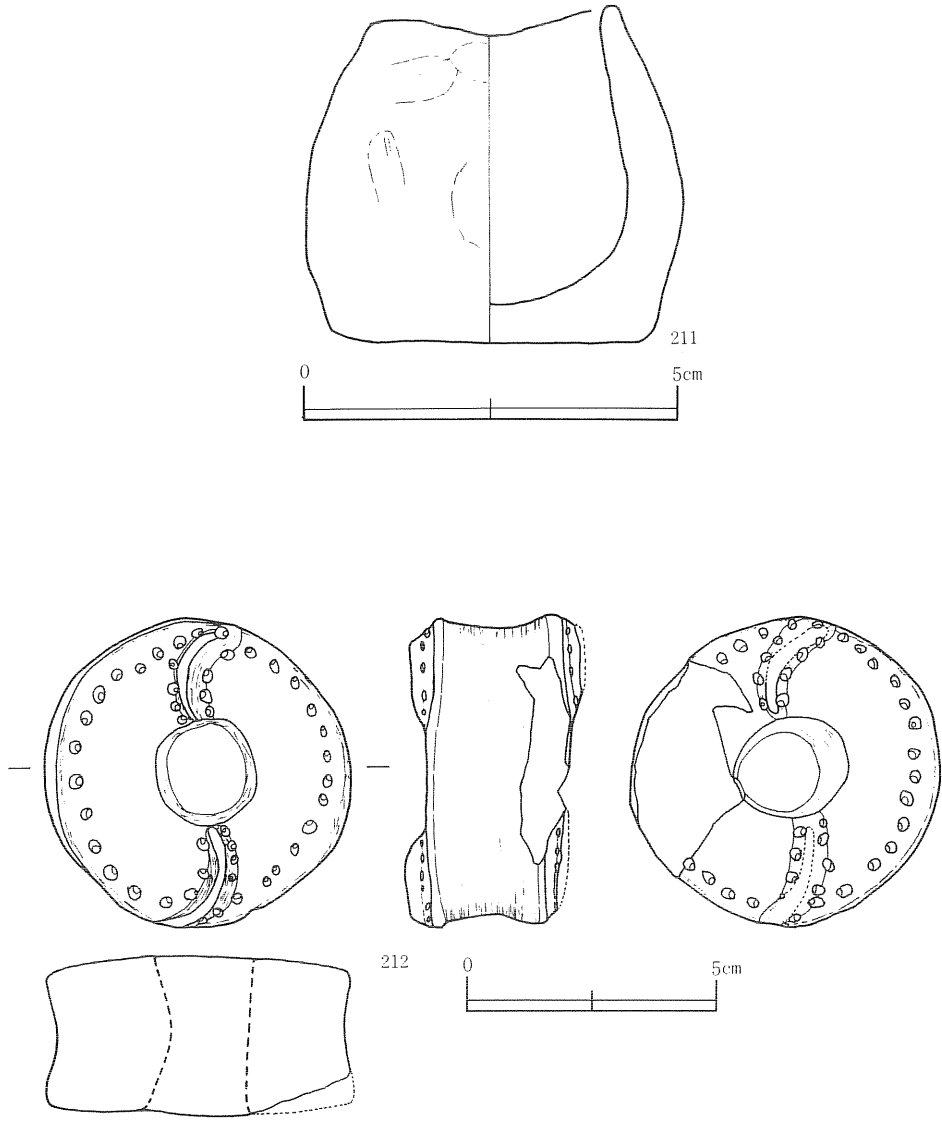


第96図 遺構外出土遺物(13)

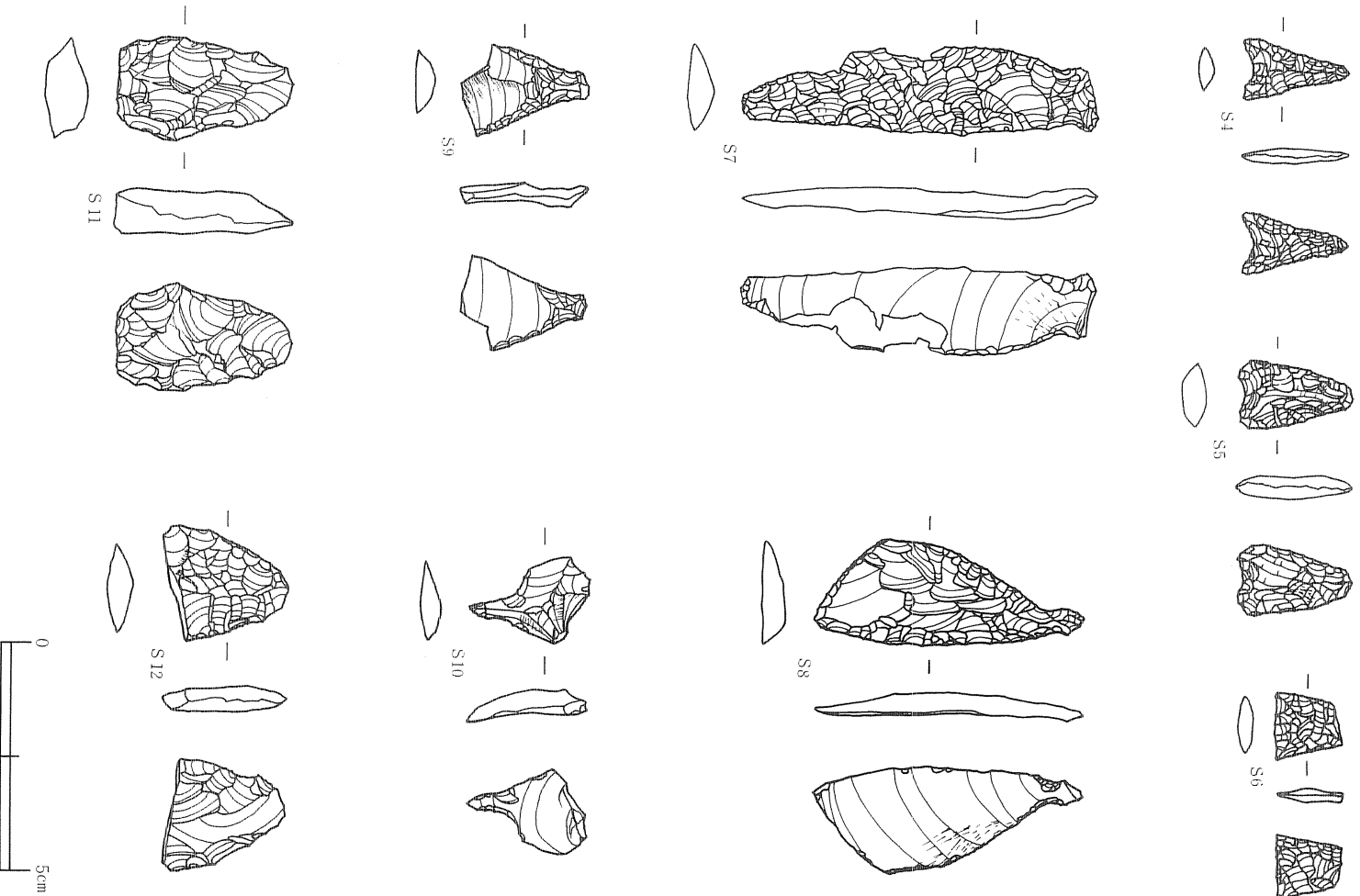
第97図 遺構外出土遺物(14)

0 10cm



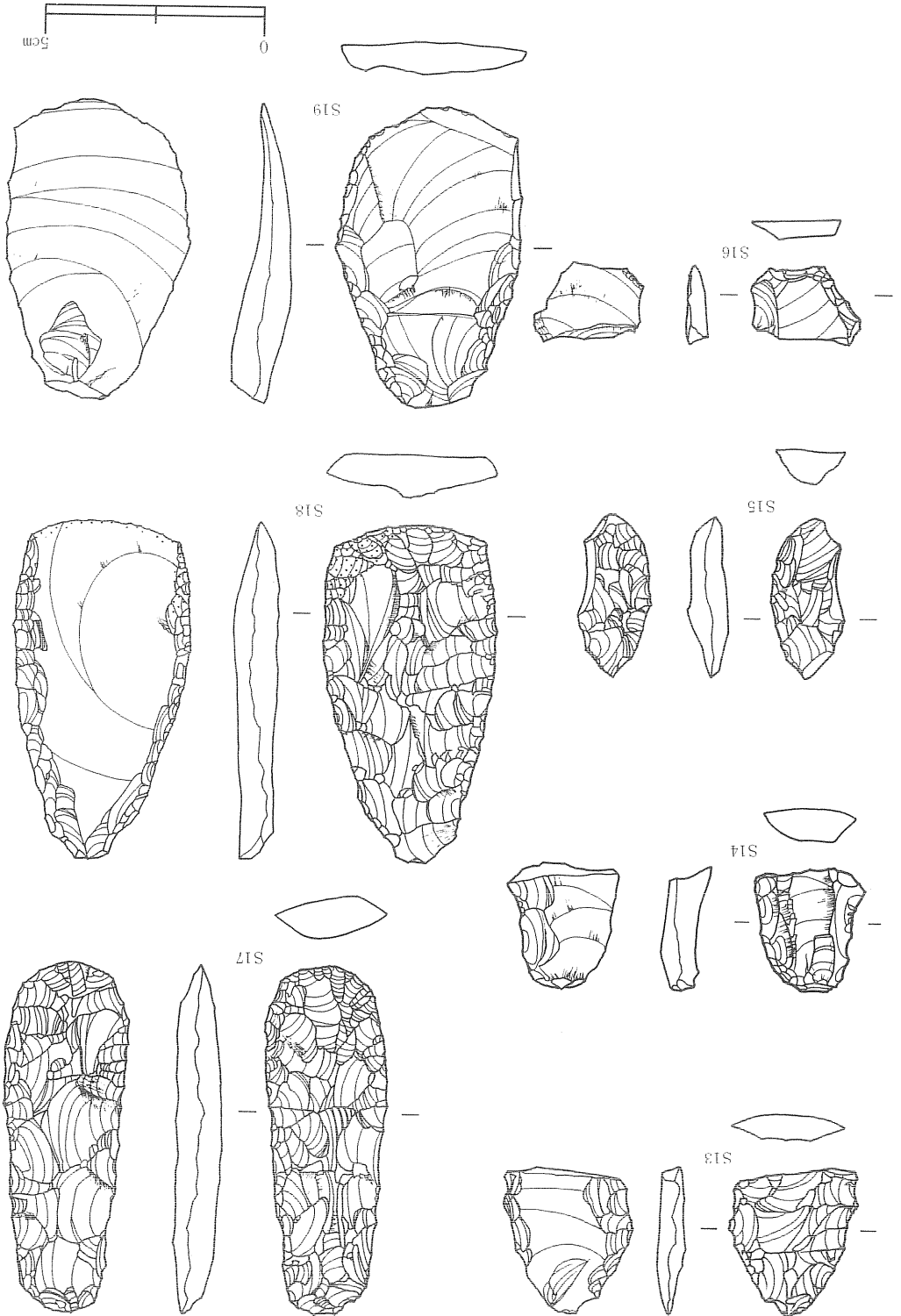


第98図 遺構外出土遺物(15)



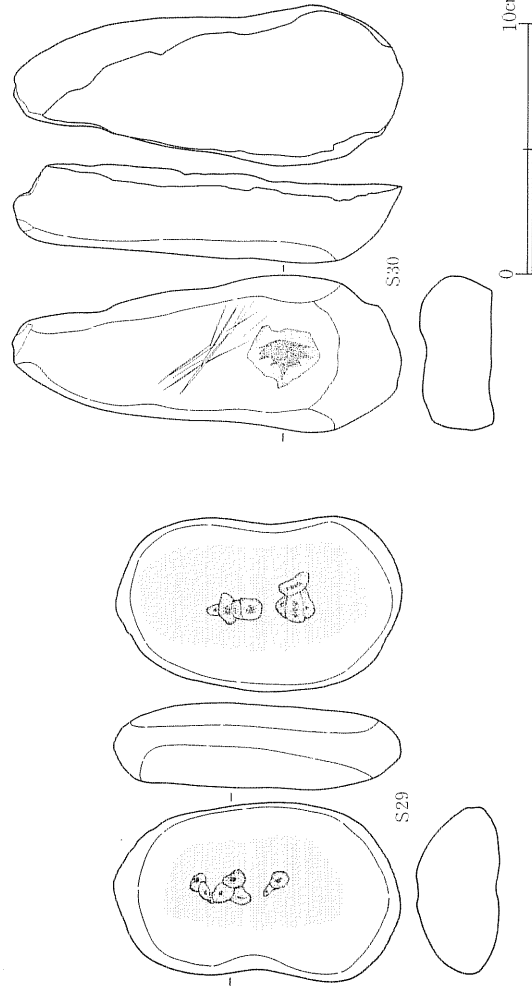
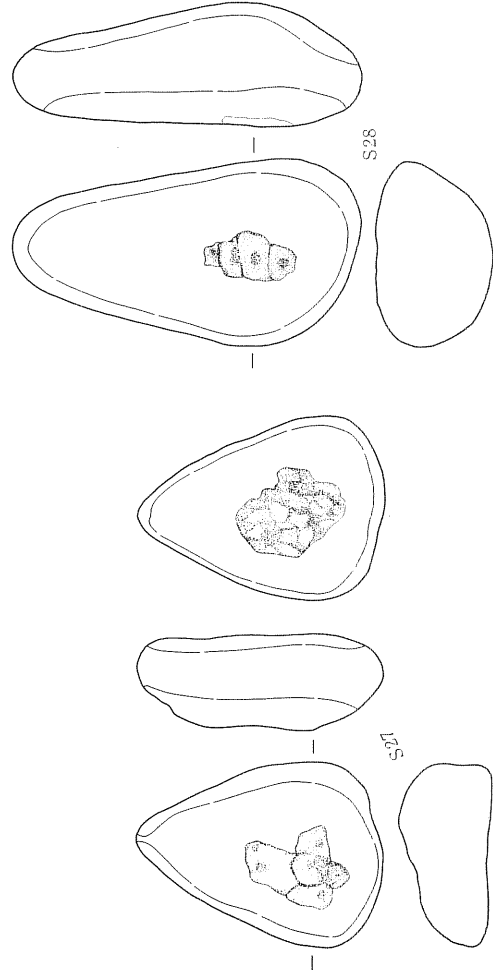
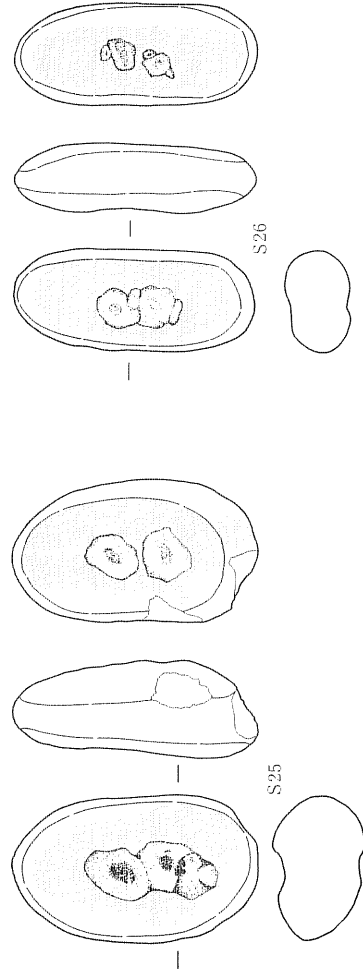
第99図 遺構外出土遺物(16)

第100図 遺構外出土遺物(17)

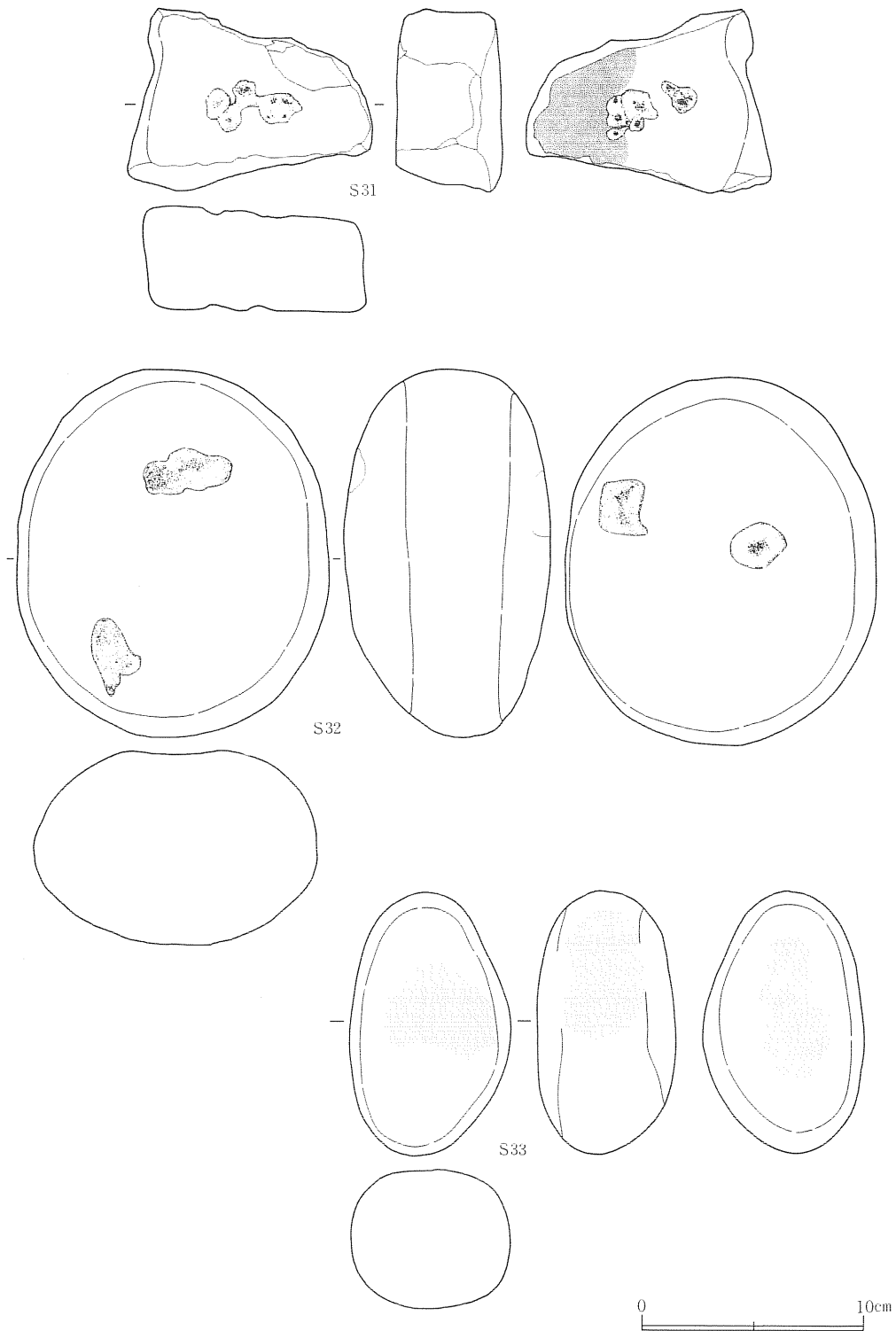




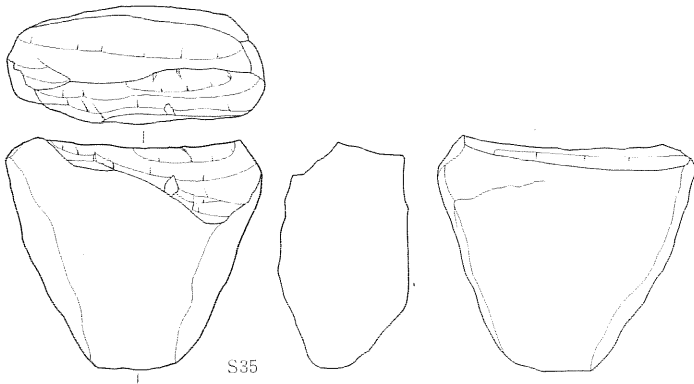
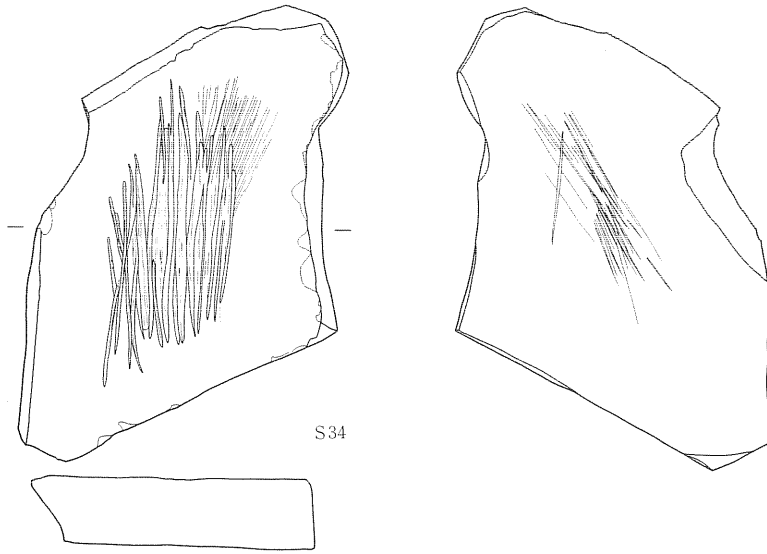
第101図 遺構外出土遺物(18)



第102図 遺構外出土遺物(19)



第103図 遺構外出土遺物(20)



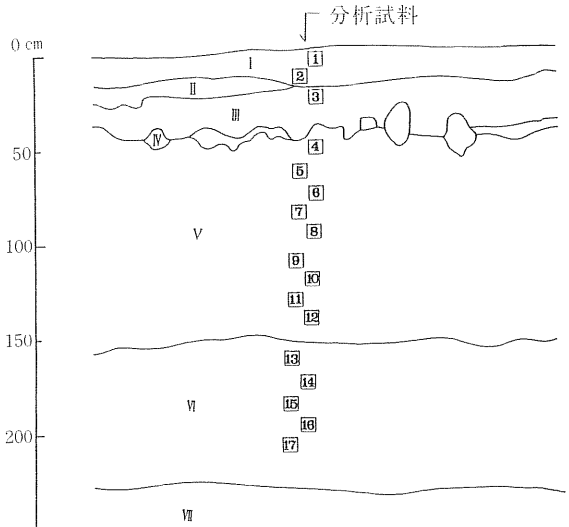
第104図 遺構外出土遺物(21)

第5章 自然科学的分析

第1節 鉍物分析

1 分析の目的と試料

上野台遺跡は、雄物川左岸の開析された段丘面に位置している。本分析では、段丘礫層を覆う堆積物中に示標テフラ層を発見し、その降灰層準から土層の堆積年代を知ることが目的とする。分析試料は、I・III・V・VI層にかけて採取された17点(No.1～17)で、全点について重・軽鉍物分析を実施した。土層の断面及び分析試料の採取位置を第105図に示す。



第105図 試料採取地点の土層図

2 分析の方法

17点の試料について、以下の手順で分析を行った。

- (1) 比較的砂分の多いNo.1、2については60g、砂分が少ないNo.3～8、No.11、12、16、17については150g、砂分が非常に少ないNo.9、10、13～15については250gずつ秤量を行った。
- (2) 超音波洗浄と1/16mm分析篩によって、粘土分を除去。
- (3) 80°Cで恒温乾燥。
- (4) 1/4～1/8mmの粒子を分析篩によって篩別。
- (5) テトラプロモエタン(比重2.96)によって重液分離。
- (6) 重鉍物、軽鉍物各々250粒以上を偏光顕微鏡下で同定し、重鉍物組成・軽鉍物組成を求めた。

3 分析結果

重鉍物組成を第1表・第106図に、軽鉍物組成を第2表・第107図にそれぞれ示した。

[重鉍物組成]

斜方輝石は、No.1で最も多く含まれており、重鉍物の約50%を占めている。No.2もかなり多い。No.3・4では20%と少ない。No.5では45.2%と最も多くなり、それより下位(No.14

上野台遺跡

あたりまで)に向かっては割合が小さくなる傾向にある。No.15から17にかけては、僅かに増加する。

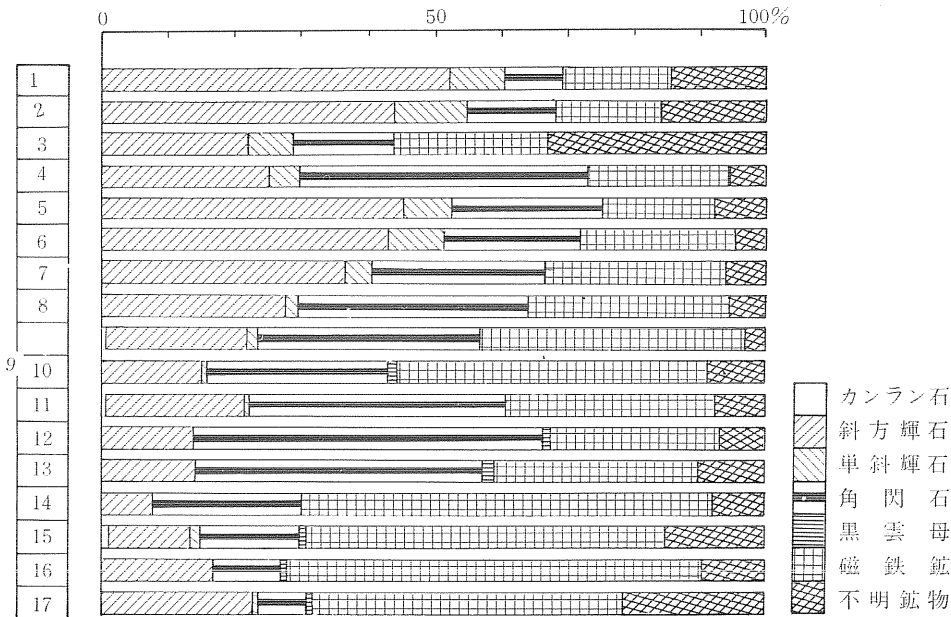
角閃石は、No.4(43.4%)やNo.12(52.6%)に出現のピークがある。磁鉄鉱は、斜方輝石の傾向と負の相関関係にあり、特に下位のNo.14(61.5%)やNo.16(62.1%)で最大となる。その他、単斜輝石が上位の試料に少量、カンラン石や黒雲母がごく少量それぞれ含まれている。

第1表 上野台遺跡テフラ試料の重鉱物組成

	OL	OPX	CPX	HO	BI	OPQ	OTHERS	TOTAL
1		114	18	19	1	34	32	218
2		97	24	30		34	36	221
3		46	14	31		48	69	208
4		55	10	95		47	12	219
5		119	19	60		44	21	263
6		92	18	44		50	10	214
7		77	8	55		57	13	210
8		64	4	70		70	13	231
9	1	47	3	63		87	7	218
10		34	1	50	3	103	20	221
11	1	46	1	84		68	17	217
12		30		113	2	55	15	215
13		37		111	4	79	27	258
14		17		50		136	18	221
15	2	27	3	32	2	115	33	214
16		38		22	2	133	21	214
17		52	1	17	2	105	49	226

広域テフラの示標となる火山ガラスの割合は、全体

OL:カンラン石 HO:角閃石
 OPX:斜方輝石 BI:黒雲母
 CPX:単斜輝石 OPQ:磁鉄鉱



第106図 上野台遺跡における重鉱物組成

を通して小さい。コロコロした分厚い感じの中間型ガラスは、上位の試料に数%ずつ含まれて

いる。No.2には、繊維束状の軽石型ガラスが比較的多く含まれている。またNo.12には、平板状のバブル型ガラスが比較的多く含まれている。石英は、下位の試料に比較的多く含まれているほか、斜長石も少量ずつ認められる。

4 考察

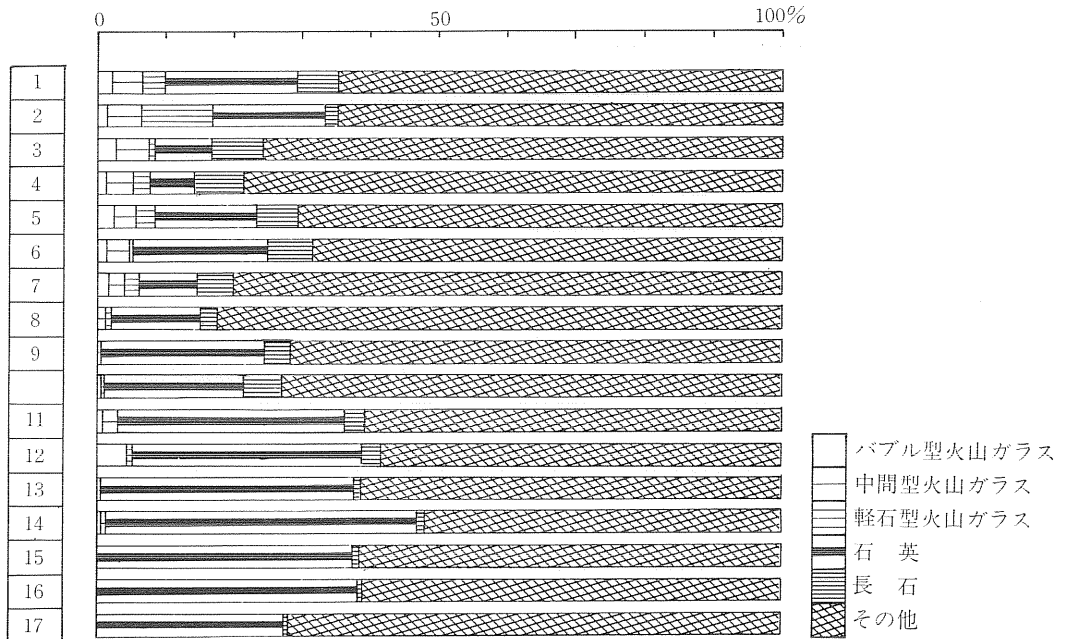
広域テフラの示標となる火山ガラスの濃集帯は、今回の分析では認めることができなかった。また、ガラスの量自体も少なく、屈折率を測定するのに適当な試料は無かった。

ここでは、相対的にややガラスの多かった層準の試料No.2とNo.12について考察を試みる。

第2表 上野台遺跡テフラ試料の軽鉱物組成

	BW	INT	PM	QZ	FELD	OTHERS	TOTAL
1	5	11	8	47	15	157	243
2	3	11	23	36	4	142	219
3	6	11	2	19	17	172	227
4	3	10	6	16	18	194	247
5	5	7	6	32	13	151	214
6	3	7	1	43	14	148	216
7	4	6	5	21	13	197	246
8		3	2	31	6	197	239
9		1		51	8	152	212
10	1	1	1	47	13	170	233
11	2	5		78	7	143	235
12	11		2	84	7	146	250
13		1		83	2	137	223
14	1	2		106	2	121	232
15				86	2	142	230
16				83	1	133	217
17				59	1	155	215

BW：バブル型火山ガラス QZ：石英
 INT：中間型火山ガラス FELD：長石
 PM：軽石型火山ガラス



第107図 上野台遺跡における軽鉱物組成

No.2：繊維束状のガラスに富む。黒褐色の腐食質土壌の下部にあたる。縄文時代期の遺物包

含層の上位にあることから、完新世後期のテフラと考えることができる。

この時代の示標テフラのうち、秋田県中部に分布する可能生があるテフラには、下記の2つがある。

a) 十和田a火山灰(To-a):915年に十和田火山から噴出したと考えられるテフラで、東北地方中部以北に分布している(町田 ほか、1981)。飯豊山地や仙台付近でも純層で認めることができる。

b) 十和田一中振(To-Cu):5,000~5,500年前に十和田火山から噴出したと考えられるテフラで、近年広域テフラとして脚光をあびてきている。飯豊山地では約6,300年前に九州から飛来した鬼界アカホヤ火山灰の上位に発見されている(西城・小松原、1988)。一方、低湿地遺跡として有名な山形県押出遺跡で認められたOn-1も、To-Cuと考えられる(未公表資料)。縄文時代の示標テフラとして、非常に重要である。

No.12:透明バブル型ガラスに富む。段丘を覆う重粘土質の flood loam 中に層準がある。透明のバブル型ガラスに富む示標テフラとしては、第1に九州の始良カルデラから2.1~2.2万年前に噴出した始良Tn火山灰(AT:町田・新井、1976)が挙げられる。しかし、現在の河床と段丘面の比高は約50m近くあり、段丘面の形成時期がかなり古い可能性もある。ATよりさらに古い示標テフラかも知れない。一方、重鉱物組成では、No.4で角閃石が増加している。火山ガラスの量が少ないため、明確なことは言えないが、10,000~13,000年前に十和田一八戸テフラ(町田ほか、1984)の可能生もある。十和田一八戸テフラは、最近岩手火山東麓でも見付かっており、火砕流として堆積したことが考察されている(土井・新井、1986)。この火砕流が当地域まで到達したことも考えられる。日本第四紀地図(日本第四紀学会、1987)では、火砕流が雄物川支流の玉川や岩見川上流に到達しているようなラインが描かれている。

いずれにしても、ガラスの量が少なく、示標テフラの明確な降灰層準を示しているとは言いがたい。今後、より保存状態の良い地点での分析が待たれる。

引用文献

土井宣夫・新井房夫(1986) 岩手山麓に分布する十和田火山、八戸テフラ。日本地質学会東北支部 会講演要旨。

町田 洋・新井房夫(1976) 広域に分布する火山灰一始良Tn火山灰の発見とその意義。科学、46p.339~347。

町田洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫(1984) テフラと日本考古学考古学研究と関係するテフラのカタログ。渡辺直経編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」p.865~928。

日本第四紀学会(1987) 日本第四紀地図。東京大学出版会。

西城 潔・小松原 琢(1988) 飯豊・朝日山地稜線部にみられる完新世中期の広域テフラとその地形編年上の意義について。日本地理学会子稿集。

第2節 ^{14}C 年代測定

1 試料

試料は、上野台遺跡C地点の断層谷(S T 221)埋土中より採取された6点の土壌である(No. 1～6)。

このS T 221は、本来断層によって生じた自然の溝を縄文時代に捨て場として利用したと考えられており、断面で17層に分層されている。今回の測定試料はそのうち中位～上位の土層について採取されたもので(第109図)、No. 3では縄文時代後期初頭の、No. 5では縄文時代前期初頭の土器がそれぞれ出土しているとのことである。

2 測定

学習院大学放射性炭素年代測定室が行った。

3 結果

学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書参照。

全試料とも完新世の年代測定値が得られたが、下位より上位の試料に向けて年代測定値が新しくなる傾向は、認められない。

学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

1987年10月8日受領しました試料についての ^{14}C 年代測定の結果を下記の通り御報告致します。なお年代値の算出には ^{14}C の半減期として Libby の半減期5570年を使用しています。また付記した誤差は β 線計数値の標準偏差 σ にもとづいて算出した年数で、標準偏差(one sigma)に相当する年代です。試料の β 線計数率と自然計数率の差が 2σ 以下のときは、 3σ に相当する年代を下限とする年代値(B. P.)のみを表示してあります。また試料の、 β 線計数値と現在の標準炭素についての計数率との差が 2σ 以下のときには、Modern と表示し、 $\delta^{14}\text{C}\%$ を付記してあります。

記

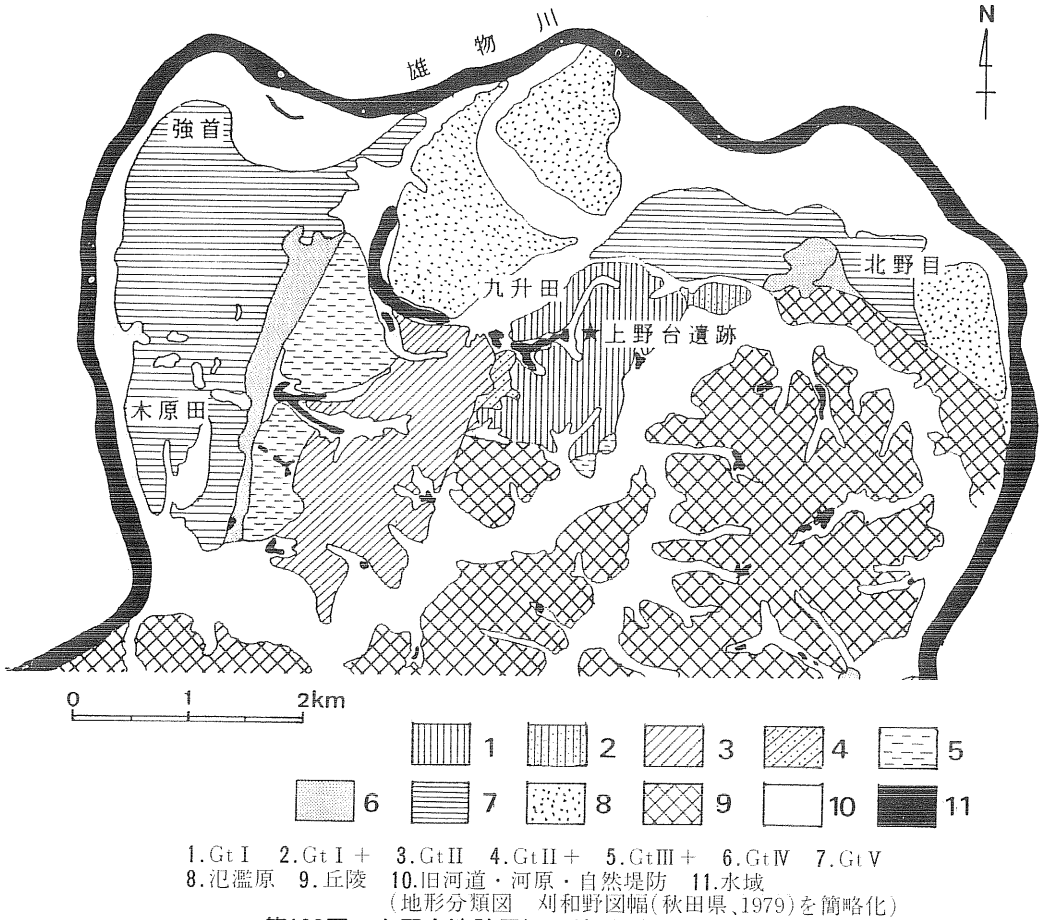
Code No	試料	B. P. 年代(1950年よりの年数)
Gak-13508.	soil from Uenodai site, Akita. sample No.1. S T-221.	2720 \pm 100 770 B.C.
Gak-13509.	soil from Uenodai site, Akita. sample No.2. S T-221.	3600 \pm 120 1650 B.C.
Gak-13510.	soil from Uenodai site, Akita. sample No.3 S T-221.	5990 \pm 360 4040 B.C.
Gak-13511	soil from Uenodai site, Akita. sample No.4 S T-221.	4400 \pm 450 2450 B.C.
Gak-13512	soil from Uenodai site, Akita.	3510 \pm B.C

第3節 花粉分析

1 はじめに

上野台遺跡は、横手盆地の北西の雄物川狭窄台地に位置する。この周辺は、雄物川流域を挟んで標高100m前後の出羽丘陵地帯よりなる。この発掘調査にともなう自然科学分析は、花粉化石の検討のみ行なわれた。野外調査時において、岩質は花粉分析に適したものとは言えず、殆ど残っていないのではないかとされた。しかし、室内分析の結果一部試料から、花粉化石が少ないながらも得られた。

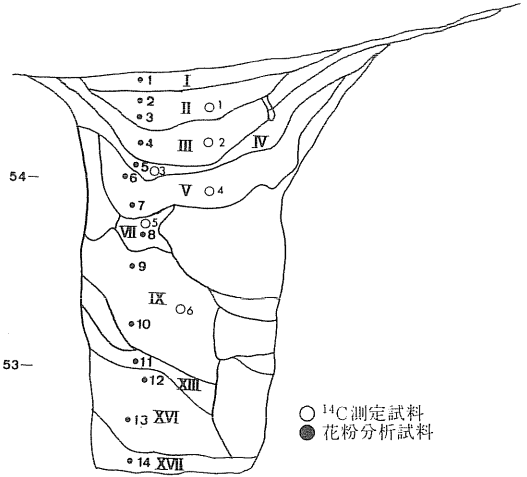
ここでは、層序区分に基づき花粉化石群集から見た古植生・地史的変遷と花粉膜の保存について報告する。



第108図 上野台遺跡周辺の地形分類図

2 地形・地質概略

上野台遺跡は、雄物川狭窄部低(台)地にあり、三方向を雄物川により囲まれ、東側には大沢郷丘陵地がある(第108図)。この部分は、Gt I・Gt I・Gt II・Gt II・Gt III・Gt IV・Gt V(秋田県、1979)の7段の段丘面がある。上野台遺跡は、⁵⁵m Gt I面に位置する。Gt I面は、中位段丘面群の上部面で、広大で波浪状の平坦緩斜面を呈する(秋田県、1979)。また、Gt I面にはいくつかの大きな谷が入り、上野台遺跡の西側には、九升田沼を形成する谷が入り込んでいる。この付近では、高位段丘面(Gt I)がGt I面の東側に小さい面を残しているが、大沢郷丘陵地を除けば広い面としては一番高い面⁵³である。Gt I面はサンガモン間氷期(リス/ウルム間氷期)で、約12~13万年前に形成された面である(秋田県、1979)。時代的には、第109図



14C測定・花粉分析用試料の採取地点(C区ST221)の土層断面図

下末吉面に相当する。分析を行った層位は、Gt I面に形成された深さ約2 mの狭谷を埋積する堆積物である。地層は、上位よりI-XVII層に区分される(第109図)。XVII-XIII層は黄色土、XVI-XVII層は褐色土、III層は暗褐色土、II・I層は黒褐色土よりなる。堆積層は、V層以下は堆積がかなり乱れているが、V層以上の層は比較的整然と載る。また、V層には縄文時代早期-前期の土器、III層には縄文時代後期の土器が包含される。

3 試料と方法

分析試料は、C区ST221地点で採取した。各試料は、現地で露頭から直接2 cm前後の厚さでスポットサンプリングを行った。試料採取層準を第109図に示す。

分析は、試料約5 gを10%KOH(湯煎約15分)-48%HF(約30分)-重液分離(ZnBr₂ 比重2.15, 750rpm, 20分・2500rpm, 10分)-アセトリンス処理(濃硫酸9:無水酢酸1の混液・湯煎5分)の順に行った。

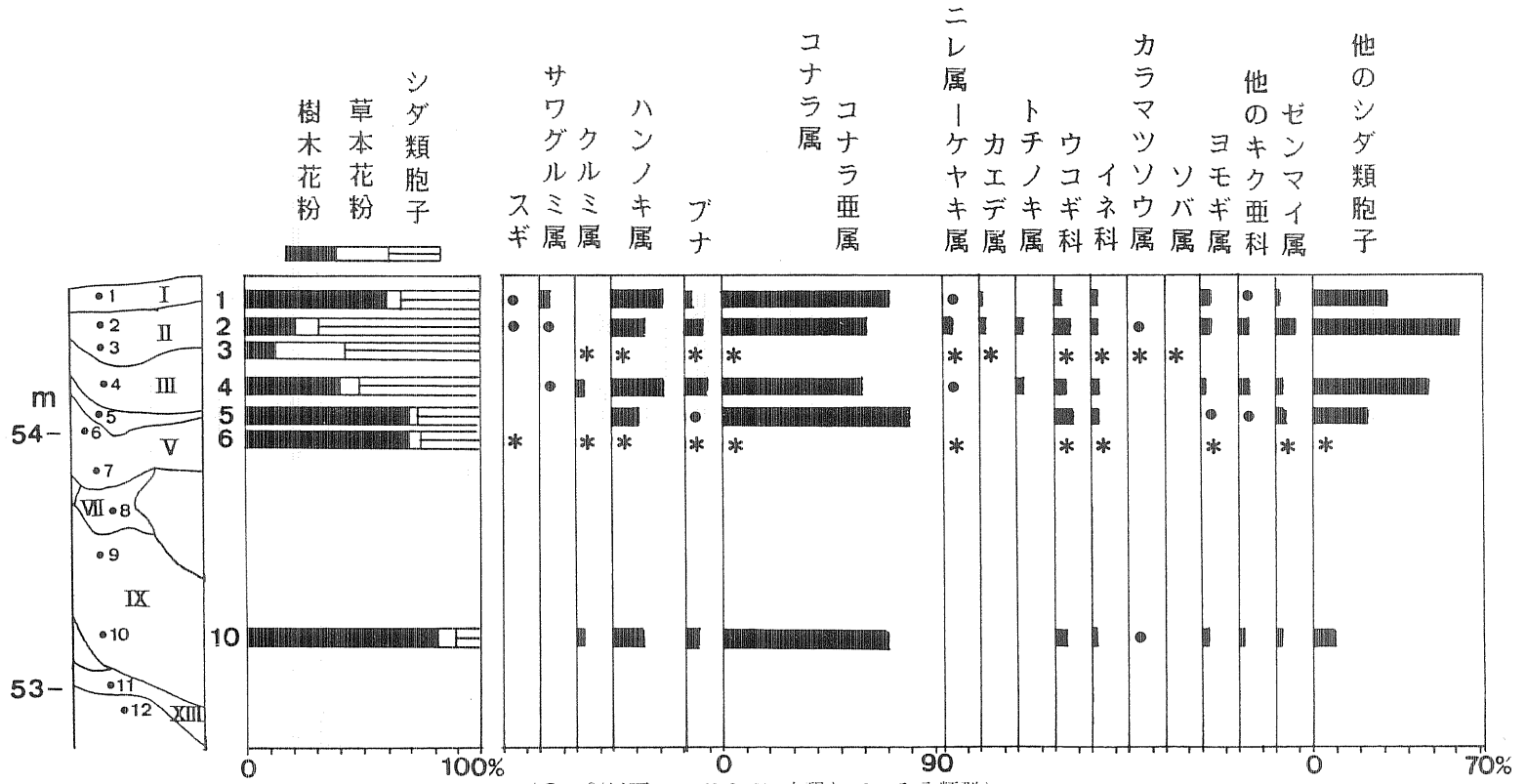
プレパラート作成は、タッチミキサーで残渣を十分攪拌後マイクロピペットで適量を取り(植物遺体が極度に重なり合わない程度の濃度)、グリセリンで封入した。

4 花粉化石群集の出現傾向

同定は、断片的係数による歪をなくすためプレパラート1・2枚の全面を走査した。その間に出現した全ての分類群とその出現個体数を第3表に示した。

第3表 上野台遺跡C区ST221地点の花粉化石の組成表

和名	学名																
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14		
樹木																	
ツガ属	<i>Tsuga</i>	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属単維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxyton</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	1	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヤナキ属	<i>Salix</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サウグルミ属	<i>Pterocarya</i>	7	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クルミ属	<i>Juglans</i>	-	-	1	2	-	1	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	55	17	11	25	13	6	1	-	1	23	-	2	1	-	-	-
ブナ	<i>Fagus crenata</i> Blume	6	9	2	10	1	4	2	-	3	9	-	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	184	74	8	67	97	59	10	3	16	123	-	10	14	-	-	-
クリ属	<i>Castanea</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	1	2	1	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キハダ属	<i>Phellodendron</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ユズリハ属	<i>Daphniphyllum</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
モチノキ属	<i>Ilex</i>	-	-	-	1	1	3	5	-	2	10	-	-	-	2	-	-
カエデ属	<i>Acer</i>	3	2	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
トネノキ属	<i>Aesculus</i>	-	2	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シナノキ属	<i>Tilia</i>	-	-	1	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ウコギ科	Araliaceae	5	7	1	4	8	2	-	-	-	7	-	-	-	-	-	-
ツツジ科	Ericaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タニウツギ属	<i>Weigela</i>	-	-	-	-	3	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
草本																	
イネ科	Gramineae	9	10	18	5	3	2	2	-	1	3	-	1	1	-	-	-
カヤツリグサ科	Cyperaceae	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	-	8	21	-	-	-	1	-	-	2	-	-	-	-	-	-
他のキンボウゲ科	other Ranunculaceae	-	-	-	-	1	2	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-
バラ科	Rosaceae	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アリノトウゲサ属	<i>Haloragis</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	1	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オミナエシ属	<i>Patrinia</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	11	17	14	4	1	1	-	-	2	5	-	1	1	-	-	-
他のキク亜科	other Tubuliflora	1	14	6	9	1	-	1	-	-	3	-	2	1	-	-	-
タンポポ科	Liguliflora	-	1	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
シダ類																	
ヒカゲノカズラ属	<i>Lycopodium</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ゼンマイ属	<i>Osmunda</i>	5	36	12	6	6	5	2	1	-	3	-	-	-	-	-	-
他のシダ類胞子	other Pteridophyta	134	329	104	132	39	23	3	1	2	18	-	2	1	-	-	-
樹木花粉	Arboreal pollen	263	122	27	113	123	80	19	3	22	176	0	12	18	0	-	-
草本花粉	Nonarboreal pollen	24	52	61	22	6	6	5	0	3	15	0	5	4	0	-	-
シダ類胞子	Fern spores	139	365	116	138	45	28	5	2	2	21	0	2	2	0	-	-
花粉・胞子総数	Total Pollen & Fern spores	426	539	204	273	174	114	29	5	27	212	0	19	24	0	-	-



(●:1%以下、*:No.3・6に出現している分類群)

第110図 上野台遺跡C区ST221地点の主要花粉分布図

また、主要花粉・孢子化石については、花粉分布図(第110図)に示した。全般に出現固体数が少なかったため、今回は基数が100を越える試料についてのみ示した。出現率は、樹木花粉は樹木花粉総数、草本・孢子は花粉・孢子総数を基数として百分率で産出した。

図版に示したPAL. MY番号は、単体標本の番号を示し、それら標本は(株)パレオラボに保管してある。

同定された分類群数は、樹木花粉が22、草本花粉及び樹木か草本か不明な花粉(バラ科)が13、形態分類を含めたシダ類孢子が3であった。

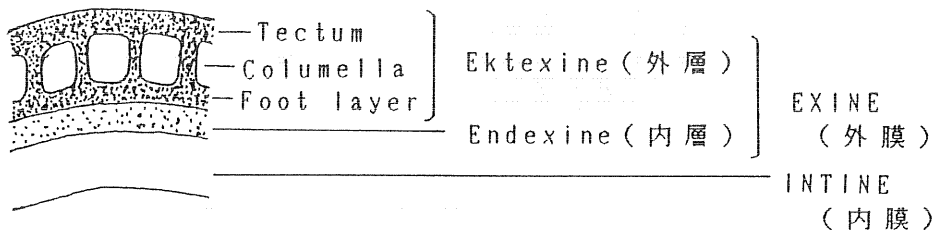
花粉・孢子化石は、No. 1 - 6 及びNo.10試料で100固体以上出現したが、他の試料では少なく、特に黄褐色土のNo.11・14は全く検出されなかった。

花粉化石群集は、60-80%を占めるコナラ亜属の最優占とハンノキ属を比較的高率に伴うことにより特徴づけられる。他にブナ・ウコギ科などを伴う。草本・孢子では、大半をシダ類孢子が占め、草本花粉はヨモギ属・キク亜科・イネ科等が低率に出現している。シダ類孢子は、上部に向け増加し、No. 2 で61%と多産しNo. 1 では31%程度になる。

5 花粉膜の保存について

花粉化石の保存状態は、一部花粉を除いて良いとは言えず、図版に示したように外膜が溶けかかっているもの(No. 2・3・8)、破損しているもの(No. 4)、外部形態の歪んでいるもの(No. 7)などが多い。図版に示したものは、まだ比較的保存がよい方である。一方、花粉含有量も少ない。一見した岩質は、関東ロームの様相を示すが、上野台遺跡の場合水つき堆積物のためか、量的に少なくともいわゆるローム層中の花粉のように選択的に残存したというような印象を受けない。しかし、花粉膜が分解されかかっているという事実は、選択的残存を否定することは出来ない。

花粉膜は、大きくは外膜(Exine)と内膜(Intine)に区分され、外膜は更に外層(Ektexine)と内層(Endexine)に分けられる(第111図)。外層は、Tectum・Columella・Foot layer からなる。これらの層の区分及び名称は研究者によって異なり、ここでは Faegri&Iversen(1964)の区分と名称を示した。

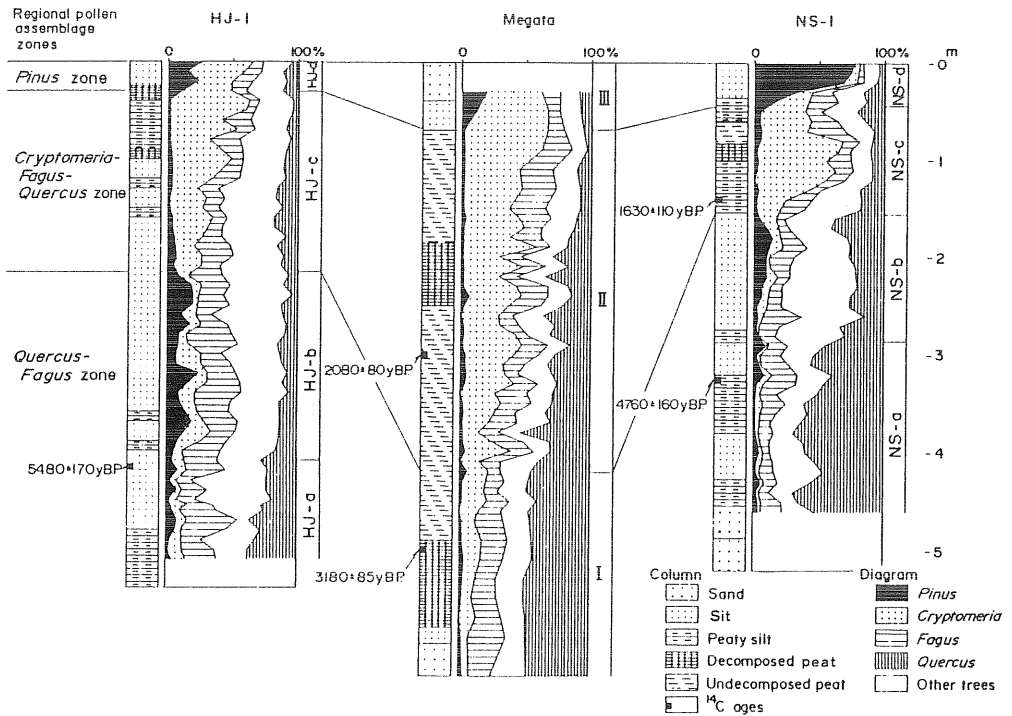


第111図 花粉膜の区分と名称

内膜は、セルロース・ペクチン・カロースなどで形成され、堆積物中の花粉には残らない。外膜は、スポロポレニンというC₃₀の高分子物質などで形成され、普通外膜のみが堆積物中に残存する。スポロポレニンは、一般に物理・化学的風化に対し極めて強靱であるがクロム酸・過マンガン酸カリ等に分解され、また、直射日光と酸素により酸化分解される。土壌中では、バクテリアによる腐食も受ける。スポロポレニンは、種により含有量が異なり、この含有量の量比と酸化に対する抵抗が一致し、含量がおおいほど分解されにくい(中村、1967)。一般に、シダ類孢子・キク科は比較的強く、逆に落葉性樹木花粉は分解され易い。つまり、風化土壌やローム層などの酸化条件下では、花粉の外膜は分解され易い環境にあり、強い花粉のみが選択的に残存する。

この様な状況であることから、今回の結果がどの程度周囲の植生を反映しているかという問題点はあるが、比較的分解され易い落葉性樹木花粉からなることから、強い分解を受けたわけではないであろう。

一方、量的にすくないのは、分解もさることながら堆積速度との関係で、本質的に花粉が少なかった可能性もある。



HJ-1: 本荘市葛岡 第112図 Megata: 秋田市女潟 NS-1: 能代市坂形 (辻誠一郎、1981)
簡略化した樹木分布図と花粉層序対比図

6 花粉化石群集から推定される古植生

花粉分布図に示した樹木花粉の出現傾向はそれほど変わらず、コナラ亜属の優占ブナの随伴により特徴付けられる。従って、ナラ類・ブナからなる落葉広葉樹林おそらくミズナラ・ブナ林からなる冷温帯落葉広葉樹林が周囲に存在していたであろう。また、低地にはハンノキ湿地林が形成されていた。

秋田県の低地における分析結果としては、女潟(辻・日比野、1975)、飯田・能代市一ツ沢堤(川村、1977)、本荘・能代市坂形(辻、1981)などがある。辻(1981)は、秋田県の低地における完新世後半の従来知られる花粉群集を統合し、下位よりコナラ属(*Quercus*)-ブナ属(*Fagus*)帯(上限は約2,700ないし2,000年前)・スギ属(*Cryptomeria*)-ブナ属-コナラ属帯(上限は約1,000年前)・マツ属(*Pinus*)帯の3地域花粉群集帯を区分した。そして低地及びその周辺では、コナラ属・ブナ属の優占する落葉広葉樹林から、スギを含む落葉広葉樹林、さらに人間の植生破壊によりマツ属二次林へと変遷したとした。

上野台遺跡においては、それらの変遷を時空的に検討できる結果は得られていないが、それ程の距離的・比高的差なく、ほぼ同様の変遷をしたであろう。上野台遺跡の結果は、最下位のコナラ属-ブナ属帯に総て比較され、I層は約2,000年前以前の堆積層と考えられる。このことは土器編年とは矛盾しない。また下限については推定できないが、少なくともK層以上は完新世の堆積物である。

引用文献

秋田県(1979) 地形分類図副 刈和野

Fægri, K. and J. Iversen (1964) Textbook of Pollen Analysis. Munksgaard, Copenhagen, 295p

川村智子(1977) スギ(*Cryptomeria japonica*)の分布に関する花粉分析的研究(I. 秋田県). 花粉、11、p. 8-20,

中村 純(1967) 花粉分析. 古今書院、232p

辻誠一郎・日比野紘一郎(1975) 秋田県女潟における花粉分析的研究. 第四紀研究. 14、p. 151-158

辻誠一郎(1981) 秋田県の低地における完新世後半の花粉群集. 東北地理、33、p. 81-88

第6章 まとめ

1 土器と遺構について

上野台遺跡全体の調査結果を概観すると、縄文時代早期末葉ないしは前期初頭から中・近世まで断続的ながら人々の生活の舞台となっていたことがわかる。ここでは遺跡出土の土器とともに、それが伴う遺構の在り方について概略を述べたい。

I群土器のうち1類としたA区出土の縄文地に大まかな沈線を施す土器と、3類の太い縄文原体を回転押捺したと考えられる土器は、長七谷地貝塚で上川名Ⅱ・綱文系土器に併行するとした第Ⅲ群土器に相当する。またI群2類a、bの0段多条のLR縄文を多用し、平坦な口唇部をもつ土器は長七谷地貝塚第Ⅱ群に相当しそうである。これら土器の伴う遺構としてはA区のSK16がある。A区全体としては、遺構の集中する調査区中央やや北寄りに位置しており、このSK16を中心とするKT70・71グリッド周辺から、若干のI群土器が出土している。

Ⅱ群土器の時期になると、A区で3類大木8b式期の堅穴住居跡SI13があり、土器埋設の石囲炉をもつ円形の住居である。もう1軒(SI37)も同時期の可能性がある。

4類大木10式期になるとC区に5軒の堅穴住居跡が現れる。これら住居は、東西に細長い尾根上に近接するように並んで検出されている。一方A区では大木10式期のSK49が遺構集中地域の中央に1基存在するだけである。4類土器とした土器はC区で文様構成上a・bに分けたがA区SK49出土の37はbに含まれるもので大木10式第Ⅲ段階の土器である。

Ⅲ群土器1類は先述したように、広義の門前式や宮戸Ib式など時間と系統差のある土器を一括している。A区SK42出土の49や遺構外出土の121などは門前I式に併行し、C区の遺構内出土の27・31、A区の147などは門前式に後続する宮戸Ib式と考えられる。

この時期にはA区ではSK42・46遺構集中地域から離れて存在している他、6基の土坑があり、特にSK26は土製耳飾の出土から土壙墓と考えられる。また同じA区の焼土遺構もその確認面と包含層の土器から同時期と判断される。C区掘立柱建物跡SB241・242は、その柱穴内出土の粗製深鉢形土器の破片からこの時期のものと考えられ、同一個体の破片を出土したSK214は土壙墓として伴う可能性がある。B区の堅穴住居跡SI104もこの時期である。

Ⅲ群土器2類は十腰内I式併行の土器であるが、明らかにこの時期と考えられる遺構は検出されていない。

Ⅲ群土器3類は、C区遺構外出土土器164に代表される。内傾する口縁部は鋭く屈曲し、体部が直線的に底部に向かってすぼまる器形である。体部の円形の刺突は指頭による。こうした

上野台遺跡

体部全面に刺突の行なわれる土器は、秋田市の坂ノ上A遺跡や雄物川町の根羽子沢遺跡からも出土しており、以前より三十稲場式土器との関連性が問われ、後期初頭に位置付けられることの多かった土器である。

Ⅳ群土器の時期、弥生時代に至ってはA区においてそれぞれ1基ずつ土坑が検出されているにすぎない。

上野台遺跡はその出土遺物が多時期にわたるものの、それに伴う時期の明確な遺構は少ない。その中で、A区の大木8b式期の竪穴住居跡やC区の大木10式期のそれは、短期間ながらも、遺跡が居住域として使用されていたことを物語っている。さらに後期の前半にはA区では土壙墓、C区では特殊な掘立柱建物跡などがあり、この時期に至って遺跡は小規模ながら墓域として使用されていたことが窺えるのである。

2 科学的分析について

発掘調査にあたって、上野台遺跡では、既述の通り科学分析をおこなっている。花粉分析と¹⁴C測定はC区S T 221の試料で行ったものであり、5層出土の表裏縄文土器の年代と古植生の把握を目的としたものであった。分析の結果は期待に反し、S T 221が再堆積土によって埋没しており断層によって生じたという判断が裏付けられたことになったが、花粉分析結果からはS T 221の2層は2,000年以前の堆積土であり、¹⁴C測定結果の2層採取試料の年代 2720 ± 100 と矛盾はしない。従ってS T 221は縄文時代終末期にはほぼ埋まりきっていたものと考えられる。問題は特殊な遺構であるS B 241・242の時期(縄文時代後期初頭)にS T 221が開口していたかどうかであるが、分析の結果からはいずれとも言及できない。

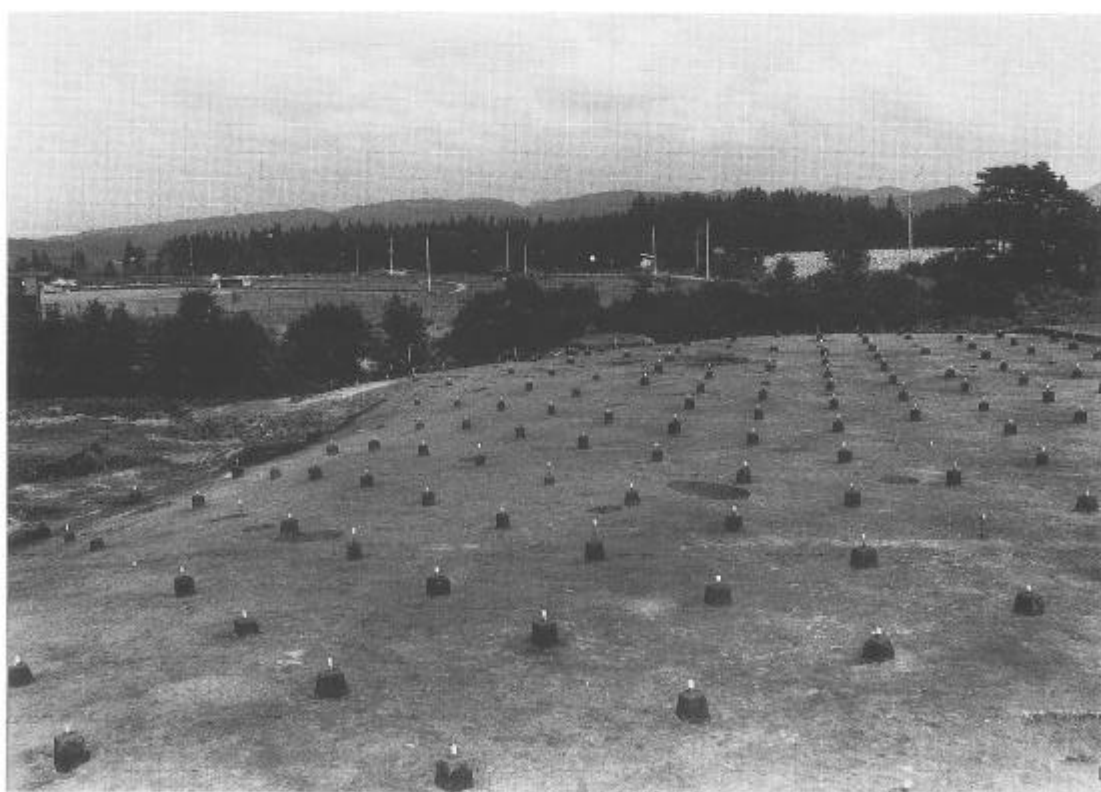
重鉍物分析は火山ガラスを検出し、その屈折率によって既知の火山灰との同定を行い、遺跡の立地する段丘の年代を明らかにしようとしたものである。分析の結果からは良好な火山ガラスの検出はなされなかったが、男鹿市箱井では旧石器研究の鍵層である始良Tn火山灰の純層が確認されており、こうした分析を繰り返すことによって県内でも縄文時代以前の遺跡や遺物の年代をきめる降下火山灰の発見がなされるものと考えられる。

参 考 文 献

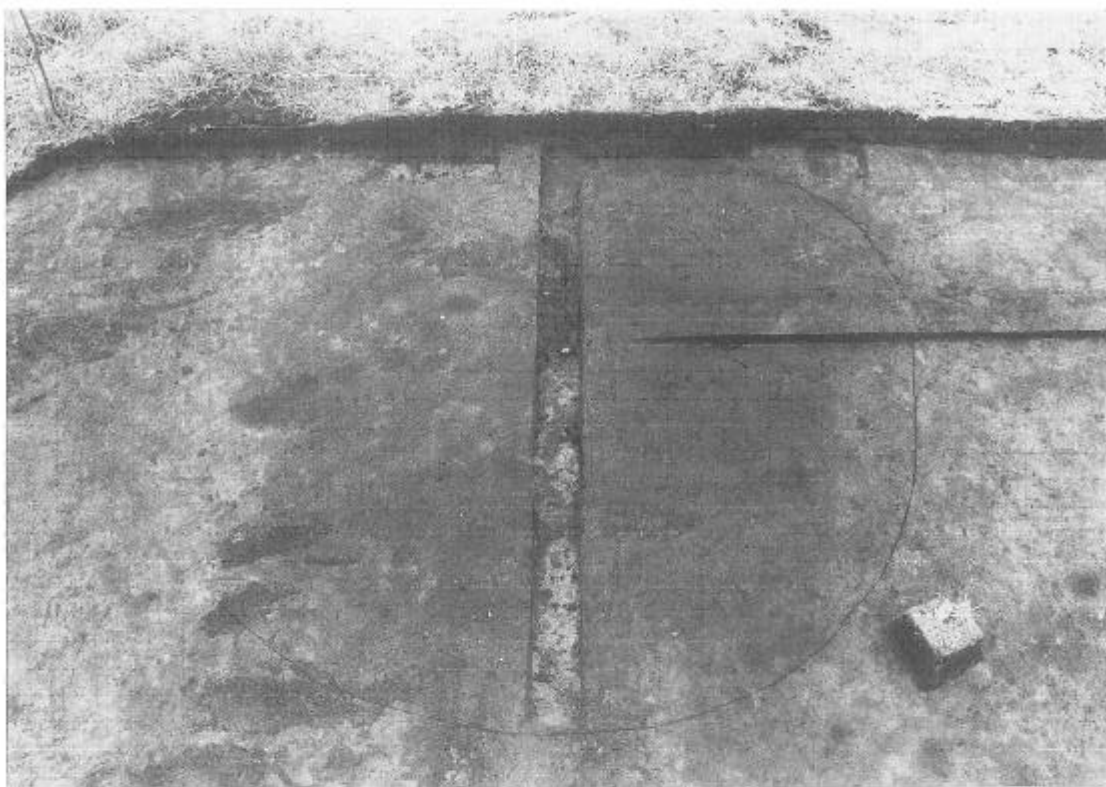
- 青森県教育委員会 『長七谷地貝塚』 青森県埋蔵文化財調査報告書第57集 1979(昭和55年)
丹羽茂 「大木式土器」『縄文文化の研究』4 雄山閣 1981(昭和56年)
今村啓爾 「称名寺式土器の研究(下)」『考古学雑誌』 第63巻第2号 1977(昭和52年)
秋田市教育委員会 「坂ノ上遺跡」『小阿地』 1976(昭和51年)
秋田県教育委員会 『根羽子沢遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第176集 1988(昭和63年)
白石建雄他 「秋田県男鹿半島で発見された始良Tn火山灰」『第四紀研究』 第27巻第3号 1988(昭和63年)



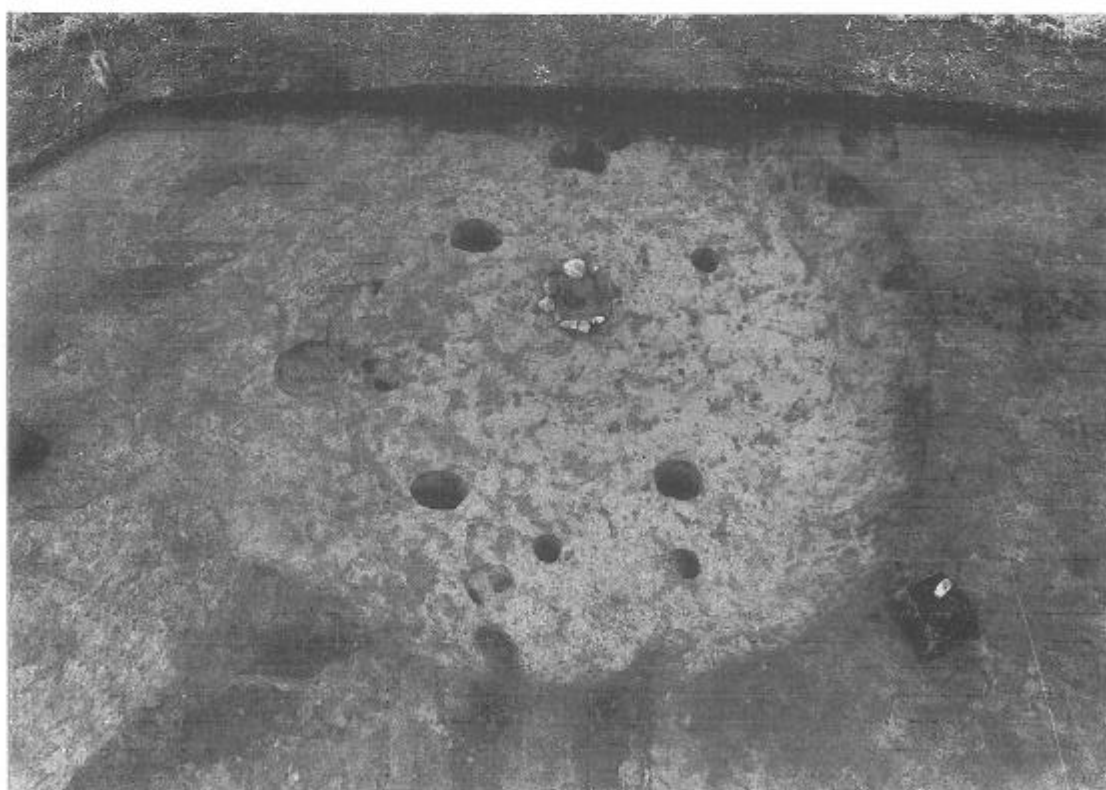
1 調査区全景(北▷南)



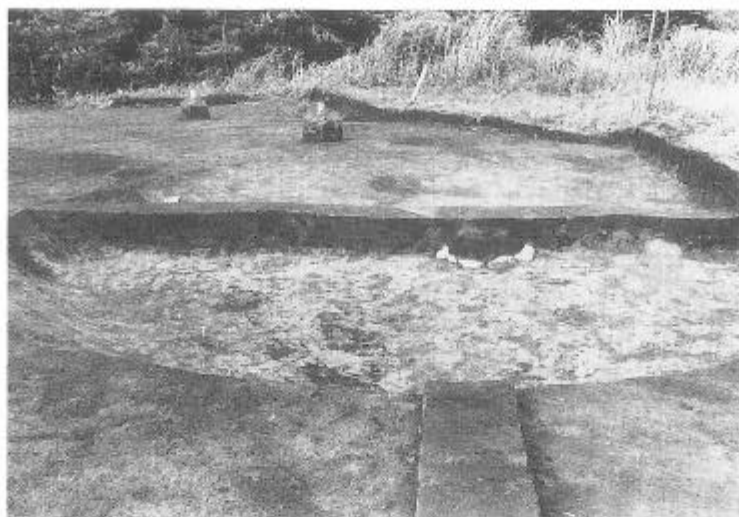
2 調査区全景(西▷東)



1 S I 13 竪穴住居跡確認状況



2 S I 13 竪穴住居跡



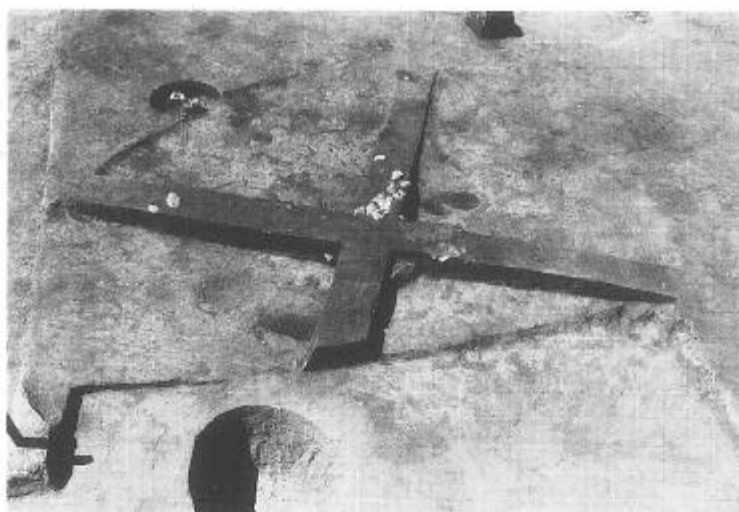
1 S I 13 竪穴住居跡土層断面



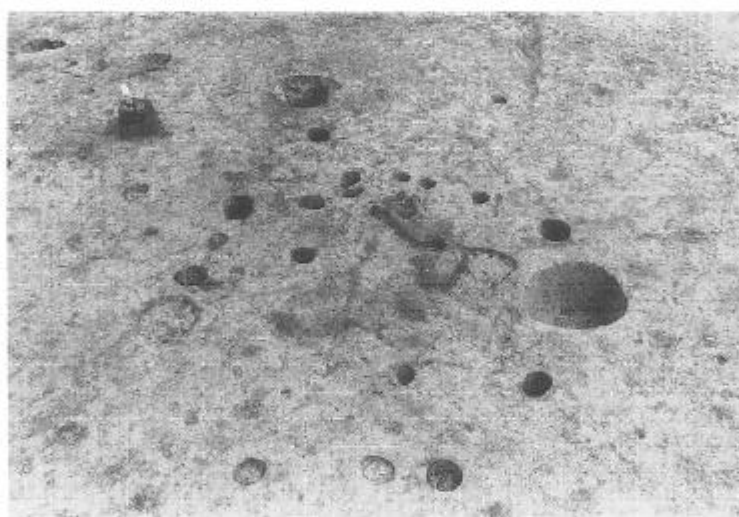
2 S I 13 竪穴住居跡炉



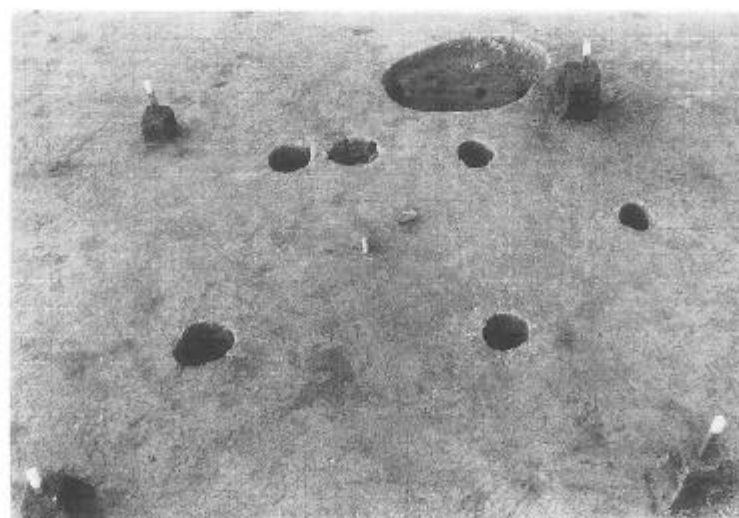
3 S I 13 竪穴住居跡炉土層断面



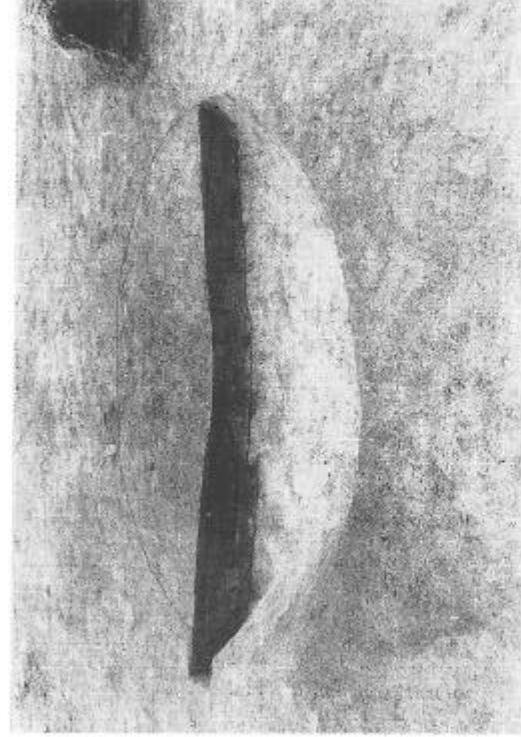
1 SI 37 竪穴住居跡(東▷西)



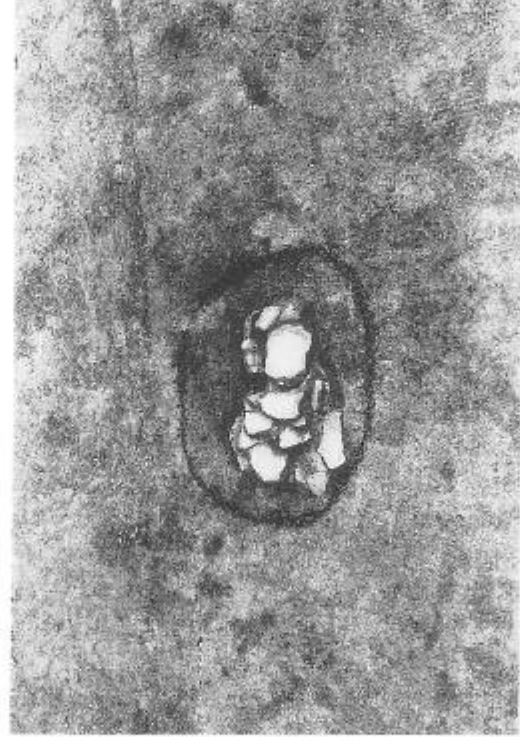
2 SI 37 竪穴住居跡(南▷北)



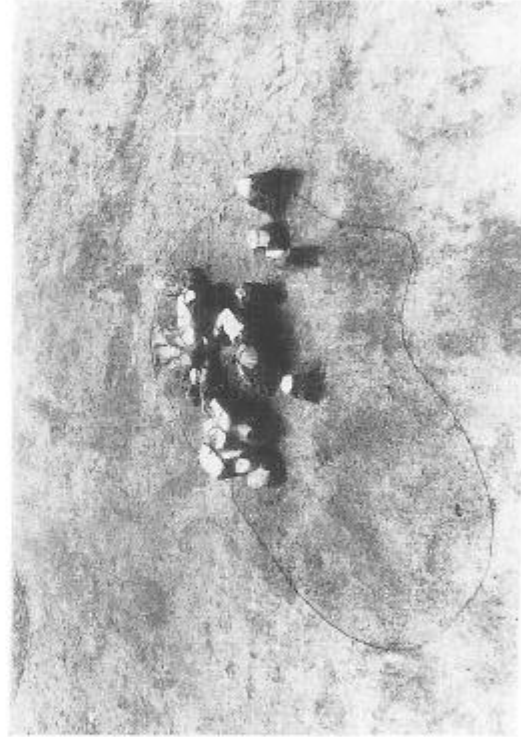
3 SI 34 竪穴住居跡(南▷北)



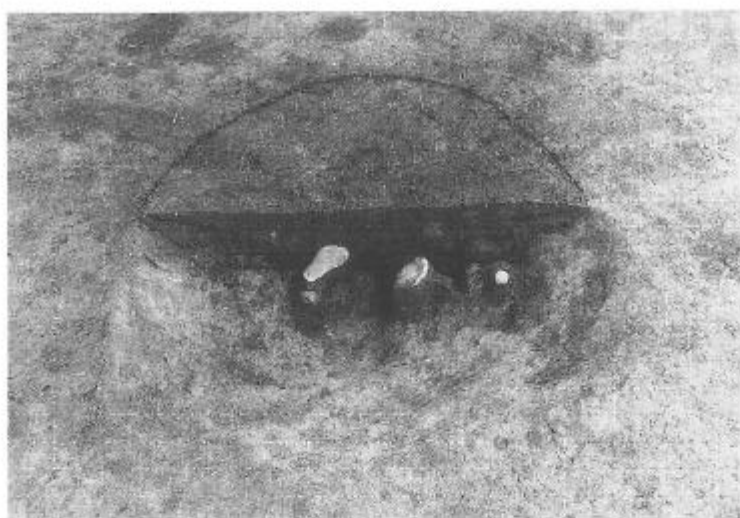
1 S K 16 土坑土層断面



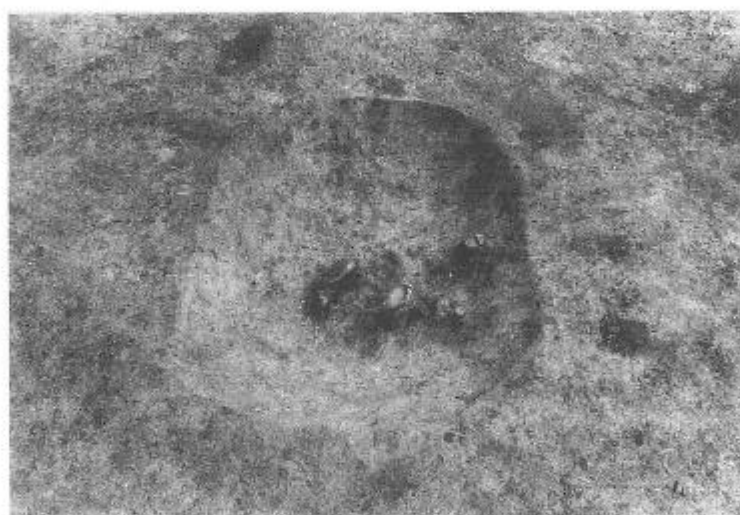
2 S K 49 土坑確認状況



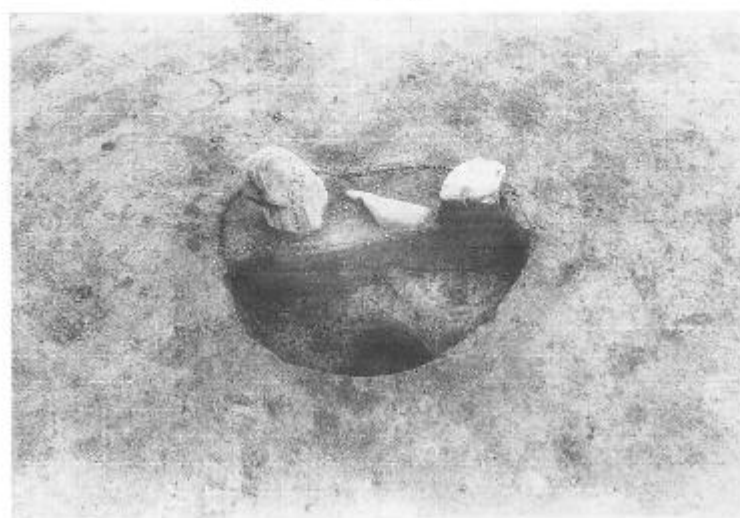
3 S K 25 土坑確認状況



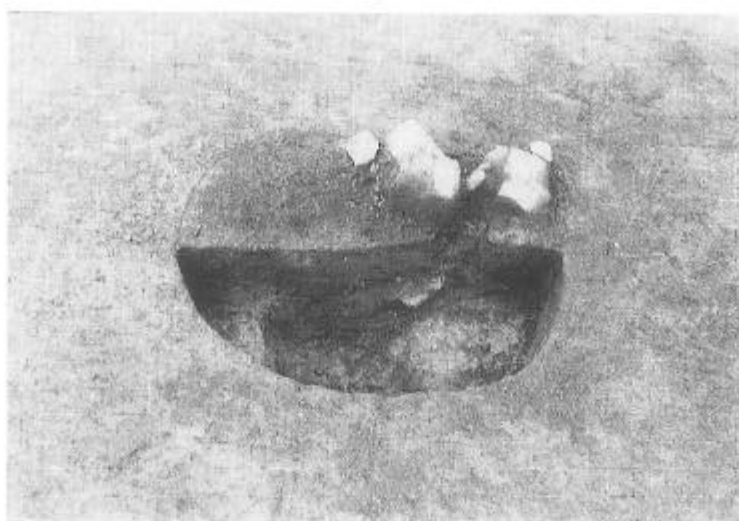
1 SK26土坑土層断面



2 SK26土坑



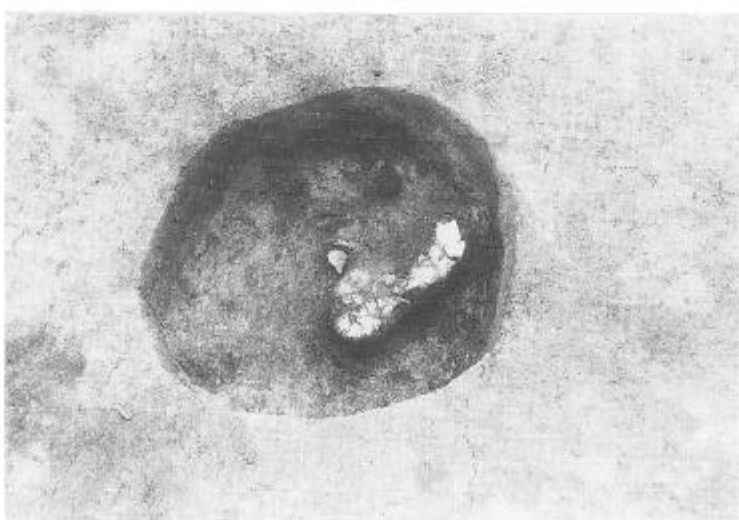
3 SK32土坑土層断面



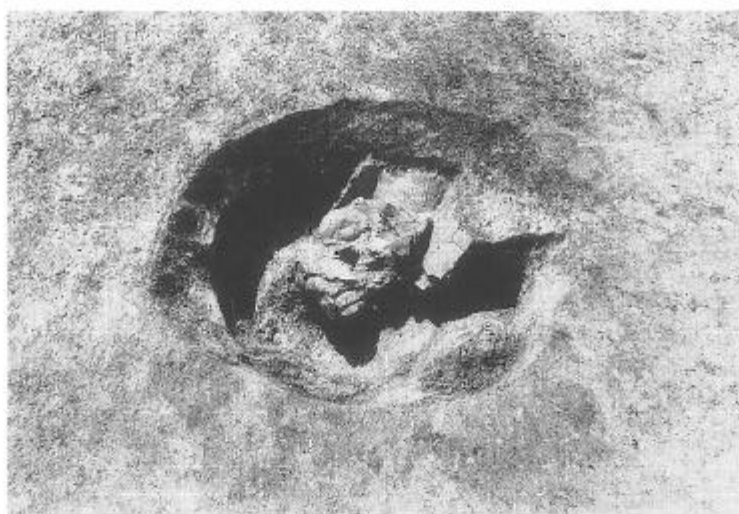
1 SK36土坑土層断面



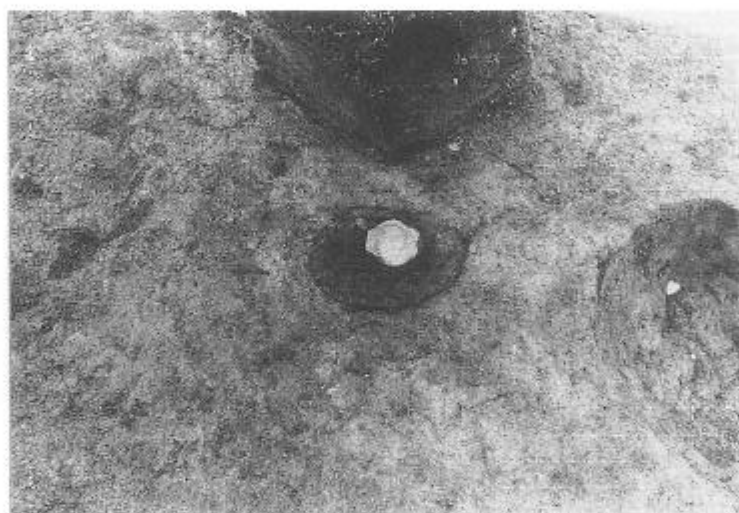
2 SK50土坑土層断面



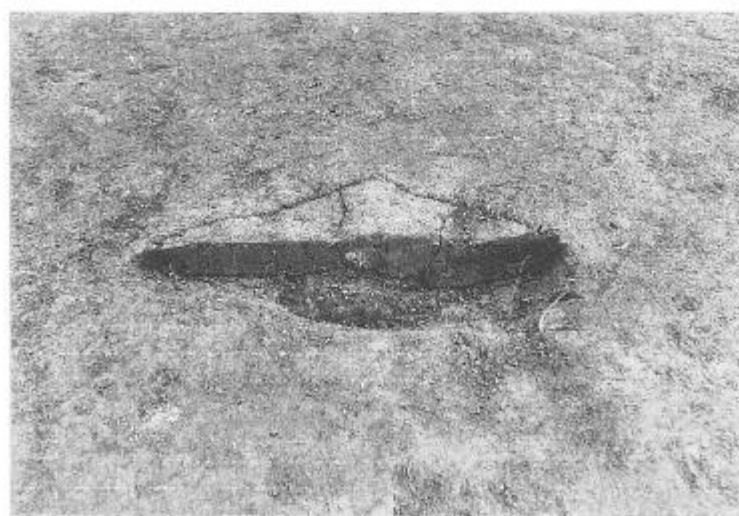
3 SK50土坑



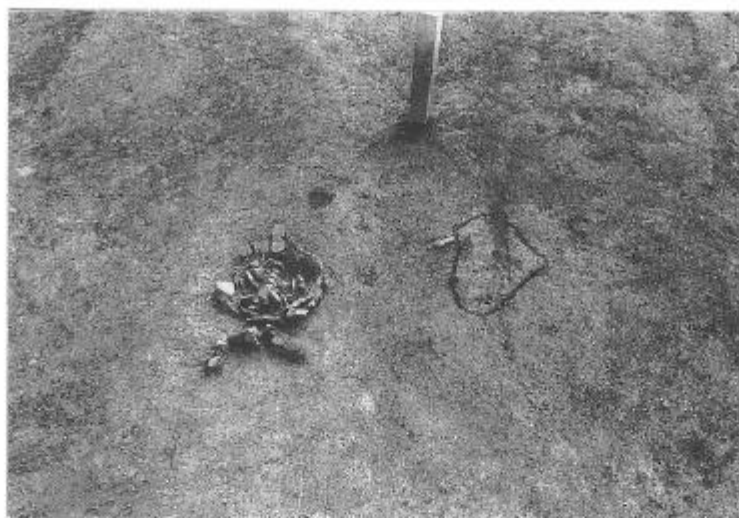
1 SK54土坑



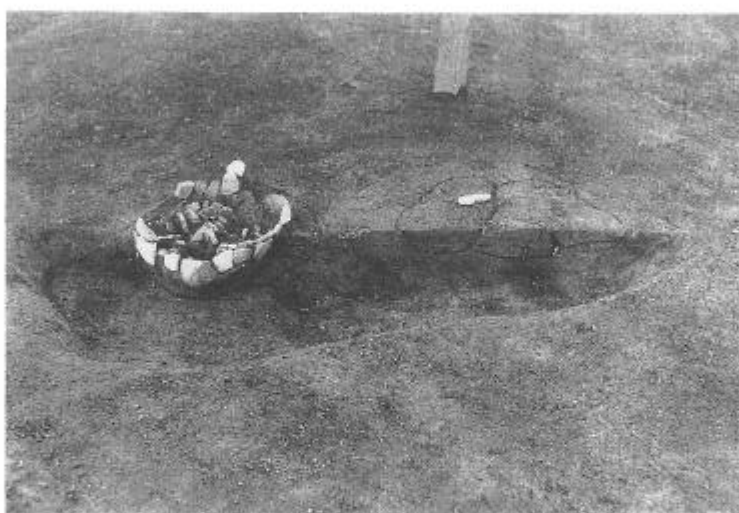
2 SK23土坑確認状況



3 SK03土坑土層断面



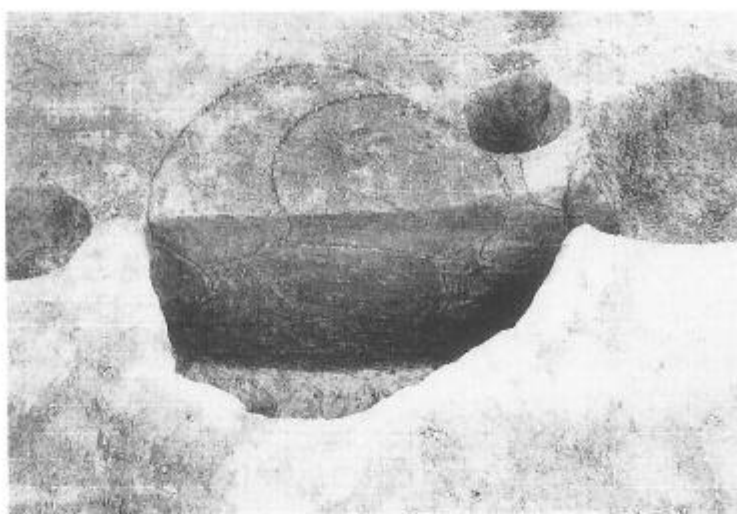
1 SN11焼土遺構確認状況



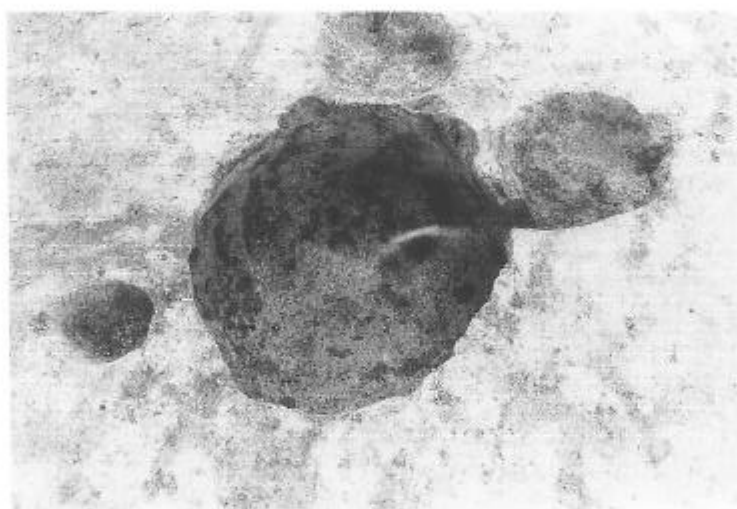
2 SN11焼土遺構土層断面



3 SN10焼土遺構土層断面



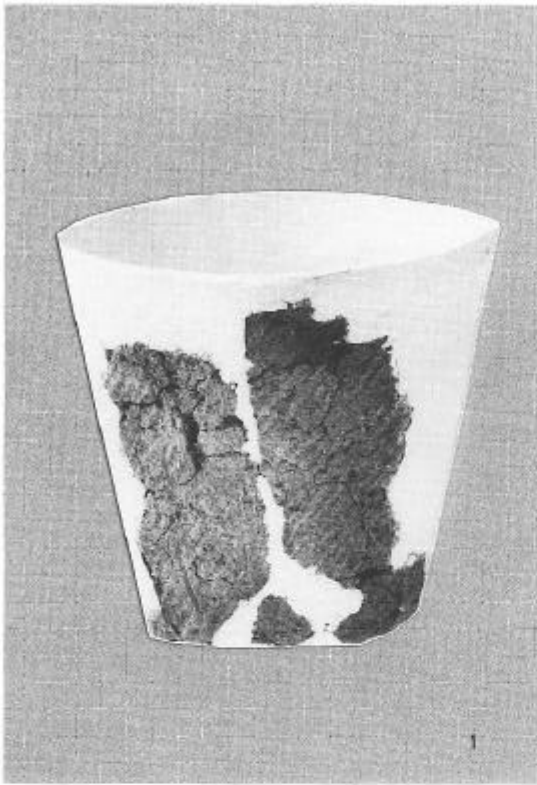
1 SK39土坑土層断面



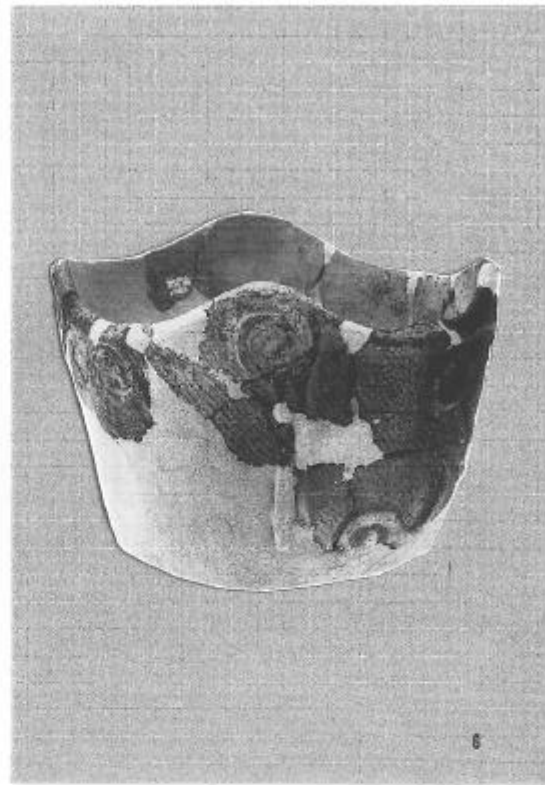
2 SK39・45土坑



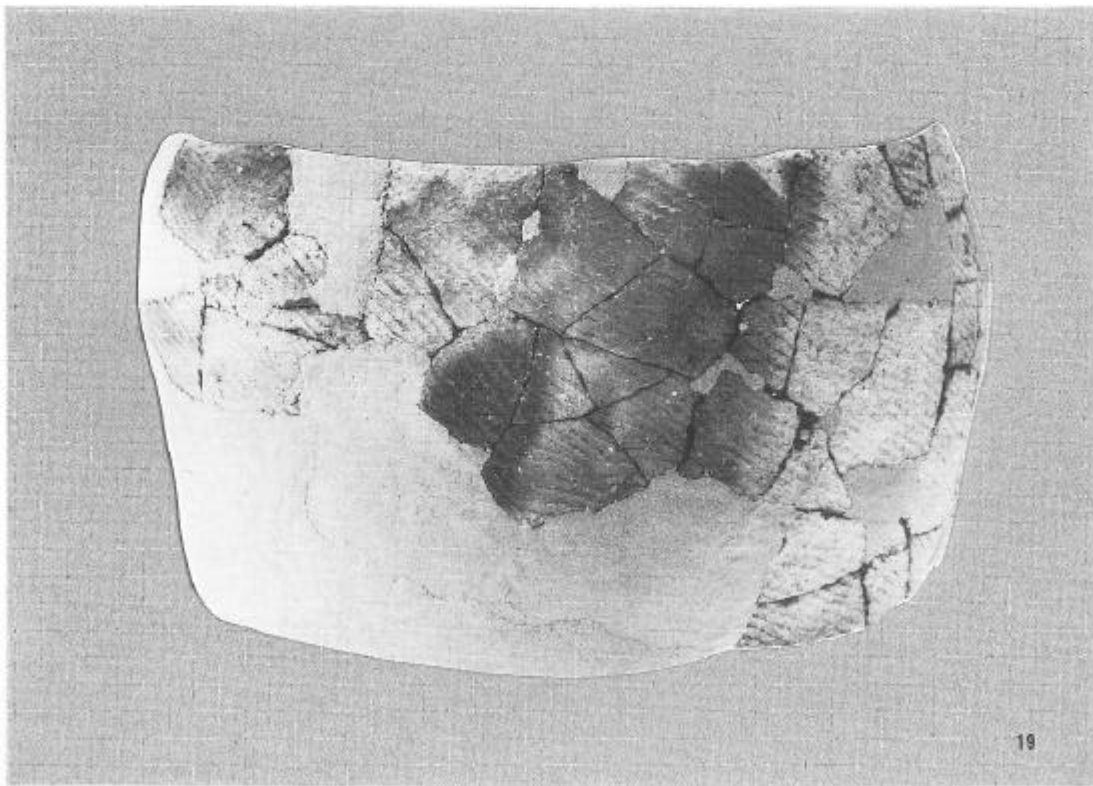
3 KS70グリッド遺物出土状況



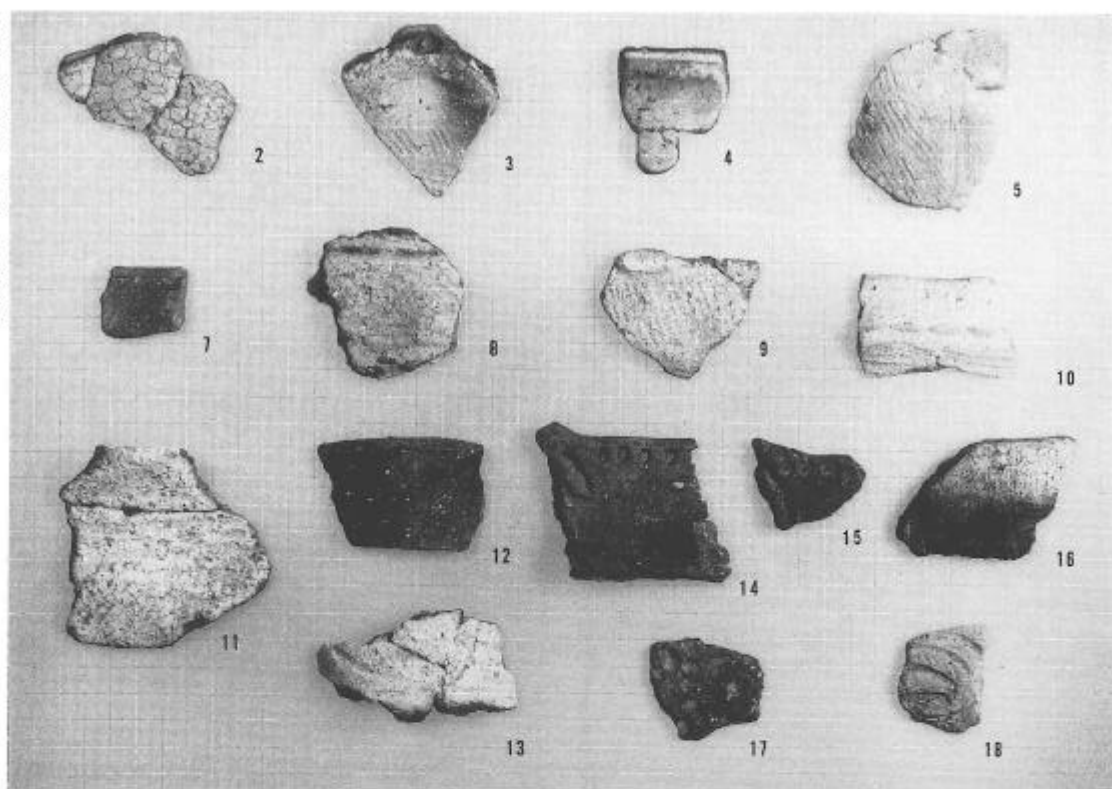
1 遺構内出土遺物(1)



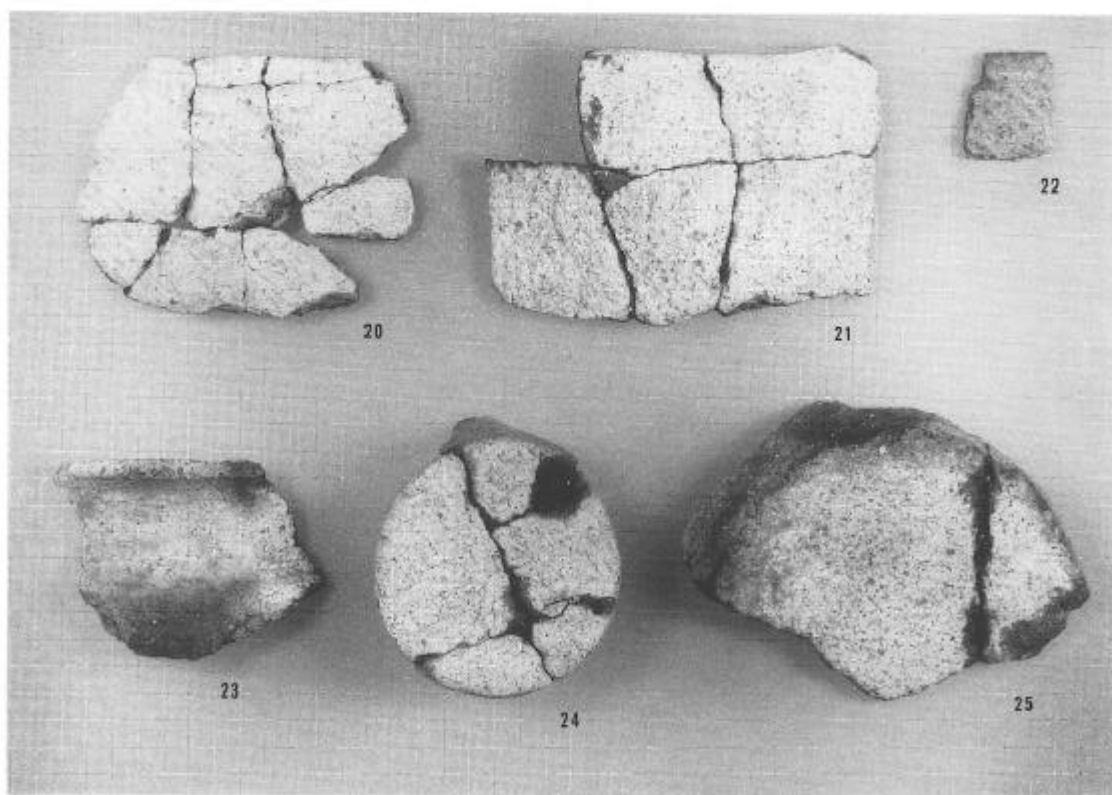
2 遺構内出土遺物(2)



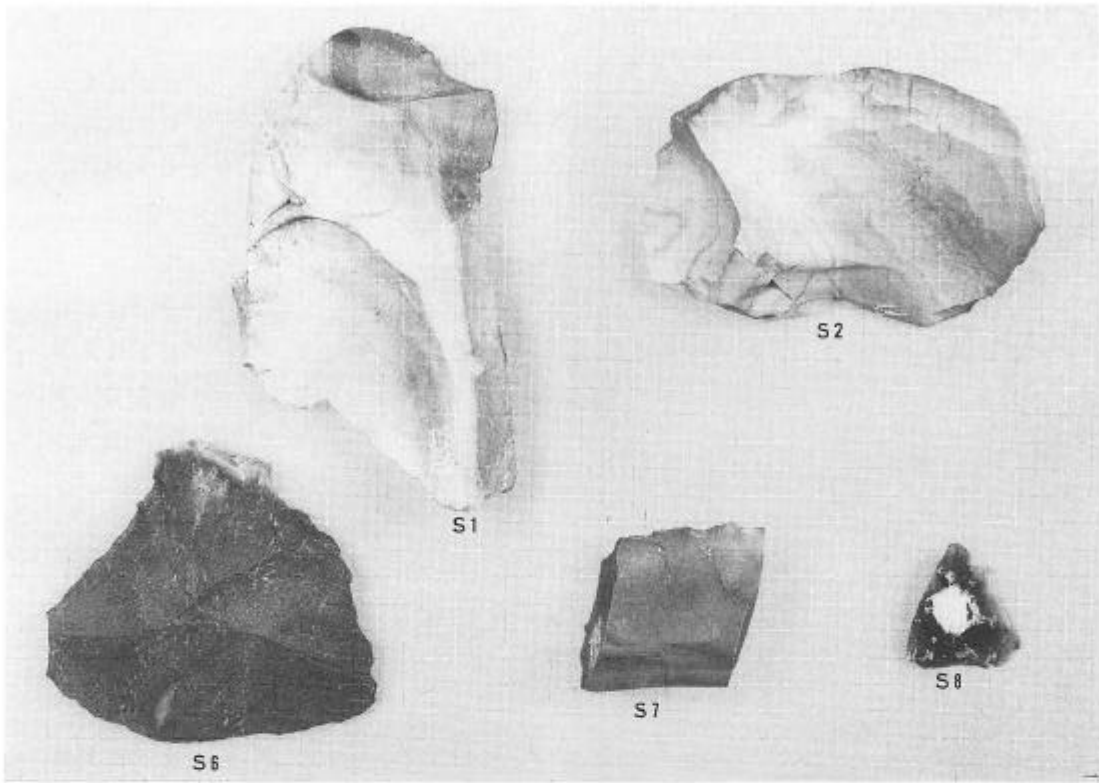
3 遺構内出土遺物(3)



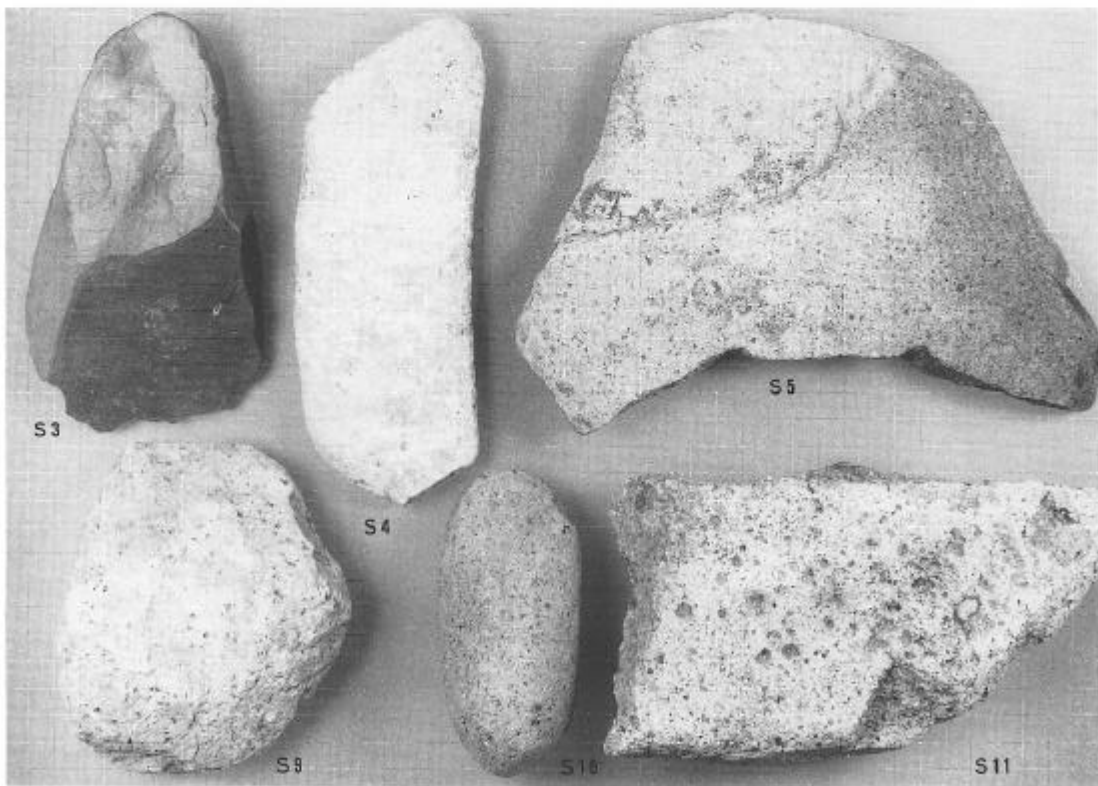
1 遺構内出土遺物(4)



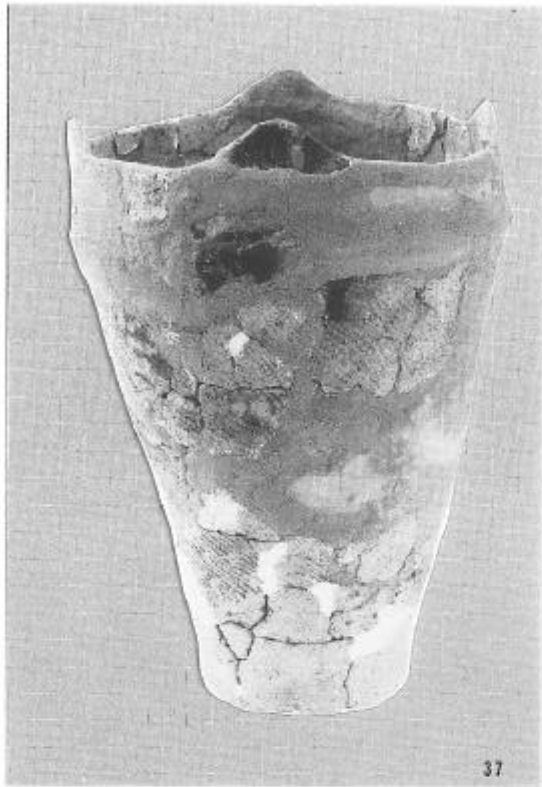
2 遺構内出土遺物(5)



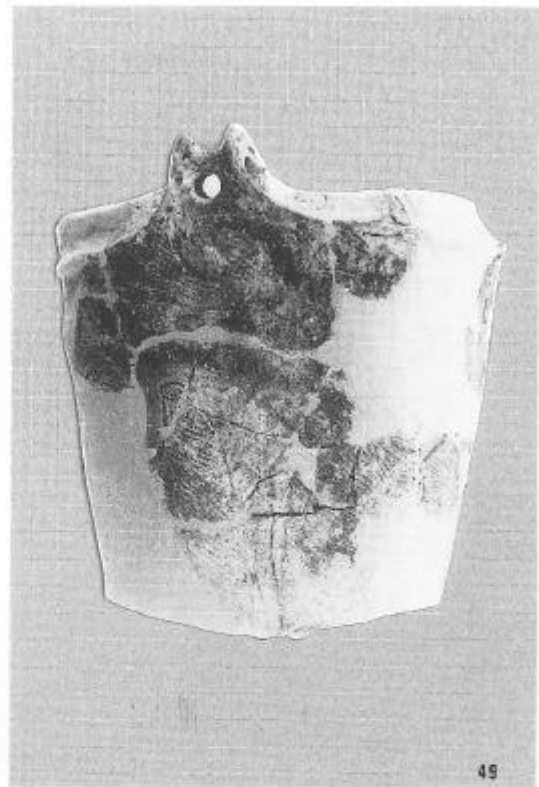
1 遺構内出土遺物(6)



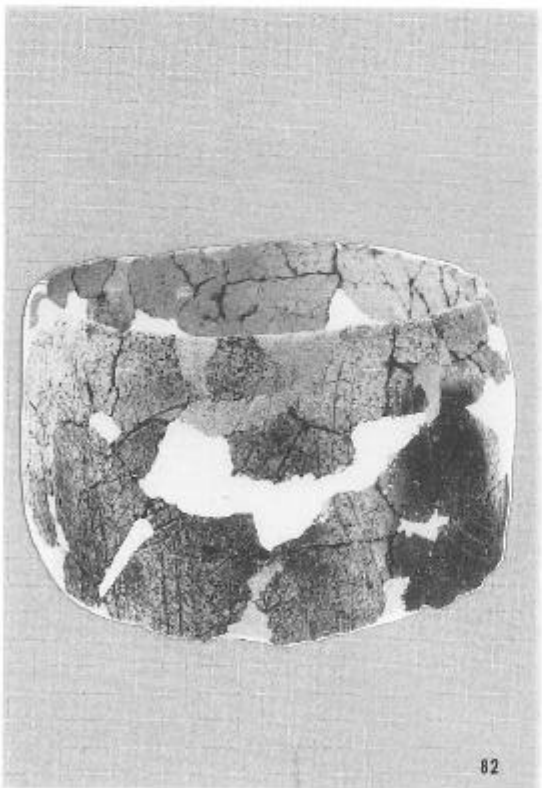
2 遺構内出土遺物(7)



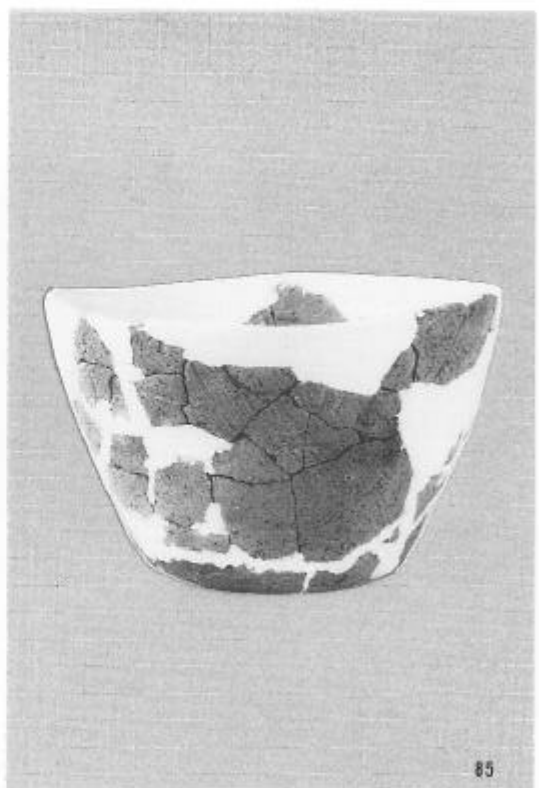
1 遺構内出土遺物(8)



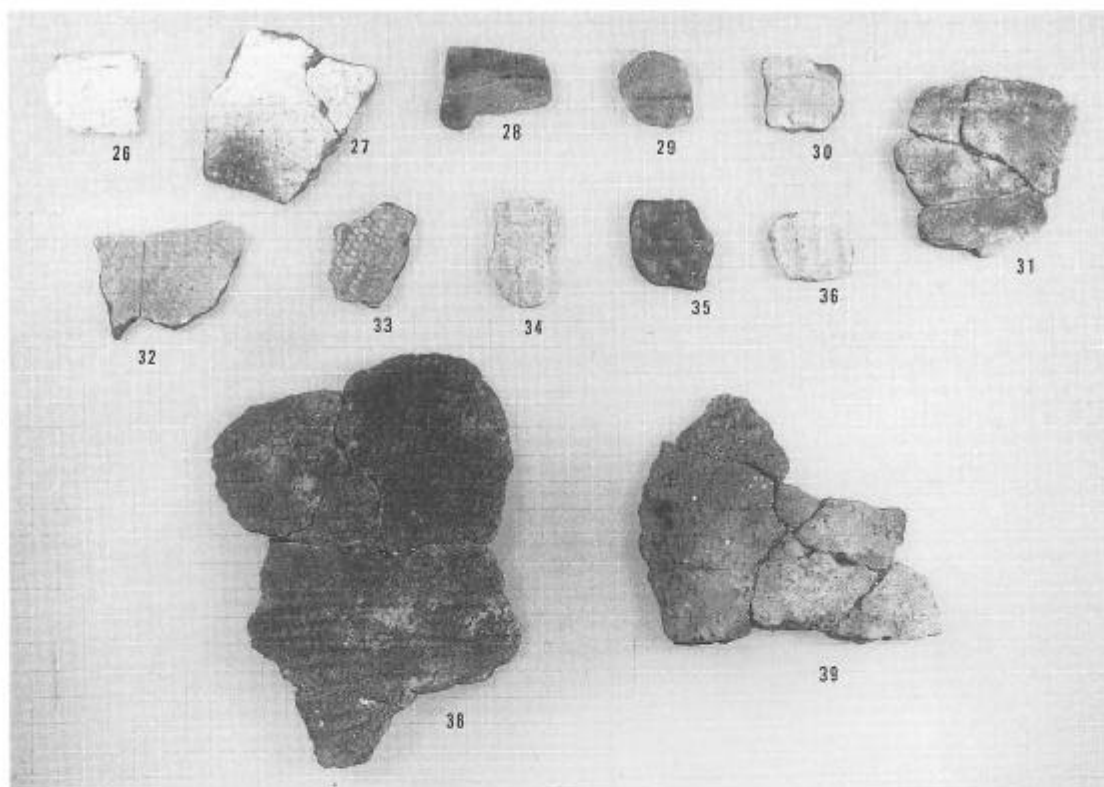
2 遺構内出土遺物(9)



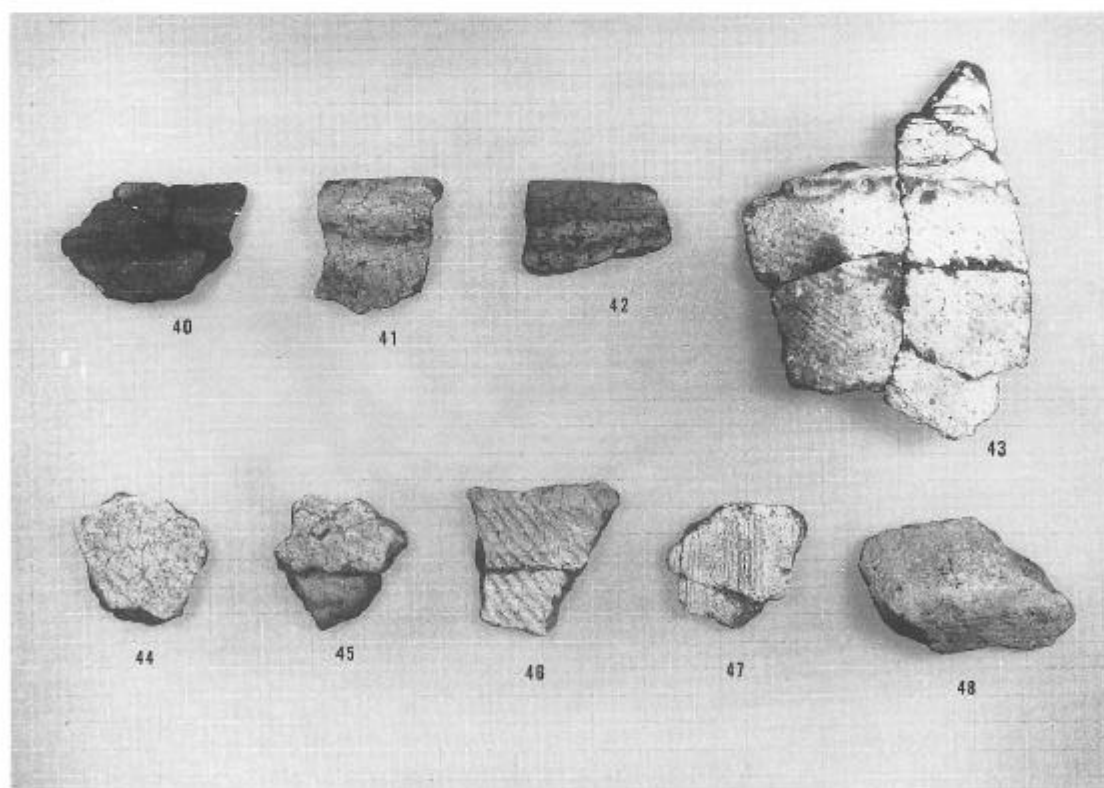
3 遺構内出土遺物(10)



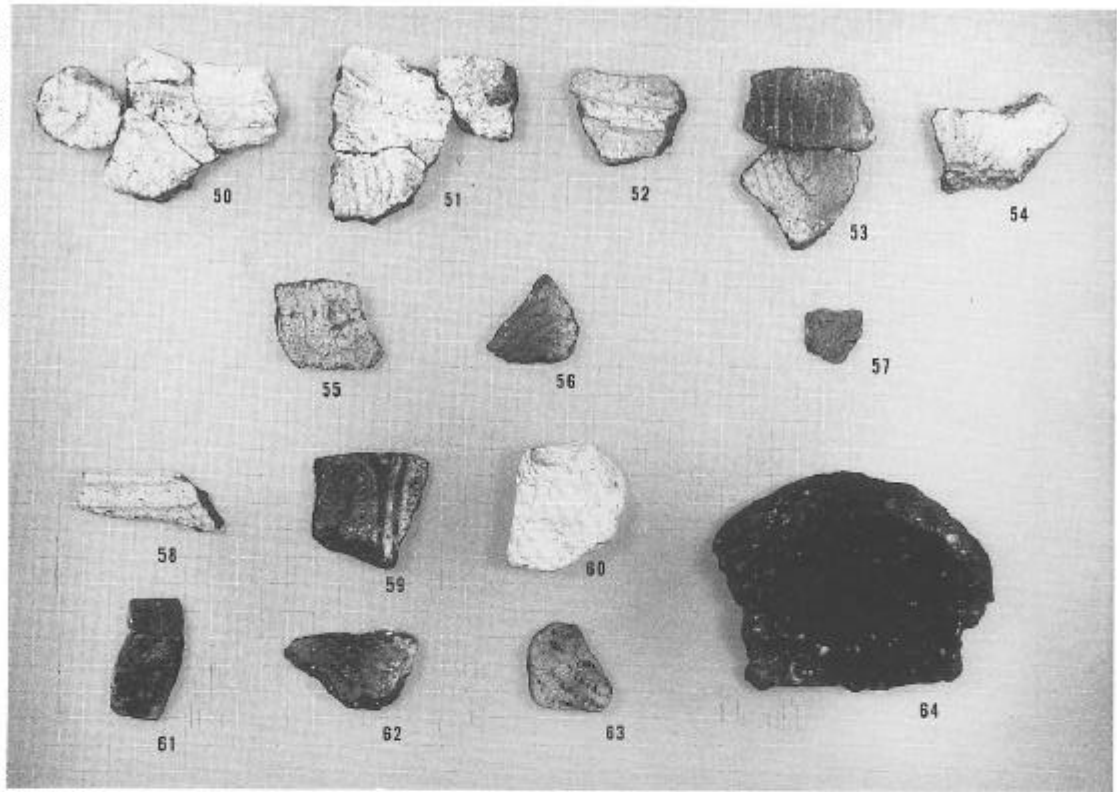
4 遺構内出土遺物(11)



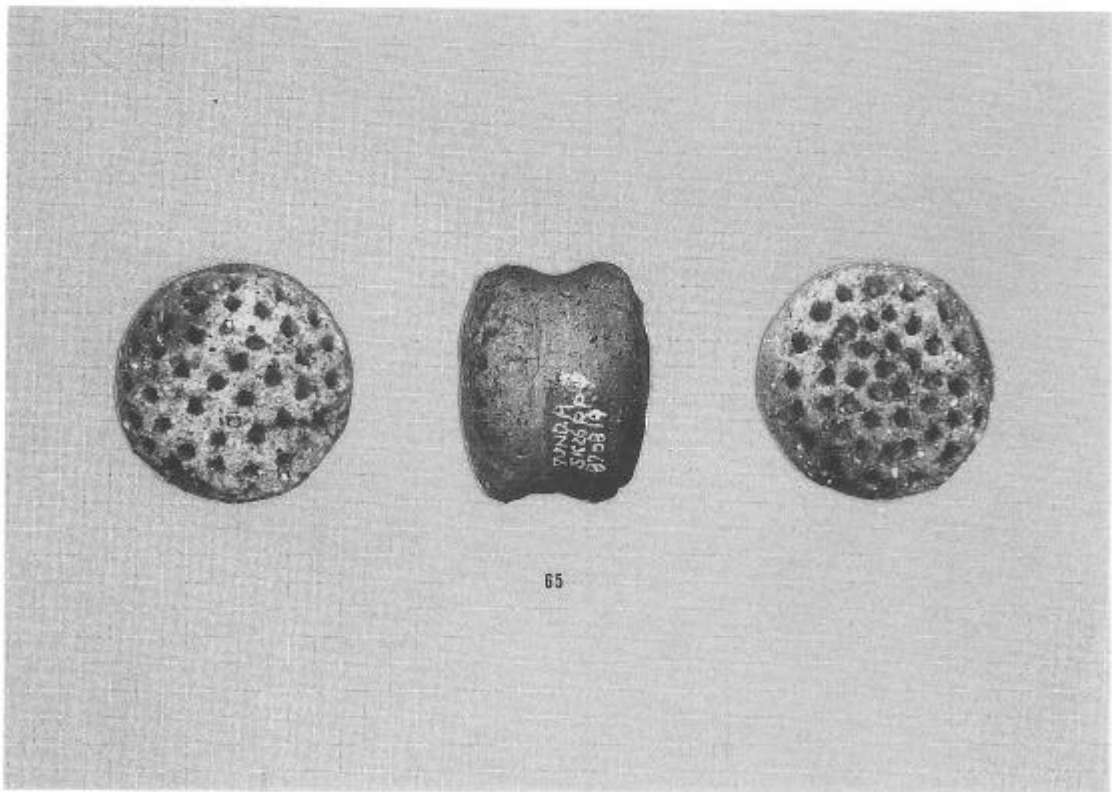
1 遺構内出土遺物(12)



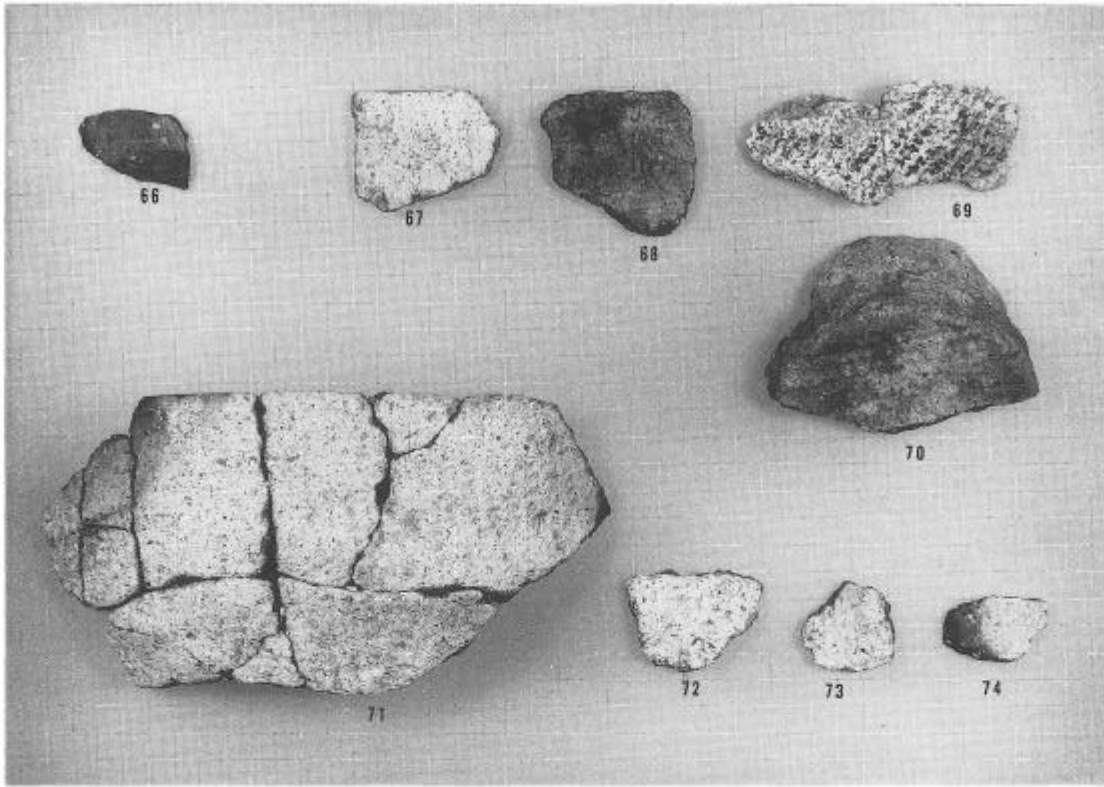
2 遺構内出土遺物(13)



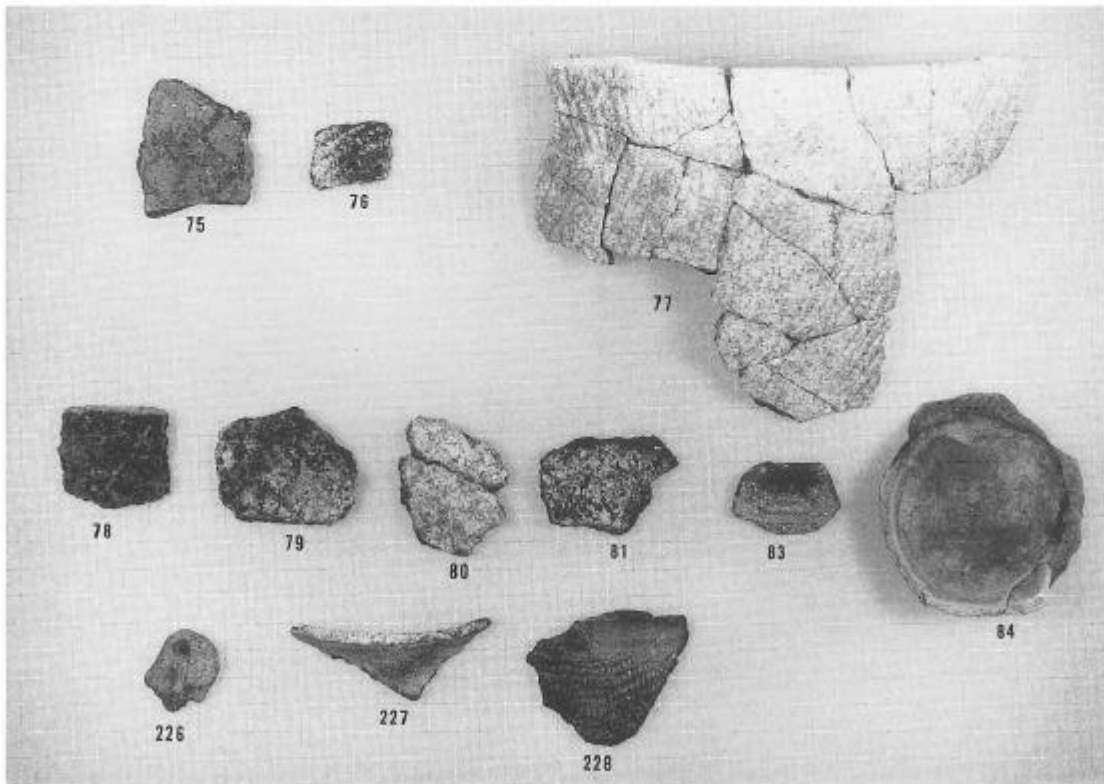
1 遺構内出土遺物(14)



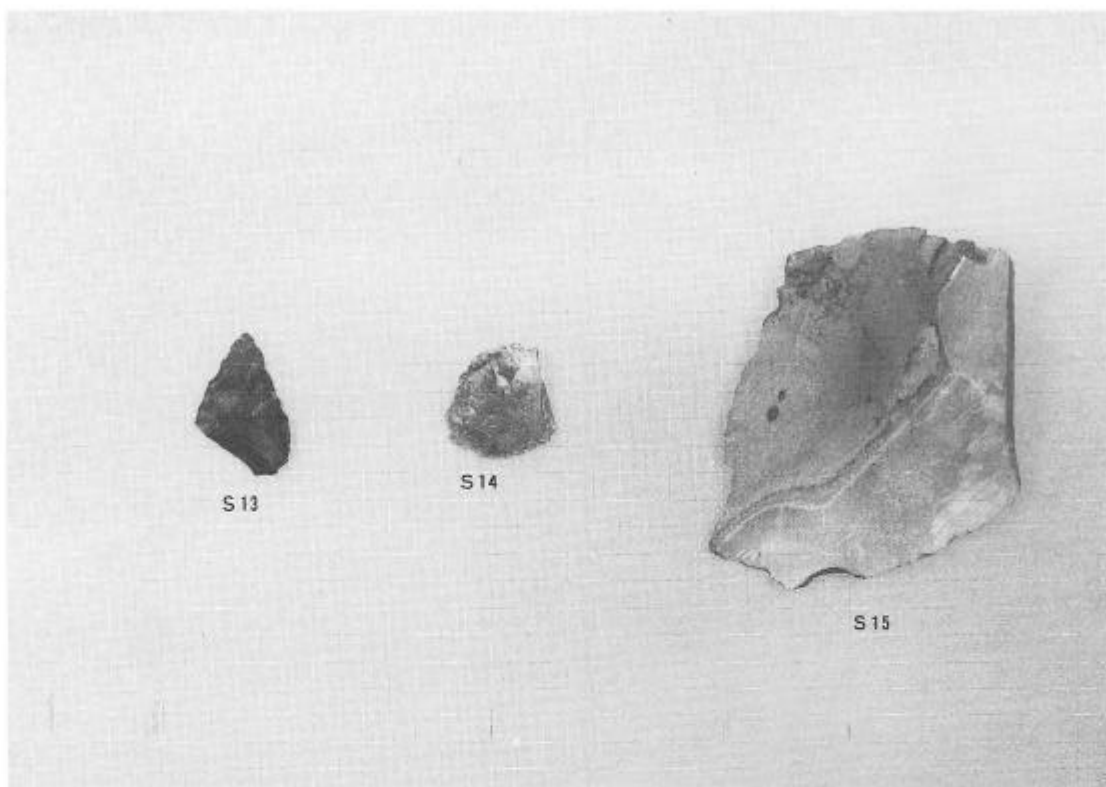
2 遺構内出土遺物(15)



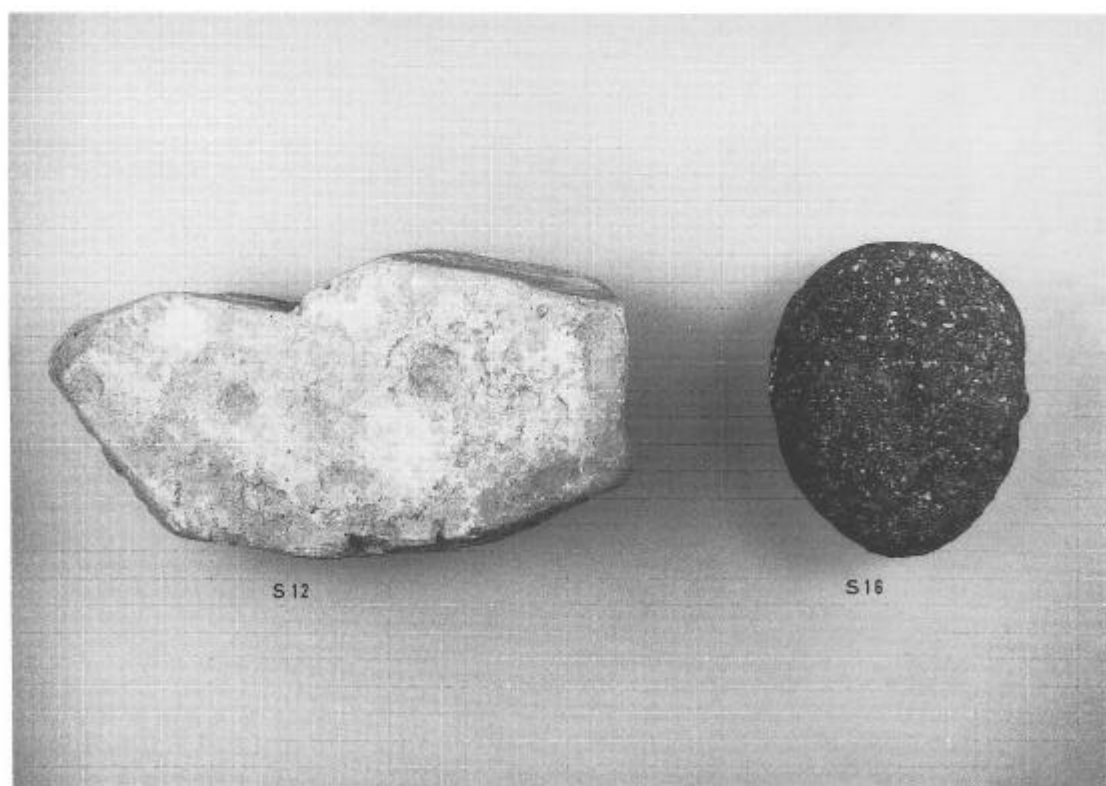
1 遺構内出土遺物(16)



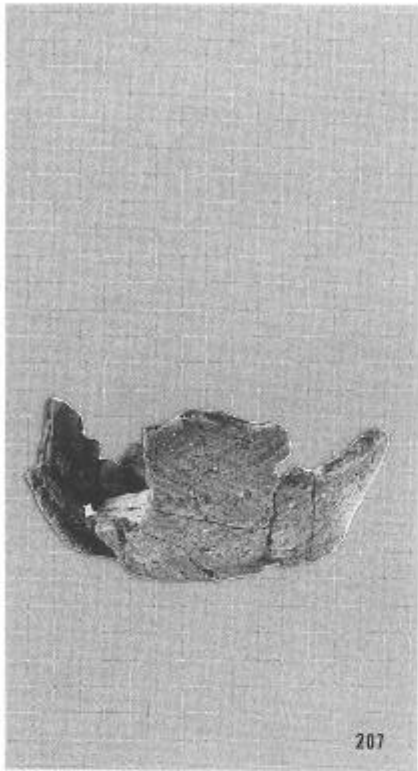
2 遺構内出土遺物(17)



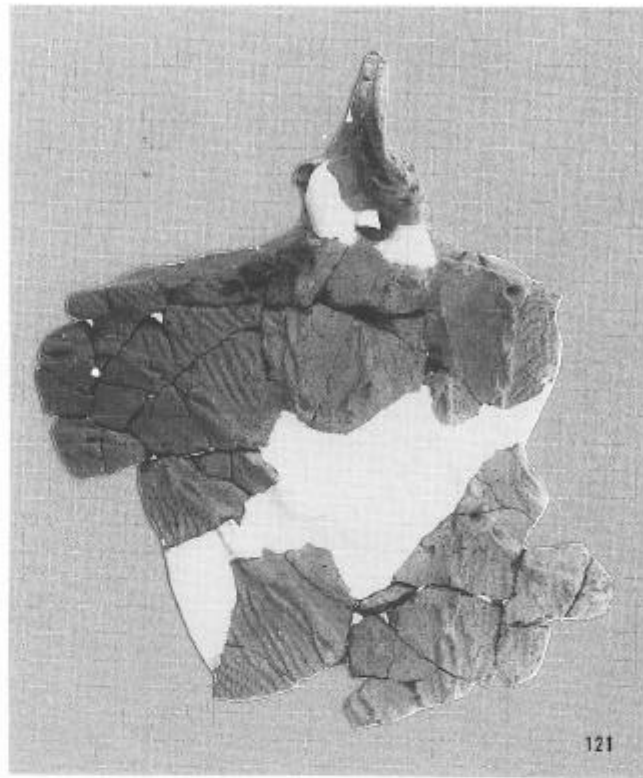
1 遺構内出土遺物(18)



2 遺構内出土遺物(19)



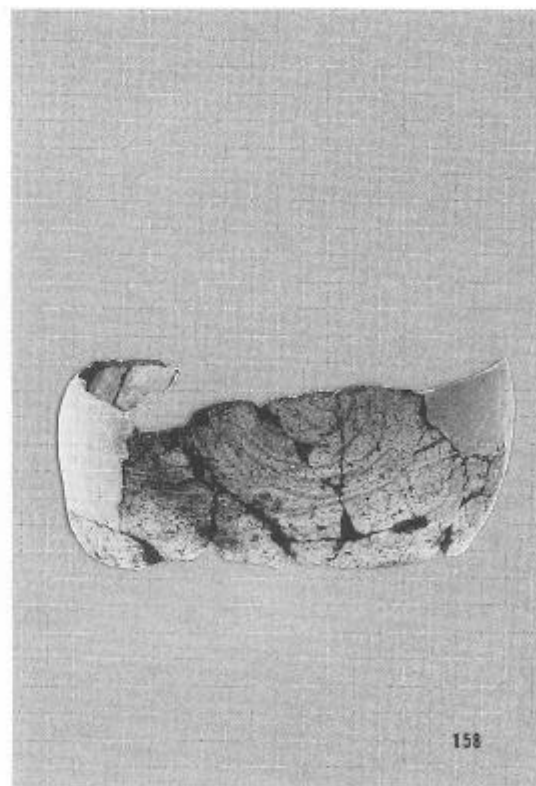
1 遺構外出土遺物(1)



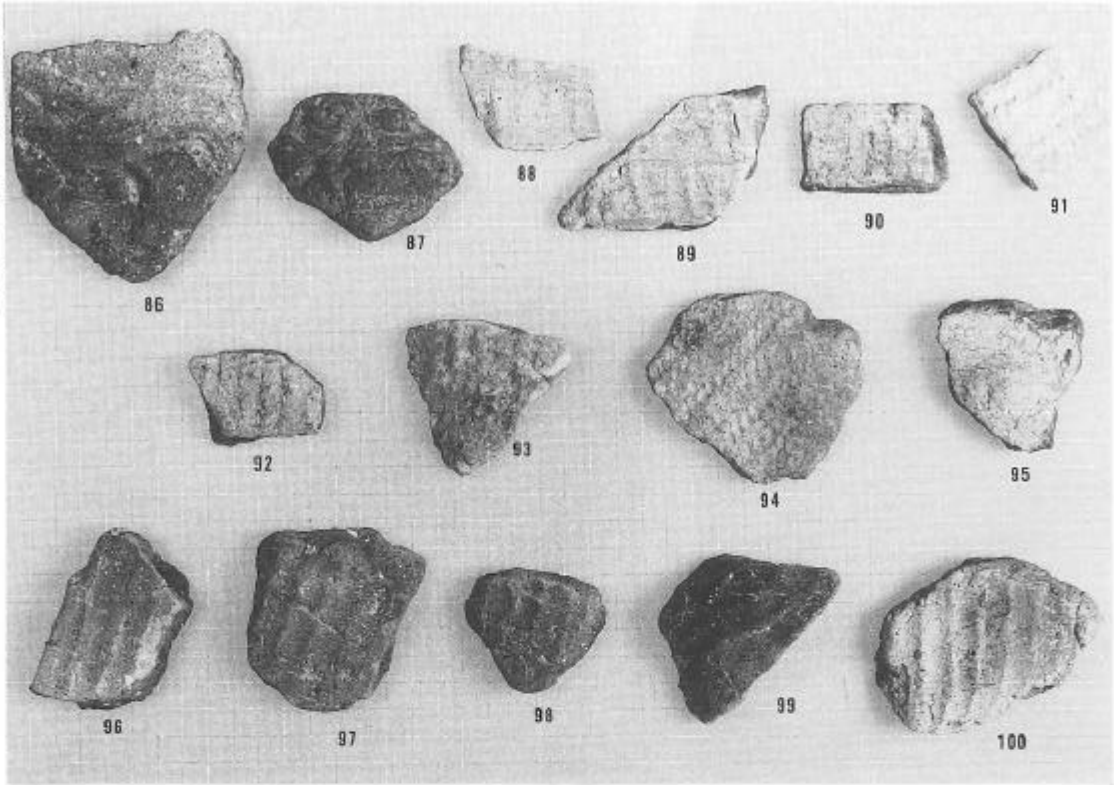
2 遺構外出土遺物(2)



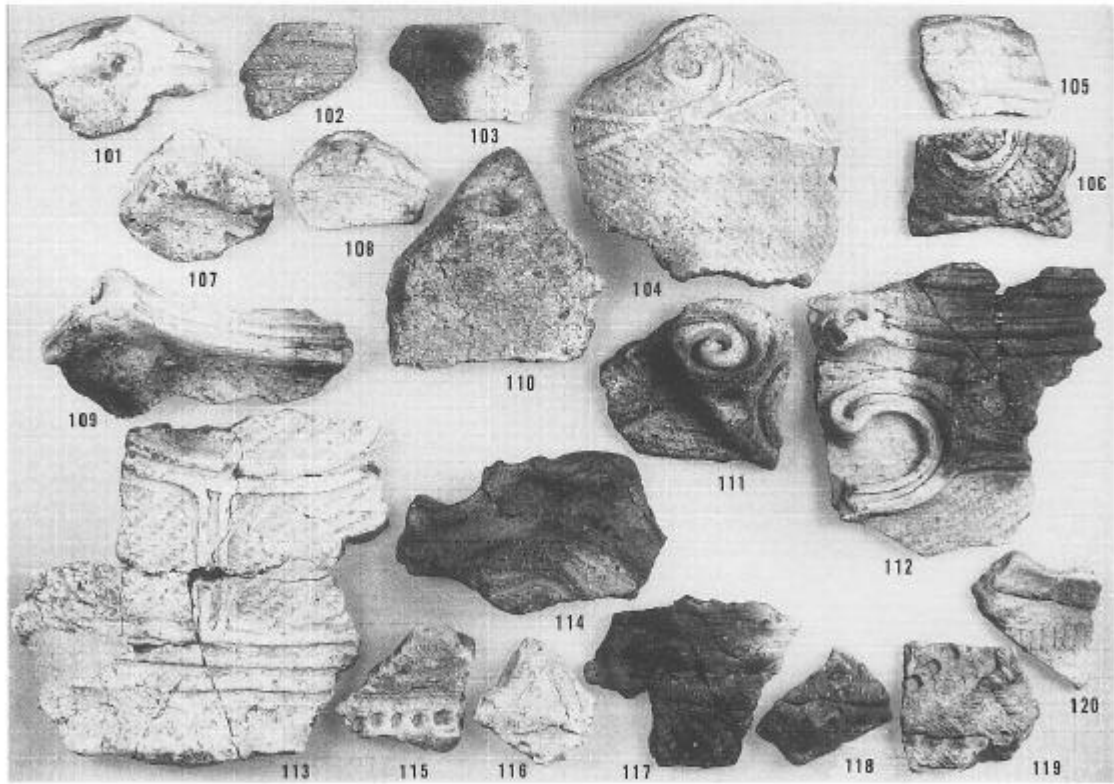
3 遺構外出土遺物(3)



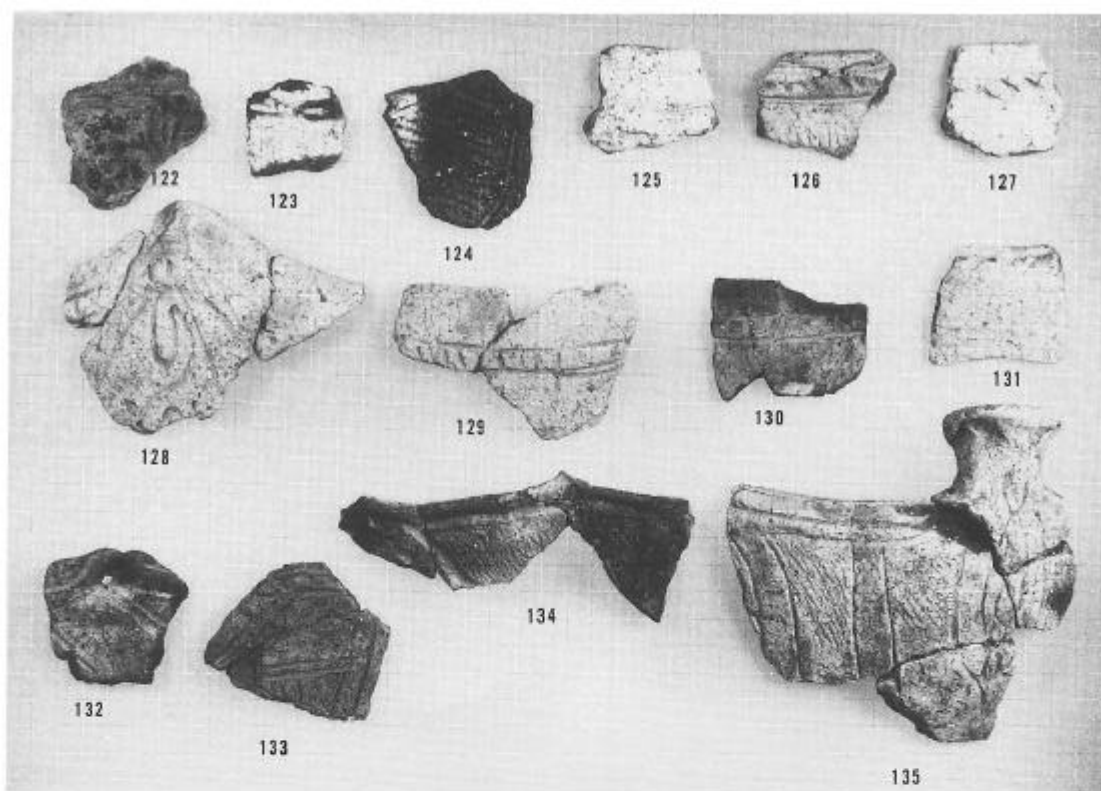
4 遺構外出土遺物(4)



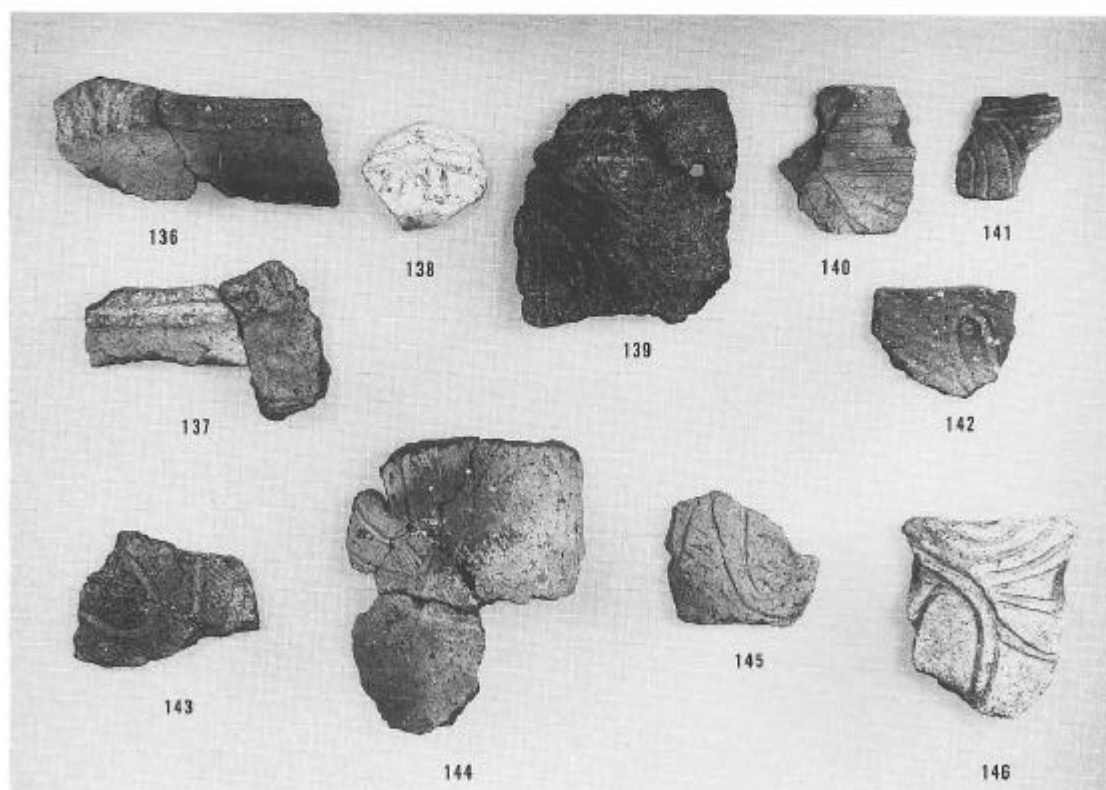
1 遺構外出土遺物(5)



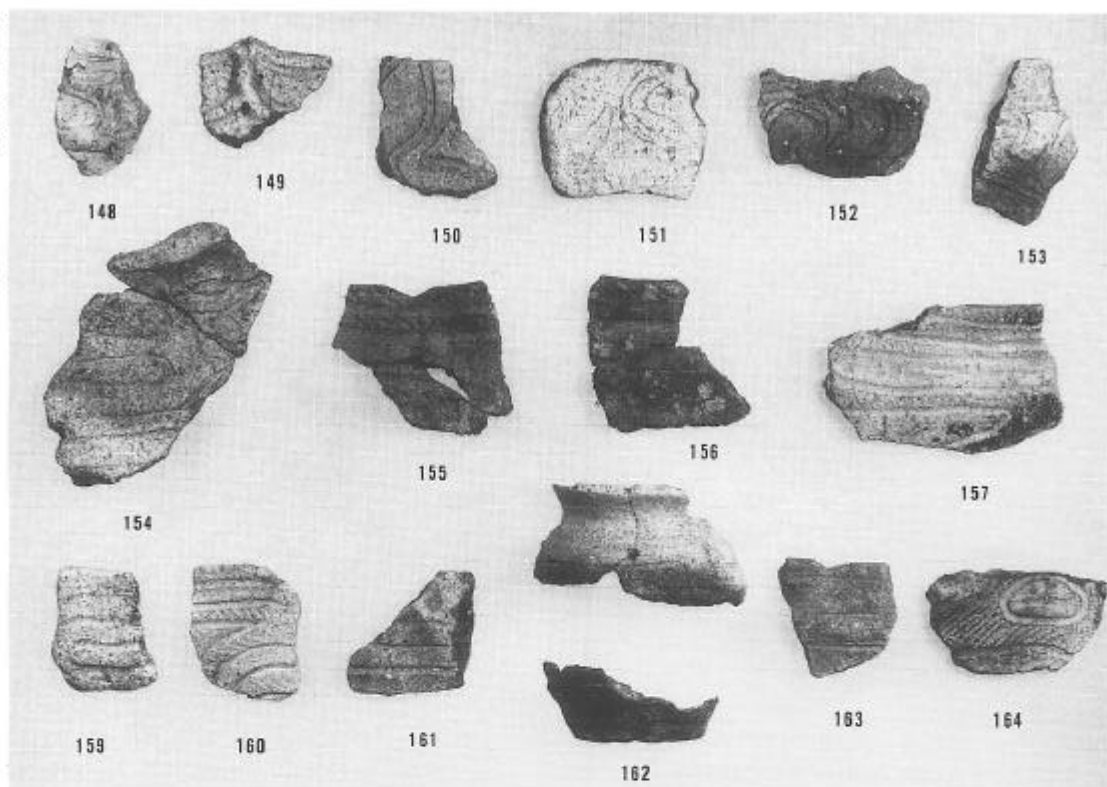
2 遺構外出土遺物(6)



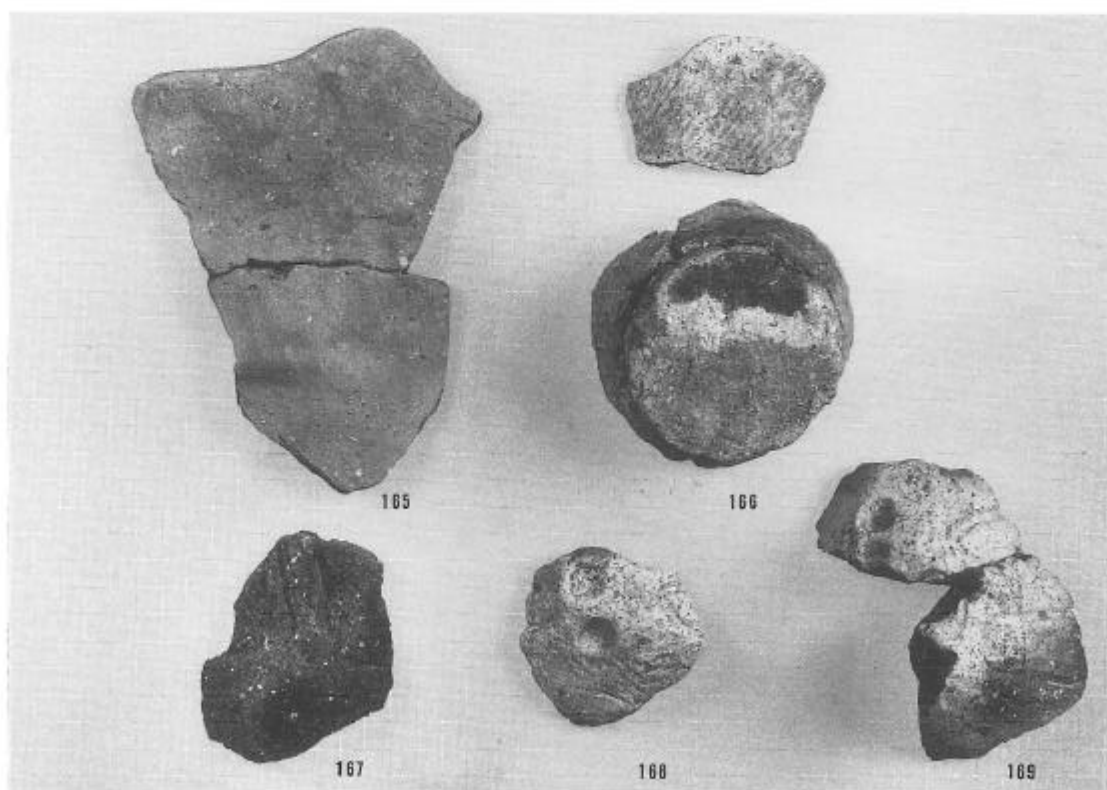
1 遺構外出土遺物(7)



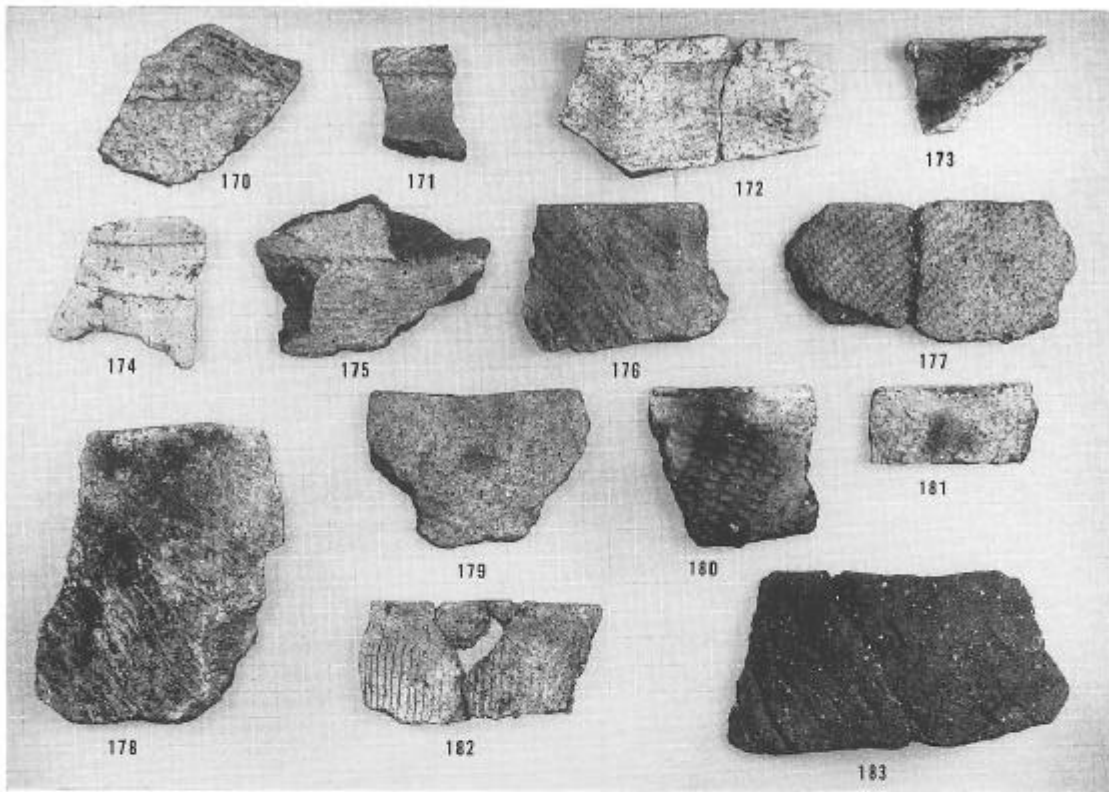
2 遺構外出土遺物(8)



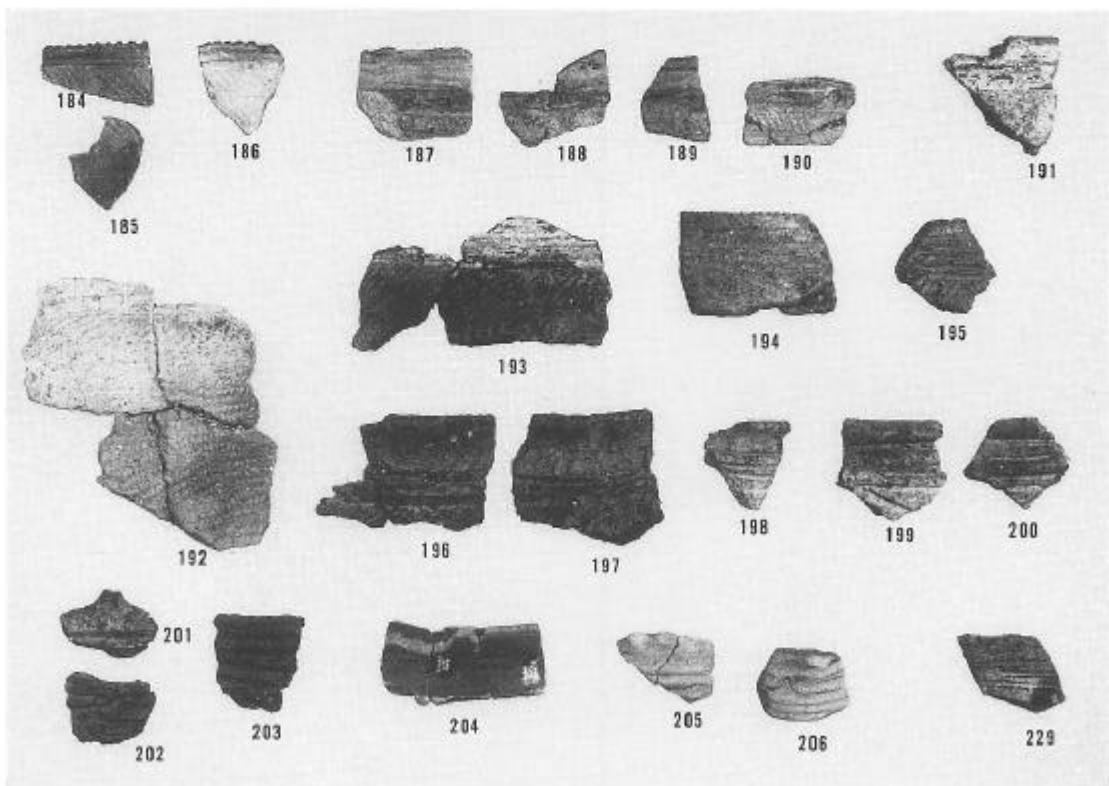
1 遺構外出土遺物(9)



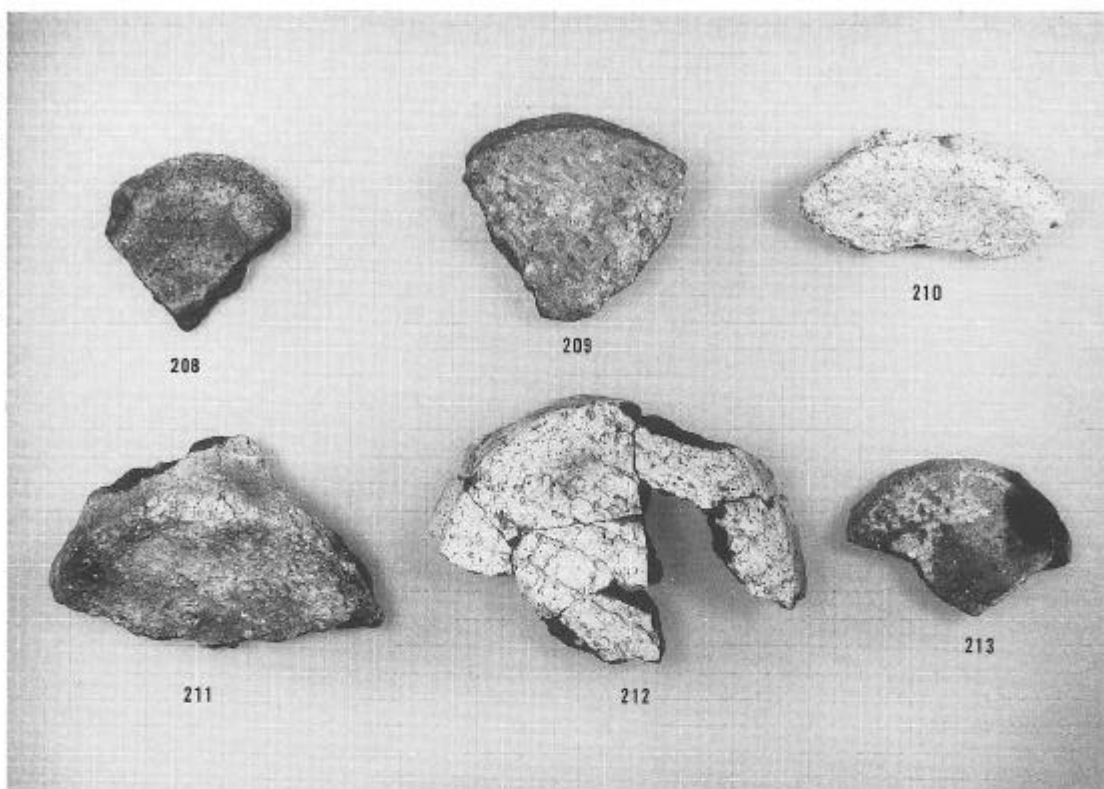
2 遺構外出土遺物(10)



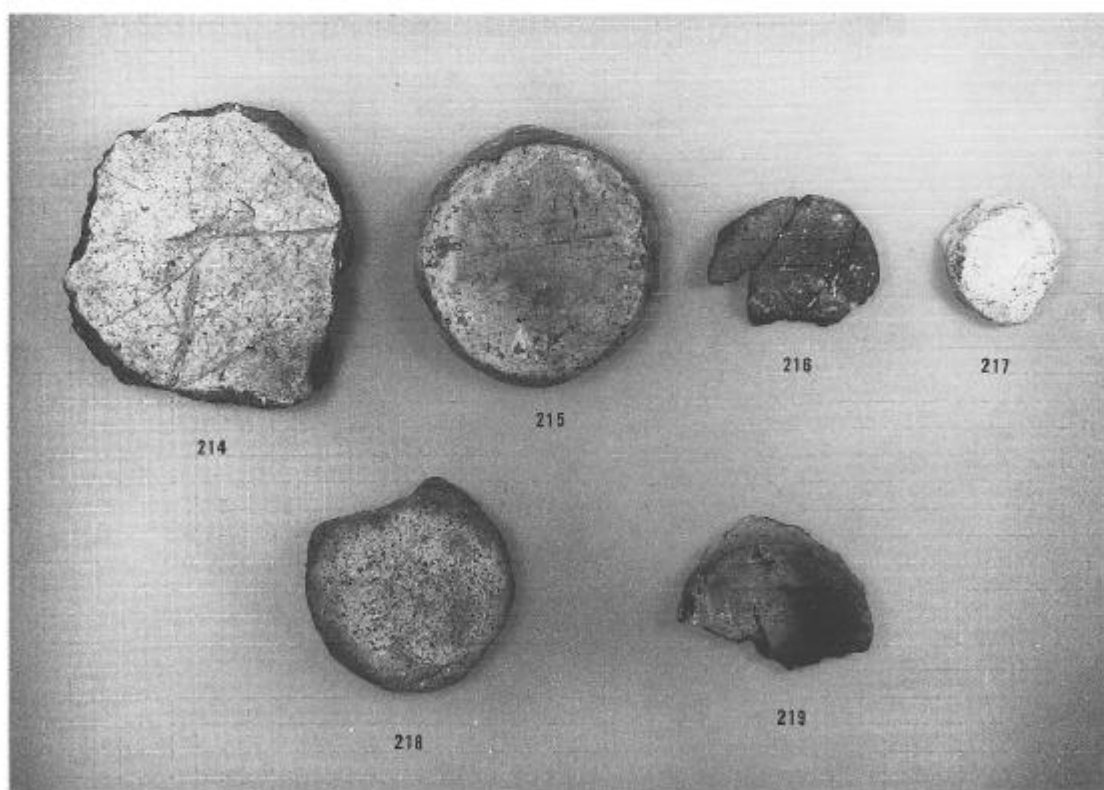
1 遺構外出土遺物(11)



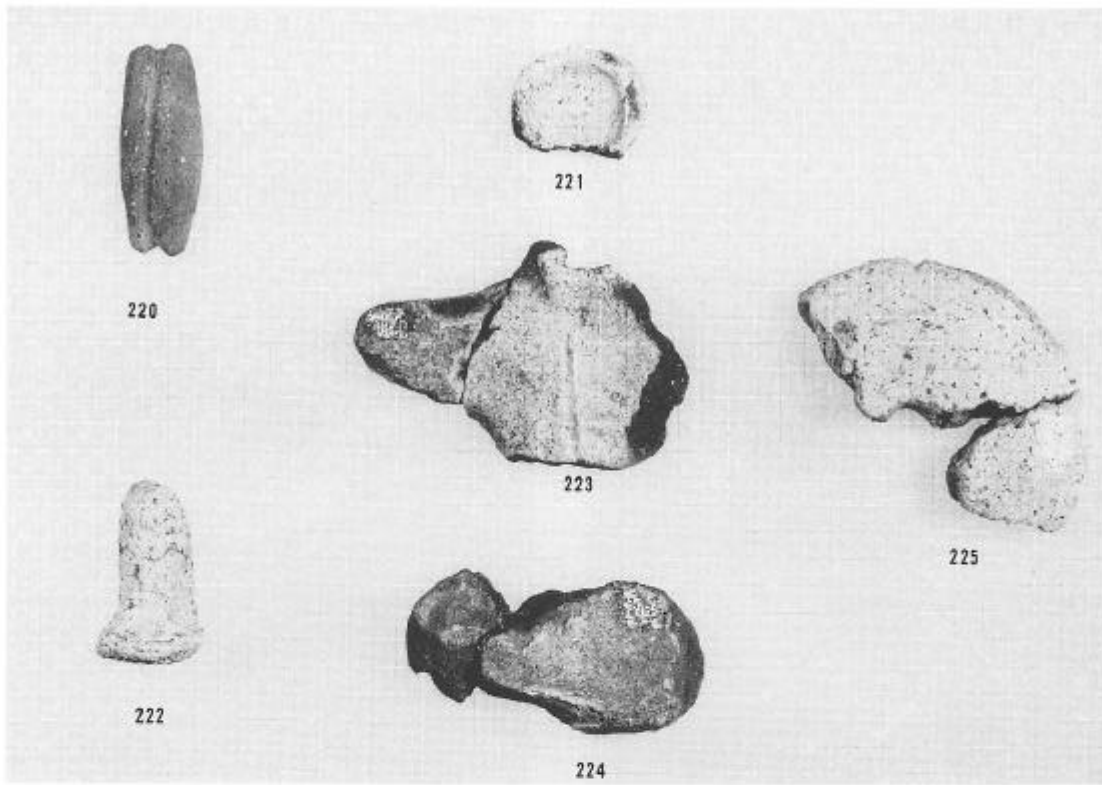
2 遺構外出土遺物(12)



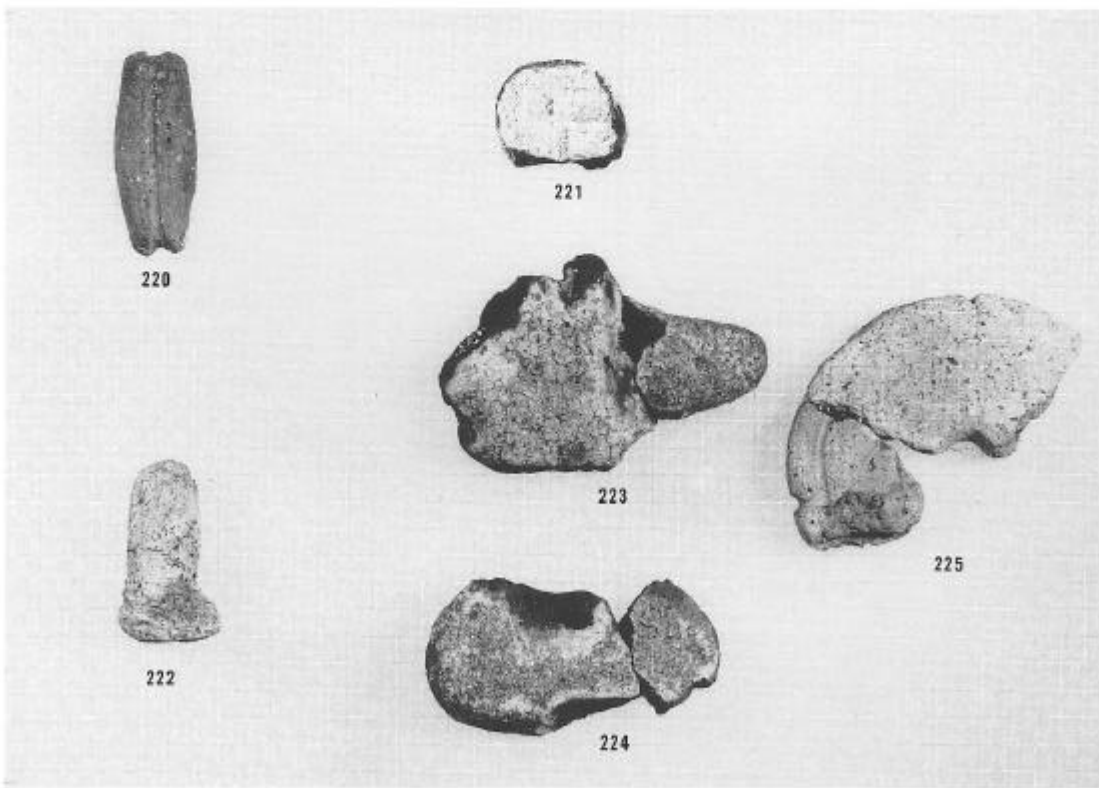
1 遺構外出土遺物(13)



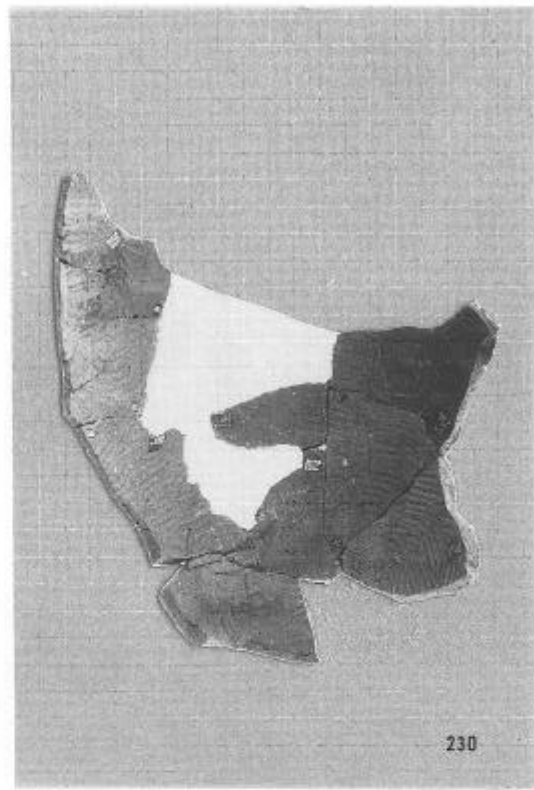
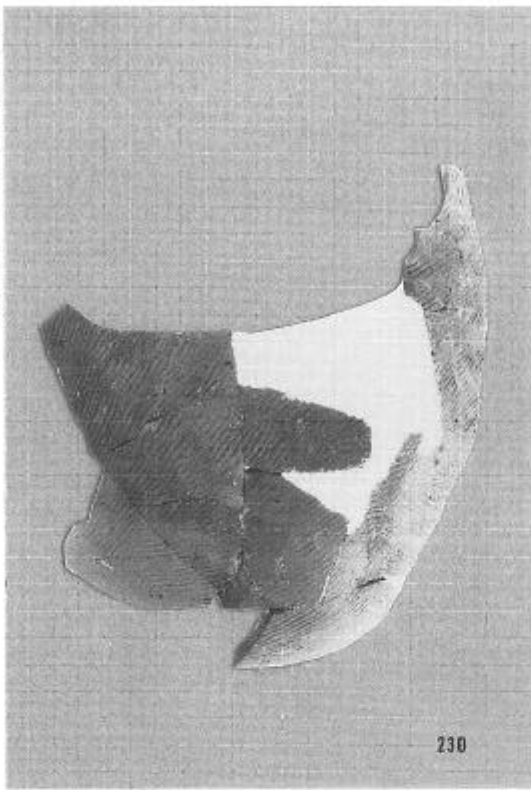
2 遺構外出土遺物(14)



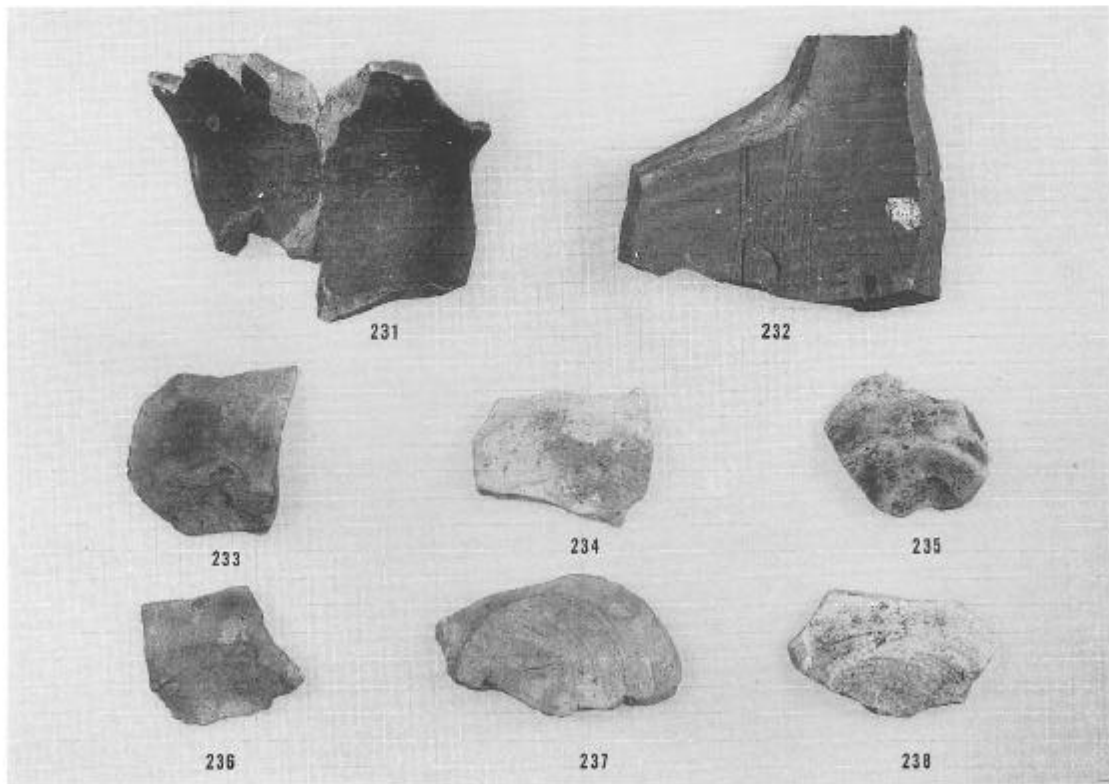
1 遺構外出土遺物(15) 外面



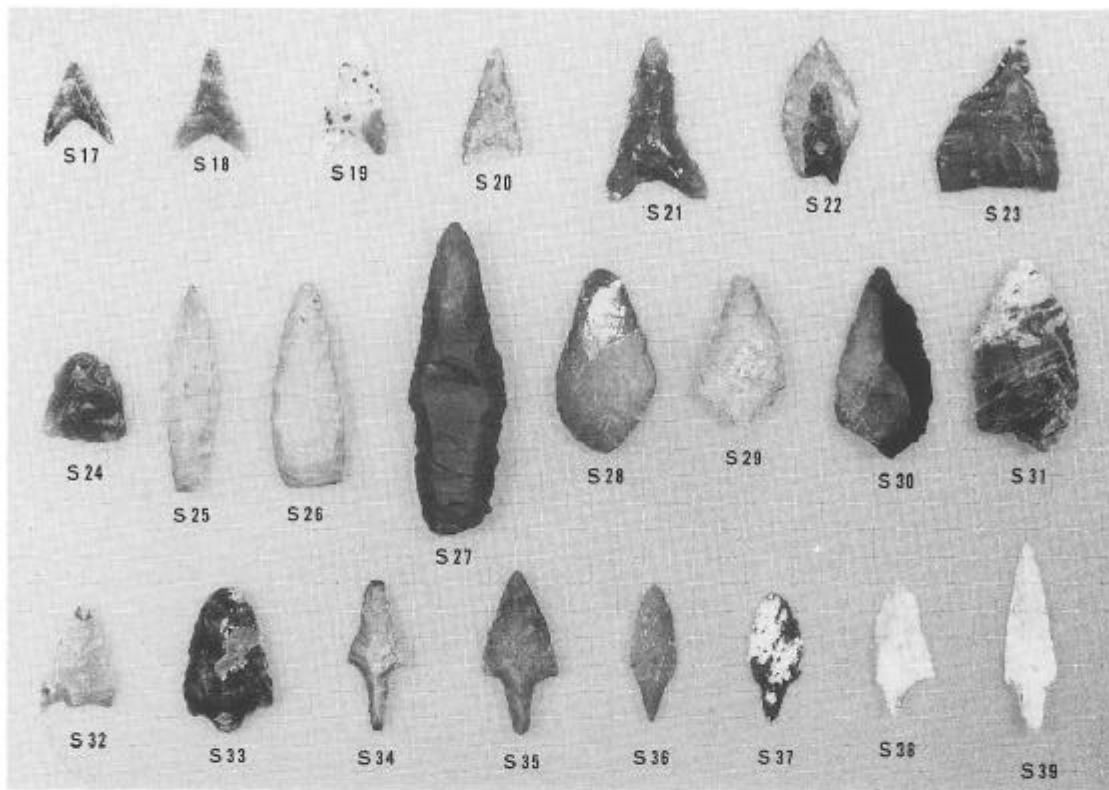
2 同上 内面



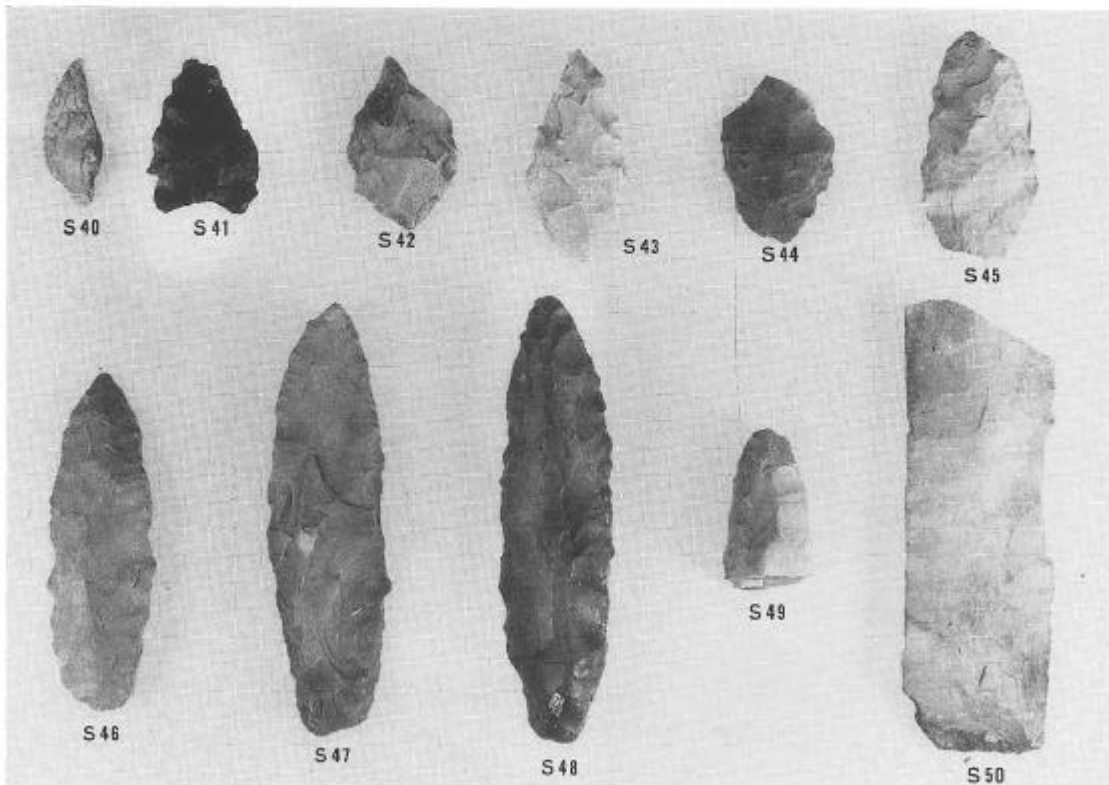
1 遺構外出土遺物(16) 左外面・右内面



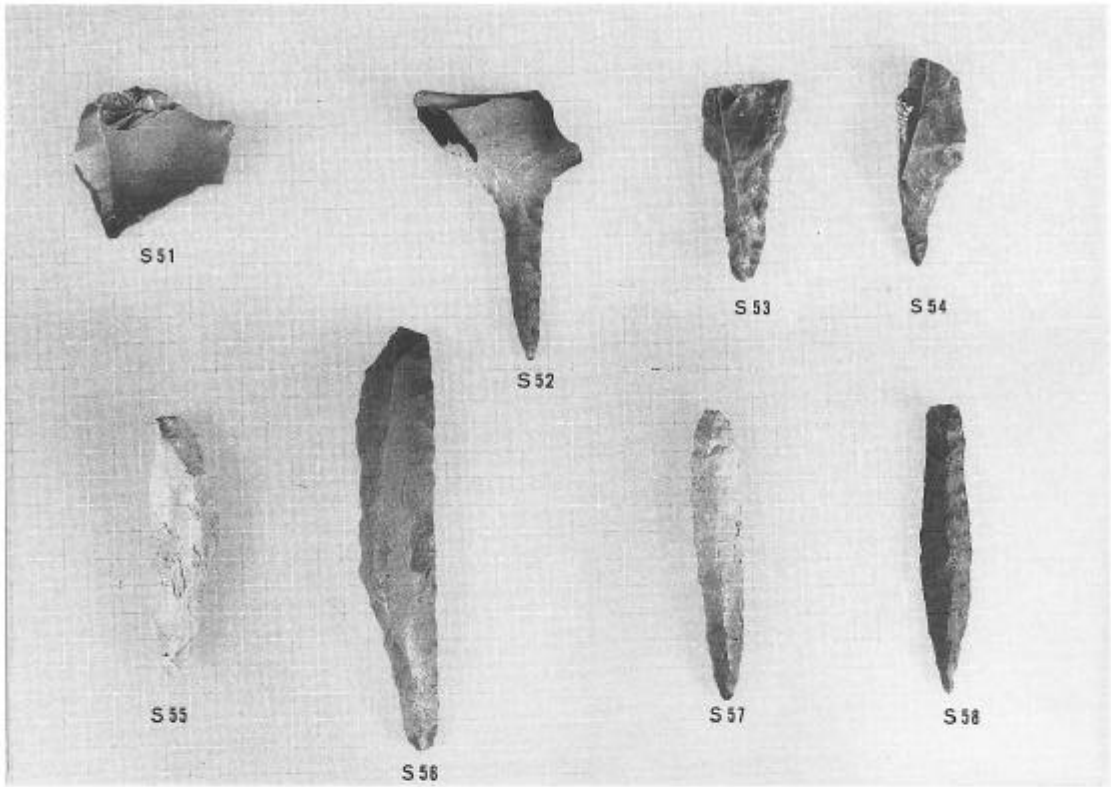
2 遺構外出土遺物(17)



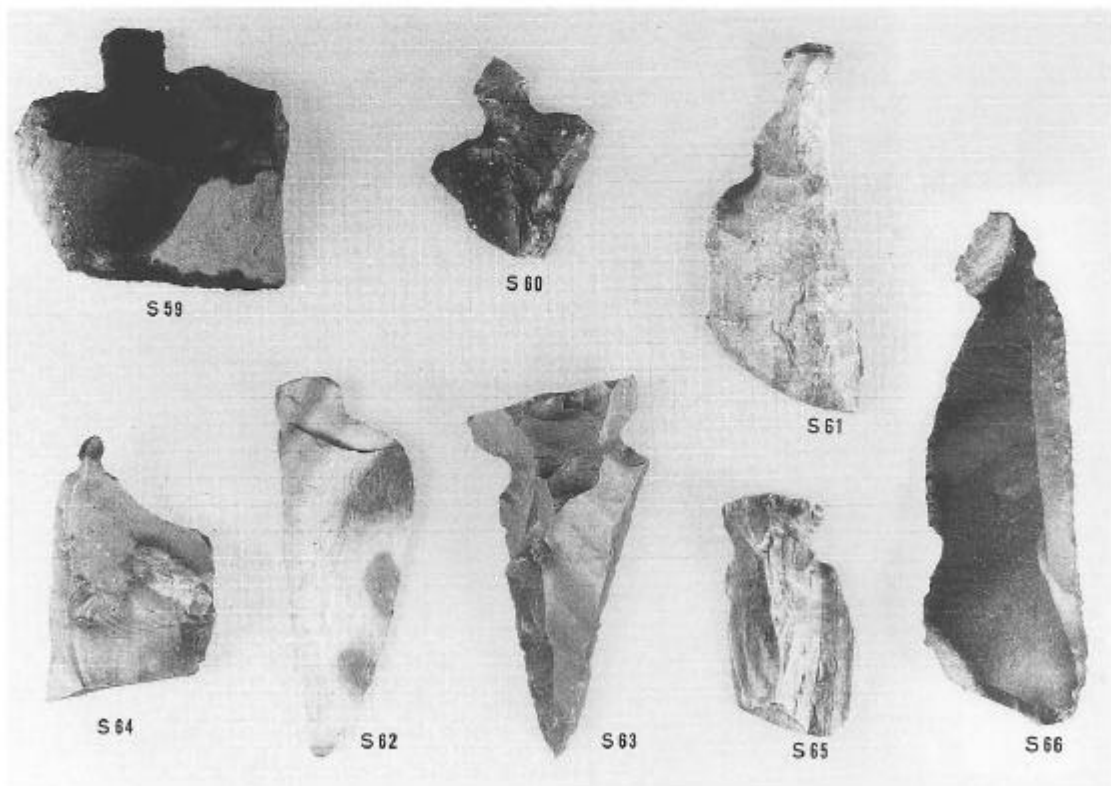
1 遺構外出土遺物(18)



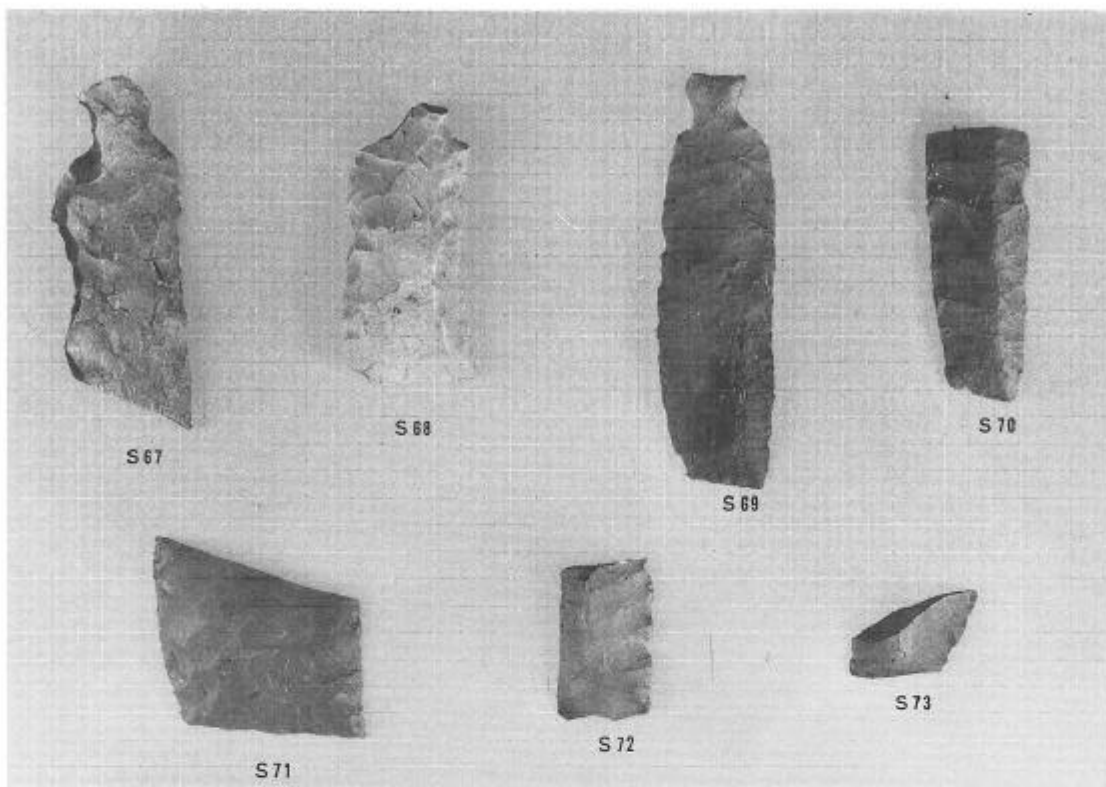
2 遺構外出土遺物(19)



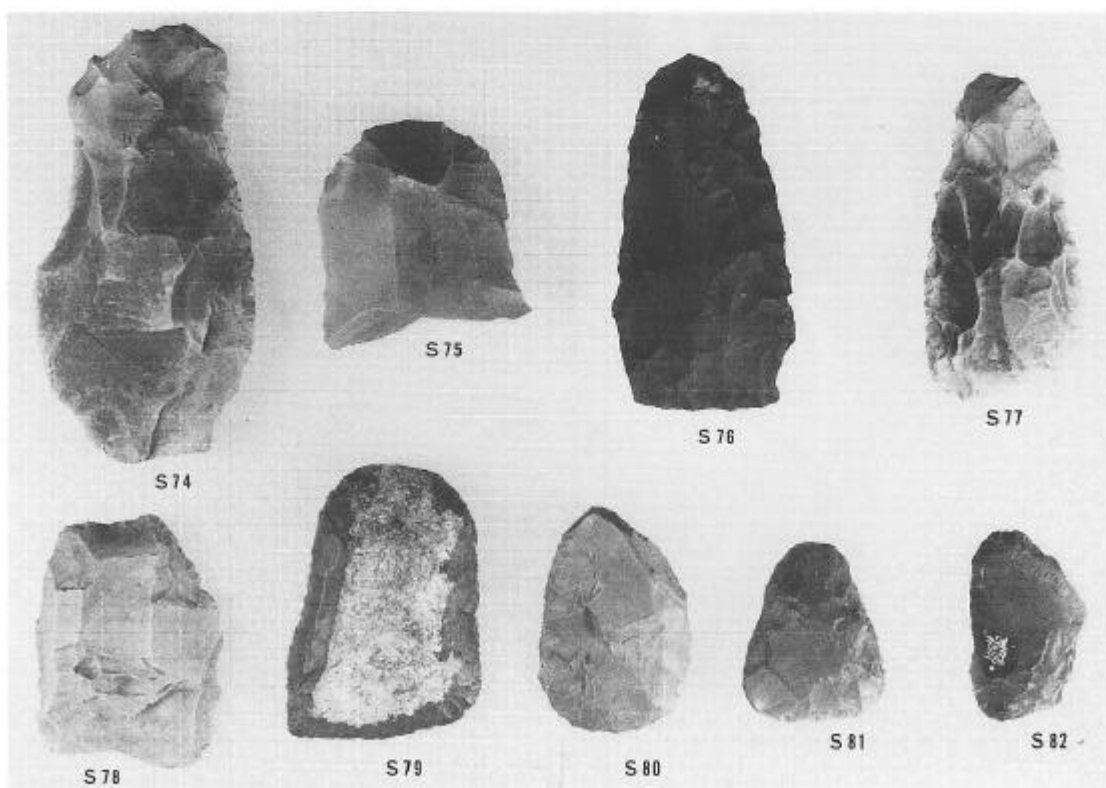
1 遺構外出土遺物(20)



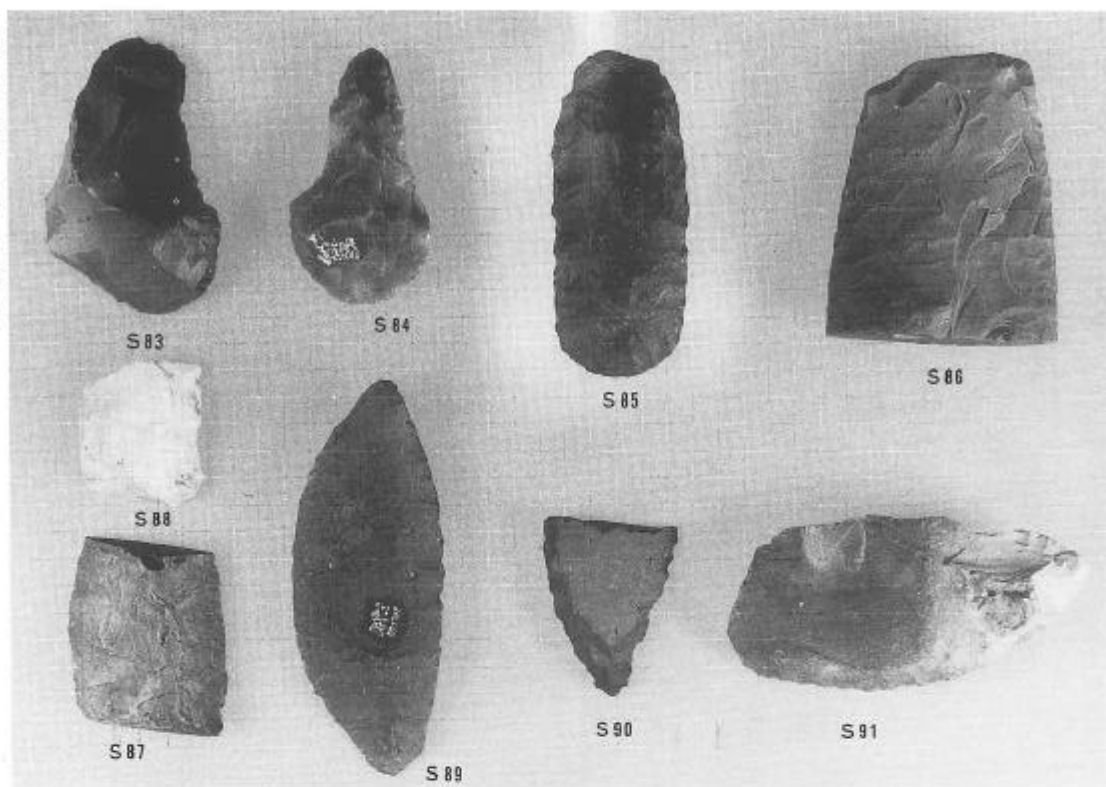
2 遺構外出土遺物(21)



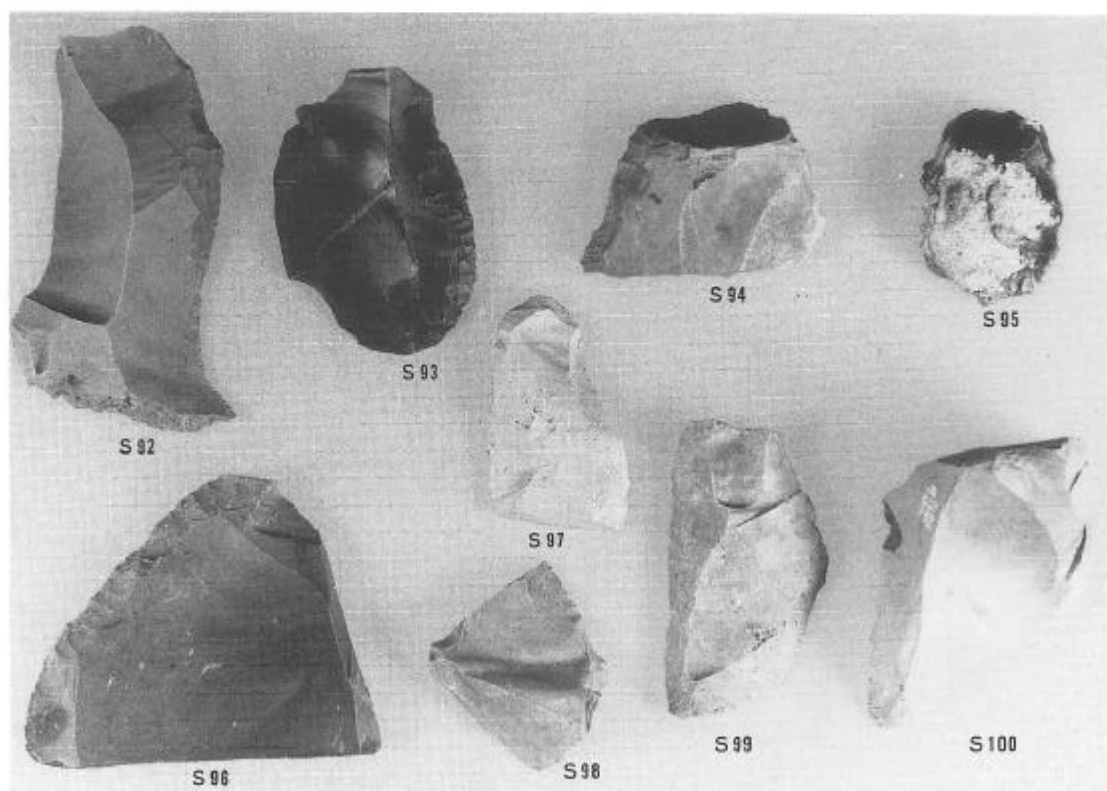
1 遺構外出土遺物(22)



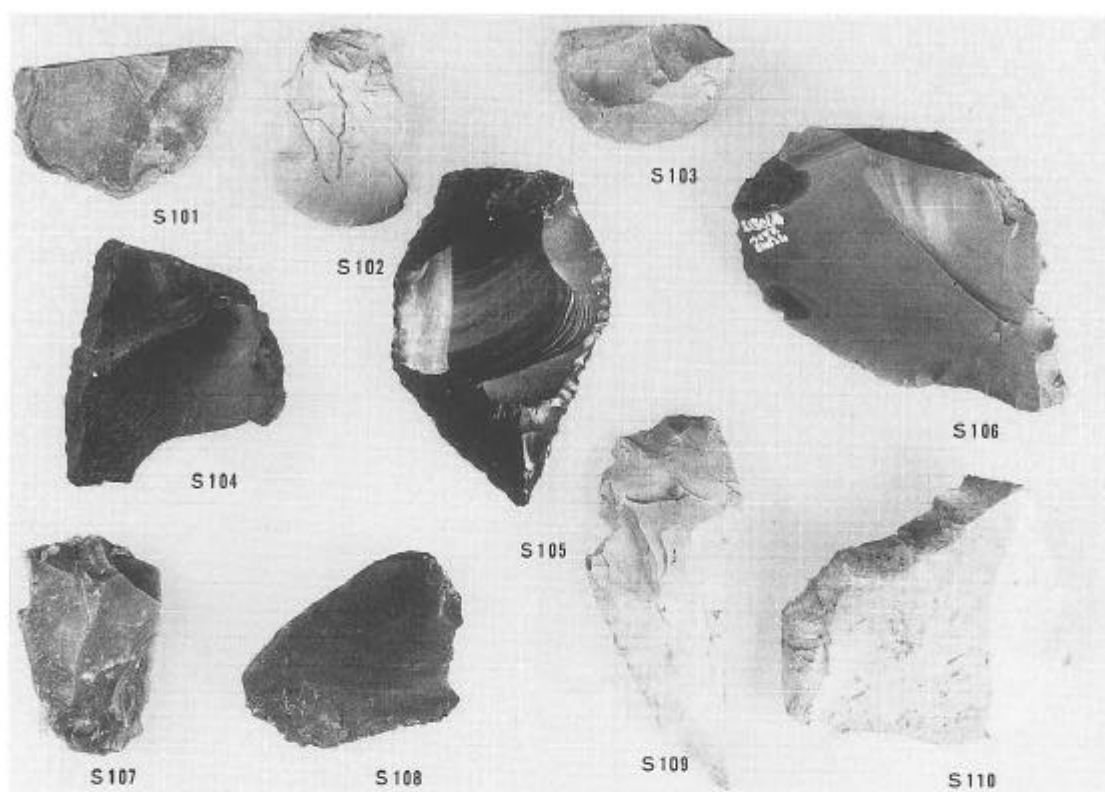
2 遺構外出土遺物(23)



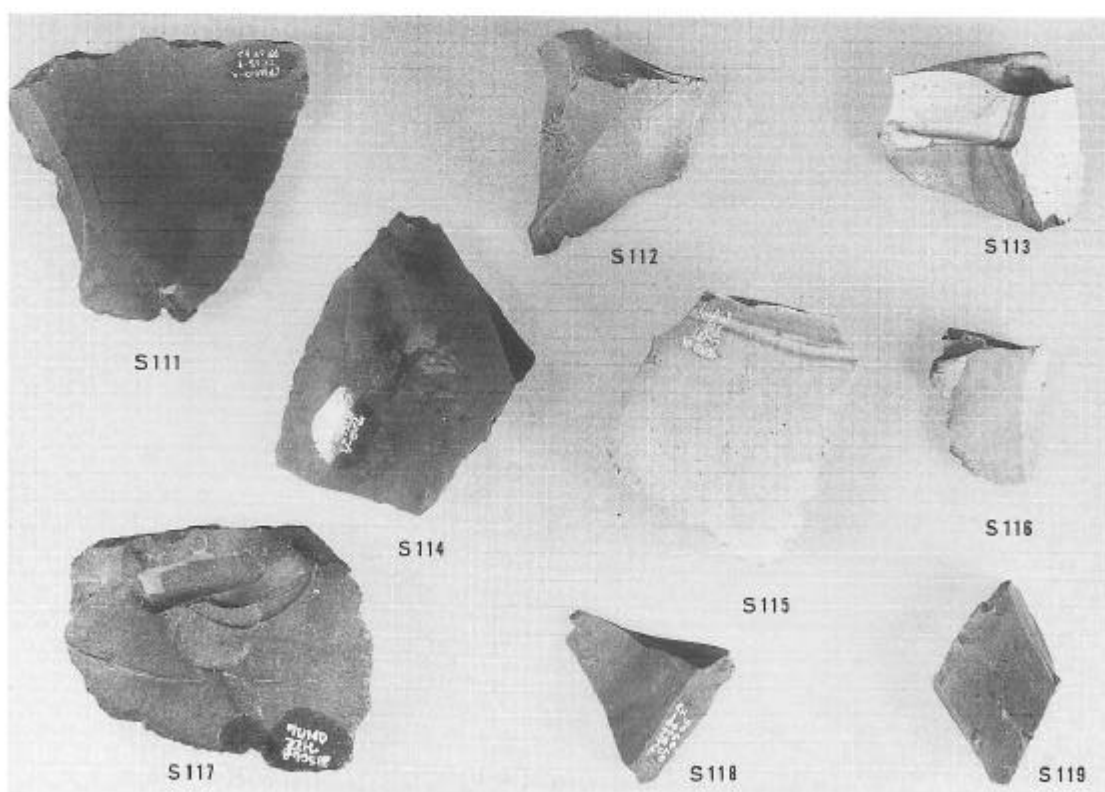
1 遺構外出土遺物(24)



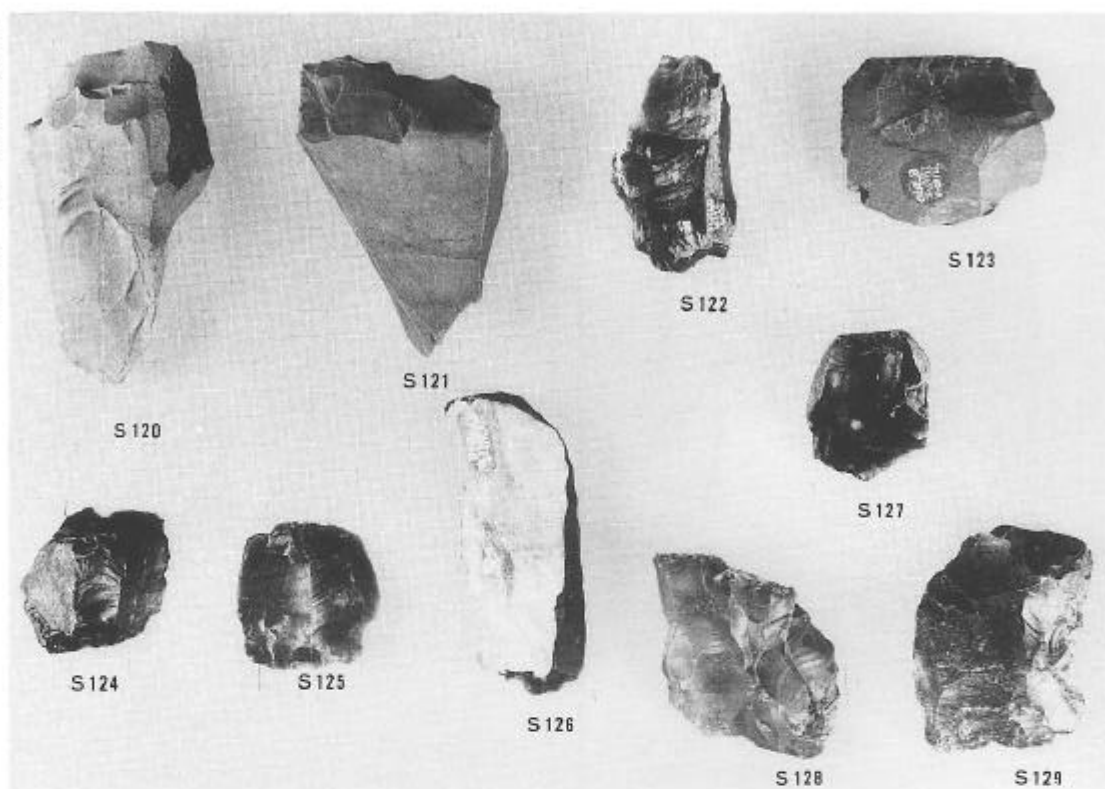
2 遺構外出土遺物(25)



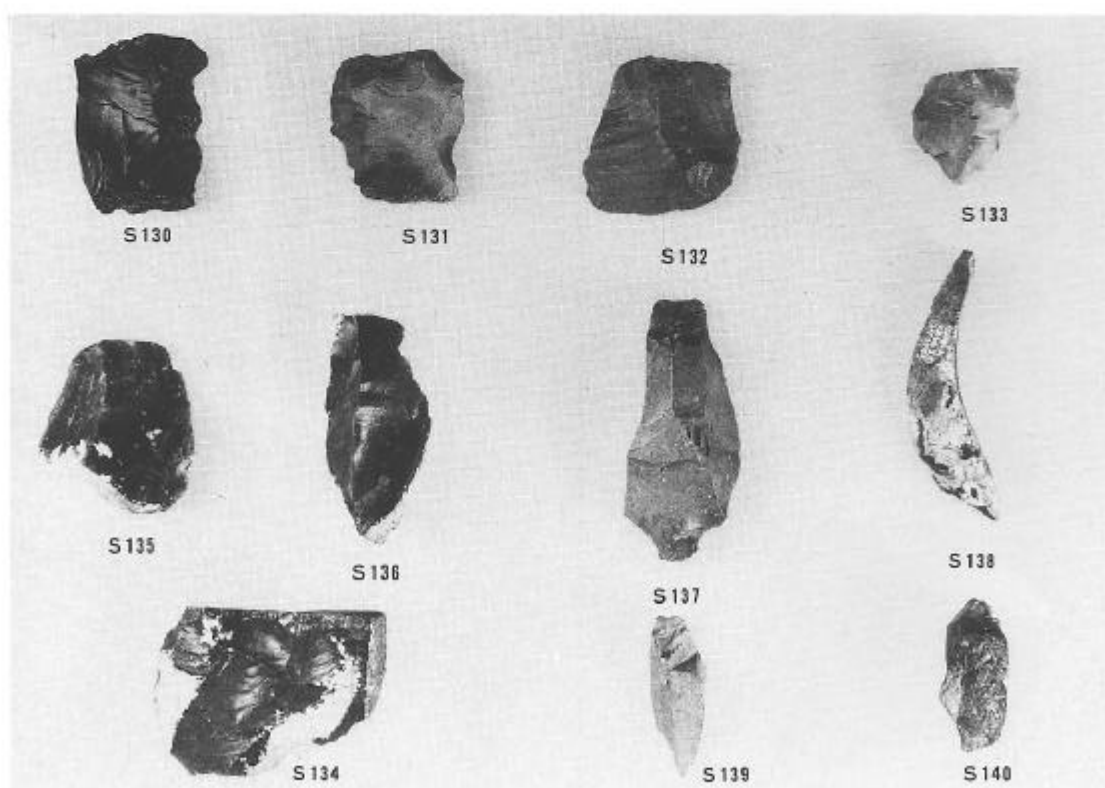
1 遺構外出土遺物(26)



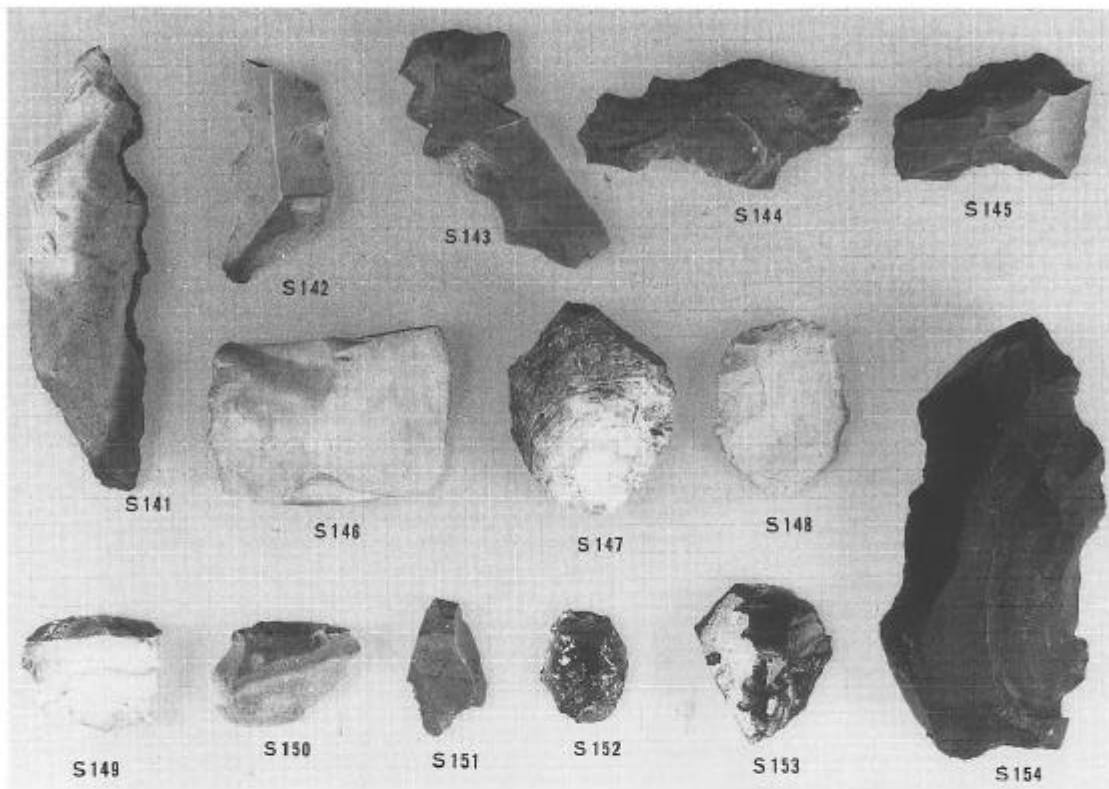
2 遺構外出土遺物(27)



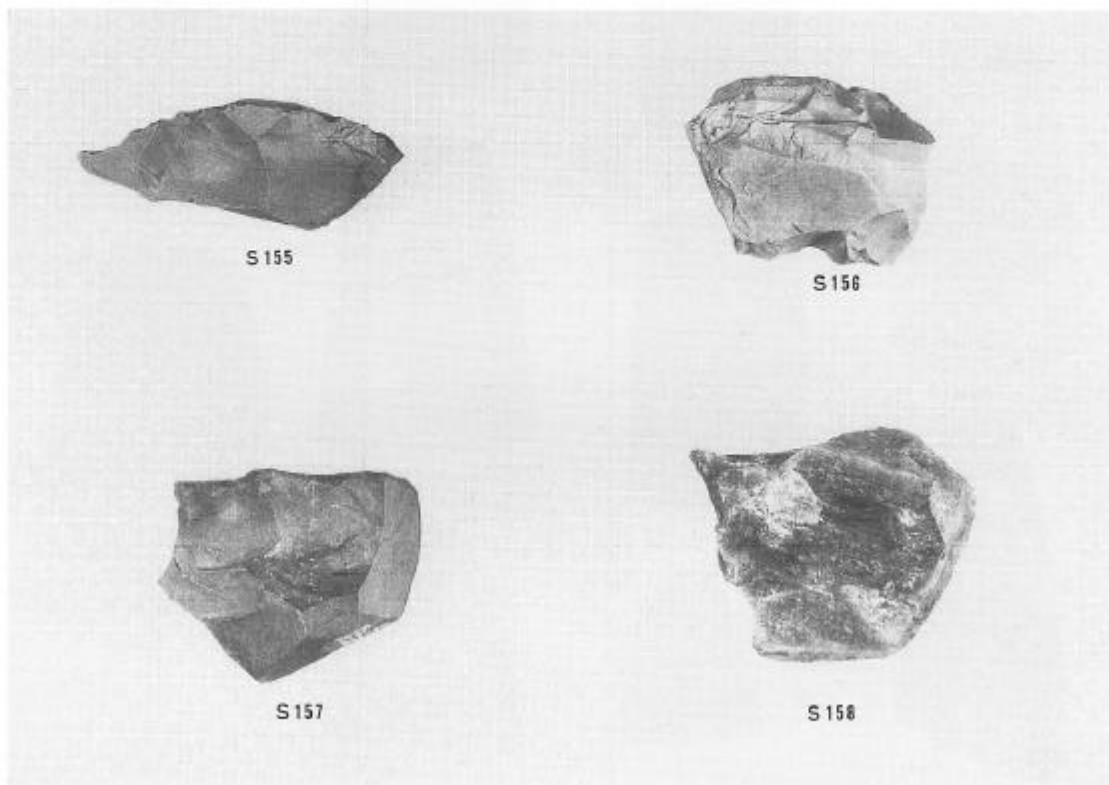
1 遺構外出土遺物(28)



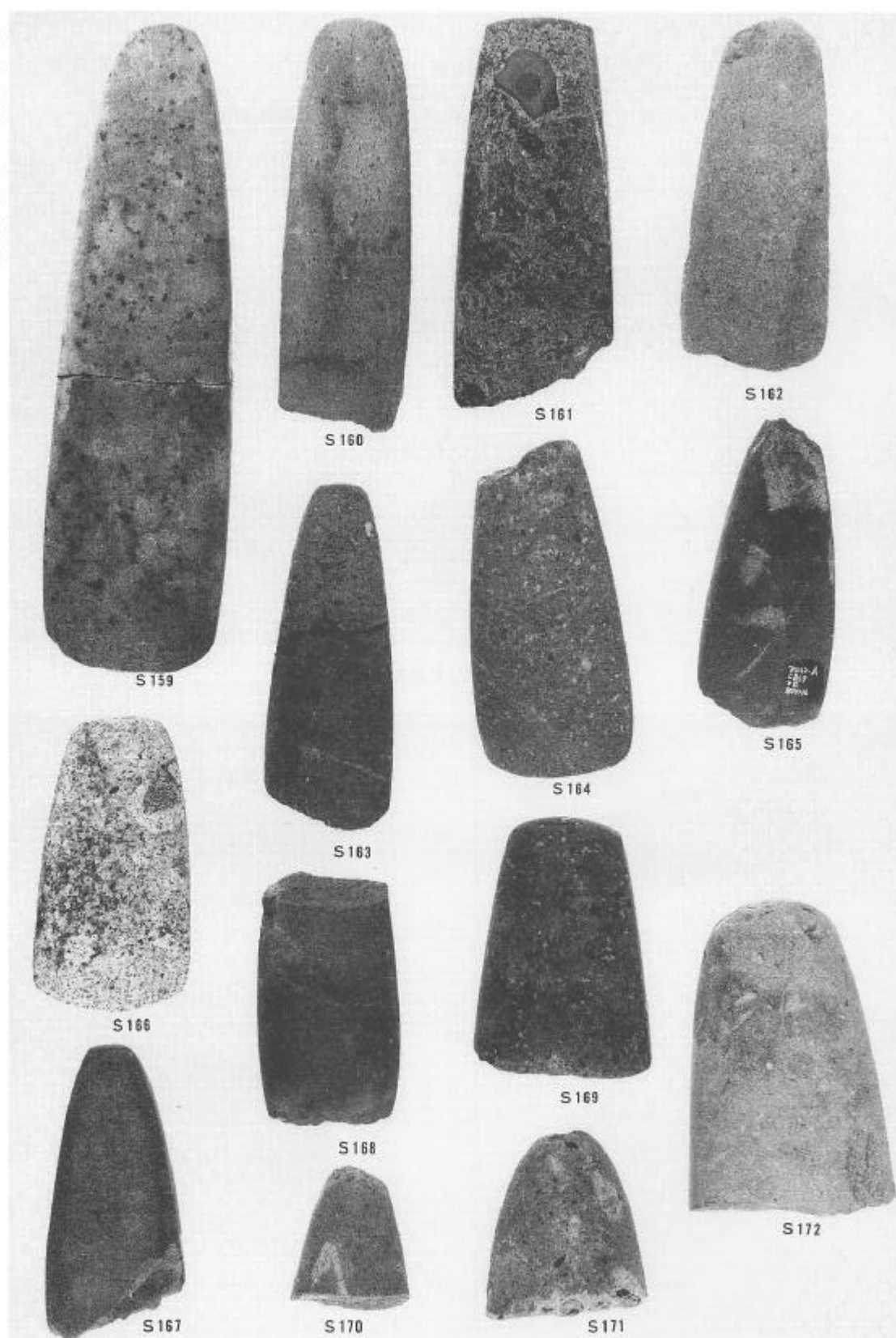
2 遺構外出土遺物(29)



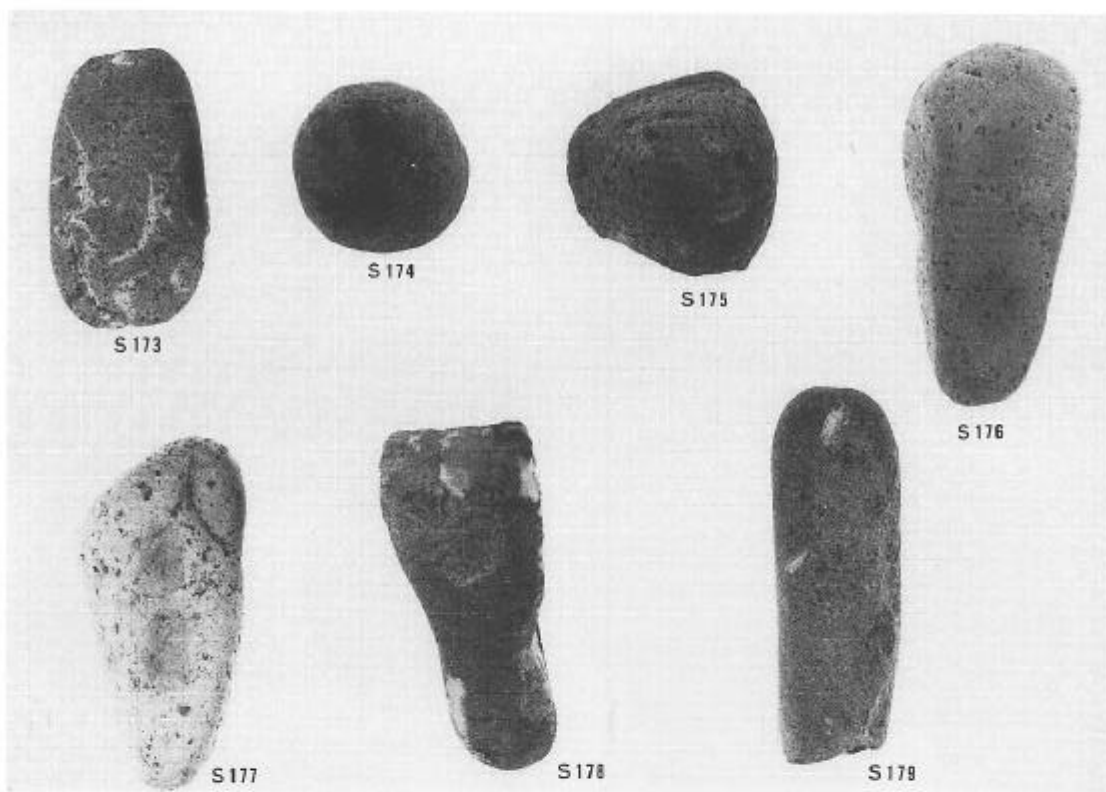
1 遺構外出土遺物(30)



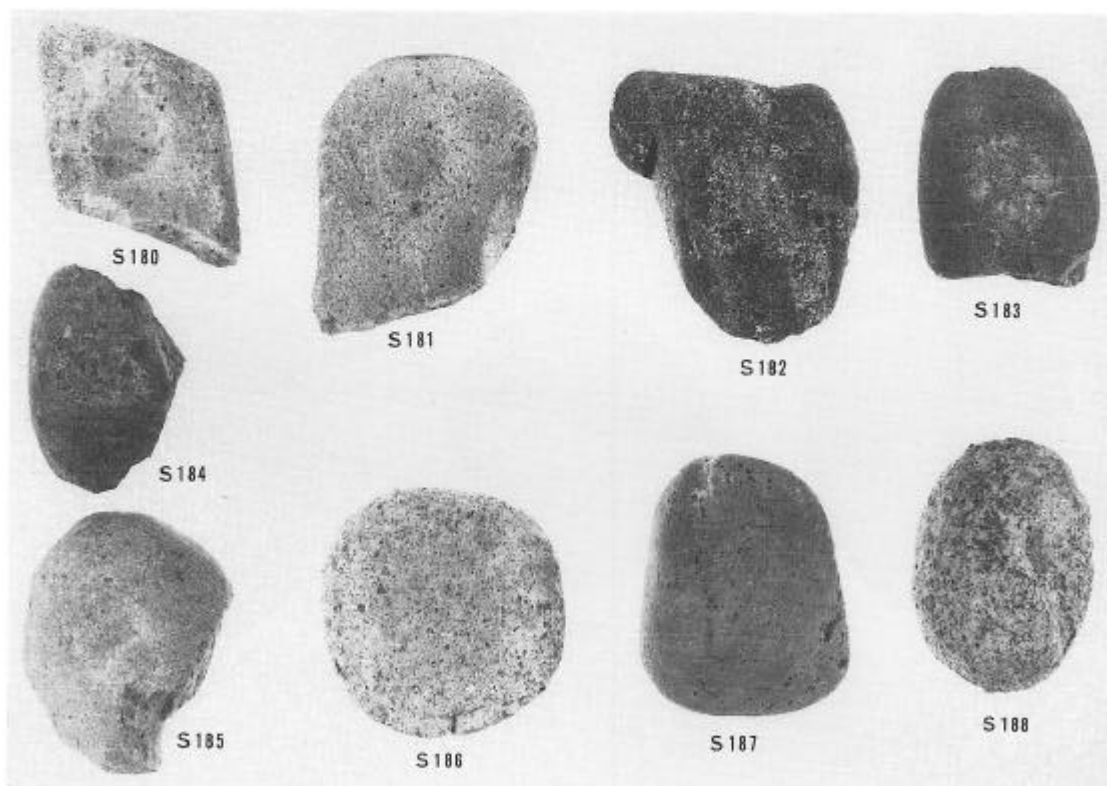
2 遺構外出土遺物(31)



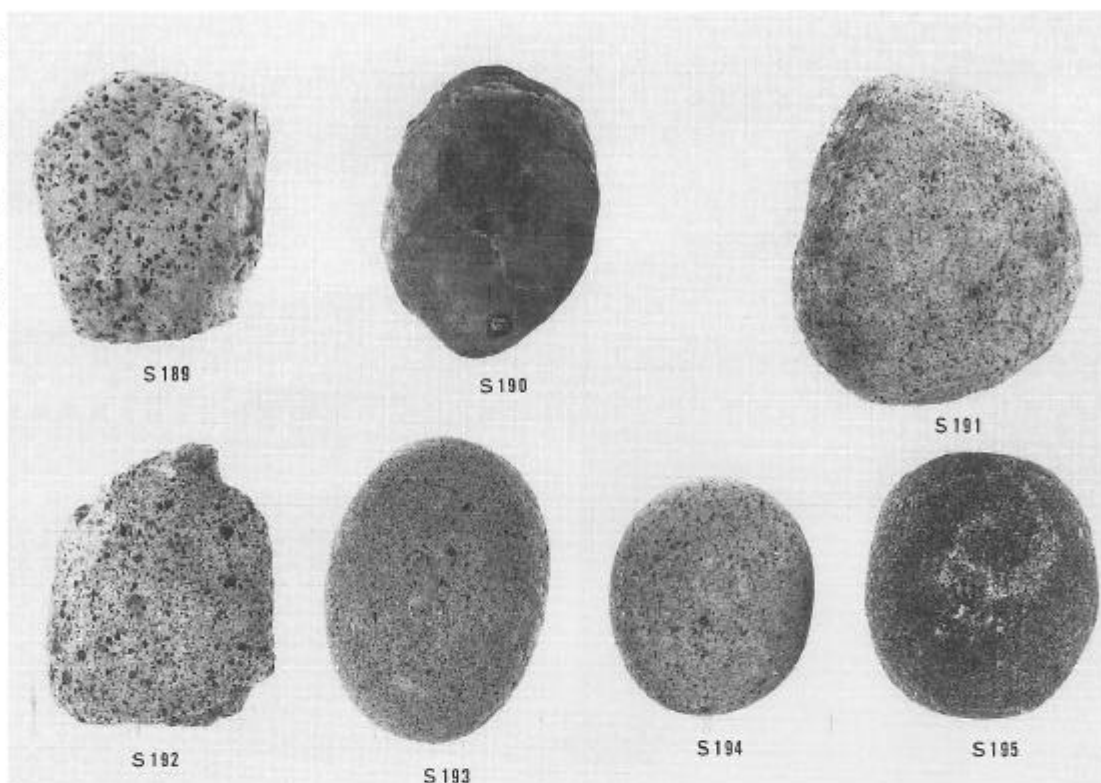
遺構外出土遺物(32)



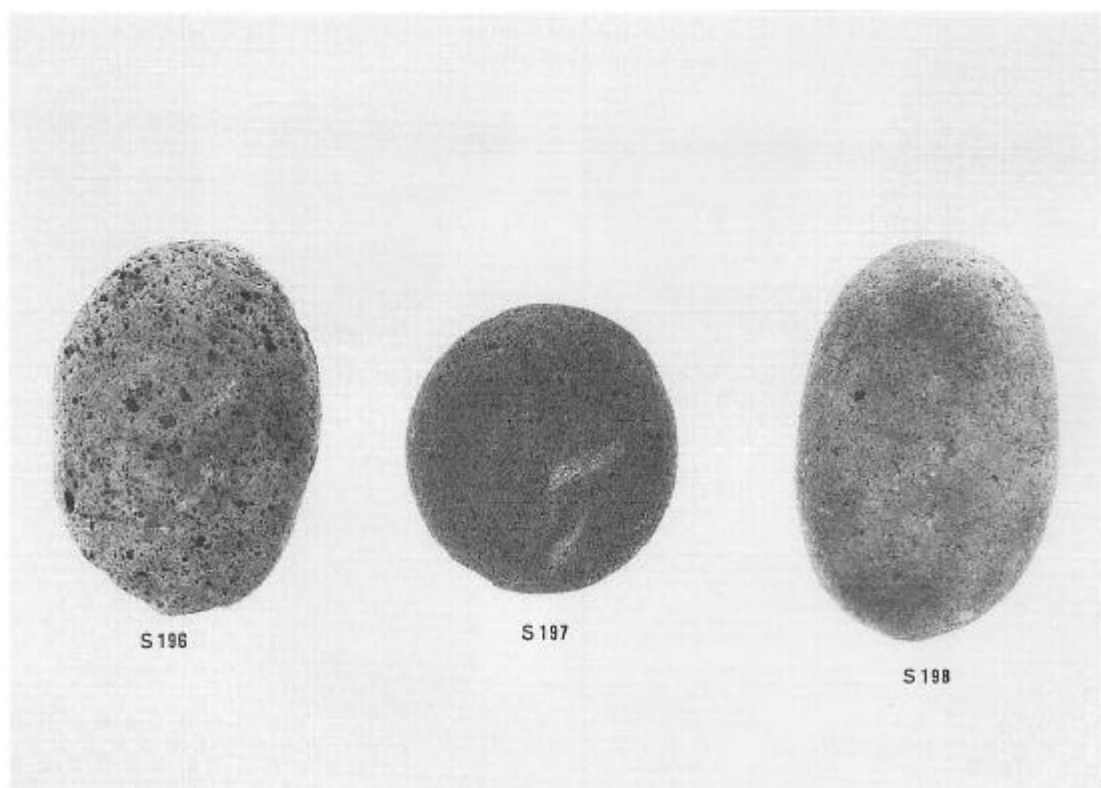
1 遺構外出土遺物(33)



2 遺構外出土遺物(34)

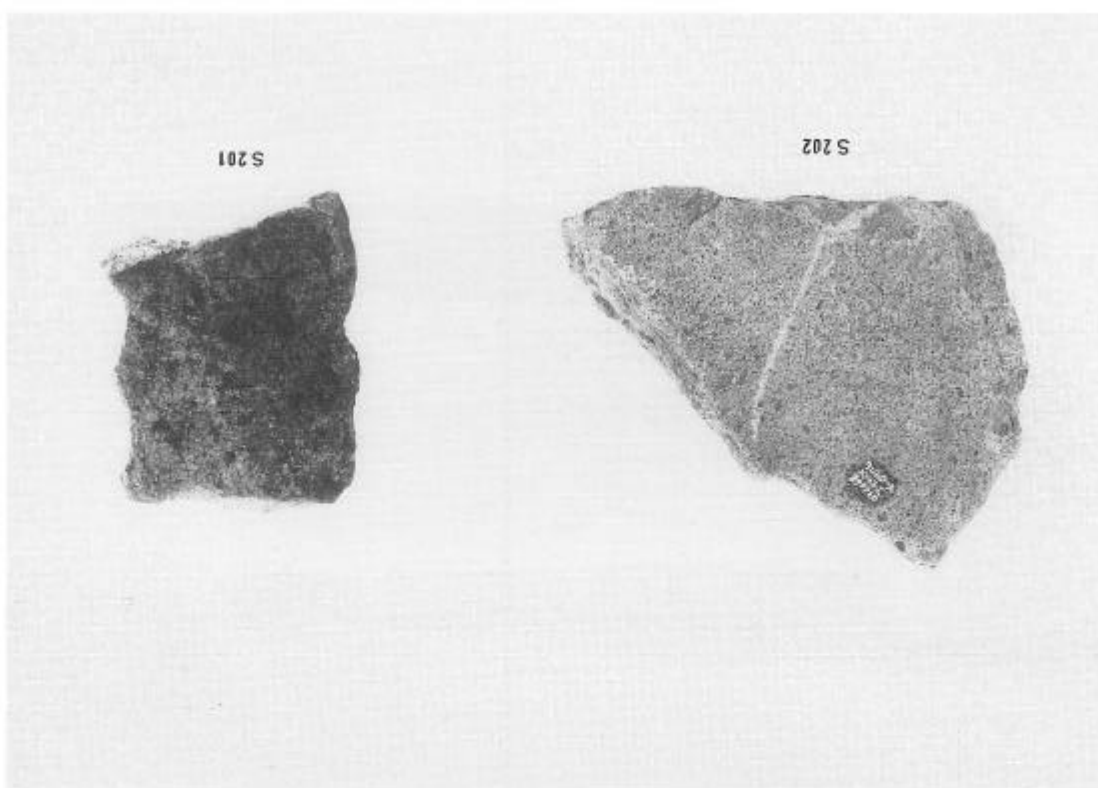


1 遺構外出土遺物(35)

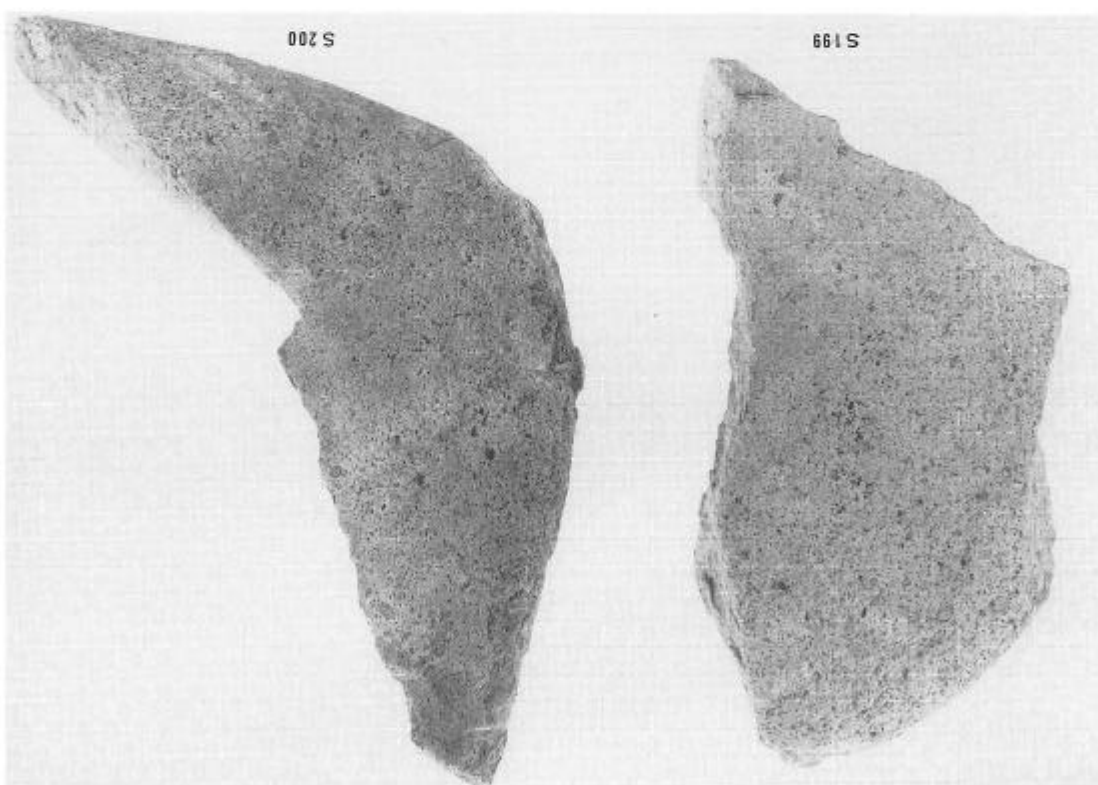


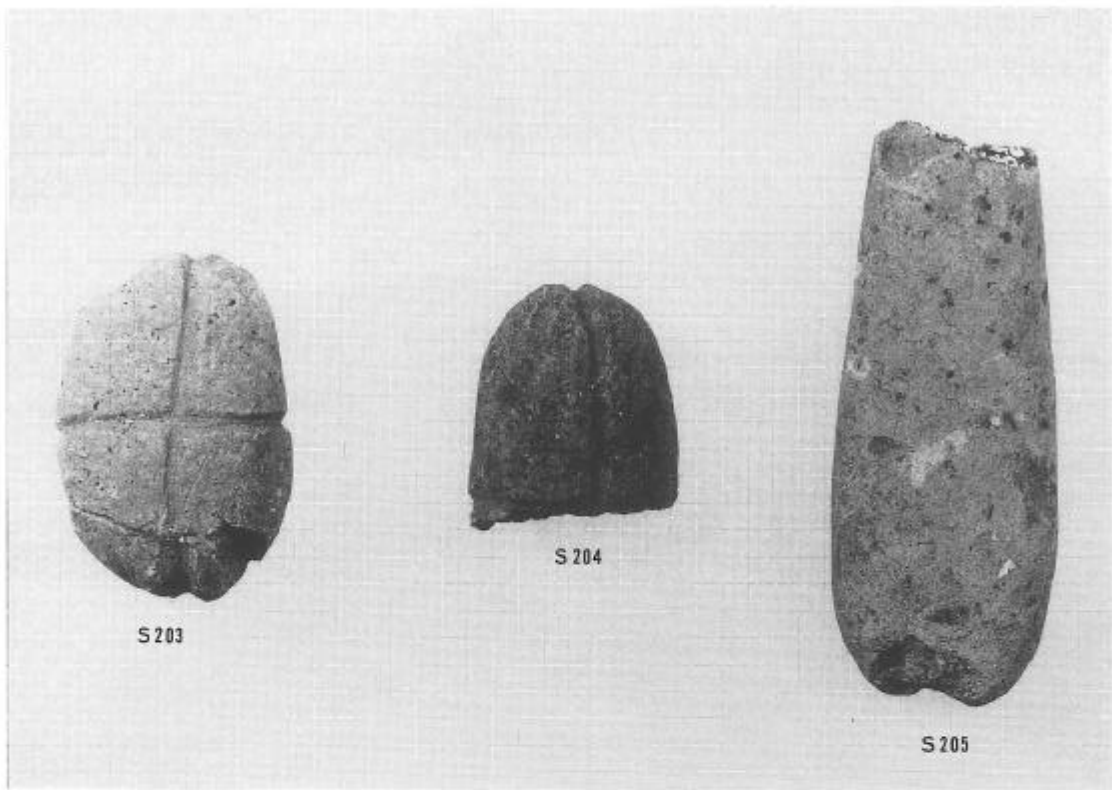
2 遺構外出土遺物(36)

2 遺構外出土遺物(38)

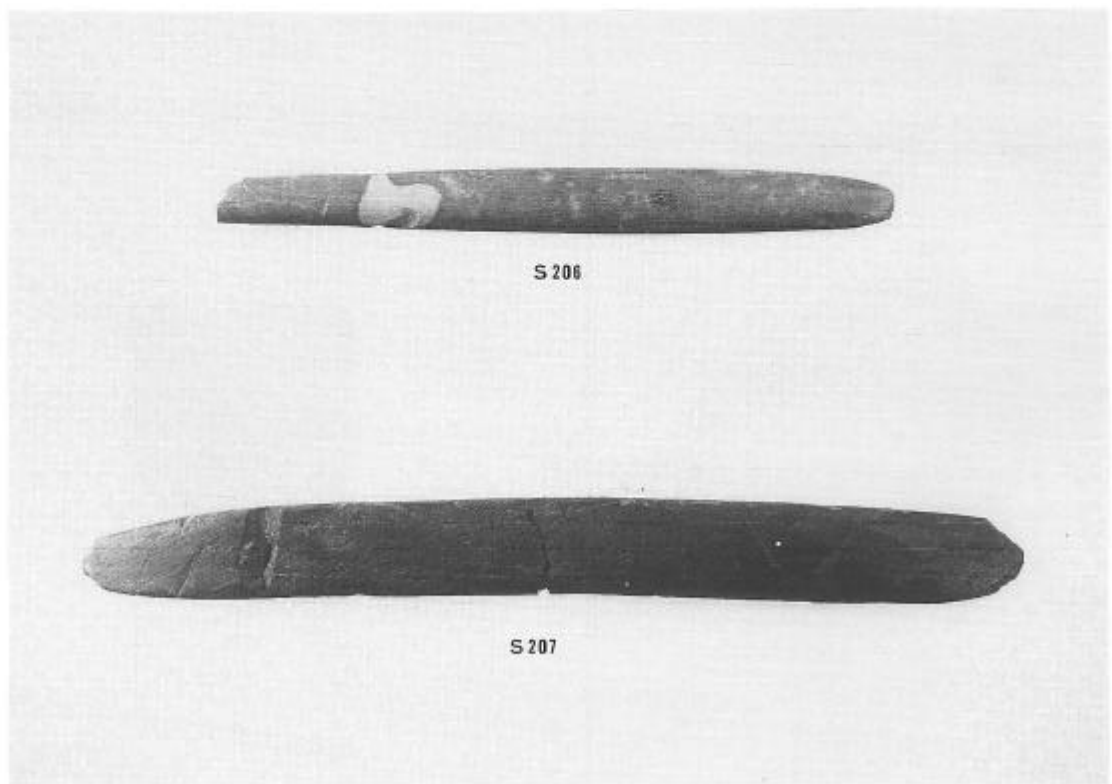


1 遺構外出土遺物(37)





1 遺構外出土遺物(39)



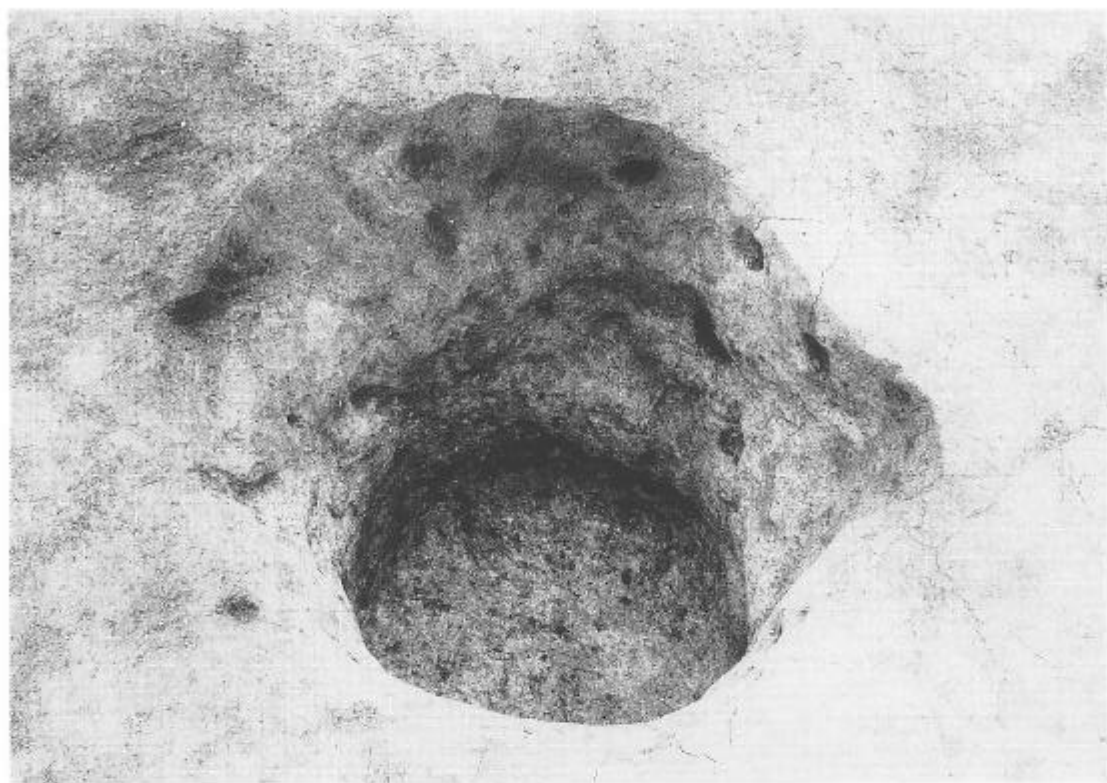
2 遺構外出土遺物(40)



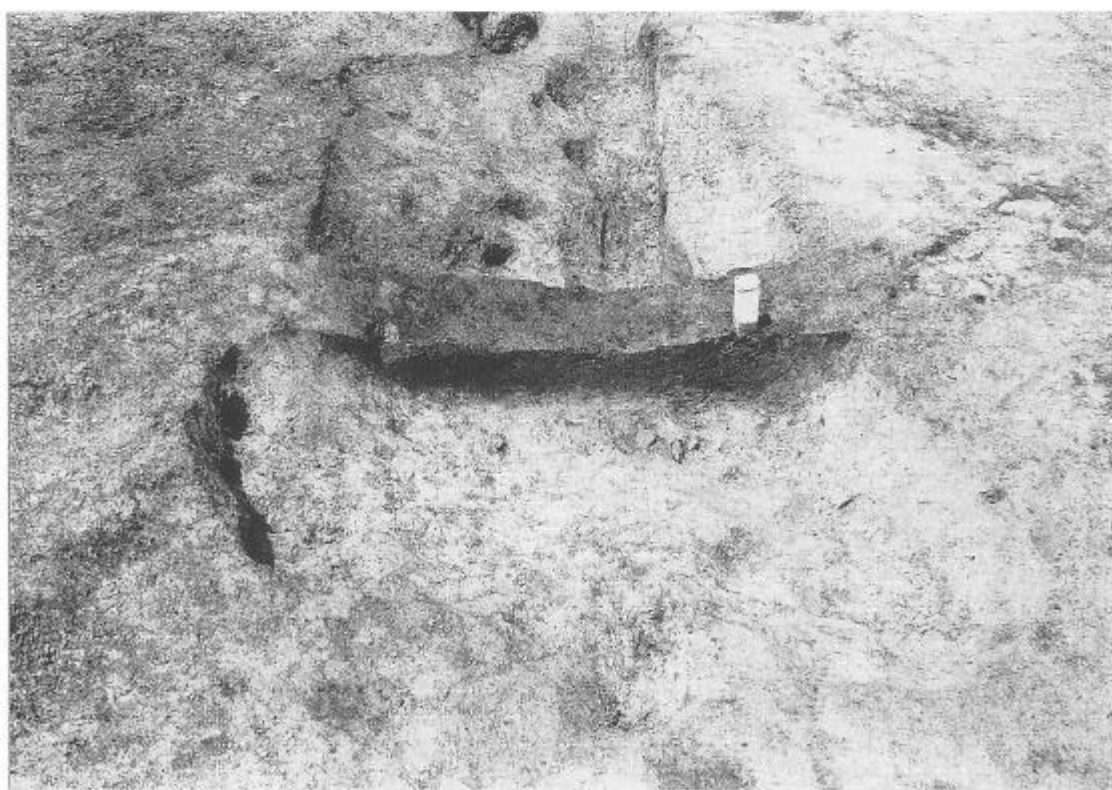
1 調査区全景(北▷南)



2 S I 104 竪穴住居跡(南東▷北西)



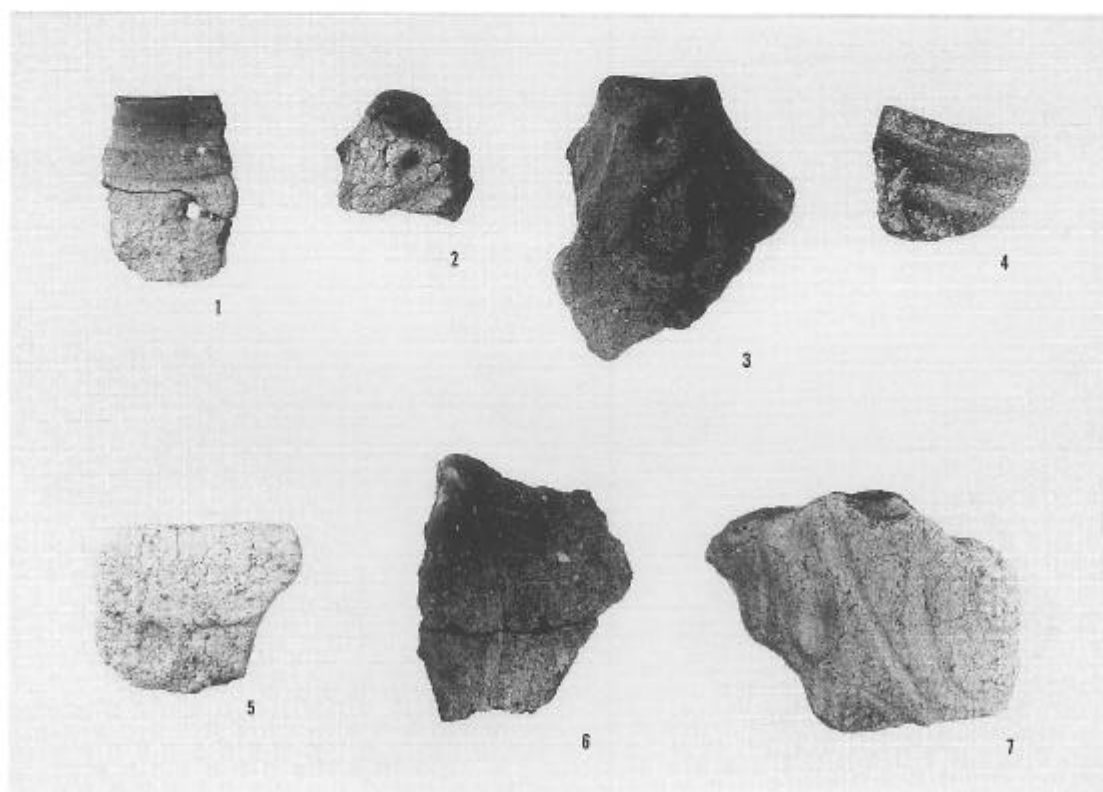
1 SK101土坑(北東▷南西)



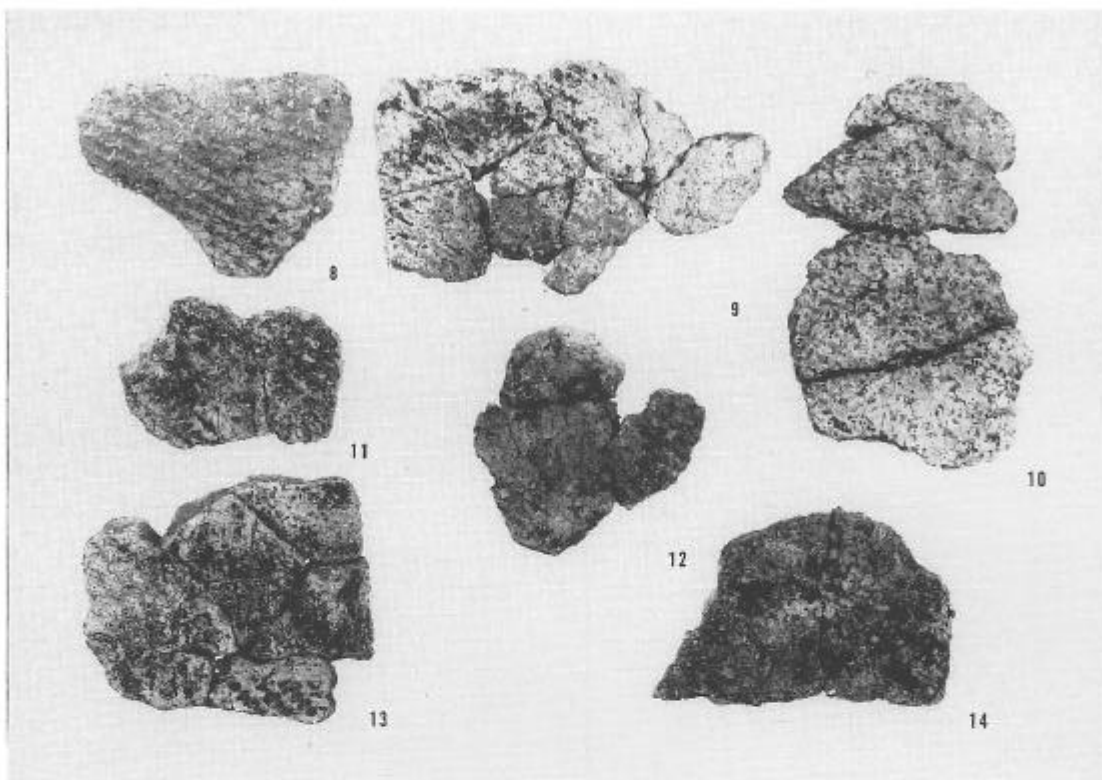
2 SN102焼土遺構(東▷西)



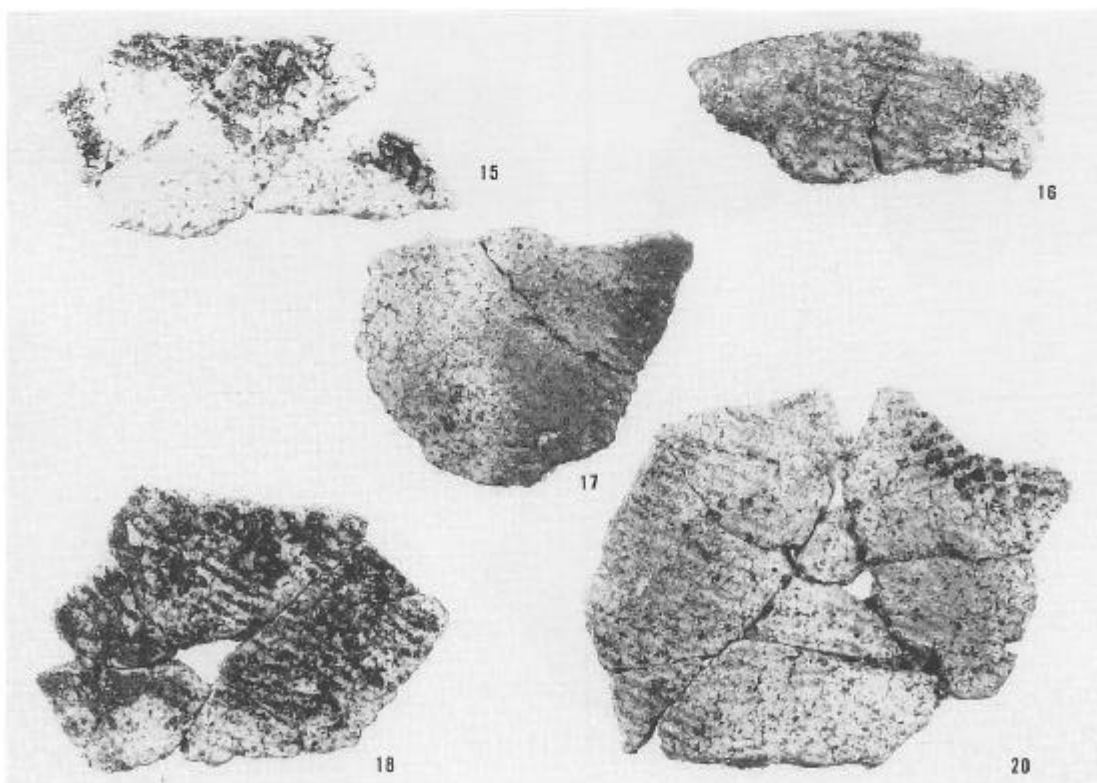
1 SW103炭焼成遺構(南▷北)



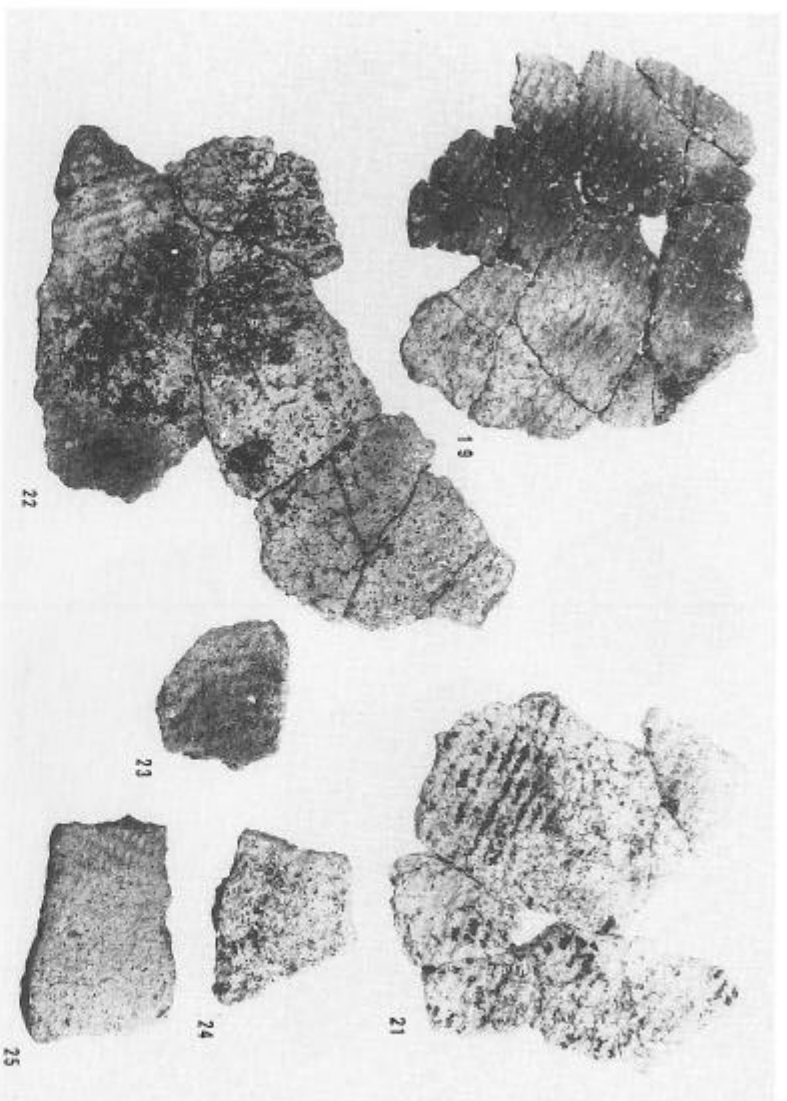
2 遺構内出土遺物(1)



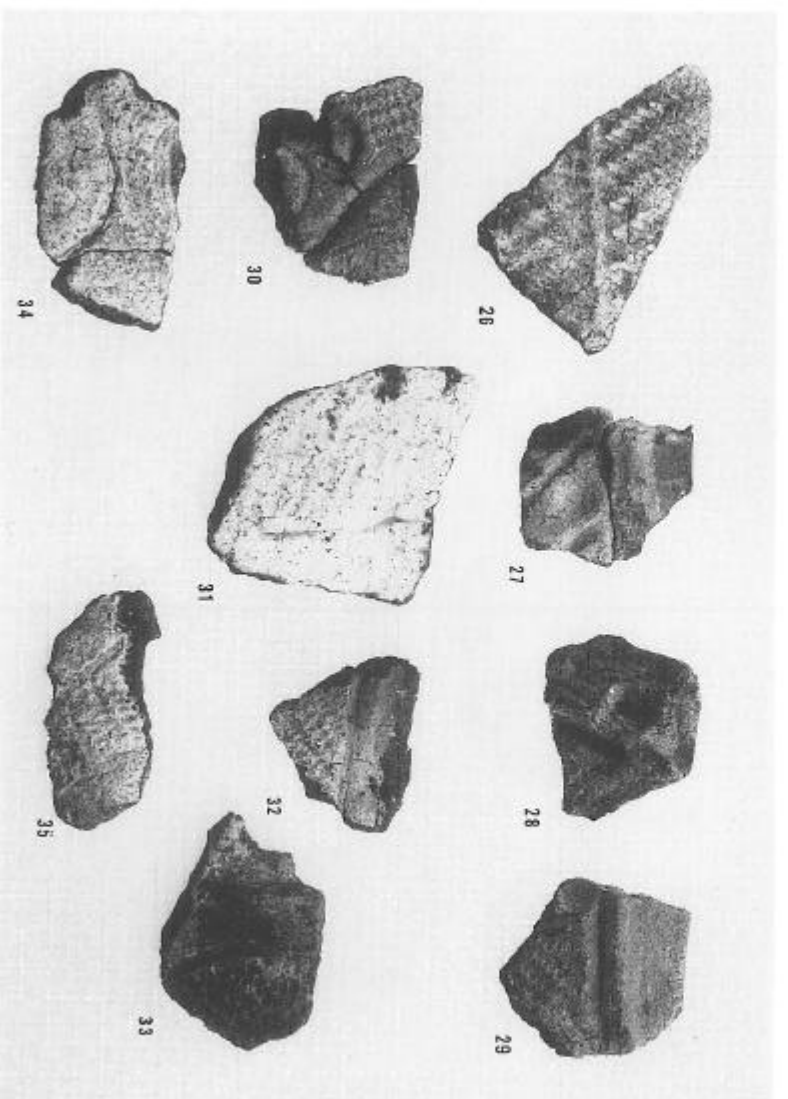
1 遺構内出土遺物(2)



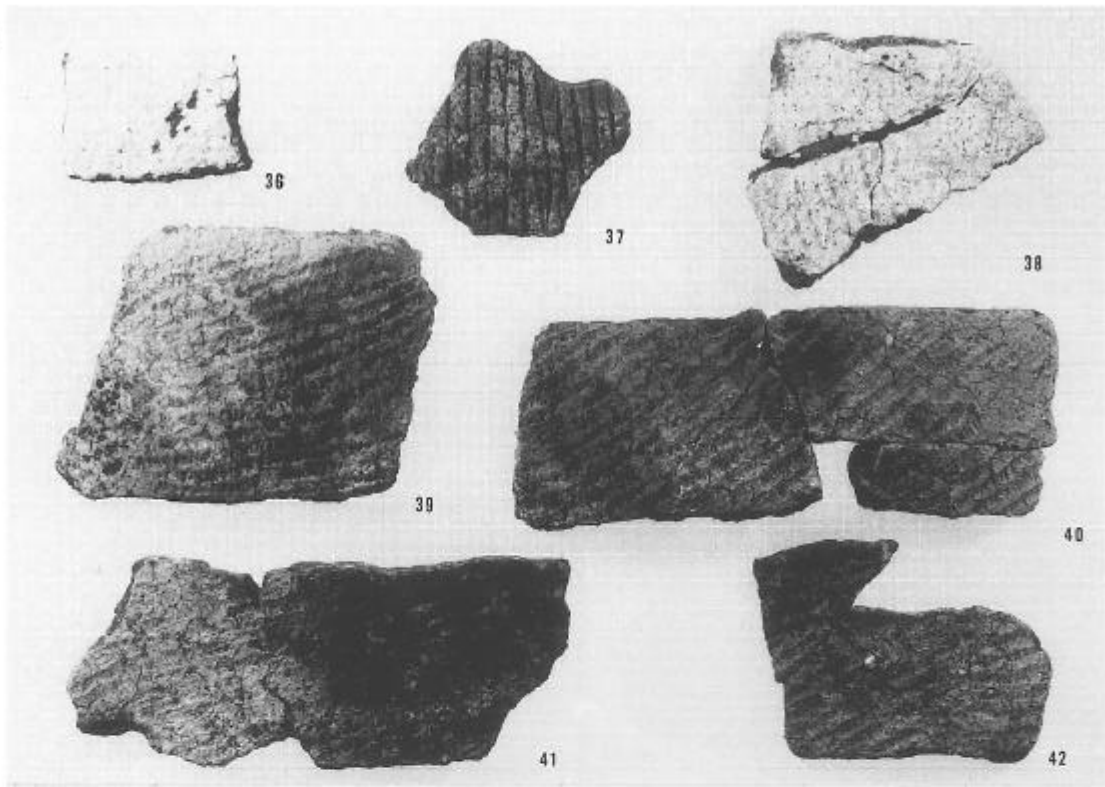
2 遺構内出土遺物(3)



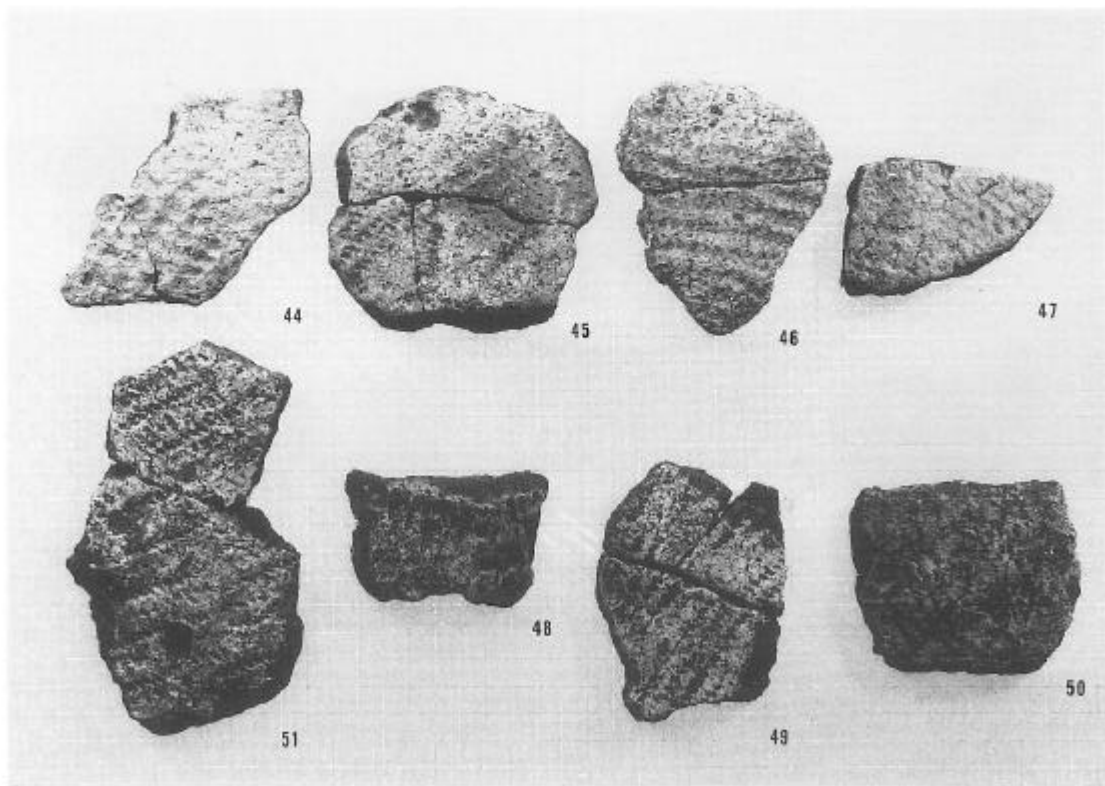
1 遺構内出土遺物(4)



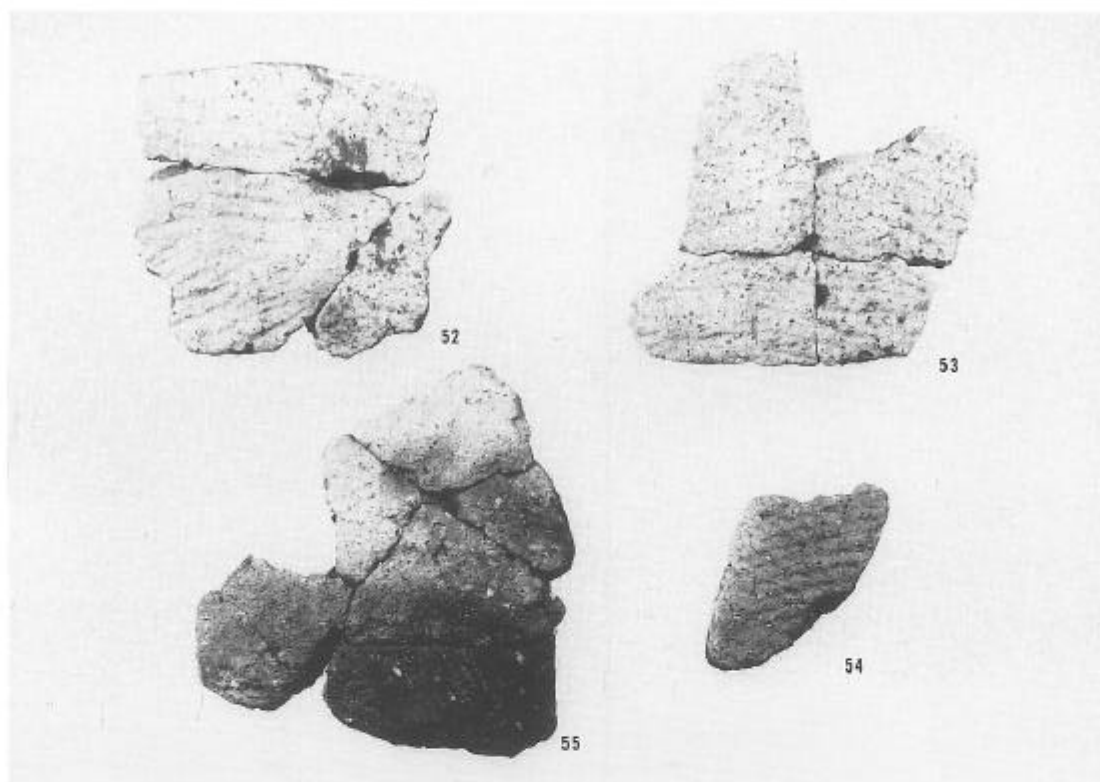
2 遺構外出土遺物(1)



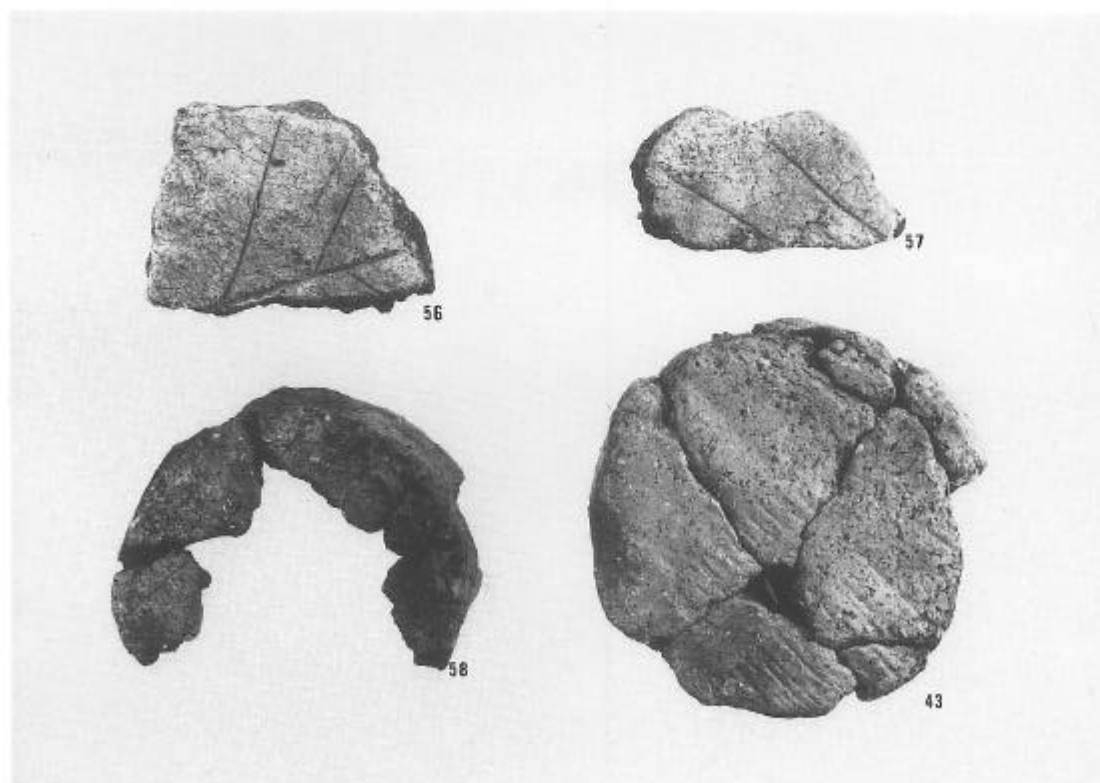
1 遺構外出土遺物(2)



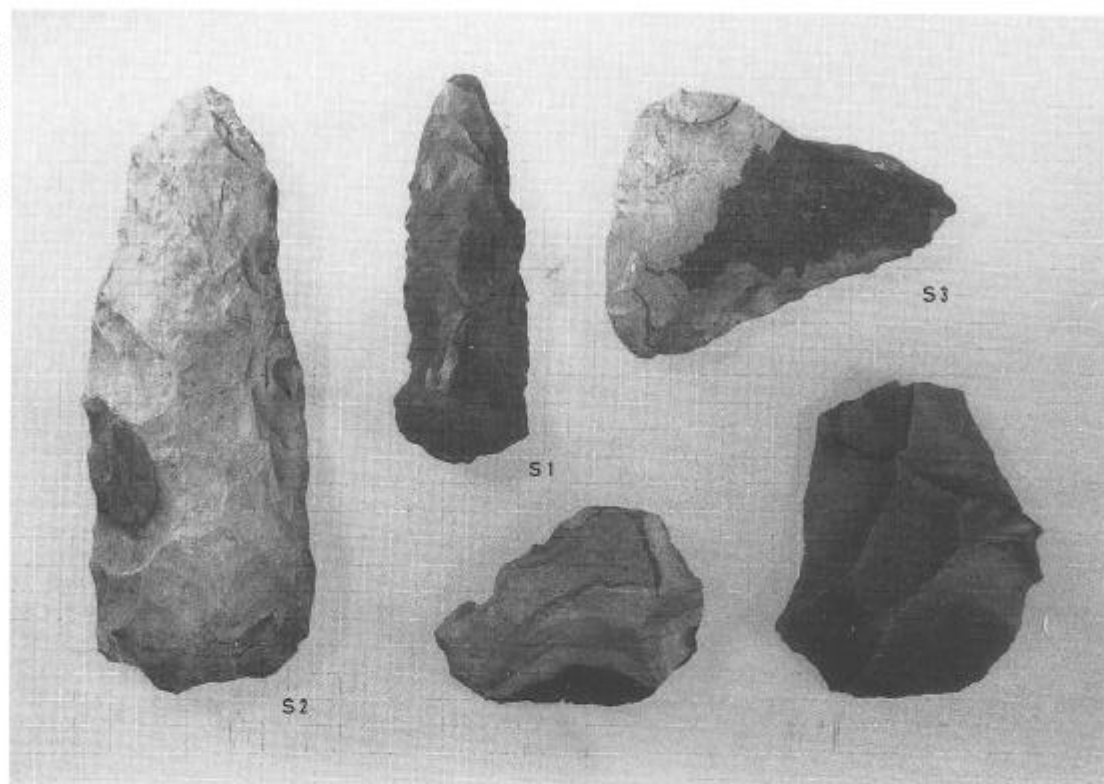
2 遺構外出土遺物(3)



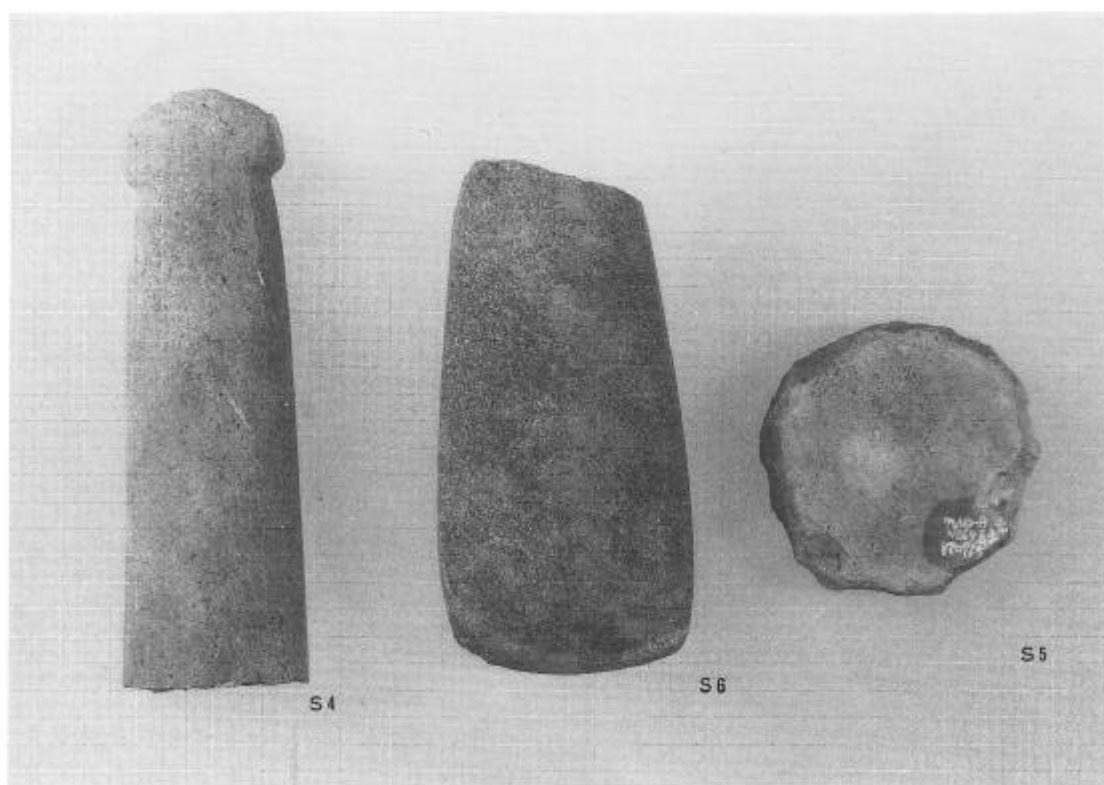
1 遺構外出土遺物(4)



2 遺構外出土遺物(5)



1 遺構外出土遺物(6)



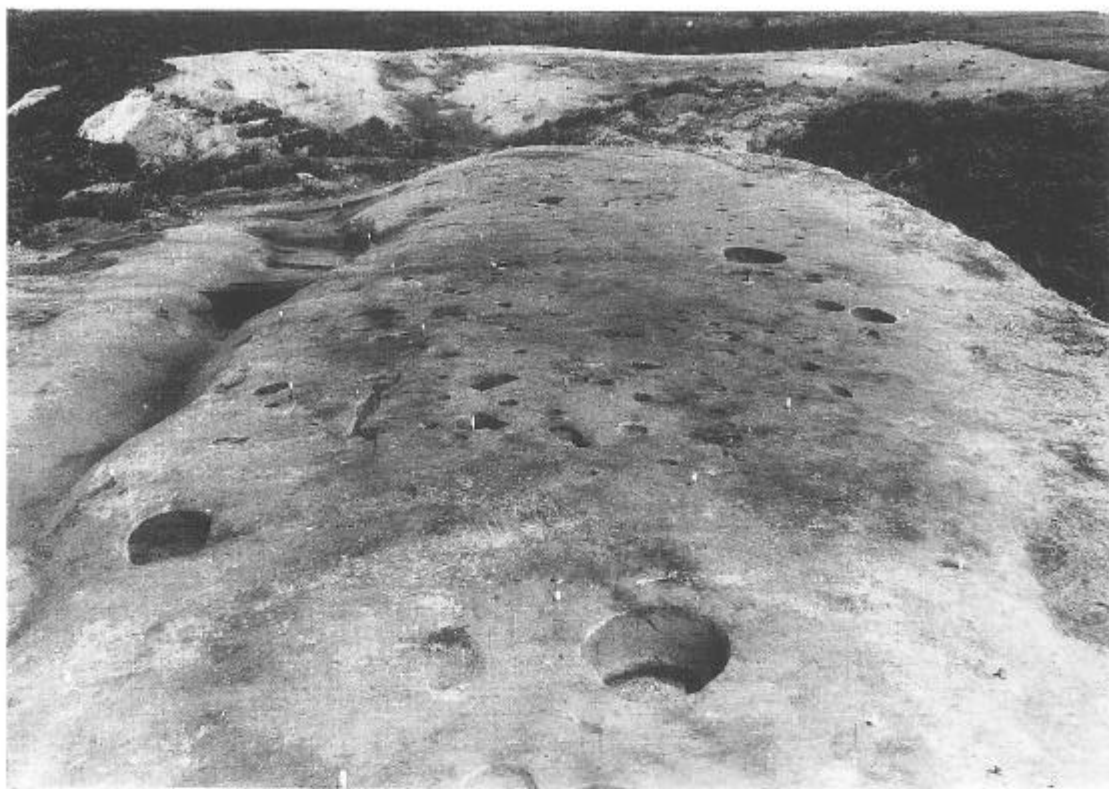
2 遺構外出土遺物(7)



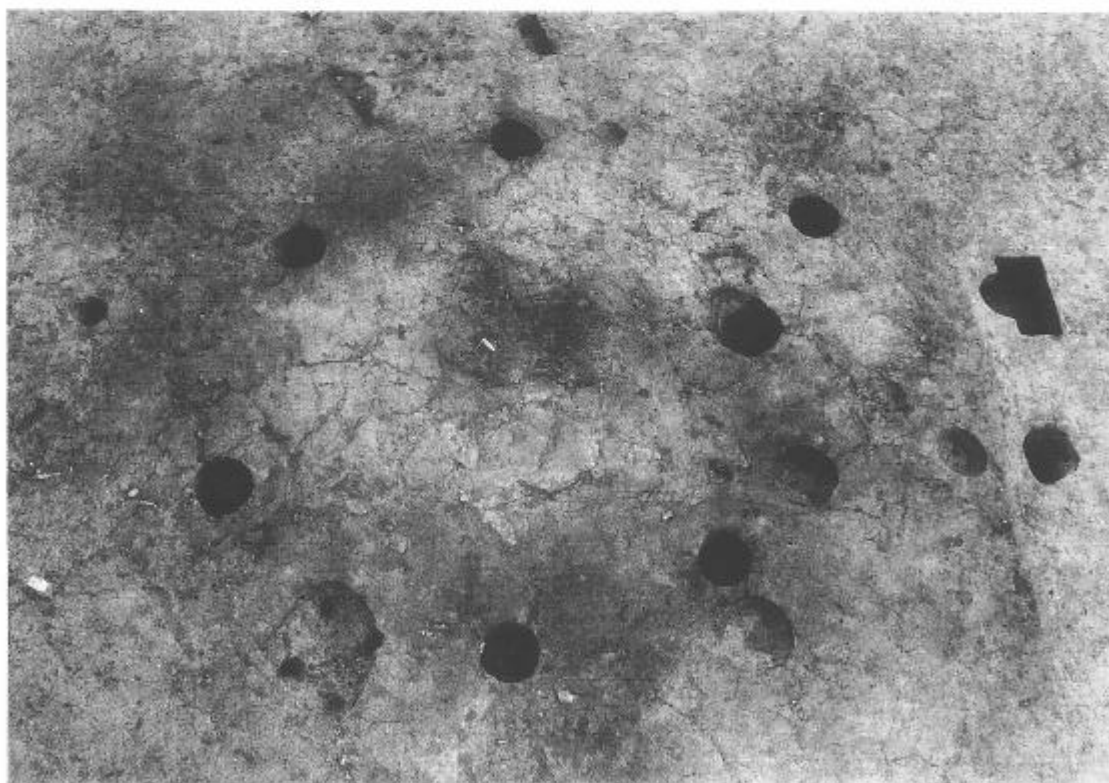
1 調査前遠景(南東▷北西)



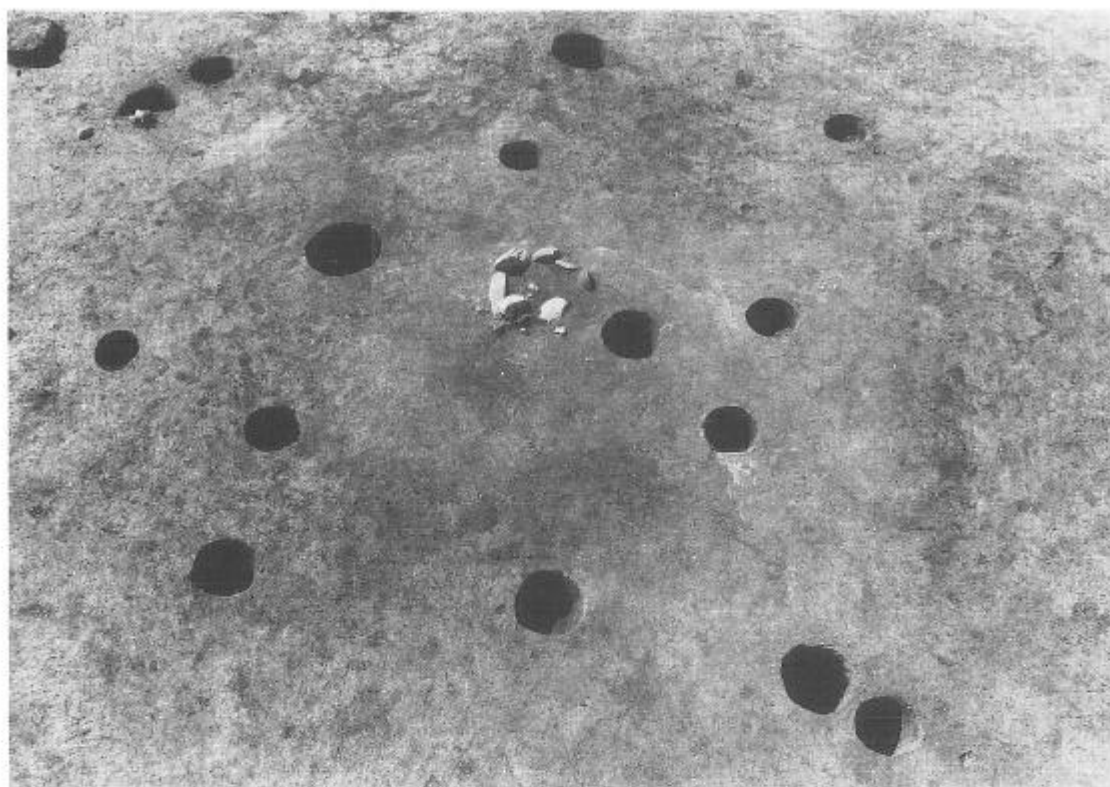
2 調査後遠景(北東▷南西)



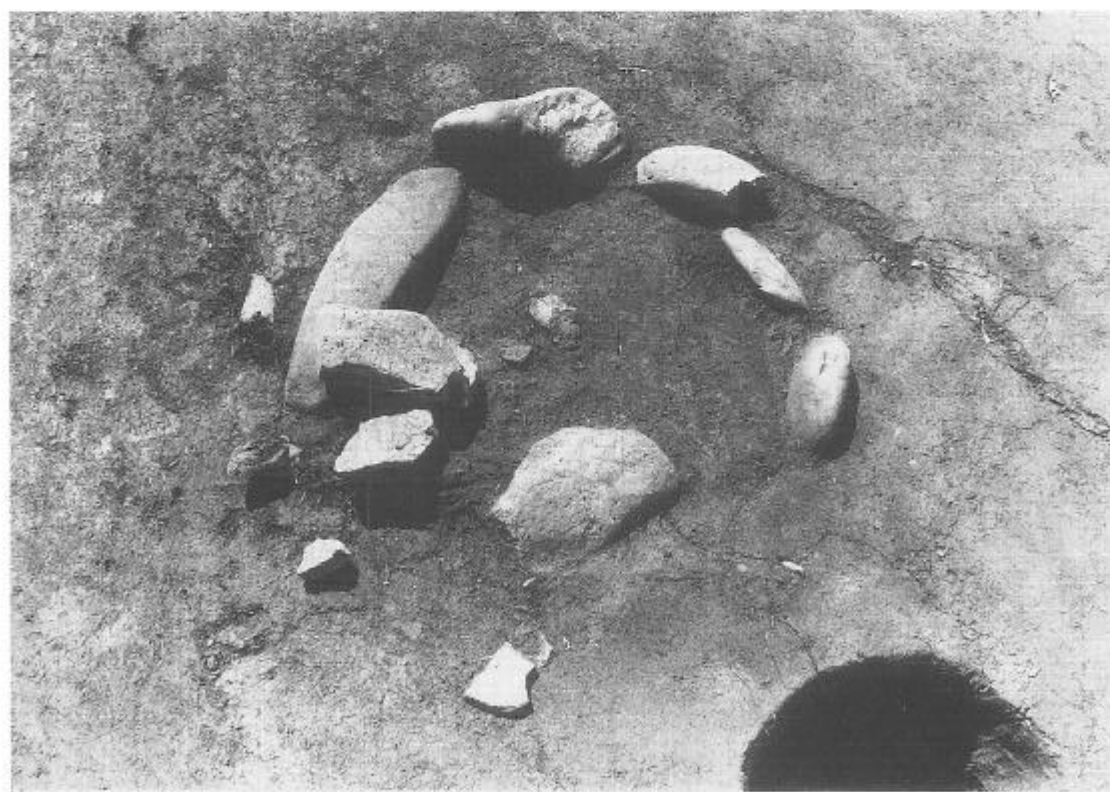
1 調査区近景(南西▷北東)



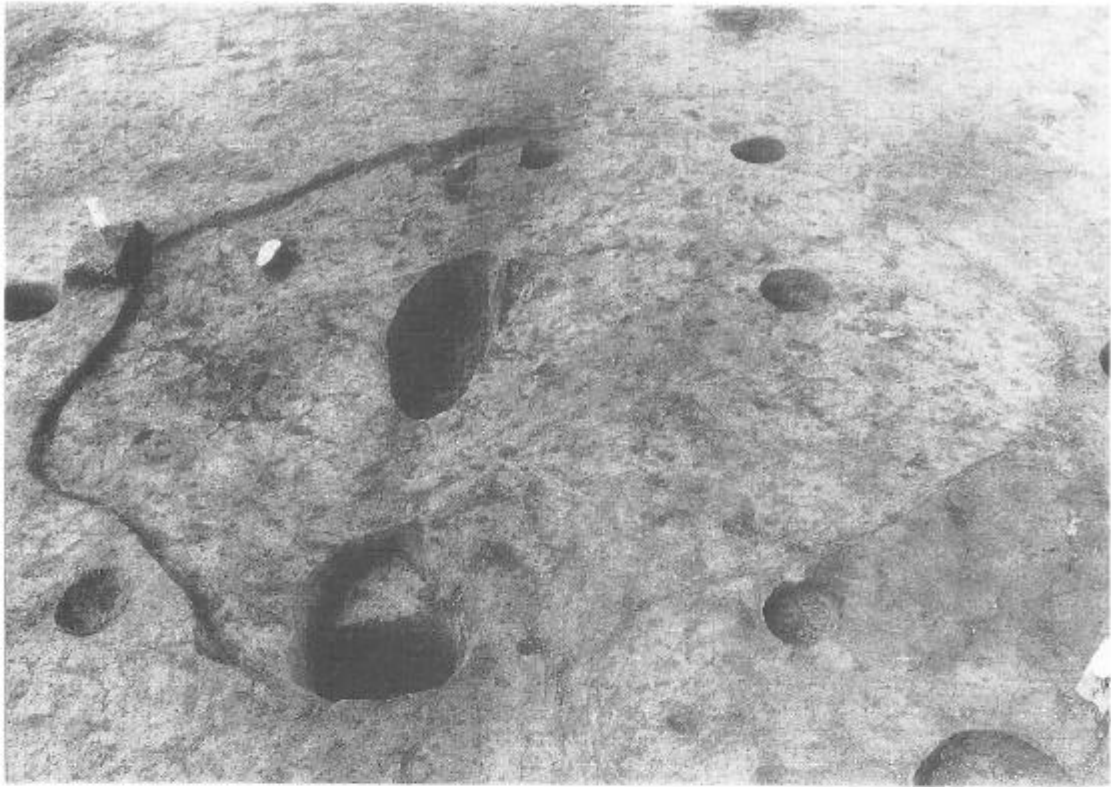
2 S I 201 竪穴住居跡



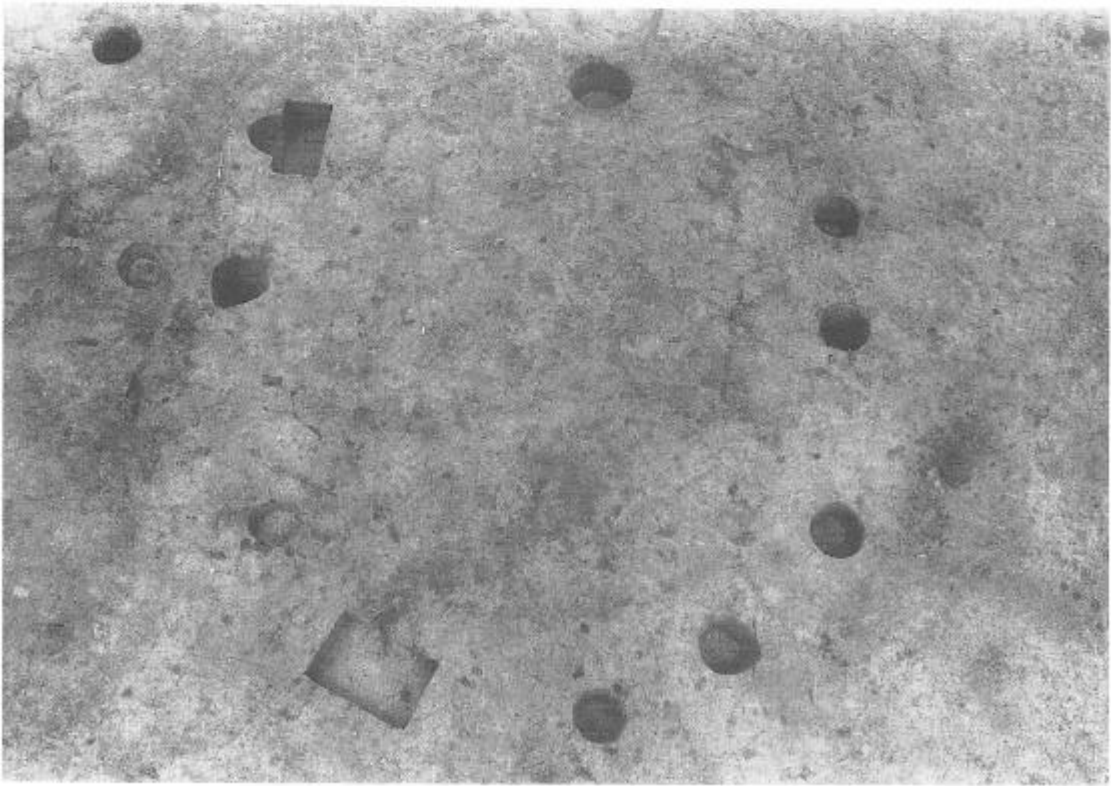
1 S I 202 豎穴住居跡



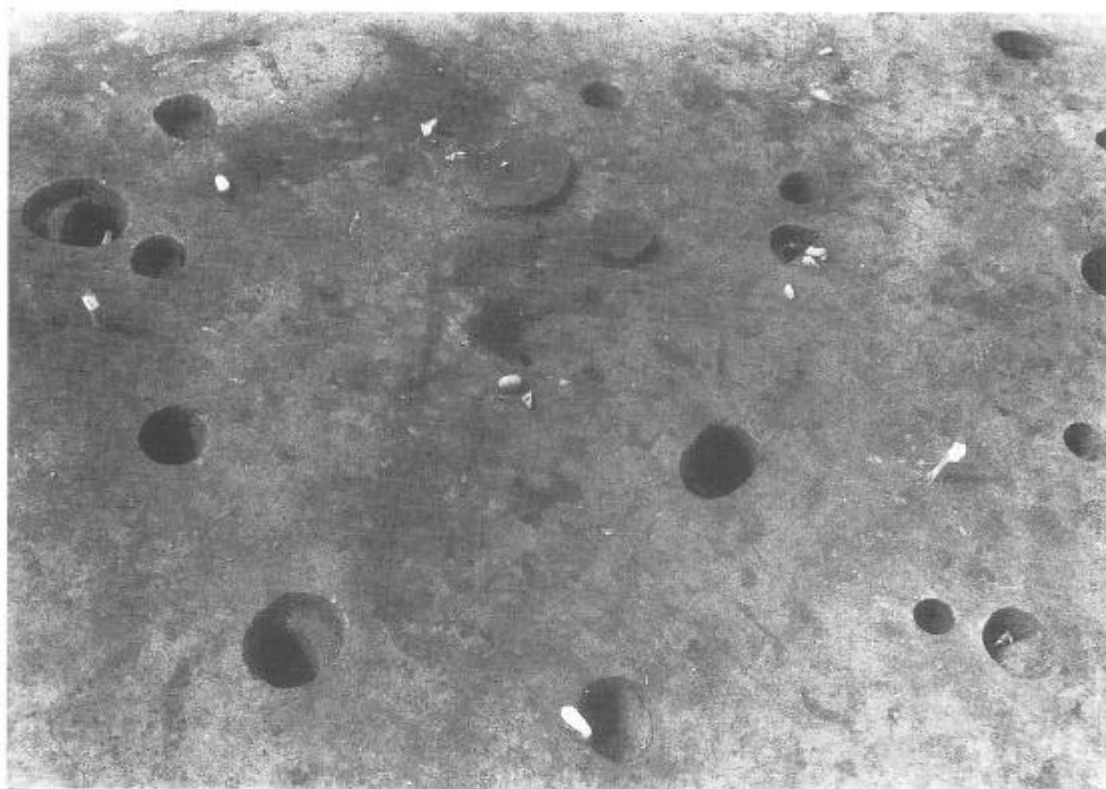
2 S I 202 豎穴住居跡石圍炉



1 S I 206 竪穴住居跡



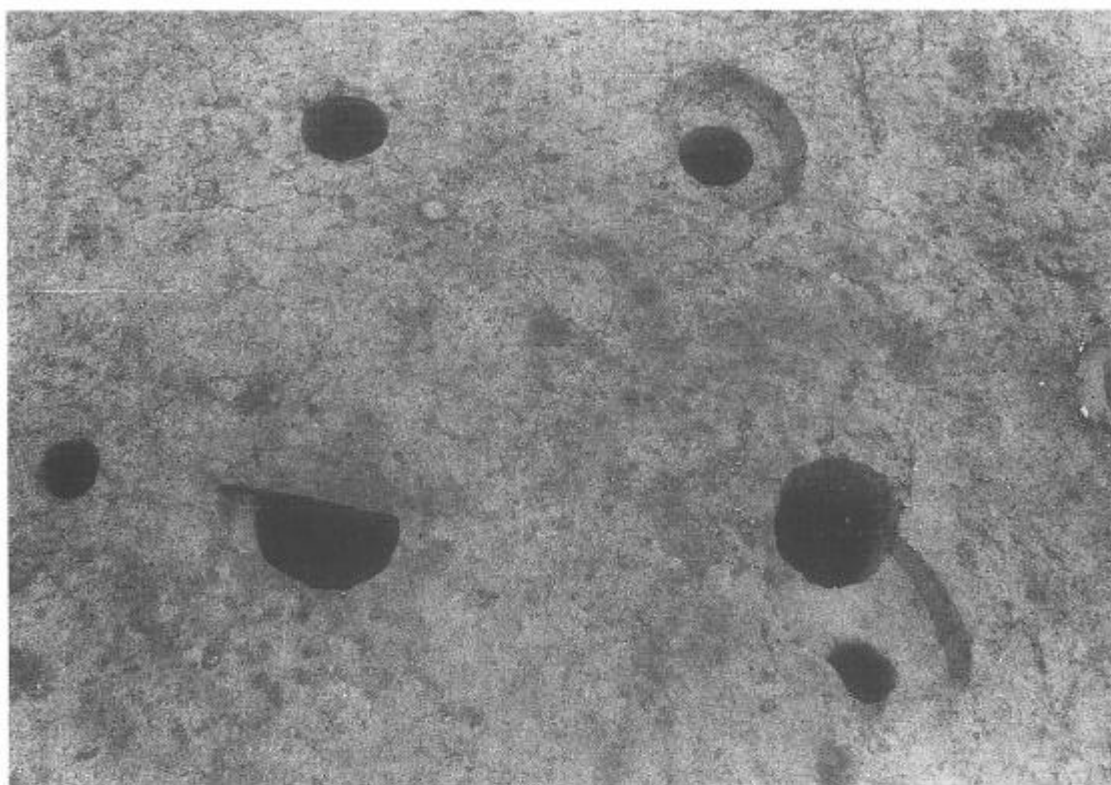
2 S I 216 竪穴住居跡



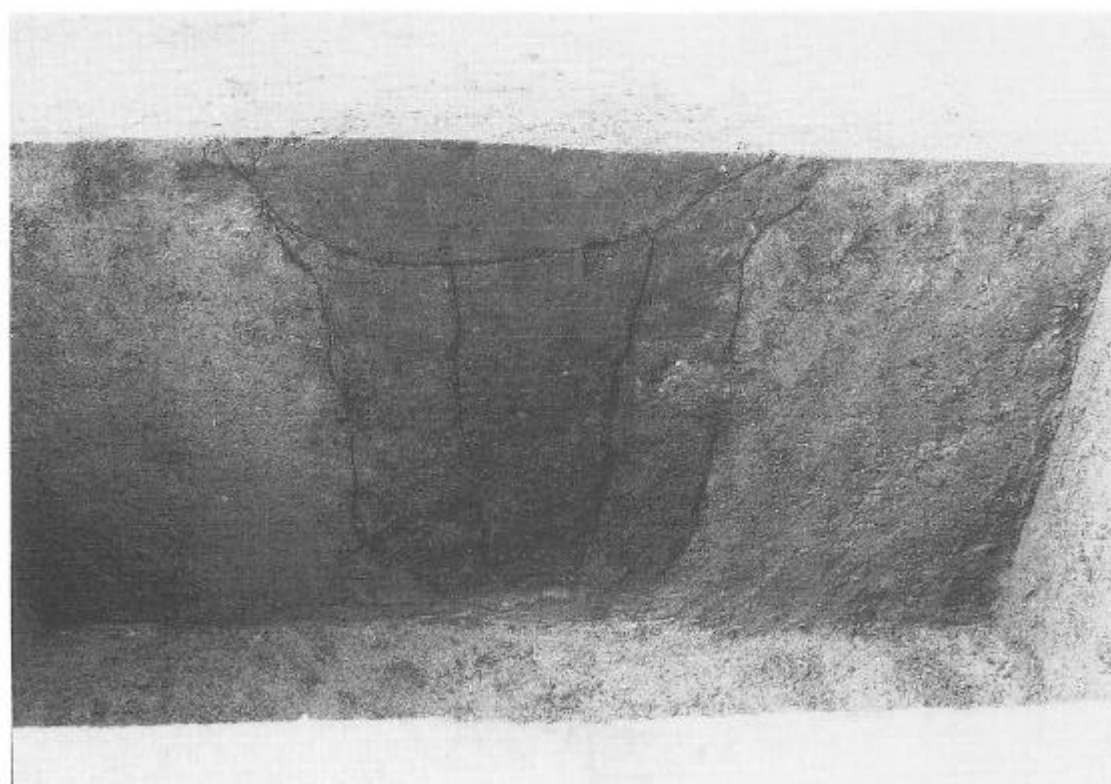
1 S I 225 竪穴住居跡



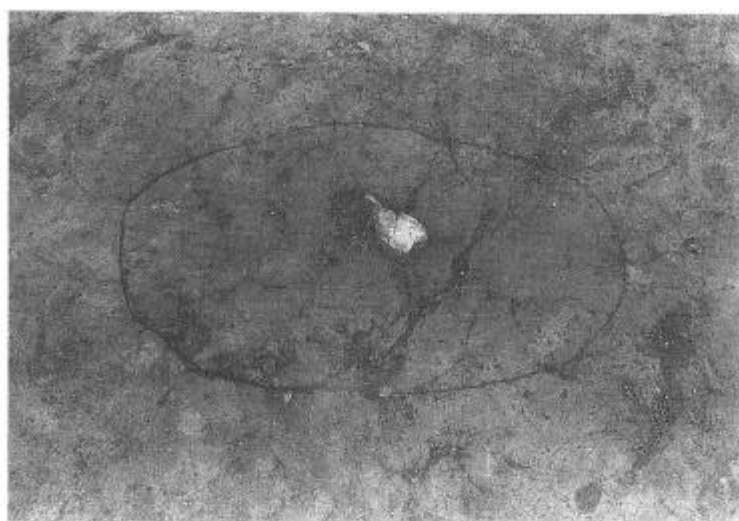
2 S B 241 掘立柱建物跡



1 SB242掘立柱建物跡



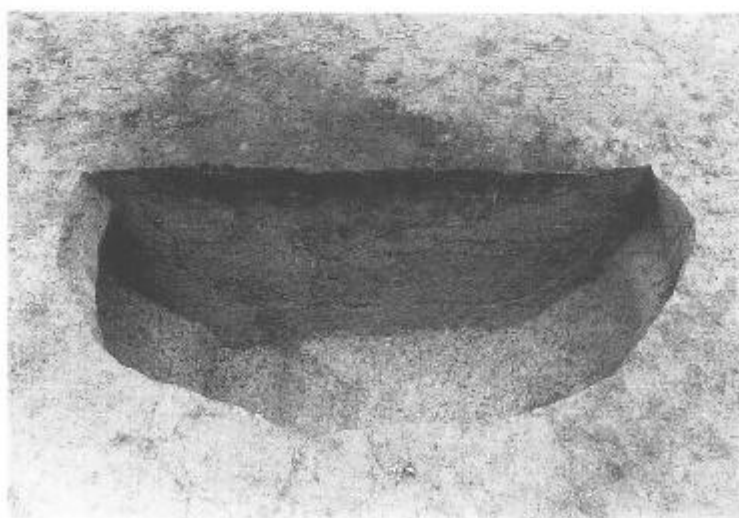
2 SB242掘立柱建物跡柱穴土層断面



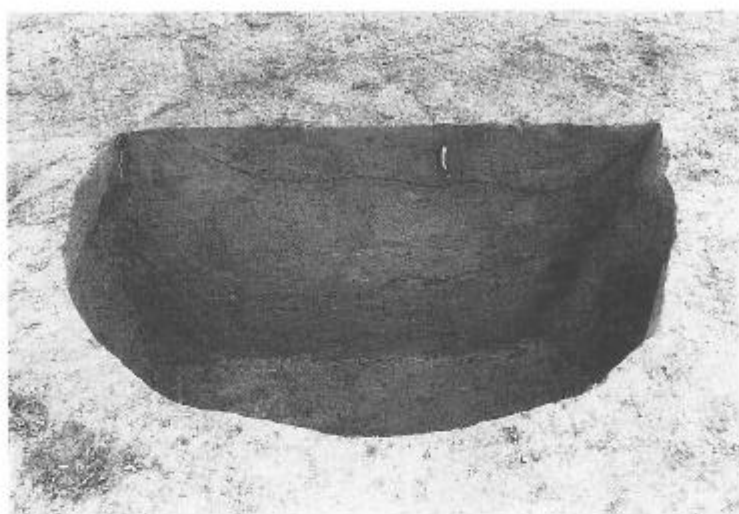
1 SK205土坑



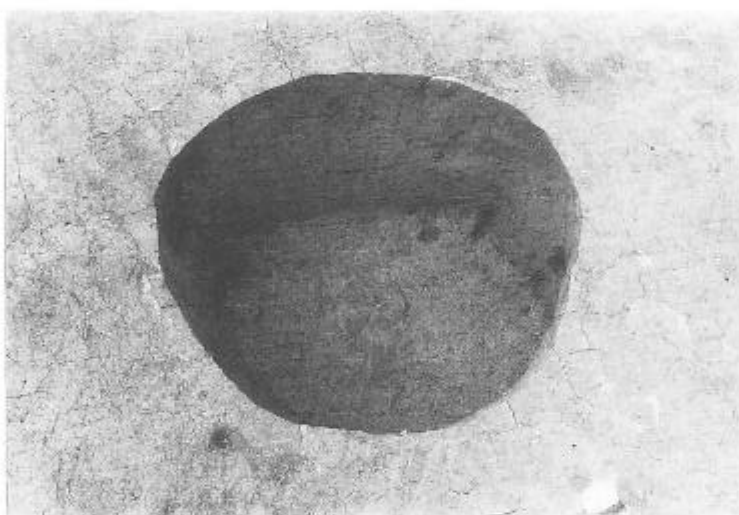
2 SK205土坑遺物出土状況



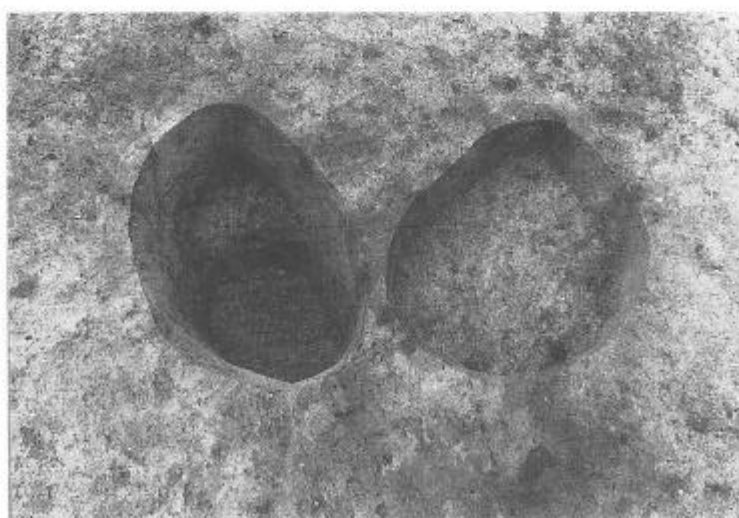
3 SK207土坑土層断面



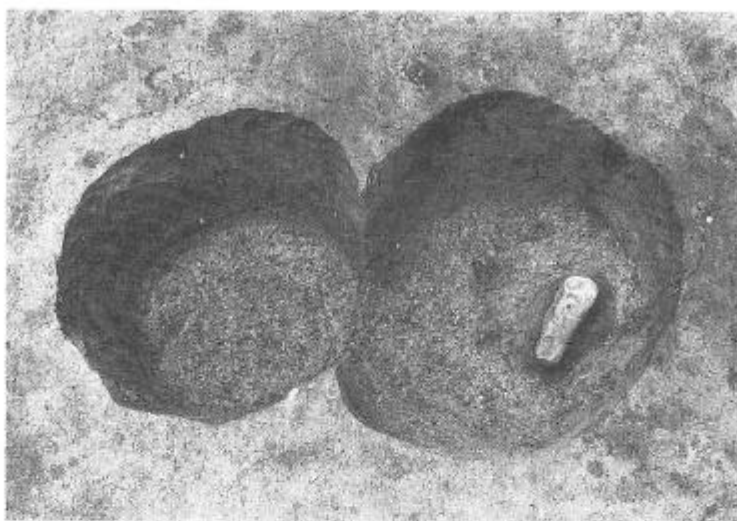
1 SK209土坑土層断面



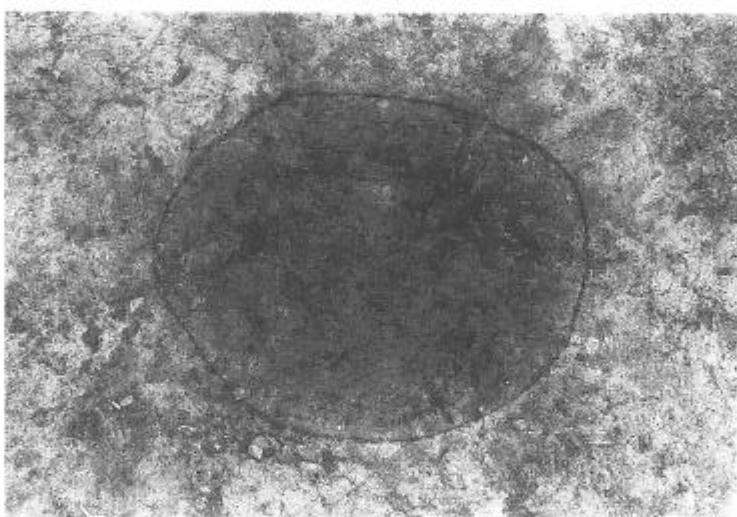
2 SK209土坑



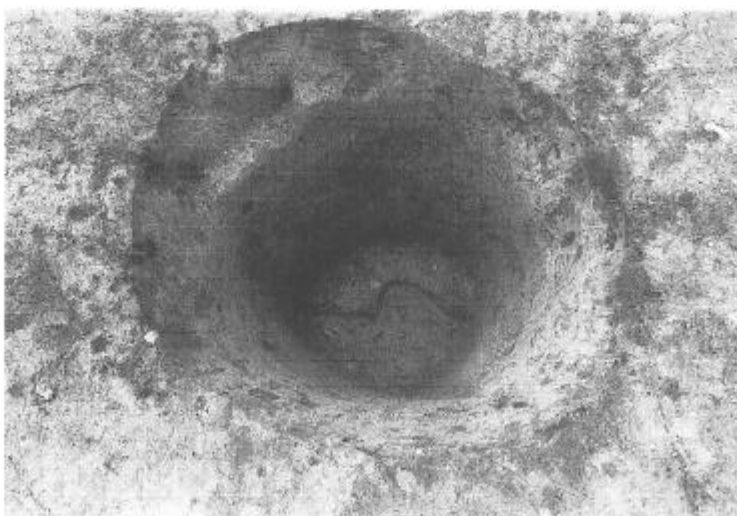
3 SK210・211土坑



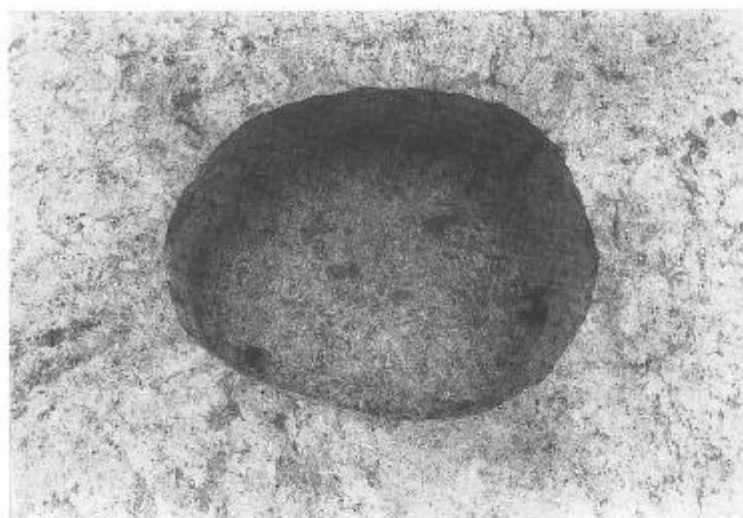
1 S K212・213土坑



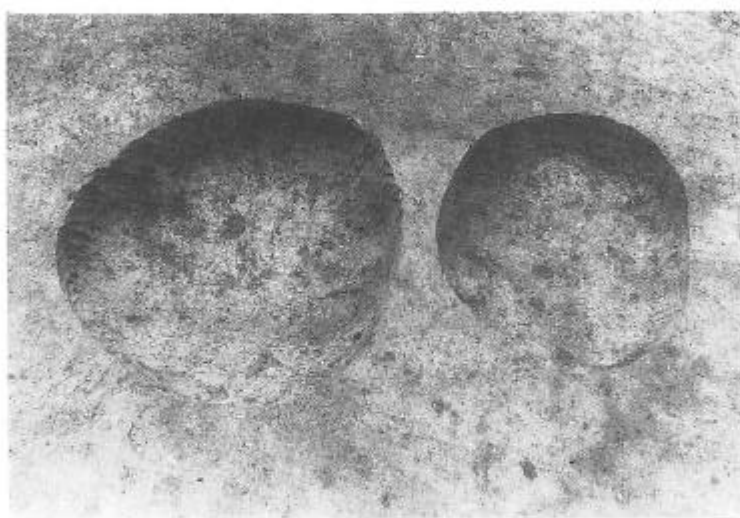
2 S K214土坑確認状況



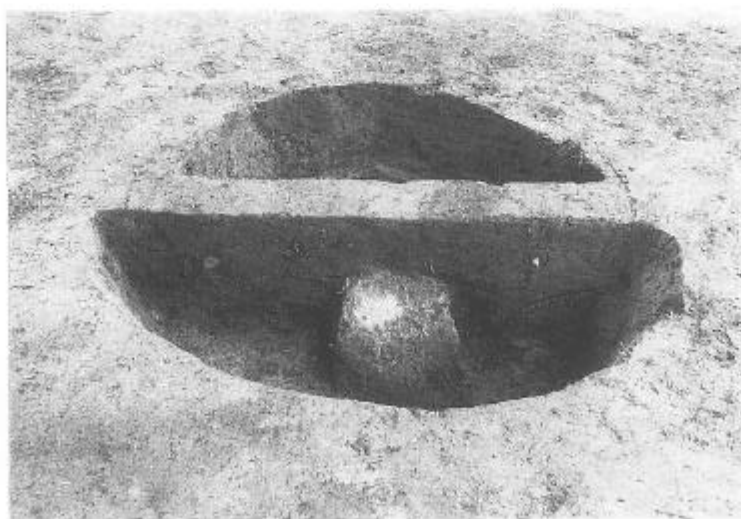
3 S K214土坑



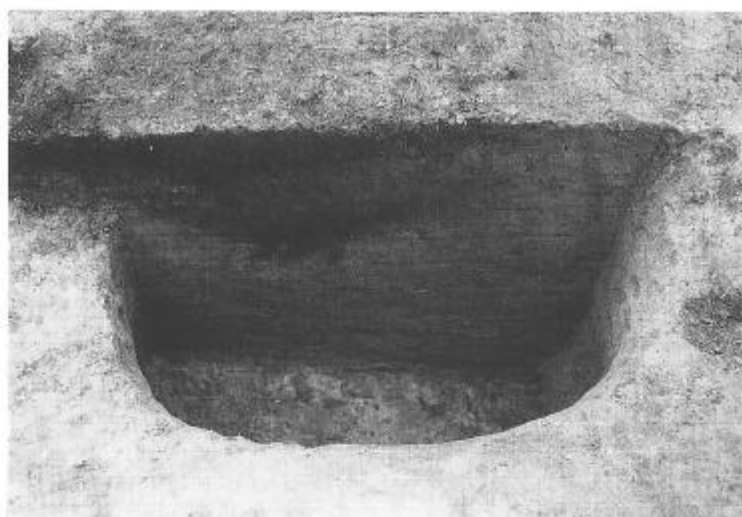
1 SK223土坑



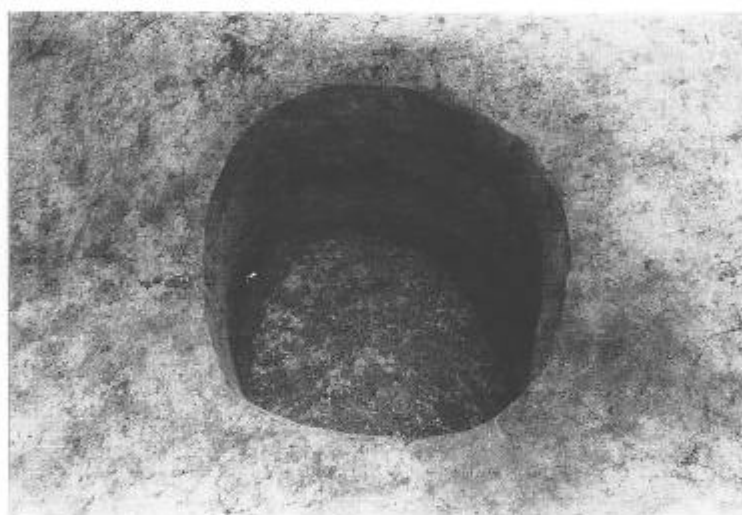
2 SK224・227土坑



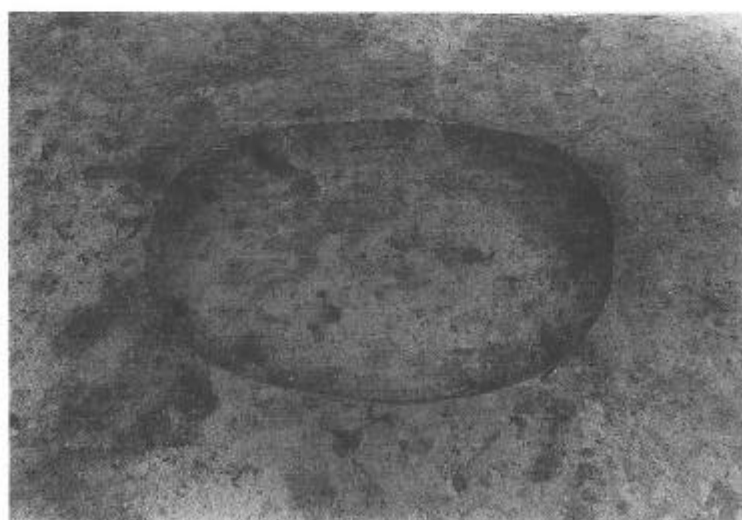
3 SK232土坑



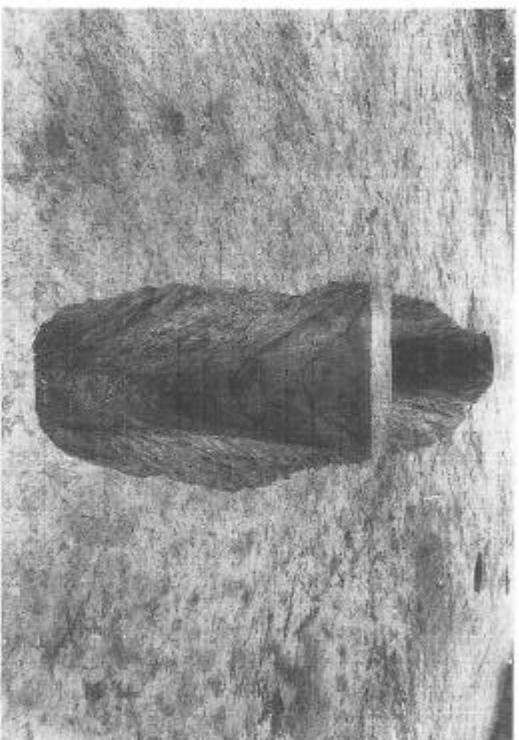
1 SK233土坑土層断面



2 SK233土坑



3 SK235土坑



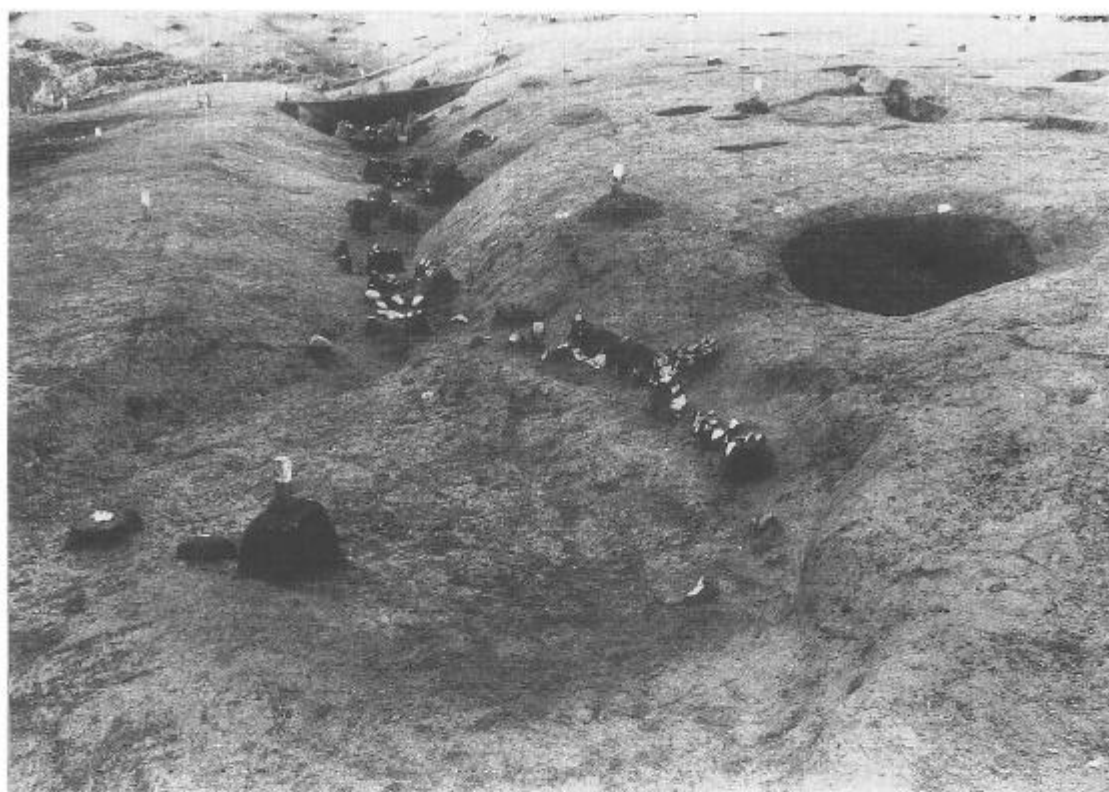
1 S K T 243陥L穴遺構



2 S R 203土器埋設遺構確認状況



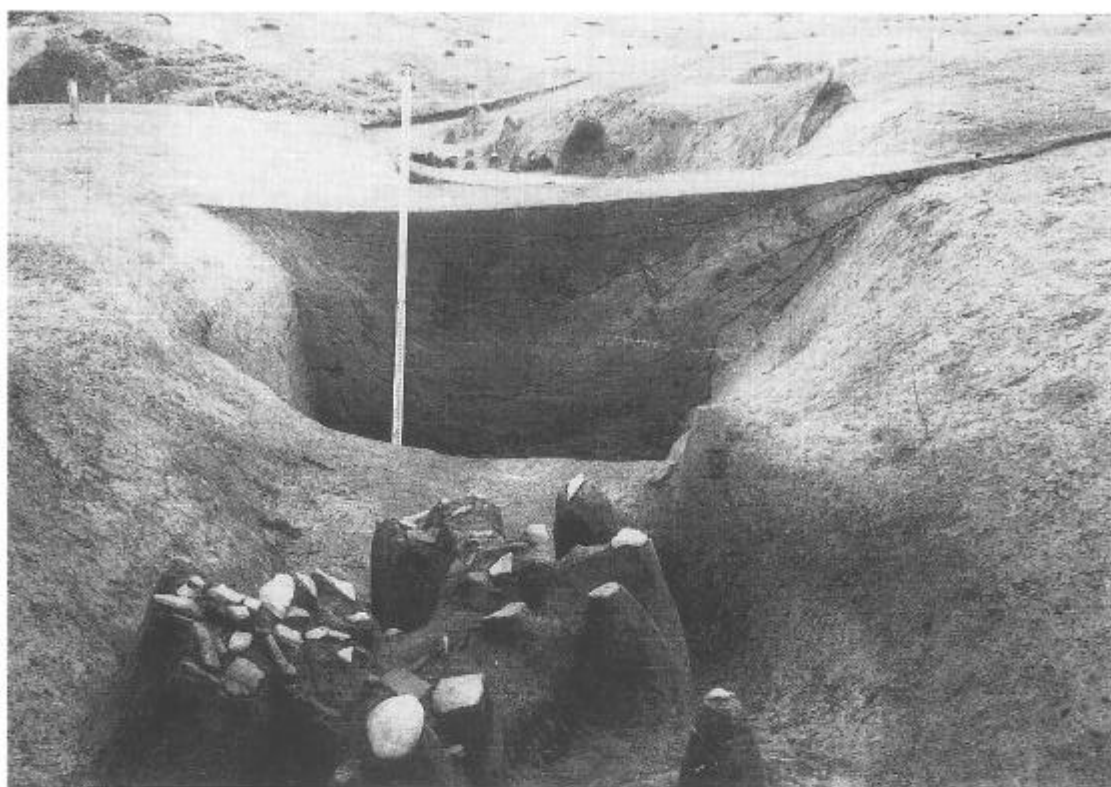
3 S R 203土器埋設遺構



1 S T 221遺物出土状況



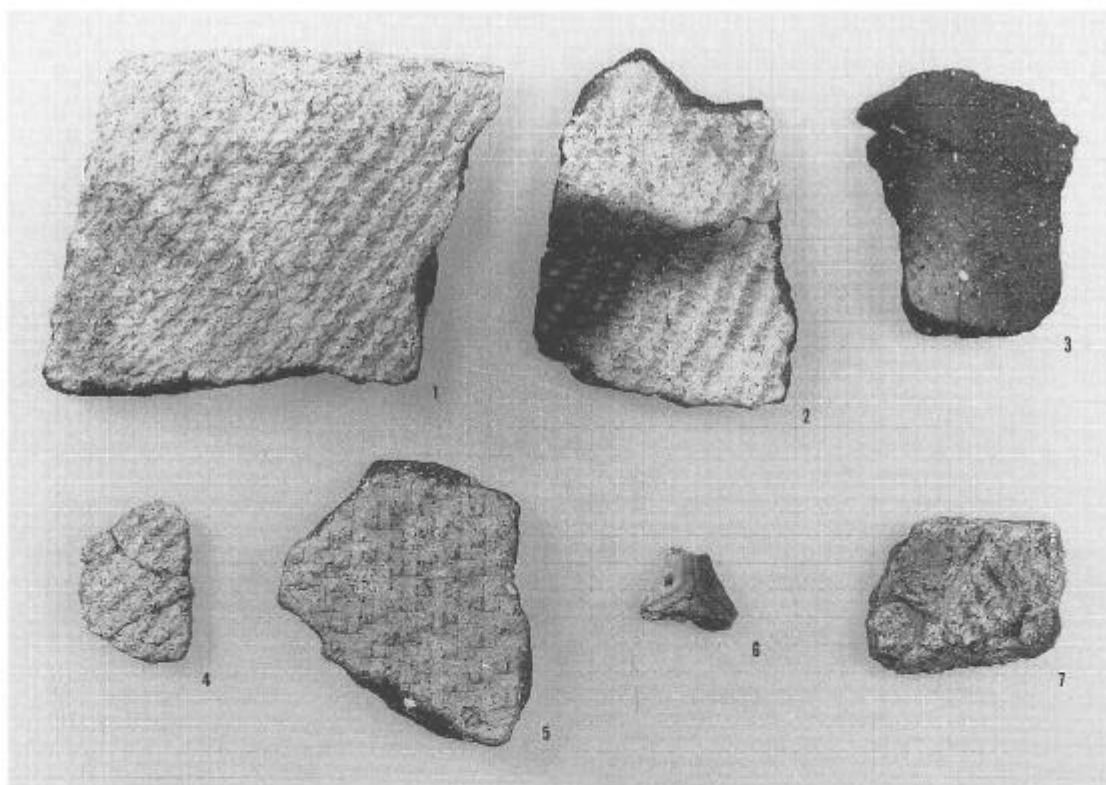
2 S T 221遺物出土状況



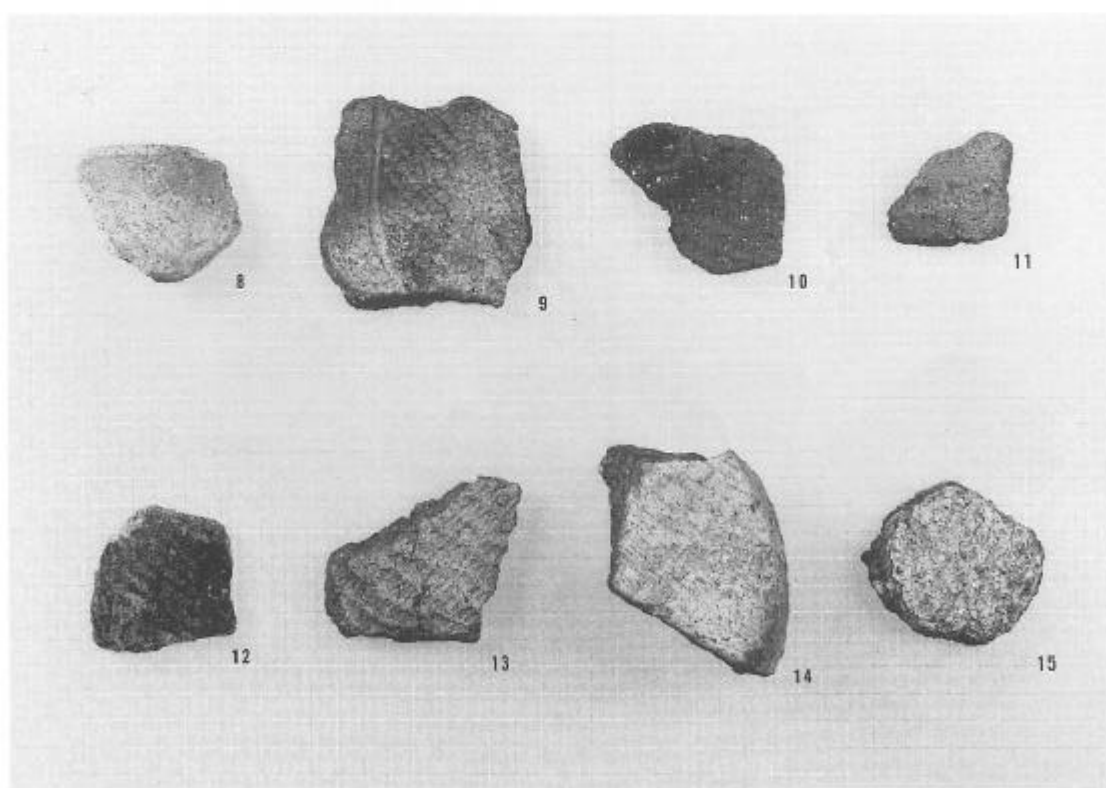
1 ST221遺物出土状況



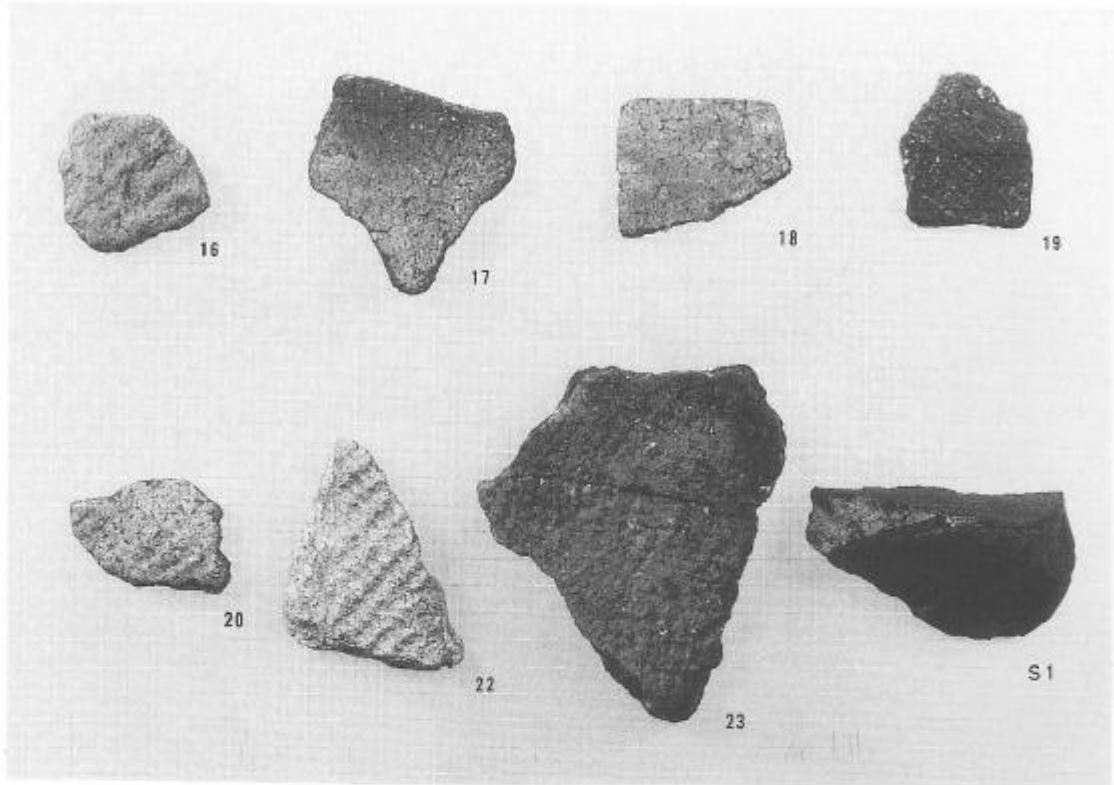
2 ST221土層断面



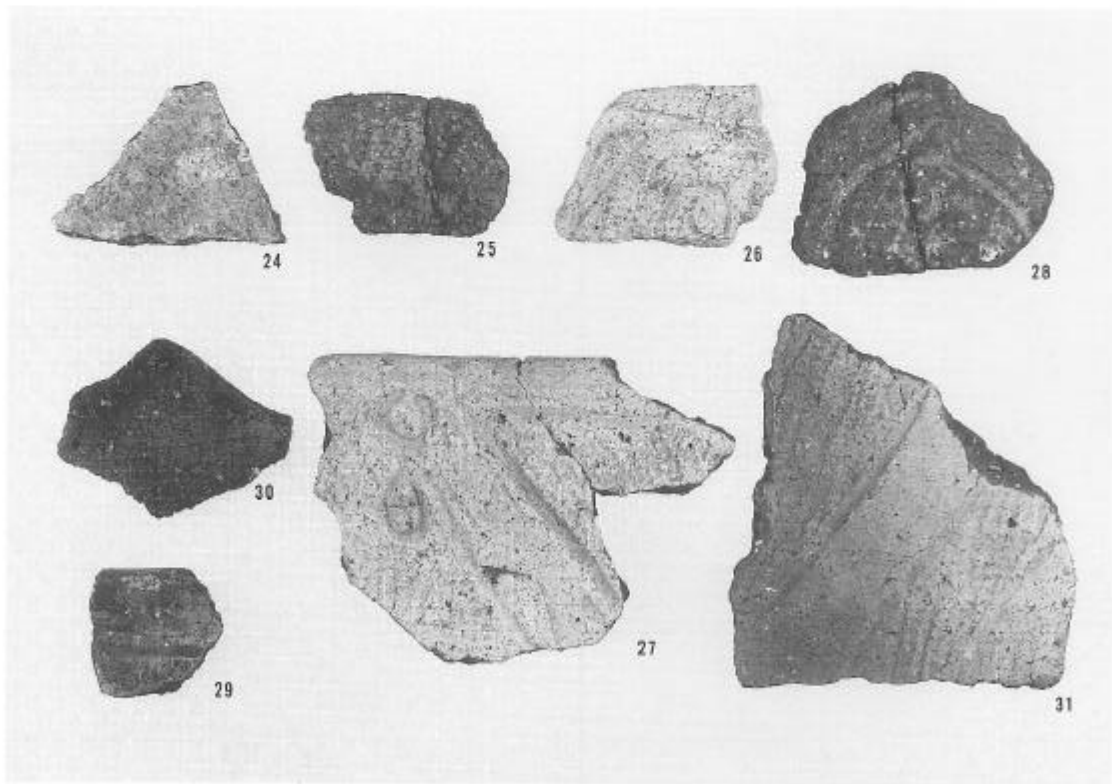
1 遺構内出土遺物(1)



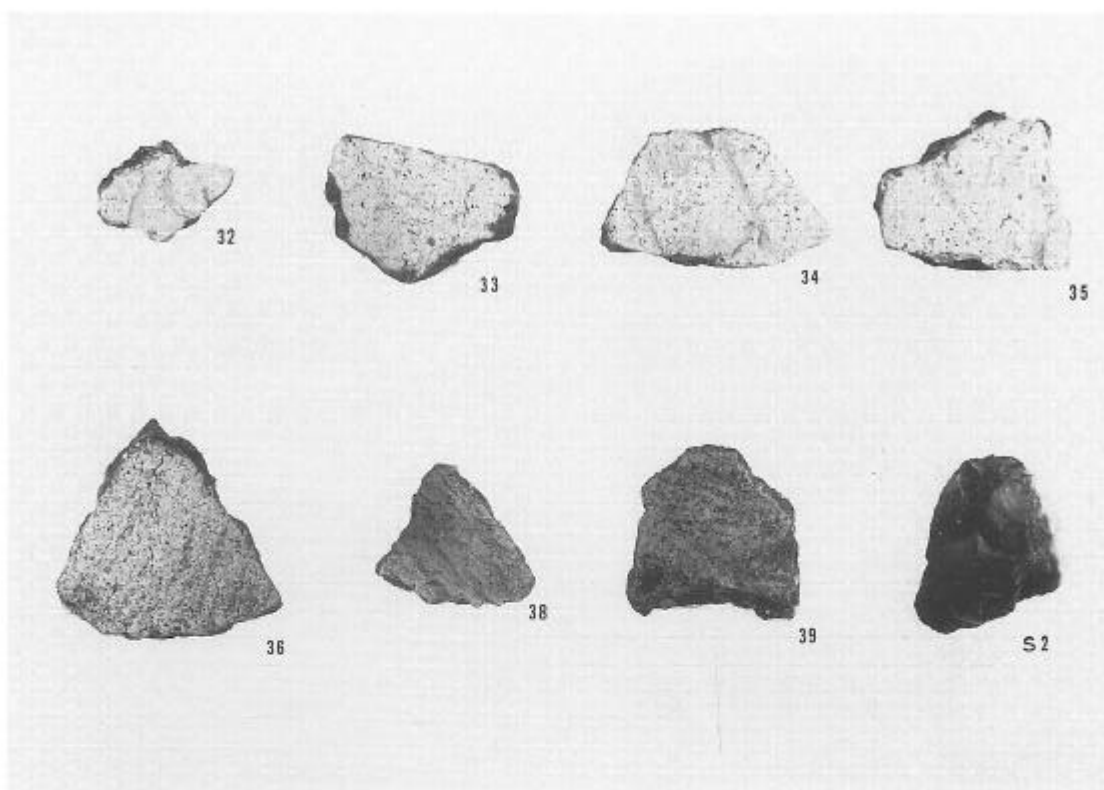
2 遺構内出土遺物(2)



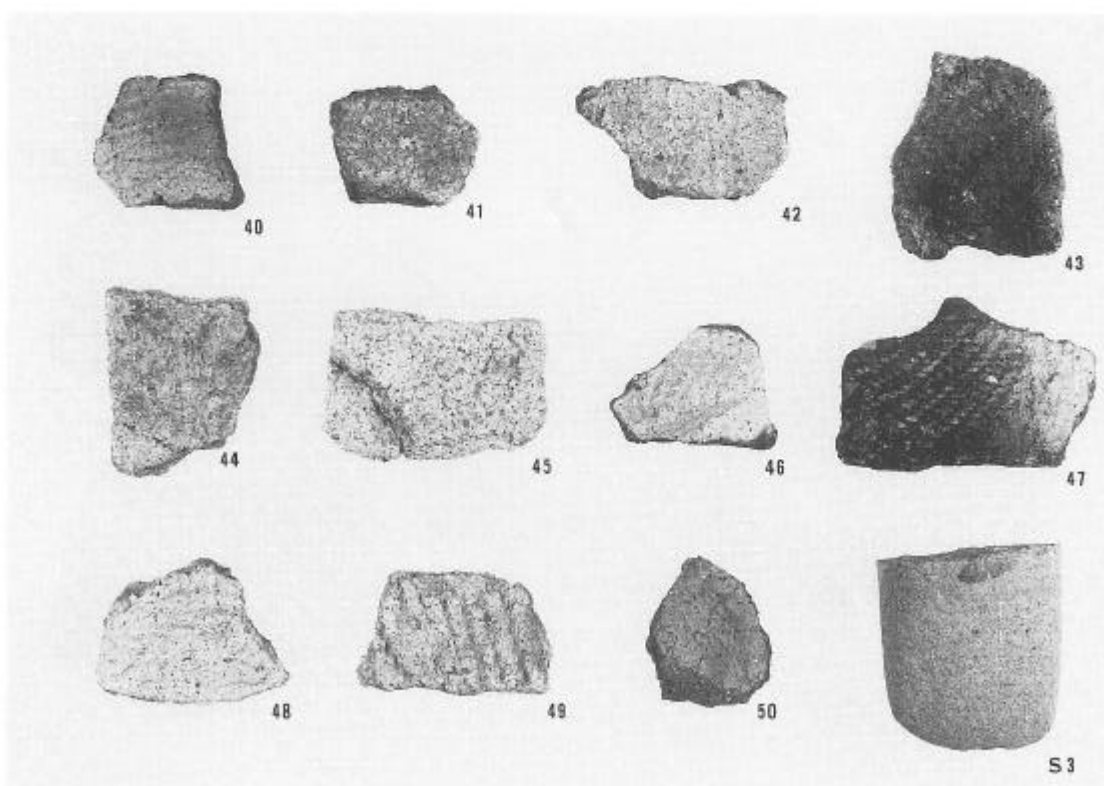
1 遺構内出土遺物(3)



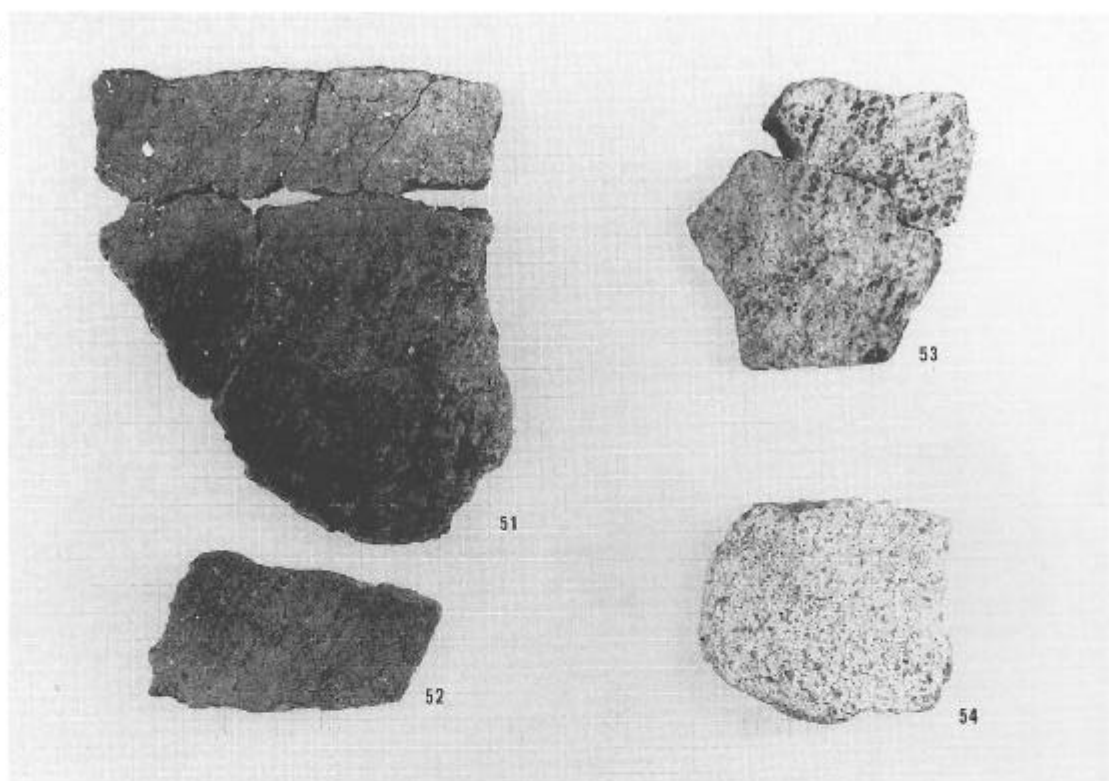
2 遺構内出土遺物(4)



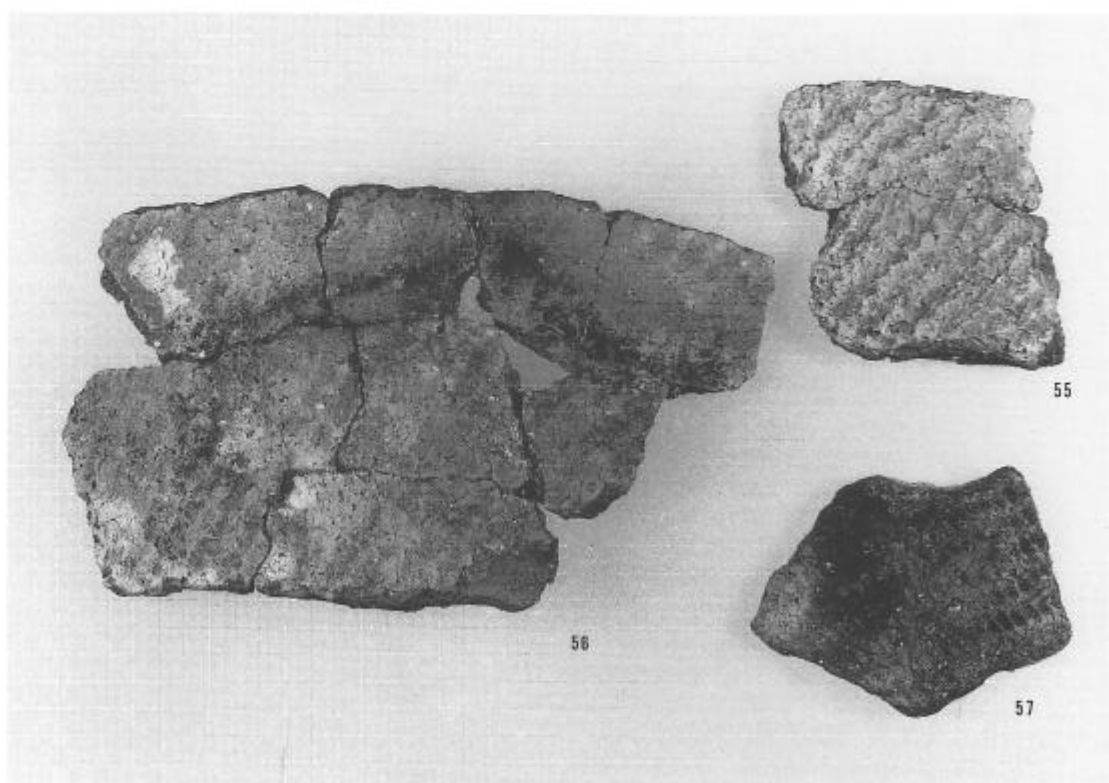
1 遺構内出土遺物(5)



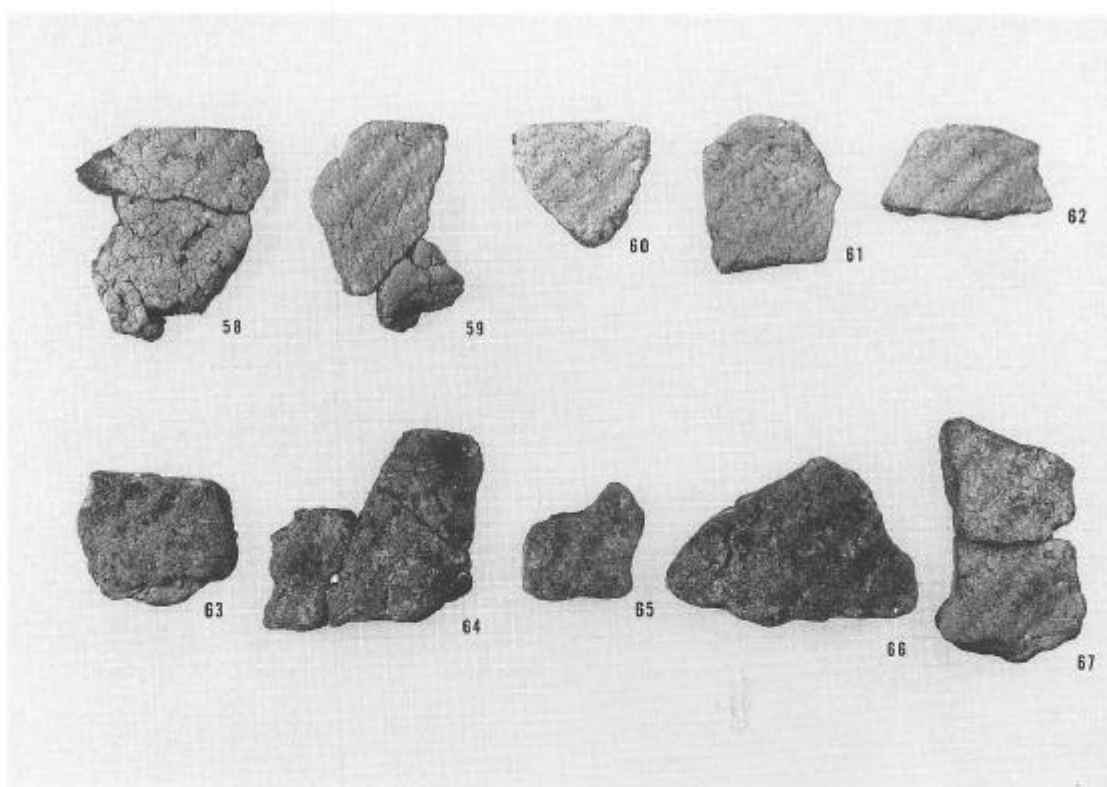
2 遺構内出土遺物(6)



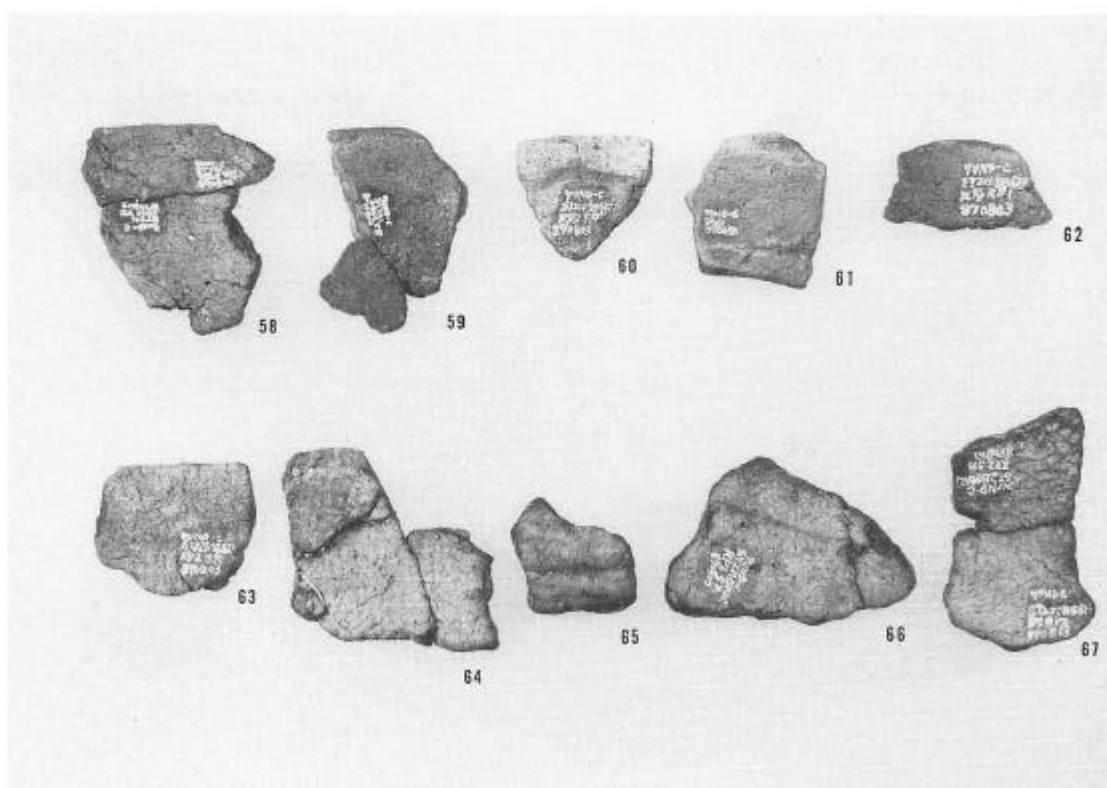
1 遺構内出土遺物(7)



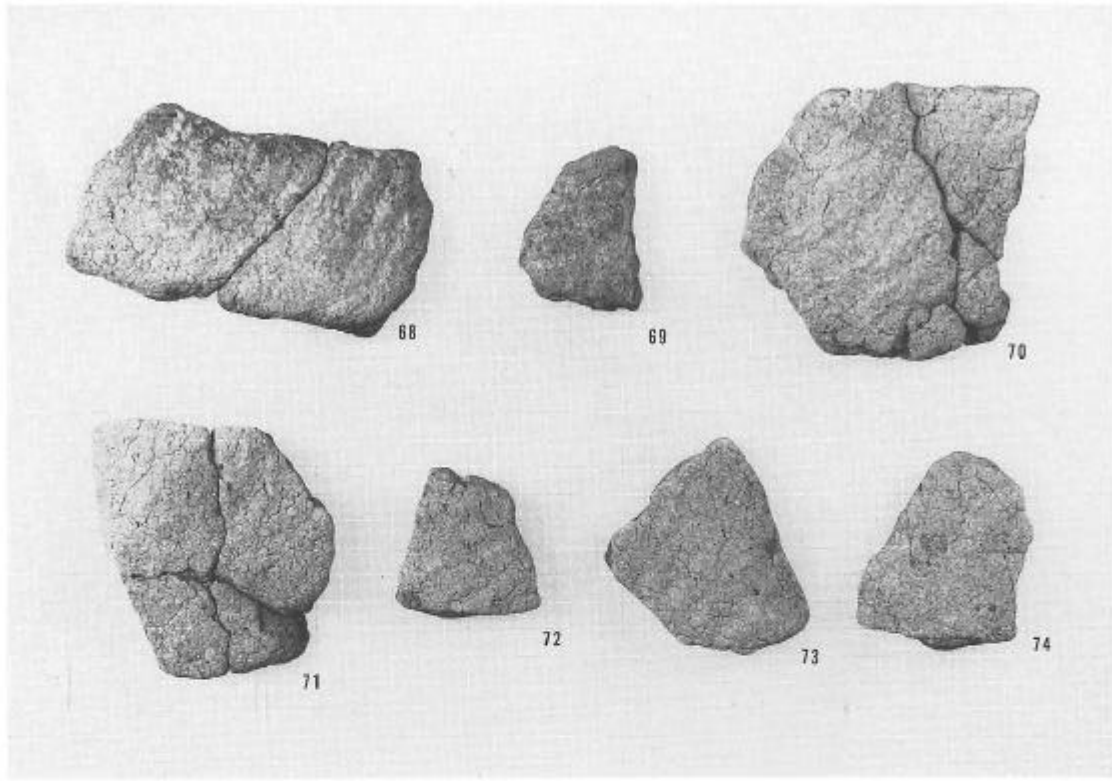
2 遺構内出土遺物(8)



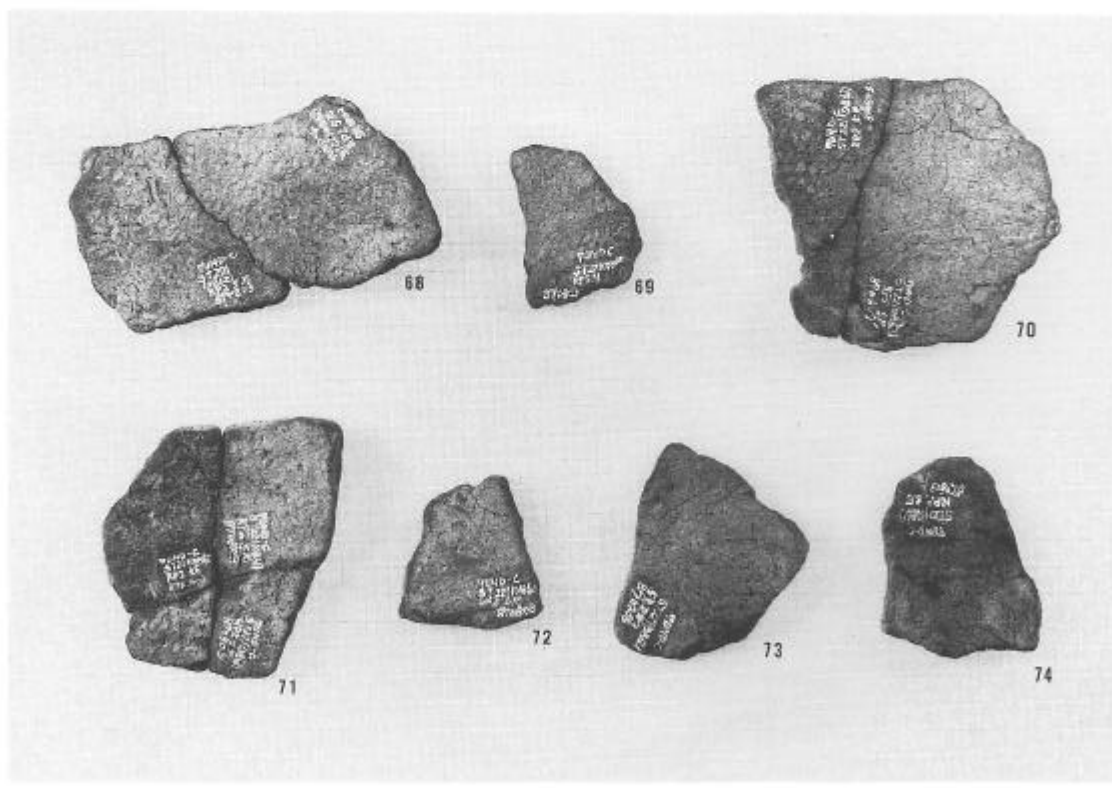
1 遺構外出土遺物(1) 外面



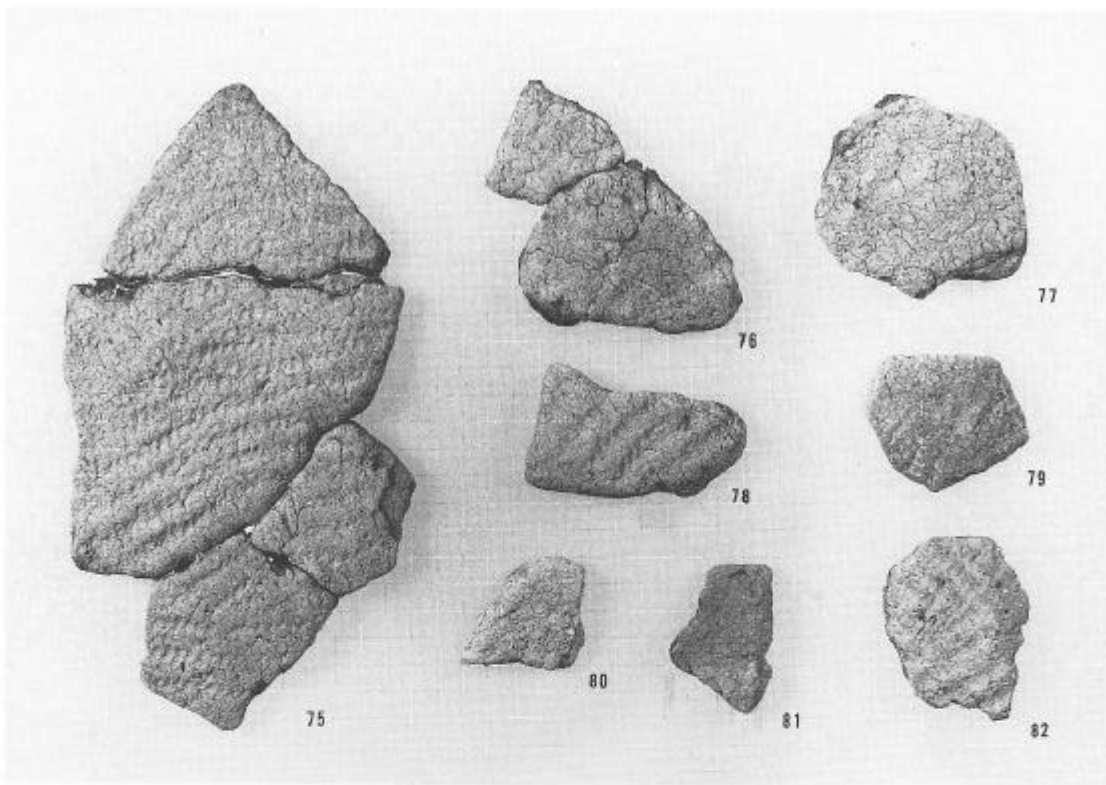
2 同上 内面



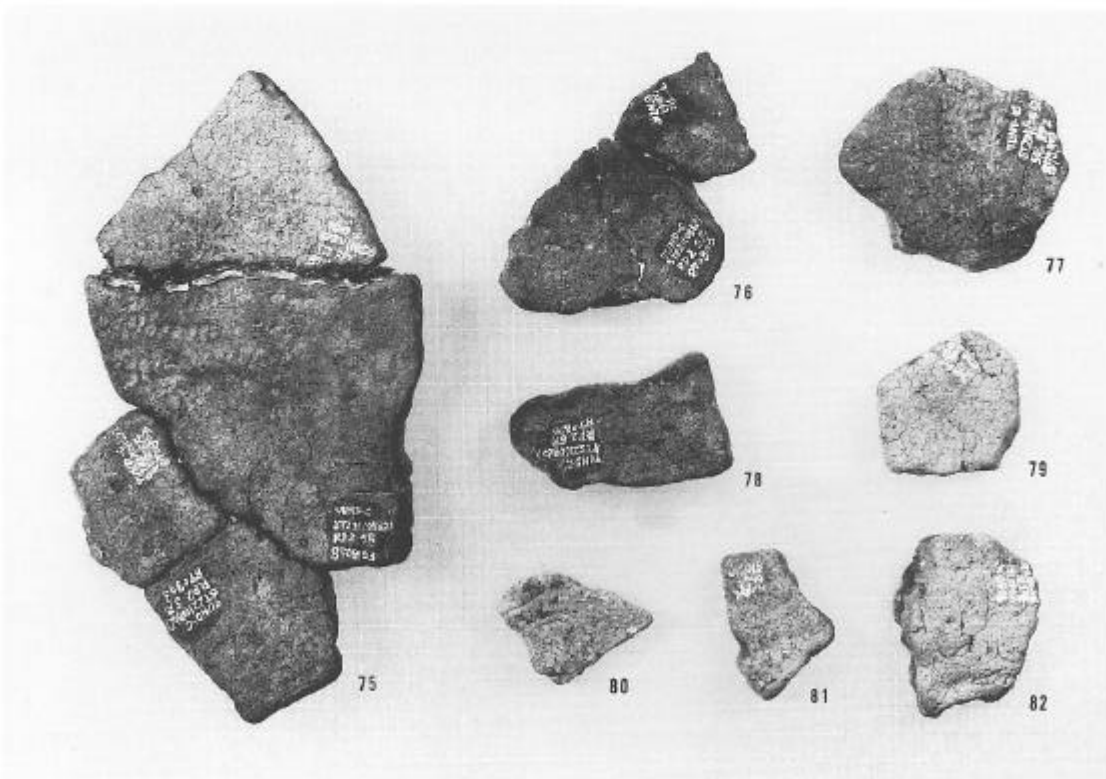
1 遺構外出土遺物(2) 外面



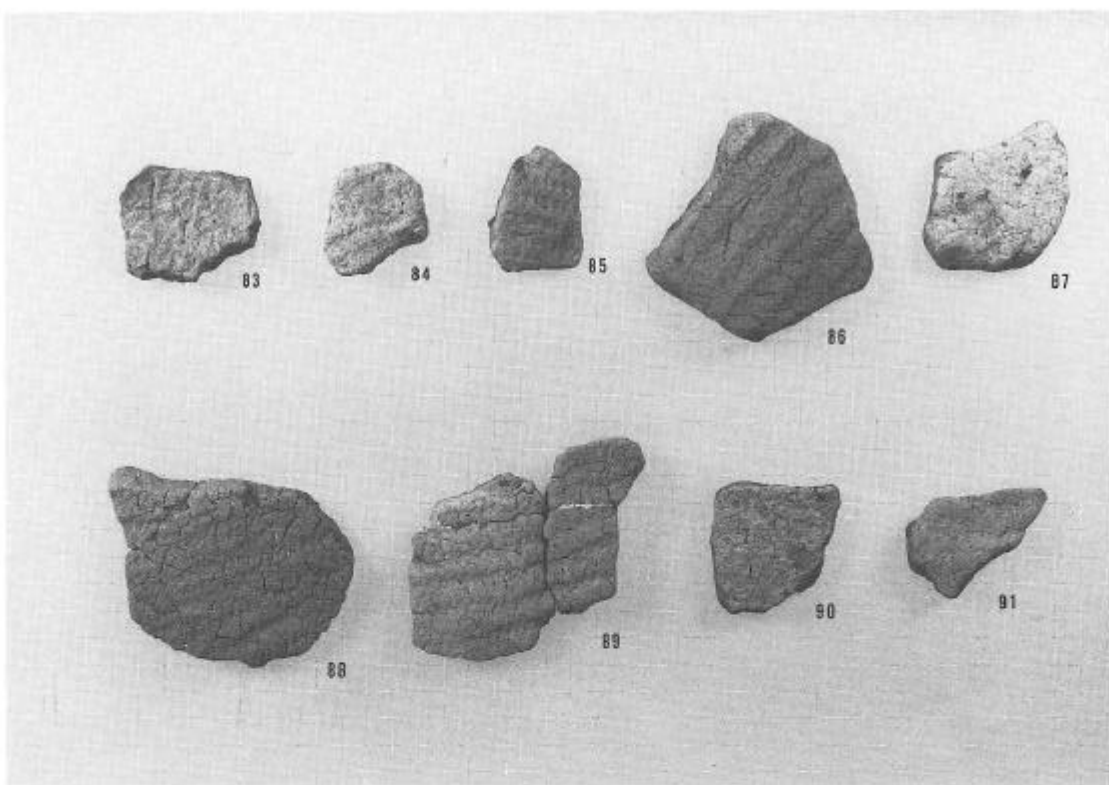
2 同上 内面



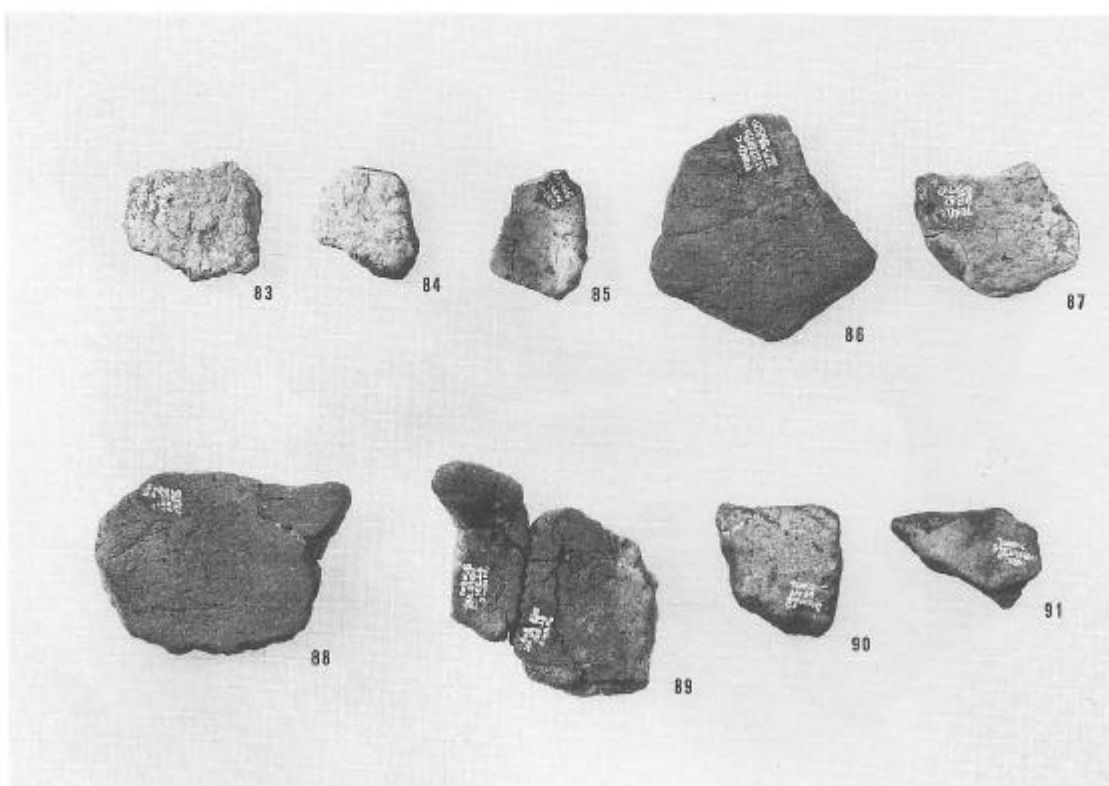
1 遺構外出土遺物(3)外面



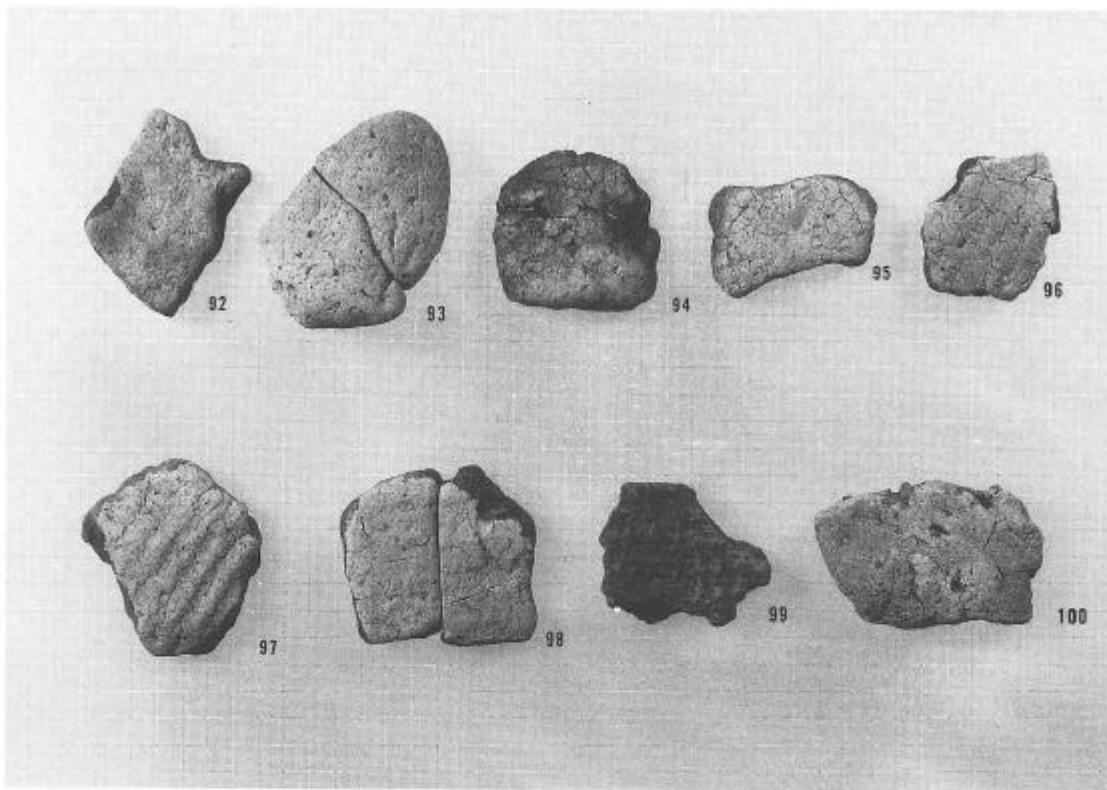
2 同上 内面



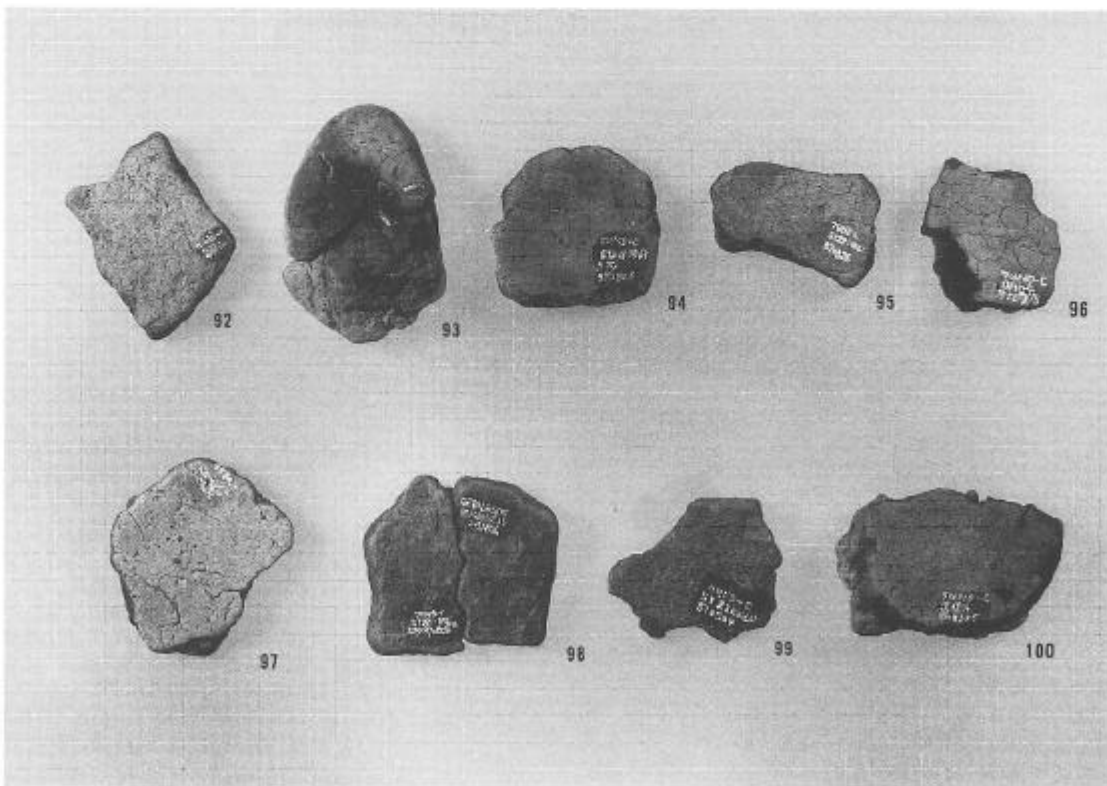
1 遺構外出土遺物(4)外面



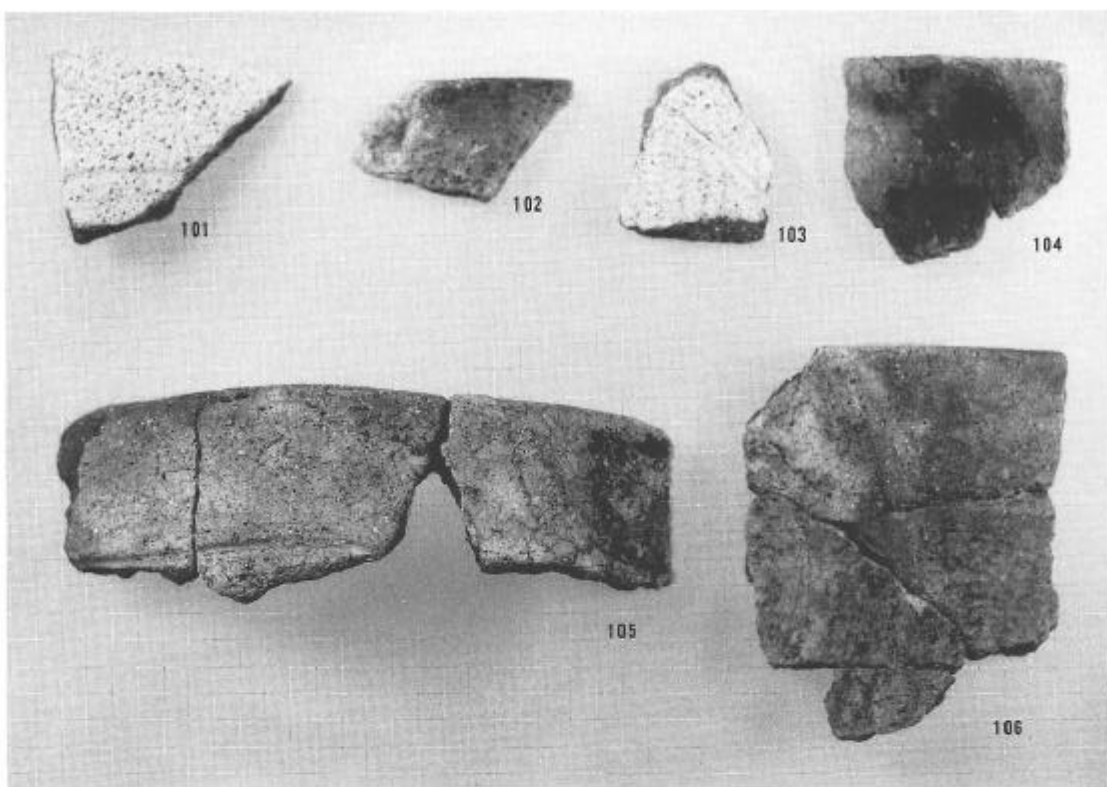
2 同上 内面



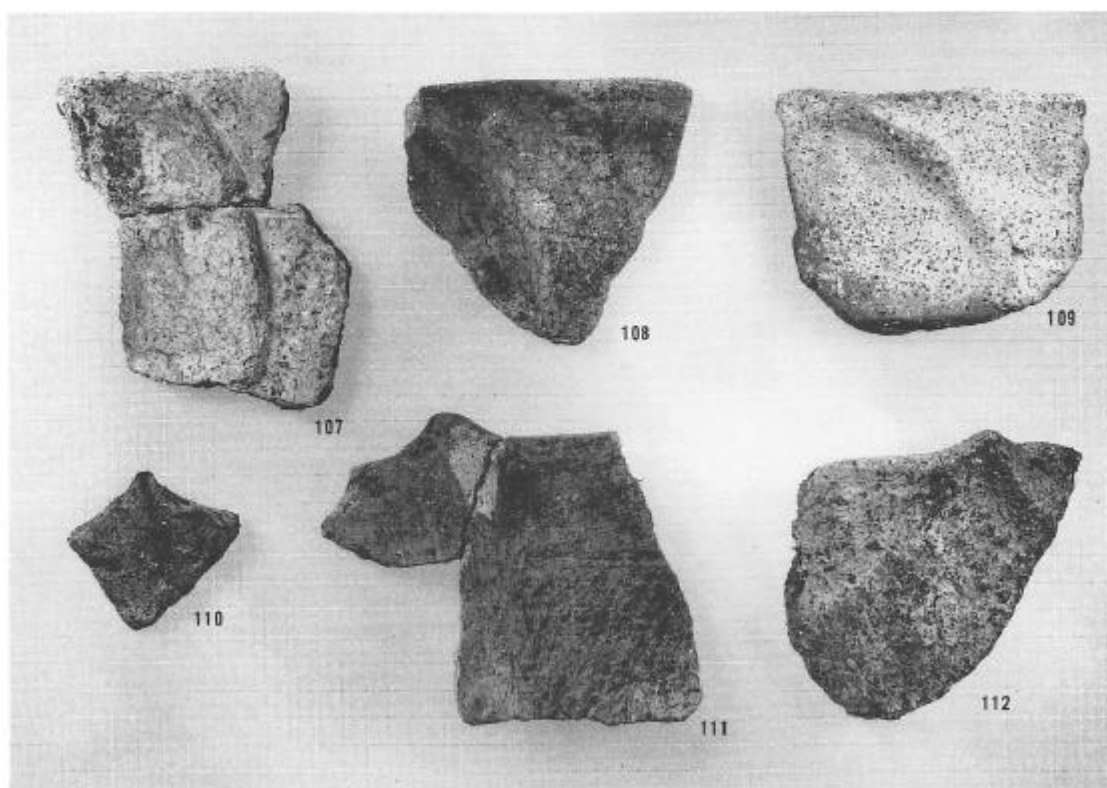
1 遺構外出土遺物(5) 外面



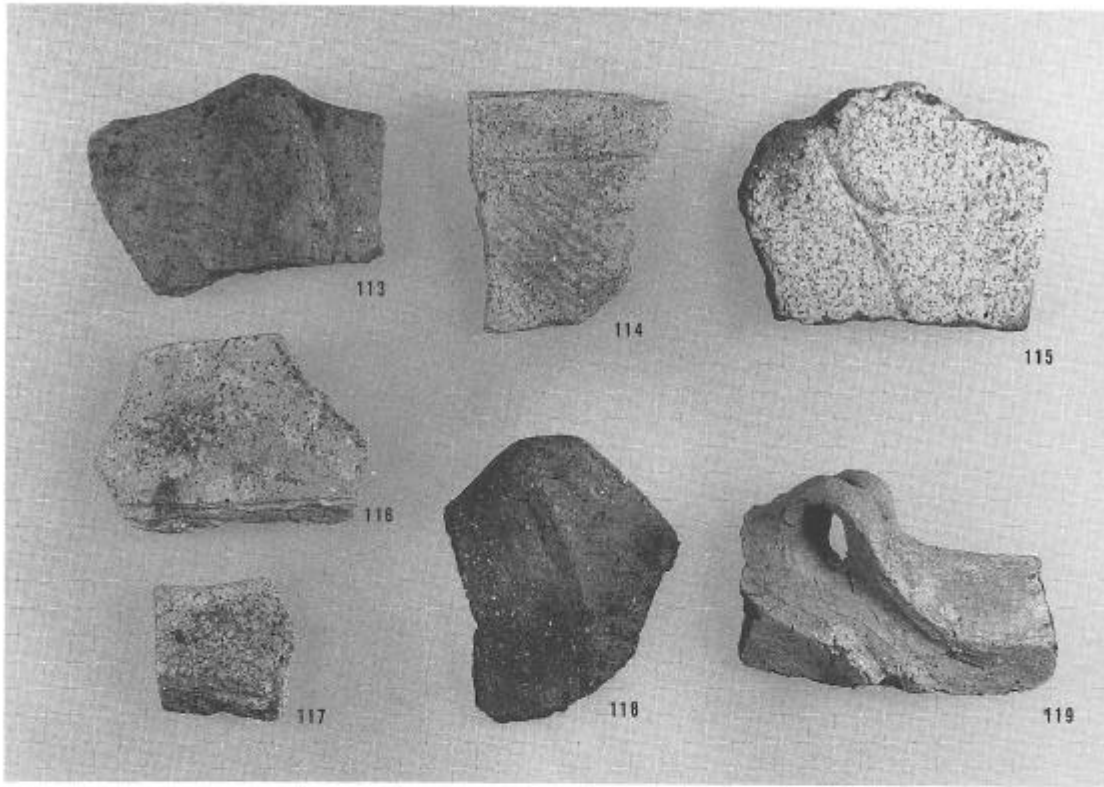
2 同上 内面



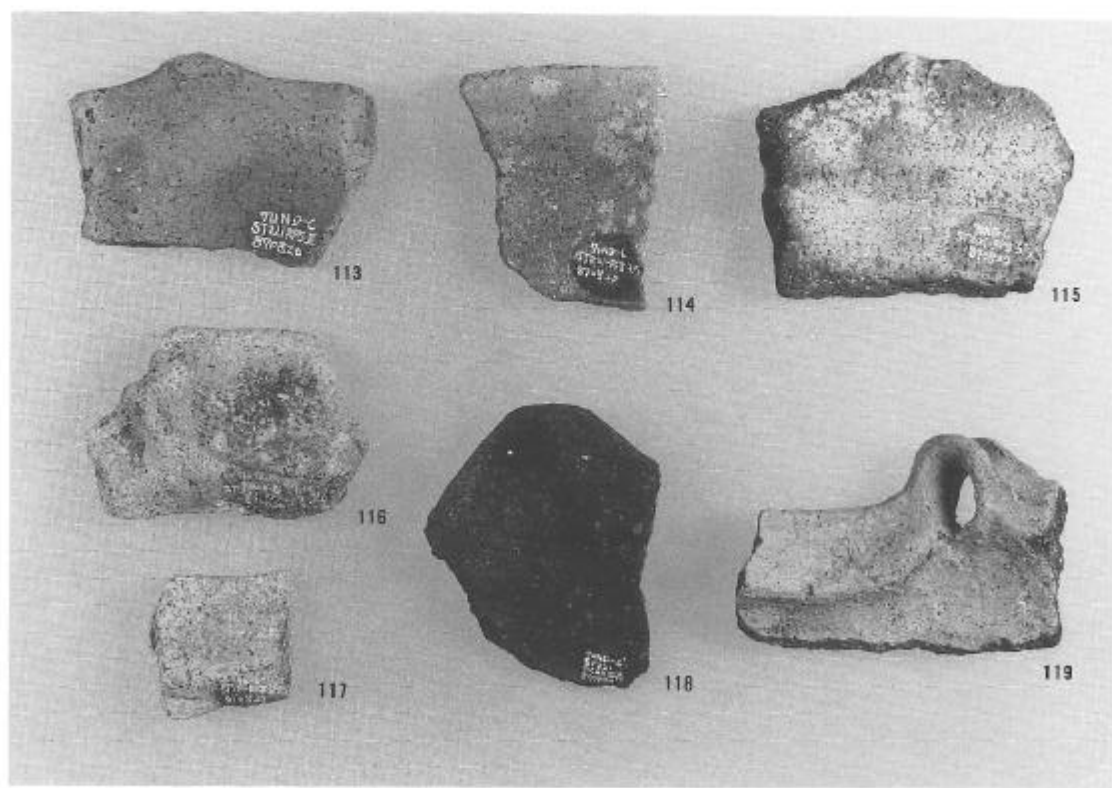
1 遺構外出土遺物(6)



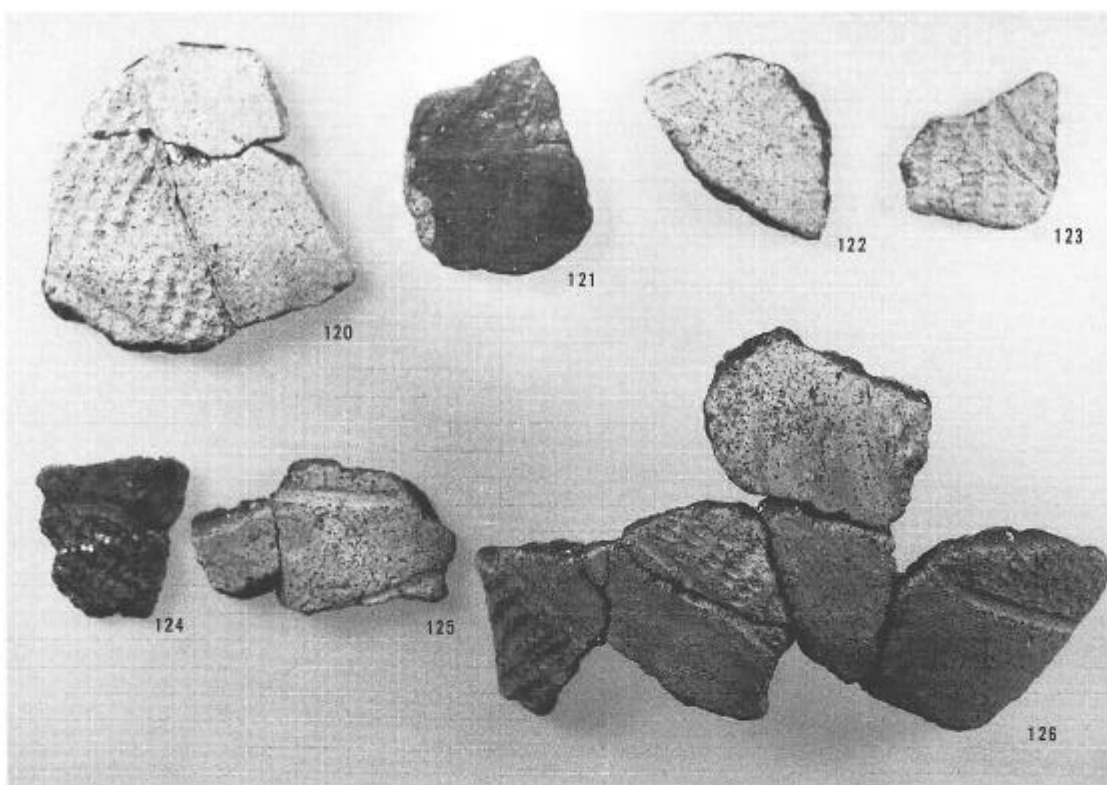
2 遺構外出土遺物(7)



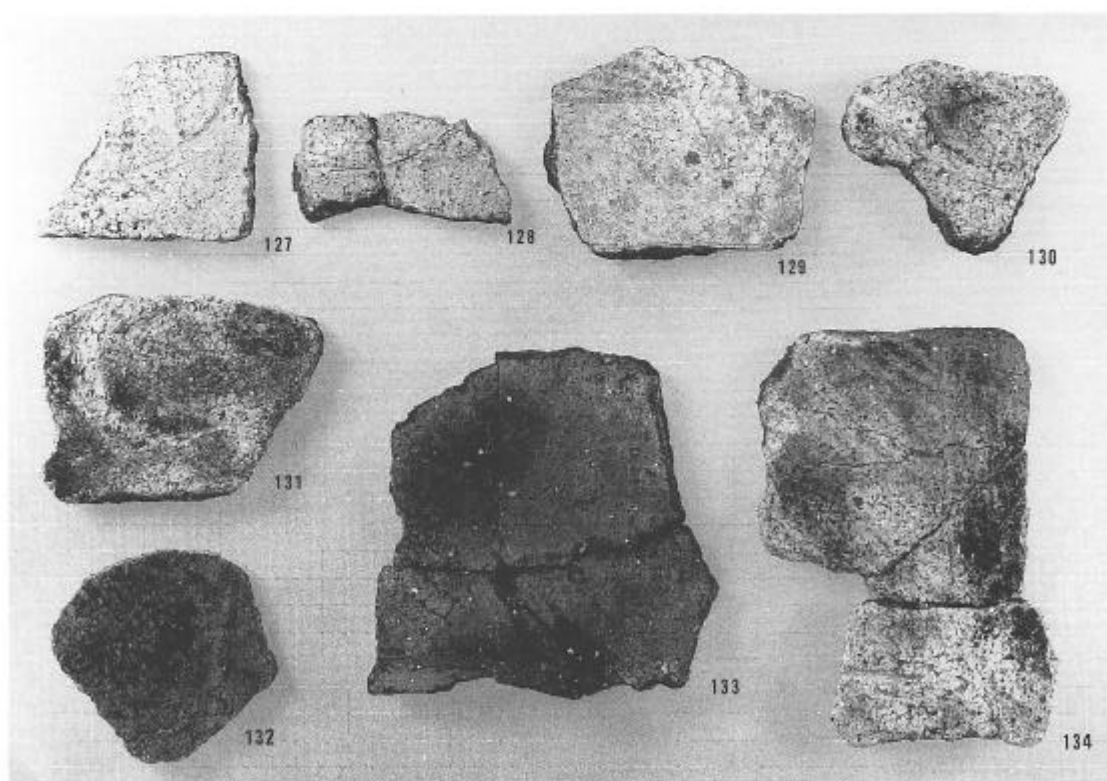
1 遺構外出土遺物(8) 外面



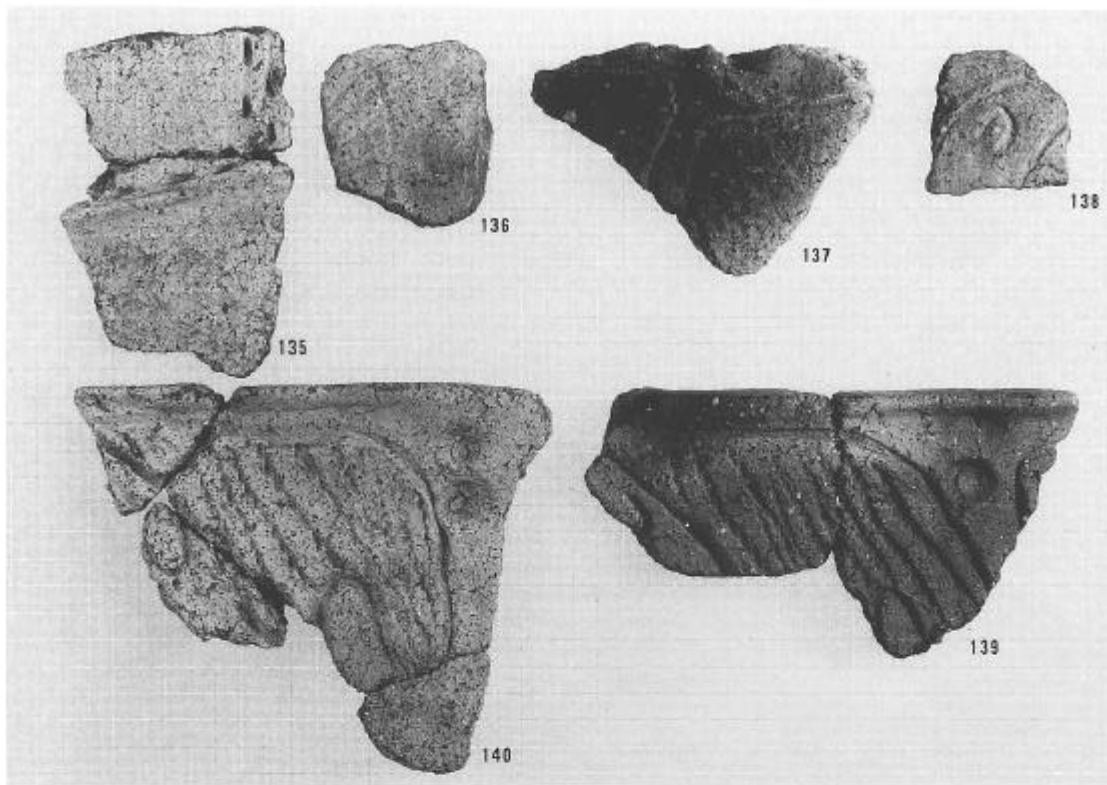
2 同上 内面



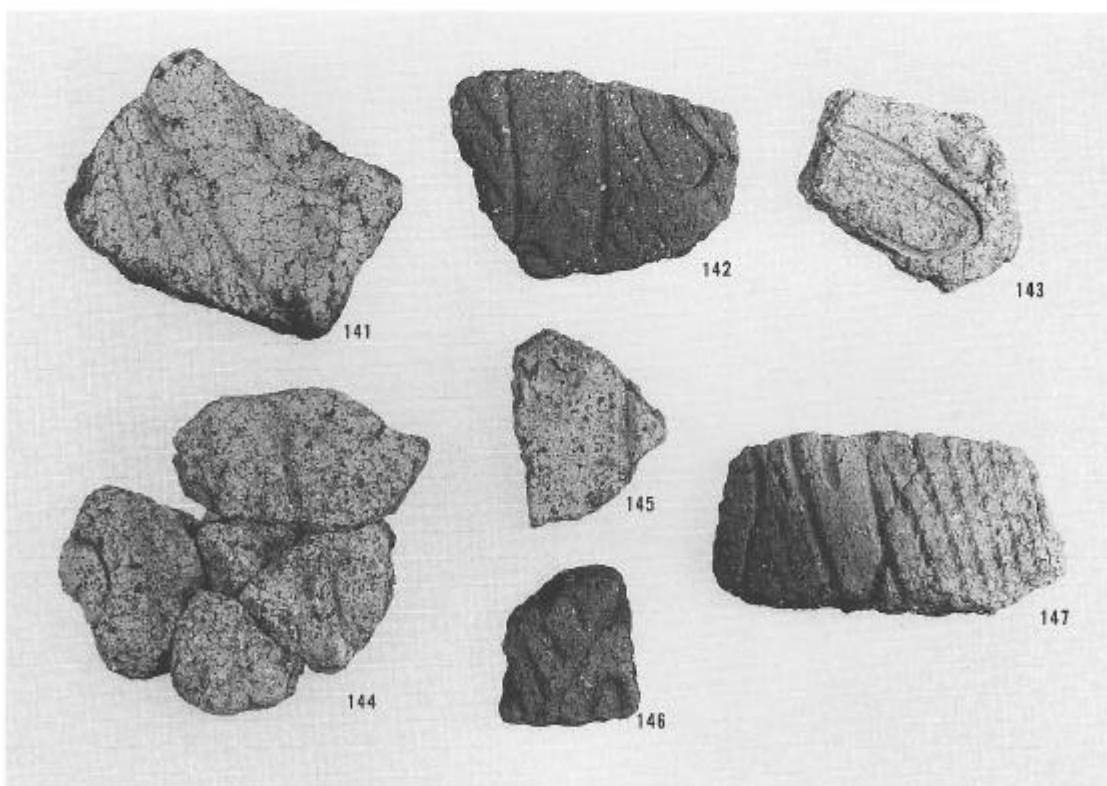
1 遺構外出土遺物(9)



2 遺構外出土遺物(10)



1 遺構外出土遺物(11)



2 遺構外出土遺物(12)